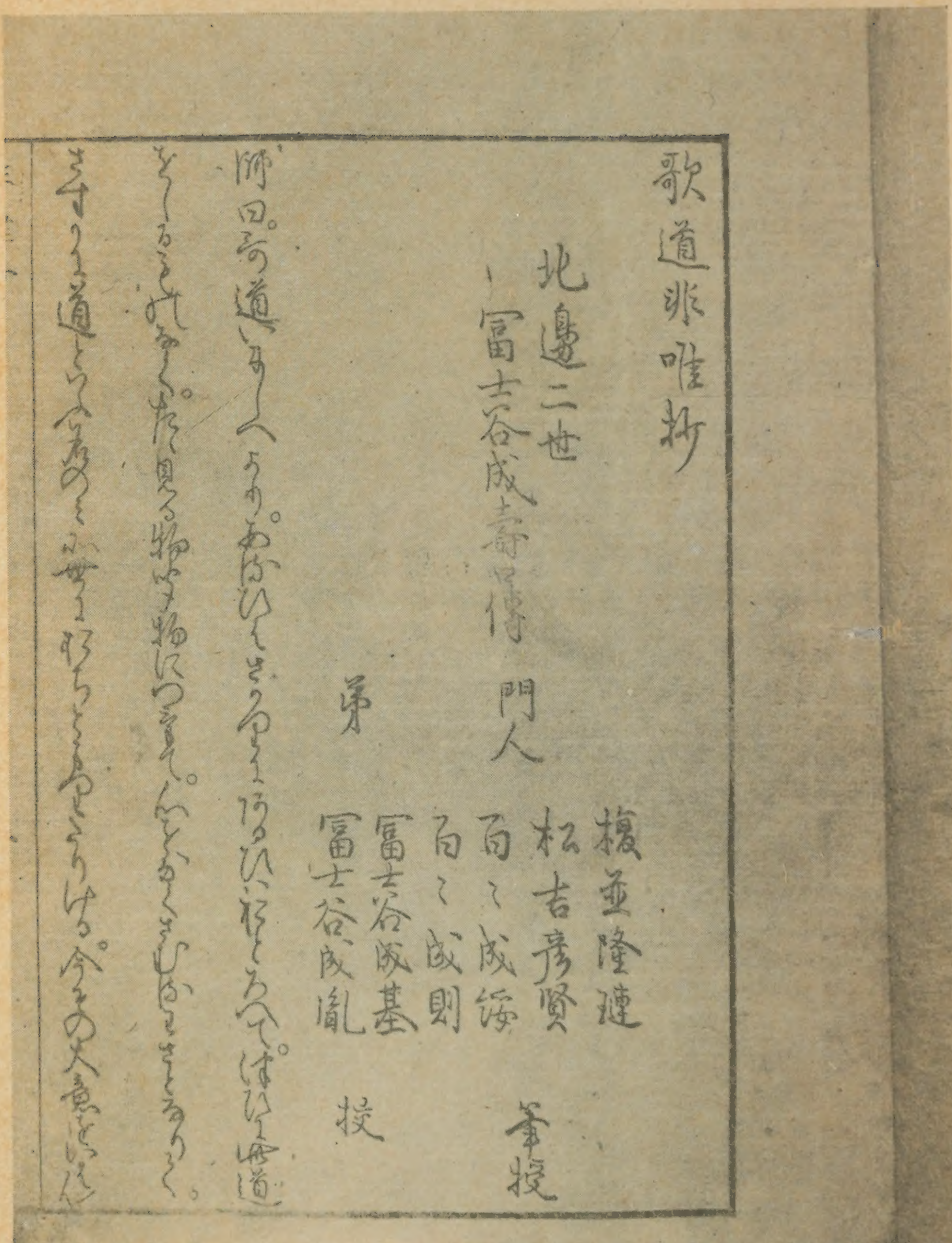
國民精神文化文獻 七

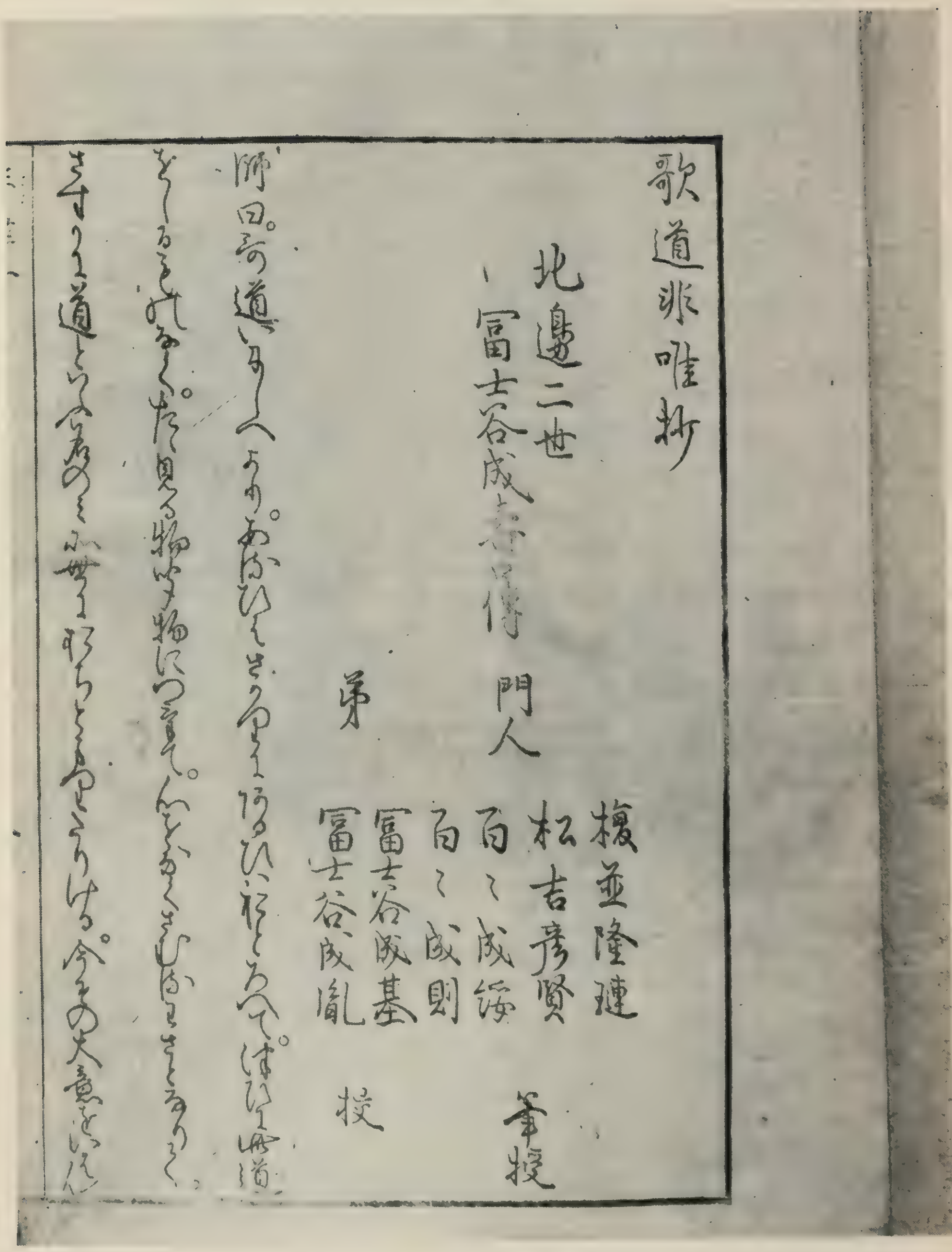
# 富士谷御杖集

第三巻

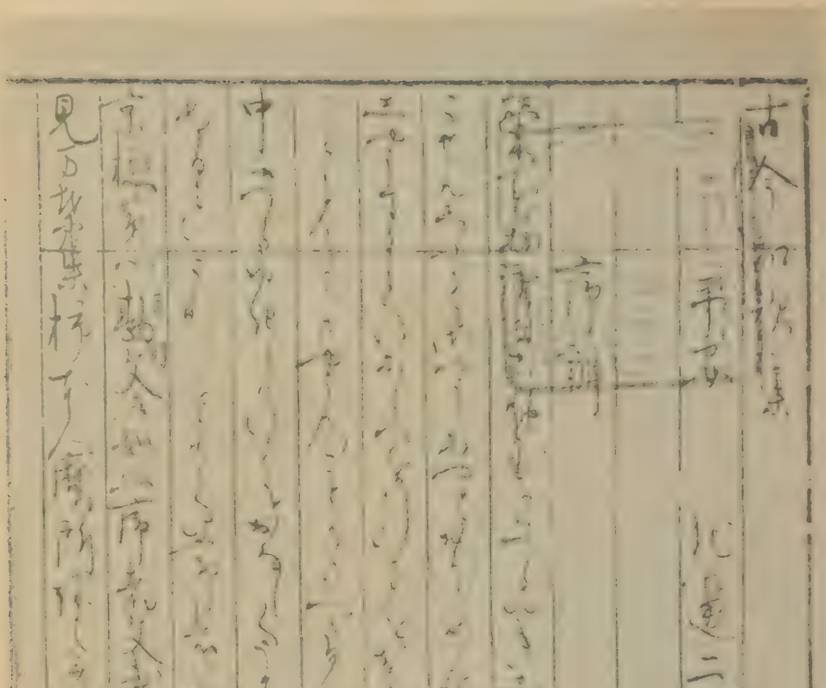
國民精神文化研究所


歌道非唯抄
北邊二世
冨士谷成壽口傳　門人
榎並隆璉
松古彦賢
百々成繇
百々成則　筆授
弟
冨士谷成基
冨士谷成亂　授

歌道非唯抄（刊本）

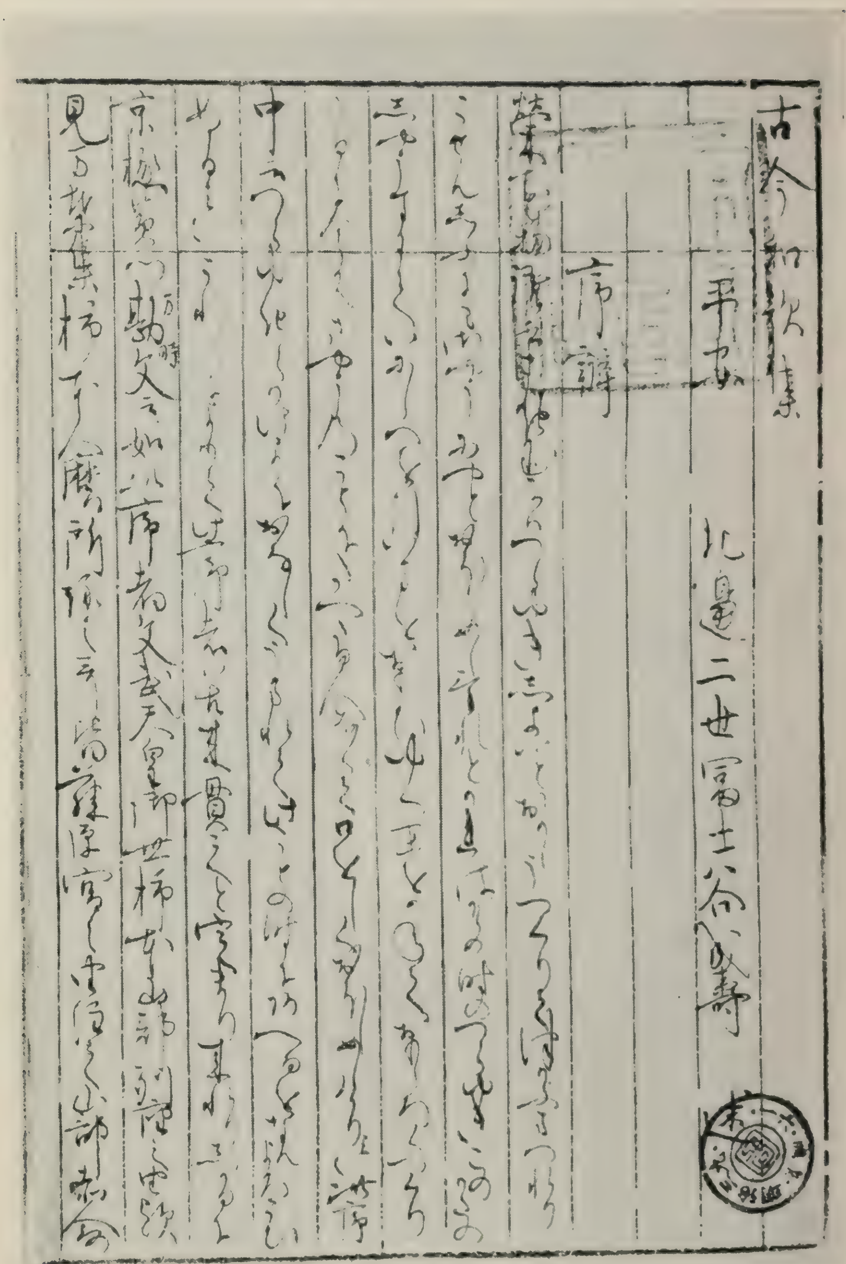



歌道非唯抄（刊本）



古今和歌集假名序（富士谷成壽自筆）

（帝國圖書館藏）

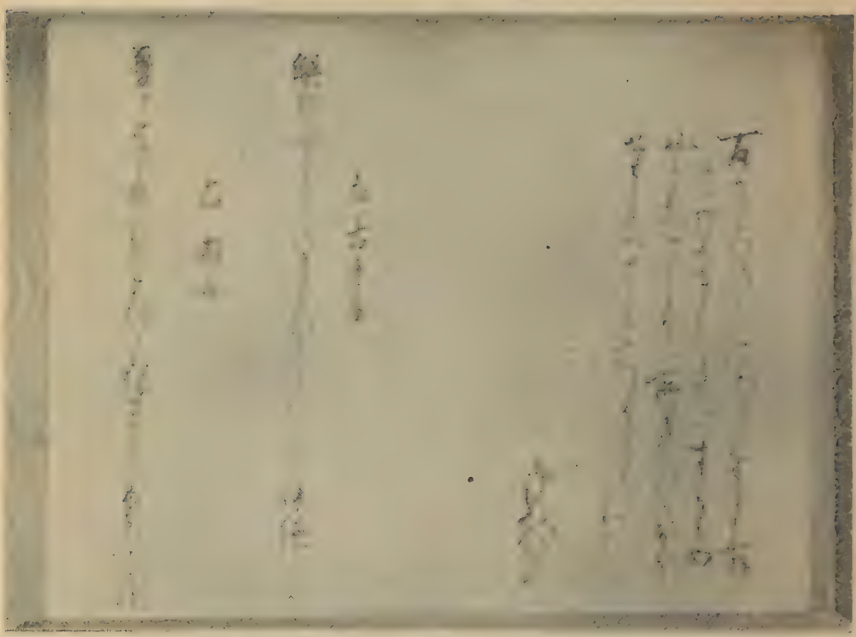



古今和歌集假名序（富士谷成壽自筆）

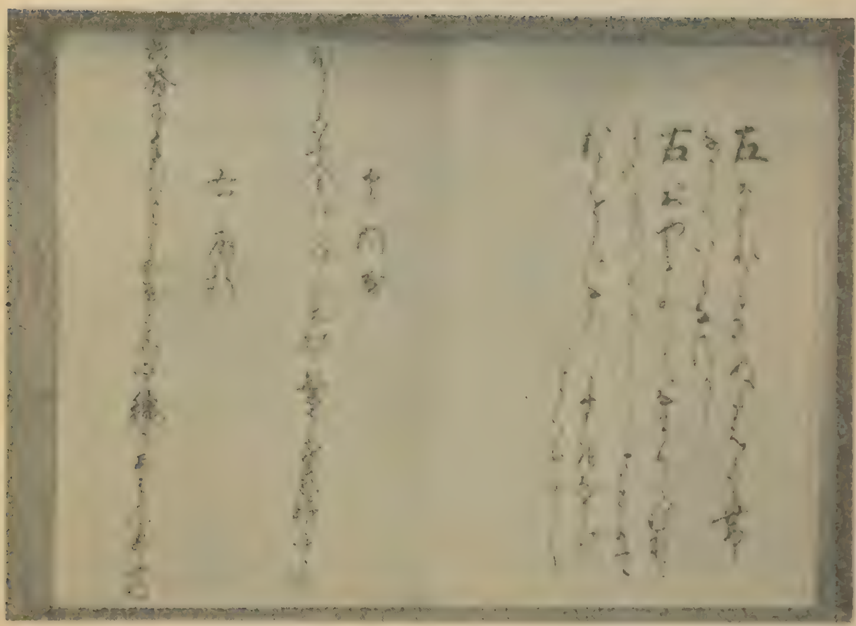
（帝國圖書館藏）

繪歌合四番（福井三郎氏藏）

一番判詞（御杖自筆）二番歌詞



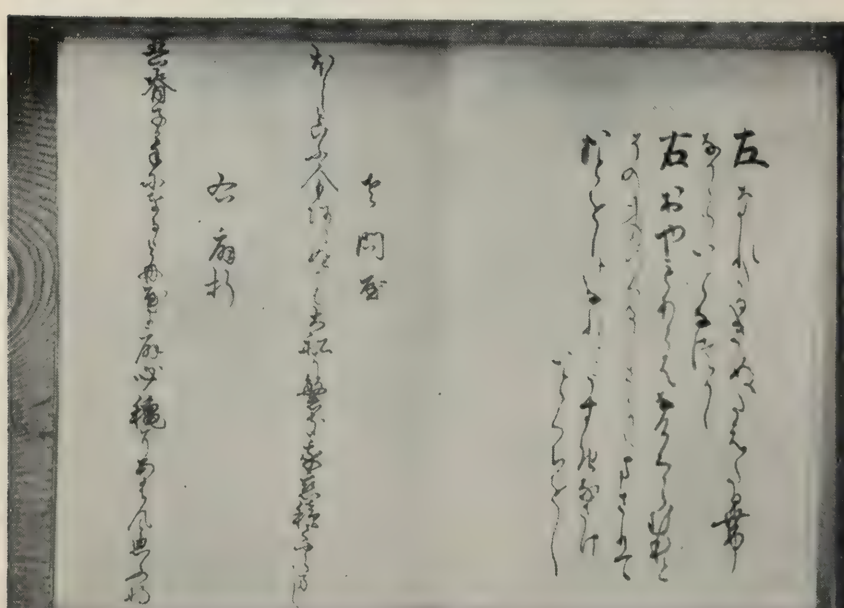
二番判詞（御杖自筆）三番歌詞



戀歌合四番（福井三郎氏藏）



一番判詞（御杖自筆）二番歌詞



二番判詞（御杖自筆）三番歌詞

# 例言

一、本集の編纂は第一卷の初にも述べた如く必ずしも系統的に蒐めると言ふのではないが、此の卷は主に御杖の歌論書を中心にあんだ。

一、能ふ限り原本のおもかげを傳へるやうに努めたが、此の卷所收のものには御杖の自筆本・稿本の類が少い。後世の寫本によるものは編者の調査せる數本の校合本を作つた。

一、本集には「歌道非唯抄」「うたふくろ」「和歌いれひも」などは流布の刊本によつたが、寫本類は、所藏者、文學博士佐佐木信綱氏、室谷鐵腸氏、東儀正氏、福井三郎氏等の好意によるもので、御杖の歌論書の主要な著作を蒐め得た事を幸とする。

一、此の卷は專ら編輯囑託三宅清に輯纂させた。

# 富士谷御杖集 第三巻 目次

# 富士谷御杖集第三卷解題

三宅　清

## 歌道非唯抄　刊本一册

御杖の歌論書の最も初期の著述である。

本書の內容は歌道及び詠法の概論と和歌の表現樣式の分類論を本論とし、奧に「附錄」として「假名遣」「寄詞」「引合」「冠」「挿頭別」「裝別」「脚結別」「脚結畧不畧の別」「休め字の辨」などの主として修辭上の技法に就いて說述せるものである。

本書に於ける御杖の歌論は、古今集序、貫之髓腦、俊賴口傳、袋草子、八雲御抄などの中世以來の歌道の經典に立脚せる傳統的な歌論に成章遺傳の學說を加へて編成せるものと言ふべく、皆川愿の序に「然成章未及著之而先歿其子成壽頃述其父志作此抄」とあり、御杖の跋にも成章の遺說を「かしこきしるへ」として歌道を學び、是に御杖自身の推考を多少加へて此書をものせる事を記し、

さはあまかけりても此みちをおほすことたえすはなにには江のよしあしをはゆめにたにつけしらせたまへとなむ

と成章の靈に對し述べた所にも本書が主としてその家傳の說の集成に成る事を窺はせるのである。本書の表現樣式

の分類論は不必要と思はれるまでに詳細であり、分類せられた各類の間の區別が明瞭でないものも交り、樣式論としては洗練が足りないやうに思はれる。又「附錄」の各項目も北邊學派の特異な術語や立場を示すが、說明が甚だ簡略で十分その意が盡くされてゐない。本書の歌論は未だ家說と傳統的歌論との集成に留り、彼の創始的な言靈倒語說が形成される以前の習作的な意義を持つものであつて、御杖の歌學說の搖籃期を形作る一資料である。

本書の成立は跋に「寬政四年かみな月のはしめたひらにすむなりのふしるす」とあり、其頃の脫稿と考へられる。

本書の刊本は編者の調査し得たものには刊記がないので、その刊行の年時を明らかにしないが、寬政年間の水玉堂の和歌連俳書目の廣告に非唯抄も揭載せられてあるから、脫稿後間もなく上梓せられたものであらう。

本集に底本として依つたものは流布の刊本である。(口繪寫眞)

尙、成元時代の著に「歌道非唯抄」と言ふ同名異書が存す。(本集第一卷所收)

## うたふくろ　刊本六册

御杖の歌學修行の搖籃期とも言ふべき成壽時代の著で、廣く歌學・詠法に亙つた歌學概論の書である。

「うたふくろ」と言ふ書名は序に言へる如く常に座右に備へた歌袋になにかとなく書入れた稿の集積といふ本書の成立に因んだもので、その內容は多岐に亙る。

卷之一は歌學總說で、六則、六運、五体、歌人名檢字から成り、六則は卽ち歌を詠む心構に就き說述せるもの、

六運は歌の歴史的な區分で上代よりの和歌の變遷を六期に分つたもの、五体は古今集序の六義の說に對し北邊學派の歌體論で、歌を「のはへ歌」「よせ歌」「むかへ歌」「まもらへ歌」「かさね歌」の五体に分けた分類說、歌人名檢字は廿一代集の作者の類字で、後拾遺集以來は名高い人々のみですべての作者を盡してはゐないが、勅撰作者部類などと同じく檢索に便せるものである。

本書の歌論の大綱は以上の卷之一に盡き、卷之二以下は詠作に就いての個々の細說であり、卷之二は詠格、選辭、詞、題に亙つてその用法、語釋を說き、卷之三以下は時節（春・夏・秋・冬）の題に就き說明を加へ詠法を說き作例を示せるものである。

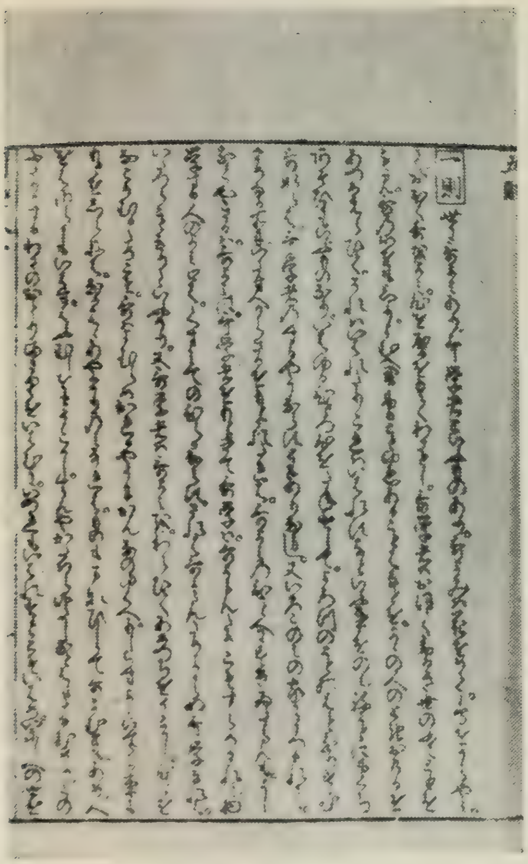
本書は御杖の歌論書の中、初期の著作で、傳統的な中世以來の歌論と北邊歌學の家傳との綜合に成り、未だ御杖の言靈歌學說は樹立されないのであるが、六運の說や、五體弁や、詞の說などには北邊學派の獨特の論說が示され、歌學の概論書、詠法の入門書として纏つた重寶な書と言ふ事ができる。ただ本書に於ける歌論の基調が中世以來の和歌や歌學であり、御杖の萬葉・國史の歌に遡つた言靈倒語の歌學說から言へば決して第一義的な意味を持ち得ないもので、所詮、御杖の歌學の發展の途に於ける一の稚い習作と言ふに留るであらう。

本書には「北邊二世成壽」の序が附き「寛政五年癸丑秋」の刊記を有する六册の刊本がある。同じ版木の刊記を缺く刊本も多く、御杖の著作の中最も流布せるものである。

尙「近代名家著述目錄」などに本書の卷數を八卷と掲げてあるが、現在流布するものは六卷であり、八卷のもの

は無い。八卷説は初期の水玉堂の廣告に「歌袋　八」と掲げたものによつたらしく、八卷と言ふ數は本書の卷之三以下の時節、春夏秋冬の四卷の次に、更に戀・雜などの二卷を加へる豫定數であらうと思はれる。戀・雜の二卷は實際には稿が成らなかつたので、後期の北邊大人著述の廣告には「六册」と掲げ、現在流布の刊本も六册本である。

本集以前に此の「うたふくろ」は「日本歌學全書」「歌學文庫」「校註和歌叢書（和歌作法集）」などに卷之一の大部分が活字に複刻されたが、本書の全體の複刻は本集以前には無かつたのである。



うたふくろ　刊本

本書の複刻に就いては、所によつて活字の大さを變へたが、これは印刷の都合による。又、原本に陰刻の所はゴシツク活字により區別させた。

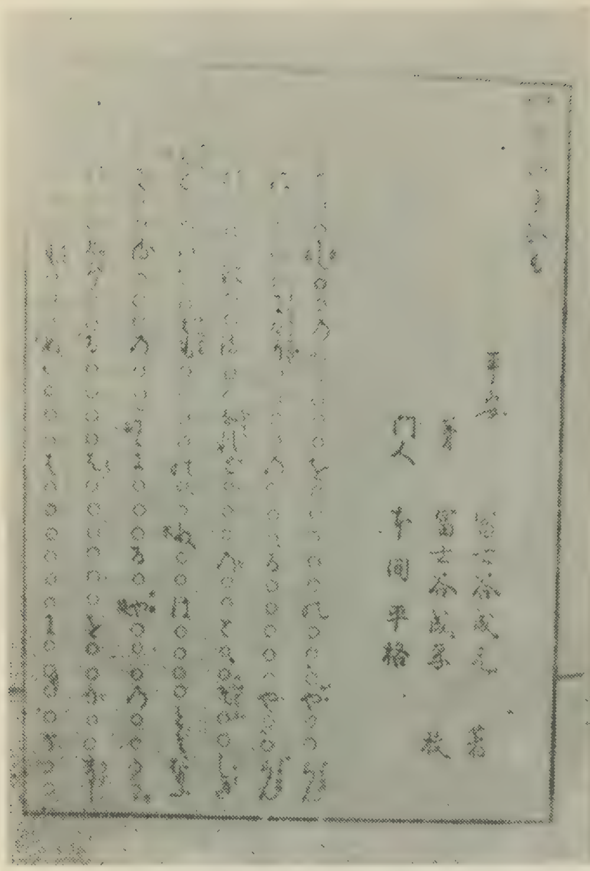
原本の句讀はかなり杜撰であり、又誤字脱字等により讀み難い箇所も妄りに手を加へず誤植に非ることを示す爲甚しく穩かでないものには（マヽ）と注す。振假名や返點の穩かでないものも原本のままである。

本集に底本として依つたものは流本の刊本である。

## 和歌以禮ひ裳　刊本一册

凡そ如何なる建物の棟・梁・柱もその土臺の礎の上に立つのである。礎石が堅固に据ゑてない時又は礎石に相應しない柱を立てる時は立派な建物はできないのである。

歌に於いては「あゆひ」が丁度その礎石とも言ふべきもので、「あゆひ」がととのはないと腰折歌ができるのである。



和歌いれひも　刊本

本書は、かう言ふ考へから、すぐれた古歌六百首を撰んで、主としてその「あゆひ」のみをのこし、名・装・かざしなどの部分は○を以て示し、この○の部分へ然るべき詞を入れる事によつて歌を作ると言ふ趣向に成る一種の稽古臺本である。

成章の「あゆひ」研究はその「あゆひ抄」に要約せられた如く、甚だ精細なもので、北邊學派の歌學の特色は古歌の「あゆひ」に詳しいことであるが、本書はその「あゆ

ひ」研究を實際の歌道稽古に應用し稽古の方法として具體化せる一の試みとして甚だ興味が深い。

「いれひも」といふ書名は古今集の戀の歌に

よそにして戀ふれば苦しいれ紐の同じ心にいざ結びてむ

と言ふのによつたのであつて、いれひもを結ぶやうに「あゆひ」の間を結ひ合すといふ趣向を以て名づけたものである。

本書の成立は序と大旨の識語に「寛政六年十二月」と記され、其頃に成つたものと考へられる。

本集に底本として依つたものは「寛政七年乙卯五月」の刊記を持つ流布の刊本である。

## 歌道解醒　寫本一册

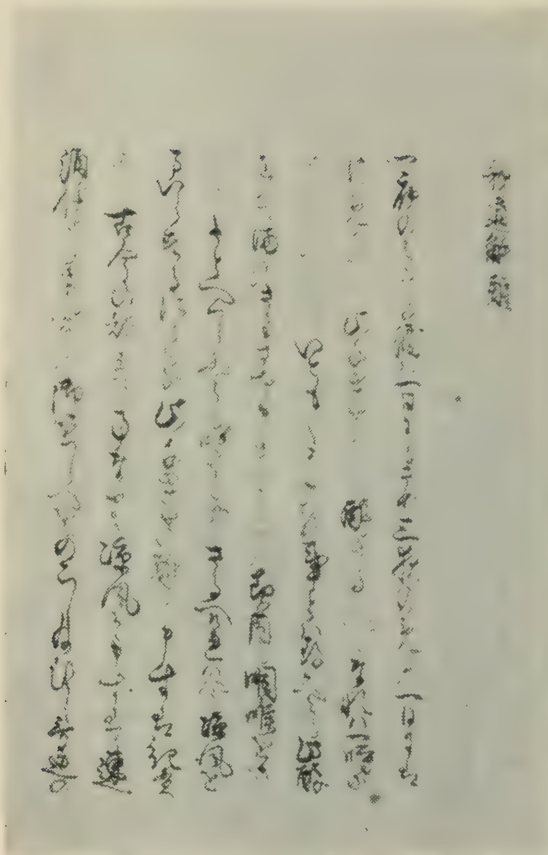
御杖によれば歌は凡そ言行にふるまへば禍になり心中に忍べば病ともなるやうな時、その心を慰め、その禍を除き時宜を全うする道である。然るに紀貫之が古今集に部立を立ててより歌に題と言ふ事が興り、詠風物の歌が生じ、歌合が興り、歌は次第に歌道の本意から離れて行つたのである。御杖は古今集の部立を歌道の衰への源と考へ、古今集以來千歳餘、人々は誤れる歌風に醉つて來たのであると言ふ。その歌道に於ける千歳以來の醉を醒まさせ歌道の本意を說けるものが此の書であり、「解醒」と名づけられた所以である。

本書の內容はまづ御杖の歌道修行の經歷に就き述べ、頓阿慶運の風より爲家、更に西行俊成淸輔等から俊頼基俊

能因長能の歌風に學び躬恒貫之三代集を理想とせる歌詠から、萬葉集を貴ぶやうになつた所以を說き、國史・萬葉の歌に就いて歌道の本意を說明せるものである。

本書の成立は識語によると文化二年七月であつて、御杖の言靈歌學說の成立過程から言へばその成立の初期に屬するもので、歌道の本意を八雲の御歌により素盞嗚尊の御意と考へる所は、未だ言靈を司る神に事代主神を立てる後期の言靈說の爛熟には及んでゐないのである。

本書の事は御杖の門人田島嘉言への書簡（室谷鐵腸氏藏）の內に「わか解醒に申しつる」又「解醒に申し候」などと記されてあり、比較的流布せるものの如くである。



東京帝國大學附屬圖書館藏本

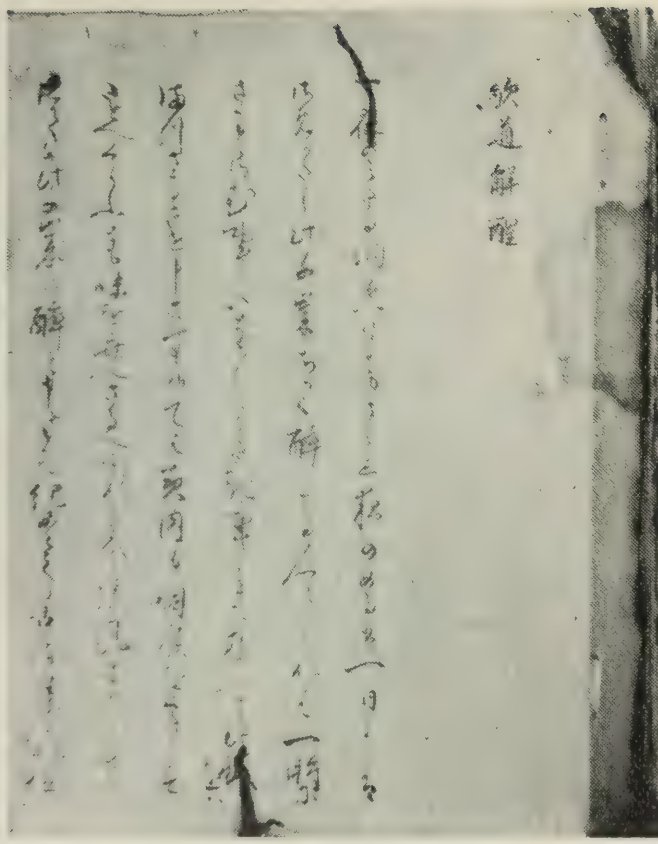
本集には東京帝國大學附屬圖書館藏本を底本とし、竹柏園文庫藏本により校合を加へた。

東大圖書館藏本は墨附三十八枚の寫本で傳寫の系統は明らかでない。

竹柏園文庫藏本は表紙が無く、墨附三十九枚の寫本で蟲蝕の爲によめない所も存す

る。書寫に就いての奥書も識語もないが、竹柏園文庫藏本の方が稍古いものかと思はれる。

本集の本行に立てたのが東大圖書館藏本の本文であり、括弧を施せるものが竹柏園文庫藏本の本文である。




竹柏園文庫藏本

## 詞道學要　寫本一册

歌道の要を簡單に說述せるものである。

まづ、言語と詠歌との區別より說き起し、言語も詠歌も倶に情を人に通する爲のものであるが、言語が直接的で

近きに對し、詠歌は直言でなく遠い表現であるとし、わが國風の言の用ゐざまを諷歌倒語の道と考へる。諷歌倒語には比喩とそらすとの二様があり、外へそらす詠方を倒語の極致とする。上古の詠歌は倒語の道だつたが、古今集の時代からその部立に誤られて詠歌は單なる花鳥風月の弄びとなり、題詠に陷つて歌の巧拙を論ずる事が盛となつた。後世の歌の詠方には歌合の判詞が弊を及す事となり、判詞を典とする結果、詠歌の本意を離れ、倒語のをしへに逸れ、題詠に巧を爭ふ事となつたのである。歌は第一情、第二詞づくり、第三歌といふ序次に成るものであるから、題詠に於いても詞づくりを第一とせずにまづ情を主と立てて詠むべきである。

御杖はかう言ふ立場を總括的に說いて後、「詞づくり」と「歌の姿」と「歌の体」とに就いて說明を加へる。「詞づくり」は言擧せぬ國風をもととし「言ずくなにすこし理たらぬやう」につくるべきであつて、その方法として「よせ」「うちよせ」「冠詞」「挿頭」「裝」「脚結」の用法を說き、「歌の姿」に就いては世に調を主とするが、もと調は詞の條理を盡して自然に生ずるものである事を述べ、次に「歌の体」に於いては成章の六運圖說の如く詞に時代の新古の變遷が考へられるが、体はたゞ外体を以て論ずるのみでなく、詞の道に立脚すべきで、「体は新古を論ずべからず。たゞ詞の條理をつくし。いかにも直に遠ざかりたらむ詞づくり」を目標と立つべきを說くのである。

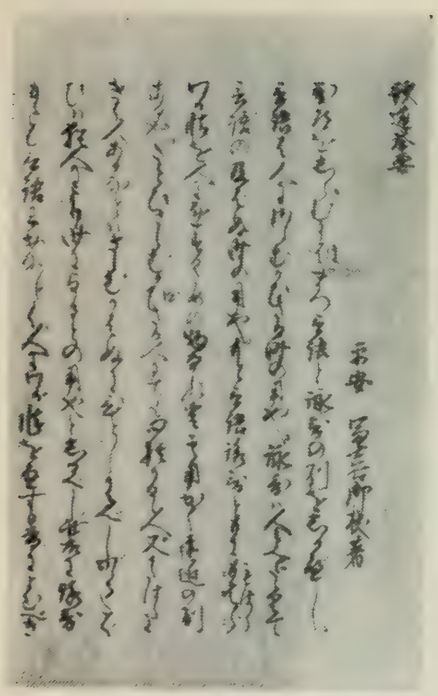
本書の內容は此の如くであるが、御杖の言靈歌論書の中では最も平易簡明實際的なるをその特色とする。しかし簡明なるが故に本書を以て御杖の言靈說の詳細を窺ふ事は難く、「眞言辨」「北邊隨腦」(本集第二卷所收)其他と合せ讀むべきである。

本書の成立は本文の終に

文化十四年丁丑十月下浣

の識語があり、其頃の成立と考へられる。本書の內に古今集の部立が詠歌の本意を離れる原因となつたと說く點は文化二年の識語を有する「歌道解醒」にも說かれてあり、倒語說の內容も、成元時代の「眞言辨」などから著しい發展はないのであつて、御杖の歌學に於いて本書の占むべき地位は必ずしも高くない。その言靈歌學說を平易に要領を說述せる入門書と言ふべきものである。

本書の傳本には編者の調査し得たものに竹柏園文庫藏本がある。此本は本文墨附十四枚の小本で、表紙外題に



謌道學要　竹柏園文庫藏本

富士谷御杖大人著

謌道學要　全

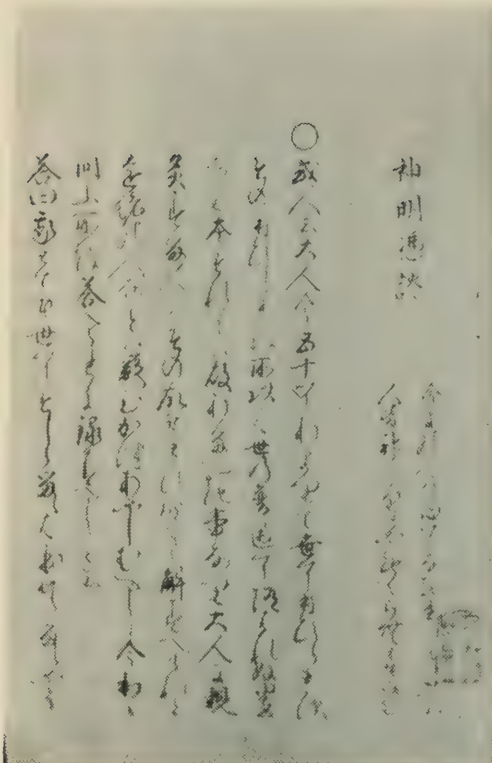
とあり、扉には「歌道學要」と記し「夜馬度乃水」の白文の朱印がある。奥の表紙の內面には「合川文庫」の朱印が押されてあるのは、本集第二卷所收の「哆南辨乃異則」などと同じである。

本集に底本として依つたのは此の竹柏園文庫藏本である。

# 神明憑談　寫本一冊

御杖の御國ぶりの立場に立つ言靈歌學説は傳統的な歌論に對し全く特異な言說だつたので、世の歌よみや歌學者に理解せられる事が少かつた。「御杖歌集」にも彼の歌論を世には「人のくにのことをもきくらんやうに」思ひ「はて〳〵はあたのこともいはれつゝ」猶その持論を曲げなかつたのに對し、その門人釣贋可菴などが、かくては志ある人もよりつき難いからとて、世の常の歌風をも詠むやうに御杖に勸めたと言ふ事が記されてあり、御杖の性格にも因るのであらうが、その歌論・詠草は多少偏奇な傾向と考へられ易かつたのである。

本書は御杖に對する世の歌よみや歌學者の、さういふ評價に對する辯明とも言ふべき意圖のもとに御杖の抱懷する御國ぶりを說き、歌論を論述せるものである。



竹柏園文庫藏本

記述は問答體に成り、歌の五級の事、理想とすべき歌の事、稽古の方法の事、御國ぶりの倒語の事、風調の事、歌の巧拙の事、古体新体の事、などを說き、終りに御杖が倒語の御國ぶりを立てるやうになつた修行の經過を說きその御國ぶりの神道說の要を示してゐる。

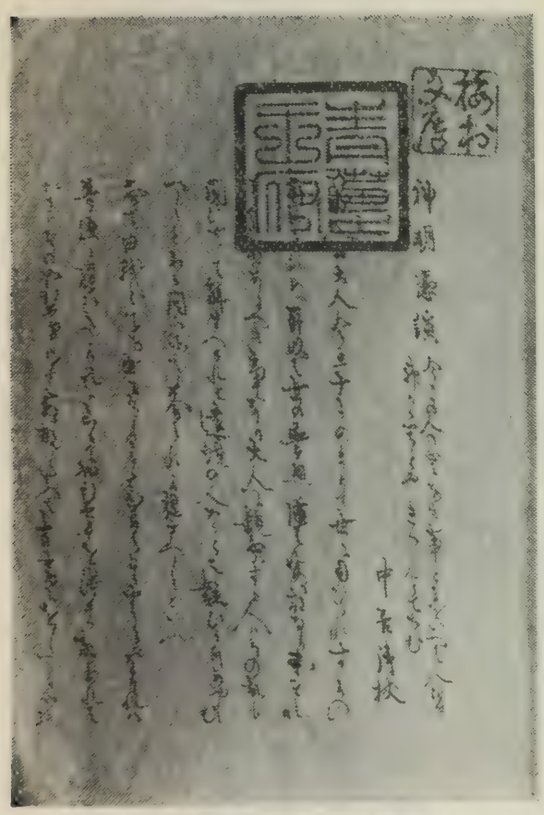
「神明憑談」と言ふ書名は內題の所に「今のよの人

の心になき事ともをいへは人皆神ら（かゝ）イりとやきくらむとてなむ」とある如く、神靈のより憑くものの異狀なる言說と言ふ意であり、御杖の言說が恰もその「神かゝり」の如しと言ふ世の評言且は謙遜の意を以て名づけたものである。

本書の成立は識語に

文政五年壬午冬十一月

とあり、御杖の晩年の著である。晩年の御杖はその特異な神道說に偏り、その著述や言說に所謂「神かゝり」の如き傾向が窺はれるのである。



東儀正氏藏　大八木万左式書寫本

（梅村文庫舊藏本）

本書の御杖自筆の稿本はその存在を聞かない。本集に收めたものは竹柏園文庫藏本を底本とし東儀正氏藏の二寫本により校合せるものである。

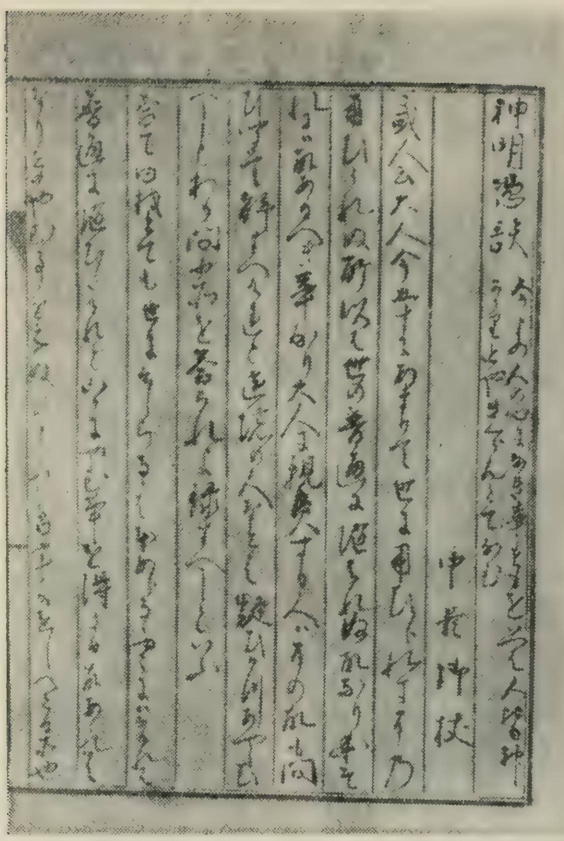
竹柏園文庫藏本は「日紅斎」の朱印を有し、本文墨附三十四枚の寫本で、終に御杖の門人福田美楯の跋文が附いてゐる。

東儀正氏藏の一本は赤松祐以の門人大八木万左式の書寫せるもので「青蓮王府」「梅村文庫」

の朱印が捺され、梅村三内の舊藏本である。本文墨附二十七枚、本文の奥に「大八木万左式寫畢」と記し、跋文も奥書も無い。

東儀氏藏の他の一本は表紙に

明治廿六年一月十九日寫了　護城春章


神明憑談
中務御杖

東儀正氏藏　護城春章書寫本

と記し、「門外之仁者不許一讀也」と記されてある。本文墨附二十六枚。奥の識語によると「文政六癸未年六月寫之」と言ふ奥書を持つた左東丸手澤の本を大久保俊雄より借りて書寫せるもので、比較的粗寫本である。

　本集の本行に立てたのが竹柏園文庫藏本の本文であり、括弧を施せるものが大八木万左式書寫の梅村文庫舊藏本、イと記せるものが護城春章書寫本の本文である。

## 北邊家秘　寫本一冊

本書は北邊學派の歌學の雜纂である。

本書の内容は「催馬樂三歌の事」「影の事」「五体辨」「次第の事」「囬文心法」から成る。

「催馬樂三歌の事」は催馬樂の呂の安名尊、新年、梅枝の三歌に就き注釋を施せるもので、その注釋は「神樂は心のおもふきをさためさいはらは事におるへきやうをいへり」と言ふ立場から此の三歌を教訓の意に說けるもので御杖の「神樂催馬樂燈」（本集第二卷所收）と同じやうな傾向に立つものである。一種の神道說と言ふべきである。

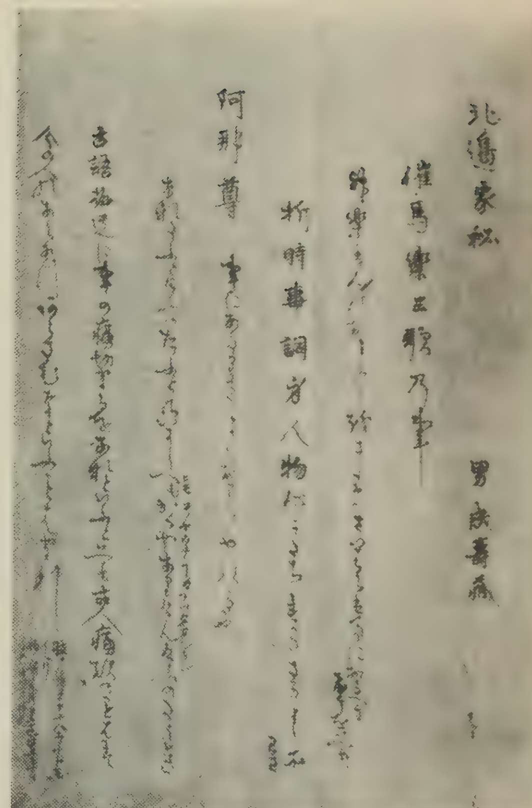
「影の事」は歌に附隨する種々の餘意・餘情などの論で、本集第二卷所收の「五級三差」の中のものと同じものである。

「五体辨」は貫之の古今集序の六義の分類に對し、北邊學派の新なる分類であり、「のはへ哥」「かさね哥」「まもらへ歌」「よせうた」「むかへ歌」の五体を立てて說明を加へたものである。此の五体は「歌袋」卷之一に於ける「五體弁」と略同じものであるが、順序は異り「歌袋」に於けるものが詳細である。

「次第の事」は歌を詠む表現への次第・過程を說明せるもので、その中「境」以下「姿」までは成章の「詠歌法」と言ふ書名でも傳へられ、本集第二卷所收の「五級三差」の中のものと同じものである。

「囬文心法」は回文歌を作る技法を述べたもので遊戲的なものである。

本書は室谷鐵腸氏の藏、本文墨附十四枚の寫本であつて扉に「北邊家秘」と記し、內題に



北邊家秘　室谷鐵膓氏藏本

北邊家秘　　男成壽藏

と記されてある。本文の上欄や傍に朱の書入があり、「世按」など書かれたものは御杖の門人室谷賀世の書入である。

本書は種々のものの雜纂で、その成立年代は明らかでないが、歌論の内容から言へば御杖の歌學の初期に屬するものである。

## 古今和謌集　假名序　　稿本一册

古今集は中世以來歌道の標準的なものとして庶幾せられ、其注釋は教長の注以來數多作られたが、その假名序のみを注せるものも數々傳へられた。假名序は和歌集の序であるが、その所説は又一種の歌論とも考へられるのであり、歌論史の上でも注意すべきものである。

本書は御杖が古今集の假名序の本文を批評し、是に彼の歌學の立場からの注解を施せるもので、その成壽時代の

撰に成るものである。

まづ「序辨」と題を設けて、この古今集序に對する書史的な考察を加へ、此序は貫之の撰と言ふが文中覺束なき事どもが交り、又その文體も貫之時代より新しいものと考へられるのであるが、ただ此序を歌道に於いて尊ぶべき文章と立てるには、これらの覺束なき點を訂し改むべきだと言ふ考に立つて、此序の本文に改訂を加へ六義小注を省き、衍文を削り、章を交へかへた事を述べ、次に假名序の全文を五段三十五章に分ち是に注解を施せるものである。注釋には特に新說はないが、通說に必ずしも拘らず、又文章の承接に留意せる點は北邊學派のあゆひ研究の特色を發揮せるもので注意すべき本書の特質を成すのである。「寄法」「添法」「貫法」「逆法」「承法」「讓法」などの說明語は同じく成壽時代に成る「歌道非唯抄」の歌の表現様式の分類に用ゐられた術語とも通ずる。

本書の所說には中世の定家・顯昭の說や近世の契沖の說なども參照せられてあるが、論述の態度がそれらの集成を事とするのでなく、御杖の自身の說を古今集序の歌論的言說へ演繹する事に努め、御杖の歌論からの說明が加へられてあり、この意味で本書は又御杖の歌論を窺ふべき資料ともなし得るのである。

古今集の序の本文に改削を加へたのは本書が最初ではない。近世に於いても荷田春滿の古今和歌集序釋などはその改訂の甚しいものであり、諸注釋書も多くは本文批評說を說くのであるが、御杖の本文批評說は他の注釋書からの影響によつて成つたものではなく、又後の古今集注釋史に著しい影響を及ぼす事もなかつた。

今本集に底本として依つたものは、帝國圖書館藏の御杖の自筆稿本である。此本は表紙中央に「古今和哥集　假

名序」と記され、本文墨附三十三枚、一面十二行の罫紙に細筆で書かれてある。成立の年時は識語がないが、內題の所に「北邊二世富士谷成壽述」と記されてあるから、成壽時代、寛政初年に成つたものであらう。(口繪寫眞)

## 戀歌合四番　寫本一册

「職人盡歌合」に擬し、藤原滿が詠んだ八首の歌を番へた自歌合であつて、これに御杖が自筆の序と判詞とを加へたものである。

原本は故福井正滿氏の由須園文庫の藏であり、表紙外題に

戀歌合　全

と記し、扉には

擬職人盡歌合

戀歌合四番

葦の舍の

あろし

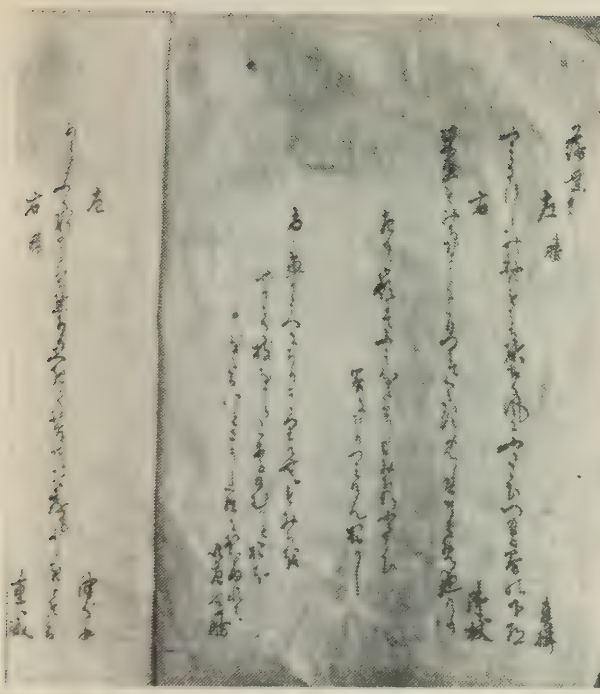
と書かれてある。本文墨附五枚の寫本であり、序及び奥の識語によると文化十一年四月に成つたものである。

職人盡歌合はまじめな歌合に對し滑稽をその特色とする如く、此歌合も戀を主題とするが、題及び着想に滑稽を

求めたものであり、よつて判詞も亦輕いをかしみを主とする遊戯的傾向に立つものである。（口繪寫眞）

## 北邊三十番歌合　寫本一册

歌合の判詞は番へられた作品に就いての批評であるが、批評は判者の文學論を根柢に持つ點で判者の歌論の一形式と言ふ事ができる。御杖によれば、歌合は歌道の爲には害を及ぼせるもので、中世以來歌合の盛となるに及んで判者に難ぜられない歌を作らうと言ふ所から歌道の主意を離れ「獨鈷鎌首」の歌が多くなつた。御杖は此の如く歌合を第一義的のものとしないのであり、歌合は御杖に於いては輕いものとせられるのであるが、組織的な歌論に對しこの北邊三十番歌合は個々の作品に對する御杖の批評を窺ふべき興味深い資料である。



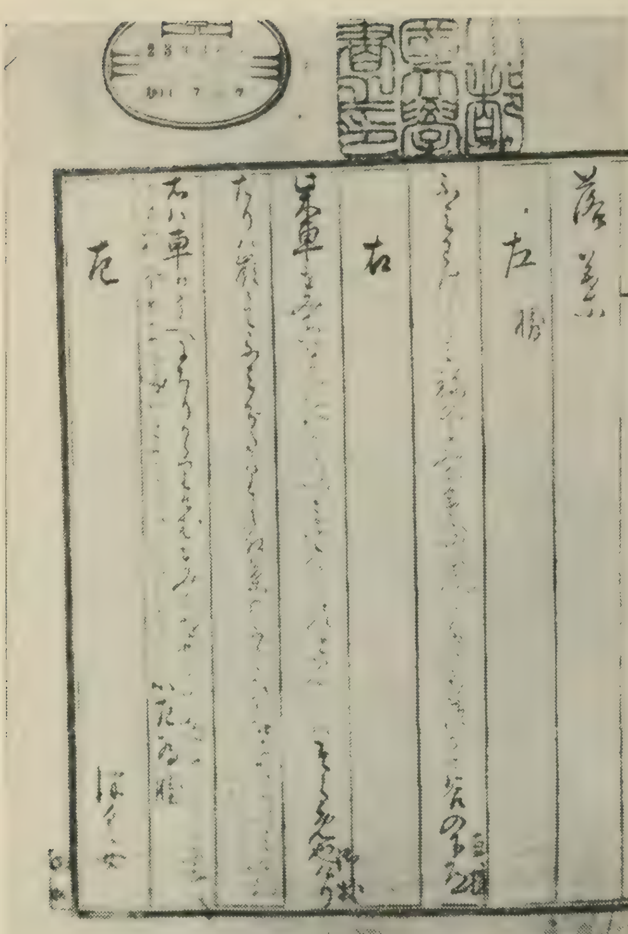
北邊三十番歌合　東儀正氏藏本

此歌合は文化十四年丁丑仲冬に成つたもので、「落葉」「冬月」「述懐」の各十番づつに御杖が判詞を加へたものである。作者は眞柑、御杖、つぐ女、重威、菊輔、ふる女、人古、美弦、友助、眞坂、淨昌、幸丸、幹貞、蛙子、

せい女、伴高、宜也、弘化、秀邦で、菊輔のみ六首他は三首づつである。

此歌合に於ける御杖の判詞は主に趣向や詞づくりに對する批評であり、述懷の六番の日吉（ヒエ）すみのえの論の如きは中世以來の傳統的な型に屬するものであるが、判詞の調子が御杖の人生主義的な色彩を有する事が一の特色と言ふべきであらう。

本書の傳本は流布が少い。本集に收めたものは東儀正氏藏本を底本とし、京都帝國大學藏の寫本により校合せるものである。



京都帝國大學藏本

東儀氏藏本は歌合の本文畢附十六枚。歌合の次に「先師七回忌門人追悼之哥」（御杖の歿後その七回忌に門人等が集つて詠んだ追悼歌及當座の探題の歌）「基廣獨唫」（御杖の門人並河基廣の詠草）「富士谷門人点取味哥抜萃」「菊輔自詠百首幷ニ長歌」を合綴せるもので

嘉永六年
　癸丑中夏寫　　大掘藏

と言ふ奥書を有する本を明治三十一年戊戌六月に大八木万左式(赤松祐以の門人)が書寫せるものである。

京都帝國大學藏本は一面八行の罫紙を用ゐ、歌合の本文罫附十三枚。歌合の次に東儀氏藏本と同様のものが合綴せられてあるが、此本には「基廣獨唫」は無く、菊輔自詠もその一部分の抄錄で全備しないものである。書寫の年代は明らかでない。

本集の本行に立てたのが東儀氏藏本の本文であり、括弧を施せるものが京都帝國大學藏本の本文である。

# 富士谷御杖著述一覧增補（本集第二卷所載「富士谷御杖著述一覽」の增補で＊印は本集所收のものである。）

**成壽時代**

＊古今和謌集　假名序　稿一　北邊二世富士谷成壽述。帝國圖書館藏本

甲寅成壽和歌集　寫　帝國圖書館藏本「五級三差辨」附載

**成元時代**

乙夘成元和歌集　寫　帝國圖書館藏本「五級三差辨」附載

丙辰成元和歌集　寫　同前

丁巳成元和歌集　寫　同前

戊午成元和歌集　寫　同前

五級三差辨　寫　帝國圖書館藏本

五級三差辨　寫一　東儀正氏藏本

八代和歌集類題（戀雜之部）　刊八　寛政八年丙辰霜月原刻　元治元年甲子三月重鐫（刊記）

百人一首燈　稿一　久松潛一氏藏本

＊歌道解醒　寫一　文化二年七月（識語）。東京帝國大學附屬圖書館藏本

*歌道解醒　寫一　同前。竹柏園文庫藏本

古事記燈　於保牟泥　寫一　文化四年丁卯五月(識語)。本所藏本

古事記燈　於褒牟禰　寫一　文化四年丁卯五月(識語)。室谷鐵腸氏藏本

加牟夫微大旨(古事記燈)　寫一　文化四年丁卯仲冬(識語)。室谷鐵腸氏藏本

淤能碁呂島(古事記燈)　寫一　室谷鐵腸氏藏本

神典言靈　寫一　文化五年戊辰三月(識語)。室谷鐵腸氏藏本

神典蹟(神典奧呂)　寫一　東儀正氏藏本

## 御杖時代

古事記燈　寫一　東儀正氏藏本

神樂燈　寫一　弘化五戊申年如月寫之(奧書)。廣島文理科大學藏本

土佐日記燈　稿一　文化十三年丙子三月十九日稿成(識語)。大島雅太郎氏藏本

土佐日記燈　寫八　吉田仁平氏藏本

土佐日記ともし火　寫八　東儀正氏藏本

土佐日記燈　寫廿一　帝國圖書館藏本

土佐日記燈　寫一　首卷　零本。東京文理科大學藏本

土佐日記燈　寫三　摘要抄本　門人編。東京文理科大學藏本
土佐日記燈　寫三　同前。九州帝國大學藏本
＊北邊三十番歌合　寫一　東儀正氏藏本
神道大意　寫一　東儀正氏藏本
萬葉集燈　稿一　南大曹氏藏本
伊勢兩大神宮辨　寫一　無窮會神習文庫藏本
脚結玄義　寫一　吉田仁平氏藏本
天地初發之圖　寫　市立富山圖書館藏本
歌之五級　寫　市立富山圖書館藏「天地初發之圖」附載
經緯略辨　寫　同前
＊神明憑談　寫一　東儀正氏藏本
＊可牟我加里　寫一　東儀正氏藏本
＊北邊家秘　寫一　室谷鐵腸氏藏本
撫箏指南　寫一　河原崎檢校遺傳　富士谷御杖識。本所藏本

| | | |
|---|---|---|
| 富士谷御杖家集 | 寫三 | 東京文理科大學藏本 |
| 北邊御杖詠草集 | 寫一 | 東儀正氏藏本 |
| 富士谷御杖大人歌文集 | 寫四 | 吉田仁平氏藏本 |
| 富士谷御杖大人歌文　上 | 寫一 | 長崎久邇男氏藏本 |
| 富士谷御杖大人詠藻 | 寫一 | 長崎久邇男氏藏本 |
| 養老和歌集 | 寫三 | 嘉永四年五月　五十嵐篤好編。帝國圖書館藏本 |

**書入本・筆寫本**

| | | |
|---|---|---|
| あゆひ抄かさし抄書入本 | 刊本 | 東京文理科大學藏本 |
| あゆひ抄書入本 | 刊本 | 東儀正氏藏本 |
| 蜻蛉日記書入本 | 刊本 | 杖案。帝國圖書館藏本 |
| 扶桑拾葉集書入本 | 寫本 | 御杖自筆書入。東京帝國大學附屬圖書館藏本 |
| 三家和歌式 | 寫本 | 帝國圖書館藏本「やまと哥の式」所載<br>武者小路前大納言實隆卿<br>正親町前大納言公積卿<br>芝山前参議持豐卿　傳授　御杖編の寫 |

## 口授本

| | | |
|---|---|---|
| 大祓燈 | 刊 | 「大祓詞註釈大成」所收 |
| 大祓燈 | 寫一 | 東儀正氏藏本 |
| 大祓祝詞 | 寫一 | 北邊家口授。東儀正氏藏本 |
| 大祓祝詞譯 | 寫一 | 北邊家口授。東儀正氏藏本 |
| 脚結抄裝圖解 | 寫一 | 富士谷御杖大人口授　門人福田美楯筆受。福井三郎氏藏本 |
| 古事記神典與呂 | 寫一 | 富士谷御杖先師口授　福田美楯大人聞書。東儀正氏藏本 |
| 北邊神書記聞 | 寫一 | 福田美楯筆。無窮會神習文庫藏本 |

## 編書

| | | |
|---|---|---|
| 北邊家集 | 寫二 | 戀雜・文章。本所藏本 |
| 北邊家集補遺 | 寫一 | 歌文珍書保存會本「北邊成章家集」上卷と同じ。本所藏本 |
| 北邊成章家集 | 寫四 | 福井三郎氏藏本 |
| 北邊家集 }北邊成章家集 | 寫三 | 四季之部・戀部・雜之部。東儀正氏藏本 |
| 北邊文集 } | 寫一 | 東儀正氏藏本 |

七躰七百首　寫一　東儀正氏藏本

## 書簡・幅物

室谷賀世其他宛書簡　二巻　室谷鐵膓氏藏

御杖書簡　一通　國澤彌吉氏藏

同　一通　山口林造氏藏（「農政全集」による）

同　一通　早苗西藏氏藏

御杖和歌懸幅（富士谷翁詠草）双幅　「先師御杖翁所賜也、今又轉して一鞋亭主人へまゐらす、七十四翁佩齋」（箱書）。高野義太郎氏藏

御杖和歌懸幅　双幅　稲原稔氏藏（「農政全集」による）

御杖和歌懸幅　一幅　國澤彌吉氏藏

御杖屏風和歌　一双　東儀正氏藏

御杖屏風四季和歌　一双　關一郎氏藏

御杖和歌懐紙　一　關一郎氏藏

未詳

和歌梯（戀部）　　刊一　嘉永五年壬子正月（刊記）

芭蕉句集の注　　「俳諧天爾波抄」卷之一

点化秘術　　「歌袋」卷之一

尙、弘文莊の古書目によれば、「後撰和歌集」（卷第十四の註）「非唯漫錄」「冠辭考略」「神書漫錄」などの御杖の自筆稿本、及び「北邊一日千首草」（福田美楠自筆）などが存す。

（註）

右の内

五級三差辨　東儀正氏藏本、帝國圖書館藏本

は本集第二卷所收の「五級三差辨」と同じものであるが、「五級三差」、「略式五級」、「九品和歌」、「十躰和歌」などの附錄がなく、跋文もない。內題の所に東儀氏藏本には「成元著」、帝國圖書館本には「成元記」と記す。本集第二卷所收のものと、文字遣ひは異る所が多いが、文章にはさほどの相異はない。

古事記燈於保牟泥　本所藏本

古事記燈於褒乎禰　室谷鐵膓氏藏本

は、文化四年丁卯五月の識語を持ち、「古事記燈大旨」の初稿本の寫である。本集第一卷の解題に記せる京都帝國大學國文學研究室藏の御杖の自筆改稿本以前の形を示すものである。「古事記燈大旨」の成立過程を知るに必要な資料である。室谷氏藏本は御杖の門人室谷賀世の藏書で一部に賀世自筆の改訂が存する。本所藏本は比較的粗寫本であつて「安布日能屋」の舊藏書である。本文は殆ど異る所はないが、本所藏本の方が室谷氏藏本よりも以前の稿本の形を示すもののやうである。

加牟夫徵大旨　室谷鐵膓氏藏本

は、「古事記燈大旨」の脫稿本と名づけた帝國圖書館藏の御杖自筆の稿本の寫で、刊本以前の稿本の最も後期の形を示すものである。

神典言靈　室谷鐵膓氏藏本

は、室谷賀世自筆の寫本で、古事記の七神三段神世七代を說けるものである。識語によれば文化九年三月に成つたもので、本集第二卷所收の「神典言靈」(澤瀉久孝氏藏)とは文章も異り、別種の稿本の寫である。本集第二卷所收のものは御杖の自筆の稿本で七神三段の上段中段のみの注說であるが、此の室谷氏藏本は七神三段神世七代を全く具備せるものである。

神典蹟　東儀正氏藏本

の內には、本集第二卷所收の「神典七神三段奧旨」と同じものが存し、此本には本集第二卷所收本の大掴氏の奧書

はない。文章も殆ど異る所はないが、初に標記せる古事記の七神三段の本文に「あめつちのはしめの時（ひらくる）」と異訓が施されてある。

古事記燈　東儀正氏藏本

は、本集第一卷所收の「古事記神典燈」(五)の一寫本で、此本には內題の所に「平安　富士谷御杖著」と記され、御杖時代の著と知られる。本集第一卷所收のものに虫蝕で讀めない所や誤字を訂すことができるが、文章にはさほどの相異はない。比較的善本である。此本には但し、本文の終りに「御はまへに御中主の神の所にいへり」の「いへり」三字がないのは書本の稿本の不備によるものであらうか。

神樂燈　廣島文理科大學藏本

は本集第二卷所收の「神樂催馬樂燈」と同じもので、弘化五年の寫である。本集第二卷所收のものに比較し內容に補ふ所はない。文章も同じ系統のものである。本集所收の底本も書寫年代新しく誤寫が多いが、此本には脫文も存し善本ではない。

大祓燈　東儀正氏藏本

は本集第二卷所收の刊本「大祓燈」の上梓の草稿である。

古事記神典與呂　東儀正氏藏本

は御杖の講義の聞書を整理せる如きもので古事記神典の第四十六鵜葺草葺不合命御子生之作まで具備せる略注であ

る。本集第二卷所收の「神典七神三段奧呂」と同じものではない。

# 歌道非唯抄

# 非唯抄序

古稱倭歌之道、動天地、感鬼神者久矣、而後世倭歌者流、能推本其義以言之者、鮮矣、亡弟成章蓋嘗論之曰、人之心、能自執其中、則天地存焉、而其情有自感乎其中正、而用以發之其辭氣、則天地必動焉、鬼神必感焉、蓋天下之民生、同此天地之中、獨異其形軀耳、是故既動於我而感於我者、彼曷得不動感焉、若夫行路之人、其心素不相與者、亦安知於我動与感、苟使在乎必聽之地位者、則於其辭之事物、抑末矣、開我哀然之發、則彼其涕已零之矣、然成章未及著之、而先歿、其子成壽、頃述其父志、作此抄、其所命以非唯者、本紀氏髓腦書序中所言之文云、余竊謂此抄所言之道、卽亦我聖人之道也已、易繫辭傳云、修辭立其誠、辭者、與孟子詖淫邪遯之辭同、而孟子稱邪者、易稱正者、要皆謂其動乎心而未發於外者曰辭也、而此辭者、亦中庸所稱庸言是也、是故發之其辭氣、則爲倭歌之道矣、內自執其中正、而用以正其辭於心、則爲君子自居其業之術矣、而雖聖人之所用禮樂、以動天下、改風易俗之道、其或亦不外於此焉矣、及刻成、成壽遂請以書之其端

寛政壬子春三月平安皆川愿書

（白文）皆川愿印　（白文）伯恭氏

# 歌道非唯抄

北邊二世

富士谷成壽口傳

門人

榎並隆璉
松吉彦賢
百々成綏
百々成則

筆授

弟

富士谷成基
富士谷成胤

校

師曰。哥道いにしへより。あるひはさかりにあるひはおとろへて。つひに此道をしるものなく。たゝ見る物聞物につけて。心をなくさむるわさとなりて。さすかに道といふ名のみそ世におちとまりたりける。今その大意をいはんに。古今集序云。遠き所も。出たつあしもとよりはしまりて年月をわたり。たかき山も。ふもとの塵ひちよりなりて。あま雲たなひくまておひのほれるかことく。此

道もかくのことくなるへしといへるを思ふに。同序云。ちからをもいれすしてあちつちをうこかし。めにみえぬ鬼かみをもあはれと思はせ。をとこ女の中をもやはらけ。たけきものゝふの心をもなくさむるは歌也といへる詞。かの遠き所高き山にして。はかなからぬよし也。又同序云。かくてそ。花をめて鳥をうらやみ。霞をあはれひ露をかなしふ心詞。多くさま〳〵になりにけるとあるは。かのふもと足もとにして題詠をいへる也さるは道にいたらむの便なること。わかはかり定むるにもあらす。貫之髓腦ノ自序ニ云。非下唯春霞秋月ノ潤ニシ艶流ヲ於言泉ニ花色鳥聲ノ鮮ニスルノミニ中浮藻ヲ於詞露ニ上皆是以動ニ天地一感セシメニ神祇一厚ニ人倫ヲ一成ニ孝敬ヲ一上以風ニ化シ下ヲ一下以風ニ刺スヲ上一とみゆるも此義なり。やう〳〵道うしなはれて詠へき境をしらす。あまりめつらしからむとて。くたくたしき旨をもとめ。詞をやさはまむとするまゝに。私心にのみおもむきて。おのれ道をとほさくることをわさとせり。おほよそ。哥の道は次第をしるへしと父成章つねに申き。次第をしらては誠たちかたし。たゝ天地鬼神人に身をあはせてなこまむをほいとはする也。その源をたつねんには心を明らめんにしくはなし。心をあきらめむは次第にしくはなし。次第とは。わか新髓腦にいへる所これ也。これをしりぬとて道をえむことやすしとにはあらす。しらてあらんはいつかはえまし。しらはえすとも遠からし。此故に。しらさらんはしらんとつとめ。しりえては。おのつからならむいきほひをえむとつとむへし。人の道をしる

は天の道をしる也。あめの道をしらは感動の理をうへし。されは我神ひしり此道をたてたまひて。わか心中におのつからよるところを試みそのおのつからうこく所はかり。いかにもして私の心をのかれて。ひたふるに至誠をおほはしとせむと。つとむるにつけて。わか邪正をしり。人情のつねを廣く定めて。こと事こと物ならさるよしをさとらしめ給也。此故に。平生の情態言語につけても深く心を用ゐて次第を明らめは。やかて人を和め。廣くは天地鬼神の心をあはせ。近くは身ををさめ。遠くはあめかしたに及ふへし。袋草子云。兼盛か哥ことに沈思するを。元輔これを難して。さやうに案せは堪へからす。予は口にまかせてよみ。又よまむと思ふ時の歌は。ふかく沈思すとみゆ。これらの詞をもても。兼盛元輔か志はしるへし。とにかくに此道。まことをたてゝ人をなこめむより外なけれは。口とによむも。道にたにかなはゝいとねかふへき事なから。道を忘れて。それにふけらむことあるましきわさ也俊頼口傳にいまた昔よりとくよめるよきことなしとも。もとの心にしたかひてよむへき也ともみゆ。たゝ心中の筋みつからさたかならさるほとは。ひとへに兼もり君をならふへし。經信卿の。松のしつえをあらふしら波。清輔朝臣の。いくよに成ぬ水のみなかみ。頓阿法師の。よのまの霜のまゝの繼はしなとこそ。當座にて名たかく聞ゆる歌なれと。猶ふかくおもひてこそおのつからなる境もうへけれ。たゝとくまれをそくまれ誠たてえたらむをこそ聖とはいはめ。

紀貫之君は。一首を數日に案し。兼盛君。また每度に沈思し。能因法師の。伊勢の御の家の前をわたるには。必車をおり。頼実君の。五年の命を住吉に奉りて秀歌をいのり。宮内卿の。歌思に身まかりしなと。皆此道をふかくたうとひおもふ志にたへさる也。又能因法師か。白河の關の哥をよみて籠居したるは。道にふかく執するよりのわさにして。まことに此道の本いをしれりといふへし。後世の人は。こと〳〵く我名のために志をたつるか故に。誠なくして。事にあたりては其志をうしなふ事多し。やむるに堪す。すつるにしのひさるはかりの志ならすは。いかてか感通の妙をえむや。道は志によりておこるなれは。志を輕しとするは卽道を遠さくる也。たゝかの。能因かことき志朝夕にたにあらは。いかて道にいたらさらむ。むかしは歌仙多く。後世は名たかく聞ゆるも。猶古の人〻にはくらふへくもあらす。哥よむ人こそ多けれ。哥をしれる人なし。これまたく名をむさほらむの志なるか故也。たゝ人と一致し。あめつちと絕さる志たつ時は。ならさる事なく。及はさる所なしおとゝ。相模をいたきて秀歌案するの間。公事闕たりとの給へること心得かたし。此道をえむとするには。まことに身につとむへきことをも忘るゝはかりならすは。いかてかこれをあきらめむや○

○問曰。袋草子云。和哥は好て無益なる事ありとて。大江公資か。大外記所望なりしを。小野宮の

師答曰。其理あるに似たれとも。歌はたゝことはに誠をたてて身ををさめ。國たみにも及ほす道な

れは。身の業を忘れんは道にあらす。和をたうとひ。順なるを事とせむに。公資かこときは。歌を歌とし。道を道として。公事をも忘れられけることといふかひなき事也。小野宮の清愼公は。此道をあきらめおはしける事。此御詞にもしるし。志はまことなるをたうとへは。つねに忘れす修せは。さはかりはあらすとも道はうへし。高雄の文學上人。西行上人の。法師なから仏道をかたはらにし。歌をふかくこのみ給へるをにくみて。あはは打もころしつへしとまつに。ある時西行高雄にまうてゝ。文學にやとをこはれたりけるに。弟子の法師はら。されはこそいかならむと。あやうくおもひたるに。いかなるにか打とけて物かたりし。次の日もねもころに別給へりけるとそ。これひとへに。西行上人の。道の徳たかきにあらすは。文學上人もとなへてならぬ人なりけれは。ふかき故なくて打とけつへきにあらす。歌の道たかくたうとく。人として修すへく。佛の道をもたすくへきよしある事をしりて。かの上人のかたられけるにこそ。これらもわかつとむへき道を捨られけるにはあらす。歌の道をもて。仏の道にもいよ〳〵すゝみ給へりけるなるへきは。此上人の。仏道をも歌道をも。生涯つとめとけられけるを思ふへし。諸道たゝ心をたゝすにあれは一致也。ことに我道は。みつから。みつからか心をこゝろみて。邪正をわきまへたゝすをもとゝすれは。かへすかへす。しかせはくいふせきことにあらす。公事を忘れむにゆゑなき故は。志をはかりて人を（ママ）定むるはや。

よく此道によりて。みつから辞を修しうへし。古今序云。そのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬ。いにしへのよゝのみかと。春の花のあした。秋の月の夜毎に。さふらふ人〻をめして。ことにつけつゝ哥をたてまつらしめたまふ。あるは花をこふとて。たよりなき所にまとひ。あるは月を思ふとて。しるへなきやみにたとれる心〻をみ給ひて。さかしおろかなりとしろしめしけむとあるをみて。いにしへは此道をもて。人の賢愚をはかり。世をもをさめさせ給ひけんことをしるへし

又曰。いにしへより餘情とも有心ともいひて一のことゝすゝめるけにさることとなり。また幽玄とて。古曾部入道なとはことにこゝろさゝれたり。餘情有心に似てしからす。いはゝ餘情有心は。その心詞すなほにして。うちみには何はかりのこともあるましくみえ。幽玄は。みるよりつやゝかに。何となくあはれなるやうなるかたかへり。されは幽玄すつへきにはあらねと。餘情有心をこそむねとはねかふへけれ。猶父北邊。しなをわかちてこれらのけちめをさとせり。貫之君の哥のすかたたしかなるをみて。餘情はよからすおもひたまへりなといふは。たゝよくこれらのさかひしらぬひか心えそかし（しなの事。六きは。いつゝのすかた等は。哥袋といふものに出せり）又曰。詞はたてぬきの奇偶也。（たてぬきとは五十韻也）もと一音に義をそなへ。二音三音なとあひて。又義をなせり。其おこれる事。ひとへに此義おのつから人の情にあたりてたてるなれは。かりにもこれをさとらすして誠をたてむ事鈎なくして釣せむかことし。詞に心のした

かふは。たとへは。水をひかむとするに。ひとき（一寸）ほれはひときの水きたり。ひとさか（一尺）ほれはひとさかの水きたり。つひに其源はるかに。千すちもゝ筋にもわかるゝかことし。後の世はこれをかさりて。ともすれは。心よりも詞のおかしきをめつる事もはら私心也詞あまりにやさはみいうならむとする時は。水に堤をくつさるゝにいたるへし。されはとていうならむをあしとにはあらす。あやしき詞をしひてはかりもとむるをは今はいふ也。あらしそかすむ。うつるもくもる。櫻色の庭の春風なと。皆奇語をもとめたるなり。つねに三のくらゐ七ののりをたゝして。おのつからいひ出らるゝさかひを。めやすくなたらかによみいつへし。なたらかならすはうたふに耳たちぬへし。されはとてこれにふけらは。かの奇語をもとめんにいたるへし。古人その機のことに出へからぬをしれゝは姿いう也。後世哥のさまこちたくなれるは機をも詞にのこさしとすれは也。詞をつゝるにわつらはしかるはたゝ此故也。おほよそ詞はにほひをしるへし。かみつ世中昔詞簡なるはこれにくはしき也。其にほひとは詞の裏なり。この理をえむと思はゝ。其一首の事からに。いかにもいはてはあるましき詞と。いはてもありぬへき詞とのけちめをわきまへ知へし。ふかきことわりはこゝにしるしつくしかたし。これをしらさる時は。無用の詞多く。何事もこと〳〵しく歌によみ出ることからならすみゆるそかし。されは詞にちからのありなしも。皆このにほひによれる事なり。この事いつの世よ

り人しらす成にけん。近代。あかすえならす世にゝすよかはらすよのとけしななといふ詞。口くせのやうになりて。いと力なくみゆる歌とも多し。これ歪。いかにもあかす。いかにもえならす。いかにもよにゝす。いかにもかはらす。いかにものとけき事からに。しかのみよむ故に。詞ちからなく聞ゆる也。世にすこし歌よみしれる人は。これらならても。よわき詞はよからすとはしれゝと。いかなる故にて其詞よわきをしらす。さらはつよき詞にあらためよと人こはむ時。此詞こそこゝには力ありて聞ゆれとおもふを。思ひえて出さん事かたかるへし。これ又。いかなる故にて詞に力あるをも弁さるか故なり。しらす〳〵そのよわしとおもはるゝ詞は。皆にほひのたゝされは也。これを弁しらすは。無用ならむことはをあらたむる便あるへからす。わつかなる三十一字の中に。一句一字も無用の詞ありて。いかてかふかき心はつくさむや。かのつよきよわきのさかひも。にほひをえて後そ心のことくなるへき。三代集の頃までの歌は。詞いとしたゝかなることゝちせられ。その一首のために。此詞はたちたりけるにやとさへみゆるも。皆このにほひたゝしきか故也。其以後は。さまてなき歌も打ましれり。古今集物名。あふからも物は猶こそかなしけれわかれんことをかねておもへはといふ哥。あふはかなしからぬことわりなるをかなしといひ。別のことをいはむとてあふといひ。あふといふをにほひとしてわかれといへるなとにても。かつ〳〵心うへしにほひはたゝ詞

のおこれることわりをは。これをもてわきまへよと也。共はしめは。事ひきたかひたらんけちめをさとさむの用をもはらとしてなれるなれはつとめて邑の義をきはめにほひをしりて。忘れても力なからん詞をよむへからす。ようせすは。にほひをは機かとひか心えせらるへし。しかあらはなにか餘情をかたしとせむ。にほひはたゝ人の計心にゆつるなり。又詞にむねとしるへきは我と彼と也。かれをも我としわれをもかれとすへきことわりをしらすは。おもひかけぬことあるへし。たとはゝ古今集に。山たかみ見つゝわかこし。又後撰に。時雨とゝもにふりてゝそこしなとの哥。ともにかへりしところそいふへきを。來しとよまれたるか如き事少からす又曰。感は。たゝよろつの物おなし氣をうちにうけて動靜をともにすれは。人情のつねをえたらむに。なにかは感動せさらん。されと新髄脳にいへる所ののりたゝしからさらむはやくなし。人情のつねとなれるはやかてあめのことわりなれは。かへす〳〵かののりをあきらめて。感動なきにあらぬことわりをしるへし

又曰。理はおほやけにかりにもまけたらん事あるへからす。八雲御抄云。花には黄玉葉にはあを玉。又井蛙抄云。あなた表もこなたおもてもなとの哥。みなこれらは尋常の理也。新古今集に。遍昭。末の露もとの雫やよのなかのおくれさきたつためしなるらむといふ哥。家集にもみえて。中昔にはめつらしく。少しことわりめきて。上下の打あひたゝしくみゆ。されとも。心の常ふかくしられて

機かくれたる事。こまかに味はへはしるくみえたり。これひとへに。古人誠あつきか故也。詞の上の理も古は猶よのつねならす。平祐擧の。むねはふし袖は清見か關なれや。又業平朝臣の。山のはにけていれすもあらなむ。又紀友則の。しきたへの枕の下に海はあれとの類。みな理外の理なり。かく理をいやしみ（ママ）。て趣をたうとふ事は哥もと諷詠して外神をさそふをむねとすれは也。思ひあまれる事こそ言にたてゝもうたはるへけれ。ことわりはたゝ人ひとりにむかひゐてつふやくより外あるへからす。ことわりにせめられてさりかたきはかりのことならは。鬼神もいかてかわれをあはれとみむ。私心計心もことはにあらはれたらむはろなし。かくれてさならすみえむに。ふかくこゝろをもちゐて。かりにもさならむはあらためつゝしむへし。ひしりといはるゝも。たゝ此理をいて。誠をたてたらむかきはまれるをほめたゝふる也。理は事みち。趣はことかけたり。物みちたらむうつはものにはなにかはまたいるところあらむ。易經象傳にも。盈不レ可レ久也とみゆれは。後にくひさらむさきに。事みち心ほこらしくみつからをさかしとせむなとのことをはあらためて。みたさらむやうにこそつとむへけれ。かれいかはかりたゝはしくとも。たゝ誠をのみむかへは。かれつひにみつからはちて。さはへなすあしきかみをたにもまつろへつへし。此道ひとへにかれかいつかしきをもてわれにむかひえぬさかひあるをしれよと也

○七法　轉法二十法ありこれをつかねて二十七法ともいひつけたり

○師曰。おほよそ。いにしへより哥をよむに。廿あまりなゝつの法あり。これみつの象のすちあきらかにとゝのふへきたより也　みつの象とは景象心象辞象これなり。象のうつりゆくこと。かゝみの如くなれとかたられき　かさしよそひあゆひも。みなこれにひかれて。おもくかろきけちめをよみわきうへし。しらさる人は。ともすれは心の輕重みたれて。自他内外。すち明らかならさる事もあるへし。世に輕重をいふことあれと。いかなるよしにて。かゝる哥にはかろくよむへく。あるはおもくもよむへき故をしらねは。たゝむなしきこと也。しかのみならす。心のすち明らかにたゝむはかり歌よみえむは。おほくの年をもつむへきを。此法をたにあきらめは。いたつらにそれに月日をわたることなかるへし。此ゆゑに今こまかにこれをいふ也。遠くは古人の魂をえ。ちかくはわかよまむ哥にもたよりとすへし。されと堪能のうへにては。おのつから事なくみえて。打あひかくれ。姿いうに。ふかく思はれたりとも見えさるにいたるへし。さるきはも。まつ此法をまねひえて後そ思ひしらるへき。後世。歌に無用の詞多くなれるも。法つたはらさるか故也。はしめよりかゝる法あらんともたとらす。おもふまゝにみたりかはしくよみならはゝ。たとひすち明らかならむきはにはいたるとも。猶いかなる事そともしらす／＼。古人の句調句拍子をみしり聞しりなとしたるまてなるか上に。それらの人の。五とせをへてよみしりたらんきは

まては。はしめより此法によりてよまむ人は。三とせをまてもいたるへし。かへす〳〵この二十あまりなゝつをはくはしくよみしりて。さて後は。また此法につなかれで(ママ)。うてるすみ繩のあと見えさらむやうにこそあらまほしけれ。すへて法は。貫寄添のみつをむねとす。又法ことに。二字三字より二句三句さま〳〵也。その條〻にいはねは。条下にひける歌ともをみあはせてしるへし。又あるは一首に一法なるもあり。二三法をあはせてよめるもあり。いつれも法にたにたかはすは心のまゝなるへし。おほよそ此貫寄添の法をみしらむとには。古歌にむかひて。その一首のなかに。その用うすくみゆる詞ある所に。心をとゝめてもとむれは。必法はそこにかくれてたてるへし。此三法の下ことに添たる轉法も。猶皆これに同し。其餘のよつの法は。一首の上に用ある詞の中にてたてる也。法もと置わつらはれん詞あるに專用あれは。貫寄添の三法をはもとゝするなり。此故にこのみつをはすうる法といひ。涉並畧寫のよつをはうこかす法といはせたり

貫 貫法　つらぬく法とは。歌のはしめにかうふらせたる詞にて。その義。それより下の詞の心をつかさとりて。一首に其心をつらぬくへき法也。もとはしめにしもその詞をおくは。その詞の心を場所として。下の詞の心はおちゐれは也。近むかしに。初五もしとて一首につらぬきつらぬかさるの辨おこり。その以後初五もしを置わつらふも。皆此法あるかゆゑなり。法なる事をしれは。かたき

に似てかたからす 冠詞はへちのことなり

白浪に秋の木葉のうかへるを蜑のなかせる舟かとそみる　興風

時わかすふれる雪かとみるまてに垣ねもたわにさける卯花　よみ人しらす

いつこにもさきはすらめと我宿のやまとなてしこ誰にみせまし　伊勢

あひみての後の心にくらふれは昔は物もおもはさりけり　敦忠

空の海に雲の浪たち月の舟星の林に漕かへるみゆ　人丸

納法

をさむる法とは。下にその事の歸すへき所あるを。上よりひとつ〳〵かさね行て。やかて一事一物にをさめたる也。これまたく貫法のことくなれと。これは下の一物一事より生したる物を。次第に上へつみかさねたらむやうなれは。その詞の心。下をはつかさとらす。たゝ一首の心のあたりとなる物事に歸する也。此故によせ歌おほくは此のりなり これを貫の轉法とせるは。一首にはつらぬかされ共。もと其こゝろのあたりの物事をすゑむとての法なれは也とかたられき

春やとき花やをそきと聞わかむ鶯たにもなかすも有哉　言直

まち〳〵てつらきをみるはうけれ共うきは物かは戀しきよりは　よみ人しらす

あし引の山鳥の尾のしたり尾のなか〳〵しよを獨かもねむ　人丸

別法　わく法とは。たゝ貫法の半をつらぬけるを云下法にかきりて。上かならす此のり也。もとそのくたす法の詞上にたにあらは。たゝ此法は寄法となるへき詞也。此故に。その心下法の詞まては及はさる也。引哥畧く。下す法の下にて心うへし

撰法　えらふ法とは。たゝ貫法に同しけれと。一首の心ひとすちなるへきか。上下にみたれましはれる心なるあり。さやうの哥に必此のりはかくれたり。おもふまゝをたゝ一すちにいひくたせは。何ことも輕重わかれす意味こもらねは。其一首の中にて。一首の哥の場所となるへからん詞をよくはかりてえらひとり。上に置てさてその下をつらぬく法也。かつは其ことはをぬき出たるか故に。下の詞とも〳〵。つゝきさまいうにさへ成ぬへし或問。しかみたれましはれる心とみすともありぬへきかと。師答曰。すこし歌よみならひたらむ人はさもあるへし。またく歌しらぬ人のみば。此次第をもてさとさすはおもひうへからす。此故にかりに法とす

花鳥の色をもねをもいたつらに物うかる身は過す也けり　雅正

【権法】はかる法とは。たゝ撰法の一法也。されとこの法は。そのえらひ出たる二句にもあれ三句にもあれ。又は一句の中の詞なりとも。一首をつらぬくへきをは。又その中よりえり出てはしめとし。寄法のことくになるへきをは其次におく也。されは再撰法ともいはせたり。詮する所。これをえらはむには。下の句〻をのこらすつかさとらんを上になして貫法とし。上をうけて下をすうへからんを下になして寄法とする也。寄法の心えは。下をあはせ見て。撰法の中にも。詞の心の次第すへきをはよく〳〵はかり知へし

三　二　一　四
今そしるくるしき物と人またん里をはかれすとふへかりける　業平
（権貫　権寄）

二　四　三　一
えそしらぬ今心みよ命あらは我やわするゝ人やとはぬと　よみ人しらす
（権貫　権寄　渉転並）

【環法】めくらす法とは。またく貫法の心えに同し。しかれとも。かれはたゝ一首のすへての場所をとるまて也。これは末句の下に。ふたゝひ其貫法としたる詞の心をめくらしてかすめたれは。一首の餘音と成て。しかも一うたをつかさとれり。しかいへは。下にいふ畧法の中の譲法に似たれとも。譲法はそれにゆつりて今一かたをかすむるにて。ことに句おなしからす。此法はその詞下にめくりて貫法なることをのかれす。其故にやかて一首の場所となりたるかたかへり。ことにもと居法

と動法とのけちめあれは。かた〳〵あきらかにわかれたり　略る心えは下をみて知へし

袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん△　貫之

ふたゝひ袖ひちてむすふに成ぬへしとの心也

**寄**

**寄法**　よする法とは。中にはさまりて。上をうけて下のはへをあらする法也。かつ上下心は打あひなから。つゝき穏ならぬをとゝのふる也。されは。一首の場所とすへき時ははしめつかたに置て貫法によむへく。上のあたりをむかへてうけ。下のはへをあらせんには此法に必よむへき也

櫻花散ぬる風のなこりには水なき空に波そたちける　貫之

おいらくのこむとしりせは門さしてなしとこたへてあはさらましを　三人の翁がうち

都人きてもをらなん蛙なくあかたのゐとの山ふきのはな　公衡女

雨ふるとふく松風は聞ゆれと池のみきはゝまさらさりけり　△水カサモ略　貫之

よそにありて雲ゐにみゆる妹か家にはやくいたらむあゆめ黒駒　人丸

**係法**　かくる法とは。下の餘法をは。詞と詞との中にて上下する也。たゝ寄法なから。寄法にはおなしからす。その故は。寄法は上よりあたるをうけて下をすゑかつ上下のはへをあらするにて。所をはかる。こともなく。その詞をたゝ其上段下段とある間のつなきとして用うる法也。これは上

段下段のあひたに。必その係法とする詞のいるへき所あれと。意味のわたるを上とし。かろきを下とすへく所をはかりて置か違へり

秋はきの花をは雨にぬらせとも君をはましてをしとこそ思へ　貫之

よし野の山のあらしもさむく日ことになりゆけは　長歌　躬恒

拾遺物名。いひのくちよりあまるなるへしなと倒句の法も此心得也

**盡法**　つくす法とは。寄法を兩端になしておく也。兩端にいふへき心えは。下の渉法にくはしくいへるをみて弁しるへし

いつくにか世をはいとはん心こそ野にも山にもまとふへらなれ　素性

いかてかく心ひとつをふたしへにうくもつらくもなしてみすらん　伊勢

かそふれは我身につもる年月を送りむかふと何いそくらん　(閑書)兼盛

**疊法**　たゝむ法とは。たゝ前の盡法をかさねたる也。たゝむとは必狀と事とを兩端にたてゝ。又それをは兩端とせる也。たゝ事をも狀をもつくして。聞人のこゝろを。事と狀との多端にわたりて思はする也と知へし

よとゝもに峯へふもとへおりのほり行雲の身は我にそ有ける　中興

**重法**　かさぬる法とは。たゝ前の疊法を引わかちて。その間に又ひと詞をはさみたる也。これは上下の詞ともたゝ盡法にして。上にしも置下にしもおくは。はさめる詞より以上をうくると。上の一句をうくると也。よくみしりてわきまへ知へし。はしめの詞のあたりをうくる所は二詞かはることなしこれらをあはすれはやかて寄法となれり

これやこの行もかへるも別てはしるもしらぬも逢坂の關　蟬丸

**添　添法**　そふる法とは。我おもふすちをまついひ出たるに。聞人の。あまりに其すちのさとりかたけなる事を下に補ひ添て。上の主意をさめとゝのふる法也。これはようせすはひか心えして。餘意をつくす也とおもふへし。さるは心から趣をそこなふにそいたるへき。たゝその事理のあまりに條なくさへきこゆへからむ所を下にいひて。其すちをたつる也

我宿の花ふみしたく鳥うたん野はなけれはやこゝにしくもる　友則

よとゝもになかれてそ行涙河冬もこほらぬみなは也けり　貫之

をしからてかなしき物は身也けりうき世そむかん方をしらねは　同

秋霧のたゝまくをしき山路哉もみちの錦おりつもりつゝ　よみ人しらす

此後二首はかへりつめのことくなれと。よくみしれはさならす。下のおろす法をあはせて思わくへ

し。すへて添法下法は末句にかきれる法也。連歌といふ物。おもふに皆この法より出たるなるへし

下法 おろす法とは全かへりつめ也。もとこれ末句は本句の上にあるへきを。しかすれは貫法となりて。本句の場所をすうるになれは。聞人の心つよくかゝらむをおもひて末句となせる也。されは本句は一首のおほむね也と知へし。一首の心。もと末の句の心よりおこれるにあらさるをしれは此法は明らか也。たゝすちよくたてりとて上におかは。意味の軽重たかふ故にとりさりおける詞をは。聞人あまりにおほつかなからんをおそりて。又とり出て下にそへてよむ心也。語路の上にかへるやうにしもよむは。もと上にあるへきを。とりわきて下におろしたるよしをみする也。たゝ句の長短によりて。もと上なるへきを下とすとはかりみは。つひに古人の魂をうる事有へからす。よく／＼弁へてみつからの哥をもよみわくへし

△いつのまに散はてぬらむ櫻花俤にのみ色をみせつゝ　躬恒

△うこきなきいはほの果も君そみん乙女の袖のなてつくす迄　元輔

餘法 あます法とは。たゝ添法なれと。添法は上にましはりいるへき所もなき詞をは下にそへ補ふなり。餘法は。補ふにはあらて。もと寄法なるへき詞なれと。寄法とすれは。上を受下のはへをあらす心となりて。上下こゝろの軽重その詞にあらはるへきか故に。それをとりあまして。さて下

にそふるを云。されは。はしめよりの意味をはのこらす引すへてすうるか寄法にたかへり。此故に上の暗伏の意味をすうる義はたゝ添法にして。おこしてそふるとあましてそふるか二法をたてたる故也。詮する所。寄を轉して添とするの法にて。上をうけ下をはへあらすへき詞をは。下をさへもうくる也

名にしおはゝいさことゝはん都鳥我思ふ人はありやなしやと　業平

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなん侘つゝもねん　よみ人しらす

ひとりゐて物おもふわれを時鳥こゝにしも鳴心あるらし　よみ人しらす

かこの嶋松はらこしに鳴たつのあなゝかゝゝし聞人なしに　同

渉　渉法　わたす法とは。何にてもあれ一ことのすちをとりたてゝ。いとおもくしらせんとて。先兩端をかまへて。下の一ことによする也。上を兩端にいはすとも。にほひにてしか聞ゆへきもあれと。一ことにいへは。たゝその一すちいとおもくなりて。聞人の心。多端をおこしてくらふることなし。兩端をもてむかへは。それをもて。おして他事他物をもはかりてかのひとすちにあはすか故に。白きものはいよゝゝ白く思はれ。長き物は弥長くみゆるそかし。おのつから聞人の心に他事他物をか

まへさせんかためめの法也。詮する所。兩端にはいへとも。たゝその事〻物〻にわたるよしをみする也

みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさん　業平

もみちはも時雨もつらし稀にきてかへらん人をふりやとゝめぬ　千古

木にもおひすはねもならへて何しかも波ちへたてゝ君を聞らん　伊勢

決法　さたむる法とは。上のわたす法に並法をむかふるなり此二法をひとつとして決法と云上はさま下は事なり。用うへき心えはたゝ疊法によるへし。されと。かれは居法なるか上に。かみにかうふれる詞ありてそれにむかへていひ。これは。たゝひとへに下の場所をとり。上の理をのへて。至。上は涉法。下は並法をあはせて一首とする也

むねはふし袖は清見か關なれや烟も波もたゝぬ日そなき　祐擧

賦法　かそふる法とは。たゝ涉法を添法によめる也。添法のうちの上にかうふらせてよめれはたゝ涉法にかはれる事なけれと。置所たかへれは仮に一法とす。添法にかうふらするに心は涉法に同しと知へし

ふる雪は消てもしはしとまらなん花も紅葉も枝になき比　よみ人しらす

**並法**　ならふる法とは。上の事を下に兩端をかまへうけて上の理をのふる也。或問。詞の艶を思へは。かく兩端にはいはすとも。今一端は艶となりて。さたかにしらるへきをや。師答曰。にほひの事。上の五常の下にくはしくいへれと。今又いふへし。もとこれ。しかあるからにはかくこそあらめと。聞人の心にさたまる所をまうけ出させんとする也。たとはゝ。この下の歌も。ことしとやいはむとのみよまは。さはことしといふへきにこそと聞人思ふへし。かくならふる事。もとにほひをつくすにはあらす。難決の事には必此法をよむへき也。此法にむかふ人。さはこそともいひかたくことしともいひかたく。いかにいひてかかなふへからんとの心を。にほひとはしけむとおほゆるそかし。詮する所去年とやいはむとのみよまは。聞人ことしとやいふへきと艶をもてむかふに。又我より其艶をいひ出て。聞人の心をは折き。あらぬ所の艶を思はする法也

年の内に春はきにけり一とせをこそとやいはん今年とやいはん　元方

戀のことわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつそ戀しき　よみ人しらす

**濟法**　とゝのふる法とは。たゝ上の並法をかさねたるにて。心えも全同し。かさねたるこゝろえは。たゝ前の疊法の下を見て。これをもおもひわきまふへし

君やこし我やゆきけん（渉）おもほえす夢か現か（濟）ねてかさめて（ママ）　よみ人しらす

**畧**

**畧法**　かすむる法とは。物事を眞にゆつりてはふきて思はする也。専活用の法也。はふかさる時はその眞境をうしなひ人の心やかて詞上をはするか故に。我よまむとする趣死すへし。皆いふになか／＼なるにまかせてかすめたり。眞にゆつるよしをよく味ひて思いたるへし

今しはと（△來ジ）佗にし物をさゝかにの衣にかゝり（寄）われをたのむる　よみ人しらす

露の命をしとにはあらす君を又みてやと（△死ン）思ふそかなしかりける　よしとき

**承法**　うくる法とは。物々の一すちにかゝれる事をいふに。上の一物にしか／＼といへるをうけてそれにゆつり。其下の物も。皆その筋をははふきゆく法也。これもたゝ其上の物にて。下の物々の眞をさとさんとて也

なく声はあまたすれ共鶯に（△ノ声）まさる鳥のはな（△声）くこそありけれ　輔相

ふた春三春すくしつゝその（△過セル）秋冬の朝霧の　東三條相國

水の面に月のしつむをみさりせは（△過セル）我獨と（△沈）やおもひはてまし　文時

**讓法**　ゆつる法とは。一すちの事をふたゝひいふに。一かたをはふきて一かたにゆつる也。たゝ承法の如くなれと。かれは多物一すちなる眞をさとし。これは。猶下も其ことをいはむとてかすむ

るかたかへり。されは承法は。二物にもあれ數千にもあれ。その一すちなる眞をあかす也。もとかすむるは。眞をさとさんか爲なれは。古歌にむかひても。あらはにいへる方はかへりて眞境にあらすと知へし。すへて正當には字なしとしらては。此味をうへからす

いつとても月みぬ秋はなけれ共分てこよひの△月ハめつらしき哉　雅正

秋のよの草の戸さしのわひしきは△夜ハあくれと△戸ハあけぬ物にそ有ける　（闕畫）兼輔

**反法**　かへす法とは。承法の反也。たゝ寄法たるへきをえらひて眞をゆつる也

松もひきわか△不なもつます○成ぬるをいつしか櫻はやもさかなん　清愼公
（渉　寄）

**寫**
**寫法**　うつす法とは。畧法にちかし。心を精しくして弁へし。これは。物にもあれ事にもあれ。其さまのみならすそのおもふきしかる所をおもはせむとて。必その物事そと。聞人思ひあたるへき詞にいひかへてしらする也されはふかくおもひうへし。いたく疎きは趣にたかひて。あらぬさまに成行へし。いつれも活用の法なれはまとひやすけれと。畧法は。聞人思ひたとりて後眞境にいり。寫法は。その実を誘へる詞の象を。人もと心にはなたされは。やかてそれとしるにいたる也。されは。畧法は語勢にはかに。寫法はゆるし

うは玉の我黒かみやかはるらむかゝみのかけにふれるしら雪（寫）（添）（白髪）　貫之

久かたの（月寫）中に生たる（寫）（桂）里なれは光をのみそたのむへらなる　伊勢

山もりはいはゝいはなん（寫）（咎）高砂のをのへの櫻をりてかさゝむ　素性

**誘法**　さそふ法とは。たゝ譲りて寫す也。うつせる方は活用也と知へし

めつらしき人をみむとやしか（誘）（鮮）もせぬ我下紐のとけわたるらん　よみ人しらす

狄のはもやゝうちそよく（誘）（音）程なるになと厂かねの音なかるらん　恵慶

**換法**　かふる法とは。二物にもあれ二事にもあれ。互にうつす也。これは。いつれをも活用せず
とての法なりと知へし

○―換―○
秋（時）を置て時（秋）こそありけれ菊花うつろふからに色のまされは　貞文

（闕畫）
**兼法**　かぬる法とは。かさね詞のひとつは寫法。ひとつは誘法なるなり。心えまたく前の二法に
同しけれは。あはせて心うへし

○紅

紅に色をはかへて［寫］（白梅）梅花かそことく［(闕畫)爺］（紅誘白寫）にほはさりける

躬恒

# 附録

## ○假名遣

○問曰。假名つかひ新古のたかひめあるを。いかなる故をもて。後世のかんな誤多しとするにや○師答曰。このみて古の仮名を用うるにあらす。前にもいふか如く。たてぬきひとつ〳〵義あり。中昔の頃までは。これに明らかなりけるにや。よせ歌も仮名たゝしかりけり。後世の仮名を。いやしみいむにもあらねと。此音義ほろひて後定まれるなれは。その音義たかへるをもて也。これたゝしからすは。いかて声妙の感通をえん

## ○寄詞　世にいふ秀句なり

○又問。近代いふをゆふにかけ。織を折にかけなとする事。仮名たかへるも。よせかくるには難なきにや○師答曰。上つ世より中むかしまては。さやうのみたりかはしき事なし。よするには。仮名たかふをゆるさむ理あるへからす。よするとて。詞の心かはるにもあらす。此こと近世におこれるにもあらす。中頃の人誤はしめたる也。（拾遺のをしあゆかすない（は）やゝ中ころに近けれはなり）中頃に。藍（アヰ）を逢（アヒ）によせ。鷹の木居（コヰ）を戀（コヒ）によせたる歌あり。されと。さすかに後世のことくむけにもあらす。ひをゐと聞ゆるやうによむ

時は。下脣上齒につきて。ゐの音に近けれは也。されとこれとてもよしとはいふへからす。もと此國は。音はかりにて文字なき所といふことを忘れ。ゑゐなとかけは。たかひたりとは思へと。いかなる別あることをもしらさるか故に。假名遣といふこともおこれる也。たてぬきの弁。別にあり　されはいとよくたゝして。よせかけなともすへき也

○引　合　世にいふもしあまりなり

○又問。もしをあます事。心のまゝによむへきにや。又は。近式これか定あるにしたかはむか○師答曰。その法ものりとするにたらす。何事も。上古より中昔まては則たしかなれは。そのほとの則をあきらめて。故北邊おもひえたる事あり。哥すへて体さま〳〵なるかうちに。八雲の神詠の体のみさかりなるは。もしの數。おのつからあめつちのことわりにもかなひたれは也。されは三十一字の餘あらんこと。かの神の御心にもかなふへからす。今わか家の定は。あまりてあまさぬ則なれは。たとひ一首三十八九字に成ぬとも。たゝ三十一字となる理。口授ならてはくはしからす。されはこそ。さもあらはあれといふ五ことさへみゆるなれ

○冠　よにいふまくら詞なり

○又問。かうふり詞。もと哥に無用なるを。上つ世にはことに多くよめるは故あるにや○師答曰。

歌は諷詠する物なるを。はしめよりゆくりなからし又いふになか〳〵なる事あらしとて。まつ冠詞をは多くよみたる也。後世ひとへに歌のたくみをあらそふか故に。わりなき旨を一首によみふせんとする時は。一詞とても冠なとにせは心つくすへからされは。冠詞やう〳〵よます成ぬる也。しかも哥の上にあらはさてもありぬへき事をもよめる哥多し。古人はそれらをはくはしく弁へて。詞のにほひなとにゆつりてそ。いうに冠詞はおかれける。されは必冠詞ある所は。おほむねにかへられたる也として深く心をつくへし次第を明らかにしれる人ならては。この理をさとり知かたからん

### ○挿　頭　別　かさしとは。心のうこくはしめにいつる詞をいへり

○又問。かさしのうちにも。世に混用せる詞ありや○師答曰。たとへはいつくいつこなとのかさし。いつこは古めきたりとて。近世いつくとのみよむ類いとむけなり。いつことは何處の心にてひろくさし。いつくは何國の義にてせはし。猶家説かさし抄にみえたり。新古のたかひめならぬこと。此別をもて古人の哥にみしるへし。いつかたとは。方角にかゝりて。又いつくいつこにおなしからす。これらの別一〻いふにいとまあらす

### ○装　別　よそひとはたゝ詞なり。何事もかさしの下となり。あゆひの上となるか故の名なり

○又問。よそひにも別ありや○師答曰。よに混用せる事いとおほし。たとへはふかき淺からぬとい

ふよそひ。三言にはふかき。五言には淺からぬといふと思へる類也。ふかきとは。淺さにむかへて。ふかき限をさとす詞也。淺からすとは。淺けにはみえなから。ふかきさまをおもひやらする也。又すこしといひいさゝかといふ類も多くは混用せり。すこしはなきに對し。聊は多に對する詞なれは。なきよりいはゝ少しといひ。多きよりいはゝいさゝかといふへきか如し。猶家説よそひ抄にくはし。すへてこまかに弁知へし

○脚結別　あゆひとは。心のをはりにつきて用をなすを云。これよにいふてにをはなり

○又問。あゆひ又よに混用せること多し。こまかに其別あるにや○師答曰。一ゝあけていふへからねと。そとこそ。かとの。やとかなとの類。ことに混したり。古今集に。あふさかにて人を別れけるにとかけるをもし。人にとのみこそ今はかゝまし。もと。には。上の物を場所としておきすゑていふあゆひ也。をは。上の物にわさをあらせて動かしていふあゆひなれは。人にといへは。我うこき人うこかす。人をといはゝ。我動かす人うこくへし。此故に留別にはにとかくへく。送別にはをとかくへき理となれり。又同序に。君にけさあしたの霜のおきていなはといふ哥。なへての人は。君をけさとそよまゝし。これ又。わか人に起わかれてかへりけるかゆゑなるをみるへし

○脚結不署の別

○又問。あゆひのいりいらぬに心ありや○師答曰。けちめあり。されと歌は。もしの數定まれゝは。なからてはあるましきあゆひをもはふきすてゝよめる歌。上つ世よりもすくなからす見ゆ。それもはふくへからぬ理を。しりて後はふかむは難ならす。その理をもみしらすして。心にまかせてはふきはふかぬこと。いと無下也。今をもしにつきていはむに。たとへは。酒のむ書みるといふは。をの字なきか常也。酒はのまむためにつくり。書はよまむためにかきたる物なれは也。されと。時ならすしてわつらふ人の酒をのみ。目なき人のふみをよまは。又をの字あるか常也。又酒のむとはいふへく。酒こほすとは故なくはいふへからす。又書みるとはいふへく。ふみやふるなとは故なくはいふへからす。今いやしきものゝ。夢をみる子をうむなといへと。歌には夢みる子うむとのみよむを思ふへし。子をはいかてかうまむとすらむの哥は。又心あり。月みれはなとよむは。ををはふける也

## ○休め字の辨

○又問。世にやすめ字とて。諸抄注せす。たゝ無義とするあゆひあり。それら。猶義なしと心うへきにや○師答曰。休め字といふ事は。もとあゆひをとき得さる人のいひのかるゝ詞也。わつかなるひと歌の中。ひともしとてもたやすく置へきにあらす。今の人思ひろからぬか故に。一首のうちに

心みたねは。その心をもて。古人の哥をも察するより。無用無義のもしもよみて。もしの数をあはせたると思ふそかし。世になへて義なしと思へるか中に。しもしなと。諸抄に多く助字休字なとかけり。しは。もろこしにて然尓なといふ字の心にて。しかのかもしをはふけるあゆひ也。上にうけたる事を。おもく一すちにいひて。それを正而にみていふ心也。多くは下に。濁音のはをもてうけ。又さならぬもあり。くはしく家説あゆひ抄にみるへし。又島津鳥。沖つ鳥。天津風なとのつもしも。又世に義なしとす。これのといふへきを。聞につたなからしとてつといひつけたりと思ふ人もあるへけれと。さるいふかひなきことにあらす。のは。下の物を外の物にとりわきていふ心となり。つは。上の場所を外の場所にとりわきていふ心なれは。すへての詞此別々はしかれ

# 跋

人の子のためはあまりもあへなくてまたいそちにはほとおほきほとにておくらせたりつれはつたへのこしたる事ともいとこちたきにかしのみのひとつ心におもふことありけれとみつくりのなかなかなるこゝろつくし也さたゝはかなくかいさしたなるふんてのすさひともはふむはこのうちにおちとまれりけるをかしこきしるへとたのむになのめにもこゝろえむにかたき事おほかりいにし年火のわさはひにあひてふみともなとこれかれやきうしなはれたるかなかにかのほくともはしもはひにもれたりしはおやのまもりにやといよ／＼そのことはともそ忘れかたきもろこしのひしりのあとはわかをちにしもとひまねふふし／＼かの詞のかつ／＼おもひうるところ／＼いてきたるを猶とひあきらむることかさなりて今はうたの松はらうたかひもなくなりにたるうれしさに吉水の僧正のまた何こともわきれ(な)きよはひのほとゝのたまひけむもさすかなから耳なし山のくちなしもえもとめあへてひとりこちうちなけゝるをもりきゝたるこれかれなほかたはしつゝそゝのかしいてゝ池水のいひいてたるまゝをはかいつけゝむさるはかいとりかたきすち／＼はふかれたなる所〻もみゆめりあはれから嵜のさきくまさはいかゝさきいかゝみたまひのたまはむとひとつふたつおしはかりくはへたる

こと〳〵も〳〵ゆ〳〵しうらしろめたけれと花すゝきそらをまねくにかひなくありかたつねむまほろしも
しらねはさはあまかけりても此みちをおほすことたえすはなにはのよしあしをはゆめにたにつけ
しらせたまへとなむ

寛政四年かみな月のはしめたひらにすむなりのふしるす

# うたふく路

一

つねにかたはらはなたぬ歌ふくろになにくれとなくうちいれつゝとしへてひもときてみたれはいま
さらめつらかなるまてそつもりにたるそか中にもいにしへの人々のめてたきことわか父のかしこき
をしへとものとりおいかたさにかなたにかさねこなたにつとへておのつからひとつのふみめけるも
のいてきにけりおほかたの物むつかしけなるももとより此ふみつくらんの心をきてならはこそあら
めとまれかくまれこゝらの年ころちらさてよくふゝみもてりしは歌ふくろかいさをしなれはやかて
さなから名におほせてかれかおもてをはふせしとになむ

平安　北邊二世成壽識

# 歌袋巻之一

目録

## ○六　則

哥のをしへは中むかしにはしまりちかき世まてみなそれにもとつきよろつにときおかれけるも時にふれ人にしたかひをしへやう〳〵にたちろきまち〳〵にわかれしよりこのかたたかひによしあしのもときすくなからすそありける今の世になりてそれかふかきゆゑをたとる人もなくたゝちかき世ののりをのみおそれかしこみいにしへにもとるをもかへりみされはなほあふくところにもたかふ事をしらす何かしかみちおほくしてみちいよ〳〵まとひやすきといへるもむへなるかなたゝし哥のおもんするところは内にありては心さしなりほかにありてはこゑなりこゑのあやを詞といふみな心のさきみたまなり詞のさまをすかたといふことはりをむねといふむねのさまをおもむきといふしかもそのあらみたまはみな心にて心のさまも又趣といふおもむきのあらみたまほかにありてはみるものきく物これなりうちにありては心たましゐこれなりさは心詞姿趣のよつはすへてこゝろたましゐのさきはふなれといにしへなへて躰としてこれをわかてるは詞のうへにつきていへるなりこゝには古今のをしへ同しからさるをみせことわりのかよひかよはさるをあかすをむねとすれは心趣詞姿を四にわかちそのあまりをひろひて二則とはなしぬこれこと〳〵におもひをこめちからをもちゆへきこと

をしらしむ

一　哥よみ哥學者のあらかひをとき文よむことわりをとく

二　道のもとをたゝし哥よみのやうい心もちゐをしめす

三　哥によむへきおもむきのよきよからぬをさとし思ひめくらすやうをあかせり

四　詞のよきわろきをさたむ

五　姿をえらめるにゆゑあることをしるす

此五則にて大かた哥のをしへつきぬへし

六　すくれてよき哥をもとむへきは此のりなりといへとも道のいたりふかきところにして初心のほとこゝにしたかはんとすれはかへりてみちをふみたかふへしはしめの五のりには心もとなからさるきはよりはもはらめをつけてこれによみかなへんことをひたふるもとむへし

# 五則

一則　世に哥よみあり。哥學者といふものあり。哥よみは花をめて。鳥をうらやみ。て(ママ)。おほく哥をよみ。心をやるをもてわさとし。哥學者はおほくふるき世のふみともをも見。哥の心をもしり。よむへきふることゆゑあることはなとを。よゝの人のときおけるをあつめえらひて。それはいはれたりこれはいはれすなといふ事をのみ。ねことにもくちあそひにもいふものなり。いはゆるひとつ心をたねとして。よろつのことのはとなりけむ哥ならは。哥學者のするやうならすともありなまし。又いろこのみの家にうつもれて。まめなる所に。いたすへからさるをもとかれたれは。哥よみのひとへにすきゐたらんも。よしなくやさるは。哥よみは。哥學者をもときて哥學は。哥よまんためこそすらめされと。物學する人のよみ口は。くすみてのひらかならす。されは哥よまんためよからぬ哥學なれは。いたつらことなりといふめり。又哥學者は哥よみを。わらひてあめつちをうこかし。ひとをなこめむかためこそ。哥はよむらめかれかやうにかんなのゆくへ。もしらすよみいてたる事も。もとをしらねは。なかはゝあやまりのみなれは。もののもまなひしらて哥よむとも。あめ人をはさらにもいはす。はふむしをもうこかし。てんやかたはらいたしなとはしたなむめり。このふたり

かするわさのおとりまさりをいはむに。いつれもいはれすとこそいはめ。いにしへの世をおもふに。哥はありて哥よみといふ人はなし。いはんや哥學者をや。ちかき世より哥よみといふものいてきぬその哥よみのなかに。いさゝか道に心さしある人。哥をも世にすくれてよくよみ。名たかきまゝに。人もうたかはしき事をは。此人にこそとはめとおもふはかりの人に成ぬれは。哥のことのみにもあらす。よゝのふることをも。くに〳〵のありかたをもよくたつねしりいひきはめて。一世の宗匠とあふかるゝことあり。これ今の世の哥よみ哥學者のはしめなるへき。今の人心みしかく力たらねは哥よまんとては。哥のすかたをのみまほりてすこ（ママ）よみえてのち哥のことをも事のゆゑをもしらまほしけれといまさらに。しもえねは口のあかるゝまゝに。哥學は哥をそこなふなり。哥よみこそまことに。哥はよめと。いひふみよみかちなる人は。ひろくみるをたのしみ。やう〳〵さかひに入たゝんとするに。あはせて人のせんやうにそゝろなる風情をもとめて哥をよみいたさんこと物うく力をも入あへねはよくもいてこぬまゝに物しらぬ哥よみをそしるなりさて名のうへをのみいはゝ哥學者はかぬち哥よみはものゝふのやうにてそのつはものをつくりいたすとこれをもちひて世ををさむるとけちめあれは主と從者はかりもたかふへしさるにては哥學者の哥よみをそしるへきいはれなけれと今の世をみるに哥よみそとてひゝらきをる人をみれはこしきれぬはかりをれかゝりたる哥よみなれ

はさきにわかいへる哥よみにはあらす又哥よみこそあさましきは（ママ）名なれ礼事にもあれ哥のことにもあれわか國のむかしをしらす五條三品。京極黄門なといへは。毛もいよたちて。虎狼のやうにかしこく。思ふその時は。哥いかゝありけんもしらねと。二條家はとありれん（ママ）。せい家はかゝりなと。口あそひにもいふめり。これらを哥よみとはいへと。猶まことの。哥よみにはあらす。又哥學者こそあさましき名なれ。礼事にもあれ。哥のことにもあれ。わか國のむかしをしらんとして。まなふ人をはたゝに。學者といふへけれと。學も者ももろこしの。もしなれはさいひては。もろこしのことをいふ人に似たりとて。和學者有職者哥學者なとゝ。からくしてなつけたり。されとまなふへき道に。いたらんことをもしらすして。その一ことをのみ。をさめんとする。人のみなれはたますりきぬゝひやはきかぬちなとに。なすらへてくた〳〵しく名つけゝんも。わらふにたえす。和學者有職者神道者なとは。今いるましけれはいはす。哥學者のするわさはいやしけれと。哥よみの。ゆゑなきにはまされり。かくあるうちにも。哥よみにも今もまことの。哥よみあるへし。哥學者もまことによく。まなひたる人あるへし。さる哥よみは。哥學者をそしらし。よき哥學者は。よき哥よみをもとかし。かくて哥よみのいたつらなるは。ことよきも世にやくなし哥學者は。すこしいひしりたるも。其ほと〳〵のえうはありぬへし。されはよききかきりを。たくらへていはゝ。哥よみは哥學者の

上にたちぬへく。あしきかきりをたくらへていはゝ。哥よみかへりて。哥學者の下に。たちぬへきをものをもまなひたるものゝ。いたつらなる哥よみと。いさかひけんをおもへは。その哥學者こそようせすは。哥よみよりもおとりぬへしとて。哥學者もいはれすとはいひつるなり。このふたりかあらかひに。いさゝかよりところあり。基俊卿の。俊頼朝臣を。そしるとてまなのもしもかゝす。しりたる事も。なきまゝにわらはへのかたる事につきて。無辺法界のいたつらこと。哥によみちらす物そとの玉へる。ものしりの。哥よみをそしるもとゝいふへし。俊頼朝臣の。文時朝綱に秀哥なしとゝき。京極黄門の哥のみちは。とほくもとめひろく。きくみちにあらすとの給へるなと。哥よみの物しりをもとくもとにて。をの〳〵ゆへある事なれは。よくことわりを。たつねて學にもとすへある事を。わきまへしるへきなり。曾祢好忠は。よもきの杣といふことをいひて。長能故部に。物くるひのやうに。いはれ。良暹法師は汝なけといふことを。長鳴と心え關の石梭を。石門と思ひあやまりて。懐圓入道にあなつられ。顕仲君は。かつまたの池に水をよみ入て。勝間田兵衛佐といひくたされ。高松相公といひし人は。月の中なる月と。いふ事をよみて。無月の宰相とも。天變の少將共。名のたち。頼政卿は鳰のうきすのなかるゝよしを。よみて祐盛法師にもとかれ。徳大寺右府は無明酒を。名そなき酒と心え。五條三品は不二の鳴沢を。ふしのなるさとよみて。なるさの入

道名なしの。大將とつかひて。世のわらひくさにしけるとかや。かゝる名たかき人ゝすら猶このあやまち。ありまいてこれよりおとりさまなる人をやさるを物しらて。哥よまんとするは。さほさしろかちうこかすこともしらて。舟をやらんとするにひとしく。風にしたかひ。波になかれゆかんことはえつへし。はやせよこきれ（ママ）みほさかのほりこゝにさしよせ。かしこにこきめくらんことは。いかゝ心にまかせん。古今の序に。のへにおふる。かつらのはひ。ひろこりはやしに。しけきこの葉のことくに。おほかれと哥とのみ。思ひてそのさましらぬよし。貫之のゝせ紀の曲水宴の。和哥の後に此時にあはさらん。人は哥のこともしらて。まとひありくなりと躬恒かかけるいにしへの事にて。其ときすてに。物しらて哥よめとは。をしへさることをみるへし。もとゝしの卿はとしより朝臣をよくも。思はれさりけれは。はらあしけにの給ひけることはなれと。哥よみの心もちゐはみるへし。又ものしりに秀哥なし。との給へはとて。かならすなきやうに。心うるもかたわなるへし。此みちは人のくにの事のやうにすし。ことにむつかしきことならねは。ふかくもとめ。とほくきはめさる。人もさへかしこきは。おのれと哥のさかひをえて。在原中將のことく。學なくしてよくよめるたくひなきにしもあらす。又物しれることとみつね。貫之なとのことき。みちのひちりもゐませは。いつれにもかたよりていひかたし。たゝし五條三品の。壬生二品を未來の哥仙ならんとの給へ

るは。いつもかたき事をとひ給ふことなく。哥よむまさしき心をのみ。とひ給ふゆゑとかや。又祝部行氏わかゝりし時。草子なとみて哥よまれしを。忠成のみて哥は。青雲にむかひてよむへし。今より古哥にかゝりては。うるはしき哥よみにはえなるましと。いはれける。又顕昭法師いなおほせ鳥のことくれ〳〵とゝかれたるを。定家卿のみ給ひて。此ことといかてもありなん。金翅鳥伽陵頻なといふ鳥もありとはかりきゝて。さてありなんいなおほせ鳥は。からすなりとも。すゝめ成とも。よまぬうへは。たゝしらすよみによみたりとも。何のくるしみかあらんとの給ひける。これらもみな世の中の。みるものきく物につけて。たねを心にはらめよとの。をしへにてひたふるよみならはされは。口つきも。やすらかならさるゆゑ。かくの給ふなりはしめより。文よむかたに。心をおもむけゆく時はふること。ゆゑある詞なとの心にかゝりてこれることはりを。とくをのみわさとし。月や花やなとやうのものに。心をとゝめすゝろなる風情をもとむるにうとくして。にはかによめる哥のすくみて。おもむきのおかしからさる。物しらぬ哥よみのくちつきにも。おさ〳〵及ふへからさる。世のもときうくへからんと。われも思ふ物からまけしたましゐになりて人のえもしらぬ事。詞なとをさらに。もとめいつるつねのことにて。うたてきわさなれは。文よみかたきをしるゑたとのよからぬにはあらねと。しはらくこれをいさめ給ひけることをしるへし。水無瀬の神の御口傳にも。

哥のことしらんにさま〳〵の。かたきことをわかちさへ學をたしなむ事は。人によるへし。よのつねはたゝ。万葉集はかりよみたるやうに。心えておくへし。さほとの事もすてゝ。しらねは人の。万葉集の詞をとりてよめる。哥をえよまぬもむけのことなり。たゝ文字の上はかりをよみすへむため。一たひは人にも。きくへきなり。古今集にも。しらてはあしくよまれぬへき哥ともあり。又さま〳〵の哥ともつくして。のせられたれはかならす。しるへしと。かゝせ給ふも同し御心おきてにて。哥はそゝろなる風情を。もとめてよむを。むねとすれは。よろつの事をさしおきて。たゝよみによみならふへし。やゝ口なれてのちは。哥のことをも。事のゆゑをも。しるへしとの。おきてなるへし。あは（ママ）その人は。かゝることわりもたとらて。かの黄門の。ひろくもとむるみちに非すとの給ふにつきて。哥よみは物しらてもありなんと。心うる。かへす〳〵。あるましき事なり。彼卿はその比の作者の中にもおほく。万葉の古事のうつもれたるをひき。三代集のゝこれる詞なとをもちゐて。よませ給へる哥多かるをや。顯注密勘二代愚案詠哥大概なとのふみも。なにの御心にてつくらせ給けんや。物しりもよくまなはゝ。よき哥よみにまなひいたるへし。哥よみもよく思はゝ。物しらて有なましや。夫物しらすとする。俊頼朝臣も。散木口傳をあらはし。寂蓮法師も。顯昭法師にあらかはれけるをみれは。今の哥よみのやうに。たゝ物しらさるにもあらす。又哥につたなしと

いふ基俊朝臣は。としより朝臣に及はす。顯昭法師は。寂蓮法師に劣れりといへとも。今の物しりの口つきにはやゝまされり。されとも。みな世のもときまぬかれかたきは。一かたにさしすきて。一かたにおろかなる事はなはたしきゆゑなり。しかれは哥よみも哥學者も。みなあしかるへし。たゝ思ひたちたらんまゝに。哥のふみをまつよみて。哥をよみ。又まつ哥よみて。文をもとめ。哥よみとも。物しりとも。名つけられぬやうにこそあらまほしけれ

二則　いにしへの哥のむねとするところはたゝ心さしをのふるにすきす。いはゆる思ふ事をみる物さくものにつけていひいつるなり。哥のさまくさ〳〵ありといへとも。みな心をのふるひとつにて。よろつのくさき。鳥けたものゝさま。月雪海山のけしきをのみいひはてたるも。これをおかしともあはれとも思ふ心よりよめれは。猶むねとするところにことなる事なし。末の世の人やう〳〵これをわすれて。さかりに題詠をもてあそふよりこのかた。心さしのことにあらはれたるをのみそれとして。なへてはさならぬやうに心うるともから。詞をもとゝし。たねを心のほかにもとめてよめる哥すくなからす。夫哥の心と。おのれか心と。ことなるはいにしへのみちにあらす。しかれともことの事よれる。いつれよりなれるも同し哥にて。心のけちめとても。さらに人のみわくへき事

ならねと。哥はよく人の心をうつける（ママ）物にて。たのしみ身にすき。うれへ心にあまりてよめる哥は。おのつから心もふかく。あはれにも聞ゆるなり。もとより心におもふ事もなく。人にしたかひ。題にむかひ。あたなる花を詞にもとめ。たねなき心さしをすかたに。あらはせるは。さすかに心あさへて。なみたおつはかりの哥はなきものそかし。これしゐてつくれると。おのれとなれるとのけちめなり。いにしへよりいへらく。その心ふかゝらて。そのふかき心をよまん事はかたきことゝそ。もし心さしこゝにあらん人は。世の中の。あはれにもおかしうもうれはしくも。時につけたる有さまを。えねんしすくさて。そゝろに哥のよまれんことをもとむへし。哥ははかなき物から。あめつちをうこかし。おにかみをなこめ。代ゝのふることをたつね。くに〳〵の有かたをしり。君をあふき人をなて。親子の中をむつひ。いもせともかきのあひたをやはらけ。おもひをやり。心をなくさむたよりとなれるも。ねもころなる心さしをあらはすゆへなり。（此一段は永言功用にくはし）かのうれへすして。くるしみすむするたくひの哥にして。これらをたすけんや。かくては題詠は。すましきわさなり。姿詞はえらまてもありぬへしと。思はん人あるへし。もとより道はさる事なれと。ことわりにおきてはしからさることあり。上つ世は人の心すなほにして。思ふさまなる事を哥によみけり。それか中に。よきわろきのおのつからしるけれは。やう〳〵品をわかち。おきてをもふけられけるより。此

みちせはくなりて。思ふこと口にまかせていふへくもあらす。まいて今は。よのつねの詞哥によからぬを。猶いにしへにならひて。そゝろにしもよまは。とりおひ狗はしらす。わらはへの口すさみにも。ことならし。これとても哥ならぬにはあらねと。まめなる所にもていつへくもあらし。されは題詠をもてあそふことは。いにしへのみちにあらすといへとも今にして哥の趣をしり。詞をもいひなれんに。これよりよきはなし。さるは。これかすてかたき所なれと。これをのみ事とせんも。又みちにあらすとまつしりて。心にもつへし。しからされはすゝむにしたかひて。これをあらたむること物うく。つひによからぬ哥よみと成て。世をはつるそかし。されはとて。又題詠にはよき哥たえてなしと心うるもかたわなり。いまの哥よみ。かのたつといふへんくゑを。ゑかけるに。物の上手は。まなこひとつをいるゝなへに雨をおこし。雲にたちのほれることく。また蜈蛉といふむしの(ママ)いに。よろつのむしのかゝれるをやしなひて。おのれか子となすに同しく。ふかくたくみならんことをねかへは。おのつからよき哥のよまるゝものと心うるはひかことなり。たゝたくみならん／＼とするほとに。おのつからそゝろなる風情を思ひめくらすほとに。つゐにおのかまこゝろをのふるに。いたるなるへし。しかれは。いつれよりなれるも同しことなれと。たくみよりして。よき哥をよめるは。たまさかの事にして。つねにねかふへき事ならし。いにしへの人。題詠にしてよき哥の

あるは。たゝ。朝夕の風の聲。雨の音にも。心をすまし。花のちり木の葉のおつるにも。なかめをこらし。風情をたちゐにつけて思ひめくらして。あかしくらされけれは。哥の席にのそみ。題にとりむかひたる時も。その折ふしのなかめ。かのときのけしき。おのつから。心にうかみて。ふしきなる風情めつらしき心はへなとの。よみいたされたるなるへし。今もかくたにしてよまは。題詠とてもかならすしも。みちにそむかし。たゝし哥をよむに。しめやかならん事をもとむるも。此ことわりにして。心うこく時は。おもひあつまりかたし。またよくあつまりても。心さしくはしからされは。思ひいたりかたし。いたらされはすくれたる心さしをえかたし。されは京極黄門も。哥にはまつ心をすますを。一のならひなりとの給ひ。我心にひころおもしろしと思ひえたらん詩にても哥にても心に置て。それをちからにてよみ侍るへし。あてなる人の御前にて。哥よまん時は。心の中にてひそかにこれをすんし。さならぬときは。たからかにもうとふへしとかや。又爲世卿は。はれの哥よまむとてはつねに法輪にまいり給ひ。わかきものとも〻こゝにきたりてよむへし。所からのすこさもことに哥よく出くるとの給ひけるも。心のしめやかなるをよしとし給ふゆゑなり。又頓阿法師の。哥をよくよまんには。三昧に入かことく。心をしつめて。幽玄のさかひにいり。人のよみふるさぬ所を思ひめくらすへしといへり。さて心のさはかしきと。しつかなるとのおとりまさりを

いふしるしとすへきは。ちかむかしにて。隆信定長の二卿は。一つかひの哥よみにて。いとみあひてよまれけるに。おとりまさりなかりけるか。定長卿出家のゝち（法名寂蓮）は。さらにみかきたてゝ。たとしへなくまさりけるとかや。これ。心うこかさるをよしとするゆゑをみるへし。又五條三品は。冬の夜のさむきに。ともしひかすかにそむけて。しろき淨衣のすゝけたるをうへはかりうちかけ。ひもむすひて。その上にふすま引まとひつゝ。その衾の下に桐火桶をいたきて。ひちをかの桶にかけて。たゝひとり物しつかにして。床の上にうそふきてよみ給けるとそ。又同卿の女は。はれの哥よまんとては。まつかねて。もろ〳〵の集ともをくりかへし。おもふはかりみをはりぬれは。みなとりおきて。火かすかにともし。人音なくしてよめるなとも。むねみなはしめに同し。又宮内卿は。はしめより終まて。さうし卷物とりひろけ。火ちか〳〵ともしつゝ。かつ。かきつけ〳〵。よるひるさらす。あんしられけるとそ。此ふたりは同しやうにいはれける哥よみなれと。宮内卿は。心詞のたけ（ママ）みのみをことゝし。そゝろなる趣をもとむるにうとかりけれはにや。しめやかなる中にも。すこしらうかはしきさまのみえたるならんかし。物ことはみな。こしかた行末目のまへの三あり。いはゆる佛氏の種熟脱なり。しつかにしてこれをもとめされは。心そのこまかなる所にいたりかたし。これをきはむる中に。おかしともあはれとも。心のそはりていひいつるに。折ふしのけしき物

ことのありさまの。ことはのほかにうかみて。さもと思はるゝを。よき趣とも。幽玄のさかひともいふなり。いにしへの人〻。心のしめやかなるをよしとの給ふも。今よみいてんとすもの(ママ)〱さかひに入ふしてもとめされは。そのおもむきをえかたきかゆゑなり。たゝよきもわろきも。此おきてをまもるへし。しかのみせちにおもはゝ。おのつからうることあるへきなり道雅の三位は。いと哥仙にもおはさゝりけれと。齋宮にかよひ給けるほとの。よき哥おほし

あふさかはあつまちとこそ聞しかと心つくしの名に(ママ)そありけれ

今はさはおもひたへなむとはかりを人つてならていふよしもかな

なみたやは又もあふへきつまならんなくより外のなくさめそなき

又仁和寺の淡路阿闍梨のいもうとなま女房にていたく世をわひて

身のうさを思ひしとけは冬のよもとゝこほらぬは涙なりけり

とよめり。哥よみならねは又よめる哥もなし。たゝ思ふことのあまりにいはれけるなるへし。されは京極黄門の。戀の哥は女房すくれたりとの給へるも。おふなは。なへて心せはきにつけて。やるかたなく。せちに思ひわふるものなれは。その心さしのこもりて。哥のよきなるへし。又爲家卿の。稽古には。戀の哥をよむへしとの給ひけるも。同し御心おきてなるへけれは。よろつの哥も。此心

もちゐにてこそよまゝほしけれ。むかし頼実の君といひし人は。五年のいのちをたてまつらん。よき哥よませ給へと。住よしにいのりて

　木の葉ふる宿はきゝわくことそなきしくれせぬ夜も時雨するよも

とよみける。そのゝち病あつしく成て。命あるましきにて。いのりともせしに。家にあるをうなに。神のうつり給ひて。かねていのり申せしことをはわすれたるや。かれか心にまかせてよき哥はよませぬ。されはこのたひはいかにもいくましきとおふせられけるとかや。古曾部入道はとし七八十になるまて。すみよしへ月まいりをして。よき哥よませ給へといのることをこたらす。またある哥合のとき。清輔朝臣判者にて。おのれか哥をまかせたりけれは。まめやかに涙をなかしてうらみ。又九十はかりになりてみゝもおろ／＼しく。會の時は。ことさらに講師の座にわけよりて。みゝをかたふけつゝ。うつし心もなく聞ける。又俊成卿の千載集えらひ給ひしは。入道世をさりてのちなりしかと。さしもみちにふかゝりける心さしをあはれひて。八首まて入られたりけるに。ゆめにきたりて。涙をなかしてよろこひをいふとみ給ひけれは。いま一首をくはへさせ給ひけるとかや。宮内卿はあまりに哥を案して病に成て。一たひはしにはつれしたりき。ちゝの禪門。なに事も身のありての上の事にこそ。かくして病に成ていかゝ案し給ふそといさめられけれと。聞いれすしてつひに

命なくてやみにしとそ。いにしへは。かくみちに心さしふかゝりけれは。おのつからよき哥おほかり。今の人はかゝるためしもいみしき上の事なり。おほろけの人のいかてとのみ思ひすつる。いとよしなきわさなり。大よそ。その心ふかゝらて。そのふかき心をよみいてんことはかたきわさなり。されは人まろ赤人も心よりいて給ひぬれは。われらとても。しかおとりたてまつらしと。たかき心をつかふへしと。もとゝしの卿もの給ひき。いさゝかも身をはちらひてはせられぬみちなれは。たゝいかて〳〵今のいやしきをはなれ。いにしへにたちかへらんとねかふにはしかし。たやすくうかみいつる風情なとは。大かたよみふるしたるむね。あるは。心あさきおもむきおほかり。よき哥よまんには。さやうなるは。なこりなく。さゝととりすてゝ。さらに思ひめくらすへし。貫之君の。廿日に一首をよみ給ふとあるも。哥ことにさありけんにはあらさらめと。たゝ心をふかくもちうへしとのをしへなるへかめれと。御抄にもとかせ置給ひき。けに此君の雫にゝこるの哥。いせの御のちりちらすの哥。清少納言のはるかにてらせとよめる。みなとみの事なれは。あなかちにねりかへりてよき哥のよまるゝにもかきらさめれと。これらの哥を。みちのほとりにてこかねをえたるになすらへ置れけるは。おもひかけぬさちといふことなれは。つねにねかふへきことならし。一条の院の御時。御屛風の哥を人々によませられけるに。四条大納言。ひとりおそきはいかにとの給ひける

に。はか〳〵しくもつかうまつりえすつたなくてたてまつらんは。たてまつらさるにおとりつへし。かつはか〳〵しくもあらぬをかゝれて侍らんは。なかくの名に侍れとて。かたくいなみ申されけるとかや。又釈阿入道。寂蓮法師なと。謌合の哥をはふかくおもふまゝに。よまれすとの給ひ。又建保五年四月十五日。院の庚申の哥五首の時。家隆卿より黄門の御もとへ。庚申いかゝし侍へき。今はたゝ。くひのほねいたく。水ほしく。あんしなりてと申おくり給けるなと。みないにしへのいみしき人ゝすら。猶こゝろをこめ給ことかくのことし。いはんや。これよりおとりさまなる人の。心を用ひぬやうやはあるへき。とさまかうさまにしても。おもひえかたき時は。しはしおもひのとめて。又ことかたに心をくはるへし。先達の心を天地にめくらすへしとの給へるこれなり。かくする中にかねておもひ入たる筋にはあらて。かたはらよりやす〳〵とうかひいつる事ある物そかし。又いたく思ひくしたる時は。おもしろからぬむねなりともやすらかによみおくへし。初心のほと。あまりにねりすくせは。心ちほれ〳〵しく成て。しそく心もいて。又入ほかのゐかへり哥とて。むねたしかならて心えかたき哥をよめらんは。心なきよりもうたてくみくるしかるへき。かゝるともからは。口なれんためなれははやりかによみならひてをり〳〵しめやかにして案すへし。爲家卿の新後撰をえらひ給ひける時。よからぬ哥よみの哥あまたみ給へと。一首もよからねは。えりくすをなんたま

ひて見侍らはやとの給ひけり。初心は何事もひとり思ひさためす。先達にとひはかりて。よきわろきをさたむへし。同卿のいへらく哥は人〻にみせて。わろき事をさるへし。順徳院の御時の御會に。行路柳といふことを。定家卿の

みちのへのゝはらの柳もえそめて哀おもひのけふりくらへや

とよませ給けるを。仙洞御らんの上。出仕をとゝめられ給けるとそ。かくいみしきうへにも。此あやまちあり。ましておとりさまなる人は。猶更の事にて。かゝるあやまちすくなからす。又一首によみはつましきむね。あるは。いれほかなる趣なとにかゝつらふ。むけの事なれは。よく〳〵先達にとひはかるへき事そかし。當座は。頓阿法師は。時分ほとなきゆゑに。さほとみかゝぬ哥をもかくにて侍るといへり。また物かたりなとして人の案情さへさまたくる事。かへす〳〵あるましき事なり。俊成卿の。頼政こそ上手なれ。かれたに座にあれは。めのつけられて。ねひとつせられぬと覺ゆとの給ひ。俊恵法師も。此卿。會の座につらなりて哥うち詠し。よきあしきのことわりなとせられたるけしきも。ふかく心に入たる事とみえて。いみしく。はへあるやうに侍しとも。又和哥の會のけに〳〵しうゆうにおほえしは。範兼卿の家の會のことくなるはなし。亭主さる人にて。いみしうもてなして。ことにふれつゝ。れうしならす。人にはち。道を執して。ほむへきをはかむし。そしるへ

きをは是を難し。諸事にはへありてみたりかはしき事ゆめにもなかりしかは。さし人ひとも。みなその趣にしたかひて。いかてよろしき哥なともよみいてんとおもへりき。されは此會にはよき哥ともいてき。はかなくめつらしき一ふしを思よれるにつけても。かひ〱しき心ちして。兼日の會には。みな哥を懐中して。當日の儀いたつらに程をふることなし。もし又當座の會あれは。おの〱所〻にさしのきつゝ。案しあひたるさまなとまても。えんに。あらまほしきさまに侍しかは。させる事なき哥も。ことからかさられて。艶に聞え侍き。此會につれてみれは。まつ會所のしつらひよりはしめて。人の装束なとも。うちとけたるさまおの〱かけしきありさま。みたりかはしき事かきりなし。十日廿日かけて題をいたしたれと。日ころは。なにわさをしけるにか。當座にのそみてのみ哥を案し。すゝろに夜をふかして興をさまし。披講の時をもいはす。心〱に物かたりをし。先達等にもはちす。めん〱に證えかほなる氣色ははなはたしけれと。地に哥のさまをしりてほめそしりする人はなし。まれ〱ふるき人のよきあしきを定るも。人の氣色をはかりて偏頗をさきとしたれは。案するにつけてもあちきなく。よろしき哥なとをよめるにつけても夜の錦にことならす。たかく詠するよき事とて。くひすち。すちをいらかしこゑをよりあけたるさまなと。いみしう心つきなし。すへてにきはゝしきにつけても品なく。やさかる（ママ）につけてもわさとひたる。地には人の心

の底まてすかすして。たゝ人まねに道をこのむゆゑなめりとそ。これらにて。古今案情のことなるをみるへし。ある人の。我もさる哥よみならは打しめり案するとも人のけしうも思ひおとさし。わろもの〻。上手めきてゐたらんはなか〳〵なりやといへり。これよからぬうへにわろくよまむとするなり。それ哥をよむに。しつかなるにも。さわかしきにも。よめること人によりてことなりといへとも。おほかたしつかなる所に心をしつめたるかよみよき人おほかるに。それをもかへりみさるは。我をも人をもさまたくるなり。かへす〳〵つゝしむへき事なり。さて當座の哥は。まつ手こ〳〵とよみて。人いまたよみはてさらは。又案すへきなりと先達の給へるは。ふかく心を用うるをわろしとの給ふにはあらす。外のこらすよみはつる時は。心せかれて一首もむねよくいひおほせかたきものなれはなり。されはとて。いつもよからぬうたをよみて事たれりとするも又よしなし。哥はよくよまんこそ本意なれ。はやくよめるか高名ならねは。いとまたにあらはよく〳〵案すへきことなり。まいておそくもとくもこゝろにまかせよめらん人は猶さら心を用うへき事ならんかし。いにしへは。えよまてしら紙に題目位階官職名をかきて。哥はかりをかゝす。あるは。哥は追で(ママ)進とかきて逐電するを白紙の作法とし。あるは。ふるき哥の上の句はかりかきてしそくなとも。みなみくるしき哥をかくを左道の事とするゆゑなり。みちを執したる心さしいとやさしく覺ゆれと。今の世に

てかゝる作法をとりたてゝいはゝ。人ことにしらかみなるへしこれらはやんことなき御あたりのはれの御會なとにてのことなるへし。又清輔朝臣の。會の哥をよみおくれて。幾よに成ぬ水のみなかみとよみいたし給ふを。かゝる哥よめらんとては。さありなんと。人〻ことわりにおもひけるとあるをよきためしにして。わろものゝ。いつも人におくれ案しゐたらんも。みくるしく法外の事なり。これらは哥にもより。人からにもよるへし。兼題の哥は。日數あれは。ことに沈思して心詞をよくとゝのふ□頓阿法師はいへり。又ある記に。題をえて二日三日はかりによむへしとあるは。よくよまん〳〵とおもへと。事しけきにうちまきれて。けふあすといふになりて案するいとまなければ。心にもあらぬ哥をもてせめをふせくことのある物なれはかねてよみおけといふおきてにて。道にこゝろさしふかゝらぬ人のためにかゝせ給ふのりなるへし。哥數おほくよむことは。上つ世中むかしには。いとしも見えす。愚問賢注に三十六人の作者の集百首にをよひたるはすくなく。花山僧正。齋宮女御。本院中納言。公忠弁なとの集の哥。わつかに侍にや。殷富門院大輔をは。哥數おほくよみたりとて。千首大輔といひけり。今世たれか千首よまぬひと侍らん。哥の程ひやうしはやく成て。よき哥よみもいてこぬ事に侍る歟。又題とりてことかゝぬほとたによみたらはと中人あるへし。それほとのけいこはともかくもこそ侍らめとをしはかられ侍りといへり。けに人にほこらんた

め。哥數おほくよまんは。よからぬ事なり。おのつから心もあさく成て。一首もよき哥のよまれぬものそかしたゝ口なれんためはしはらくこれをことゝせんも又あなかちわろきことゝもすへからす。爲家卿の五日に千首よみ給ひて。哥ことにすゝみ給ひけるとそ。されとはしめよりおほくよむへからす。まつけふ二三首。あすは四五首なとゝ日にそへてよみかさぬへし。僧の經よむ事をしふるに。一句をなか〳〵とひきてうたはしむるに。のちはなかきにうみて。いつしかはやくよむとかや。はしめよりくちとくをしふれはつまつくものといへり。これ哥をおほくよむをしへにゝたり。爲家卿の百首をよまんには。地哥とてすらり〳〵としたるを七八十首もよみ。いかにもよきうたのよまるへき題をよく〳〵案すへしとの給へり。俊頼朝臣もさし給へりとそ。なへて力をいるゝ事はせぬ事はあまりに日數かさなるゆゑなるへし

**三則** 趣のよき。よからぬと。ふるくあたらしきとをえらふことは。たれもしれる事なれと。むかし今にかよひ。かよはさることわりをよくたつねて。これにしたかはされは。みちにそむくことあるへし。上つ世より。中ころまての哥は。心をのふるのみにて。趣のよきわろきはさらにもいはさりけれと。おのつからねんころなる心のこもりて。いはんかたなくなつかしきおもむきおほかり。

中ころの人。これをうらやみ。たゝ趣にのみ心をよけられける。（ママ）しかれともかの花を雲にまかへ。紅葉をにしきに思ひよするたくひも。よにふりにたれは。雲の中にもさま〳〵の雲をたつね。にしきにもいろ〳〵の錦をもとめ。やすからすたしなみ。思ひ〳〵にけしきをかへ。いろをそへめつらしくよみ置れける中には。なか昔にもかよひ。すくれてめてたき哥もあれと。詞つきの世にふりみゝなれたる哥のおもむきさへあらはなりとて。ちかむかしの一きはゝ。詞をむねとして。心をはたらかし人のよみふるさぬところを。あなかちにもとめられけるにやおもひかけぬふし〳〵のいと花やかなること。おもやうのけさういみしくしたる女のやうにて。うちつけはうるはしきも。やかてけうときところのめにつきてうるさくやありけん。ちかころはまた姿のなたらかにしてめやすからんことをのみねかはれけれと。おもむきを事とせられさりけれは。つくり花のにほひうつくしうしてかほりなきかことし。かくよゝに心をつくし。いにしへにかへらんことをねかはれけれと。みなにるへくもあらす。いまこれをいふに。むかしよりよき哥といへる哥ことに。趣姿詞の三をそなへてよしといふめれは。後の世の人ゝもしか。よみかなへむとて。かれかあしきをあらため。これかよきにへつらふことのみさしすきて。心をのふるかた。やう〳〵かるくなりゆけは。おのつから趣もゆかしからさるなり。四条大納言の姿をとるへしとの給ひ。俊頼朝臣の心を先とせよとゝき給ふ。

すこし心をおもくとりあつかひ給ふやうなれと。一はむねにて姿よからすとも。むねをよくよみすうへしとののりなり。一は趣にて。姿詞をえらまんよりも。まつおもむきをさたむへしとのをしへなれは。すち同しからす。いにしへの心をのふるといへるは。たゝ思ふ事を聲にあらはすなり。もとより心に思ふこともなく。哥よまんために。趣につきて心をおこし。姿詞によりて趣をつくるなとは。みちにそむけるわさなり。思ひかけす哥よまむにも。かねてみきく物。いひおもふ事のまことをあらはして。姿詞をも。かてにえらむへきなり。たゝし。いまの世のねかふ所も。猶ちか頃なれは。かゝるすしをとりたてゝいふ人もなけれは。ふるき哥の心も詞同しからさるはとかならしといふことさへきこえぬ。此みちわけそむる人のうたのさかひをさとり。姿詞をしらんためはかくも有へし。やゝさかひに入たちてはうけられぬのりなるへし。もろ〳〵の口傳すいのうにもこれをいましめおかれけるは。我ものといひかたきゆゑなるを。けにかゝる哥よまむはよしなき心つくしならすや。されとも哥の趣のとほからねは。たま〳〵よみあつる事はいかゝせん。それも我とめつらしくよめるにはおとるへし。これは人の聞わくへき事ならねと。わか心をのはへんためにこそ哥はよめ。哥よまむためにさしはへたる心やは有へき。みちをふかくせむと思はん人は。これらのことわりをわきまへ。ひとへに俊頼朝臣のおきてにしたかひ。心をさきとしてめつらしき風情をもとむへ

し。こゝにめつらしきとことなるとのけしめあり。またしき人なといとうほりすくせは。ことなるすしにおち入入ても螢や月をみるらん。花にはきたま薬には青玉。くさかきいるゝ小田の苗代。今や衣をまきかへすほと。なといふ。入ほかなる趣をめつらしき事こそのこれとてよめるためしまゝあることにて。うたてきわさなり。此きはのひとは。しはらく今のゝりにしたかひて。やう〳〵哥のさかひにいるへし。あまりにおいらかなること。いやしく今めかしきけはひ。あはつかに心いられたるさまなとは哥にことなるおもむきなれは。このみよむへからす。たちいるへきおもむきは。大かたいにしへによみふるされて。さらにめつらしきこともあらぬやうに思はるれと。世の中のことわさは。ふる雨よりもしけく。ゆく雲のやうにうつりて。かはれる趣つくる事あらんや。いはんや人の心は面のことく。ひとしからさるをもてめつらしきをもとめんに。猶よみのこせる趣なからんや。それも古哥にさもありぬへからん事にして。いまた人のよみふるさぬ所とたにもとめんに。古にへつらふあやまちもなく。ことやうにさまあしきうれへもあらしかし。さて哥よみの春よりも秋をめて。さかんなるよりもあはれなるになつみ。うれしきよりもかなしきにふけるは。ことやうなるさかひをこのめるにゝたれと。月花もとことはにさかりなる物ならは人もかくはめてし。あめかせの世につれてこそ詞のたねも生ぬれは。哥よみのもてあそふところは。猶よのつねのことにして。

ことなる風情にあらす。おほよそ。ことたらひ。ことわりあきらかなるあたりには。心のうこくすしもなく。ことにあらはすへきおもむきもあらぬものなれは。哥にも。やさしく物あはれなる趣をよしとはいへり。されはとてつきなきそらこともわろし。又ありのまゝなるそよきとて。あるとあるものをくた〳〵しくいひあらはさんとすれは。かへりてまことのことわりとしるへし。折ふしのなかめも。物ことのありさまも。よくそのまゝ事をたつねて心をひとすちにあらはすへし。ふかく哀と思ふところたによみはすさすは。いか斗のけしき有さまも。ひとつにこもりて聞ゆへし。在中將の月やあらぬの哥は。五條きさいの宮の西の臺にて。二條后とかたらひ給ひけるを。む月といふに。后外へかくれ給ひし後は。おはします所はしり給へと。えものもの給はて。又の春。梅のさかり。月のおもしろきにもよほされて。こそをこひ。かのにしのたいにいたり。あはらなるいたしきにふしてよみ給ふとあれと。梅の盛をも。月のおかしきをも。逢み給ひし時のしのはるゝよしもの給はす。たゝ身ひとつはとあるに。我はちきりしに露はかりも心かはらさるに。かくはなとさう〳〵しき。さは。此月。此春の。去年にやことなると。后のおはしまさぬにつけて。かはらぬ物さへうたかはしくおほしたるに。せめて心をまとはし給ふほともみえ。又こそかたらひ給ひし有さま。今は人すまてあれたる所のけしき。月花のなかめまてもおもひやられ。かゝるおかしき夜を。いかてひ

とりあかさんと。いとあちきなく思しけんけはひまても。ひとつにこもりて聞ゆ。又古曾部入道の。心あらん人にみせはやとよめる。何事もいはねと。なには江の波ものとかに。いこまの山まゐも。浦はの松のみとりもほのかにかすみわたれるひまより。あしの靑〳〵とつのくみたるかなたこなた。蜑小舟のゆきかひ。あひきする有さまゝて思ひやらるゝも。哥の趣と。けしきとかなへるゆゑなり。かゝる哥。これにかきらす。中むかしにはいと多し。なかころにもまれ〳〵にあれと。たゝ此二首をあけたるは。よく人のしれる哥なれはなり。またまことのありさまと。哥のおもむきと。うちあはさんとすれは。そらことにゝたる事あり。伊せの御の枕の下に海はあれとゝよみ。平祐擧の。むねはふし袖はきよみか關とよめるたくひは。思ひのせちなる。かくいはされはさとしかたきゆゑなり。又遍昭僧正の。柳の朝露を。玉にもぬけるとなかめ。貫之の。洲の鶴を。よせてかへらぬと思ひよせけるけしき。まことに。さおほへられけるならん。かゝるそらことは。趣のまことをあらはすためなれは。くるしからし。やくなきそらことは。ゆめ〳〵すへからす。又趣は。時によりてかはるへし。たとへは。春は雪きえ。氷とけ。日かけうら〳〵と霞わたれるそらにいとのみたれあそひ。鳥のね。人のさま。ほこらしく。花なといろ〳〵ありて。うるはしくゆたかなるけしきなり。夏は。時鳥まちそむるより。うの花くたしのさみたれかけてふり。いつしかと。花たちはなもちりすきて。なる

神のおとろ〳〵しく。夕立の雲ひかけまはゆく立かさなり。よもの木たちもしけりあひて。蟬のこゑたえす。物むつかしきさまなり。秋は。くさ〳〵の花。木〻のもみちのなかめもあれと。とことはに。風ふきて。折〳〵かりのおとつれ。所せく露こほれて。たえすむしのわふるより。月の遠方のきぬた。霧のまかきのさをしかなと。みきく物。みな。怌の心にあらさるはなし。冬は。霜置。くさかれ。河せのちとりこゑまれに。みねのすみかま煙ほそく。あられみたれ。雪ふり。つもるまに。冬こもりして。衾引あふひ埋火のもとにむかしを忍ふまて。さひしくからひたる趣そかし。大よそ。かくのことく。時につけてかはる趣あれと。事しけゝれはこゝにのせす。又戀はいつもわりなき心をあらはし。えんにやさしくよむへきなり。旅。述懐なとも大かたこれに同し後鳥羽院の御とき。いみしき哥よみ七人をめして。三躰の哥とて。春夏はふとくおほきやかに。秋冬はほそくからひ。戀旅はえんにやさしくよめとあふせことありけるも。哥の趣しるしらさるを御らんすへきためとそ。雑。名所にも。それ〳〵の趣あり。よくたつねて趣の中の詮とするところをあらはすへし。題にむかひ哥よまん時も。むかしありて。今なき物。いまたしらさる事なとは。ふるくよみおける趣にしたかひてよむへし。又ふるき哥の風情をとる事は。詞をとるにおとるへし。たとひふせいをとるとも。詞をかへてよむへしと。御抄にのせおかせ給へり。又人によりてもそのおもむきはかはる

へし。貫之君の。小町の哥を。あはれなるやうにてつよからぬは女の哥なれはとの給ひけるをもて。女は。女しく。男は。をゝしく。よむへき事なるをしるへし。かく人ことに。そのさがをあらはすをよしとて。世に時めくひとのほこりかなる。物にたくみなる人のなめけなる。きすくなる人のかと〳〵しき。ねちけたる人のまか〳〵しき。たけきものゝおそろしき。まつしきものゝ物くさけなるたくひ。おの〳〵。その哥にみえはいとうたてかるへし。されはむかしより。哥はなさけを先として物のあはれをしり。やさしくよむへしとはいへり。いかにおそろしきものもやさしく聞え見にくきものもきよらによみなし。かしこきもおろかなるやうにもてなし。さとれるもしらぬさまにおほめき。しかもそれときこゆるやうあるへし。西行法師は。佛にたつるみさほのかたきこと石のことく。世をのかれんとしては。つま子をもあたのやうになし。文覺といへるたけき僧たに手を置けるほとのひちりにておはせしかと。數ならぬ身の思出にせんとも。こゝろなき身にも哀はしられけりとも。おほめき。京極黄門は。此みちにおきて汝月明なりといふ靈夢をかうふり。世にかたをならふる人もなく。われもいたう思ひあかり見え給へと。いさまたしらぬ大和ことのはと。しらぬさまにもてなし給ひき。これをもて味ふへし。又古九條內府の自讃の哥に

明かたのあまのとわたる月かけにうき人さへや衣うつらん

入道民部卿。此哥をみ給ひて。人に心をつくさせて戀らるゝほとの人の手つから衣うたんこと。心うく侍るへくや。後京極攝政の息正二位内大臣ほとの人の傾城。さるすさみやは侍へきと難せられけるも。哥は作者によりて用意あるへきをの給ふなり。又人のために哥よまむにも心えあり。入道式部卿の御子日に。大中臣能宣。ちとせまての哥をよみ給けるを父頼基きゝて。かたはらなる枕をもてよしのふをうちて。殿上をゆるされて。みかとの御子日あらんときは。いかなる哥をかよむと不覺なりとせめけるを。かうかへあはすへし

四則 俊頼君は。ふるく人のよめる詞をふしにしたるはわろし。一ふしにてもめつらしき詞をもとめよといへり。定家卿は。心を古風にそめて。詞を先達にならへとも。又詞三代の集。三十六人の集にいつへからすともの給へり。此ふたつのをしへあひそむけるにゝて。うちつけにはいつれもひかことゝならさるをしりかたし。それ上つ世は。人のことのはいまた哥とことならねは。思ふことくちにまかせてよみけり。中むかしより。詞のやさしきは哥もゆうに聞え。いやしきは哥もともにきよらならされは。やう〱これをえらむことゝはなれりとはいへと。中頃まては猶口にまかせてよめる哥もみゆ。近むかしの頃より後は。つねの詞ます〱哥によからねは。黄門の。先達のよき哥に

ならへよとの給ふにて。それらの詞かりにもやさしからさるはなし。しかれは口にまかせたる。いやしくおそろしくあまりにおいらかなる詞なとは。いにしへにありといへともよむへからすと思しけんことうたかひなし。まいてちかむかしよりのちの詞の。ことさら哥によからぬは。かならすよむへからすとの御おきてもこれになすらへてしるへし。又俊頼君の。ふるく人のよめるといへるはひとつ口にいふへからす。それかあらぬか。人はしら雲（菊）。空にしられぬ。なと云詞の本哥にすかれるにもあらす枕にもあらす世にふりおかしからさる詞の。こと〳〵しくてさしも心のなきをよからぬとのおきてにて。制詞。不可庶幾詞なとのはしまれるもおほくはこのいはれなり。さていまた人のよみふるさぬといふは。かのふるき詞の外にあたらしきをもとめよとの給ふにあらす。同し詞もつゝけからにてふるくもめつらしくもなれゝは。一ふしにてもめつらしからんことをふるき詞にてつゝるへしとのおきてなるへし。為家卿の。きゝよからん詞は今はしめてよみいたしたらんもあしからし。上手の中にはさる詞おほかりとの給ふもこれに同しく。ふるき詞をあたらしくくさりたるまてにていにしへにかよはさる詞にはあらさるへし。俊頼朝臣。頼政卿。西行法師の集をみるに。その世にていひつる詞。又は物かたりなとにたま〳〵見えたることはを。はしめてよめる哥おほかり。これはひとつ口にいふへからす。此人〻は人をもいさめて。いろ〳〵のおきてをものこされけるほ

との哥仙にて。よからぬ事をみつからよむへきやは。すてに西行法師のよられつるの哥。源三位の空さりけなくのうた。みなあたらしき詞にて撰集にあるをみれは。あなかちにこれをわろしといはんはおほつかなきことのやうなれと。これは人からにはかられてさ思はるゝなり。いかに哥仙なればとて。そのよめる哥ことにすくれたるにもあらさるは。ひしりとするみつね貫之もしかなり。たま〱おかしからさるうたのあれはとて。名のうけられぬにもあらす。それも又なほさりの口つきには同しからすといへとも。すくれたりとはいひかたし。たゝおほくよめる中にめてたき哥のあまたあるをもて。哥仙ともいひひしりとも名つけけるなり。大よそ哥にはたゝ心さしをのふるをむねとすると。よくよまむとかまふるとのふたつあり。心さしをむねとする時とても。同しくは詞のよきをもとむるはいふに及はす。えうせすしてやむへきこゝろさしならねはともかくもよみはつるなり。またよくよまむとする時は。せめて詞のよきをえらむへきなり。ことさらはれの哥なとは。すこしのきすをも人のもとめさはくものなれは。さらにみかきたつへし。かのいにしへの人〻の集によからぬ詞のみゆるは。此いはれなり。長秋草庵の二の集には。おもひかけぬ詞ともたまさかにも見えさるは。みつからえらみおかせ給ふしるしとかや。これらにても。いやしき詞のよからぬをしるへし。御抄に。もとより詞にはよきもわろきもなく。つゝけからなりとかきおかせ給ふは。同し

詞も。つゝけからにて。よしあしのいろ〳〵になるをさとし給ふまての御おきてにて。詞には。いやしきもやさしきもなしとの給ふにあらさらんは。いかにやさしき口つきなれはとてもとよりいやしき詞を。やさしくとりなさんはかたきをもてしるへし。頓阿法師の。源承法眼に。ねるやねりそといふことをとはれしに。さる哥よまむとするにやととかめられけるなとも。かたきをねかはんよりも。同しくはもとよりやさしき詞をよくつゝけたらんのやすきにはしかしとのおきてなめり。かのとしより朝臣。西行法師の哥の。たま〳〵せん集にみゆれはとて。これをもとめんとするはかり人の。おもひかけぬところに鳥をえて。とたちおほき所をすてゝ。猶かのまれなるかたにたかすへたらんかことく。いたつきおほくして。しかも心さしをえんことかたかるへし。又やさしき詞。今はよみふるしぬと思へるは。またしき人のくせなれと。頓阿法師なとの哥。十首に。七八首は。ふるき詞をなから過もちひて。めつらしきふしをよまれけるもすくなからす。おのか口のきかぬまゝに。このおきてをもとくともからありともかならすしたかふへからす。よみふるしたる詞にても。手たりに成ぬれはおのつからめつらしきつゝけからいかほともあるへし。但いやしき詞といふは

花のいろもあらはにめてはあためきぬいさくらやみに折てかさゝん

夏山の椎の葉ことにとりつきて耳のまもなくゆするせみかな

あかねさす青六月の日をいたみあふきの手風ぬるくもあるかな

夕くれはしつかふせやの蚊はしらにいとふけむりをたてそふるかな

かりあけぬむくらか下にかくせとも金のにしきの花はかくれす

大はらや田中のむらのうすこほり秋ははつともかりもりなせそ

はらひつむあかのをしきのふちならは何に霰の玉たまらまし

かゝる哥あまたあれと。こと〳〵くしるすにをよはす。ふるき詞といふは。日本紀。萬葉。神樂。催馬樂。代〻の撰集。三十六人集。菅家万葉。六帖。ふるき歌合。伊勢。空穂。大和。源氏。落くほ。榮花の物かたり。土左。蜻蛉。さ衣。更科日記。枕草紙なとの中にて見るへし。夫か中にもよきよからぬ詞あり。哥のゆゑをしらんためは。萬葉をみるへしと御抄にもしるしおかせ給ひ。御口傳にも。此詞をとりて哥えよまぬは無下なりとかゝせ給ふにつけて。みな人あふく所なれと。こと〳〵いへは。もとな。よしへやし。何つも。何けなく。けなかく。何ませ。すらく。けんかも。ほり。をしも。にもか。なといふ詞をこのみよめらん。我ひとりこそよしとも思ふらめと。今の人の耳にはからさへつりのやうにて。心にしみておかしとも聞えさるは。いとせんなかるへし。又うはたまをぬは玉とよみ。ますかゝみをまそかゝみといひ。花すゝきを旗すゝきとよみ。とにかくをかもか

くとよみ。日ことにを。日にけに。水さひを。みしふとよむたくひは。みなゆゑあることなれと。今にては。やすき詞を。むつかしくかへたるのみにてこそあれ。何のみところか有へき。かゝる事をせんとして。ちからをつくし。哥の心あさくなれるを。よからぬことゝはするなり。としより朝臣の。かも。こし。らし。へらなり。なとの詞すくれたる事あるにあらすはみたりによむへからすといへり。今はさしてもはゝからす。かなを。小点の詞とて。はゝかれるともから。大かたかもにかへてよめり。すこしかよふところありとはいへと。哉は中むかしよりおほくみえたり。かもは。上つ世もはらよみたる詞なれは。中頃よりこれをふるき詞としていとしもよまさりけるを。今さら。いやしき哥の中にたち入ること。かたはらいたきわさなり。それも。ふるめいたるすかたにつくりたてたる中によみ入たるは。けしうもあらねといやしくこまかなる中へよみいるゝ事。いとにけなし。すも。らし。こし。へらなりも。又同しかるへし。されと。なへてこれをすてよといふにはあらさるへし。近むかしよりのち。ふるき詞をとり入たる哥にては

壬家　我戀はしかのあま人やくしほのひとひもおちす立けふりかな　家

新古　花の色にあまきる霞立まよひ空さへにほふ山さくら哉　長

又名をとりて

新古　ゆく末は今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕むすはん　式子内親王

續千　散まかふもみちの色に山もとのあけのそほふね猶こかるらし　龜山院

長秋　世中のくるしき道はあはれひのちから車のはこふなりけり

此たくひかすしらすみゆ。それもうつくしかりぬへき詞を。やさしくしなして。よく心すかたにかなひたらんときは。なか〱おもむきをそふるひとつともなりなん。それもむかしよりいろ〱にとき。まち〱にことはられて。むねさたかならさるは。おのれひとりよく心えたりとて。人のいかなる事ともしらさるは。あちきなかるへけれは。みたりによむへからす。又俊成卿は。源氏見さらん哥よみはかなしとかゝせ給ひ。御抄には。哥の詞しらんためは。源氏にしかすとかゝせ給ふよりこのかた。哥よみとして。源氏をもてあそはさるはなしたゝし。中頃。近昔のあひたは。源氏さ衣の詞はかりをとりてよむ事はこれをはゝからす。心をとる事は。百首の哥にもせぬ事とす。これつくり物かたりなれはなり。詞をとるにつけてもあまりにいやしく。おそろしく。あまりにおいらかなる詞なとは。よくみしたゝめてとるへからすとす。又またしきほとに。万葉集みたるをりは。そのさまをうつし。源氏。狭衣よめる頃は。その詞のよまれ。あるは。その世にて名たかき人のおもしろくよめるをうらやみ。やかて。その中のめつらしき詞をとりてよむなと。さたまれる事

にて。みくるしきわさなり。又曾旦(ママ)。俊頼朝臣頼政卿西行法師。後京極攝政。京極黄門。寂蓮法師。吉水僧正なとは。みな左右なき手たりにて。くち心にかなひ。もみ〳〵とある。なをさりの人の及ふところにあらすといへとも。さる哥の。撰集に入れる事まれなるは。ま事にはよからさるゆへなり。かゝるうちの詞なとかならすまねひよむへからす。近むかしにても。いはゆる。露さひて。風ふけて。心のおく。あはれのそこ。月の有明。風の夕くれ。春の故郷。靑く。しろくといふつらの詞。はしめめつらしくよめる時こそはあれ。二度ともなれはねんもなきものなりといへり。又あけほのゝ春。夕くれの秋と。こと〳〵しくつゝけたりといへとも。たゝ心は秋の夕くれ。春の曙なり。詞をかへてあたらしくもめてたくもならんはよかめり。何のやくも見えさるは。おこかましくいま〳〵しきわさなりと。定家卿もの給へり。今の世にても。何すよ。何そよ。猶。えならぬ。夕はへなとの詞。しは〳〵みゆめり。中頃。ちかむかしにてかゝる事あらは。さてやはあるへき。かならす庶幾すへからすの詞のつらにそくはゝるへきを。さる事も聞えぬまゝに。ひたふるなるもいとうるさし。かの後久我相國通光公。なにやといふ詞をこのみよまれける。これはなかめのやとて。上つ世にては。上の五文字を。淡海。美作なと。四文字にもよみけるを。あふみのや。みまさかやとうたはんれうに。やの字をくはへたること。ふるきためしありて。いというに思(ママ)ふる詞なれは。

相國もこれにすき給ふなれと。さのみくせのやうになりけれは、これをたに。人のいひけるとかや。まいてやくなき詞をつね〳〵よめらんをや。さて。夫木抄は連哥のためあつめしものなれは。けしからぬ詞そこゝに見えたり。心してみるへし。藏玉抄。秘藏抄の詞。よからぬ事はさらにもいはす。はきを。しかなくさといひ。鹿を。萩か花つまとよむたくひ。かならすいましむるところなり。かくいろ〳〵によむへからすといふ中にも。やさしきもあるへし。又とるへしといふ中にも。古記。撰集日記物かたり家集哥合の中にも詞すくなからす。たゝ。貫之君の新撰。公任卿の金玉抄の哥を。すみなはにして。それ〳〵のことからをえらはは。あやまちなかるへしとはいへと。かつは又つゝけからにもよるなるへし。さて。心をえて詞にうつすに。よき詞なりとも。たやすく置へからす。上にあるを下になし。下を上にとりかへ。心にそゝろかぬをもとゝし。ことからをなかめ。ふるきにはふるく。新しきにはあたらしきをくさひ。つよくも。よはくも。みなひたむきにして。ふとみ。ほそみなく。なたらかならんことをもとめて。猶やすからすは。又ほかにやさしき詞をもとめて。聞よく。おもしろく。詠しもしたるに。面かけもたちそひ。えんにも。哀にも聞えぬへきをえらむへし。いにしへ。詞の上に詞をもとめよといへる。これなり。たゝ。一字二字のわろきも三十一字なからのけかれとはなれり。上手といふは。おなしことをきゝよくつゝけなせるなり。兼資の哥に。

月はしるやうき世の中のはかなさをとよめる。中の字なくもかなといへり。又頼政卿の。すみのほる月の光によこされてとよみ給ふ。光の字なくもあらはやといへり。かゝるあやまちは。やす〳〵といひなかすうちよりする事なり。よく〳〵心すへし。又一句のわろからん。よき詞ありてもせんなから（ママ）といへるは

我か身はとかへるたかとなりにけりとしはふれとも戀はわすれす

此初五文字なきにしかしとなり。又上の句はふるく下の句はあたらしきたくひは。えよまさる時のことなりこれをこしをれといふ。又ふるき五字を。七字になし（月やあらぬナ取テ月やあらぬとしたふ係ト）七字を。五字につゝめ（そをたにのちのチそをたにもあかぬ色かなト改爲）五七字を。七五字にかへ。七五字を。五七字にあらため。七字。又は。五字を。二句にかけてよむなとも。つねのことなれと。文字をはふける中に。ことわりをうしなひ。ことからをそこなふことあり。後撰に

竹ちかくよとこねはせし鶯のなくなるこゑ（ママ）きけは朝いせられぬ

とよめるを。ある人五月雨の哥に。こやのとこねとよめり。鴨長明のいへらく。もとの詞さへさしもおかしからさるを。猶よの字をはふける。かへす〳〵つたなしとそ。さてまた。哥にうけられぬは秀句なりとかや。これもおのつからよりきてよみ出せるはわろからねと。ゝかくたしなみてよめる

か。きはめて見くるしく。みさめせらるゝと。定家卿は。の給へり。源氏物かたりにも。ふたかたにいひもてゆけは玉くしけとあるを。いたくまつはれたりとかゝれたり。赤染右衛門の。津のくにのこやともとよめるを。いとめてたけれと。ひまこそなけれとまてかけたる。にくいけしたりといへるも。あまりにえんをたつねすこして。哥の心をむねとするをわすれ。つくりものとなれるか。ゆゝしきなるへし。猶くはしくは。五躰の條にのす。又三十一字より文字をあますことは。中ころの人哥のたけたかゝらむために。このみよまれける事なれと。あまさてもやすくありぬへきところに。わさ／＼あましたるはわろし。いかにもあまらてはかなふましき所に。あまりたるは。聞にくからすと。爲家卿の給へり。その後は。秀逸のときはよむへし。さならてあまさんはよからすと。さためらる。今はたゝ。口にとゝこほらさるははゝからす。これらみな。古のみちにそむけり。その故は。詞四具の末。ひきあひの條に。載たれは。こゝにいはす。又こと葉は。やさしくえんなるをよしとするにつけて。あまりにやさはみてたよ／＼とむすほゝれ行こともみくるしかるへし。これも。五則につまひらかなり。初の五文字をのちにかくことは。二條家のならひにて。黄門もはらこれを用ひ給へり。これは。上の句よりよみくたるほとに。すゑよはになるものなれは。下の七ゝの句をまつ思ひしたゝめてのち。第二句よりよみて。をはりに初五文字を。もと末にかなふやうにおかんため

とかや。黄門ある所にて。哥よみ出されけるに。初五文字。上つまりて注付たらんやうにかゝせ給ひけるを。人〻いかにとあやしみけるに。これは。人のめはなのよきにむかふかことく。これによりて。哥のはへも。ゆらめきも聞ゆとの給ひけるとそ。此ことわりなきにしもあらねと。いつれの句も。この五文字をおく心にてこそよまゝほしけれ。ひとゝころにひち入たるはいと見くるしかるへく。又古哥の五文字をおかす時は。披講の時。みゝたちてわろしとす。されと。哥合の外ははゝかる事なきにや。古人にもおかせる哥すくなからす。又下句のよはきをしりひなる哥とてこれをきらふ

　あめつちのわきてそれとはなけれとも先みせそむる春の色かな

　さと遠き山田の稲葉みわたせは雲にしかなく聲そ聞ゆる

尾されに聞ゆる哥とは。（下句つまりたるをいふ）あけのそほふねこきめくるかな。羅のうちに吹たむるかな。ともに。よからぬことからとす。半臂の句といふは。いはゆる。中の五文字にかふり詞をおくにて。月といはんとて。久かたと置。山といはんとて。足曳とかふむらしむるはつねの事にて。させる事なけれと。こしの句。よくつゝけて。詞のやすめにおきたるは。いみしう哥の品と成ぬへきを。はんひの句といふ。半臂は。させる用なけれと。よそひの中にかさりとする物なり。哥の三十一字。いく程もなき内に。思ふことといひきはめんには。むなしき詞をは。一もし成とも。ますへくもあらね

と、此はんひの句は、かならすしなとなりて、すかたをかさる物にて、うるはしくなりぬれは、又おのつから心もいうに聞ゆへし。俊恵法師。ある時。鴨長明に

たらちねはかゝれとてしもむは玉の我くろかみはなてすや有劔

此哥の中にて。いつれの詞か。ことにすくれたるやととはれしに。かゝれとてしもといひて。むは玉のとやすめたる。ことに。めてたけれとこたへられけれは。しかなり。はやく。哥のさかひにいられにけり。よく此哥を案してみ給へ。はんひの句も。せんはつゝけからの事にて。まなこはたゝ。とてしもといふ四文字なりといはれけるとかや。さて又。詞はふるきをよしとすれと。つゝけからよからねは。あたら事になるへし。古今に。春かすみたてるやいつこみよしのゝといふ哥。めてたき中にも。たてるやといふことは。すくれていうに聞ゆるを。ある人

神垣にたてるや菊の枝たはみたか手向ける花のしらゆふ

とよめる。詞きかす。手つゝなりといへり。又同集に。心さしふかくそめてし折けれはとも、花のことよのつねならはすくしてしとも。うたゝねに戀しき人を見てしよりともある。いつれもやさしく聞ゆるを。長明の

時雨にはつれなく見てし松の色をふりかへてけり今朝の初雪

とよめるを。俊恵法師難して。たゝつれなく見えしといふへきなり。あまりわか（ママ）せるほとに。かへりてみゝにおとろしとはいへり。すてに。つれなくとうかまゝ。忠岑の。有明の哥の名たかきまゝに。やかて。みえしと一たひはよりきたりぬらんを。あまりにさいくみ。とかくする中に。心ほれ〳〵しくなりて。それにも心とまらて。よみあやまれるなるへし。かの季經卿の

　　としをへてかへしもやらぬ小山田に種まく人もあらしとそおもふ

とよめるを。としへて後

　　しつのおかかへしもやらぬ小山田にさのみはいかゝたねをまくへき

となをされけれは。いみしうけおとりぬとかや。これらみな。かろくいひなかすへきを。いたくあんしすくせるにより。かへりて。まれ〳〵物めかしきところさへうしなへるなり。かの糸をよるに。いたく。けか（ママ）らによらむと。よりすこしつれは。ふしとなるかことし。かるかゆゑに。御抄に。もとより詞には。よきも。わろきもなし。つゝけからなりとかゝせ給へり。又かの哥にては。しか〳〵の詞も。此哥にてはさ聞えさるあり。古今集に。紀友則の。友まとはせる千鳥なくなりとよめる。いうに聞ゆるを。同戀の中に。戀しきにわひてたましゐまとひなはとも。身のまとふたにしられさるらんともよめる。おひたゝしく聞ゆ。又近むかしにて。あまりおしさにといひ。わきかへりぬる

心ちこそすれとよめるを。いとおひらかなりといへり。されと壬生二品は。あまりかなしきとしのくれかなとよみ。俊頼朝臣は。わきかへりてもぬるゝ袖かなとよみ給へり。これつゝけからにて。詞のおもむきをことにするなり。しかれは。いにしへよき詞なりとも。あなかちにもてはやすへからす。とりいれてはかく\しからぬは。せんなきわさなり。たゝ心にそゝろかぬを。たい\しき事にして。詞をえらみ。一わたりは。まつその心にかけあはんことをもとめて。猶は。おもむきのそはんことをねかふへし。源頼実の

ひもくれぬ人もかへりぬ山さとはみねのあらしの音はかりして

とよめるを。俊頼朝臣の

口くるれはあふ人もなしまさきちるみねの嵐のをとはかりして

とよめる。上手のしわさにて。すこしいう\と聞ゆ。はしめの哥も。よき哥とてこそ。後拾遺には入られけめと。まさきのかつらは。心ひくかたにはへると。むかしよりいへり。又清輔朝臣の

あふとみて現のかひはなけれともはかなき夢そ命なりけり

此哥を俊頼朝臣の。むくの葉みかきして。はなあふらひける哥なり。よのつねの哥よみならは。はかなきゆめそうれしかりけるとよまゝし。たかかくはよまんとほめられけるとそ。又風情を思えぬ

時は。詞にてむねをつくりたつるやうあり。これを故実躰といふとかや

風の音に炑の夜ふかくねさめして見はてぬ夢の名殘をそ思ふ

此哥は。風情さしもなけれと。詞つゝきにほひふかくいひなかし。よろしく聞ゆとなり

九　我妻をかたまつよひの炑かせは荻の上葉をよきてふかなむ　俊惠法師

かり人のあさふむのへの草わかみかくろへかねて雉子鳴らん

これは。詞のわりなきをとりて。おかしくなせるなり

はりまなるしかまにそむるあなかちに人を戀しとおもふ頃かな

忍ひくさ葉末にむすふ白露のたま／＼きては手にもたまらす　俊頼朝臣

これは。きよからぬ詞を。おもしろくつゝけなせるわさともおかし

七　あさてほすあまつをとめのかやむしろしき忍ひてもすくすころ哉　同

八　芦のやのしつはた帶のかたむすひ心やすくもうちとくるかな　同

いまははやあまのとわたる月の舟又むら雲と嶋かくれ（マヽ）

これは。秀句ならねとたゝ詞つかひのおかしきによりて。よく聞ゆるなりされと。道にはそむけることなるへし。つねにこれをことゝし。詞をのみいたはる時は。むねこれにひかれてたしかならさ

るは。詞うるはしきも。つや〳〵詮なきわさなり。たゝ詞よからすとも。公任卿のおきてはしかなり(ママ)を。詠哥大概に。詞を先にせよとあるをもて。詞の花をかさり。心の実をおろかにする人あり。もとをわするといふへし。かの詞を先にせよとは。心たしかなるも。それにかけあふ詞なきは。よき哥といひかたきをもてしかの給ふ也。されは。清輔朝臣は。心詞は鳥の左右のつはさのことしとの給へり。此ふたつのゝりは。哥の巧拙をしらしむるため。かくいろ〳〵にしてさとし給ふなれと。哥の本意とする所は。心をもとゝし。詞を末とすへきなり

**五則** 爲家卿は。姿はゆう〳〵とよみなかしつへき哥に。物をいくらもいはんとすれは。そこゝひちいりてわろし。すへて。すこしさひしきやうなるはおもしろくよき哥に聞ゆ。詞すくなくいひけれと。心ふかけれは。おほくの事も。そのうちに聞えてよきなりとも。又なたらかにいひくたしきよけなるは。姿のよきなりともの給へり。これをいはゆる十躰の中にてたけたかきすかたと名つけ四条納言。俊頼朝臣なとの。ことにねかはれたるところにして。むかしより。すくれたる哥。大かた此すかたをさしはさめり。しかれとも。たやすくよまんことかたけれは。いろ〳〵にまはしてよめる。みなまほなるすちにあらす。またしき人は。むつかしき心を。いひたきまゝにいひ。おそ

ろしきことはをえんにとりなしたるをみるに。およふへくもあらねは。やかてよき哥とし。あるは。やすくとふりぬへき中のみちをよきて。あなたこなたにつたひて。くた〳〵しきさま。あるは。こと〳〵しくはねたるすかたなとを。うつさんとする。まことに。しこめのひそみにならへるかことし。かのおにひしくとかいへるも。かくよめる中よりいつる姿なり。京極黄門の。此すかたまたしきほとは。たやすくまねひおほせかたし。それも功いりてのちは。なとかよまれさらん。さりとて此すかたの。ほかのすかたよりすくれたるにてはなく。たゝはしめよみかたきにて侍るとの給へり。けにいにしへの名高き哥に。かくむつかしきはいとまれらなり。しかれは。よき哥よまんとする人は。このむへき姿ならす。又俊恵法師の。哥はをさなかれといひ。定家卿のやさしくよめとの給ひけるにつけて。ひたやさしきをのみたしなみ。すかたくたけたるもかへりみさるともからあり。かのをさなかれといへるも。やさしくよめとの給も。ともにしたゝかならすよむへしとののりにて。姿詞たよはきをよしとの給ふにあらさるは。同卿の。哥は兼宗大納言の束帯にて。陣の座につきておほやけのことをこなひたらんやうによむへし。資雅三位か。水干かりやうにて。小鷹すへていてたるさまにはよむへからすとの給ひけるにても。新勅撰えらみ給ふも。新古今の花にすきてよは〳〵しきをあらため給ふといふにても。近来風躰に。心つよくたゝしくすくにしてやす〳〵とつゝくへ

しとのせ給ふにても。うたかひなし。これいはゆる。たけたかく病なきすかたなり。おほよそ。いにしへより。姿をわかてるさま〳〵なりといへともこれにすきたるはなし。これをたにえたらんには。ほかはいとたやすくよまれぬへし。又よみはつれたる中に。ほかのすかたは。おのれといてくへけれは。さらにまなひすともありなむ。さて今の人の姿くたけたりといふは。心のつゝかぬをのみそれと心うれと。ことからのおろそかにして。こち〳〵しく聞にくきをもいへり

　夕くれに難波の浦をなかむれは霞にうかむおきのつりふね

此哥ゆうなれと。夕くれに難波の浦といふ句つゝき。くたけたりとす

　冬くれは山もあらはに木のはふりのこる松さへみねにさひしき

此哥すこしくたけたりといへり。たゝし。上下ともにすなをなるをよしとす。上の句すくにして。下句くたけ。下句すくにして。上の句くたけたるをそのつきとす。上下ともにくたけたるを。又そのつきとす。これによき哥なし。これらをみて。姿をしらへ（ママ）し。そも〳〵むかしより哥の品をさたむる。すかたによれることおほし。上つ世はいはす中むかしにて。在原中將。文屋康秀。喜撰法師。大伴黒主。みな此みちのひちりとする中にも。花山僧正。ひとりすかたをえたりとし。定家卿も。古今集作者の中にては。僧正ことにすくれたりとの給ひ。延喜の御時にては。古今の撰者。深養父。

友則忠岑。元方。興風。みなありかたき人ゝなれと。みつね。貫之をさらにたくひなしとし花山院の御時にては。梨壺の五人すくれたりといへと。兼盛。よし宣。重之は世にかたきなしといへり。一条院の御時は。公任。經信兩卿。立ならひたる上手なれと。さしむかひては經信その右にいつとかや。堀川院の御宇には。匡房。顯季。信実。みな秀たる哥よみなれと。俊頼朝臣はひきこしすくれたりといふ。土御門院の御時は。賴政。俊恵法師。基俊。清輔朝臣もあれと。西行法師は。中頃の末。みちのおとろへたるをよみなほせるひちりともいひ。又定家卿は。西行の所講。日本第一也とも。又父卿（俊成なり）十の一にも及はすともいへり。しかれは。三品はまことにひちりなりとの給なるへし。後鳥羽院の御頃にては。後京極攝政。秀家。雅經。寂蓮法師。みな上手なれと。定家。家隆の二卿。殊にひいてたりとする中にも。二品はたれにもまされりといふ。これらも哥の姿にて品をわかてるなり。又撰集にて。三代集をすくれたりといふ中にも。古今は花實そなはりてめてたき集とす。後撰はよき哥古今にとりつくされてのち。いくはくもへされは。哥えかたくて。姿をえらむことなく。たゝ心をさきとせり。拾遺は。すかたことの外物ちかくなりて。たちろくところありといふ。後拾遺は。今すこしやはらきて。むかしのすかたをわすれたりとて。その比のふるき人なとは。うけさりけるにより。經信卿。わたくしに後拾遺抄をえらまれけるとそ。かの清小納言の枕草紙には。

三代集の次に。此抄をいたして。本集をのそかれたるも。その比の人〻此抄をのみもてあそへる證とすへし詞花金葉は。ひようかひなる哥おほしといひ。千載は。大かた。後拾遺のすかたに〻てほの〳〵近むかしのはしをあらはせり。新古今は。あまりに花にすきて。たよはしとす。その比のふるき人。此すかたを達摩宗といへるとかや。新勅撰は。これをあらため。花実そなはれりといへと。猶大かた。新古今に同しうして。いにしへの姿にあらす。續後撰は。（千載新勅撰此集を合て二條家の三代集といへり）後拾遺のおもかけなりをまなへり。たゝ風雅玉葉のふたつは。異躰にして。よからすとす。これ。それ〳〵の集ことの姿の。大かたをいふにてくはしくいはんにはそのよしとする集にもよからぬもあるへし。又わろしといふ中にもすくれたるさまもましるへし。かの後拾遺は。みたりに人の哥をあらため。又たま〳〵わろき哥もとりいれられたれは。よからぬよし。その比の人はいはれけれと。又よき哥もあまたあれは。清輔朝臣は。この集をことによしといひ置れたり。さては。いつれの集をもすつへからすとはいへと。まつ哥のすかたにては。三代集より。千載集までにしくはなし。これは。爲重卿の。俊成卿よりはしめつかたの哥こそ本ゐにてあれ。近來のさまはくたれりとの給ひ。又頓阿法師の。何としてむかしの上手の哥は。今の堪能にもまさるへしといへるは。續後撰よりまへを〻しなへていへる詞なから。新古今。新勅撰の。いにしへのさまにことなることははしめにもいへるか

ことく。又詠哥一躰の中にも。新古今はかりおもしろき集はなしといへと。またしき人にはよからす。心えたらん人のみるにはいかゝあしかるへきともあれは。いま千載までのすかたをよしとはさたむるなり。しかのみならす。のちの集は。此文のはしめにもあくることく。文字あまり。またはかんなのみたりかはしきにても。よからさるをしるへし。としより朝臣は。又なき上手にて。うるはしくたけあるやうにもことにおほくみゆ。又もみ〳〵と。人のえよみはてぬ(ママ)句等もあり。これなむ。定家卿のまねひ給ひける所なりけりとそ。すへて。此卿。さへのすくれたる。さしもいみしかりし父の卿の哥をたにも。あさ〳〵と思ひ給ひけるうへは。まいて。なへての人をや。やさしくもみ〳〵とあるやうにみゆる。ま事にありかたく。哥のことしれるも。よみ口のこゝろに任たるも王生二品なとのたちならふへきにあらす。大よそ。此卿。二品。一生のあひた。すかたさきに似す。のちに似す。すかたいひしらすめつらかにして。はねたるふし〳〵の。思ひかけすそゝめきたるをすゝみものし給。これ後拾遺すかたのふりたるをよみこうして。あらためられたるにより。人々詞のたくみなるをむねといとみあひ給ふ。されと。二品の哥を。人のもてはやしけるは。猶すかたのなたらかなるをよしとせしをみるにたれり。又後京極摂政も。ことによしあるさまなれと。あまりに地哥のすくなかりしを。かへりて難といひ。寂蓮法師。雅經卿。女房にては。宮内卿。みな。な

をさりの哥よみならねと。あまりにいたくねり〳〵たきしほとにたけたかゝらさりしを。あかぬ事にはいひけるも。すかたことなる中にも。すなをなるをよしとすれはなり。爲家卿にいたりて。はたして中比のすかたにたちかへり。近むかしの名こりすくなくなりにたり。常盤ゐ井相國。頓阿にはかりて。此おきてをとりたて給ひけるより。後伏見院。萩原院の御時。しはらくけしきあるをよろこひ。姿。詞をいたはらすよめるといへと。いくほともなくやみぬ。此ほかは。みな中比のすかたにかはる事なし。今の世にいたりて。人丸。定家卿。家隆卿の哥。かはる事なしといへり。こは何のみる所ありて。かくはいふらん。二三の則にのすることく。心はへ。ことから。すかたのみつはかはれり。たゝ三十一字はかりそ同しかるへきを。しゐて同しとする。ま事にあめつちのわかれもしらすといふへし。さる人の猶いへらく。むかしのことくする〳〵とよまんことかたし。今はこまかなる哥を本とし。逍遥院。三光院の御哥なとをみるへしといへり。このおきてのもとつく所をはかるに。今の哥よみ。大かた銅駝坊のなかれをくむによれり。すへて京極黄門の。人をみちひき給ひける詞は。大かた三品よりつたはれる御おきて。又はふるき世ののりにして。つゆまかれる事なし。たゝし哥のすかたにいたりては。時のこのみまぬかれかたく。詞をむねとはたらかせて。これなむ。花山僧正。在原中將。素性法師。小町か後たえたる哥のさまなりと。ことよくの給ふのみそ。すこしうけ

られす。爲家卿。ひそかにこれをさとりて。よみかへ給ふとはいへと。そのことわり。さたかにもの給ひ置さるは。父卿の御うへにあつかるをもて。やんことなくおほめき給ふにことつけて。たとりなきともから。猶ちかむかしのこまかにして。たくみなるを。いにしへのすかたなりとも。又むかしの哥は。時代あかりて。今の事にはかなひかたしともいへり。けにさることわりなきにあらねと。ちかき代にても。基俊朝臣。俊頼朝臣。俊成卿なとは。ふるき姿をこのみ給ひ。上下の聞えあり。しかれは猶ねかふへきは。ふるきすかたにこそあめれ。此比の哥とて。詞はかりかさりて。させる事なきなり。哥はなかめて。しめ〳〵ときこゆるをよしとす。哥をみて。すかたことからをみんには。ふるき哥をよみくらへてみるへし。いかにもけあかりあきらかに聞ゆるはよきなりと。爲家卿もの給へり。此御おきてにても。又中むかしよりのち。名たかき哥のまれなるにても。をとつ世ののちのすかた。よからぬ事を見るにたれり。しかのみならす。すかたのよきよからぬをいへるには。ことわりさらによりところあり。かの哥の字をうたとよむは物にしていふ詞なり。うたよみすとよみ。うたふとよむは。ともにわさをいふことはなり。いにしへは。ふるくあたらしきをいはす。哥といへは。みなうとふ（ママ）ことにて有けり。神代にしては。いはとのまへにて。あまのうすめの命。わさふき（ママ）してうたひ。又日の御神。いは戸よりいてませしとき。もろ〳〵の神たちのあはれあ

なおもしろとうたひ給ひけるよりみえて。人の世にては。神武のみかと。猾(うけし)にかちて。うたのたか(ママ)ちにとうたはせ給ふをはしめにして。おほやけにも。わたくしにももてはやし。うたひひろこれることは。もろ〳〵の古記。にも撰集にもちりほひてみえたり。又神樂催馬樂なとをうたひし事は。つねのことにそありける。やう〳〵中比の末までも。大山の別當の。つくしにてよめる時鳥の哥を。京にのほるとて山さきをすくるに。うすひくものゝうたひ。かゝみのくゝつ。ふけ殿にまいりて。俊頼朝臣の。我身にそへる影といふ哥をうたひけるか。永縁僧正これをうらやみて。琵琶法師に物とらせなとして。我よめる。いつもはつねのこゝちこそすれと云哥を。こゝかしこにてうたはせ。又敦頼入道の。めくらともに。うたへ〳〵とせめけるも。同しすき心のくろさなりけりとそ。又俊恵法師。その比の。哥披講のさまをいへる。たかく詠するよきことゝて。くひすち。すちをいらかし。聲をよりあけたりとみゆ。かくよゝにうたふことをむねとして。姿詞をえらめるも。声のあやにつきて。哥のえむにも哀にも聞ゆれは也されは俊成卿も。哥はこゑにつきて。よくもわろくも聞ゆとの給へるも。其比すてに。うたふことまれにして。哥よみのこれをわすれむとするをもて。しかの給へるなるへし。されとも。又とりたてゝいふ人もなかりしを。頓阿の井蛙抄に。此御詞をのせられけるは。これに心のつきけるにやありけむ。近比のひときは。姿詞さきに似す。なたらかに

なりたれと。まことにうたふこともなけれは。又程なくうつろひぬ。神樂催馬樂には。うたふへき譜ののこりたる。かた〳〵につたはり。歌垣の中にも。かたはらこれをつかさとれるもあれと。又世にもちゐらるゝこともなく。たゝやむことなき哥の御會には。今も披講の御けしきのこれると。出雲のかみのお祭には。あけのけころもといふ哥を。ゝりかへしうとふとはかりそ。いにしへのなこり也ける。これらの外には。またくあとをけつれる世なれは。人たゝ文字のうへにして。哥のよきわろきをさためて。声につきてこれをいはされは。あるは姿詞のさいくみこまかなるを。たくみなりとし。あるは耳遠くおそろしきを。とほしろしとおもへり。これものゝふのこともしらて。いくさのかちまけを。ふみの上にしてとけるよりも。うは〳〵しくしるしなきことになむ。大よそ。哥の詞すくなきをよしと。俊成卿定家卿のの給ひけるも。なたらかにいひくたし。きよけならむことをもとむるにて。すなはち文字すくなゝるは。うたひもしたるに。いうに聞ゆるゆゑ也。されはとて。姿のみをいたはり。心さもなきも。いとわろかるへし。御口傳に。黄門の。秋とたに吹あへぬかせに色かはる生田のもりの露の下くさといふ哥。最勝四天王院の。名所の障子の哥に入すとて。所〻にしてあさけり給ふとそ。秋とたにと打いつるより。吹あへぬ風に色かはるとつゝけ。露の下艸とおけることは。上下よくかなひたれと。此哥よく〳〵みるへし。詞のやさしくえむなる外は。

面かけもいたくはなさなり、森の下に。すこしかれたる草のあるはかりにて、けしきもことわりもなけれとも。いひなかしたることからのいみしきなりとそ。これこそ貫之君の。あき人のよきゝぬきたりとの給へるも。これらのことなるへし。さて俊成卿は。世ゝのおきてをよくまほり。姿いひしらす。なたらかによみ給へと。そゝろなる趣は。すこしともしかりき。定家卿もさるをしへにしたかひたまふによりて。風情すくなく侍るにや。又西行法師は。そゝろなる風情を。ふつ〳〵とよみなかしたるさま。いにしへの人の口つきに似たりといへと。姿詞なとそ。たゝしからさるところほの〳〵みゆめる。吉水僧正。此すかたをねかひたまふ故にや。そゝろきたる姿多し。むかしより師にひきこしたらむと思ふに。多くは劣りさまに成やすしといへり。まいてつたなきを師とせむは。いかにつたなかるへき。されは。師はよきかうへにもよきをえらむへき也今はすくれたる人もかたき世なれは。たゝ中むかしの人ゝを師として。かりにも今のいやしきさまをまねふへからす。たゝ詞は。もしすくなにしてえむなるか。又きよらなるを。つよくくさりて。姿のすなほにして。なたらかならむことをもとむへし。姿かくたにあらは。此のりをもとける輩も。よもこれをすてし。さはよしとする所にいたりては。古今ともに同しけれは也。たゝし初の五もしにて打合たる哥。今の世に多くみゆれと。あまりこのまさる姿なり。さるは古今集をみるに。小野篁參議の。思ひきやひ

なのわかれにおとろへて蚤のなはたきいさりせむとは。とよめるのみそある。思ひきやといふは。もとよりはしめにいひいたすへきほとの詞にして。ひなの別といふより。いさりせむとはといひすてたる心の。おのれと上にかへりていうに聞ゆる也。もし下にいひいたしたる詞と。上にうちあひたる詞と。かけあはさる時は。上の句くたけて聞ゆへし。されは此姿のよみかたきをもて。いにしへにまれなるなるへし。今の人は。たゝ姿のよきわろきをしらねは。とにもかくにもいひはてむことをのみはかりて。下のなたらかなるは。上もなたらかに。ふときはふとく。いうなるはいうにいひつむることをしらす。たゝ下のあまり猶多きを。上にてわりなくことをつゝめていひつむるゆゑに。ひちいりて聞ゆる哥多し。いとみくるしきわさなり。これは四則にいへる。初の五もしにちからをいれすくすよりのあやまちなるへし

八　あけはまたこゆへき山のみねなれやそらゆく月の末のしら雲　　家隆

九　明わたるくものほしの光まて山のはさむしみねのしらゆき　　同

此卿の哥は。下句つよしといへり。又

七　おもひくまなくてもとしのへぬる哉物いひかはせ秋のよのつき　　俊頼

一　春かすみかすみていにしかりかねの今そなくなるあき霧のうへに

此哥のすかたなたらかなりといへり。これらの下にてしるへし

淺みとりいとよりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か

はちすはのにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく

名にめてゝをれるはかりそをみなへしわれ落にきと人にかたるな

よそにみてかへらむ人にふちのはなはひまつはれよ枝はをるとも

里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきもあきの野らなる

わひ人のわきてたちよるこのもとはたのむかけなくもみち散けり

ちはやふる神のきりけむつくからに千とせのさかもこえぬへら也

夕くれのまかきは山とみえなゝむよるはこえしとやとりとるへく

わかやとはみちもなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに

今こむといひてわかれしあしたよりおもひくらしのねをのみそ鳴

已上同　みなひとは花の衣になりぬ也こけのたもとよかはきたにせよ

これは花山僧正の哥なり。貫之君の。すかたをえたりとする所なり。これらをみて。すかたのよきをしるへし　集中猶多し

六則　かせふけは沖つしら波たつた山よはにや君かひとりゆくらむ（ママ）と云哥。貫之か哥の中の本体とすへしとの給ひ。又つの國のなからのはしもつくる也。今はわか身を何にたとへむと云哥を。伊勢の御か。中務の君に。かやうに哥はよめとをしへ。戀せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそなりにけらしもといふを。深養父か。元輔に。かやうによむへしといひ。その外

よの中をなにゝたとへむ朝ほらけ漕ゆく舟のあとのしら波　曼沙弥

あまのはらふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも　仲麿

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとのみにして　業平

おもひかねいもかりゆけは冬のよの河かせさむみ千とりなくなり　貫之

我やとの花みかてらにくる人はちりなむのちそ戀しかるへき　躬恒

かそふれはわか身につもるとし月を送りむかふと何いそくらむ　兼盛

これら皆。むかしより人ゝの名哥といへる所にて。近き世までも本としたる哥ともなるか。みな詞かすかに。はしめをはりたしかならさる所もあり。心あまりありて。詞たらさる所もあるをもておもへは。貫之も業平の哥を。しほめる花の色なくて。にほひのこれるとの給へるも。古撰の哥を。

秋月の曉の雲にあへるにたとへられけるも。わろしとの給へるにはあらす。風情のふかくおもしろきをいへるなるへし。五條三品の。大かたことの理をいひきらされとも。もとより詠哥と云て。たゝよみあけたるにも。打詠たるにも。何となく。艶にも幽玄にも聞ゆる事のあるへしとのたまへる。喜撰の。詞かすかに。はしめをはりたしかならすと云に似たり。又忠岑の十体の中にも。有心体といへる所。みなこれにひとしく。四条大納言の。九品の上〻。上中にも。心ふかく共。あまりの心さへあるとも有て。俊頼君も。心あるをいひ。京極黄門も。よき哥ことに。心ふかきを申。有心体に過て。哥の本意となせる姿は侍らす。きはめて思ひえかたう候。とさまかうさまにては。つや〳〵つゝけらるへからす。よく〳〵心をすまして。其一境に入ふしてこそ。まれにもよまるゝ事侍れなとあるをみれは。うたかふへくもあらす。此のりにあはさる名哥もなし。されは中昔より近き世まて。名たかき作者の。もはらねかはれたる所なれは。たれもあふくへきことなるに。今の世になりて。此のりをとなふる人のなきは。よみかなふへくもあらねは。おもひすつるにや。爲家卿は。ちゝ君の哥。ことにすくれたれと。世の末。みちにふかゝらぬうまことなとの。みたりにえらまむに。あしかるへき哥おほし。わかよめるはおろかなれと。さるあやまちあるましきをよみおけりとの給ひ。爲世卿は。俊成卿は幽玄にして及ひかたく。定家卿はむねふかくしてまねひかたし。たゝ爲家卿の

姿こそねかふへけれとの給ふより。心あさ〳〵として幽玄ならさるを。二条家のをしへなりとも。貫之ののり也ともいへり。これは古今集の序に。在原中將。喜撰法師の哥の趣をとけるを。よからすとの給ふやうに心え。かつ貫之君の。心くまなく。すかたなほ〳〵しき哥多かるをみて。かくさためおかれけるにや。しかれとも。貫之君の古今集におけるは。猶定家卿の新古今に同しく。むねとえらみ給ふとはいへと。人〻のこのみにひかれたまふことも有へし。序とてもしかなり。さるを。貫之君ひとりの心さしよりなれるといふへきやは。又私に新撰をえらみ給へるに。古今集の哥。わつかに三百餘首をいれられけるにても。又。風ふけは沖つしら波の哥を。のりとせよとの給ふにても。又みつから。思ひかね。むすふ手のなとの哥のあるをあはせてみる時は。心あまり有と。幽玄の趣とをすて給はさるに疑なし。又為世卿も。よからぬとのたまふにはあらす。たゝまたしき人のまねひかたしとの給ふを。やかてたえてよからすといひなすこと。いとわりなし。此おきてはしまれるより此かた。餘情幽玄をとなふる人なし。さはよみかなふへくもあらすとして。おもひすつるなるへけれは。今の哥の。昔に劣れるもことわりとこそおほゆれ。哥つくらむ人はさても有ぬへし。哥よまむ人の。此のりをわするゝは。鳥のつはさをうしなふか如く。鳥ならさるにはあらねと。其わさはえもなさむや。いはゆる心ありとは。心あまりありと云に同しく。詞いひきらさる中に。かく

れたる旨をさして心と云也。頓阿法師云。風雲草木の感につけても。又世間の盛衰につけても思ひ入たる。心あるとは申也。故戸部申されしは。貫之か。櫻ちるこのした風の哥。風情おもしろくめてたけれとも。是をは心ある哥とは申さす。遍昭かむは玉のわか黒髪の哥を。心あるの本とは申されきと也。又餘情といへるもこれなるへし

わかやとの花みかてらにくる人は散なむ後そ戀しかるへき　躬恒

今こむといひしはかりに長月のあり明の月をまち出つるかな　素性

これは忠岑の十躰にいふ。餘情躰なり

おもひかねいもかりゆけは冬のよの川かせさむみ千鳥なく也　貫之

音羽河せきいれておとす瀧つせに人の心のみえもする哉　伊勢

わたのはら八十嶌かけてこき出ぬと人には告よあまのつり舟　小野篁

これは道濟の十躰の中にいふ。餘情の姿をいへり。いにしへはせちに思ひいれたる心の。詞の外にあまりあるを云。今はふかくあはれなることならさるも。いひのこしたる心あるをいへり。いはゝ詞のたくみにて心をいひつくさすして。しかもそれと聞えさするなり

五百番哥合　秋あさき日かけに夏はのこれともくるゝまかきは荻のうはかせ　信之

千五百番哥合　しくれには色もかはらぬたかさこのをのへの枩に秋かせそ吹　　有家

此二首。餘情ありと判せられたる哥なり

ふりそむるけさたに人のまたれつるみ山のさとの雪の夕くれ　　寂蓮

いかにせむこぬよあまたの郭公またしと思へはむら雨のそら　　家隆

これらも同しかるへし。かの黄門の哥を心ふかしといへるは

かへるさの物とやひとのなかむらんまつよなからのあり明の月

これ又皆おなしかるへし。但爲世卿の。定家卿の哥を心ふかしとの給へるは。又これにことなり。人のえもいひはてぬむねむつかしきを。もみ／＼とよめる。うちつけに何ともたとりかたきをもて。心ふかしといへり

わすれなむまつとなつけそなか／＼にいなはの山のみねの秋かせ

しらきくのちらぬはのこる色かほに春は風をもうらみつる哉

これらは心あまりありとはいふへからす。さて幽玄の詞は。古曾部入道のみいたしたる趣にて。姿の外に。けしきのうかひてみゆるを云。俊恵法師の。よき哥はおり物のうき紋のことく。景氣の。外にうかひてみゆる也ともいひ。又五尺のあやめに水かけたらむかことし共いへり。俊成卿は。詠し

もしたるに。えむにも幽玄にもきこゆる事のありて。景氣のうかひたることのあるをいふとの給へり。これら皆能因法師の幽玄にひとしく。いはゆる心あまりあるといふのなこりなるへし。古もかゝる哥多しといへとも。中比より末のよき哥といふ。皆此趣をさしはさめり。すなはち詩の作法に。含蓄といひ。唐の王摩詰か。詩中有レ画なといふもこれに同しかるへし。鴨長明のいへらく。幽玄は詞にあらはれ。姿にみえぬ景氣なるへし。心にも詞にも。えむきはまりぬれは。これらの徳おのつからそなはるとそ。たとへは秋の夕くれのけしきは。色もなくこゑもなし。いつくにいかなるゆゑあるへしともおほえねと。すゝろになみたのこほるゝかことし。又よき女の。うらめしき事あれと。詞にはあらはさす。ふかくしのひたるけしきを。さよなと。ほの〳〵みつけたるは。ことはをつくしてうらみ。袖をしほりてみせむよりも。心くるしう。哀もふかゝるへきかことし。又をさなきものゝかたことしたる。それとも聞えぬを。いとをしく聞ところあるに似たり。一ことはにおほくの理をこめ。あらはさすしてふかきこゝろさしをつくし。いやしきをかりていうなるをあらはし。おろかなるやうにて。たえなることわりをきはむれはこそ。心も及はす。詞もたえぬ時。これにて思ひをのへ。わつかに三十一字か中に。あめつちをうこかす徳をそなへ。鬼神をなこむるわさにて侍れといへり。此詞よく幽玄の趣をさとし。かつ心あまりあるといへるにも。かよひてしるへきをしへ

なり。今の人哥をよむを。せうそこなとをかくやうに心え。くた〳〵しくいひあらはす。かゐかゆゑに心もかろ〳〵しく。詞もさいくみ。姿もいやしくなるなり。はしめの則にいへるかことく。哥はこゝろさしをのふるをもとゝし。かつうたふを詮とする物なれは。何こともひきかくして。たゝ心さしをのみ。ほの〳〵とあらはすへし。夫もろこしのかみ聖とする。くしなとの道をゝしふる。あるは無違。あるは克色。あるは思無邪なと。むねふかきことを。ことすくなにいひなしたる。むねとほしろく。よろつのことにもかなひて。いよ〳〵たうとく。又台宗に。開證禪師の。文字法師をきらへるも。同し心もちゐる也。つねの物いひさへ。ことすくなゝるは。心ふかうなつかしく聞ゆるを。まして哥はうたふ物なれは。消息なとやうに。なこりなくいひはつへけむや。いひきらすして。しかもことわりたしかなるやうにこそあらまほしけれ。たゝしえいはさるにはあらさるへし。むかしは。我身ひとつはもとの身にしてと云も。今ならは。もとの身そかし。又はもとの身なるをなといひきるへし。又。世をうち山と人はいふなりとよめるも。今ならは。人はいへともとよむへし。又。明ぬるか川せの霧のたえ〳〵にをちかた人の袖のみゆるは四緒信母とあるも。今ならは。袖そみえゆくとそよまゝし。さるは心もたかひ。詞もつまりてよからぬを。ふかくも思はて。たゝ今の耳に聞にくしとて。心の外なることをもよむ。無下のこと也。わつかに中比の末ては。五條三

品の。夕されは野への秋かせ身にしみてと云を。ある人難して。身にしみてと打出さすは。いかにめてたからむといひけるとかや。いひきらさるは。うとふにもよく。又餘情もおりてめてたきをしるへし

山ふかみおちてつもれるもみち葉のかはけるうへにしくれふるなり　嘉言

これは長能か。能因に。哥はかやうによめといへる哥なり

さゝ波や志賀の山こえする人をおもひやらるゝ花さくら哉　能因

此哥をそしりけれは。能因かいへらく。故部の。伊賀守長能かやうによめとありつるよしをいへる哥也

心あらむ人にみせはやつのくにのなにはわたりの春のけしきを

津の國のなにはの春はゆめなれやあしの若葉をこゆるしら波

山てらの春の夕くれきてみれはいりあひのかねに花そちりける

みやこをは霞とゝもに出しかとあきかせそふくしら河のせき

これら皆。能因か入選の哥なれは。證のためこゝに出す

うつらなくま野のいり江のはまかせにをはななみよる秋の夕暮

ふるさとはちるもみちはにうつもれて軒のしのふにあき風そ吹

此二首。頓阿法師。幽玄に。おもかけかすかに。さひしきやうなりといへり

人ならぬいは木もさらにかなしきはみつの小嶋のあきの夕くれ　順徳院御製

判に。此卅一字。又毎字難押感涙候。玄之玄最上候歟とあり。これらにて考みるに，幽玄は，面かけかすかに。さひしくあはれなるさまをのみいへり。又近來風体抄に，頓阿法師，哥は，かゝり幽玄に。姿なたらかに。こと〳〵しからて。しかも哥ことに。一かとめつらしく，當座の感もありしとかけり。これはたゝ。その比の哥の中にて。かくみえけれはしかいへるにて。能因の幽玄には同しからす

## ○六運五体

六きはは神代よりいまの世までに歌のすかた詞のうつりゆくさまをさとしいつかたは中むかしをはしめとすといへとも大かたは中ころ近むかしのほとをもとゝすそのころより後はありとある哥ことに此いつゝのかたをいつることなしされはこのふたつのことふるき哥をみむにも又みつからかよみいてむにもおのつからさるすち〳〵わきまへられてこゝろのゆくへさたまりおもひのかきりはみゆるそかしこと〳〵によくみしりてのちそ此すち〳〵をこゝろえこゝろえさらむ人のおもひをたすけたすけさらむけちめはおもひしらるへき

### 六運

かみつ世　開闢より光仁天皇の御世までをおしなへてかみつ世とす

中むかし　この後より花山院の御世まて二百五年かほとをいふ

なかころ　こののちより後白河院の御世まて百七十二年のほとをいふ

近むかし　この後より四條院の御世まて八十四年かほとをいふ

をとつ世　こののちより後花園院の御世まて二百二十二年をいふ

いまの世　それより後をすへて今の世とす

五体

のはへ歌

よ　せ　歌

むかへ哥

まもらへ歌

かさね歌

## ○六　運辨

### 第一かみつ世（かみつ世のうた今のよの哥の道のおやなり）

神代より光仁御時まて年代あまたかはり哥またおほくつたはれりこまかにみれはそのうちあまたゝひすかたかはれりされと今六きはをいふには今もてあそふ哥の道中むかしをおやとしてさたむる事なれはかみつ世をはかみつよとしてしはらくさしおくゆゑに此あひたおほくの時あまたすかたわかるゝよしはいふにおよはす萬葉をまなはん折にはかみつ世にのみめをつけて此うちさま〳〵かはれるきはをみしるへし今はえうにあらすふみには古事記日本紀の哥萬葉等あり又風土記諸古記にもちりほひていつ猶なかむかしより後のふみともにもましりていつるうたすくなからす今又心えやすからんかためにきはことに哥むつをいたしてすかたかはりゆくさまをしらしむ此うたともはその世にすくれたりといふにもあらす又その時にむねとありけん人のにもかきらすたゝこれそそのきはのすかたにしてことときはにみまかふへくもあらぬをえらひていたす也末みなこの心えしてみるへし

紀　花くはしさくらのめてことめてははやく（ママ）はめてす我めつるこら　允恭御製

後紀　けふのひの池の邊に郭公たひらはちよと　平城御製

万　霜くもりすとにかあらしぬは玉のよわたる月のみえぬ思へは

同　我さとに大雪ふれり大原のふりにしさとにふらまくはのち

同　いにしへのをうなにしてやかく斗戀にしつまんたわらはのこと

古語　宮人の大よすからにかさとほしゆきのよろしも大よすからに

第二なかむかし中むかし十六代今の世の哥のおやといふへし

あかりての世はるかなる昔は何事につけてもてる日ともねかはしくたかき山ともあふかまほしき中に此きはそ今も耳とほからすよゝの哥よみたちもこの時を本として口をもひらかれけれはかへすへも目をつくへきは此きはなりそか中にも水のを清和の御時まてをはしめつかたといふへし此時まては詞の道ふかくもてあそはせ給けんともみえすつらゆきか花すゝきほにいたすへくもとかきたるも此あひたの事をや思ひけんそのゝちより醍醐村上の御時まてをみなかとす上より下まてよみ人もおほくことからおのつからうるはしくとゝのほりてほのかに今ののりをそなへあらはにいにしへのふりたるをあらためられたりそれより末このむ人よむ人いやましにおほくなりゆきことのはさらにしけかりけれとみなかよりいはゝすこしつくりたるすかたも見えそめておのつからなるころの姿を

はらみたれはこのほとを末つかたといふへし集には古今後撰拾遺菅家万葉六帖等つねに人のもてなやみくさなり又いせものかたり大和物語なともとむるにことたりぬへし

古　さくら花咲にけらしもあし引の山のかひよりみゆるしら雲　貫之

後　ほとゝきすはつかなるねを聞そめてあらぬもそれとおほめかれつゝ　伊勢

拾　よにふれは物思としもなけれとも月にいくたひなかめしつらん　具平親王

同　年ふれはこしの白山老にけりおほくの年の行つもりつゝ　忠見

古　みちのくの忍ふもちすり誰ゆゑにみたれんと思我ならなくに　河原左大臣

後　いとゝしく過行かたのこひしきにうら山しくもかへるなみかな　業平

第三なかころ中ころ十二代を今の世の哥の心のおやといふへし

一きはのうちにはしめ六代をもとゝいひ後六代を末といふもと六代なかむかしのなこりありて心ふかく詞ゆたかにしてまことによき哥おほかりける時なり中むかしととりくらへてみれは花と錦のやうにてかれはまことしくこれはめてたさすくれたるかおのつから世かはりてみゆのち六代ことに物あきらかにはれやかなるすかたに成はてゝ心もことはもとゝこほりなくことはりもすかたももとむ

るに心たかひていつみのわくやうにたゝいてきにいてきけん頃なれはのちの人のうちみてあなおそろしいかなる口つきにてかうおもふまゝにもよみいたしけんとみゆるなりもと末をあはせておもふにすへてあまりに心つよく詞あきらかなるか中むかしにとほくもてきて此ひときはとなれりふみには後拾遺金葉詞花續詞花堀川二度百首あり猶家集ともおほくつたはれり集哥合なとも此さはよりそおほくなりぬる

金　春雨にぬれてたつねん山さくら雲のかへしの嵐もそふく　堀川右大臣

後拾　我やとのかきねな過そ時鳥いつれの里もおなしうの花　元慶

詞　月きよみ田中にたてるかりいほのかけはかりこそ曇なりけれ　新院御製

同　日くらしに山路のきのふしくれしはふしのたかねの雪にそ有ける　大江嘉言

後拾　津のくにのこやとも人をいふへきにひまこそなけれあしの八重ふき　泉式部

金　世の中は我みにそへるかけなれや思ひすつれとはなれさりけり　俊頼

第四ちかむかし　近昔十代今の世の哥の詞のおやなるへし

一きはもゝとせにもたらてよみひろけかきあつめられけんものもかきりなくおほくすかたもさきに

似すのちに似すひとりたちたるをおもへは此きは壬生二品京極黄門の一生なれはなるへしこそかうちにも千載集なとはやゝもせは中ころにもさしいれつへくやすらかなるを後鳥羽のみかとのこのませ給けん御すかたよりそまたことにみえける心詞すかたいひしらすめつらかなりといふうちにもなほ思ひかけすめつらかなるふし〳〵ありてよくさかひに入たりなんとおほゆるうたはおろかにおもひたとられぬまてよみふせられたりさて千載集をくはしくみれはたま〳〵いたくすくしたる哥の思ひかけすましりたるをおもへはまことに時のうつりかはりゆきてそみなせの神の御心ともなりけむよみ人あまりに口きゝたるまゝに世々のすかたをもまねひよみ又は姿をつくりてよみあはせなとせられけれは五かた（五躰下ニ出）なとも此きはよりあらはにみるへきやうになりぬそれにつきてはむねとある人々も千うた（マヽ）ひとうたは三のくらゐ（三級五躰の下にいつ）にもよみはつれたるもほの〳〵みゆれとむかしに成にけれはそれも今ののりとなりぬ集には千載新古今新勅撰なとありくさ〳〵のふみかそへあへす

新古　たつねきて花にくらせる木間よりまつとしもなき山のはの月　雅経

同　ほとゝきす猶うとまれぬ心哉なかなく里のよその夕くれ　公経

千　いてぬより月みよとこそさえにけれをはすて山の夕くれの空　隆信

勅　おとめこか袖ふる雪のしろたへによしのゝみやはさらぬ日もなし　関白左大臣

同　くるゝよはゑしのたくひをそれとみよむろの八嶋も都ならねは　定家
新古　ふるさとに聞し嵐のこゑもにす忘ね人をさやのなか山　家隆

第五おとつよ

文保以前ははしめなり只ちかむかしのうたのうるはしくよみすゑておもひかけぬふしすくなきなりよくなほりたれ(ママ)　さすかにいきほひはうせぬ伏見院御時よりしてしはらくけしきあるすかたをとりたてゝよませ給ひけれは此御時玉葉はいてきたりされとほとなくやみぬるを萩原の御時に又風雅をえらはせ給たるかかのすかたに似たりこれもいくほとなくてやみにきそのさま心をめつらかにしてすかたことはをいたはらすもしあまりかちにて見ることをゑにかきたらんやうによみ思ふことをはたゝことにいひつゝけたるやうによむなり元應以後はみなかなりいとまたくうるはしくなりてあかぬところなし永亨以後は末なりやう〳〵うるはしさおとりてしひてもてつけたるふしもいてきたり凡此きはゝゑにかける女のかほのいろあひつらつきまみかうきはまよひきはなすちあかぬ所なくかゝむとてかきたるか如しまことの人のかほのそれにはすこしおとりたるものいひうちわらはゝおほくまさりぬへきをこれそあかぬことなきうちのあかぬことなるへき集には續後撰、續古今、續拾

遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、新葉、あり

續古　よしさらはちるまてはみし山さくら花の盛を俤にして　爲家

續千　あかつきの鳥の八声に一こゑを鳴そへて行ほとゝきすかな　前大僧正良信

玉　更ぬれと行ともみえぬ月影のさすかに松の西に成ぬる　後二条

新後拾　山ふかきすみかならすは庭の雪にとはれぬ迄も跡や待れん　浄弁

新拾　深ぬるを恨んとたにおもふまにこぬよしらるゝ鳥のこゑかな　頓阿

ふく風ものとけき花の宮（ママ）鳥をさまれるよの事やとはまし　少将内侍

## 第六いまの世

よきうたはおとつよのすかたをねかはれたりとみゆむねとある人〻はまゝちか昔のすかたをよみにせらるゝやうなるもみないかにそやおのつからいまなりくはしくはおのれもこのうちにはらまれたれはあしよしいひかたし又いひうへう（ママ）もあらす此うちにおほゆれとこれとてもさのみいはんもたやすきやうなれはおしなへて一きはとさたむ　但此うち元和以後又一たひ体をなせるとやとはおほゆれとさのみいはんもたやすき様なれはおしなへて一きはとさたむ

またしたゝ思ふにたかふあやにくのよの理に花やさかぬと　圓浄

たれか今みのこす夢もをしからん雨のまくらの山ほとゝきす　爲綱

曇あらは世の恨そと雲の上に君をいさめて月も澄らん　逍遙院

霜さやき霰みたれし窓の竹みをへてみれはゆきの下折　延宝御製

せきの名の霞もつらしかへりみるきのふそら（ママ）もけふはへたてゝ　通茂

この六きはのうちにむねとありける人〻のことえらひいたされけんふみのこと哥あはせよみかはしなと又これらならても哥のことにあつかりたることゝもをはへちにかきあつめてくはしくしるさんの心さしあり今はたゝおほむねをいふなり

## ○五体弁

つらゆきかゝける古今序に哥のさまむつなりとてそへうたゝとへうたなすらへ哥かそへうたゝことうたいはひうたのしな〳〵をあけたり彼序もとより子夏か詩の序をこひねかひてかけれは哥のむくさも詩の六義になすらへてしひてわかてりさるゆゑにみつからもからのうたにもかくそ有へきとことつれ(ママ)ゝと風賦比興雅頌もとより詩の六体といふにあらすへちにことわりある事なるをさしもいみしかりしつらゆきもかのくにのことにはいたりきはめられさりけれはもとよりよしなくなすらへたりしひてまうけたることなれはこゝのうたにも又かなふへくもあらねは細注すてにこれをもとき(ママ)のちの人もとりたてゝいふこともなし今わかいはゆるいつかたの哥は彼六義にもならはすつらゆき六くさになすらふるにもあらす又かみつ世よりのうたにもわたりていふにあらすたゝ近むかしより後今の世にうたとする哥をあまねくみるにこのいつゝにもれたるはなしこれをよくみしりてはふるきうたを心うるにもまつなにのかたと思ひさたむれは心をとくこともやすく又みつからのよまんためにも哥のかたゝこれにある事をしりて思ひめくらさはよみかねてたましひあくかれのみゆくことをやめつへしひとつにはのはへうたふたつにはよせうたみつにはむかへうたよつにはまもらへ哥

いつゝにはかさねうたなりこれらのうちにのはへうたのほかにはひとうたにふたうたみうたをそなへてよめるもあり只大むねをとりていつかたとす

あくへきうたかきりあるましけれは中ころより今の世までの哥のそのかたとこゝろえやすきをのみあく

大よそいつかたのすかたいにしへもかくのみそあるうちにかみつ世にはかさね哥はみえす中むかしにはおろ〳〵みえたれとたみ（ママ）よみあはせたるやうのみありなか頃には此かたのおやとすへきもみえたれとのち〳〵のやうにむねとせる事はみえすうたもいたくすくなくそあるを近むかしの時よりすくれてこのみよみける人おほくみえたりかさぬるやうもなかころなとには見えぬ詞つかひなといてきたり此一かたは近昔をはしめとすへし

ひとつにはのはへうた

哥あけしめすにおよはす今四かたをよくみしりてそれらにはつれたるをはみなのはへうたなりと知へしつらゆきの六くさにわかてる哥とも今はみな此一かたのうちにいるへし見聞ことをもいひ思ふことをもいひものにもたとへ人にもよみかくみなのはへ哥なりみつから百首なとよまんにのはへ哥

おほからんことをねかひて四かたかちならんことをきらふのはへ哥は哥のみなもとにしていにしへにちかけれはなりいひもてゆけは今四かたもみな心はのはへ哥なるをかたをかりてよみいたせるとおいらかにいひたるかたかへるのみなりさるゆゑに四かたには二かたみかたをあけたれとのはへ哥はさる事なしいつれのかたものはへ哥ならすといふことなけれはなり

古　袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん　貫之

同　いつはりのなき世なりせはいか斗人のことのはうれしからまし　よみ人しらす

一本此二首をのせたり

ふたつにはよせうた（よせたる哥そへたる哥あれとをしなへてよせうたといふなり）

詞のよせあるにすかりてよみなせるをいふかみつ世にもすくなからすそかうちにかうむりことはといふものみなよせたる詞なり但今の哥にいにしへのかうふりことはありとてよせ哥とはさためす中むかしより後はむねとよみたるかたなり

俊頼口傳に夏引のいとゝもさゝかにの糸とも思ひよりなは思ひたゆともかきたゆともくるにつけてもくりかへし共心ほそしとも又心なかしとも思ひみたるとも我手にかけしつはたにかけても折ふしにしたかひていひなかしつれはおのつから哥めきぬるものなり又杣山とも杣川ともとりかゝりぬれ

はこの暮とも夕くれとも日のくれかたに共おつるいかたの過やらすとも又うみのふねなとにとりかゝりぬれはつゝきは多かる物そかしなといへり又清輔初學抄には秀句とて此たくひを多くあけて哥は物によせてそへよむやうありなすらへ哥といふものにやといへりかく先達の沙汰しおかれたるを今おもへは此よせうたの事なりけり

又源氏物語に大宮のふたかたにいひもてゆけは玉くしけ我身はなれぬかけこなりけりとよませ給へるを君み給ていたく玉くしけにまつはれたりとわらはせ給へるを思へはつくりことなれと哥のをしへなりよせ哥とて　あまりにえんをたつねかちなるはつくりものゝやうにてあしきなり（哥は心を先としてよむへきなれは詞のえんをあなかちにもとめすくし心にもあらぬかたにつゝけ行なと有ましき事なりおとつ世になりて詞におかしきふしをこのみいたくまつはれたる哥おほし）　さりとて詮うすきは哥にもあらすよきほとをおもふへしこれをのかるへきやうこそあれ

よせ哥にはかならすよせくさありこれにもとありすゑあるもあり又よするやうにもよする詞ありよせかくる詞ありそへよむ詞ありこれらをよく心えてけうありてよみなせるをよきよせうたとす但これらをみなそなへすしてはあしゝといふにはあらすよせ哥よみかなへんとするに我なからなとやらんまつはれかちなるやうにてゆほひかならぬをさりとてよせところをすてゝみれはいたくやつれてみゆるをいかなるよしそとおもはん時にこれをおもひてみもわたし又よみもなほすへきなりよせく

さとはさきの俊頼君のいひけんそまやまうみのふねなとゝいふ此君の心はまたく戀の哥なとの心をたてゝいへり今は花ほとゝきすにも詞心よりくれはやかて其題にもよするなり四季にも戀にも寄山寄河なと題あるは更なりさならても月雪なといふ題なりともやかて詞のよせくさとせはやと思ひたらんものはみなよせくさなりさてもとすゑはありなし哥によるへし月とのみよするに風情たらねはよしなき更料（ママ）姥捨山なとまてをよするは末なり同しくそのものゝ縁よりいてたれと又よすへきくさとなれるものはもとにむかへて末といふへし

**よする詞とは**　そのことこのこととまたくおなしけれは引たかへてよみなすをいふたとへは牛を憂しといふかことし　よみよするにてにをはたかふ事をふかくいむへし後の世にはかんなみたれてさためあへぬまゝによみかけたる心のおもきかたに文字をかくなといふ事またくあやまれり續千に宣子　露分てやとかり衣いそけとも里は十市ののへの夕くれ遠とよせたるなめり遠は古はとほ今はとふ十はとをなれはいつれにもかよひかたしかゝる證哥あくるにいとまあらすたゝしいにしへの哥中頃までもいさゝかたかへるをみすそのよしは四具の下にのすち（ママ）かむかしよりそかくしとけなき事はある

**よせかくるとは**　なかはをとりいれてよむ也はしたなしといふとゝを身ははしたかのとよみしらぬといふをしら雲しら波なといふたくひなり　よせかくるにはすしあきらかなるをむねとす續古に中務卿親王　けふも又人もとはてや紅のこ染の梅の花のさかりをみはてやくれなむとかゝれるたくひなり又後拾に和泉式卩　かへるさをまち心見よかくなからよもたゝにては山しなの里千五百番哥合に顯昭此哥を引て保季朝臣　つれなさは猶かはらてや山しなのをとはの山の音にたつらんといふ哥をいはれぬへきにやと難したりこれむねの明なるとあきらかならさるとなり

**そへよむ詞は**　それにもいふへくこれにもいふへくして詞も心もたかはぬをかりてよむなり霞によせてこむるへたつる露によせておくむすふなとよむことなり　拾遺愚艸に　なくさますいつれの山もすみなれし宿をはすての月のたひねは此うたは古に忠岑　かくれぬの下より生るねぬなはのねぬなはたてしくるないとひそねぬなはたてしといへるはそへ詞なり又くるない

とひそといへるはよせ詞なりよくみしりてわかつへし　かくさま〳〵なるを心えてよまはいかにおほくよみいれたりともかの玉くしけのもときはおふましきなり赤染か哥に

續拾　つのくにのこやとも人をいふへきにひまこそなけれあしのやへふき

戀の心に人の心をつくしてうらむるかわりなさに今は我も何の心もなけれはよき折たにあらはこよとあないせまほしきに月日へてさる折なけれは思ひなからあひかたきよしをよまんとてつのくにのこやとりかゝれるはよせくさのもとなりそれに芦の八重ふきをよめるは末也さてこやはよせたる詞ひまなきはそへてよめる詞也かくけうありてよせうたはよむへきなり

あらはしてよせ又そふるやうありおほくははしめによせてのちにあらはす也たま〳〵はしめあらはして後によするもありたとへはさわく入江の白波のしらすや人をとよめるははしめによせてのちに顯せりあし引の山ちもしらすしらかしのとよめるははしめにあらはしてのちによせたり初寄後顯はつねなり初顯後寄はうちふるまひたるさましてにくけなれはこのみよむへからす

俗に序哥といひつけたるものみなよせうた也常のよせ哥にむかへてうちよせといひうちそへといふ

よせうた

古　よしの川いはきりとほし行水のはやくそ人を思ひそめてし　よみ人しらす

同　立わかれいなはの山のみねに生るまつとしきかは今かへりこん　行平

金　あやめくさよとのに生る物なれはねなから人はひくにや有らん　公実

よせてむかへたるうた

古　あけたてはせみのおりはへ鳴くらしよるはほたるのもえこそわたれ　よみ人不志

拾　春の田を人にまかせて我はたゝ花に心をつくるなりけり　齋宮内侍

よせてかさねたるうた

新拾　やともかなさのゝわたりのさのみやはぬれても行ん春雨の頃　源家長朝臣

万　クルシクモフリクル雨カミワカサキサノ、ワタリニ宿モアラナクニ

白川殿七百首　ゆく春もよるはこえしととまらなんくるゝまかきの山ふきの花　為家

古　夕霧ノマカキハ山トミユナ(ママ)、シヨルハコエシトヤトリトルヘク

よせてまもらへたるうた

拾　夏のよはうらしまのこかはこなれやはかなく明てくやしかるらん　中務

雑人倫浦嶋子ノ条ニ見

宝治五百首　梓弓春の雉子をえてたにも人の心にいるよしもかな　基良

春ノ部雉ノ下ニ委シ

よせてかさね又まもらへたる哥

拾　たきゝこることはきのふにつきにしをいさをのゝえはこゝにくたさん　道綱母

同　法華經ヲワカエシヿハタキ、コリナツミ水クミツカヘテソエシ　行基

斧柄ヲ爛（クメ）セシヿ雑器材斧ノ条ニ委シ

かち人のぬれぬためしも盃のそこにかくへきえに社ありけれ

カチ人ノワタレトヌレヌエニシアレハマタアフサカノ關ハコエナン　イセ物語　連哥

盃ノヿ上ト同部盃ノ下ニ見

よせてむかへ又まもらへたる哥

金　なきあとにかけゝるたちも有ものをさやつかのまも忘はつへき　俊頼

繫（カクルチ）レ劍ヿ雑器材劍ノ条ニ委シ

拾　かをさして馬といふ人有けれはかもをもをしと思ふなるへし　仲文

はしかきに能宣のもとへ車のかもをかりにつかはしけるにか
さゝりけれはと有かもハ鐘ナリ鹿ヲ馬ト云ヿ雑馬ノ条ニ委シ

附言　此かたをよまんに心え六あり一には哥ことに此かたをこのみよむ人ありさのみくせのやうに成ぬれはうるさきものなり
二にはあまりにえんをたつねすこしまつはれたるはつくりものゝやうにてわろししら糸のうちはへてくるよるなとまて

はさる事にてあまりに入たち水のわくにそなとくさりつゝけたるはにくけそふとおや赤染か八重ふきとよめる風せい珍しく詞姿もやさしと公任卿もなのめならすほめられたりされともこやとも人をといへるかなとやらんにくけに聞ゆといへり又をしからぬみやまおろしのさむしろになにといのちの幾よひとりねとよみたる返しおかしくあさましと有これらはひとふしのくさりけしうもあらぬに心のりて猶ひとくさりをもとむるゆへにかゝるひかことありつねに我心と詞とをてらして文字をすうへきなり三には人の秀句をとる事

春かすみ立田の山　久かたの月のかつら　君か代にあふさかやま　立別いなはのやま
あつさ弓をして春　千はやふる神代　なき名のみたつの市

なとやうの詞のはやくよりとりなれたるは二句つゝきたりともはゝからすちかころの哥の秀句を詮としてよめるは二文字三文字にてもとるかあしきなりこれをとる時はもとの哥も耳なれ今のうたもおもたゝしからぬゆへなり雅經卿のなくねもよはのとよめるを壬生二品は露のぬきよはの嵐ととり有家卿の末の松やますことゝへとよめるを雅經卿はあし引のやます心にかゝりてもとゝれるを御抄にも難しおかせ給へり四にはふつと事たかひたる事をあしくひきよすそはおほきなる難なり

鴫のゐるはしめて秋のたちえ　山とりのおのしたり柳
さやけき月のかけまくかつらきの山ちをうちのはしひめ

からやうにもてはなれたる物をあはせつゝくるかあしきなりこれもしやうによりて又よくもきこゆるなり五にはしらぬを白雲白糸によすへくしてしるしられぬはよすへからすみんを御津三室によすへくして水峯によするはてにはたかふゆへわろし六にはかんなのゆくゑもしらさる人心のおもきかたに文字をかくなといふ事

さとは十市の野辺の夕くれ

これらのあやまりすくなからす上つ世よりなかころまてかんなつかひさたまりたれはかゝるあやまちなしちかき世よりみたれてさためあへぬまゝにかゝるひかことあり今ののりにしたかふ人も心しらひあるへき事なり

## ○みつにはむかへうた

しろきものをいはむとてはくろきものを引てたくらへなかきことをよまんとてはみしかきことをうちあはするなり是たゝのはへ哥のうちにいるへきやうなれとも詞のうへにてかりよみたるすかたなるもあれは一かたとせりしかのみならすふかきふちといはんとてまつ淺きせよりよみかゝり夜みちゆくことをいふに月もおくれぬよしなとをよめるもみなむかへうたなり又いつれをあるしいつれをまら人となけれとむかへてよめるもあり

袋草子に長房卿自讃せられける秀哥三首をいたせるをみるに

朝またき八重さく菊を九重に見つるは霜のおけは成けり

月かけは山のはいつるよひよりも更行そらそ照まさりけり

としをへてかつらの葵かはらすもけふのかさしはめつらしきかな

これみなむかへ哥也その比の作者すてに心をよせたる姿なる事みるへし

此かたのうちにねかひうたとて一かたありねかひの心あるはみなむかふる心あれはなりたゝし只あつらへたるにあらすめのまへにさあらぬ事又あるましき事を思ひよせてねかふたくひ也たとへはよの中にたえてさくらのとよめるはうちみてはむかへたるやうならねとさくらなき世とむかへていへりいつはりのなき世なりせはも同し是はきはめてみしりかたき故につねにはねかひ哥をものはへう

たにいるゝ也されと此心はきゝおゝへしむかへうたを心うるたすけとなれはなり
此かた近昔より後はいよ〳〵おほくなりぬいつかたのうちにてはとくみつくる事難きかた也心を用
ゆへし

むかへうた

一 明たては蟬のおりはへなきくらし夜は螢のもえ社わたれ　よみ人しらす

恨わひさても命はある物をうきにたえぬは涙なりけり　道因

むかへてかさねたるうた

十八 袖のかは花橘にかへりきぬおもかけみせようたゝねの夢　爲子

五月ヤミ花橘ノカヲチカケハ昔ノ人ノ袖ノカソスル

たかさこの尾上のしかのなかぬ日もつもりはてぬる松のしら雪　家隆

秋風ノウチ吹コトニ高砂ノ尾上ノ鹿ノ鳴ヌ日ソナキ

むかへてまもらへたるうた

あさちふの宿の使の歸さを雲ゐの月によそへてそ待

源氏桐壷ニ更衣ナクナリ給ヒシトキ帝ヨリ靫負ノ命婦ヲ使ニテ更衣ノ(ママ)
母上ニ文ヲ送リタマヒ其返事ヲ夜フクルマテ待給フヿアリ

十一　たつぬへき友こそなけれ山かけや雪と月とをひとりみれとも　　俊成

山陰ノヿ時節雪ノ条ニ委シ

むかへてかさね又まもらへたるうた

待えしと思ふ夕もとふ人の袖のいろなるしらきくの花

古　花ミツヽ人マツ寸ハ白妙ノ袖カトノミソアヤマタレケル

袖ノ色ナル白菊ト云ヿ時節菊ノ条ニ委シ

○よつにはまもらへうた

古事本説にすかりてよむなり古事は我くにのことも人のくにのこともよむへしよせうたにまさるゝもありよくたゝすへし哥のうへのみをとりて其ことにかゝはらぬはいかはかりふかくよみいれたりともかさね哥なるへし又ことはゝたよらすとても其事をおもひてよまはまもらへ哥なり又つくりものかたりのことをよむこともまもらへ哥なるへし

まもらへ哥

七　戀わひぬちぬの丈夫ならなくに生田の川に身をやなけまし　　道経

隰沼ノ壯士ノ「名所生田川ノ条ニ委シ

七　むかしわかあつめしものを思ひ出てみなれかほにもくる螢哉　季通

聚螢ノ「晴節螢ノ条ニ委シ

まもらへてかさねたるうた

草庵　夢にたにみえすといかて告やらんうつの山路はあふ人もなし

伊勢物語ノ故事名所宇津山ノ条ニ委シ

附言　古事本説はたへて人のしれるを用ゆへししる人まれなるは無下にかひなしたゝしよくその事としらるやうによみ入へし

○いつゝにはかさねうた

本文本哥あるひは詩の心をおもひ又は詞をとりてよむなり御抄に古哥をとる事是第一の大事にて上手ことにみゆる事也としるさせ給へり但初心の人詞をとるはみなかさね哥と心うるはあやまれりかさぬるにはやうあり四五字をとりてもあらはにその心とみゆるはよしたとひもとをとり末をおかしたるともそのうたとも見えぬあるへしそれは哥ぬすみたるといふのみにてかさね哥にあらすこのか

たはあらはにその本哥そとしるきやうによみすえるをよしとす　おとつよの事なれと宗良親王信太の杜千首のうちみつからよき哥とて六首いたされたるをみれはみなかさね哥なりそのよに何となくよみ人の心をかたふけゝんことおもふへし

口傳奥義にむかしの哥をとれるやうとていたされたるは重哥に似たれと猶いまのかさね哥のおもふきにはあらす点化秘術にかさねうたのはしめとてすこし出すのみそあるさならても古哥に古哥のかよひたるはおほくはふとよみよりたるもあり又そのかたをおもひてよみたるへけれと近昔より後のかさね哥（ママ）をあらぬよしは点化にくはし

此かたはひとつふたつの哥をあけていひつくすへきにあらす別に近むかし以後の哥をあつめて点化秘術となつけたるもの有をみるへし

此かた上つ世には見えぬ事なれはにやことにおもりかにはあらぬやうなれと哥の心むかしよりいたらぬくまなくよみつくしたる後にいてきてけうありたけもたかく一かたにつくすましき心をもよみはつへきは此かたなるへしさるゆゑにや近むかしよりのち今の世まて哥のむねとある人はことに心を用ひてふしある哥ともみえたり今ひとつふたつをいはゝ

月まつと人にはいひしいつはりも今やまことのゆふくれのそら　　家隆

あはれこしかたには夕くれに人まつとて何となく心けさうしてみいたしなとしてあるさまのたゝな

らねはとかむる人のありて何事かあるなと思ふに忍ふる事なれは人待とはいはてやかて夕くれの空にかこちて月のいつるをまつそといひなしてありけるもいつしか人はつれなくのみなりまさりてたまさかに夕くれをもちきらねはせめてのなくさめにくれことに月をたにまち出てひとりねのなくさめにもせんとてなかめいたしてをりつゝおもひやれはそのよに人まちける事を月にいひなしつゝいつはりの今はまことになりけるか思ひかけぬ事よといふ心なりかゝる心をおもひ得たりともかさね哥ならすはいかゝいひはてんよしからくしてよみまはりたりとも此うたはかりたけもありよせいもつよくあはれにさへきこえん事はいかゝはあらんさて此うたの心は人丸の

万　あし引の山よりいつる月まつと人にはいひて君をこそまて

とよめる哥あるにすかりてよむゆゑにやすらかにきこえたりかくよめは一うたの中に人丸の哥の心をつくしいひて又わか哥をもつゝけよみて心をあかすなりたゝしあしくとりて人丸の本哥ともきこえすは此うたの心も何とも心えらるまし月まつと人にはいひてといへるをそのまゝに人にはいひし偽とよめるにてことわりたしかなりかさね哥は本哥のしるきをよしとすとはこのよしをいふなり又古哥に

名とり川せゝのうもれ木あらはれはいかにせんとかあひみそめけん

これをかさねて定家卿

名とり川いかにせんともまたしらすおもへは人をうらみつるかな

いまたあひみぬほと一すちにこひしくていひなやむを人はつれなくてとかくのかれつゝあふことなきを世にうらめしくのみ思ひつるかまことにあひみてのちあらはれて名たゝは我も人もいかゝせんとひしとのみおもふまゝに末かゝる事ありとまてもたとらすして恨ける事よ今思へは人もさる心つかひにてやつれなかりけん我うらみける心あさかりけりと思ひしるなりこれもさる本哥をからすはよみはつましき心也井蛙抄にましくはへて六のやうをあけられたりされと共第三と第四は心ことにたかはねは只ひとつなるへし又御抄に古哥をとる二のやうをしるさせたまへりこれかれをあはせみるにふたつはあまりに事そきたりむつは又よくわかれても見えす

# 類字作者凡例

上つ世よりの作者をのこさす出せるは別に本書あり今のする所は三代集の作者をこと〳〵くあけ後拾遺より以下の作者は世に堪能と聞ゆるをえらひて出せり○作者の家系時代等をしらむとするにその名の頭字の畫(クワク)の數を目録にあはせて引へし但称号の頭字諱の頭字又は親夫子兄弟なとの名のかしら字等をもてわかてりたま〳〵称号諱等のしれさるは官或は姓のかしら字をもとれりこれいつれも撰集にかゝれたるまゝをのせたれは也○庶女のうち官名又は國所町なとの名を名としたるは目録の下に別にあけたる所にあはせて引へし

## ○人品次序

帝王　親王　攝關　大臣　大中納言　參議　散二三位　諸王　四五六位　僧正
法印　僧都　法眼　律師　法橋　凡僧上人入道　女院　后宮　内親王　女御
御息所　更衣　尚侍　一二三位女　女王　庶女　神明　佛陀　化人　不知官位

## ○撰集畧法

古 古今　巽 後撰　拾 拾遺　後 後拾遺　金 金葉　詞 詞花　千 千載　新 新古今　勅 新勅撰　續 續後撰
今 續古今　遺 續拾遺　才 新後拾遺　玉 玉葉　戈 續千載　糸 續後拾遺　風 風雅　新千 新千載　新才 新拾遺　新イ 新後撰
新糸 新續古今

# 目録



以上九六百三十八人

# 類字作者

二一一（帝王）一條院（懐仁） 圓融御子後一詞一勅一今一新千一 乙（女房）壬生乙 壬生益盛ヽ古一 （中納）石上乙麿 左大臣麿ヽ拾一

二二二（后宮）二條后 贈太政大臣長良母絲續女陽成院母延喜十一三薨　古一 七（后宮）七條后 昭宣公三女宇多院后寛平九

皇后宮延喜七崩巽二拾一 八（女房）八條大君 拾一 九（大臣）九条右大臣（藤師輔） 貞信公ヽ巽十四拾二新一九条入道右ヽ勅三續

三遺一戈二糸三新千二新糸二 人（五位）酒井人眞（土佐守 左大史） 至延喜十四年古一 （不知官位）柿本人麿 古七拾百十一新廿二勅六續十

二今廿四戈四糸十一新千十新才十二新糸三 刀（女房）刀自子（依子） 大江玉淵ヽ巽一勅二續一

三三三（帝王）三条院（居貞） 冷泉ヽ後三詞三新二新千一新才一 （大臣）三條右大臣（藤定方） 內大臣高藤ヽ于時左大將兼平二八四薨同

三二十二仲平任右大臣古一巽八續一玉一糸一新千一新糸一 （后宮）三條太皇大后宮 朱雀后廉義公ヽ拾二新一 （更衣）三条町

正四位下名虎ヽ古一 （女房）三國町 名虎ヽ貞登母仁明更衣古一 （不知官位）三人翁 古三 大（六位）大隅國郡司 拾一 宗岳大頼（菅旭士）

古二 （御息）大將御息所（藤能子 元更衣） 和泉大將定國ヽ延喜女御巽二衞門御息所同人也又右衞門督之時爲更衣隨其時云之歟 （三位）大貳三位（源賢子） 後冷泉御乳母藤宗（ママ）

孝ヽ山城守宣孝也母紫式部大貳國章爲妻後九詞一千四新六勅三今一遺一玉二戈二糸一風二新才一新イ一新糸一 小（大臣）

小一条左ヽヽ（師尹 左大將） 貞信公ヽ天暦二才中納言左衞門督巽三 （御息）小八条御息所 民卩卿昇ヽ巽一 （女房）小野小町 或云出羽

郡司ヽ或人云玉造云小野小町非此事云ヽ古十七巽四新六玉四才一糸二風二新千四新才三新イ二新糸一 小町姉 古一

巽一 小町孫 巽一 小町いとこ 巽一 小大君 三条院女藏人左近同人也拾三後五千一新三續一遺一 左近（三条院女藏人）糸一

風一新千一 山（凡僧） 山田 巽一拾一新一續一玉一裁一續後一風一新千一新才一 上（女院） 上東門院 法成寺關白女母左大

臣雅信女後一金二千三新五續二今二玉五糸一新千二新才一新糸一 千（五位） 大江千古（伊与守） 參議音人丸丶延喜二五廿九

卒巽三 藤千兼（肥後守） 左京大夫忠房丶至康保二年巽一 藤千蔭 越前守崇幹丶至延長七年拾一 藤千景（越中介 従五下） 越中守崇幹

丶拾一 大江千里（六位）（兵卩大丞） 參議音人丶延喜三任兵卩大丞古十九イ巽二拾二勅一今一玉一裁一續後一風二新千一新才

一新糸二 小野千古母（姉女） 古一 千包女（カメ） 巽一

四

友 紀友則（六位）（大内記） 古四十五巽七拾二今一玉一裁二續後一新千一新才一 方 大伴方見（不知官位） 拾二 公 称名院入道（大臣）

前内丶丶藤公豊 後八条内丶丶実繼公一男新才一（才中納言公豊） 新糸八称名院丶｜ 藤公任（大納）（前大按察） 廉義公丶拾十三後十九詞四

千十一新四勅一續三今四遺二玉九戈三糸二風三新千三新才一新イ二 藤公実（才大 春宮大夫） 大納言実季丶後二春宮大夫金廿三詞

三新一勅二才大納言 續三今四才大丶遺二才二糸二新千一新才二 橘公頼（中納）（太宰帥） 贈中納言廣相丶延喜廿一中將延長二

參議美平十一帥天慶二中納言同二薨六十五巽一勅一 源公忠（四位）（右大弁） 大藏卿国化丶光孝天皇孫巽一拾四新二勅四續

一玉三戈一糸二新千一新糸一 三統公忠（五位）（大外記）（ママ） 至天暦三巽一續一 平公誠（周防守） 陸奥守元平丶至寛弘八拾一 橘公（女房）

平女 巽一 中 平中興（五位）（左衛門佐） 內膳正忠望王丶至延長八卒古二巽二 中將御息所（御息）（朱雀院餅子） 巽一 中納言御息所 拾

一 中將更衣（更衣） 參議伊衡丶巽一 中務更衣 延喜更衣少將更衣同人也拾一 平中興女（女房） 巽三勅一 元 元良丶（親王）（兵卩卿 三品） 

陽成第一丶天慶六薨五十四巽六元良のみこ拾三丶丶兵卩卿元良勅一今一戈二新千二新才一新イ二（卩卿） 藤元輔（承香） 天暦五藏人

少將天德三中將天祿三參議治卩卿天延元卒左大弁顯忠丶巽一（現） 藤元善（四位）（宮内卿） 右京大夫是法丶中納言山蔭孫至

承平七異一三統元夏(ママ)東宮学士式卩大輔理覃(ママ)、至康保三拾一五位平元規内舎人右衛門尉播卩介中興、至延喜八古一清元輔肥後守

下総守泰光、深養父孫拾四十九後廿六詞六新六勅四續二今一玉三戴二續後一風一新千一新才一新イ一新糸二藤元

眞丹後介甲斐守清雅、後七詞七新八今一玉一續後一風四新千一新才一新イ一橘元任イ五下本少内記永愷、法名能因元任父也長門守元

愷孫寛徳三十一十二叙依内親身後二金二詞一六位在原元方前筑前守棟梁、大納言国経爲猶子古十四異八拾二新一勅

一今一戴一續後一凡僧大山寺別當元慶對馬守藤茂規、後一女王元平親王女陽成院二、左大臣顯光母異一仁帝王仁徳天皇

應神、新一僧都仁毀但馬守藤敕(ママ)守、異一女御女御仁善子右大臣定方、延喜女御三条右大臣女也異一今一延喜女御三条右大臣娘

風二文帝王文武天皇輕草壁皇子、古一注云ならのみかと散三菅文時式卩大輔イ三右大弁高視、天元四九八卒拾四五位紀文幹イ

濃守參議淑光、至天暦七拾一井大臣井手左ゝ橘諸兄勅一續一戈一糸一新千一天帝王天智天皇葛城舒明、母皇極号奈

良帝古一あめのみかと異一同新一天智天皇玉一新千一少更衣少將更衣延喜更衣号中務更衣拾一

五四康女四条御息所女異一式内親式子内親王齋院後白川、千九新四十九勅十二續一五(ママ)今九遺六才一玉十六戈二糸五

風十四新才三新イ四新糸四玉康女大江玉淵女異一(ママ)右大臣右大臣実資実頼四、于時右大將号賢人右ゝ、拾一仙律師

仙覺才續一今一遺一才律師新才一新糸一凡僧仙慶拾一西大臣西宮左ゝ源高明延喜、後一千一新三勅一玉一戈一糸

一新千二新才一新イ一凡僧西行本名圓位俗名則清兵衛尉父散位康清也千十八圓位新九十四西行勅十一續十三今十九遺九才

十三玉五十一戴四續後三風十三新千四新才九新イ三新糸三北大臣北邊左ゝ信嵯峨第一、貞觀十薨五十七異一神明北

野古一異三菅原大臣拾五新十六續二菅贈太政ゝ今三以後北野玉一新才一新糸一延喜廿五右大臣正三位正暦四五左大

臣十一月贈太政大臣 平 帝王 平城天皇安殿 桓武丶号奈良帝古二糸一 白 帝王 白河院貞仁 後三条丶後七御製金左院ミ詞一
白河院千一新四新イ一 白 族女 白女(シロメ)遊女 大江玉(ママ)關丶古一 本 大臣 本院贈太政ミ時平右大臣右大將 昭宣公丶母四品久康親王女延喜九薨
四十九古二巽二 本 族女 本院藏 巽一 今 五位 布留今道イ五下三河介 貞觀比人造酒正至昌泰元古三 亭 族女 亭子院今子 巽一 今木 參議
伊衡丶巽二 列 六位 春道列樹壹岐守 主殿頭新名丶于時文章(ママ)轉士延喜廿任壹岐守古三巽二 玄 參議 藤玄上(ハルカミ) 左大臣三守曾孫
中納言諸葛丶延喜十九參議刑卩卿承平二イ三三年薨五十八 巽三拾三續一 參 族女 參議玄上母 巽一 正 四位 源正清 有明親
王丶拾一 巨 四位 源巨城(オホキ) 敦固親王丶至承平元巽一
六 好 參議 小野好古 大貳髙經丶天慶元正右少將二正五下四五二イ四下天暦元參議六十大貳如元四正大貳天德三左大弁
四又大貳康保四致仕者(ママ)十四同七七卒巽三拾二現 藤 五位 藤好風出羽介 右中將滋実丶古一 曾 六位 曾祢好忠丹後掾 拾九後九詞十六新
十六勅五續三今五遺二載三續後五風一新千二新才二新イ三新糸三 小 族女 小野好古女 巽二 安 五位 藤安國左衞門才佐 伊与介連
永丶至天元二巽一 安 凡僧 安法 内匠頭適丶拾三後二載一續後一新才一 仲 四位 源仲宣右兵衞督 延長八右少將承平六四位至天
慶七大納言恒員丶光孝孫巽二 五位 源仲正肥前守大藏少輔 大藏大輔當斗丶近院右大臣孫巽一 藤仲文上野介 陸奥守公葛丶改因茂
至貞元八拾三新一新千一新才二新イ一 源仲正兵庫頭 三河守頼綱丶至天承元白河院北面也金一詞一千七玉一風二新才二 凡僧
仲善 拾一 不知官位 安倍仲麿 古一玉一糸一 百 五位 大江百世兵卩少輔 拾一今一 名 六位 矢田部名實大内記 古一 清原名実大監 巽一
光 帝王 光孝天皇 仁明第三丶号小松帝古二新三續二今一玉一糸一風一 法号 光明峯寺入道攝政 後京極丶勅廿五前
關白續十七入道關白左大臣 今十九遺十五才三玉五戈六糸十一風六新千五新才二新イ三新糸二 四位 藤光俊 按察使光親丶眞観

勅四續十今卅遺（故）十六才十玉五戈六糸四新千三新才二新イ六新糸四（五位）源光行（河内守[illegible]）豊前守光季丶治安三十一三任
大膳進延暦三四七任大監物親行孝行等父也（水源抄作者）千三新一勅二續一今一遺一才一玉一續後一風一新千一新才二新イ
一新糸一（后宮）光明皇后 不比等丶聖武后拾一（庶女）光朝法師母 後二 朱（帝王）朱雀院（寛明）醍醐丶巽一拾一勅二玉一糸一新
千二新糸一 守（親王）守覚法ミ（仁和寺二品）後白川丶号仁和寺二品親王又称北院御室千九（仁和寺法ミ）新五守覚法ミ勅二（仁和寺二品ミ）續
一（同）今二守丶一遺一（仁和寺二品ミ）才一（同）玉五（二品法ミ）戈二（仁和寺二品ミ）糸一（同）新千一（同）新才一新イ三新糸五（五位）藤守文 馬助有教丶巽三
藤守正（修理才亮）中納言兼輔丶天慶九卒巽一 行（親王）行明ミ（上総太守）延喜第二丶実寛平第十丶母京極御息所巽二（大納）藤行成（才大侍従）少
將義孝丶後一勅一今二玉二風一新千一新才二（中納）在原行平 阿保親王丶仁和二十二四行幸五四十三致仕寛平五薨七十
古四巽四新一玉二（散二）藤行家（イ二侍従）正三位知家丶續二今十六遺十四イ二（ママ）才七玉四戈六糸三風四新千五新才九新イ四新
糸六（散三）源行宗（大藏卿）参議基平丶金五詞一千二新三勅一續二遺一才二玉二風二新千一新才一（大藏卿）新イ一（同）藤行能（イ三）
三位伊經丶法名寂能（宝治御百首作者）新一（五位）勅八續六今六イ三遺五才二玉四戈一糸一風二新千一新才四新イ一新糸五（五位）
橘行資（越中守）左少弁爲正丶至寛弘八（僧正）行尊（寺前大）参議基平丶金一詞二千一新十一勅二遺一才三玉六載二續後一風三新
千二新才一新イ一（不知官位）平行時 拾二（佛陀）行基菩薩 拾三 宇（攝關）宇治入道關白（太政大臣頼通）法成寺丶後一（宇治前太政ミ）金一詞
一千一新二勅一續一今一遺二玉一戈一糸一新千一（参議）藤宇合 淡海公丶新一今二（神明）宇佐宮 新二 佐（四位）藤佐忠（勘解由次官）山
羽連茂丶至天祿四拾一（六位）佐清（左近番長）拾一 衣（大臣）衣笠前内ミ（藤家良）前大納言忠良丶勅八（才大納言）續三（家良前内ミ）今廿四遺十
七前内ミ玉六戈七糸五新千四新才八新イ四新糸五 伊（大臣）儀同三司伊周 中關白丶後二詞一今一玉一（参議）藤伊衡 左中

將敏行ヽ延喜十六右少將七藏人頭延長八正四下兼内藏頭承平四參議七右兵衛督天慶九十二十七卒巽一 内親 伊豆内親王

桓武ヽ古一 族女 大納言伊望卿女 元慶二薨巽一 集云平伊望朝臣女 有 散三 藤有家 大藏卿 大貳重家ヽ千一新十九 正四下 勅四續三

今八 大藏卿 遺四才五玉七戈一糸三風二新千一新才四 大藏卿 新イ三 同 新糸四 同 四位 紀有常 雅樂頭 刑卩卿名虎ヽ貞觀十九

正廿三卒古一新二 藤有貞 近江守 右大臣三守ヽ至貞觀十巽一 五位 紀有朋(トモ) 宮内少輔 イ五下友則ヽ元慶四卒古二 藤有文 伊勢守

右大臣氏宗ヽ至天慶八巽一 藤有好 大納言国国(ママ)ヽ至延長元巽一 藤有時 左馬助 左少將恒興ヽ拾二 六位 文屋有季 康秀同

人歟可勘古一 御春有助 左衛門尉 河内國人古三 族女 紀有常女 古一 成 五位 藤成國 播ノ守 伊与介連永ヽ天暦八四廿卒巽一

匡 中納 大江匡房 前中 イ四下成衡ヽ後二金八詞九千十七新十四勅六續九今七遺三才二玉九戈二糸四風七新才四新イ五

新糸四 四位 大江匡衡 式卩大輔 左京大夫重光ヽ長和元七十六卒後七 故一 新二今二新糸一 共 女房 共政女 拾二金一

七孚 内親 孚子内親王 桂宮 宇多ヽ巽一勅一 均 内親 均(ヒトシキコ)子内親王 宇多ヽ古一巽一 集云閑院五のみこ 住 神明 住吉 拾一新三玉一新糸一

波 化人 波羅門僧正 拾一 赤 不知官位 山邊赤人 巽一拾二新七勅二續四今九玉七戈二新千三新才五新イ二新糸一 延 大納 源

延光 春宮大夫 中務卿代明親王ヽ拾二 秋源延光朝臣 哀大納言 新千一新才一 扶 大納 藤扶幹 按察 天慶元七月薨 七十五 駿河守村椙ヽ巽一 藤原

ミ朝臣 大納言以下公卿皆不書官位等名許書之此集拾遺如此 町 更衣 三條町 三ノ下委 女房 三國町 三ノ下委 坂 女房 坂上郎女

拾一今一玉五新千一糸一新糸一 戒 凡僧 戒仙 善イ 巽三新才一 戒秀 花山院殿上法師清原光輔ヽ拾一詞一續一 冷 冷泉

院 憲平 村上ヽ詞一新一新千二 村 帝王 村上天皇 成明 同朱雀院号天暦御製巽二 今上御製 拾十五 天暦 新十勅二續六今六玉七糸

一新千二 天暦 新才一 同 新イ一 同 新糸一 同 邦 四位 源邦正 式卩卿重明親王ヽ拾一 良 五位 都良香 主計頭貞繼ヽ都腹赤子

元慶三二二五卒 四十六 【六位 物部良名】古一 【凡僧 良暹 祇園別当】父未詳母実方家童門菊後十四金四詞六千一新二一續一遺一新千
一新イ一 【庶女 源良種妻】拾一 【希 四位 平希世 右中弁】右馬頭雅望ヽ至延喜六巽一玉一 【孝 庶女 菅原孝標女】孝標者四位人也
而不載儒歴母倫寛女祐子内親王家女房日記作者也 さらしなの 新一勅一今二玉六 孝標朝臣女 戈一糸一新千一新才二 【利 五位 紀利貞】
【弾正弼 阿波守】イ五下 元慶五卒古四 【高向利春 甲斐守】巽一 【秀 五位 良岑秀岳 伯耆守 崇イ】至寛平八古一 【言 六位 藤言直】昌泰三任因幡才掾

古一

【八知 散三 藤知家 正三】三位顕家蓮性ヽ大蔵卿有家為子宝治御百首作者新一 五位 勅十一 正三 續十九今廿九遺十八才四玉一
戈四糸二風四新千三新才十新イ五新糸六 【周 更衣 近江更衣 源周子】右大臣源唱ヽ生庶明并内親王三人巽一新一 更衣源周子
玉一 【尚 尚侍 尚侍】巽一 【治 五位 藤治方 少納言】武蔵守経邦ヽ近江守有貞孫至承平巽二 【花 帝王 花山院 師貞】冷泉ヽ後五金四詞八
千四新七遺二玉十二戈二糸二風三新千二新才六新イ三新糸二 【近 大臣 近院右大臣 能有】文経ヽ古三糸一 【更衣 近江更衣 源】
【周子】周ノ下委 【法 摂関 法成寺入道摂政 太政ミ 道長】東三條摂政ヽ御堂殿後五ミ 入道前太政 詞一千三新四勅四續四今一遺二玉二戈
一糸三風一新千二新イ一新糸一 【法性寺入道関白 忠通左大臣後任太政ミ】金十五ヽ一 摂政左 詞七 関白前太政ミ 千七新四 法性寺入道太政ミ 勅四 法性寺入道前摂政太政
ミ今一遺一才二玉三戈二糸一風一新才五新イ一 【具 親王 具平親王 中務卿】天暦ヽ号後中書王拾四 中務卿のみこ 後二詞一千一新
八續一今一遺一玉七戈一糸三風一新千二新才三新イ一新糸一 【宗 親王 宗尊親王 中務卿】後嵯峨ヽ今六十七 中務卿親王 遺十八
中務卿宗尊 ミ 才十六玉廿三戈十糸十風七新才八新イ十二新糸十 【四位 源宗于 左京大夫】式卩卿是忠親王ヽ古六巽三勅一戈二糸二
【拈 内親 拈子内親王 齋宮】文徳ヽ古一 【依 内親 依子内親王 斎宮】宇多ヽ母更衣貞子 大納言昇女 巽二 【庶女 刀自子 依子】刀ノ下委 【金】

不知官位 笠金村 岡敷 玉二風一 定 中納 藤定頼 才中 大納言公任丶後十四千三新四勅二續五今一遺一才六戈一糸一風四新千一新才一

新イ一新糸一 藤定家 才中後前 皇太后宮大夫俊成丶法名明靜千八新卅六勅十五 才中納言 續四十今五十五遺廿八 前中納言 才卅二

玉六十四戈廿九糸廿風廿六新千廿一新才廿五新イ十八新糸十九 季 四位 藤季通 前備前守 大納言宗通丶至久安四 現 詞一千十五

新一 五位 橘季通 駿河守中宮少進 陸奥守則光丶至康平三 故 後二金一 忠 攝關 忠仁公 良房 左大臣冬嗣丶古三 前太政大臣 忠義公 兼通 右大臣

師輔丶後一 堀川太政大臣 新一勅一今二玉一糸二 大納 藤忠良 才大 六条攝政丶千五新五勅六續五今十一遺三才四玉十戈一糸二

風五 前大 新千二 大 四位 藤忠房 右京大夫 信濃掾是嗣丶延喜十一左少將十八四位正少將古四巽六拾一 藤忠君 右兵衛督 拾一 平忠盛 刑

門卿 讃岐守正盛丶 正衡孫 至仁平元金三詞二千一新一續一才一玉二糸一風一新千一 平忠度 右兵衛督 刑門卿忠盛丶千載一 よ

み人しらす 勅一玉四風二 五位 藤忠行 若狭守 刑門少輔 前遠江守有貞丶至延喜六古一巽一 源忠賢 左兵衛督 左大臣高明丶雖入日六集

家集等無之巽一 藤忠國 蔵人所次官 伊与介連永丶巽二 平忠依 隼人正 右中弁希世丶至天延二拾一 橘忠幹 駿河守 長門守長成丶 盛

イ 至天暦十拾一今二 六位 壬生忠岑 イ五下安綱丶古卅四巽廿拾九新三勅一續三今三玉七戈一糸二新千三新才一新イ二

菅野忠臣 古一 壬生忠見 攝津守 壬生府生忠岑丶巽一拾十六續四玉二戈二糸三風一新千一新才五 九僧 忠連 拾一

忠房女 拾一 京 御息所 京極御息所 イ二褒子 左大臣時平丶巽一 東 攝關 東三條入道攝政 兼家太政大臣 右大臣師輔丶拾一 東三条大政丶後四新

二 東三条入道前攝政太政大臣 勅二續一今一 大臣 東三条左丶 嵯峨第三丶母髙氏東三条本主也古一 四位 中臣東人 參主 中納言意美麿丶古

一 肥 凡僧 肥後國僧 拾一 長 大臣 長岡左丶 永年 參議房前丶拾一 大 藤長家 法成寺丶後四千三新三勅四續五今一遺

五才大戈一風二新千三新才一新イ一新糸二 中納 紀長谷雄 彈正忠枚範丶國守孫延喜二参議同十二二十 長谷雄 

長方 才中後前 中納言顯長丶千四新四勅九今四遺二才二玉七糸一風一新才一 五位 橘長盛 右門 尾張守秋盛丶至延喜十二古一

藤長能 伊賀守 伊勢守倫寧丶寬弘六任伊賀守 拾七後廿詞二千七新四勅一今一糸一風一新千二新才二新イ一新糸二 鴨

長明 イ五下 鴨祢宜長繼丶季繼孫應保元十十七中宮叙爵千一新十今二遺一才二玉一糸一風二新千一新才一新イ一新糸

二 枇 大臣 枇杷左〻 仲平 昭宣公丶古一巽八〻 贈太政 拾一續一糸一新千一 空 凡僧 空也上人 天曆三九於東山西光寺入滅云〻

拾一新一千一勅一玉一

九 柔 内親 柔子内親王 齋宮のみこ 宇多延喜同女巽一 紀 内親 紀内親王 桓武二丶巽一 按 御息 按察御息所 正妃也左大臣右衛丶

拾一 南 女王 南院式卩卿 貞保 親王女 淸和第四丶巽一 坂 女房 坂上南松女 巽一 堯 僧都 堯孝 才大 權大僧都堯尋丶新糸六 屎

女房 屎 久曾 源作女 ツクル 古一 俊 中納 藤俊忠 才中 大納言忠家丶金三詞一千十七新三勅四續一遺三才一玉一戈一糸一新千一新

才一新糸一 散三 藤俊成 皇太后宮大夫 中納言俊忠丶詞一千廿六新七十二勅廿五續廿九今三十遺廿二才十八玉五十七戈廿糸十四

風廿八新才十四新イ九新糸廿一 四位 藤俊蔭 中納言有穗丶至延喜廿一古一巽一今一 源俊 フケル 近江守少將 使宣旨 左大臣唱丶至天曆

九巽一 源俊賴 木工頭 大納言經信丶道方孫天仁三正廿八兼越前介金廿詞 故 十千五十二新十一勅十二續四今十三遺三才

三玉八戈六糸六風十五新千五新才六新イ五新糸十二 凡僧 俊惠 木工頭俊賴朝臣丶詞一千廿二新十二勅五續二今五遺三

才三玉一戠三糸三風五新才七新イ一新糸六 女房 藤俊蔭女 拾一續一 皇太后宮大夫俊成女 新十九勅八 侍従具定母 續十

俊成卿女 今八遺八才六 俊成女 玉六戈六糸六風五新才四新イ五新糸七 重 大納 源重光 代明親王一丶康保元三中將 長德

四薨拾二續一新糸二 五位 源重之 左馬助 散位兼信丶至貞元元長保於奥州卒拾十二後十四詞二新十一續五今一玉十二糸二

新千一新才三新イ一新糸二 庶女 重之祖母 拾一 信 四位 源信明 陸奥守 左大弁公忠ヽ康保二十八卒巽現五拾故一新一勅二

續一玉一戈二糸二風一新千一新才三新イ一新糸一 藤信実 前備後守 前右京才大夫 前左京大夫隆信ヽ法名寂西勅十續十六今廿八

故遺十九才一玉六糸五新千四新才九新イ八新糸六 五位 平信臣 左馬頭 定文一ヽ拾一 藤信賢 右兵衛佐 先祖可尋拾一 秋 六位 紀秋

峯 古二 幽 律師 幽仙 興 右中將宗道ヽ古二 英 四位 天慶四卒 源英明 左中將 前藏人頭 齋世親王ヽ母菅永相女巽一 美 小野美材 掃部頭 参議

岑守ヽ延喜二卒古一巽二 後 帝王 後白河院 雅仁 同崇徳 鳥羽也 千七 院 製 新三 後白河ヽ今一玉三新千一 後鳥羽院 尊成 高倉ヽ新卅三

續廿九今四十九遺十七才十玉十八戈十四糸十風廿七新千（ママ） 新才十二新イ七新糸十八 後嵯峨院 邦仁 土御門ヽ續廿三 太上

天皇今五十四 同 遺卅一 後嵯峨 戈廿三玉 九戈十一糸十一風七新千九新才十一新イ五新糸八 摂政 後京極摂政 太政大臣 良経 後法性

寺ヽ千七 左近中將 新七十九 摂政 太政ミ 勅卅ヽ一 後京極 續廿七遺廿才十二玉十三戈十二糸九風十五新千九新才八新イ十一新糸二十

八 大臣 後徳大寺左大臣 實定 大炊御門右大臣ヽ千十五新十六勅九續二今四遺四才三玉九才四糸一風一新千四新才二新

イ一新糸二 後久我太政ミ 源通光 土御門内大臣ヽ新三 左衛門督 勅五 前内ミ 續四今二遺二才四玉（ママ） 戈一糸一風（ママ）後久我 太政ミ 新才四

新イ一新糸六 後八条入道前内ミ 藤実継 大納言実継同人也新才七 実継 新イ五 前内ミ 新糸十四ヽ一 後八条 持 皇女 持統天皇

天智ヽ新一勅二 是 親王 是忠親王 光孝ヽ巽二 中納 源是茂 民部卿 光孝ヽ天慶四薨五十七巽一 五位 坂上是則 田村

將軍ヽ古七巽五拾三新七勅一續一今五戈二糸一新千二新才二新イ一新糸一 女王 是忠親王女 セカヰノ君ト云 巽一 貞 貞

數親王 清和ヽ巽一新才一 貞元ミ 清和第三ヽ母治卩卿仲統女号閑院親王承平元薨巽一 貞信公 昭宣公四ヽ

号小一条 故 巽六 内四首 太政ミ拾一 小一条 太政ミ新一 貞信公 勅一續一 五位 小野貞樹 有見王ヽ可尋貞觀言二 平貞文 左少將好風

丶平仲 字也 ト云古七巽六拾五新一續一戈一新千二新才一 承 凡僧 承均 元慶頃人古二 女御 承香殿女御左大臣顯光丶延喜女御

一条院イ 拾一千一 恒 大臣 恒德公 藤爲光 九条右大臣丶後一 法住寺 太政〻 新糸一 五位 坂上恒蔭 長門守 イ 自延喜十八至延長三巽一 直

四位 橘直幹 長門守長盛丶至應保四巽一 現 保 五位 慶滋保胤 丹波介加茂忠行丶近江掾忠行丶長德四卒拾一 相 五位 藤相如

出雲守 內藏頭助俊丶至永祿元詞二 故 勅一續一風一新千一 不知官位 高岳相如 拾一 則 五位 大窪則善 勘解由次官 至天德四巽一 庶女 則

忠女 拾一 春 五位 小野春風 至寛平古三巽四

十 祐 五位 平祐擧 駿河守太皇大后宮大進 越前守保衡丶至長和四拾二詞一 能 四位 大中臣能宣 祭主 祭主賴基丶拾六十四後廿四新十勅二

今二玉二戈二糸二風五新千一新才一新イ二新糸一 凡僧 能因 肥後守 長門イ 橘元愷丶俗名永愷學生無官出家日能因世称古曾部

入道元任父也或云長久元卒 五十 後卅一金二詞四千三新十勅三今三遺二玉二糸二新才一新糸二 亭 帝王 亭子院 光孝丶

又号寛平或号朱雀院巽四 法皇御製 新一 亭子院 續一 同 今一新千二新才三 亭 丶新イ一 同 敏 四位 藤敏行 按察使富士麿丶寛平九

任左兵衛督古十九巽四今一玉二戈一新千一新イ一 五位 橘敏仲 伊賀守 中納言公賴丶大（ママ）慶六左少將藏人九十一正五下天暦

元卒 三十 庶女 橘敏近母 拾一 躬 五位 凡河內躬恒 延喜廿一正卅任淡路才掾古五十八巽廿三拾卅五新十勅六續七今十二

玉十八戈六糸五風一新千六新才七新イ三新糸二 浮 五位 源浮 肥前守 大和守精丶至承平三巽一 峯 六位 上野峯雄 古一巽

一 神 凡僧 神退 古一 草 不知官位 高向草春 拾一 家 中納 大作家持 大納言旅人丶拾三新十一勅十六續三今八玉六戈三糸四風

五新千二新才七新イ一新糸四 散二 藤家隆 イ二 前中納言光隆丶千四新（ママ）イ四上 勅四十三續十八今四十一遺十六戈十七玉

十五戈十糸十二風十五新千八新才十九新イ四新糸十四 師 大納 藤師氏 按察 天慶七參議天德四中納言安和二大納言天

禄元薨貞信公丶称海人手古良巽一新一勅三今一戈一糸二新糸一　五位源師光右京大夫　大納言師頼丶正治二御百首詠之法名蓮生在仁安三
現千六新三今一才一糸一新才三新糸四　六位上大春日師範隼人佐御書所預　巽一　時中納平時望　中納言雅範丶承平七任中納言天慶元
薨巽一　四位藤時雨トキフル　太皇大后宮亮積善孫散位典照　昭イ　丶巽一　五位上紀時文大膳大夫内藏助　木工才頭貫之丶至永観二後二續一今二
庶女平時望卿妻　巽一　旅大納大伴旅人　大納言安麿丶新一勅一續一今二玉一戈一新千一糸一　素九僧素性　藏人頭左少將
良峯宗貞丶古卌四巽七拾二新二續二今二才一玉二戈一糸二新千一新才二新彳三新糸一　致四位源致方右大弁　六条左大
臣丶拾一

十一　通中納藤通俊　大貳經平丶後五金三詞三千二新二勅一今一遺一戈二糸二新千一新才（ママ）新糸三　五位藤通頼右衛門尉　才左
少弁雅成丶至正曆四拾一後一　國大納藤國經按察　古一今一　散二藤國章　参議元名丶童名宮大夫拾四　四位津守國助　神主
国平丶今一遺四　五位　才十六玉一戈廿糸十新千十三新才二新彳六新糸四　津守國冬　神主國助丶才四玉一戈十糸七新千
十一新才六新彳十新糸五　五位藤国用前肥奥守　左馬頭季方丶至永延二拾一　津守国基住吉神主　彳五下忠康丶延久元叙爵後三金
二詞一新一今一遺二戈一糸一風一新千一新彳一新糸二　庶女藤国用女　拾一　教参議藤教長　大納言忠教丶詞二千十新一
勅一續二今三遺一　前参議　才二玉二糸一風五　前丶丶　新千一新才二新彳一新糸四　眞四位藤眞忠左馬頭　左大臣恒佐丶至天暦
四巽一　凡僧眞静御導師　古二巽一　眞延　巽一　庶女藤原眞忠女　巽一　基五位藤基俊左衛門佐（ママ）　右大臣俊家丶至承暦三金故三詞一千
廿二新七勅九續千六今四遺四才五玉五戈五糸五風五新千六新才七　藤基綱参議（ママ）　後藤大夫判官基清丶基政父也勅一續三
遺一今一新千一新糸一　昇大納源昇（ママ）民部卿　河原左大臣融公丶延喜十八薨巽一勅一　寂凡僧寂蓮　中務少輔俗名定長俊海

法師ヽ建仁二七十九卒千七新卅五勅九續七今八遺五戈三風三新千四新才六新イ三新糸六 寂然 丹波守爲忠ヽ俗名爲
經千三新二勅二續一今一才一玉一糸一新千一 勒 内親 勒子内親王 四品 延喜ヽ母更衣周子天性柔順容止可觀先帝鍾愛教鼓琴
之妙配九条右大臣于時才中納言云左衛門督天慶元十二薨巽一 黒 六位 大作黒主 古四巽三拾二 三イ 糸一新千一 不知官位 高市
黒 主イ 人 玉一新才一 貫 五位 紀貫之 天慶八三廿八任木工頭天慶九卒古九十八 奥ニ別書哥三首 合百一首也 巽七十七拾百十二新卅二勅
十四續九今十六玉十四戈四糸五風廿八新千六新才十三新イ四新糸三 望 五位 坂上望城 石見守 加賀介是則ヽ至天延三拾一
後二 六位 紀望行 古一 倚 五位 橘倚平 日向守 飛彈守是輔ヽ正臣孫至天元三拾一 深 五位 清原深養父 内匠大允于時藏人所雜色 筑前介海雄孫
豊前介房則ヽ古十四巽四拾一新五續一今一玉一戈一新千一新才三新イ一新糸二 崇 帝王 崇徳院 顯仁 鳥羽ヽ千廿三勅四
今三遺二續三戈一風八新千二新才二新イ二新糸四 高 散三 藤高遠 太宰大貳 從三齋敏ヽ拾一後八詞三勅二今四玉二戈一糸一
新才二 太宰大貳 新イ一 同 新糸一 同 四位 藤高經 右衛門督藏人頭 イ四下 中納言長良第二ヽ至寛平七巽一 五位 宮道高風 右京亮 至天慶三巽一
藤高光 左少將 九条右大臣ヽ至應和元 号多武峯上人如覺 拾四新六勅三續一今二玉一戈一糸一新千一新才一新イ一 六位 菅野高世
古二 内親 高津内親王 桓武ヽ嵯峨女御古一巽一 常 親王 常康親王 仁明ヽ雲ウ林院ノミコト云古一 大臣 常盤井入道前太政ミ
藤実氏 西園寺ヽ勅十六 内ミ 續卅一今六十三 入道前太政ミ 遺卅一 常盤井ヽ｜ 才四十玉卅戈十三糸十新才七新イ九新糸七 清 攝關 清
愼公 藤実頼 貞信公ヽ号小野宮太政大臣後九 左大臣 拾八ヽ｜ 小野宮太政 新四 清 勅一續一今二玉四新千二新才一新糸一 大臣 橘
贈太政ミ 清友 參議奈良麿ヽ古一 大納 源清蔭 正三 陽成院ヽ天慶四薨巽四拾一新一勅一 四位 安倍清行 大納言安仁ヽ至寛
平七古二 藤清輔 左京大夫顯輔ヽ治承元六廿卒千廿新十二勅九續五今六遺三才二玉八戈一糸二風七新千二新才六新

イ二新糸六｜五位｜橘清樹（阿波守）｜遠江守教雄ヽ至昌泰二年古一｜藤清正（左少將）｜中納言兼輔ヽ左中將利基孫巽七拾三新四勅一

續二玉五戈二糸一新千一新才一新イ二｜六位｜宮道清樹（内膳典膳）｜古一｜佐伯清忠｜拾一｜庶女｜清正母｜巽一｜清成女｜巽一｜清正娘｜拾

一｜惟｜親王｜惟喬親王（四品上野太守）｜文徳第一ヽ号小野宮母名虎女古二 これたかのみこ 巽一 こわかきみ 新一糸一新千二｜五位｜藤惟成（[illegible]）｜左

少弁雅材ヽ世号五位攝政至寛和二拾一詞三新五勅一續一新千（ママ）新イ二｜六位｜藤惟幹（陸奥掾）｜古一｜紀惟岳｜古二｜凡僧｜惟済｜巽一

｜庶女｜惟喬親王女｜巽一｜盛｜親王｜盛明親王（上野太守）｜延喜ヽ巽一拾一玉二戈一｜庶｜中納｜源庶明（[illegible]）｜三品齋世親王ヽ天暦五正中納言イ

三位 勅叙三位之時着大臣袍是流例也 巽三拾一｜淑｜參議｜紀淑光（右大弁イ三）｜中納言長谷雄ヽ巽一｜四位｜紀淑人（河内守）｜長谷雄卿ヽ至天暦二古一｜五位｜

紀淑望（大學頭）｜中納言長谷雄ヽ延喜十八卒古一新一｜康｜六位｜文屋康秀｜元慶三任縫殿助古四巽一｜庶女｜康貞王母｜筑前守成

順女仍号筑前母伊勢大輔太皇大后宮女房後九金三詞一千二新四勅六續一今一玉一戈一糸一風三新千一新才二新イ一

新糸一｜健｜凡僧｜健守｜拾三

十二｜善｜四位｜源善（左中將）｜右衛門督舒ヽ寛平五右少將延喜元左（ママ）選巽三二｜凡僧｜善祐｜皇太后密通之事ニ依テ伊豆ニ配流ス拾一

｜庶女｜春澄善縄女｜善縄者貞觀二參議三式卩大輔十二イ三位薨七十三 巽一｜棟｜五位｜在原棟梁（[illegible]）｜左中將業平ヽ昌泰十一

卒古四巽二續一｜順｜帝王｜順徳院（守成）｜同土御門續七今卅五遺十二才十二玉十一戈六糸八風十四新千八新才六新イ九新糸

十三｜五位｜源順（能登守）｜左馬允擧ヽ至天元三拾廿四後三詞一新二續一今二玉六戈一糸一風二新千一新才一新イ一新糸一

｜景｜諸王｜景式王｜上野太守惟條親王後裔古二｜五位｜源景明（長門守）｜大藏大輔兼光ヽ拾一新一｜陽｜帝王｜陽成院（貞明）｜清和ヽ巽一

｜堀｜帝王｜堀河院（善仁）｜白河ヽ金四千一新一續一今一｜大臣｜堀河右ミヽ（[illegible]）｜御堂ヽ後十八金三詞三千一新二勅一續一遺一戈

二糸一新千二新才一**兼**（中納）藤兼輔（右衛門督）延長五中納言八兼右衛門督承平三薨古四巽廿[illegible]新七勅二續四玉三戈一

糸一風一新千二新才一（才中）新イ一（中）、一（参議）藤兼茂（右兵衛督）左大將利基、延長元薨古二巽二一（諱王）兼覽王（イ四下山城守）四品惟喬親王

、古六一（四位）藤兼三（陸奥守）中納言山蔭、至延喜五巽一一（五位）平兼盛（駿河守）兵卩大輔旧行、至天元二拾卅五後十七詞六今四

續三玉二戈二糸三風一新千三新才一新イ一新糸二一源兼澄（加賀守）鎭守府將軍信孝孫陸奥守信明、至寬和四拾一後七糸

一一源兼光（春宮少進大藏大輔）參議正明、至康保三拾一一源兼昌（皇后宮少進）攝津守俊輔、師良孫至天永三金（故）二詞二千二勅一新千一一（凡僧）

**兼藝**　伊勢少掾古之子古三兼好戈一糸一風一新千三新才三新イ三新糸六一（康女）兼覽王女巽一兼茂朝臣女巽一（不知官位）兼

**盛弟**　拾一**賀**（凡僧）賀朝巽一拾一一（神明）賀茂拾一新二玉二風一**雄**（六位）下野雄宗古一**惠**（凡僧）惠慶（播广講師）寬和頃之人拾

十八後十一詞二新七勅二續一今三玉三戈二糸二新才一新糸一**隆**（四位）藤隆信長門守爲經、至壽永二詠之（正治二御百首）千七

新三勅六續二今五遺二才六玉四糸二風十新千五新才五新イ一新糸五一藤隆祐從二位家隆、勅二續四今七（四位）遺五才

三玉二戈八糸二風四新千二新才二新イ一新糸四**爲**（大納）藤爲家（前大）中納言定家、法名融覺勅六（右兵衛督）今四十二續十

一遺四十三才廿九玉五十一戈廿八糸廿二（已上前大）風廿六新千廿一新才廿六新イ十六新糸十一藤爲氏（前大）前大納言爲家、

法名覺阿續六今十七（中納言）遺十九（前大）才廿六玉十六戈四十一糸廿二風八新千廿五新才九新イ十四新糸十二藤爲世（前大）

前大納言爲氏、法名明釋遺六（四位）才廿玉十一戈卅四糸卅風七新千四十一新才廿九新イ十四新糸六藤爲兼（前大）前右兵

衞督爲教、遺二（四位）才九（前中）玉卅三（才大）風五十二新千十六新才八（前大）新イ六（同）新糸三（同）（中納）藤爲相（前）大納言爲家、才四

（四位）玉十三（參議）戈三糸三（前中）風十八新才五新イ二新糸四藤爲藤大納言爲世、才六（四位）玉九（左中將）戈十七（中納）糸十三（民卩卿）風四新千

廿一新才廿七新イ十一民新糸十一藤爲重（才中元四位）右中將爲冬、新千二新才二、｜朝臣新イ廿四中才新糸九同散二藤爲敦（前右兵衛督）
前大納言爲家、續二今四遺七前右兵衛督才四玉十一戈四糸二新千三新才二前右兵衛督新イ一同四位善滋爲政（文章博士）前能登守保章、
拾一後一千一新一藤爲賴（太皇大后宮大進）刑卩少輔雅正、至長德二拾五後二千一新一續一遺一風一五位橘爲仲（太皇大后宮亮）主殿頭
義通、至應德二十廿一卒後二故詞二新二玉二風一新糸一五位藤爲世（兵衛尉）散位忠相、至天慶九巽一大江爲基（攝津守）參議
左大弁齊光、至永祚元拾四後一詞一藤爲長刑卩少輔雅正、至天元二拾一後一源爲憲（伊賀守）筑前守憲幹、寬弘八八
卒拾一藤爲時（越後守左少弁）刑卩少輔雅正、至寬弘八紫式卩父也後三故新一朝大納藤朝光忠義公、長德元三卒拾四大納言後
二左大將新三同勅一按察續五左大將今一同遺一同玉四糸一風一新千二大納言新イ一左近大將中納藤朝忠才大三条右大臣、天
曆六參議康保三中納言同年薨五十七巽四拾三新一勅三今一玉一戈三糸一新千二新イ一參議大江朝綱イ四下玉淵、天
德元薨七十二現巽二四位藤朝賴左大臣定方、至康和二巽一六位文屋朝康（大膳少進）康秀、仁和後也延喜三任大舍人允古一
後二滋五位小野滋春イ七延長八十一廿一任掃卩頭至寬平五古一藤滋幹（左大弁）大納言國經、延長六右少將巽二六位在
原滋春（內舍人）左近少將業平、古六勅一族女藤滋包女（カヌ）巽一藤滋幹（基イ）女或藤原淸平、巽一登五位貞登（備中守）仁明帝、
至寬平六古二凡僧登蓮詞一千四新一勅一續一今一遺一玉一糸一風二新千一新才一新イ一新糸二勝六位藤勝臣（?內舍人）
イ五下肥後介左生、元慶七任越後介發生古二僧都勝延右京人笠氏古一凡僧勝觀拾一淳六位伊香古淳行古一粟攝關
粟田贈太政大臣（道兼）拾一粟田右丶今一丶｜粟田贈太政遺一風一攝政新千二關白丶｜東三条攝政兼家、喜凡僧喜撰古一王六同人歟不審
喜玄拾一富大臣富小路右丶（顯ヵ）本院左大臣、天曆三大納言九右大將天德元左大將四右大臣康保二薨六十八巽一

閑大臣閑院左ミ冬嗣右大臣内麿ヽ巽二五イ閑院 延喜頃之人古二巽一新才一閑院大君巽三拾一今一等参議源等ヒトシ中納言

中納言希ヽ天暦五三十薨 七十二 巽一

十三當五位源當純マサスミ少納言右大臣能有ヽ惟喬親王孫兼覧王弟至延喜十一古一經大納源經信太宰帥中納言通方ヽ後六金廿六詞一

千一新十六今五遺一玉三戈三糸二風二新千二新才六新イ三新糸四四位源經房 文章博士拾一五位阿保經覧主殿頭右大夫海令

雄後改姓爲小槻至延喜十一左大夫古一新才一藤勝臣肥前守大學頭佐高ヽ拾一源經基上野介四品貞純親王ヽ天暦八五十

五叙正五下拾一ヽ藤經衡大和守中宮大進公業ヽ延久四六廿一卒後八詞一千三新二新才一新糸一萬六位難波萬雄ヨロツヲ古一

源法眼源賢攝津守滿仲ヽ後一源承大納言爲家ヽ遺三才八玉一戈四糸一新才五新イ二徽女御齋宮女御徽子女王民卩

卿重明親王ヽ天暦女御母貞信公女拾四後七新十一續一今三女御徽子女王 玉九糸三新十二女御徽子女王 新イ一新續一愛女房愛

子宮イ西宮左大臣室九条右大臣女中納言經房母拾一敬女房尼敬信目錄云因香朝臣母古一遍僧正山遍昭大納言安世ヽ

俗名少將良岑宗貞寛平二入滅 七十六 古七十イ十六巽五拾四新二今二玉一糸一新千二頓凡僧頓阿小野宮大納言能實末葉法

印仁譽眞叓也二階堂下野守光貞ヽ俗名同姓貞宗戈一糸一風一新千四新才九新イ八新糸十九義四位良岑義方左中將參

議衆樹ヽ丹波守農直孫承平六右少將天慶三藏人八中將天暦元卒巽一五位藤義孝右少將謙德公ヽ天延二九十六卒後勅風等ニ出

タル義孝ハ前伊勢守ニテ別人也 拾三後七詞一新二續一今二糸一風一新千一女房權中納言義懷女拾一業四位在原業平右中將阿保親王

ヽ元慶三正廿八卒古三十九巽十一拾三新十二勅八續八今五玉三戈二糸二新千二新才一新イ一新糸一嵯后宮嵯峨后嘉

知子贈太政大臣橘清友ヽ深艸帝母嘉祥三崩 六十二 巽一聖正僧聖寶東恒薩王子弘法大師弟子後謚日理源大師古一化人一

聖徳太子 用明丶拾一風一 圓 帝王 圓融院 守平 村上丶拾二詞一新六勅二續一今二遺一玉一戈一糸六新才一新イ一 凡僧

圓位 西行ノ本ノ名也 西ノ下ニ委 敦 親王 敦慶親王 三品兵部卿 延喜四薨宇多五丶号桂ノミコ 巽三 敦實 ミ 式部卿 宇多八丶天慶四出家康保四薨

巽一 中納 藤敦忠 才中 天慶二參議左中將五才中納言六薨 廿八 巽九拾四新二勅二續一今一玉一戈二糸一風一新千二新イ

二 五位 藤敦敏 左中將 清愼公丶巽二 女庶 中納言敦忠母 在原棟梁丶巽一 寛 四位 源寛信 式部卿敦実親王丶至天祿三拾一 凡僧

寛祐 拾二 女庶 寛湛法師母 中納言公頼室巽一 道 大納 藤道綱 左大將 法興院丶詞一勅一 右大將 散三 藤道雅 左京大夫 内大臣伊周

丶後五詞二 四位 小野道風 大貳葛經丶巽一 後イ 藤道信 左中將 恒徳公男太政大臣爲光公五男攝政御子正暦五卒廿三拾二

後十一詞一千五新九勅四續二今二遺二玉二風三新千一新才一新イ一 五位 源道濟 佐渡守方国丶信明孫寛仁三卒拾一

後廿二金一詞六千一新五續一今二玉三戈二糸二風一新千二新才四新糸二 凡僧 山 道命 天王寺別當 右大將道綱丶阿闍梨後十六

詞九千九新四續一今三玉二戈一糸二風一新才三新イ一新糸三 道因 治部丞清孝丶俗名敦頼馬助現存和哥集撰之序云

長寛第一緘暮夏之月詞云洛下進老山邊隔醍云丶千廿新四勅三續一今二遺二才一玉一戈一糸一風三新千一新才一新イ

二 女庶 右大將道綱母 陸奥守倫宣女拾七後七詞二新一勅四續一今一玉九戈二糸二風一新千二 菅原道雅母 拾一 雅 參議

藤雅經 イ三 刑部卿頼經丶新廿二 五位 勅廿續九今十四遺十二才七玉五戈六糸五風一新千五新才五 六イ 新イ十三新糸十七

藤雅有 前左兵衛督教定丶今一 四位 遺七 侍従 才十玉十二戈十糸五風二 前參 新千六新才一新イ二新糸十四 五位 藤雅正

中納言兼輔丶至應和元巽八 慈 僧正 慈圓 前大 山 法性寺殿丶千九新九十二勅廿四 慈鎭 續廿一今十一遺十二才九玉廿六戈六

糸七風十八新才六 内一首慈円 新イ二新糸十一 慈鎭 同人也

十四 萱（参議）藤菅根 左兵衛督良尚丶于時藏人頭イ四下古一（[illegible]）菅贈太政大臣母 拾一 博（散三）源博雅（皇太后宮大夫） 糸一 遠（女房）

小野遠興女 巽一 廣（親王）廣平親王 天暦丶天祿二九二薨拾一新糸一（大臣）廣幡左丶（贈九） 忠義公丶拾一（中納）安倍廣庭 左大

臣御主人丶養老比之人也拾一（御息）廣幡御息所 中納言廣明丶拾一（不知官位）久米廣繩 拾一 輔（散三）大中臣輔親（神人別祭主） 能宣朝臣

丶拾二後十四勅一丶丨（祭主） 今一玉三戈一糸一風二新千一新才二新糸一（五位）藤輔仁（春宮少進刑部大判事） 參議玄上丶至延長七巽一 菅原

輔昭 イ三文時丶天元五出家拾三新一（六位）藤輔相 号藤六拾卅七新才一 紀輔時 拾一 實（大臣）右大臣（実資） 実頼四丶于時

右大將号賢人右大臣拾一（四位）藤実方（左中將陸奥守） 侍從貞時丶母左大臣雅信女小一条左大臣師尹孫長德四十二月卒拾七後十

四詞三千四新十二勅三續二今三遺三玉八戈一糸一新千二新才三新イ一新糸一（五位）源實（信濃守右少將） 參議舒丶至昌泰三卒古

一（僧都）實因 拾一 興（六位）藤興風（河内大掾治部少輔） 相摸掾道成丶古十七巽五新四續三玉二戈二糸二風一新千一新才一 大江興俊（甲）

（斐者）後一 嘉（六位）大江嘉言（對馬守） 大隅守仲宣丶拾三後十詞五新五玉一糸（ママ） 風二新千二新糸一 增（凡僧）增基（山） 巽一後十二詞

三新一玉六糸一風一新十一 熊（凡僧）熊野藏 拾一 整（五位）源整（トヽノフ）（一本齊左衛門佐） 參議等丶至承平五中納言希丶大納言弘孫巽二 壽

（凡僧）壽玄 拾一 對（族女）對乃子 巽一 たいふの子

十五 蓮（凡僧）蓮生 俗名宇都宮弥三郎頼綱 左兵衛尉業綱丶勅三續六今一遺（故）五才七玉四戈二糸一新千三新イ一新糸二

儀（大臣）儀同三司（伊周） 伊ノ下ニ委 （族女）儀同三司母 イ三高階成忠母（ママ）前掌侍貴子号高内侍拾一後一詞一新一 褒（御息）京極御

息所（褒子） 京ノ下ニ委 衛（御息）衛門御息所（藤能子） 大將御息所同人也和泉大將定國右衛門督之時爲更衣（ママ） 大ノ下ニ委 滿

（四位）源滿仲 上総介經基丶天元六三廿五還任攝津守拾一（凡僧）滿誓 筑紫觀世音寺別當俗名笠朝臣麿イ四上拾一 諸（大臣）

井手左大臣橘諸兄 井ノ下ニ委 六位清原諸實ムサ子 巽一 廉 攝關廉義公賴忠 清愼公ヽ關白イ一号三条太政大臣巽二現故拾六新十勅九
今二玉一糸一風一新千二新才一 天祿三薨 慶 法印慶運 法印淨弁子風一 才律 新イ四新糸十三 篁 參議小野篁 參議岑守ヽ
古六新二今一玉二新千一

十六 醍 帝王醍醐天皇敦仁 亭子院ヽ号延喜御製巽三 延喜御ヽ 拾二新九勅三續七今六玉四糸一新千二 延喜御ヽ 新才一 同 新
イ一 同 新糸一 同 篤 五位平篤行 イ五上興我王ヽ延喜十卒古一 憶 五位山上憶良 新一勅一玉二續一 蔭 六位藤蔭基 [illegible]
江大掾 相摸守博文ヽ巽二 檜 女房檜垣女 巽一 賴 三位散源賴政 兵庫頭仲正ヽ詞二千十四新三勅三續二今四遺一才二玉五
戈二糸二風十一新千一新才二新イ二新糸四 藤賴輔 刑部卿 大納言忠教ヽ千五新三今四遺一 刑部卿 才二玉五戈二風二新
才一 刑 新糸四 同 四位大中臣賴基 肥後守輔道ヽ遠江守闕良孫至天曆五拾二玉二糸一風一新千一新才一新イ一 源賴光
攝津守 攝津守滿仲ヽ治安元七十九卒拾一後二 現故 六位源賴タノム 左馬允舉ヽ巽一 女房源賴女 巽一 親 五位藤親盛大和守 文章
生說弘ヽ下総守親通ヽ至建久二千五勅一續一才一玉一 範 三位散藤範兼刑部卿 式部少輔能兼ヽ千五新六勅一 刑部卿 續一
才一糸一新千一新才一 刑部卿 新イ一 同 新糸二 四位藤範永 尾張守仲清ヽ康平八六十一被任紀伊守後十三金一詞二千二
新三今一遺一戈一糸一新千一新才一新イ一新糸一 選 內親選子內親王 天曆ヽ母九条右大臣女拾一後七金一詞一千一
新一勅七續二今一遺三玉七戈二糸二風一新千一新イ二 齋 女御齋宮女御徽子女王 徽ノ下ニ委 濟 大夫藤濟時右大将 小一条
左大臣ヽ拾二新一勅（ママ） 續一新千一 左近大将 五位源濟近路守 參議等ヽ至天曆十一巽二

十七 鮮 御息所中將御息所鮮子朱雀院 中ノ下ニ委 謙 攝政謙徳公藤伊尹 正二太政大臣号一条攝政右大臣師輔ヽ天徳四八參議左中

将巽八 現左大臣敍 拾九新四勅一續一今二玉三新千二新才一新イ一 一女 謙徳公北方 代明親王ヽ拾一

十八 額 王諱 額田王イ五下大藏卿 勅二新才一 贈 宮后 贈皇后宮懐子 謙徳公ヽ花山院母后拾一

十九 稱 臣大 称名院入道前内大臣藤公畳 公ノ下ニ委 蟬 不知官位 蟬丸 巽一新一今一

廿 寵 女族 寵 從四上大和守清精ヽ古三 藏 女族 本院藏 本ノ下ニ出 鎌 臣大 鎌倉右ヽ源実朝 右大將賴朝ヽ勅十九續十二今七遺五戈三風七新千三新才二新イ二新糸四

廿三 龜 王帝 亀山院 恒仁 後嵯峨ヽ今十七 今上御製 遺十九 太上天皇 才卅一 法皇 玉七 龜ー 戈廿八 同 糸六風一新千六新才五新イ二新糸六 顯 二散 正 藤顯季 修理大夫 正四下隆經ヽ後一金廿詞四千六新一續二今一遺一才一戈一糸二風五新千二新才三 修理大夫 新糸三 同 源顯中 右大臣顯房ヽ金八四（ママ）八千一新二勅一續一玉一戈一新千一新才一伯 神祇 新イ一 同 新糸二 同 藤顯輔 左京大夫 正三顯季ヽ金十四詞六千十四新六勅五續三今五遺二才四玉六戈四糸三風五新千二新才三 左京大夫 新イ二 同 新糸一 同 四位 藤顯綱 前讃岐守 參議兼經ヽ道綱孫至應和三出家後三金二詞五千五新二勅二續一遺一玉一戈一糸一新千一新才一 藤顯仲 前兵衛佐 中納言資仲ヽ大納言資平孫應徳三正五叙イ四下金四千二新一勅一今三才二戈新千（ママ）一新糸一 法橋 顯昭 左京大夫顯輔猶子千十三 凡 新二勅一續一今四 法橋 遺一才一玉五戈一糸一風四新才一新糸四 族女 右大臣顯忠母 顯忠康保二年薨 大納言昇母集云藤原顯忠朝臣母 春下爲（ママ） 同人也大納言源甚女イ五下字大貳更衣巽一 麗 女御 麗景殿女御 代明親王ヽ拾一後一

廿五 觀 法橋 觀教 後ニ僧都 拾一新糸一

○族 女

**典侍** 典侍洽子（アマチイコノ）朝臣 三代実録云 十七 貞観十二二十九辛丑参議ｲ三位春澄朝臣善縄薨長女洽子爲正四下典侍同三十六元慶元二廿二甲子掌侍ｲ五上春澄朝臣高子改名洽子以觸中宮諱也糸所別當此人也古一 典侍藤因香朝臣 三代実録云 三十四 元慶二九十六戊申以散事ｲ五位下藤原朝臣因香爲才掌侍古四巽一勅一 典侍因子云々 典侍貞子朝臣 五條后宮姪女古

一 典侍明子 中納言敦忠ヽ巽一

**内侍** 前中宮内侍 巽二拾一 藏内侍 巽一 中將内侍 巽一 内侍平子 巽一 馬内侍 大和才頭時明ヽ一条院皇后宮女房拾二後十二千二新八續一今二玉一才一糸一風一新千一新才二新ｲ一 斎宮内侍 拾一勅一 周防内侍 周防守棟仲女白河院女房後四金四詞三千二新五勅四續一遺三玉二糸一新千二新才一新ｲ二新糸二 小式部内侍 陸奥守橘道貞ヽ母和泉式部上東門院女房後一金一詞一千一續二玉一新ｲ一 院弁内侍 後深草院也 信実朝臣ヽ續四今六 新院弁内侍 遺七 院ミヽ 才六 弁内侍 玉六戈二ミヽ 後深草院 糸二新千一新才二新後三新糸三

**宣旨** 大和宣旨 中納言惟仲ヽ三條院皇太后宮女房大和守義忠爲妻故号大和後三

**女藏人** 女藏人兵庫 拾一 三條院女藏人左近 拾三 春宮女藏人ミ 後五 俳小大君 千一新三ミ 三条ミ 續一才一遺一風一新十一新才一新糸二 女藏人三河 拾一

**命婦** 小貳命婦 巽一拾一 かつみの命婦 藤原賀徒見巽一 命婦清子 巽一 小馬命婦 前攝津守藤棟世ヽ拾一後一新一玉三 小侍從命婦 加賀守正光ヽ入道二品宮女房後二 監命婦 續一今一新千二新ｲ一

**大納言** 昭訓門院大納言 前大納言爲世ヽ才一 昭訓門院大納言 玉一 同 戈六 昭訓門院春日 糸五 公宗母 才中納言

中納言 承香殿中納言 巽一拾一

少納言 少納言 後生丶拾一 清少納言 清原元輔丶一条院皇后宮女房後二詞二千二續一今一玉三戈一

弁 出羽弁 前加賀守平季信丶紀伊守重經妹後五金一詞二勅一玉四糸一新千一新才一新糸一 少弁 越前守懐尹丶祐子内親王家女房後十五千二新三勅一續四今二遺一玉八戈一糸一 小弁 風一新才二新イ一新糸一

宰相 土御門院小宰相 從二家隆丶勅二 承明門院小宰相同人歟 續六今十二遺二才三戈一糸一風一新才四新糸四

侍従 本院侍従 筑前守棟梁丶巽一拾一新一勅一續一今二玉二戈一糸一新イ一 江侍従 大江匡衡丶母赤染衛門後六金二詞一千二新二新才二 小侍従 太皇大后宮女房 石清水別當光清丶母小大進号大宮小侍従千四新七勅五續二今六遺二才四玉十糸一風二新千二新才四新イ一新糸一

中務 中務 中務卿敦慶親王丶母伊勢巽七拾十四詞一新四勅四今三續七玉四戈三糸二風六新千五新才三新イ一新糸一

式部 和泉式部 越中守大江雅致丶 或懐平卿女 上東門院女房拾一 雅致女式卩 後六十七こ 和泉 金三詞十五千十一新廿五勅十二續十四今三玉廿二戈七糸五風八新千四新才四新イ四新糸二 紫式部 越後守藤爲時丶上東門院女房後三千九新廿四續三勅五今七遺三玉七戈一糸二風一新千四新才一 繪式部 散位平繁兼丶藤中宮女房後一

宮内 兼卿 延喜太皇大后宮宮内 拾一 後鳥羽院宮内卿 右京大夫源師光丶新十五勅二今三 後鳥羽丶 才一玉九糸二風一新千一新才三新イ四新糸三

右京 兼大夫 本院右京 重親丶巽一 建礼門院右京大夫 勅一玉一風六新千一新才一新イ一新糸二

**修理** 修理 内匠允葛原直行妹拾一勅一

**右近** 右近 右近少將季繩丶巽五拾三勅一

**少將** 閑院少將 巽一

**衛門** 竝右 右衛門 加賀守才兼胤丶巽一拾一 赤染衛門 大和守赤染時用丶実平兼盛丶拾一後卅二詞八十六 上東門院禾丶一
新十一勅一續六今三遺五玉七戈二糸二風六新千一新才五新イ一

**兵衛** 兵衛 藤高經丶古二 本院兵衛 巽一 兵衛 參議兼茂丶巽一拾一

**大貳** 二条太皇大后宮大貳 金一詞一千一勅六續一遺一玉五糸一新千一

**大進** 竝小 花園左大臣家小大進 式部大輔在良丶 內大臣家小大進同人也 金三千四勅一玉一戈一糸一新千一新イ一新糸一

**大輔** 大輔 但馬守胤丶古一巽十四玉一 伊勢大輔 祭主輔親丶上東門院女房後廿六詞二新七勅二續一今二玉一戈二
糸二新千二新才三新糸一 殷富門院大輔 民卩卿大輔在良丶千五新十勅十五續七今三遺三才一玉四戈二糸一風四新才
四新イ一新糸三

**乳母** 紀乳母 陽成院御乳母古二巽二 小貳乳母 巽一 兼忠卿乳母 巽一 大將御乳母少納言 拾一勅一 弁乳母 陽明門院御乳母
前加賀守藤顯時丶後七千三新二續二今一玉八戈二糸二新才一

**國名** 前齋宮河內 永緣僧正妹也号由利花云丶 俊子內親王家女房金二千三新一新才一 伊勢 大和守繼蔭丶 伊勢守丶宇多
帝御息所古廿二巽五十八拾十六新十五勅三續六今七玉十戈二糸二風二新千五新才三新イ二新糸一 駿河 巽一 相模

源頼光丶入道一品宮女房後四十金三詞四千五新十一勅十七續五遺一玉八戈四糸一風二新千二新才一新イ一新糸一

武藏 巽二 二条院前皇后宮常陸 千一勅一 信濃 日吉祢宜允仲丶後号後鳥羽院下野新二續六今六（後鳥羽院下野）遺一才一玉一戈一糸一風一新千一新才一新イ二 下野 下野守源正澄丶巽二 陸奥 従五下橘葛（クス）直丶古一 嘉陽門院越前 伊勢氏人丶新七勅四續一今三遺一才一玉二糸一新千一新才一新イ一新糸二 宜秋門院丹後 散位源頼行丶千三新九勅五續二遺二才四玉五戈一糸二新千二 因幡 因幡守基世王丶古一 祐子内親王家紀伊 散位經方丶母少弁後一（一宮紀伊）金三（同）詞二新一（祐子丶一）勅一續五今一玉四戈三糸四新千二新才一新糸一 讃岐 讃岐守安倍清行丶古二 二条院讃岐 イ三頼政丶千四新十六勅十二續三今六遺二才三玉八戈四糸二新千二新才三新イ一新糸四 土佐 巽一 京極前關白家肥後（一本京極前關白太政大臣肥後守定成丶）金八詞二千八新三勅六續七遺三玉五風三新才二（堀川院御百首作者也）皇后宮肥後同人也

所名 承香殿あこき 巽一

町名 一条 貞平親王母巽一拾一 三条 右京大夫娃丶古一玉一 八条院高倉 前大納言実長丶新七勅十四續六今一遺二才一玉一戈二糸一新千二新才二新イ一新糸一 待賢門院堀河 神祇伯顯仲丶金六（齋院六条）詞二（待賢丶一）千十五新二勅四續七今五遺四玉七戈二才七糸二風二新千一新才二新糸一

○同　假　名

た たほつふね 敦忠卿母弟棟梁丶巽一（或云敦忠卿若少之時養之故敦忠号御局オホツフ子ト呼成之云々）

# 宇多布くろ　二

# 歌袋巻之二

## 目録

### 詠格

よみかたに古今異同ある事
異名のよきよからぬ并ニ異名のあやまり
四季のよみかた述懐戀なとのよみかた
祝言と慶賀のわかれ

## 選辭

小点詞　制詞　不可庶幾詞并今世にて憚かるへしとする詞の故を

## 詞

かうふり詞
かさし
あゆひ

## 題

題につきてさま〳〵の心得をあく

○影の詞　これ最第一の大事なり。哥をよまん人。しらずはあるべからず。ふるき哥をも此心えをもてみざらん人は。ふめるあとをのみ見て。あしのかたちを思はぬたぐひなるへし。上つ世。中むかしの人は。これをおもひてはよまねど。今よりおしはかれば。おのづから。其いきほひをふくみたり。中ごろよりは。わざと。これにおもむけてよみけんとみゆ。いはんや。近むかしより後はつくり哥のみなれば。むねとある哥よみも。さらぬ人も。哥のよしあしをばいはず。心づかひ。またくこゝにあり。こゝにいひあきらむるは。初心の心えやすきことをのみあぐるなり。よくおもひいたらん人は。これにつきて。むかしにもさかのほるべし

むすび題の哥には。月影ことにあきらかなり。さらでも。題ある哥は。おほく物をむすびて案ずること。哥のつねなれば。むすび題ならずといふことなし。又題なき哥も。その哥よまんと思はするものは題ならずやは。無題。有題。むすひ題は。たゞひとつなる事をしるべし。さて。十七字の題たりとも。只おなじ心得なる事いふに及はず。されども題にむすびて出せるは。みつ子もみしるべしむすはぬ題の哥をみて。心はこれをむすべりとみるは。すこしめのちからいるへし。題なき哥に

題をあて。又むすひものをみしる事は。今すこしかたきわさなり
先月といふは題なり。又は心の主たる物なり一哥に。そのものふたゝひはよむましければ。今ひと
つ影をよみいるゝは。たとへはひかりあるものに。かけあるかことし。ひかりある物は。物さねな
れど。影をもちひて用をなす也。扨。花。時鳥。月。雪をよまんに。花に。櫻。梅。このもと。色。
香。春の山。名所は。影なり。時鳥に。夏山。五月雨。村雨。夕。夜。あかつき。はつね。一こゑ
は。影なり。月に。秋風。秋の夜。光。影。名所。くもる。すむ。槇のいた戸。山のは。木間は影
なり。雪に。冬。氷。あらし。ふる。下折。さむし。ふしのたかね。かひかねは影なり。かくいへ
は。そのものに。その影さたまりたる様なり。ゆめ〳〵左にあらす。今あけたる影の詞は。月とし
てみれは花時鳥。月。雪は。又影となる事いふに及はす。又よせ詞のはたらきによりて。よみとよ
むもの。影にあらすといふことなし。よせ詞あしければ。月に影とよめりとも。影ならぬものにな
りぬへし。これをしらすは。ことぢにかはさしけんたぐひなるへし。連哥する物のつけものとて
いひあつかふは。影をいへり。それだによき連哥師。心ある人は。つけ物さだまりたるやうにはい
はず。又連哥には。影のまへうしろをきらふことあり。哥はさることとなし

山霞　春の色とみやはとかめぬたちそめしあさまの山のけさのかすみそ　（分量霞影）　仙洞

瀧邊花　たきつせは霞のそこに音たえて雲よりおつる花のしら浪　（分量瀧影）　源兼氏

惜秋　折のこすきくももみちも限あれはをしむにとまる秋のいろかは　（分量）　相尙

雪未深　けふまては雪ふみわけてかへる山これよりのちや道もたえなむ　（分量）　觀意法師

以上結題の哥なり

田家夏雨　かりしほのそとものくちぬへしほすへきひまも見えぬさみたれ　清輔

隔一夜逢戀　玉くしけふたよとはすはあけぬまに行てうらみんと思ひしものを　雅俊

以上いくつむすひたりとも同しかるへし

櫻　春雨にぬれてたつねん山さくら雲のかつらのあらしもそふく　堀川右大臣

秋　露分てまはきにすれる袖よりも心そ花にまつうつりぬる　道晃法親王

思　下にもえうへは霞てかはらやの人たにしらぬみの思ひかな　隆祐

以上ひとつ題なり

○すゑ詞　哥をよむにところ文字入へき哥といらてもありぬへきとあり戀雑にも此心つかひ入へき事なれと四季の哥はことにこれをしりてよむへし四季ははる霞うくひすうめ櫻より冬雪あられ炉火鷹狩なとよむとても家の内ならすは庭軒はそともかとの外野山川つらうみのうへならすといふ事なし又は天象をよみ空とふかり雲に入鳥をよむとても其よむへきものゝありところ又はみつからのおりたる所をよみすゑすしては何となくおちゐぬ哥あり心をつくへし又朝夕夜あかつきなと時をよみいれてよみすうるもありところと同し所もしいらぬはことわりをのみよむ哥なり戀雑にもことわりをのみよまは所入らす風情にとりかゝらは所もしの心しらひ第一なるへしあなかちに其所其時とよみいてすともことはのうちに所時にあたるへきものあらはあえなん是も初心の哥になとやらん心はさたかにて哥おちゐぬはおほく此心つかぬゆゑなる事をみるゆゑにいふなり古もうす花（ママ）うす花さくら匂はすはといふ哥に山の字あらまほしき難有けるも只此事なり

一　春くれはやとにまつさくうめの花君かちとせのかさしとそみる　　貫之

一　天原ふりさけみれはかすかなるみかさのやまにいてし月かも　　安倍仲麿

二　世の中を何にたとへん朝ひらきこきいにし舟のあとの白浪　　曼沙

ィ　しほかまにいつかきにけん朝なきにつりする舟はこゝによらなん　　讀人しらす

一　今はとて君かゝれなは我やとの花をはひとりみてやしのはん

○なくて叶はぬ字　初心の哥をよむになくてあるまじく。かならずよむべきもじをはつして。いたづらなるもじをよみいるゝなりいたづらなるもじを。あるじとしてよめるにはあらず。よみもてゆくまゝにあるは五もし七もしなとあまりてよむへき事もなき様におほえてさりとてあるべきならねば。いたづらなりとしる〳〵。もじを置也。よく思はゞその所にはえうなるもじいるべきをしるべし。さる故に。まづ心を置さだめて後は。かゝる心には。何かしといふこと。よますはあらじといふもじを思ひうべきなり

一　年のうちに春はきにけり一とせをこそとやいはん(ママ)とやいはん　　在原元方

一　うたゝねにこひしき人をみてしより夢てふものはたのみ初てき　　小野小町(ママ)

○花を月にかへられぬ哥　心をもからくもとめいて詞をもかしこくつくりたりおほゆるうへに事た

（ママ）らぬば。あるじとせるものを。ことものにもよみかふべきをしらぬ也。たとへは月をよめる哥に月の字を花とかへてもあるべく。春きにけりとよむ哥に其所を秋きにけりとかふればあまりの所さながら秋にてもあるべきは。大なる病なりこれをさらんには影の詞をしりてよくおきぬれは此病さるべき也

大かたは月をもめてしこれそこのつもれは人の老となり（ママ）もの

いつかたへ秋のゆくらんわかやとにこよひ斗は雨やとりせよ

しくれつる雲を外山に分すてゝ雪にこえ行あしからの關

月を花にかふれはつもれはは影なり秋を春にかふれは雨やとりは影なり雪を月にかへては影なしこれらにて心うへし

○題をあらはす事　題の文字をうちつけによみいだすへからすとは鶯といふ題をとりてはまづうくひすのとよみ。鹿といふ題をえてさおしかのとうちいつるをわろしとするなりまだしき人の一首のもとすゑをもおもひさためず題のまづめにつくまゝによみいでゝ下句にいたりてよむべきことのふつとなきまゝにあいなきおこごとよむものなり。ある人の山家の夘花といふ題をとりて山ざとの垣ねに（ママ）咲外花はとうちいでゝ下につくべき心もなけれはわきかへぬれる心ちこそすれとよめるを阿仏

尼をひきていましめ置給ひきされともすへてわろしといふにあらす

鶯　うくひすの谷のふるすの隣にてまたかたかとの初音をそ聞　小侍從

同　鶯のやとしめそむるくれ竹にまたふしなれぬわかねをそ鳴　定家

鹿　さおしかのこゑしきるなりみよしのゝいさかた山に妻やこもれる　寂蓮法師

同　棹鹿のつま待明て朝ふしにしからみやつすをのゝ秋くさ　爲家

などうちいでゝよめる哥かずしらずみゆめり。影の詞。よせ物。上下にまくばりたしかならば。題の文字。いづくにありとも難なし

○結題のまゝによみいるゝ事　朝霞を。あさがすみ。野虫を。のべのむしのね。深山鹿を。みやまのしか。夕時雨を。ゆふしぐれ。夜千鳥を。さよちどりなどよみたらんは。無下にあさく聞ゆといへるも。かならずよむべからずといふに。あらざること。前條に同しといへど。むげにうちいだし心あさからんことをきらふがためこれをいましむるなり。たゞし。春曙。秋夕の二題は。むかしよりさゝへてよむをはゞからず

春曙　名もしるしみねのあらしの雪とふる山さくらとのはるの曙　定家

秋夕　なかむれはすゝろに落る泪かないかなるときそ秋の夕くれ　入道太政大臣

○易題難題のよみかた　よみやすき題は。すこしやうありげによみ。よみがたき題は。やすらかによむべしと。古式にいへるは。やすしとてあなどる時は。一首のうちに。思ひこめたる事もなく。いひもらしたる老楓病とて。心あさき哥をよみ。或は。かたしとて。あまりにちからをいりすぐせば。そこゝ。ひぢいりて。さまわろく成やすきならひなれば。此のりをもふけられたるにて。やすき題なればとてひぢ入たるはわろく。かたき題にても。心あさくおいらかなるはよからず。いづれも。心をよくめぐらし。姿詞やすらかによむへし

○雜題に季をよみいるゝこと　當季をきらはず。他の季をよむべからずと古式にいひ置れたれと。頓阿法師は。定家卿の承元二年五月松尾哥合社頭雜（神かきや我身のかたはつれなくて秋にそあへぬ葛のうらかせ）又建保五年五月哥合松經年（手向くさ露もいくよか契置しはま松かえの色もかはらす）といふ題に。ともに秋をよみ入給へるをひきて。當季にかぎらずといはれけれど。今は猶。古式にしたがひ。當季のほかはよまざるなり

○兼題と卽時との別　兼題には。花をたつねて。柳をたつねず。郭公をたづねて。鶯をたつねず。厂がねをまてども。鹿虫のねをまたず。初雪をまてども。時雨霰をまたず。花はいのちにかへておしめども。紅葉をせめておしむことなし。此たぐひ。ことなる秀逸にあらざれば。詠格をはづしてよむべからず。又題をもてなすと。そむくとあり。たとへば月に雲をかけ。花に風をふかせなどす

るは。まほならず。たとへは。春の月をさやかなりとよみ。秋の月をおぼろなりとながめ。春雨。五月雨のはれやすき。夕立。時雨のしめやかなるおもむきなどは。わざとこのみよむべからず。たゞ秀逸のよまれし時は。さて置へし

かすみつゝ花ちる峰の朝ぼらけのちにや風のうさもしられん　宜秋門院丹後

此哥いにしへよりよしといひ。又古今にてもちるぞめでたき櫻花ともあれど。つねにはたゞ花ならはちらざる花。月ならばくもらぬ月をよむへし。落花。曉月をよむべからず。當座の會。卽事。卽興には。めのまへのけしき。有さまにしたがひ。花さかぬ山にも花さかせ。紅葉せぬ所にももみちせさするは。つねのことなるへし。さならぬときは。いくたびも。ふることをよむべし

うくひすの鳴をよめる　木つたへはおのは(ママ)風にちる花を誰におほせてこゝらなく覧　素性

弥生つごもりの日雨のふりけるに藤花を折て

ぬれつゝそしひてをりつるとしの内に春はいくかもあらしと思へは　業平

山さくらをみて　み山木のふたはみつはにもゆるまてきえせぬ雪と見えわたるかな　平公実

吹風にあつらへつくる物ならは此一もとはよきよといはまし　よみ人しらす

これもその時の事を題にしたれは猶かくしてよめる例なり

紅葉浮水　いかたしよまてことゝはん水上はいかはかりふくみねのあらしそ　資朝卿
月照水　すむ人もあるかなきかの宿ならし芦間の月のもるにまかせて　經朝卿

これらは今みるさまにゆつりて題をつくさぬなり
○題をかくしてよむ事　これは上手のことにて。初心のともがら。みだりによむへからずと。古式にあれど。ひろき題には。つねにあることぞかし

春駒　はるふかみ尾花あしけの見えつるは引たかへたる心地こそすれ　俊頼
牡丹　咲しより散はつるまてみしほとに花の本にて廿日へにけり　よみ人しらず
紅葉　下葉まて心のまゝにそめてけり時雨にあける神なひのもり　後京極攝政

結題にては。一をあらはし。一をかくしてよめる例おほし

松鶯　わかめかる春にしなれはうくひすも木つたひわたるあものはし立　頼政
山花留人　斧の柄はこの本にてやくちなまし春を限らぬさくら成せは　大中臣公忠

結題にてこと〳〵く影にてよめる例

暮見落葉　木のもとに今たゝしばしこざりせはまことによるの錦ならまし　俊成

これらは。手だりのしわざとす。爲明卿もよみなほされしとて後世みだりによまざることゝす。し

かれとも。よせ物。影の詞だにたしかならば。難とすべからす。たゞし神祇社頭釈教戀あるは神仏人の名なとの題のすくによみかたきはつねによせある物。影の詞にすがらされば。たれかよみうべき。それもよく〳〵心をめぐらし。題の文字をよみはづさず。ことわりたしかなるうへにもたしかならんことをねかふべし。はれの哥のほかは。題の文字をこと〳〵くよみふせぬよし。先達いひおかれて

初戀　難波江のもに埋るゝ玉かしはあらはれてたに人にこひはや　俊頼

擣衣　故郷に衣うつとはゆく鴈やたひの空にもなきて告らん　大納言経信

かくよめる哥もあれと今式にかなはず

五月四日哥合時鳥　五月雨にふりいてゝなけと思へともあすのあやめのねを残すらん

此哥をむかしも落題といひけり

紅葉添雨　降まさる涙も雨もそほちつゝ袖の色なる秋のやまかな　定家

故郷紅葉　うつろひし昔の花のみやことりのこるにしきの色そしくるゝ　同

河辺落葉　そめし秋をくれぬと誰かいはた川又なみこゆる山姫のそて　同

御口傳に。此卿は題のさたなどは。いたくせざりし人なりとも。又此卿の哥。殊勝のものなりとも。人のまねぶべき風情ならず共かゝせ給ふも。題詠にはまほならぬ御くちつき故也。かゝるよみかた

は。今はせぬ事とす

○匿字　詞の文字を。いにしへ。かならすよむべからずとす

隔日戀　みか月のわれてあひみしおもかけの有明までに成にける哉　爲家

乍來不逢戀　わか戀はきその麻きぬきたれともあはねはいとゝむねはくるしき

池水半氷　池水をいかにあらしの吹わけてこほれるほとのこほらさるらん　後京極攝政

等思兩人戀　津の國の生田の川に鳥もゐは身をうらみとや思ひなるらん

臨期違約戀　おもひきやしちのはしかきかきつめてもゝ夜も同しまろねせんとは　俊成

又あらはしてよめるもあり

花留客　しはしとも我はとゝめし春の田(ママ)はきとこむ人を花にまかせて　讃岐

垣根皆夘花　かきねにはたちもむくらも有物をみな白妙にみゆる夘のはな　右大臣冬平

聞鹿遅歸　鹿のねをきけはゆかれぬ山路哉をそくかへるといもや待らん　雅光

落葉待風　吹風のたより待まよいかならんおのれともちる木のはなりせは　後柏原院

忍不言戀　忍へたゝしらせてのちのつらからはいはぬ頼もあらし物ゆへ　爲朝道臣

恨世戀　數ならぬ身はいふかひもなきまゝに思ひのほかに世をそ恨むる　小侍從

鶴立洲　あしたつのたてる川辺を吹風によせてかへらぬ浪かとぞみる　貫之

先達。これらの哥あるをしらざるにあらず。しかもまはしてのみよめとをしうるは。かのわきかべぬれるたくひにおちんことをきらへるにて。まことに心もふかく。力もいりて。おかしくよめらんには。いかやうによめるも難なし。されど。ことばの文字を。よく／＼思ひめぐらす時は。おのづから。影の詞になりやすきものなれば。かくいはれたるをしるべし

○名所の習　名所をとるに故実あり。國〻の哥枕かずもしらすおほかれど。その哥の姿にしたがひて。よむへきところと。よむべからざるところとのあるなり。たとへば。山水を作に。松をうゝべき所には。岩をたて。池をほり。水をまかすへき地には。山をつき。眺望をなすこどく(マヽ)。その所の名によりて。哥のすがたかはるべし。もし哥のすがたと。あり所かけあはずなりぬれば。事たがひたるやうにて。いみじき風情あれど。やふれて聞ゆと。鴨長明はいへり。又所にしたかひてよみならはせる事あり。物あり。よしのにて。青ねがみね。妹山。背山。瀧。さくら。山ぶき。あじろ。すゞのしのや。立田にて。櫻。紅葉。夕附鳥。神なびのもりにて。もみぢほとゝぎす。佳よしにて。きしのひめ松。わすれぐさ。菊などのたぐひ。ことしげゝれば六部の條にゆづりて。こゝにいはず。たゞし日。月。雨。風。雲。霞。霧。露。夕立。村雨。霰。雪などのたぐひは所さだめすよむべし

といへとそれも同じくは。雪には。富士の根こしの白山。月には更級。清見。明石。雲には。葛城。つくばね。雨には。笠置(カサギ)。かさとり山田簑嶋。露には。宮城の。武藏野。なとのよみつけたる所。又は。よせよかりぬへき所同じくはしかるべし。めづらしき名所などはみだりよむ(ママ)べからす。爲重卿のいへらく。當座に里雪をよまば。伏見。深艸など人々のよみぬべき所よしとの給ひ。頓阿もいつも伏見にてあたらしき心あるべしとぞ

○古今異同　いにしへ今かはりたる事。猶同しやうによむ。つねのことなり。たとへはふしのねのけふりも今はたゝねど。猶もゆるとよみ。まゝの繼ばし。ながらのはしともにたへてひさしけれど。たえずわたるとよみ。住よしの松は。波かけず。大淀の浦は松なく。水無瀬川は。水あれと。なしとよみ。そのほか。いにしへの寺（西大寺。難波の御津明日。豊等。更級。）關（逢坂。清見須磨。不破。霞。文字。刈萱。むや〳〵）名社。井（槐葉堀かね）の名。又初瀬。志賀花大堰川鵜舟。竜田神南備。紅葉。宇治。吉野。田上網代。逢坂駒迎禁野。宇陀野御狩など。ひさしくたえたる事なれと。猶あるやうによみ。又忍草。忘艸。喚子鳥。稲負(ママ)背鳥は何鳥ともしらずしてよみ。又鶯は。もろこしの黄鳥にあらざれとも。遷喬(センキョウ)のおもむきをよみ。又みぬ代のふること。人の國の事なと。さも見たらんやうによめるも。題詠にてはつねの事なり。たとし即事にては。今ありのまゝによむべきなり

〇異名　名をかへてよきと。わろきとあり。又影の詞にて聞ゆるもあり。凡例左のことし

［　］此方圏は植物動物人事地理天象の別　　［　］これはかけの詞也

**地理**

禁中（モ、シギ　コ、ノエ）　大内
海（ウミ　ウナバラ）　ワタツミ　［八重ノ塩路］

**植物**

柳（ヤナキ　アヲヤキ）　櫻（サクラ　ハナ）　花（同上）　糸遊（イトユフ　アソフイト）　卯花（ウノハナ　ウツキ）
瞿麦（ナテシコ　トコナツ）　蓮（ハス　ハチス）　竹（タケ　タカンナ）

**動物**

燕（ツハメ　ツハクラメ）　蟲（ムシ）［松虫鈴虫　蚕］［促織轡虫］　鶴（ツル　タツ）　雞（ニハトリ　クダカケ）　カケ　タヅケ鳥
馬（ウマ　コマ）

**人物**

父（チ、　オヤ）　母（ハ、（ママ）　タラチネノオヤ）　オヤ　親（チ、ハ、　カゾイロハ）　オヤ　男（オトコ　オノコ）　夫（セ　チフト）　セナ
妻（メ　イモ）　ツマ　妹（イモフト　イモ古通ズ）　兒（オサナコ　イハケナキコ）　キビハナルコ　チゴ　童（ワラベ　ウナヒ）　ワラバヘ（ママ）、ウナヒコ
樵夫（木コリ　ツマギコルオ）　山ガツ　遊女（ウカレ　タハレ）　ウカレメ　タハレメ　一夜ヅマ　［一夜ノマクラ］　友（トモ　思フトチ）　トモガキ　トモナフヒト
汝（ナレ　ナンヂ）　ナガ　マシ　キンヂ

## 人事

繪エ　ウツシヱ　ククリヱ　スミヱ　〔スミガキ　クチキガキ〕　文フミ　マキ　玉ツサ　マキモノ　墨スミ　〔松ノケムリ〕　紙カミ　ウスヤウ　ミチノクニカミ

扇アフギ　カハホリ　箏コト　ツクシゴト　ヤマトゴト　〔雪ノシラベ〕　琴コト　カラコト　鐘カネ　入相ノコヱ

琵琶ヒハ　四ノ緒　〔半ノ月　遠山〕　酒サケ　ミキ

異名にてよからぬは

月　月人男　カツラオトコ　月ノウサキ　梅　花ノ兄　コノ花　杜丹（ママ）　廿日艸　躑躅アセミ　アシビ

萩シカナ草　菊　花ノ弟　竹　コノ君　鶯　ミトリノ鳥　子規　時ノ鳥

水雞　水ノ庭鳥　螢　夏虫　鹿　カセキ　萩カ花ヅマ　猫　手ガヒノ虎

牛コトヒ　蜂スカル

異名に似て。異名にあらさるはかならすよむへからす

天久かた　山あしひき　郭公　シテノ田長　蟬ヒクラシ　蛛サヽカニ

猿マシラ

題の文字をよみいるゝほかに。同し文字をよみ入たる例

橋　いかなれは花さきみのるたちはなのわきてはしめはときはなるらん　光俊

雲雀　落くると聞しやあらぬ夕ひはり雲にもとほき聲ののこれる　濟繼

夕郭公　さとなるゝたそかれ時の時鳥きかすかほにて又名のらせん　西行

女郎花　花にあかて何かへるらん女郎花おほかるのへにねなましものを　平貞文

山里夕時雨　人もこぬみ山のさとにをとするはたそかれ時の時雨なりける　待賢門院堀川

賀　しほの山さしての磯になく千鳥君かみ代をはや千世とそなく　よみ人しらす

○四季戀述懐のよみ方　六則趣の条を見て心うへし

○祝言と慶賀との別　近むかしより祝言は長久なることをよみて富貴英華(ママ)をよます慶賀いつれもしかるへし

## ○選　辞

黄門卿。民部卿。ともに名哥の五文字は。斟酌すべしとす。又はれの會にて。初五文字。名哥の初五文字に。同じきは。披講の時。みゝだちてよからすと云。しかれば獨吟などにははゞからすとも有なむ。又とし の内に春はきにけり。月 やあらぬ春やむかし。櫻 ちる木のしたかせ。ほの〳〵とあかしのうら。かゝる詞。二句なりとも。よむべからずと。頓阿法師はいへり つく〳〵と 名もしるし 此二詞も同ゞ上とす まに〳〵 これ聖廟此たひの御哥より制詞となる。今式には此一首句ゝこれをはゞかる ひちて 是ふるき詞にて。つ もか もなどに同しくみだりによむべからずと。古來風躰。并に僻案抄にみゆ。されど。か もは用ひなれ。耳なれたりとて。今式に嫌ふことなし。しかれば。此詞も。古今集の名だかき上に。袖ひちての。さらに名だかければよむとも難なかるへし 見らん 是もふるき詞。不可然のよし。古來風躰にみえ。源三立（ママ）も。よみてほめられ。僻案抄には。此頃はよむへしとあり。されと。新しき姿にたち入べからず いつくへのへの字 峯へふもとへなとのへにて萬葉比より見えきたるを御裳濯川哥合判より不可庶幾詞となれゝと公任卿のいつかたへ秋のゆく〳〵らんとよめるわろしとき聞えすさては此詞のわろきにあらすつゞけがらのよからぬ哉を知へし 大かた 文永二年九月

民部卿判云。大かたの風。荒涼なり。又云。大かたは月をもめでしと云五文字あれど。おぼろげならんは此詞相應しがたしとの給。しかれども。大かた。大かたのは同じ詞にて。大かたはヽ ことわり同じからざること。詞四具にのするがことし。ちかむかし。これらのわかれをしらさるゆへ。みだりに制詞とさだむること。さらにいはれなし

色はへて 六百番哥合に。不可庶幾と判す。但はへと云詞は。源氏物語家集にもみえ。今も夕ばへなどは。さかりによむ事なれど。色はへてとつゞけたる詞のよからぬにより。これを制す

こなた 貞應元年七月關白家哥合に黄門判して云。此詞。近年おほし。不甘心とあり。但(ママ)管家万葉集に。あしびきのこなたかなたと。よませ給より後の撰集にも。あまた見えたれば。詞のよからぬにあらず。たゞおほくよめるを。うたてく思しけんなるへし。故に。今式にはゞかることとなし

なかめ 此詞。黄門不甘心とし。民部卿しゐて庶幾すへからすとの給。又させる難なし。たゞながむる事によむへし。詠と云物。べちにあるやうに。よむべからずと。父卿の給とあれば。なべてよむべからずとの給ふにあらず。ことに長雨にかけてよむ事は今式にもいはす

けしき 文應三百首に。民部卿父卿しゐてこのみよむべからずとの給きとの給へり。又法眼源承(ゲンシヨウ)云。中野禪尼(俊成卿女)は。此詞このみよむべからずと申侍きとぞ。又漢語(カンゴ)は不可詠と。頓阿法師のいへるによりて。今式に此詞をよまざるは。景色(ケシキ)の字。漢語なればなり。しかれども。空をばそらとよむは。

天竺音なり。菊をばきくとよむは。漢語なり。かやうによみなれ。世にもみゝなれたるは。用ゆへし。よみなれざるは。わるかるへし【中〳〵に】承久二年中秋。黄門判に。末句かけあはずとて。これをきらはる。文永五年九月十三夜。民部卿判に。いひおほせて見えすと難ぜらる。みなその哥につける難なるを。今式。これをなへて嫌ふこと。もつともいはれなし【まに】六百番哥合の判に。此詞不可庶幾と言は。季經朝臣のすみれ摘(ツム)まにとよめる哥なり。兼宗大納言。顯昭法師も。ともにおもふまにとよめるを。又不快不足と判とり。又御裳濯川哥合にも。思ふまにとよみて。猶思ふへくと判し給ふ。すへてこのことはは。のとかにつゞくへき詞なれば。ちかむかしよりのちのさいくみたる哥によみ入ては。をりあはずみゆ。小町のながめせしまに。紫式部のみしやそれともわかぬまに。五條三品の山路の菊の露のまになどやうによめるは。さらに難なかるへし【つゞく】廣田社哥合に。つゞく塩路とよめるを。俊成卿判に。よくもあらぬにやと有。建久六年正月哥合に。同卿判して。庶幾せすや侍らん。千五百番哥合に。梢につゞくとよめるも同判なり。近來風躰に。殊勝にこそつゞけ申べけれとかゝせ給ふも。つゞくましきものをつゝけたるがわろきなるへし。たゞし秀逸の時はこれをゆるすべきかとあり。是詞のわろからぬゆへなり。たゞわろきは。つゝけからのよからぬのみをいふこと。疑なし。但長月の綴喜(ツヾキ)の原などよめらんはむかし今ともにきらはす【なさけ】千五百

番哥合に。顯昭法師。しら雲のまよふも花の情ならずや。五条三品判に。なさけの詞も。よせなくては。殊に不可庶幾にや。六百番哥合に。有家卿。さりともと待べきほどのなさけかは。判に又云。中の五字。詩なとにはゆうなる詞なれと。哥にはさまで侍らぬにやとあれど。猶爲氏卿。君かなさけのみにあまる哉。夢想禪師。とふ人のなさけのふかき程まではなどもよみ給ふ。しかればつゞけからによるへし。但酒にかけて。人のなさけなとよまんは。古今さらふことなし〔かはす〕順徳院御百首に。花さきかはすみやぎのゝ原定家卿判に。かはすの詞。愚意に於て存旨候との給ふより。制詞中に入ぬ。されど爲家卿は。初尾花かはす袖さへ露けかりけるとよませ給ひ。そのほか。枝かはす。枕かはす。羽ねうちかはすなどあまたみゆ。かれは。こなたにきたり。これは。かれへゆきかふ心なれは。御製とてもわろく聞えす〔思ふかな〕千五百番哥合に。保季朝臣。山ふかき秋を見るにも思ふ哉。京極云。思ふ哉。おもはまほしく侍にやと有。但思ふ哉。俚言に云。思ふぞいの心にて。思はまほしくにあらす。此判。一首の上にかぎりて。しかもことはり明らかならん〔こもる〕同し哥合に。寂蓮法師。いなばにこもる宿の夕くれ。京極判に。こもるといへる詞。霞。夘花。霧中鹿。わか草のつま。親のかふこならでは。ことわりなくやとあり。げにいかにひきゝ宿とても。稲葉のたけにおほはれんや。これ此一首の寸法あはざるをのふるなるへし〔なにかほ〕六百番の判に。色かほといへる詞庶幾

せす。又文永仙洞哥合に。民部卿あり。かほといふ詞を難し。又伊豆守源仲綱の哥にならはし。(ママ)かほといふ詞をよめるを大二入道聞てかやうの詞なとよまん人百千秀哥よみたりともいかゝ哥よみとはいはむ無下にうたてき(ママ)ゝ事かなといへりすへてうちとけたる詞なれは今式これをきらふといへと西行法師のかこちかほなとやうなることにいといふにこそ［ちかふ］永万二年重家朝臣家哥合に此たひの哥おほくちかふといふ詞の見え侍はもし此ころはしまれるおかしき詞にてもやと有これは哥によみたることまれなれはさの給ひけんなるへし六帖にちかふと見えかつちかひちかへちかふはみな同しことにてひ。ふ。へ。音かよふなれはよまれぬ事にあらすすてに雪集にそれもうしたからたかひに口なれてちかふ詞のおろかにもなきとよませ給へは今式にてはをしなへてよむなり［ゆかしき］嘉應二年十月住吉哥合に俊成卿判して云まことに哥の詞にあらすと又治承二年右大將家哥合詞判に兒女の畧せること葉なりといふかなしきうれしき六百番哥合に俊成卿判云未練の哥よみつねにこのみよむなりけにうれしき事にあらされはよむましきよしの給ふよし四条局阿佛尼の抄にみゆとかやかるかゆへに今式に嫌はす［思はぬ］おもはぬ松をなと云ことばつゝきを貞應元年九月哥合に黄門判云思はぬ中なとにあらてかやうの詞をよめる事いつよりのことにやとあり大和物かたりに花薄君かかたにそなひくめる思はぬやまの風はふけともとあれはふるきことなり其後千載に貫[illegible]

み又源俊重は思はぬ磯のとよみ壬生二品は思はぬ浪にとよめるたくひあまたみゆさくはたくよみなはも難なきをしるへし「うとき」定家卿判云この比は此詞いはまほしけになりて侍る郭公にはことかなはすや侍らんとそしかれは郭公のほかはおほくよめるをきらへるにてまれ〳〵よみ入たるはとかならしとて今式にはふけり「うき人」建久二年九月水無瀬殿哥合に俊成卿判云うき人のといへるや近比も人よみては侍しかといかにそやよはきやうにやと聞え侍るこれもゝはらきらへるならねは今式はゝからす「ひとこゝろ」貞永哥合に黄門判云此五もし今はこのみよむましきよし沙汰ありすこしつまりたる詞なれと古今おほくよみかつ花心世心なとも同前なれは今式はきらはす「雪のあけほの」經房卿哥合俊成卿判云此詞俊恵法師よみ出しける時もゆるさす侍き此比の人常にこのめるよし此のち爲定卿文保二百首に岡のやかたの雪の曙とよめるかゝる秀逸の時はゆるすとありいかさま近むかしよりおとつ世の詞つきにてことなるおもむきをもとめたる詞なりたゝよめらんは難なしこれをよしとしてこのみよむへからす春の夕くれ「秋のあけほの」これも雪の曙同前にてこのまさる詞なり六百番判に春の曙秋の夕くれこそえんなれ秋の曙春の夕くれあたらしくやとの給へり「春すさむ」此詞も同前なり千五百番の判にすさむの詞やあたらし又黄門の判云ふるく聞なれすとあり建保二年八月同卿判にすゝむとよめるを難せすして勝せられ又うちたにすさめあさの狹衣と云哥をほめ給ぬこれ春に

つゝけたるかよからぬなるへし雨のふりすむ(ママ)なとはしかるへし[うす霧]六百番哥合判云此詞尤よろしからす又建仁の哥合に耳にたてとも哥のさましとてかちぬ又清輔朝臣のうす霧のまかきの花の朝しめり夕は秋と何おもひけんとよめるわろくもなきにや新古今集に入られたりことに今はよみなれたれは嫌ことなし[ふく嵐かな][浪しろし][み山への里][青く][しろく]御抄に黄門のしろく青く吹あらしかな嵐ふくなりにてのみ侍るとの給よしのせ給ふもあまりに人のよみうるさきなるへしかるかゆへに今式はゝからす但土御門院のあらしもしろき春の曙と云御哥より和哥所にて殊勝の間向後可爲無念不可詠ことの沙汰有けるといへとこれも今はとしふりにたれはしろくとよめるはゝからす[雨の夕くれ][みゆる明ほの][ありけれは][思ひせく][花盛かも][身こそつらけれ]身をいかにせん[うきか身][峯こし][谷こし]此十詞のほか心ちこそすれ物にそ有けるの二詞をあはせて慶融法眼抄(ママ)　抄可止のよしみゆ但二詞は御抄にみえすてに上にのせたれはくた／＼しくいはす雨の夕暮は雪の曙同前なるへしみゆる明ほのは下韵によみたるは詞つまりてにらす(ママ)その外は古詞ゆへみたりによみへ(ママ)からすとす(ママ)にあはさるゆへなり[鳫のおほひ羽]黄門云(ママ)よろしやさしからすやあらんとあれとかゝる詞をよむへからすといはゝよむへき詞いとまれなるへし[ふるやあられ]建保五年十一月哥合に同卿判云やすからすや聞え侍らん但これはや文字を嫌なりとしかれはちろかまさきなとも同し詞つきなりこれも

おのつからよまるゝ時はきらふへからす此詞をふしにしたるかよからぬなるへし何かあらぬかこれも同前なり あたら夜 千五百番判云庶幾せさる所存侍りとありこれ夜と世とかよふにつけて世をはさらんとする人の此世に心をのこしていふらんやうなれは嫌ひ給ふなれと萬葉集にも新夜とかきてあたらよとよませたりかるかゆへに御室哥合に難せられすしてかたせられたりこれことにやさしき詞なれは嫌ふへからす 夜もすから 新熊野哥合に俊成卿判云不可庶幾とこれも夜と世とか同しきにより澆季の世にかよへはかくの給にや又夜もすかるまての心につきよむへきをたゝ夜と云ことに心うるはあやまちなるへし 草の原 六百番に俊成卿無子細よしの給近年いさゝか沙汰ありと詠哥一躰にみゆこれは源氏物語にうき身世にやかてきえなむたつねても草のはらをはとはしとや思ふとあるより鳥辺野に同しとしていむなるへしそれくさの原はなき人おくる所にもあるへし又さならぬ所にもなしとせすしかれはかたよりていふへからす但源氏物かたりの哥は上句にやかてきえなはとあれはこそそれと聞ゆれ後世さることわりもなき哥もくさの原とたにあらは鳥邊のに同しとさたむるにやさてはなき人と云人の字をきらはさるは事の大小ことなるゆへなり今式にほたされさるともからはきらふへからす 紅葉しにけり 度〻の判にとめ所によからすとすこれもやすらかにしてよき詞なれと近き世のすかたにあはさるか又は末の中に先此句のなれるにつけて今一句もちからを入すし

てよめらんことをきらひかく判せるかいつれにすへての詞をりあひたらんにははゝかるへからす夫とめ所はわろく外にはよしといふことさらにいはれなし[あさあけ]衣笠内府谷の杦生の朝あけとよみ給ふを黄門云朝曙はあさけと三文字によむへし四文字によめるは不寸心(マヽ)とあり[玉のをやなき]御裳濯川哥合に俊成卿判云をの字やすこしいかさまによみて侍るにかと有万葉の比より玉柳といふより西行法師はことそへて玉のを柳とよめるは玉の緒は緒に玉をつらぬきて上つ世にては人みなかけゝるなり柳のいとに露なとのかゝれるを玉のをとなかめられたるなれは難とすへからす[つかねを]衣笠内府のよませ給ふ時黄門此詞は古今集にいつといへと頗無品ものなりとの給へりしかれとも詞のつゝけからにもよるものなれは今式にきらふことなし[ねるやねりそ]僻案抄に此詞何を中にかと尋(マヽ)たつね申されけれはさる哥よまんとするにやとゝかめられ侍きとあり夫より今式にもよまさるなりいかさまことやうに聞ゆる詞ぞかし[つゝ][かな]此二詞も小点の詞とててにはの口傳すまさる人はをのかありかを人にしれつゝあかてもひとにわかれぬるかななとやうに下韵に用ゆる事をゆるさす夢の中にあひみんことをたのみつゝうちきらし雪はふりつゝしが(マヽ)すかにかくしつゝとにもかくにもながらへて女良花うしろめたくもみゆる哉おそくいつる月にもあるかなあしひきのなとよめるは今式にてもきらふことなし[きみ]源宗于朝臣の君を置てあたし心をわかもたはとよめるは臣より天子をさ

せり我大きみのみ名はわすれしとよめるは乞兒より親王をさせり仁和のみ(ママ)とは遍照僧正七十賀にかくしつゝとにもかくにもなからへて君か八千世に逢よしもかなとは天子より下をさして君との給ふなりそのほかいもせともかきにかよはしいろ〳〵に用ゆること諸越(モロコシ)にて。聖君(ミカド)。明君(カシコキタミ)。邦君(クニノカミ)。寡君(ワカキミ)。寡小君(ワガキミノツマ)。嚴君(オヤ)。先君(トホツオヤ)。細君(ツマニ)。などいふたぐひ。かずしらすみゆ［きみ］はからすしてすゞろに君といふへからす。御抄に人の許へやる哥も。よく〳〵心えてよむへし。禁中。仙洞。すべて貴所へまいらする哥をば。わたくしに君かなとはよまぬなり。上の御ことを君と申ははゞかりなし。その人を君とはいはぬなり。これ古今の教訓なりと有。今君といへば。天子のみにかぎれりと定め給ふも。此御おきてよりはしまれるといへとあまりにかたよれるをしへなり古をまねはん人はかゝはるへからす今のをきてにしたかふともからは公卿(クケウ)なとを此とのなとよむへし古今集の此とのはむべもとみけりとよめるはまことの殿閣をいへるなれと貴所の事を殿下(テンカ)なといふよりかり用ゆるなり［おろかなる］［かずならぬ］今式に此二詞は貴人高位のほかはよむへからすとすたゝし久我大将の愚庵とつき給ふをたに稱功院わらひ給ふとかや唐日本に愚極といふ二人の名僧のみ名にあたれりと云もとよりいやしくおろかなるともがらは。ことさらにことはらでもさしるきを。人がましくよみたる。かへりておこかましき(ママ)みくるしけれはかくさたむるなるへししかれともいにしへはさのみ名たかゝらぬ人〻

にてもよめる例おほしたゝ詮なきにはよましと心えたらん古今にかよひて難なるへし。難ならぬも同しかるへき

○ぬしある詞は大かた近むかし名たかき哥の詞ともなり

(春)かすみかねたる　うつるもくもる　花のやとかせ　嵐そかすむ　月にあまきる　霞におつる　むなしき枝に　花の露そふ　花の雪ちる　みたれてなひく　空さへにほふ　浪にはなるゝ　(夏)あやめそかほる　涼しくくもる　雨の夕くれ　(秋)昨日はうすき　ぬるともをらん　ぬれてや獨　かれなて鹿の　おはな波よる　露の底なる　月やをしまの　色なる浪に　霧立のほる　わたればにこる　(冬)わたらぬ水も　こほりて出る　嵐そくもる　やよしくれ　雪の夕くれ　(戀)雲ゐるみねの　われても末に　身をこからしの　袖さへなみの　ぬるとも袖の　我のみしりて　むすはぬちす（ママ）　たゝあらましの　我のみけたぬ　きのふの雲の　(雑)するのしら雲　月もたひねの　浪にあらすな　此四十三詞詠哥一躰にぬしある詞と云かやうにはしめてよめる詞なかくよむへからすとすいかさまこれらは此詞一首の詞なりこれをぬすむはみなからぬすむに同しかるへし但かやうの詞はをとつ世今世の哥とてもぬすむへからす

とをつゝのあとかは柳（中務親王文應三百首にみゆ判云此名所ある人詠之時加此事難忘至愚難案のよし亡父申き）野上の方（判云不優）かけろふの岩かきふちの

草かくれ上句不優歟 しつきの田井疎遠のあひた是を申ことあたはす 國嶋の此川上 あしきのゝさかの里憚と存候 みなふちのほそ川山山の名やさしからず こま山 あへ嶋 むろのうら憚 あそ山嵐 此市柴上同 遠津のさとの磯枕 千とせの山少似大嘗会哥候歟

みな淵山頗不庶幾 玉乘（ママ）のこすの大野憚

相樂山（サカラカ）山城御抄に名所のはゞかりはなしたゝ根原哥のはゝかりありとなり 神をか山大和一説にきの國と云御抄にはゞかりありと云〻 いくち山播广御抄に可憚と云〻 しほひの山未勘一説出雲と云〇いきしにのふたつの海をいとひきて塩ひの山をしのひつるかもと云哥より憚へしとすこれは海はしほひて山はかれぬなといへるに同しく世の變異なるゆへ憚なるへし 玉緒山たまのおやま近江蒲生郡御抄にはゝかるへしと云〻 うちのおほきみ万葉に玉きはると云枕詞につゝけるゆへはゝかる あしすだれ津の國

# 詞　部

## 冠部目録

おほともの　おほぬきの(ママ)　おくしもの　(く)くれたけの七ウ　くさまくら　くれはとり
くれなゐの　(や)やくもたつ　やましろの　やすみしゝ　やますけの八ヲ　(ま)ますかゝみ
まかねふく　(ふ)ふくかせの　ふるゆきの八ウ　ふゆくさの　ふちころも　ふしのねの
(こ)このめはる　ころもての　こもりくの九ヲ　こゆるきの　こもまくら　(あ)あまとふや
あまさかる　あまひこの　あまくもの　あまころも九ウ　あかねさす　あさつくひ
あさきりの　あさしもの　あしひきの十ヲ　あらたまの　あらかねの　あをによし十ウ
あをやきの　あきの田の　あちむらの　あしかきの　あしたつの十一ヲ　あつさゆみ
あまをふね　あらかきの　(さ)さゝかにの　さはへなす十一ウ　さすたけの　さきくさの
さねかつら十二ヲ　さくらあさの　さゝのくま　さゝなみの　(き)きみかさす十二ウ　(ゆ)ゆくかはの
ゆくみつの　ゆくとりの　ゆふつくよ　ゆふたすき　(み)みちのくの　みつしほの十三ヲ
みつとりの　みつくりの　みつきつむ　みつかきの　(し)しらつゆの　しらくもの
しらまゆみ　しらなみの十三ウ　しろたへの　しきたへの　しらとりの　しつはたに
しのゝめの十四ヲ　しきしまの　しなてるや　しらぬひの　しほかまの十四ウ　しもとゆふ
(ひ)ひさかたの　(も)もゝしきの　もみちはの十五ヲ　ものゝふの　(す)すかはらや　すかのねの
すみそめの十五ウ　すみのえの　以上百五十二條

# 詞部

## 冠部

【い】いそのかみ○ふる　万四。石上零十方雨二。また。一夏いそのかみふるき都のなとあり。是は大和國山辺郡石上といふ所に。布留といふ所のあれは。それを降。古の義にとりなしてつゝけたる也。又やかていそのかみふるの神杦なとよめるも多し　いなむしろ○○かはしく　万八。伊奈牟之呂河向立とあるは。いにしへは。多く革をしきたりける事物にみゆれは。寢席皮とつゝけたるなるへし。又。万十一。伊奈武思呂敷而毛君乎とあるは。敷を重の義によせてつゝけたる也。しくとは數多くかさなる義なり　後世に。いやしき家にしく。藁をもてつくれる席をはむしろとよむは。これとこと也　いはゝしる○瀧　万十五。伊波婆之流多伎毛登杼呂介なといと多し。これは石の上をはしり落る瀧といふ也。いにしへはいはゞしるとのみよみたるを。一の、春上　いしはしる瀧なくも哉とあるをもとゝして。今の世はたゝいしばしるとよみつけたり。中昔の比までは猶いはゝしるとよみたるなるへきを後人。彼瀧なくも哉の哥をもいしはしるとはよみふせたるにや　又万十二。石走垂水之水能とあるは。猶上に同し。垂水も水のたれ落るを云なれは。瀧にことならすとしるへし　【は】はるの日の○○かすか　なかき　繼体紀。播屢比能哿須我能倶儞ゝとあり。かくいにしへは四ことにのみよめれと。後の世の例にしたかひて。春の日のとこゝにはのせたり　これは春の日影のかすむとつゝけたる也。万三に。春日乎春日山乃ともあり。此をもしは。またいはむかことし。一此の五に　あふことをなかちのはしのとよめるは此例也　これもまたゝ上に同し又ま

た。一戀三春の日のなかくや人をとあるは心明らか也。但上つ世のは日の影をいひ。中昔のは一日のことにいへり
「はるがすみ」〇ゐ〇たつ　万七。春霞井上従直尓とあるは。雲のゐるなといふに同しく。ゐとつゞけたる也（万十四にはやかて霞ゐるとあり）
又うた。一別春霞たちわかれなはとあるは。霞の起とつゝけたる也「はるの田を」〇かへす　三戀三春の田をかへすく
そとあり。春は必田をすきかへす物なれはしかかうふらせたり「はなすゝき」〇ほ　一戀三花すゝきほにいてゝこひは。
又三戀二花すゝきほのかにみてそなとあり。皆穗とつゝけ。穗にいつる共つゝけて心は明らか也。但万には。第十
四。波太須酒伎穗介氐之伎美我とあるはそのもと也。（上つ世ははた薄とのみありて。万に只一所花薄と（ママ）ゝゆ。今は、中昔をもとゝして花すゝきと出せり。はた薄。花薄のことは。時節秋部薄の下に委）又万三に。皮爲酢寸久米能若子我とあるは。薄はいたく生しける物なれはこもるとつゝけたるにや。（古事紀にいくみ竹とあるはこもり竹の義なれは。そのくみの音通ひてくめとつゝけたるなるへし）「はふくずの」〇〇たえす〇いや遠なかく　万廿。波布久受能多要受之努波牟。又同三。延葛乃弥遠永なとあり。葛かつらはいとなかくはひのび行故にしかかうふらせたり「まふつたの」〇わかるゝ　万二。延都多乃別之來者とあり。蔦かつらのかたくにはひ別るゝさまをもて（ママ）ゝけたり「はながたみ」〇めならぶ　一戀五花かたみめならぶ人のとあり。花をつみいるゝ竹籠を云。さてその竹をあみたる目のならひたる物なれは。同し心におもひよる人多きによせて。かうふらせたり「に」「にはたつみ」〇なかるゝ　万十九。尓波多豆美流涙とあり。順抄に。潦。音老和名尓八太豆美　雨水也とあり。されはあま水（雨）のなかるゝとつゝけたる也「にほどりの」〇おきなか川〇なつさふ〇ふたりならびゐ〇かづしかわせ　万二十。尓保杼里能於吉奈我我波半とあるは。鳰の息の長きとつゝけたる也。（此こと時節冬部水鳥の下にくはし）又同十五。柔保等里能奈豆左比由氣婆とあるは。雌雄の馴したしめる義につゝけたり。（なつさふは馴也はなれさる心也）又同五。尓保鳥能布多利那良毗爲とあるも。

なつさふに同しつゝけさま也。爲は居のかななり 又同十四。尓保杼里能可豆思加和世乎とあるは。鳰はよく潜けは也。葛餝は下總國の郡名也 かつくは水中にいるを云ふ

と とりがなく ○あづま 万二。鳥之鳴吾妻乃國之とあり。夜明れは鳥かならす鳴物なれは。鳥か鳴明とつゝけたるにや。吾妻は碓井の坂より東をすへていふ也 但いもにこひ(ママ) あごの松はらとあるも。終あかすの義につゝけたるなれは。あづまも。もと吾嬬といふことの。かをはふきたるなる故にしか思へる也 とぶとりの ○あすか 万一。飛鳥明日香能里乎とあり。集中。むら鳥のあさだつ。朝鳥のかよふなともありて。朝は。鳥ねくらより出て先とびわたる物なれは。とふ鳥の朝とつゝくるを。さもしをすとかよはして。あすかとはつゝけたるにや。諸説穏ならぬことは本抄にくはし ときぞぬの ○思ひみたれて 万十。解衣思乱而とあり。衣を布ゝにとけはみたるゝ心につゝけたり。これは思ひといふことをへたてゝつゝけたる也かやうの例冠にはいと多きこと也 ともし火の ○あかし 万三。留火之明大門尒とあり。たゝ燈火の明しとの義にてつゝけたり ときつかぜ ○ふけひの濱 万十。(ママ)二時風吹飯乃濱尓とあり。同集中に冠ならて。ときつ風とよめるをみるに。汐のさしくるを時と吹風をいふ也。汐のさしくる時は必風のそひておこる物也。さて只ふくとつゝけたる也。後世万風のことを時つ風とよむはこれにこと也

ち ちはやぶる ○神○人○うぢ但千はや人とよめるにはかならすうぢとのみつゝけたり 万二。千磐破神俗者常云。又同巻。千磐破人乎和爲跡ともあり。神代紀下に。殘賊强暴横悪之神者の九字を。ちはやぶるあしきかみともと訓したり。されはちはやふるは。いちはやびたるの義也。いちはやしとは心はやくよりもつきかたきほとの心也 さて神共人共つゝくるは。神代人代のたかひめにて只同し。但邪神ならす共いふへきこと也又古事紀に。知波夜夫流宇遲能和多理迩。又一 雑上 ちはやふるうちのはし守なとあり。遊仙窟に迍邅とあるをみれは。猶いちはやき義也。されはかさねてうちとはつゞけたるなるへし。又万に。劔のみさきか

しひの宮。一二にもかもの社。三にはかもの川へ三に。みかみの山なとつゝけたるは。神のます所〻なれは也。一長哥ちはやふる神無月とやとあるは。いたくはたらきてかうふらせたり

ちりひぢの ○数にも○あらぬ 三戀四ちりひちの数にもあらぬとあり。ちりひちとは塵と泥と也。されは益もなく物数にてもあらぬ心にてかうふらせたり

**ぬ** ぬはたまの ○くろ○くろかみ○よる○月○夢○ね○いも 古事紀。奴婆多麻能久路岐美祁斯遠とあり。ぬは玉とは。日本紀私記に。烏扇之實なりといへり。本草に射干といふこれ也。万にはさま〳〵かけるかうちに。射干玉共かけり。これ正字なるへし。烏扇の実は。黒く玉のことくなれは。くろきとはつゝけたる也。或説ニ烏扇の実をぬは玉といふは。野眞玉の義也といへり 共外。くろかみ。又よるなとつゝけたるは。黒きより轉したる也。又月とつゝくるは。夜といふより轉し。又ねとつゝきたるも。妹と一字につゝきたる也 いぬるの義にていもし つゝきたるも。夜はかならす寝る物なれは也。又夢とつゝくるも。いぬるよりうつろへる也。これらの例いと多けれははふきぬ。又万に。ひと夜もおちす。又。一戀三やみのうつゝは又三。戀二 こよひ明なはなとつゝけたるは。はたらかせたる也

**を** をとめらが ○袖ふる山 万四。未通女等之袖振山乃とあり。をとめとは。いと若き女の称也。只其をとめらの袖をふるさまにかうふらせたり。これは振山なるを。袖の字をそへたる也。わきもこに衣かすがとよめるに同し。但續後撰。續千載。新續古今。家隆卿集なとには。皆をとめ子かとよめり。今の世にはこれにしたかひてをとめ子かとよむへし

**わ** わだづみの ○ふかき 伊勢集。わたつみのふかき心のとあり。つゝけたる心は明らか也。二にはやかて。わたつみとたのめしことも共よめり。わたつみとは。神代紀上に。少童命とありて。海神の名也。これよりわたつみを海のことにもいひなれる也

わきもこに ○衣かすが○あふ坂山 万十二。吾妹兒尓衣借香之とあり。

これはわが妹に衣をかすとつゝけたる也。衣をかすは人をしたしみうつくしみてのことなれは。わきも子としもか
うふらする也。衣といふは上の袖ふる山の類にてかすかといふ也 又万十。吾妹兒尓逢坂山之とあるは。吾いもにあふとつゝけたるまて也
わかくさの〇〇つま〇いも〇ましめつらしき〇にひたまくら〇思ひつきにし 万九。若草乃夫香有良武とあり。これは春もえ出る草のゝいとうるはしく
なつかしき物なれは。妻は夫にたとへ。夫は妻にたとへ。たかひになつかしみてかくはつゝくる也。つまとは夫婦
にかよふ称なる事。ふるきふみ〳〵に明らか也。爲家卿の説は。つまは端の義也とのたまへと。下の例ともにわたらす 又催馬樂に。わか艸のいもゝの
りたりやとあるも上に同し。又万三に。春草之益目頬四寸とあるは。みれと〳〵あかぬ心にてかうふらせたり。又
同十一に。にひ手枕とつゝけたるは。若草のあしたに萠出るをもて。新にひとつゝくる也。又同十二に。思ひ就にし
とあるは。なつかしく。思ひのつく心につゝけたる也 わかごもを〇かりぢのをの 万一。弱薦乎獵路乃小野尓とあり。
薦は若きほとに苅とりて何にもすれは。苅とつゞけたる也 から衣 からころも〇〇きならのさと〇たつ〇かけて〇ひもゆふくれ 万六。韓衣服
楢乃里之とあり。これは衣を着馴すの心につゝけたり。また二。戀二 から衣きていたつらにとあるは。着を來によ
せてつゝけたる也。又一。雑上 から衣たつたの山にとあるは。衣にせんとて絹なとを裁心につゝけたり。又二。戀
三 から衣かけてたのまぬとあるは。衣をぬぎては架にかくる心につゝけたり。又一。雑上 から衣ひもゆふくれにと
あるは。衣の紐をむすふ ゆふは。むすふ也 を。日も夕暮とよせてつゝけたり。 から衣のことは時節 雑部衣の糸にくはし からにしき〇〇たつ〇たゝまくをし
き二。秋下 から錦。たつたの山とあり。是はにしきを裁とつゝけたる也。又一。雑上 からにしきたゝまくをしきと
あるは。いとうるはしき錦は。たつことのをしき心をさへかねてつゝけたり。 [illegible]

服餝部錦にくはし かげろふの○[illegible]○あるかなきか○ほのめく影○日○夕さり○いは万六。[illegible]世にては。かぎろひのとのみいひつけたることゝみゆるは。古事紀に。加藝漏肥能。万に。香切火之なとかけるをみるへし。されと今は中昔をもとゝして。かけろふのと出せり。かけろふといふは。もと裝にて。火なとのもゆるとみえて又こえぬさまをいふ詞也。さるを上古は。かげろふ火の心にてかぎろひとよめる也。さて春とつゝけたるは。春天には。火のかけろふかことく。ひら〳〵とみゆる物必あれは也。糸遊のことゝし。蜻蛉のことゝするは。皆此裝をは体にいひなす也。同集にかきろひのもゆる春へ匹よめり 又同十。玉蜻 直一目耳とあるは。かけろふ火は。みる程もなき故につゝけたり。又同八。蜻蜓 髣髴所見而とあるは。さたかならぬ心にてかきろひとかうふらせたり。又二一。戀四かけろふのほのめきつれは。又帖に。かけろふのほのめく影なとあるは。火のかけろふかことく。人影のほのかにみゆる心にてつゝけたり。(ママ)十三。玉蜻 日文累とあるは。日の光のきらめくをたとへてつゝけたり。又同一。玉蜻 夕去來者とあるは。夕日はわきてきらめく故也。又一。戀四 かけろふのそれかあらぬか。又二。戀二 かけろふのあるかなきかなとあるは。是非をみわくる程もなき故につゝけたり。又万二。玉蜻 磐垣淵之とあるは。石火の心にてかうふらせたるなるへし。万葉に玉蜻蜻蜓なとかけるは皆假字也。くはしくは時節春部糸遊の下にいへり かみかぜの○いせ 古事紀。加牟加是能伊勢能宇美能とあり。いにしはかむかせのとのみよめれと。今さはよむまし(ママ)けれは。後世の例にしたかひてかみかせのとのせたり 神代紀云。乃吹撥之氣化爲神号曰級長戸辺命亦曰級長津彦命。是風神也とあれは。神風といふは卽息なりとの心にてつゝけたるなるへし。息をいとのみいふ例多し かくなはに○思ひみたれて一。長哥 かくなはに思ひみたれてとあり。楊氏漢語抄云。結菓。形如結緒。此間亦有之。順抄に和名加久乃阿和

とあり。のあをつゝむれは卽な也 これ唐菓子の名なり。かゝる形したる物なれは。みたるゝとはつゝけたり。思ひといふことをへたてたるなり

［かきつばた］○にほふ 万十。垣津旗丹頬合妹者とあり。只かきつはたの花のにほはしきにたとへてつゝけたる也

［かりこもの］○思ひみたれて 万十一。苅薦之思乱而とあり。苅置たる薦のみたれやすけれはかくつゝけたり。思ひといふをへたてたり

［かくれぬの］○したそこ 一。戀三 かくれぬの下にかよひてとあり。かくれぬとは。木草なとに隠れたる沼を云。されは下とはつゝけたり。又三。戀二 かくれぬの。そこの心そとあるは。かのかくれたる沼水の底といふ也。されは下とつゝくるよりは。今一きはみえかたき心あるへし

［かしのみの］○ひとり 万九。橿実之獨歟将宿とあり。橿の実は。枝にあつまらすして。ひとつ〳〵なれは也

［た］

［たらちねの］○おやはゝ 上つ世にはは ゝとつゝけ。中昔よりこのかたは。たゝおやとつゝけならへり。されは。今親とはつゝけてよむ共。猶父のことにはよむへからす。万三。帯乳根乃母命者とあり。これはたれたる乳をもたる母とつゝけたるなるへし。猶ことわりあれと今もらしぬ。さて根とは物のはしめの義にて。ほめてそへたる也又二。雜三 たらちねはかゝれとてしもとあるは。卽たらちねをは母のことにいひふせたる也

［たまのをの］○なかき○みじかき○絶○たえず○みだれ○あひだ○うつしごゝろ 万十。玉緒長春日乎。その外みしかき。斷。不断なとつゝけたる例多し。玉のをとは。玉を貫たる緒を云。されはしかさま〳〵につゝけたるにて。心は明らか也。たゆるとは里言に糸ガキレルといふ是也但。たゝ緒とのみから ふらすへきを。かく玉のをとしもいふことは。上つ世は。身手足その外何にも。玉を緒にぬきて。かけてかさりとしたること多かりけれは也。又万十一。玉緒之念乱而とあるは。その緒。まとひみたるゝ心につゝけたり。思ひは例のへたてたる也 又同巻。玉緒乃間毛不置とあるは。緒に玉をひまなく貫たる心につゝけ

たる也。又十二。玉緒乃徙心哉とあるは。緒ふるたてよはみゆけは。新らしき緒に。その玉をうつしかふる心にてつゝけたるにや。（うつし心のことは月草の下にくはしくいへり）

たまだれの 〇をちの大野〇をす 〇をがめ〇みす 万二。玉垂乃越乃大野之。又同七。玉垂小簾之間通。又催馬楽に。玉たれのをがめを中にするゑて（ママ）なとあり。たまたれとは。玉簾也。その簾は。玉を緒にぬきてたるゝなれは。玉たれの緒とつゝけたる也。又二戀 たまたれのみずは戀しととあるは。玉たれの御簾と。かさねてつゝけたる也

たまだすき 〇かけ 〇うねひの山 万一。珠手次懸乃宜久とあり。たゝ襷をかくるとつゝけたる也（玉とはほめていふ也）又同巻に。玉手次畝火之山とあるは。襷をうなぐとつゝけたる也。神代紀に。天神の御頸に。瓊をかけ給へるを。所嬰とかけるをみるへし。うなぐは即かくるに同し

たまぼこの 〇みち 万一。玉桙乃道行晩とあり。鉾は直き物なれは。道のすぐなるにたとへてかくつゝけたり。玉ほことといふを。いひなりては道のことによみふせたり。但玉鉾は。玉もてかされるも。さならぬをにめて（ママ）もいふへし

たまくしげ 〇あくる〇おほふ〇み 〇ふた〇おく 玉くしけとは。（玉はほめていふなり）櫛をいるゝ箱をいふ。万八。玉匣葦木乃河乎とあるは。蓋をあくる心にてあとつゝけたる也又一戀三 玉くしけあけは君が名ともよめり。又万二。玉匣覆乎安美開而行者とあるは。蓋をおほふにつゝけ。さて又あくるとつゝけたり。又みむろの山。ふたみの浦。ふたかみ山なとつゝけたるは。箱の身。箱の蓋にからふらせたり。又万三。珠匣奥尓念乎とあるは。箱のみの方のふかけれは。奥とはつゝけたり

たまかづら 〇かくる 〇かげ 万十二。玉蘰不懸時無とあり。玉を緒にぬきて。髪にかくるかざりをいふ。されはかくるとつゝくるを。此哥はかけぬときなく共つゝけたる也。又万二。玉蘰影尓所見乍とあるは。猶懸を影によせてつゝけたるにて。只上に同し

たまかづら（葛） 〇たゆることなく 〇たゆ〇くる

万三。玉葛絶事無とあり。かづらはいづこまでもはひひろごりゆけは。たゆることなくとはつゝけたり。又たゆとも つゝくること常也 又二。戀五 玉かつらたのめくる日のとあるは。語をへだてゝ操とつゝけたり。かつらは長けれは。くりとりて苅故也

たくなはの ○ながき 万二。栲縄之長命乎とあり。これは栲乃糸をもてなひたる縄にて。海人の用うる物也。此縄をいと長く打延て魚をはとるなり。されはなかきとはつゝけたり

たむけぐさ ○ぬさ 万十三。手向草麻取置而とあり。ぬさのことは大ぬさの下にくはし。手向くさとは。何と定めたる物はなくて。手向に用ある物は皆いふへし。手向の種はひと云也。されはぬさにはかうふらせたる也。

**そ** そらにみつ ○やまと 万一。天尓満倭乎置而とあり。これは神武紀に。饒速日命乗天磐船而翔行大虚也睨是郷而降之故因目之曰虚見日本國矣とあるよりおこれる冠也。此本文のまゝに。紀万葉等には。そらみつと四ことによめり。つもしはあゆひ也。あゆひ抄にくはし。滿とかけるは仮字也 そらにてみたるやまとゝいふほとの心也。もとは大和國の冠なりしを。後世になりて。おしひろめて日本國のことにもかうふらせたり

**つ** つきくさの ○うつし心 二例 ○うつろひやすく ○かりなる 万十二。月草之移情とあり。江記云。鴨頭草移二帖云々とある。この心にてつゝけたる也。月草とは鴨頭草にて。俗に露草といふこれ也。露くさといふは。もとつきくさをよこなまれるなれと。源にもつゆくさとかき。哥にもよめりされはいと久しくよこなまり来れること、おほゆ。その花を紙にうつして。さて又其紙をもて絹なとをもそめたる也。されはその紙をはうつしと名つけたり。うつし心といふに二例あり。一は現心。うつしき心にて異に正氣なといふ心也 一は移心。物にうつろふ心といふ也 これを心〳〵によみおかれたり。此うつしのことにつきて。くはしきことわけあれと。こゝに略す 又万四。月草之移安久とあるは。月草は。絹なとにすれる色のかは

りやすけれは也。又同十一。月草之借有命とあるは。此花のいとしぼみやすき物なれは。はかなくかりそめなる心にてつゝけたり「つのくにの」〇〇なにはなかす 一。戀四 つの國のなにはおもはすとあり。これは難波を。何ごともといふ詞にとりなしてつゝけたり。又三。戀一 津の國のなかずとみえてとあるは。津の國にある長洲を。不レ泣といふにとりなしてしかつゝけたる也。但かく清濁にかゝはらすしてつゝくることは。玉かつら影なとの類也「な」「たにはなる」（つもしはあゆひ也）〇みつ 一。戀三 なにはなるみつともいふなとあり。難波の御津に。見たりといふ詞をよせてつゝけたり。

「なつ衣」〇かとりのうら 新葉。夏 なつ衣かとりの浦のとあり。うす物は。すへて片糸（よりをかけさる糸を云）をもて織れは。かたおりの。たおをつゝめてかとりとはいふ也。但順抄に。かとりは布帛の惣名なるよしみゆ。それも。もと片織の義より名とせる也。（かとりのことは服飾衣の部にくはし）夏の衣とする物は。すへて片織のうすものなれは。しかつゝけたり「なるかみの」〇音に聞 万七。動神之音耳聞とあり。（一。戀にも。音に聞つゝとつゝけたり）神のなりとよむひゝきのたかき物なれは。人。又は名所なとの名たかきことを。聞わたる心につゝけたり。紀万等にも。人の名たかきことを。神のごと聞ゆるとよめるかことし。（かみとは雷を云なるとはよそひにて鳴とよむなり）「なよ竹の」〇〇とをよるよなかき 此冠。万にはことくくなゆ竹のとあれと。中昔の例にしたかひて。なよ竹のと出せり。（通音なれは只かはることなし）万二。奈用竹乃十縁妹。同三。名湯竹乃十縁皇子なとあり。なよ竹とは。今いふしのべ竹にて。その竹のさまの。なよくくとしたる故に名とせり。さてそのさまのなよゝかなるを。人の形のたわやぎたるによせて。とをよるとはつゝけたり。（とをよるは。たわゝ。とをゝ。なといふ詞に同しく。たわくくとしたる義也）又一。雜下 なよ竹のよなかきうへにとあるは。しのべ竹は。よの長けれは。長夜にかけてつゝけたる也。三雜賀にも同しつゝけありて。長き世の心によせた

り【なつくさの】○あひ○しなえ　○野じまがさき　古事紀。那都久佐能阿比泥能波麻能とあり。草のたけたかく成て。臥あふ義にて相靡の心につゝけたり。又只葉末のあふ心はかりに。あひとつゝけたるにやともみゆ。又万一。夏草之念之奈要而とあるは。夏草のたけたかけれは。おのつからしなゆる心につゝけたり。例の思ひといふをへたてたり　又同三。夏草之野島之埼迩とあるは。野の古訓ぬ也　野とつゝきたる也。庭なとにもいふへけれと。野はことに草多けれはなるへし【む】【むらとりの】○あさだつ○　万六。村鳥乃旦立往者とあり。あしたには。群鳥ねくらよりとひたちてわたる故に。旅に朝たつによせてつゝけたり。又一。戀二　むらとりのたちにし我名とあるは。只たつとつゝけたるなから。群とりの一度にとひたつ音のいかめしき物なれは。いとたかく名の立たる心をさへふくめたり【むらさきの】○こかたの海　○なたかの浦　万十六。紫乃粉滷乃海尓とあるは。紫の濃きとつゝけたる也。紫はこきをめつれは也。又同七に。名高浦之とつゝきたるあり。紫は禁色にて。色の中にもいと名たかけれは。かくつゝけたり【う】【うちひさす】○みや　○みやこ　万四。打日刺宮尓行見乎とあり。これは麗日のさす宮とつゝけたりと云説あり。日をもて宮をほめたること。上つ世より例多かれはなるへし。今思ふに。神代紀上云。檜可三以為二瑞宮之材一とあるをみれは。うつくしき檜をたつる宮といふにや。さすとたつとかよふことは。古事紀に。やくもたついつもとよみ。万には。やくもさすといふ類猶いと多し。又みやことつゝけたるも。宮とつゝくるよりおしひろめて。皇都にもかうふらするまて也又万に。大宮つかへとつゝけたるもみえたり（原本挩脱）【うごきなき】○いはくら山　三。神樂哥うこきなきいはくら山にとあり。石もてつくれる倉は。ゆるぐへからぬ心につゝけたり【うちよする】○するが　万三。打縁流駿河能國与とあり。同集の中に。うちえするともあり　これは。打寄る駿河の心につゝけた

るなるへし。泚るとは髪をおらふを云〔うちわたす〕（○をちかた人 ○たけたのはら）一。旋頭哥打わたすをちかたひとにとあり。打わたすとは。打見わたさるゝ心也。されはをちかたとはつゝけたり。（をちとは。俚にアツチといふ心也）すへて。遥長遥なといかうふり也。万十二には。打わたし長き心はともよめり。（うちはかさし也。かさし抄にくはし）又万四。打渡竹田之原尓とあるは。その原の廣く遠き故にかうふらせたり。（或説に。此つゝけさま。まくら詞のやうにてさならすといへり。けにさること也。されと後世は冠になしてよみつけたれは。猶こゝに出せり）又仁徳紀には。打わたすながはへなす共つゝきたり

〔うちなびく〕（○春○かみ ○草）万五。有知奈毘久波流能也奈宜等。同三。打靡春去來者なとあり。春は草木もえ出て。なよゝかになひく時なれは。その物光（ママ）のしかるをもてかうふらせたり。（うちはかさし也）又同二。打靡吾黒髪尓。又同八。打靡草香乃山乎なとあるは。皆なよゝかなる物なれは。その性のしかるをもてかうふらせたる也。なひくとは。片よりにしなゆるを云

〔うづらなく〕（○ふりにしさと ○ふるし）万四。鶉鳴故郷從とあり。同十一に。鶉鳴人之古家尓ともつゝけたるかことく。人すますなりたる里の。野のやうになりて。うつらさへなく心につゝけたり。鶉は必あれたる野への。けうとき所になく鳥なれは也。又同十七。鶉鳴布流之登比等波とあるは。上の哥よりいひなりて。里ともいはて。ふるきとはつゝけたるなるへし

〔うつせみの〕（○世○人 ○命）万三。虛蟬之代者無常跡。又同一。空蟬之命乎惜美なとあり。かく虛蟬空蟬なとかけれと。皆假字にて。現身の義也。うつしみとは。今現在したる身といふ也。されは世人命なとつゝけたり。くはしくは冠の本抄にいへれは。こゝに畧す

〔うつせ貝〕（○みなき）万十一。打背貝実無言以とあり。これは石花貝のうつになれるを。うつせ貝といふ也。されは人言のまことなきによせて。みなきとはつゝけたり（くはしくは雑貝部にいへれは畧しぬ）

〔お〕

〔おく山の〕（○まき ○ふかき）万十一。奥山之眞木乃板戸乎とあり。眞木とは

眞鳥なといふに同しく。木の中にもすくれたるをいへは。檜なるへし。繼體紀に。まきさくひの板戸とよめるに同しすへてよき木は。奥山に多けれはかくつゝけたり。又一。戀一 おく山のふかき心をとあるは。つゝけたる心も明らか也

おきつなみ ○○しきて○とをむ○たかしの濱○あるゝ

万十一。奥津浪數而耳八方とあり。しくとはかさなり／＼する義也。垂仁紀に重浪といふに同しく。浪のしきりにたつ義にてつゝけたり。沖つのつもしはその處につきたるの心なり 又同十九。於吉津奈美等乎牟麻欲比伎とあるは。波のたかくたつさまは。物をおしたわめたらむやうなれは。とをむとはつゝけたり。さて眉引のさま。又これに同しけれはよせていふ也。又一。雜上 沖つ波たかしの濱とあるは。沖の方はへよりも高く波のたてはしかつゝけたり。又同。長哥 沖つ浪あれのみまさるとあるは。七條后うせ給ひて。宮中のあれゆくを。波のあるゝによせてつゝけたり

おほぶねの ○○たのむ思ひたのむ𪜈○たゆたふゆたのたゆたに𪜈○ゆくら／＼に○かとりのうみ○つもりか占○わたりの山

万十二。大船之愚有時尒。又同二には。おもひたのみて共つゝけたり。只同し心也 大きなる舟は。のりたる心も。みるにも。ゆたかにてたのもしげなれは也。又同二。大船猶豫不定見者とあるは。大舟は。いととくはすゝまぬ物なれはかくつゝけたり。たゆたふとは。すゝみもやらぬ心也。猶詞よそひの部にくはし 一。戀一 大ふねのゆたのたゆたにとあるも。猶上と同しきからちに。少しつよくたゆたふ心也。又万十三。大舟乃往良行羅二とあるは。ゆら／＼とたゞよひ行心につゝけたり。大雲のゆくら／＼にとつゝけたるに同しく。ゆら／＼といふにくもしをはさめる也。大ふねのさまを思ひて弁へし。又同十一。大船香取海とあるは。舟の檝をとるの心にてつゝけたり。かちをかといふは。八十梶懸とよめる類也これらは大の字に心はなき也。又同二。大船之津守之占尒とあるは。占は浦の假字にはあらす。元正紀に。津守連といふ人。陰陽の道をさとりあきらめたりしよしみゆ これは。舟のよる所を津といふ故にしかつ

ゝけたり。（これも大の字に心なし）又同二。大舟之渡乃山之とあるは。舟のわたるとつゝけたるにて心は明らか也。（こくの字に心なし）**おしてるや**○なには 万三。押光難波国尓とあり。（上つ世はかく四ことにもよめり。又やもしそひたるも少からす）もと難波とは。浪速をよこなまれるよし神武紀にみゆるより思へは。おしてるは。古事紀に押歯といへることく。あとよりおしかくるやうにたつ浪はやとつゝけたるなるへし。てるは立るの畧語なること。しなてるをあはせて弁へし。猶冠の本抄にくはし

**おほどもの**○○みつ○たかしの濱 万一。大伴乃美津能濱尓有とあり。神武紀に。瀰都瀰都志倶梅能固邏餓とあるに同しく。大伴のみづ／＼しとの心にてつゝけたる也。みづ／＼しとは瑞々しきの義にて。そのたけくめでたきいさをしをほめていふ也。もと大久米部も。大伴宿祢のとほつおや道臣命のつかさどれる所なれは。上の神武紀の哥も只一義也。同四には。みつとはいはじ共つゝけてよめり。又同一。大伴乃高師能濱乃とあるは。談士連は（或は高志ともあり。姓氏録にみゆ）大伴よりわかれたる氏なれはかくつゝけたり。今に此高志氏は。此たかしの濱のわたりに住たるより。そこをしか名つけたるよしなれは。いよ／＼此義に随ふへし

**おほぬさの**○ひく手あまた 一。戀 大ぬさのひくてあまたにとあり。ぬさとは。色々の絹紙なとをきりてちらすこと也。いつの比よりか大ぬさを（今いふ御幣これなり）つくり出て。これを人々にひかせて。さて川へに持行てはらへする也。されはかくはつゝけたり。（古事紀に大奴佐とあるはこれとこと也。いと上つ世はなかりし物也）さて。人心のまめならぬにかけていふなり

**おく霜の**○あかつきおき 二戀四 おく霜の暁おきをとあり。霜は暁かたことにふかく置物なれはさて起出るにかけてつゝけたり。（おくの字。上下にあれは心えかたきやうなれと。上のは体にいひなし。□のは用なるかたかへり）

**くれ竹の**○○よ○ふし 一。長哥くれ竹のよゝのふることゝあり。くれ竹は文字集略云。笛。似篁而下節茂葉者也とあるこれ也。よとは節の中

をいふ。されはかくつゝけたり。又同。雑下くれ竹のうきふしことにとあるは。竹の節とつゝけたり。例のうきといふをへたてたり。ふしは竹中隔而不通者也と順抄にみゆ。猶草木竹の部にくはし又くれ竹のふしみの里共よめり。只同上。但此ふしみは山城なり。くさまくら○たび万一。草枕客尓之有者とあり。これは草をむすひて枕とする義にて。旅中のさま也。されはかくかうふらせたり。又同十四に。くさまくらたごのいりぬにとあるを親として。後世は草枕といふを旅のことゝせり。又二。戀二くさまくら此たひへつるとあるは。此といふをへたてゝ。たびとつゝけ。さて旅を度にかけたる也。くれはどり○あや二。戀一くれはとりあやに戀しくとあり。袖中抄にさま／＼にいはれたれと。くれはとりといふは綾の名なること式にみゆ。されは綾とはつゝけたり。猶本抄にくはし。あやにはかさし抄にくはし俚メッタニといふくれなゐの○あさはの野ら○色にはいてし万十一。紅之淺葉乃野良尓とあり。紅はこきをめつるもつねなれと。又淺きもいとよき色したれはかくかうふらする也。又一。戀三くれなゐの色にはいでしとあるは。紅はしるく色のいつる物なれはしかつゝけたり。やくもたつ○いづも古事紀。夜久毛多都伊豆毛夜弊賀岐とあり。雲の立出る時は。かならすいく重も／＼かさなりてたつ物なれは。弥重に雲のたつ出雲とはつゝけたり。又同紀に。やつめさすいづもとよめる所あり。通音なれはこれも今に同し。猶本抄にくはしやましろの○とは一。戀四山しろのとはにあひみむとあり。是は山城の鳥羽といふ所の名に。常にといふ心をかけてつゝけたり。万に不止をとはとよめりやすみしゝ○わか大きみ万一。八隅知之我大王乃とあり。又同巻。安見知之とかける所あり。これ正字にて。大君の天かしたを安らけくみさせ給ふの心にかうふらせたり。後世はやすみしるとよみつけたり。さる時は八隅知之とかけるを正字として。四方八方をしろしめす

心也。新古のたかひめよくわきまへ知へし。

**やますげの**　○みたるゝ○そがひ　○みならぬ　万十一。山菅乱戀耳とあり。山すけとは漢名。麦門冬にて。俚に尉が鬚といふこれ也。その葉のほそくてみたれあへるをもてつゝけたり。又同十四。夜麻須氣乃曾我比尓宿思久とあるは。山菅はひと葉もすなほにのびたるはなくて。皆ふしたわみて。そのさま物の背を向たるかことくなれは。そがひとはつゝけたり。（そかひにねしくとは。人に背をむけてねるをいふなり）万七に。さき竹のそがひにねしくとつゝけたるも。割さきたる竹は。その外のまろみある方の。背をむけたるかことくなれは也。これをあはせて知へし。又同四。山菅乃実不成事乎とあるは。山菅はいとうるはしき実のなれは。山すけの実とはつゝけたる也。実のならすとつゝけたるにはあらす。これ。はたすゝきは穂にいつる物なるを。穂にもさき出すとつゝけたるに同し。猶本抄にくはし。

ま　**ますかゞみ**　○むかふ○みる○おもかげ○かげ○みるかげ○とぐ　○てる○清き○床の上さらず○かくる○ふた　万には。皆まそかゝみとのみあれと中昔の例にしたかひてますかゝみと出せり。むかふみる面影かげみる影とくてる清きなとつゝけたる例いと多かれと。つゝけたる心も明らかなれはのせす。本抄に出す。ますかゝみとは。眞澄鏡といふをはふきたる也。（まそかゝみといふは。すみをつゝめたるなり）これ。きはめてすみあきらかなる鏡をいふ也。万十一。眞鏡床重不去とあるは。（とこのへとは。床の上といふを音便にてつゝめたる也）鏡は。つねに床の上をはなたでむかふへき物なれは也。又同十二。犬馬鏡懸而偲とあるは。鏡のうらにつけたる紐を。臺にかけてむかへは也。又同十九。眞鏡蓋上山尓とあるは。鏡の箱の蓋とつゝけたる心也

**まがねふく**　○きひの中山　一。大哥所　まがねふくきひの中山とあり。まがねとは。白かねくろかねこかねなと説〻あれと。あらかねならぬは皆まかねなるへし。いにしへ吉備國にてまかねをふきたりける事ありて。かくかうふらせけるなるへし。

【ふ】ふく風の ○めにみぬ 一。戀一 吹風のめにみぬ人もとあり。風は音あれともかたちなけれは也 ふる雪の ○みのしろ衣○きゆる 二。春上 ふる雪のみのしろ衣とあり。これは雨雪なとのふるに。簑のかはりに着る衣をいふ。さてふる雪の簑に白き心にてつけたり。猶本抄にくはし 又一。長哥 ふる雪のけなはけぬへくとあり。たゝ消るとつゝけたる也 ふゆくさの ○かるゝ 一。冬 冬くさのかれにし人はとあり。草の枯るを離るによせてつゝけたり。かるゝは詞裝部に出 ふぢごろも ○まとは 万三。藤服間遠之有者とあり。ふち衣とは。藤の皮をよりておりたる布の衣にて。いやしきものゝ服也。山人海人野人なとによめりさて。織目のいとあらくすきたれは。間遠とはつゝけたり。但ふち衣を褻にきる事あり。これは又一義也。こゝとは同しからす。猶本抄にくはし ふじのねの ○もえつゝとはに 一。長哥 ふしのねのもえつゝとはにとあり。富士はつねにもえて烟たつよしにてかくつゝけたり。又只もゆとはかりもつゝけたるあり。さて我胸の思ひのもゆるにかけてよめり 【こ】このめはる ○春 二。戀一 このめはる春の山田をとあり。春は木の芽のはり出る時なれは。たゝその時のありさまをもて冠とせる也 ころもでの ○たなかみ○ひたち○なぎの川べ○ましろの駒○まわかのうら 万一。衣手能田上山之とあり。ころも手とは即袖也。このかうふりいとわきまへかたし。もしさにやなとおもふことはあれと。しはらく。穩ならむことをかうかへえむ時をまつなり。或人のかうかへに。いにしへは袖もなかくありけれは。衣手の手長の心につゝけたりといへり。猶本抄にくはしくいふ。又万九。衣手常陸國とあるは。衣の襞とつゝけたる也。手をうこかせは必ひたのつけは。かくいふなるへし。又同卷。衣手乃名木之河辺乎とあるは。衣手のなごくなる心につゝけたり。袖は何ことをなすにもうこきてなれやすけれは。和といふにかうふらせたるなるへし又同十三。衣袖大分青馬之。又同十二。衣

袖之眞若之浦之なとあるは。皆まとつゝきたる也。その心は。万にまでといふことあ。二十。又左右たとかきたる
ことく。袖も左右具したる物なれは。まとつゝけたるなるへし。猶本抄にこまかにいへり。こもりくの○はつせ 万一。
隠國乃泊瀬乃川尓とあり。はつせをは。初瀬の國。初瀬小國なといへるをみれは。こもれる國のはつせとつゝけた
る也。これ。山いたくたちこみたる所なれは也。猶本抄にくはし こゆるぎの○いそぐ 三。戀四 こゆるきのいそき出てもと
あり。これはこゆるきのいそにかけて。いそぐとつゝけたる也。もと催馬樂こゆるきの哥より出たるなれは。こゆ
るきのとしもからうふらせたる也 こもまくら○高瀬 帖。こもまくらたか瀬のよとにとあり。薦をむすひて枕とすれは。こ
よのつねの枕よりは高けれは。かくつゝけたり。紀にも。こも枕高橋すぎとよめり あ あまとぶや○かり○かる 万十五。
安麻等夫也可里乎都可比尓とあり。これは天を飛雁とつゝけたる也。古事紀に。あまだむとよめるもこれに同し。
同紀に。かるのをとめ。万に。かるのみち。かるの社なとつゝけたるは。たゝ雁のりもしを。るとかよはしてよめ
るまて也 あまざかる○ひな○むかふ 万一。天離夷者雖有とあり。そらもこゝとは遠くはなれたる鄙といふ也。遠き地を
天につきていふは。もろこしにて各天なといふかことし。又神功紀に天疎向津媛とあるは。遠き空はむかはるゝ
物なれは也 あまびこの○おと 一。長哥 あまひこのおとはの山のとあり。又同。雑下 あまひこの音つれしとそとある
も一同也。但この後の哥はよせ哥なり あまひこは。山ひこ 同之二 俚云こたま也。順抄にこたまとあるは。樹神 とありて木の神をいふなり されは音とはつゝけたり
あまくもの○たゆたふ○おくかもしらす○ゆくらくに ○はるゝ時なく又はるゝよもなくに 万十一。天雲之絶多不心とあり。あま雲とは天なる雲といふ
にて。只雲といふかことし。たゆたふは。大ふねの下にいふをみるへし。雲のゆくやうにてとくも行やらぬさま

也。又同十二。天雲之奥香裳不知とあるは。万に。國のおくか。大海のおくかなといふかことく。かは處の義にて。奥の處もしらすといふ也。雲は奥をそこことも知かたけれはかくつゝけたり。又同十三。天雲之行莫行莫とあるは。大ふねの下にいふかことし。又一。長哥はるゝ時なく。又同。戀はるゝよもなくなとつゝけたるは。雲ははるゝかとみれは又出る物なれは也。兩詞たゝ一義也。くはしくは本抄にいへり

[あまごろも]〇たみのゝ嶋一。雜上あま衣たみのゝ嶋にとあり。蓑は雨にきるへき衣なれは。たもじをへたてゝ蓑とつゝけたり。又蓑は田夫なとの多くきる物なれは。田蓑とつゝけしにや。説文云蓑雨衣也とあり

[あかねさす]〇ひ〇ひる〇きみ〇むらさき　万二。赤根刺日之尽とあり。これは日次の日につゝけたり。又日輪のことにつゝけたるも少からす　あかねとは。根あかき草なれは。しか名つけたり。兼名苑注云。茜可以染緋者也。順抄にみゆ　されは日輪のわたりは赤き氣ありて。茜をさしたらむやうににほへる物なれは。かくつゝけたり。但日次の日につゝくるは。是より轉したる也。又晝とつゝけたるも。万十三にあり　日といふよりうつろへる也。又同十六。赤根佐須君之情志とあるは。さにつらふわか大君とつゝけたるかことく。顏のにほはしく色つける心にて君とつゞけたり。もろこしにて紅顏といふかことし。又万一。茜草指武良前野逝とあるは。紫色も赤氣あれは也

[あさづくひ]〇むかひ万七。朝月日向山とあり。朝つくひとは。只。まだ朝のかたにつきたる日といふにて。日の出ていまたたかくもさしのほらぬほとをいふ。さて朝日は我方をむかひて來れは。かくつゝけたり。夕日は我をあとになして入るなり　こゝに月とかけるは。附の假字なり

[あさぎりの]〇おもひまどふ　万十二。朝霧乃思惑而とあり。霧ふかけれは。何も見わきかたく。おもひ定められねは。思ひまとふとはつゝけたり。但霧はとりわきて霧ふかくたてては。朝きりのとしもかうふらせたるな

りあさしもの〇みけ〇おく〇きゆる　景行紀。阿佐志毛能弥概能佐鳥塵志とあり。これは。みもしをへたてゝ消とつゝけたる也きえをつゝむれははけとなる也　此さを橋とは。かの帝筑後國に幸したまひし時。その國の。御木今三池といふ所なり　といふ所に。たけ五百丈なる木のたふれたるを橋になして。みな人わたりける時のこと也。猶紀にくはし。又おくともきゆる共つゝけたるは。心も明らかなれは例をもあけす。但朝霜としもからふらするは。夕よりも霜のふかくむすへは也。きゆるとつゝくるは。朝霜は日にあひて消る故也　あしびきの〇山〇やまひ　いにしへ今。例いと多けれはのせす。此こと古來より說〻いとしけゝれと。皆ひとつの理はありなからめやすきもあらす。本抄には此說〻の穩ならさるよしをとき道たれと。今こゝに畧す。されとしひごといはむもやくなきことなれは。しはらくおもひえむ時をまつ也。万三。足日木能石根許其思美とあるは。こゞしみとは凝の義なり　其外同八に。許乃間立八十一。又同十一に。下風吹夜者。又同十七に。乎底母許乃毛尓。かのもこのもといふ也　又八雜下　こなたかたになとつゝけたるも。皆足引を山のことにいひふせてよめる也。されはこれらは冠にて冠ならぬ也。又二。戀二あし引のやまひはすともとあるは。山を病にとりなしてからふらせたる也。猶あし引に足疾なとをよせてよめるなるへし　あらたまの〇とし〇月〇日〇夜〇春　万十一。璞之年者竟杼とあり。猶集中に。未玉。麁玉なとかきて。あらたまとよめり　順抄云。璞。野王案。璞。並角反和名阿良太萬　玉未レ理也とありて。あら玉とはあれたるまゝの玉といふ也。されはかならす砥にかけてみかく故に。璞の砥とつゝけたる也と。爲家卿ものたまへり。但あら玉ののもし。すこし心ゆかぬやうなれと。此說いと穩なれはしはらくこれをたてゝいへり。猶本抄にくはし。さて万に。月月次の月也　日日次の日なり　月日年月夜ひとよも落すとよめり　中むか

しにて春ともつゝけたるは。皆年の中のことなれは。年といふよりいひうつろひたるまて也［あらかねの○つちのした］菅万。荒金之土之下丹手とあり。あらかねとは。あ（生）れたるまゝのかねといふ也。持統紀に。銚をあらかねと訓す。釈日本紀ニ云石猛ノ反未レ練ラ白銀也 されと。銀にもかきらす金鐵をもいふへし。これらもと土中より生すれはしかつゝけたり。但一の序に。あらかねのつちにしてはといふを（菅万の哥は土の義也これは地の義也）はしめとして。つちとのみつゝけてよむことつねなれと。もとはつちの下とつゝけされは。心つきぬこゝちすれと。つちと斗つゝけてよむも。下といはむをははふきたるなるへけれは。さよめるも難といふにはあらす［あをによし○なら］万一。青丹吉奈良能山乃とあり。古事紀に。夜本尓余志伊岐豆岐能美夜とあるは。弥百の土をならして築たる宮といふ也。今もこれに同しく。弥百の土をならすの心にてならとはつゝけたるなるへし。（やはあとかよひほはをとかよふ也）ことに。ならは。崇神紀に。官軍の草木をふみならしけむより名としたるなれは。此義一定たるへくや。よしとは。意本袁余志也太魚玉藻吉。麻裳吉なとあるに同しく。よもじもしもじもあゆひ也。（あゆひ本抄にゆつりてこゝにいはす）［あをやぎの○かつらき山］（○いと）万四。青楊乃葛木山尓とあり。これは同第九に。青柳をかつらにしつゝとよめることく。柳をかつらとする心にてしかつゝけたる也。いにしへは柳ならても。すへて草木をかつらとせること例いと多し。又同十一に。春楊葛山共かけり。（古点みたはるやたきとよみたれと春柳の青くなる時なれは心をえてかけるなるへし猶あをやきのと訓すへし）又二。春下あをやきのいとつれなくもとあるは。柳の枝を糸といひつけたるより。糸といふによせてつゝけたり［あきの田の○ほ］（ママ）一。戀一秋乃田のほにこそ人をとあり。秋は稲のほにいつる時なれは。しかかうふらせたり。さてほにあらはるゝ心によせたる也［あぢむらの○いざさわぐ］万四。味村乃去来者行跡とあり。味鳥は多くむれてと

ふ鳥なれは。いさとさそひあひたらむ心につゝけたり。又同廿に。さわぎきほひてとつゝけたるに。間引する故にしかからふらする也［あしがきの］○○ふりぬる里　○みたるゝ　○まちかき　万六。難波乃国者葦垣乃古郷跡とある。葦をもて垣とするは。きはめてわひしきものゝ家のさま也。これは皇居のあとあれて。いやしきものはかり住さとゝなれる心にからふらせたり。又万九。おもひみたれてとつゝけたるは。おもひといふをへたてゝ。葦を垣にゆへる。その末のみたるゝにからふらせたり。又一。戀一　あし垣のまちかけれともとあるは。葦をたてならへて垣とすれは。あはひのこまかなる物なれは。間近きとはつゝけたり［あしたづの］○ねになく　二　戀二　あしたつのねになくまてにとあり　我哭泣によせてあしたつとはからふらせたり鶴はいと声高き物なれはかくつゝくるなるへし字彙云常以夜半鳴声聞八九里しかのみならす詩小雅にも声聞于野なとあり［あづさゆみ］○○ひく　○はるおしてはる　○もと末　○末中　○よる　○いる　万三梓弓引豊國乃。豊前をいふ又一。春下　あつさ弓春の山へを。又同。春上　あつさ弓おしてはるさめ。又三。雑下　梓弓はるかにみゆる。又一。戀四　梓弓ひけはもと末。又万十四。安豆佐由美欲良能夜麻辺能。これはよるとかけたり　又同集中に。末中ためてともつゝけ。又一。雑上　梓弓いそへの小松。又二。秋下　いるさの山ともつゝけたり。これらからふらち。ひく。はる。いる。なとあるは心明らか也。おしてはるといふは。弓は中を押て張物なれは也。もとゝは。弓の下弭の方を云。末とは。上弭の方を云。中とは。弓の握のわたりを云。よるとは。弓をひけは中を押物なれは。上弭と下弭とは。我身の方によりくる物なれは也。さてつゝけたる心に。梓の字用なけれと。いにしへより梓をもて弓につくることとつねなれは。しかからふらせきたれる也［あまを舟］○はつせ　万十。海小船泊瀬乃山尒とあり。岸にてもあれ。湊にもあれ。舟のつき

たるをはつるといへは。しかつゝけたり。あまを舟としもいふに心なし。只舟といはむかことし あらかきの〇よそ 万十一。荒垣之外也吾将見とあり。へたつる心にて。よそとはつゝけたり。あら垣とは。いとあら〳〵とゆへる垣をいへは。わがみむといふまてにかゝれるにやと思へと。やもじあれは。さならぬ理なること本抄にくはし。あら垣としもかうふらせたるに心なし。たゝへたつることをいはむれう也 さ さゝがにの〇くも〇いと 允恭紀。佐瑳餓泥乃區茂能於虚奈比とあり。こゝにはさゝかれのとあれと。中昔の例にしたかひてさゝかにのと出せり これは。さゝら荻さゝら波なと。皆小さきことをさゝといへは。こゝも蜘のかたちの。小さき蟹のことくなれは。そのさまを形容して。さゝかにのとはかうふらせたり。或説に。蜘の一名といへることの理なきことは本抄にくはし 又三。雑秋 さゝかにのいとかくはかりとあるは。蜘の糸を。甚によせてつづけたる也 さはへなす〇さわぐ〇あらぶる神 万三。五月蠅成驟騒舎人者とあり。五月は蠅多くむらかりさわぐ比なれはかくつゝけたり。なすは如の義也 神代紀に。如五月蠅而沸騰とあるをみるへし。又三。夏 さはへなすあらぶる神もとあるは神代紀に。蠅声邪神とあるよりおこりて。むらかりさわく邪神の心にかうふらせたり。あらぶるはあらびたるにて。たけく祟はしき心也 さすだけの〇きみ〇大宮人〇とねり 推古紀。佐須陀氣能枳弥波夜那祇とあり。後世は。さゝ竹のとのみよめれと。今はそのもとをたゞししらしめむとて。上つ世の例のまゝに出せり これは。さゝ竹といはむを。音便にてさすだけとはいふ也。後も。もと小竹の義にて名つけたるをおもふへし。これにつきてさま〳〵の説もありて。くはしく弁したることもあれと。本抄にゆつりてこゝにいはす。君とつゝけたることは。古事紀に。いくみ竹おひとよめるに同しく。くみの通音なれは。きみとはつゝけたり。くむとは。こもるといふ詞のつゝまりたるなり されは小竹は。大きなる竹よりもことに葉もこもる物なる心にて。さす竹とはかうふらせたる也。万

十一　刺竹のはごもりにたるとよめるをもおもひて弁へし　さて大宮人とねり[illegible]つろへるにて別義なし。上にいふことくなれは。後世さゝ竹のとよむも理あること也。又定家卿も。さゝ竹の大宮人とよみ給へれは。此義をおもひ給へりけむとみゆ「さきくさの」〇〇みつ〇〇なか一。序さきくさのみつばよつばにとあり。日本紀私記ニ云。福草。枝々相植。葉々相當也とあり。順抄には。蕮をさきくさとす。此草いにしへより説いと多し。されととりたてたる證なけれはしひていはす。いつれに此私記のこときくさなれは。みつとはつゝけたり。又万五。三枝之中尓乎祢牟登(サキクサノナカニヲチント)とあり。これは三ッある物は必中あれは。かくつゝけたる也。此こと。くはしくは本抄にゆつりてこゝに畧す「さねかづら」〇のちもあはむと万二。狭根葛後毛将相等(サネカツラノチモアハント)とあり。さねかつらは五味を云。此かつらいと長くはひのび行物なれは。かたくにはひわかれては。又末にてははひ逢(アヒ)なとする故に。かくつゝけたり「さくらあさの」〇をふ万十一。櫻麻(サクラヲ)乃苧原乃下草(ノヲフノシタクサ)とあり。又麻原ともはけり(ママ)袖中抄なと。其外の諸説は。本抄にゆつりてこゝに畧す。万三に。櫻田部鶴鳴渡(サクラタヘタツナキワタル)年魚市方(アユチカタ)云々。この年魚市方は尾張なれは。櫻田部も又同国なるへし　此櫻田のわたりなる畠につくる麻を。さくら麻とはいふにや。民部式ノ下ニ云。交易雑物尾張国。苧一百十斤ともあれは尾張の國は。いとよき苧を出せるがうちに。此さくら田わたりの苧。ことによかりけれは名たかくて。そこならぬ所の麻畠にも。しかかうふらすることには成たるなるへし。をふとは麻畠を云。本猶抄にくはし　但。古点。さくらをのをふとあり。つゝけたる勢さなるへくみゆれと。一雑。おほあらきの杜の下草といふ哥の左にあり　さくらあさのとあれは。今はそれにしたかひてしか出せり「さゝのくま」〇ひのくま川一。大哥所　さゝのくまひのくま川にとあり。これは万七。第五にも　さひのくまひのくま川とよみ。又同三には。さひのくまわ共ありて。ひのくまのひのくま川とか

さねてよめるにて。さは添ていへる也。いつの比よりかこれを誤りて。今の本古今集に。さゝのくまとあるより。笹の畏の義とするは。万にくはしからぬ故也。此冠。今の世にはふるめかしけれと。此誤りを心えさせむとていふ也。さゝなみの〇志賀〇大津の宮〇ふるき都〇國つみ神〇大山もり〇ひら山風万一。左散難弥乃志我能大和太とあり。これを小浪の義とし。又地名也とも思ふは。ともにくはしからす。滋賀郡のわたりにては。湖もせばまりたれは。伊香郡。髙嶋郡。此わたりは湖もいとひろしなとのわたりにはかはりて。小き波のたては。その地理につきて。滋賀郡の一名のやうにさへなれる也。さらは滋賀ならすとも。そのむかひをもさゝ波とはいふへけれと。景行帝。五十八年。志賀の穴穂宮へうつらせ給ひ。成務帝。猶その宮におはしまして。いと名たかけれは。滋賀にしもさゝ波とはいふなるへし。ことに一名のやうにいひはしめけむも。これらの御世におこれる事にやとおほしき也。さて万に。大津宮。故京國都美神。大山守。平山風なとつゝけたるも。皆その地理よりさゝ波とはからふらせたる也。万に。樂浪。神樂波。神樂声波乃。なとを皆さゝなみのとよめるは。神樂のとり物に。笹あれは。たはふれにかけるまてなり

きみがさす〇みかさ　上つ世には。君がきる。又大君のともありて。みかさとはつゝけたり。一旋頭哥君かさすみかさの山のとあり。これは大君のさゝせ給ふ御蓋の義につゝけたり。但君がきるとよめるも。大君のとあるも皆これに同し

ゆく川の〇過　万七。往川之過去人之とあり。これは川の水のながれ過てかへりこぬ心につゝけたり。これ挽歌なれは。世を過さりたる人の。ふたゝひはかへりこぬによせてよめりし也　ゆく水の〇たゆる時なく　一。長哥　ゆく水のたゆる時なくとあり。論語云。子在川上曰。逝者如斯夫。不舍晝夜とある心にて　水の流にたゆることなければ。かくからふらせたり　鵜ノ鳥の〇あらそふ万二。上鳥乃相戯端尓とあり。これ

はむれとふ鳥の。おくれしとあらそひゆくさまをもてつゝけたり。此哥は。高市ノ皇子。御軍に出たゝせたまふをよめるなれは。そのみいくさだちの先をあらそひゆくさまによせたり

「ゆふづくよ」〇をぐらの山 一。秋下 ゆふつくよをぐらの山にとあり。夕つく夜は兩義あり。一ッは。夕附夜の義にて。くれそめたる時をいひ。一ッは。夕月夜の義にて。上絃の月のころをいふ也。此冠は。此兩義いつれにもかよへり。只その比のをぐら（暗）き心につゞけたる也

「ゆふだすき」〇かくる 二。夏 ゆふたすきかけてもいふなとあり。木綿（ユフ）をもてしたる襷（タスキ）也。多くは社頭にてこれをかくる物也。たゝ玉だすきかけのよろしくとつゝけたるに心同し

「みちのくの」〇しのふ 一。戀 みちのくのしのふもぢすりとあり。これは陸奥（ミチノク）の信夫（シノブ）郡によせて。しのふずりをよめる也。しのふもちすりといふ物を。みちのくより出せるなとおもふは。いふかひなきこと也。たゝこれは。しのふとつゝけたる冠也としるへし。陸奥の産物ならさることは。二に。戀しくはかたみにみよと古郷のしのふくさしてすれるなりけりとあるにてもしるへし。しのふもちすりのことは。古今集の抄にくはしくとけり

「みつしほの」〇からき 三。長哥 みつしほのよにはからくてとあり。よにはといふをへたてたり 潮は。味のいと鹹（カラ）けれは。身の辛苦によせてつゝけたり。滿の字に心なし。只汐といはむかことし

「みづとりの」〇あをば 万八。水鳥（ミツトリ）乃（ノ）青羽（アヲバ）乃（ノ）山（ヤマ）能（ノ）とあり。これは同巻に。水鳥之鴨（カモ）乃（ノ）羽色（ハイロ）乃（ノ）春山（ハルヤマ）乃（ノ）とあるかことく。水鳥の鴨のあを羽の山とよむへきを。水鳥といふにゆつりてしかよめる也。鴨は羽色青けれは。青羽を青葉によせてつゝけたり。青葉の山は名所にあらす

「みつぐりの」〇なか 万九。三栗（ミツクリ）乃（ノ）中（ナカ）尒（ニ）向有（ムカヘル）とあり。みつ栗とは。刺皮（イガ）ひとつの中に。実の三ッあるを云。さてみつある物は必中あれは。かくつゝくること。さきくさのなかとつゝけたるにおなし これ。那珂といふ郡の名によせたる也。武藏なるへし

「みつぎつむ」〇大くら山 三。神樂 みつきつむ大くら山はとあり。大御倉（オホミクラ）には。諸國の貢物（ミツキ）をつみおかるゝ

故に。かくかうふらせたり［みづがきの］〇久しき時 万十三。楉垣 久時從とあり。これは。崇神帝。瑞籬宮しろしめしける御時より。此哥よめる比までは。いたく年ふりにたれは。久しきためしにひきて。久しき時とはつゝけたるなるへし。二戀一に。身ははやくならの都と成にしをと。ふりぬる例としけむに同し。いつれの御代をもさすへけれと。此宮の御宇いと長くて。ことに名たかくおはしけれは也［し］［しら露の］〇おく 一。戀一 しら露のおくとはなげきとあり。露の置を起によせてつゝけたり。又二。秋上 白露のおくにあまたのとあるは。置を奥によせたる也［しら雲の］〇たつ 一。別 しら雲のたちなむ後はとあり。雲の起を。旅だつによせてつゝけたり［しらまゆみ］〇はる〇いる〇ひく 万十。白檀弓今春山尓。今といふをへたてたる也 又同十一。白檀 石辺山。又同十二。白檀斐太乃細江之 などあり。此三例。張。射。引とつゞきたるにて。心明らか也。しらまゆみは白檀也。此木。弓によろしければ。やがてその木の名にさへおへり。只弓とかうふらせむかことし。又一。戀二 てもふれで月日へにけりしらまゆみおきふしよるはいこそねられねとあるは。よせ哥なれと。弓をたてふせするをおきふしといひ。引ときに上弭下弭のよるにかけ。いに射るをよせたり（ママ）ことを。博覧のためにこゝにのせたり［しら波の］〇うちしきる 三。戀四 しら波の打しきりつゝとあり。波のひまもなくたちくるを。なすわざのつゞくにかけてつゝけたり。源。桐壺 あまりうちしきるをりをりはとあるも。更衣の御とのゐひまなくつゝくをいへり［しろたへの］〇衣〇袖〇ひれ〇たすき〇雲〇雪 万一。白妙能衣 乾有とあり。この外。白妙乃。白栲之。白木綿之。白細布なとかけり。木綿をもて織たる布をは。白たへといふ。いにしへより。白布を衣とする事はもはらなれは。布ならぬ物にてぬへる衣にも。おしたへてしろたへのとはかうふらせたる也。

さて袖ひれたすきなといふは。衣といふよりうつらひてつゝけたる也。又後にいひなりては。しろたへのごとき
といふ心にもかうふらせたり。雲雪なとつゝけたるこれ也。後世になりては。たゝ白き義也とも心うれと。それも
もとは。白布のことくになといふ心也としるへし。猶木抄にくはし しきたへの〇とこ〇まくら〇くろかみ〇衣の袖〇たもと〇いへ 万五。敷多倍乃登
許能邊佐良受とあり。たへは布也。布を敷とは。即夜床のことなれは。しかかうふらせたり。さて枕又たまくらな
とつゝくるは。床の上にある物なれは。轉してつゝけたる也。又くろかみとつゝくるは。枕に必ふるゝ物なれは。
枕といふより又うつろへる也。又衣の袖又たもとなとつゝけたるは。ふす時は。袖袂ともにかたしけは。床にふる
ゝ故に。床といふよりうつろへる也。又宅とつゝけたるは。猶床といふより轉したるなるへし。その故は。つねに
床をしくへき處なれは也。二。夏敷たへのちりはらふまにとよめるは。やかて床のことにいひふせたる也 しらとり
の〇とば〇さぎ 万四。白鳥能飛羽山松之とあり。しら鳥とは。何と定めたることはなく。只白き鳥をいふ也。さてとぶを
とばとかよはしてつゝけたり。白の字心なし又同九。白鳥鷺坂山とつゝけたるは。心明らか也。しづはたに〇思ひみだれて
二。戀四しつはたにおもひみたれてとあり。これは倭文といふ布を織る機也かくしつはたとしもかうふらせたるに
は心なけれと。いにしへは倭文をはいと多くおりたりけれは。しかいふまで也。さて機には糸の數多く。梭をいれ。
をさをうつたびに。其糸どものいりみたるゝ物なれは。思ひといふをへたてゝつゝけたる也 しのゝめの〇あく 一。
戀三しのゝめのほがら〳〵と明ゆけはとあり。これほから〳〵といふに冠らせたるなるへけれと。万十。稻日明去
來理とあるに同し例なれは。猶こゝもほから〳〵といふをへたてゝ。明とつゝけたるなるへし。しのゝめとは。同

巻。小竹之米丹尾羽打觸而(ママ)とよめるに同しく。春來りて。はしめて小竹の芽のはり出るをは。芽を目とかよはしてあくとはつゝけたる也。さて夜の明るにつゝけたり。これをいとひなりて。一。戀三しのゝめのわかれをゝしみたとあるは。明かたのことによみふせたり。又後世しのゝめのそらなとゝもよめり。これは。夜のすこししらみわたるほどを云

しきしまの(原本朽脱)〇やまと　万九。礒城嶋能日本國乃とあり。崇神帝。大和の礒城にましく〳〵。父欽明帝。も礒城嶋に都したまひて。此ふたつの御代。いと年ながくおはしまし。上風もめてたく。世に名たかゝりしかは。後にやまとの冠とはなれるなるへし。さて大和といふ名めてたきによりて。我國の惣名ともなれるより。此冠も日本にもかうふらする也。やかて万に。やまとをはしきしま共よめり

しなてるや〇かた岡　つくま　上つ世は。やもしなくて四ことによめれと。中昔の例にしたかひて。かくのせたり。推古紀。斯那提流箇多烏箇夜摩尓とあり。万に。科坂在越とあるをみれは。これ階坂の義なり。されはこゝも。しなは階也。階をたてたるは片低なれは。かたとはつゝけたるなるへし。てるは立の畧語なること。同十三に。師名立とかけるにて知へし。又つくまさぬかたとつゝけたるは。そこは階坂路ある所なれは也

しらぬひの〇つくし　上つ世は。のもじなくてよめり。景行紀に。帝。御船にて。火の國につき給ふ時夜くらきに。遙に火の光ある處をさしてゆくに。岸につくことを得たまへり。さて此火たがともせるそととひたまへと。其主をしらず。故に其國を名つけて。火の國といふとあるよりおこれる冠也。万三。白縫筑紫乃綿者とあり。白縫は不知火の假字也

しほがまの〇うら　三。長哥　塩かまのうらさびしけにとあり。これは陸奥の塩かまの浦といふに。うらといふ詞をよせてつゝけたり。うらさひしは裝部にくはし　これ一。哀傷　君まさて烟絶にし塩かまのうらさひしくもみえわたる哉とあるよ

りおこれる冠とみゆれは。しほかまのとしもかうふらする也。（此哀傷の哥は。河原の院にて。おとゝうせ給ひて後よめる也。かの院には。塩かまの浦のさまをうつしおかせたまへりしなり）

しもとゆふ ○かつらき山 一。大哥所しもとゆふかつらき山にとあり。しもととは。景行紀に。茂林。雄畧紀に。弱木村。式に。楉なとあり。俚にいふズワヱ也。山人これをきりて。さて葛をもてつかぬる心にて。楉結葛とはつゝけたる也

ひさかたの ○あめ○月○雨○雲その外天象の物には皆かうふらせたり 万二。久堅之天河原尓とあり。これ説〻多き中に。久しく堅き也といひ。又天まづなりて地後に定まれゝは。久しき方也ともいひ。又礼器用ニ陶匏一以象ニ天地之性一とあるにつけりとみえて。天はまろくうつなれは。匏形の天といふ也とも。猶さま〳〵にいへることあれと。いつれも心ゆかぬ所ある中に。匏形といへる説いとおかしき心ちす。されとすこし理つよきこゝちもす。猶今かうかへえむ時をまつ也。（諸説穏ならぬことは本抄にくはし）さて。かく天とつゝけたるをもとゝして。月（月次の月にも）雨雲。其外天象の物のかきり。皆これをかうふらせたり。これ天といふより轉したる也。又万十三。久堅之王都乎置而とあるは。帝の御ことをは。天にも日にもたとへていふことつねなれは。是も猶天といふより轉したる也。又一。春下 久かたの光のとけきとあるは。久かたを空のことにいひふせ。又同。雑下 久かたの中に生たるとあるは。月のことにいひふせたる也

もゝしきの ○大宮 万一。百礒城之大宮處とあり。又百石木能共かけり。しきは石城の義にて。百の石をもてきづける城といふにて。大宮の堅く厳なるをほめて冠らせたる也。（百とは。数をかきれるにあらす。只多きことをいはむとて云也）中昔になりては。もゝしきを。やかて内裡のことにいひふせて。一。雑下 音にのみ聞もゝしきを。又二。戀三 もゝしきはをのゝえくたす山なれやなともよめり

もみち葉の ○過 万二。黄葉乃過伊去等とあり。これは紅葉のちりすぐる心にてつゝけたる也。猶その

過ゆくがをしき心をさへふくみたるへし

［もの〻ふの］（○うぢ○やそうち人○やそうち川○やそとものを ○やその心○やそのをとめ○をとこ○いはせのもり）万十三。物部之氏川渡。これはちはやふるうちのわたりとある一本の哥にのせられたり。されはもの〻ふも。ちはやびたる人のことなれは。うぢはやきの心にてかくつ〻けたり。（くはしくはちはやふるの下にいへれは。こゝに畧す）又やそうぢ人。又やそうち川なとつゝけたるは。武を掌れる人。またすくなからねは。八十のうぢはやき人との心にてつゝけたり。（八十はたゝ多くの義なり。下準之）又やそとものをとあるは。猶上と同し心にて。多くの武士の作列する心につゝけたり。又八十のをとめとあるは。八十の男とまてにかゝれるにて上に同し。其をもしをは轉して。やかてをとめとはよめる也。その外八十の心たとあるは。只八十とかかれるにて。武士の多き心につゝけたり。又をとこをみなのとつゝけたるあり。これは男とかゝれるにて。女には心なき也。又いはせの杜とつゝけたるは。神武紀に。八十梟於彼處屯聚居とあるかことく。武士多くあつまれる心に。いはむとよせてつゝけたる也

［す］

［すがはらや］○ふしみ 一。雑下 すかはらやふしみのさとのとあり。すかはらとは。菅多く生たる所をいふ。菅はいと臥やすけれは。しかからふらせたる也。但これは。大和のふしみの里にかきれる冠也

［すがのねの］（○長き○おもひみたれて ○ねもころ）万十。菅根乃長春日乎とあり。いま思ふに。上つ世。山菅をよめる哥も多く。此三例のさまも。山菅の根なるへくみゆ。さて山菅の根は。細く長くはひひろごる物なれは。長きとはつゝけたり。又同四。菅根之念乱而とあるは。根の縱横にはひみたれたる心にて。思ひといふをへたてゝつゝけたり。又同十一。菅根惻隱君とあるは。根のほそくしからみたるやうになれる物なれは。根も凝の心につゝけたる也。又集中。ねもころ〳〵にとつゝけたるあり。只同し例にて。懇なる心をおもくいへる也。但三には。すか

のねといふを。長きことにもなしてよめり。日はすかのねにおもほえてとあるこれ也。これもとは此冠より出たる也。又後には。すかのねの春の日くらしなとはたらきてもよめり

すみぞめの〇ゆふべ一。長哥すみそめのゆふべになれはとあり。又二。雑 すみそめのくらまの山にともあり。夕くれはいとくら(暗)けれは。墨にてしもそめたらむやうに黒きの心にとりなしてつゝけたり。くらまの山といふも。暗(クラシ)の義によせたるにて。つゝけさまは上に同し

すみの江の〇まつ一。戀五すみのえのまつはくるしき。又そのならひに。住のえのまつほとひさにともあり。住の江は。松いと名たかき所なれは。松を待にかけてかくかうふらせたる也

詞 冠部終

# 詞四具

## 挿頭畧（カサシ）

かさしとは詞の上におくへきかきりをいふすへてかうふりかさしよそひあゆひともにおの〱本抄ありてそのうけさまよみかた引哥等くはしくみえたり今いたす所はその本抄にのする十か一なれは古哥をとかむにもみつからの哥によみいてむにもくはしき心は本抄にゆつりてのせすたゝ本抄のむねをよくみしりたらむ人のふとうちわすれなともしたらむ時のたよりとしかつむけに物まねはさる人の當座なとの用にそなへたる也今のする所にて事つきぬとおもはゝ古ののりにもたかふことといてきぬへし 詞四具いつれも別に本抄あり

**あ**

あはれ　思ヒマハセハ　アヽサテ

あは　アチニアルモノハ

あな　アラ　オヽ

あまり　アンマリ

あやに　フシギニ　ナゼニヤラ　メツタニ

あやにく　イヂツルク

**い**

いかゞ　ドウカ　ドウマア

いかゞは　ドウマア　コレハ

いかに　何ト　ドウジヤ　ドノヤウニ

いかゞせむ　ドウセウニハ　コレガドウセラレウ

いかにせむ　ナニトセウゾ

いかなる　ドノヤウナ　ドウシタ　ナニトヤウナ

いかにして　ナニトシテ　ナニトゾシテ

いかでか　ドウシテマア　ドウナリ𪜈シテ

いかでかは　ドウシタレバトテ　ドウシタラバマア

いかばかり　ナンボウホド　ドレホド

いく　俚言同

いくら　ナニホド

いくばく　イカホド

いくそ　何千何百

いくそばく　何千何百ホド

いさ　サレバド　ウアルカ

いさや　何ガドウヤラ

いざ　サア　ドリヤ

いさゝめに　當分ノヿニ　チヨツトヿニ

いと　イカウ

いたく　キツウ

いたづら　ムダニ　ムザ〱ト　徒モナイヿニ

いつ　俚同

いつか　イツゾ　此ゾを末へまはしても心うる也

いつしか　マダカ〱　イツノヿゾ　イツノマニヤラ

いつしかも イツノマニヤラ　いづこ 何處の心也　いづく 何國のこゝろ也　[illegible]　[illegible] レ

ドチラ　いづれの ドノ　いづら ドコニゾ　いづかた ドチノ方　いで ドレ ヤアコレ オケ〳〵 オイテクレ　いでや ソジヤトイフテモ ナニノヤクニタヽ

ウゾ　いな イヤ　いなや イヤ〳〵　いとゞ タヾサヘ イトヾサヘ 一バイ タヾサヘジヤニ　いとゞしく 同上　いま マヤガテ オシツケ インマ タヾイマノマニ タヾ今 イマ

ゴロ コレカラ　いまは イマデハ 今ゴロハ コレカラハ モハヤサラバ　いましは 今トナッテハモハヤ　いまさら 今トナリテ又　いまだ 今モッテ 今ニ

イマタニ マダ　いや イヤガウヘ イヨ〳〵　いよ〳〵 夜ニマシ日ニマシ　**う**　うち トント チヨット　うちつけ ユキガケニ 出合カシラニ アテジマヒニ テキメン　うちはへ

て ナガ〳〵ト ウチツヾイテ　うたて エシレモナイ　うたかた チトノマモ　うつたへに マンザラ 理屈ニハヅレテ　**え**　え　えぞ　えこそ　えも　え

しも 以上皆ドウモと里して下に必不の字をうけたるをラレヌと里すへし但えやはといふ詞には下に不の字をうけぬもあり　**お**　おなじくは 同ジヿナラ　おのが 自身ノ 自分ノ メイ〳〵ソレ〳〵ノ

おのがじゝ メン〳〵コウニ ワレモ〳〵ト　おのれ オテマヘ 我トワガデニ オノレト オテマヘバカリ　おのづから シゼント 自然ハ ヒトリデニ　大かた ゼンタイ ヒトヽホリ　大か

たは ヨク〳〵思カヘシテミレハ　おしなへて オシクルメテ ワケヘダテナシニ　**か**　かは アレハ アレハソジヤガ　かの アノ　かく カウ コノヤウニ

かくしつゝ カウシテコレナリニ 此ヤウニシテコレナリニ　かゝる カウシタ 此ヤウナ　かくばかり　かばかり コレホド　かず〳〵に ナニカニツケテ

かつ カタテニ カタ心ニ　かつ〴〵 マア〳〵スコシバカリ　かねて マヘカタカラ マヘビロニ　かへりて カヘッテ　かならず チガヒナシニ キハメテ キット

かへす〳〵　かへる〳〵 ナンベンモ〳〵 クレ〳〵　**け**　げに ナルホト イカサマ　**こ**　こゝら コレホトオホク コノイカイコト　こ　これ コレ こは勢あはたゝしくこれはゆるくいふ

心也　これやこの コレガカノ何カ　これぞこの コレガカノ何ジヤゾ　この 里同　こゝ 里同　ことに カクベツニ　こと〳〵

ソレ〳〵　ことは　ことならば トテモノヿニ サウナウテカナハヌヿナラバ　ことのほか ツモリヨリモ ギヨウサンニ　**さ**　さ サウ ソノヤウニ　さは サウナラバ

さのみ サウバカリ サウ／＼上声也 ソノヤウニバカリ
さばかり ソレホド アレホド
さも サウナリ氏 ドウナリ氏 ドノヤウニモ ソノヤウニモ サルホドニ サテモ
さもこそ ソレコソサウナリ氏 ソレコソドウナリトアラフズレ
さもこそは ソレコソハドウナリ氏
さもあらばあれ ソレハドウアロトカマハヌ
さしも ソレホトニモ サルホトニの心なるもあり
さしながら サウシテキナガラ
さながら ソレナリニ ソノマヽデ
さぞ サウジヤ サヤウノ᠋コジヤ ソノヤウニゾ ソレホドゾ
さぞな コノトホリノ᠋コジヤハサテ サウアラウゾイノ
さこそ テウド此トホリ 又さもこそに同しきもあり
さて ソレデ ソシテ
さては ソシテミタラ
さや さやは さもし上のことし ややは下へまはして心うへきことあゆひの部に委
さるは ソレガシカモ
さらば シカラバ ソンナラバ ソシタラバ
さらで サウナウテ ソレデナシニ
さらでだに サウナウテサヘ
さらぬだに サウナイノサヘ さなきたに同
さりげ サウアリゲ ソンナケ
さりとて ソンナラバトイフテ
さりとては トイフテソンナラバ 二詞同しこゝろ也
さりとも ナンボウサウアリ氏 イカナリトモ
さればよ サレバコソ
さらに サラタメテ᠋コアタラシウ イマサラガマシウ 別段ニ ナンボウデモ何セヌ
さら／＼に さらにをつよくいふ也
さしはへて サシツケテ
さすがに サウハイヒツ、ヤハリ サウハイフモノ、ヤハリ

**し**

しかすがに さすかにの古語也 里言同上
しか サウ さに同
しかぞ さぞに同
しかも さもに同
しかばかり さはかりに同
しかはあれど さはあれとのこゝろ也
しかしあらば サウサヘアルナラバ さしあらはの心也
しかりとて さりとてに同
しひて セヒトモニ ワキヒラミズニ

**す**

すゞろに アテドナシニ メツタニ

**せ**

せめて ツキツメテ セメテノ᠋コニ

**そ**

そ それ ソレ そとそれの別はここれに同し
そよ ソレ／＼ ソレヨ ソヂヤ／＼
そゞや ソリヤ
その 里同
そこ 里同 ソナタ ソコモト など人をさしてもいへり 水の底なとによせたり

**た**

たゞ タツタ 何モナシニ ホカナシニ
たゞに ナンノ᠋コナシニ ナンノ᠋コナシニ
たえて トハウモナク ムセウニ
たとへば タトヒ タトヒハ
たが ダレノ
たれ 里同
たれも ダレデモ
たれしかも ダレガマア

**つ**

ついに ツマルトコロ トウ／＼ ドウデハ
つねに イツモ ツイ／＼

**と**

とは とことは 常住 不断
ともに 一ヤウニ イツシヨニ
とかく アチラコチラ
とにかくに アチラヘモコチラヘモ [illegible]
[illegible] ア

ラヘナリ圧コチラヘナリ圧 ドチフヘナリトモ　とにもかくにも　アチラヘシテナリ圧コチラヘシテナリ圧　よそはれは

又シテモ（ママ） ドウヤラスルト　な　な　ソチ 汝ト云也　なれ　ソチナド ソチラ なにおなし　なかなか　ナマナカ ナマジヒ ナマセ ケツク ケツクシテ ナマナカノヿニ　なぞ　ナンジヤノ

なぞと　ともしかろくみるへし下に落着をいふへき時によめりたゝ上に同　なぞも　ナンゾイノマア　なぞや　ナンジヤゾイノ　など　ナゼ ナゼニ　などか　ナゼカ 又かを

下へまはしても心うへし　などかは　ナゼゾイノ　などて　ナンデ ドウイフワケデ　などてかは　ナンデ何ゾイノ　なに　ナニシニ 何ノ爲ニ　なにに　なに 同但

すこしとかむる心そへり　なにせむに　同上　なにしか　ナニシニと里してかを下へまはして心うへし　なにしかも　ナニシニマア　なにしかは　ナニシニ何ゾイノ

なにとて　何トイフ心デ ドウ心得チガフテ　なにぞ　ドウシタモノゾ ドウシタヿゾ　なにぞは　何ヂヤイフテ ミヤレ　なにか　ナンノと里して下にゾとうくる心あり ナンノイノ ナニモイフコト

ハナイ　なにかは　ナンノ何ゾイノ ナニイフヿガアロゾイノ　なへて　ドレコレナシニ ヒツクルメテ　なほ　ベシテモナク ドウデモ トカク ヤツハリ　は　はや　モウハヤ ハヤ チヤト

はた　コレハ又 ハトイヒダスニ ハトイフテミタトキニ　へ　へて　ヒサシウキテ ヒサシウアリテ　ひ　ひたすらに　イチムキニ イチヅニ　ひたふるに　引キリニ カタイツサウニ　ま　また

マタホカニ フタヽビ マタヽチカヘリ　まだ　里同　まだき　ハヤカラ マダシイニ　まことに　ホンニ ホン〴〵ニ　まづ　ナニカサシオイテマア 一バンガケニ ナニカナシニマア

まして　ソレサヘアルニ バイマシテ　み　みな　スツキリト ドコモ〳〵 タレモ〳〵 ドレモ〳〵　みながら　ドレ圧ニ引クルメテ　む　むげ　イツカウニ 子カラ　むべ

ドウリデ 古はらべとかけり　むべも　ドウリカナ　むべこそ　ドウリコソ　むへしこそ　ドウリデコソ　むま　今といふこと也 馬によせてよめり

も　もはら　フツト　もし　里同 もしも同之　もろともに　トモ〳〵ニ　や　やくと　シゴトニシテ セイダシテ　やよや　やよ　コレナウ 二詞心かはらす

やゝ　ヨホド ヨツホド　やがて　ソノマヽニスグニ トリモナホサズ　よ　よし　ヨシ〳〵 ヨイハ　よしや　ヨイハサテ ヨイハイノ　よも　以下三條すへて下にじとうけたり オソラク何マイ

よに　ケツシテ何マイ　よにも　ドウイフヿガ アツテモ何マイ　よとゝもに　子ンガ子ンヂウ　よをへて　ナン年モ〳〵 〳〵の心にもよめり 又一例にイクヨモ

宇多布くろ 二

**わ**

わきて　トリワケテ　ブンダッテ

**を**

をりはへ　コヽデコソト　ハナシカケテ

## 脚結（アユヒ）畧

あゆひとは詞の下にあるへきかきりをいふこれは世にいふてにをはなりこれまたたゝ里言をあけたるまてにてくはしきことは本抄にゆつりて今のせす 繊あゆひもこゝにはのせす 本抄をみるへし

**あ** **あふ** テキ(ママ)へすとよむあゆひ也 マモナイ 何あル マモナイ マサヘナイ **か** **か** 疑也 里同 又ノカ共いふ **か何** **おもふ中のか** カトオモフ がと里して下にゾとつけてみるへし **うたかふ中のか** **かに** ナニドモスルヤウニ **かは** カイノ ト云モノカイノ **かは何** かはをまはして下にゾイノとつくへし **かも** カサテモ 又ノカ サテモ 疑也 **かも何** **思ふ中のかも** 上ニ同 **うたかふ中のかも** かもをまはして下にソサテモとつくへし **かや** カドウゾイノ **かな** **なひきのかな** ヿカナ **名の哉** デモアルヿカナ **か** **哉のか** といふ 里上に同し **が** 里同 ノガと里するもあり 君がいもがなといふ是也

**から** **名から** ニカ、ツテ ニヨルコト ニアルコト カラオコツテ **装から** ヨリハヤ ト云トハヤ **からに** 上の装からと里同 **がほ** ラシイヤウスニ カナニゾノヤウニ **がてら** カタ〲 **かぬ** 里同 ちから心にあたはぬ也 **がごと** ヤウニ 只ごとゝいふに同し如の義也 **かし** **みるかし** タガヨイハサテ **木かし** ハサテ **がて** ニクウ ニクガル ニクイコトニスル いでがてに過がてになとこれ也 **き** **き** タヿデアツタ タヿゾ **く** **くあり** かり同 ウアル まさりてをしくある物はなと是也 **く** クル **くる** キタツタ 只上に同じ **く** いはくかよはくなと是也 イフヿ カヨフヿなと里すへし **け** **けれ** ウアレ かれ同 **けむ** **事のけむ** タヿデアラウ タモノデアラウ タデアラウ **狀のけむ** カラウゾ カラウヿヨ これはからむとよむに同 **けり** 物ジヤ ヿジヤ タヿジヤ タモノジヤ **ける** ルヿジヤソノ

**けれ** けりに里同 **けく** イコト **け** サウ サウニ サウサウニ **こ** **ごと** 毎也 里同 又タビゴトニとも云 **こそ** **つむるこそ** よみつめにある也その下に打あふへき詞をくはへて心うへしたとへはことをのみこそとよみつめたるは下に思へとくはへてみるへし **めぐらす中のこそ** 下に名をよみて打あひをはふける也下にナレとくはへてこそをナンノヿナシニと里すへし **あたる中のこそ** これは下にうちあひの詞ある也つねの例これ也 コレハカリハ ナニヨリモ イ

ツヨリモ タレヨリモ ナシノヿナシニ（ママ） 外デハナシニ 外ノヿナシニ ナニカヤメテ ナニモセズニ ソレニモヨラズ こそは 中の こそ
ソレトハチガフテ なとそれ〳〵にくはへて心うへしすへてこそはこれらの里言にあつへし

に同めくらすあたるの二例あり ごと 如也 ヤウニ ヤウニアル さ さへ マデガ マデモ ざる テヰヌ デナイ ズニヰル ズニアル さ 里同 物を味はふ心ありさひしさふかさなと云これ也 し し しかし といふ

然尓なとの心あり ソノ方ニシテ コレニカキッテ キッパリト ソノヤウニ コノヤウニ しぞ ソレニカキッテコチヤ コレニカキッテコチヤ しこそ ニカキリテイツヨリモ キッパリトイツヨリモ しかしかもし

かは しはコノヤウニ ソノヤウニ なと里してかもかはなと皆下にまはして心うへし里言はその条〻をみるへし しも 落ゐるしも何ニカキッテモソノ方ニシテ 又詞の上に何モ 多イニ 何モアラウニ かへすしも ソノヤウニモ キッパリ

トモ 又詞の上へまはしてアナカチ何モとも云 しは ト成テハ アナガチ 何ト云デハ し何ば あらます中のし 未來のことをいふ也 何サヘ何タラバ 何サヘ何ナラバ 何サヘ何ウナラバ みる中のし 輕重の二様あり理の上にて輕きはサヘ何バ目前のことを重くいふは詞の上にモトヨリナニがとくはへて何はをニヨッテと里すへし して 名して デ ノデ 八重むくらしての類也 もとの身にしての類也 狀して アッテやとはなくしての類なり あゆひして ニヰテ デ有テ

じ 不也 マイ 人我物事の上にもいふ し きしかたのしといふ 里にタといふ 上の詞の上にサキダッテと加ふへし しか 上にこそとよむ例也 タコトデアッタノニ しかど しかども タヿジヤ ケレド

タヿデアッタレド 二詞おほくかはることなし しかば タヿガアッタレバ タヿガアッタニヨッテ す すら デサヘ サヘ ず 不也 ヌ ヌゾ す 令也 サス セル す 爲也花のかをする

の類を云輕く心うへし せ せば ニシテミタラバ ニシタラバ そ ぞ 二例 つむるぞ ジヤゾ ノジヤソ をれるばかりぞの類也 うたかふぞ 里同 又ノゾ 又上と同しくも心うへし ぞ何 めぐらす中のぞ 下の打合をはふける也ぞをがになして下の詞の下にジヤゾとくはへてみるへし あたる中のそ 下に打合ある也 コチハ ナニカシラズ た ただに サヘ デモ ナリ𪜈 たり とありをつゝめたる也ト云デアル何たるべきなとよむこれ也てありをつゝめたるはこれと同しからず たり これてありをつゝめたるにて木かくれたりとの類也 テアル テヰル つ づから 前にいたせる名からに里同 つ タゾ つる タノ タノチヤ タゾノ つゝ たゝひとつなれと

かりに二例をたてたり 中のつゝ テコレナリニ テソレナリニ 又何ゝシテとかさねいひても心うへし 末のつゝ テカラニ て てしかてしかな 二詞同し タイモノジヤ てを あつらへのてをテコノ方ハ 思ひたちのてを

テソノ方ハ てふ といふをつゝめたる也 里にもトイフと云 てへ トイヘなり で ずしてずにたとの如し イデ て ホドニ ヨトムホドニ ては すむには テハマ タにこそてばナ

ナラバ てむ てとむとの間にテ見ウ テオカウ テクレウ テキウ テアラウ テノケウなとくはへて心らへし てき テアッタヿゾ てげり テアルヿジヤ てし テ有タ

てぬ テキヌ てよ テキヨ てけむ テ有タヿデ アロカ てけらしも テアルヿソウ ナサテモ と と いつゝのと とみるときくといふと思ふとするの五ツなり里同 にのと トナリテ ニシテ

ニナリテ わたつみとあれにしとこの類これ也 里同 何とゝもにの心也いもとわれとなとの類也 にごるど 里同 又ケレド テモ

いふと ことはかたくとなとの類也 トモ へだつると ふきとふくの類也 ミルホドノ何 キクホドノ何 サアナニト云テカラハ

何ト名ガツイテカラハ

サア何ト云段ニナッテハ

とも いつゝのとも にのとも ともにとも 以上三例上のとの一二三例にものそへる也もは トモ ナドモ

と里す いへども いふとも 是又との四五例に同しもの字あれど心かはらず へだつるとも トイフ段

デハナイト云クラキデハナイ 何トモ とす ことゝす セイ出シテ何ス スイブン何スル かくるとすれとの類をいふなり かとす

何トモ いさともいさやの類也 何トスルカセヌニかといふあゆひをらく 末とす をらむとすればの類也里同又トオ

モフ なな ナア なん あつらへのなん ゆかなむなとの類也 テクレヨ いなむ テシマハウちりなむ後なとの な 禁のなといふし

類也 中のなん 文には多く哥にはまれ也何となんいふなとかけり里にガナといふ らすななとの類

也 里同 な何そ テクル、ナ コトハオケ ヤメニセヨ ヨシニセヨ な何そも なゝ何そも ルヿハキツト ムヤウニセヨ なゆめ カマヘテ何ナ ながら ながらに 二詞同

ナリニ ナリデ なし はなしもなしなとの類を云 装にまきらすへからす 里同 なく よみつめにしらなくな とよむをいふ ヌコト なくに かへるなくに かへらぬなくに モセヌノニ よみつめたる也 モセヌヿジヤニ ウカヤ

なり 末なり 聲すなりの類也 めたる也 ハイ なるは デアル ジヤ ノジヤ ノデアル ハイソノ 躰のなり にありをつゞ なへ ニアハセテ ヤサキニ に にを てをに同ての下をみる へしとをといふも猶全

同し に 里同 又 へ なとの心にもみるへし デノニ に何 きゝにきこえて の類也 バカリ にて にして 二詞全同しもとのみにしての類 たてぬきにしてなとは此例にあらす デアッテ にあり 上に

いふ躰のなりに同 花まち 遠にありしなとの類これ也 に にけりにしなとの類也是去 のぬの立居なり テシマウ ね ね ねがひのね ナレ テシマウテクレイ あつらへとねがひうけさまこと也こそに打合ふねは不 あつらへのね テシマヘ ヤウニ

のぬの立居なり ねば ヌニヨッテ これも 不のぬのたちゐ也 の の 里同 又がとも云時あり のたえてつれなきの類これ也 ごとくの ノヤウニ しら雲 のとも 秋きりのともにたち出て の類也 トイッショニ のか

ら らきみのからやなとの 類これ也 ガサセルヿ のみ バカリ バッカリ よみて物の上によまず 事の上に のごと 如也 ノヤウニ。ノヤウニアル がごとはらけさまかはれり の何さ 何ノ何サハ 何イヿヨ 何が 音のさ

やけさなとの類なりが何　は　ばや　願也　ばやな　タイナア　は　すむは　里同　又　ナラ　ナラバ　ノハ　にごるは　里同　又　ニヨ
さはうけさま同しからす　タイゾ　タイゾナア　ツテ　ト　ウナラハ　ナラバ　タラバ　まもるは深き心ありくは

しくは本抄にみゆもみちば　ばかり　中ばかり　ホド　ダケ　ダケバカリ　ノホド　聲はかりこその類也　末ばかり　はた　かなしのはた
ゝ袖にこきいれての類也．　をれるばかりそなと詞の末にあるを云トイフブン　ノトイフブン　とはらけきま

こと也戀せらるはたの類　へ　へ　にしへながるとの類也　べし　コロアヒ　子バナラヌ　ハズ　ソウナ　ラレソウナ　ラレソナヤウス
これ也　ゼヒモナイコト　サマヘ　ノ方へ　ヤウニ　ソナ　ヿガナル　ソナヤウス　ラレソニ思ハル、

サウニ思ハル　べみ　ソナヤウスサニ　べらなり　デアリソニ思ハル、　ま　まれ　もあれをつゞめたる也　何デモ
ヘキホドニ　ソナ故ニ．　何テモ何イデモ　何モセヨ何ヌニモセヨ　まで

名まで　里同　みやこまての類これ也　装まで　苔のむ　まゝ　行シダイ　ナリシダイ　ソレシダイ　まにく　只上のまゝといふ詞
すまての類也　ホドニナル　クラキニ　ジブンマデ　ニシタガフテ　ニツイテ　心マカセニ　のもと也　シダイニ

まじ　ソモナイ　ハズデナイ　まし　しもし清音也　ませば　ましかば　二詞全同　ウモノニ　ましか　ウモノジヤゾ　ま　まく　ウ
マイ　し濁音也　ウモノ　シテミタラバ　コ

ト　みまうきたゝまく　み　何み何み　何タリ何タリ　何タリ何ナンダリ　何タリ何ザツタリ　み　サニ　ちりなば　何何み　山たかみ
をしきなとの類也　ふりみふらずみの類也　をしみの類也　の類也

何が何サニ　む　むン　ゆかむかへらむ　む　令也　もとますのつゝまれる也里にも　め　め　んとよむにかはらす　ウ　めり　オモム
の類也　ウ　やがてマスといふ又むるとよむも同し　又こそに打合ふ時は　ウズレ　キジヤ

ヤウスジヤ　も　も　詠のも也　サテモ　か　も何かな　サテモ何イ　も何か　同上　もが　もがも　もがな　三詞全同　ドモ有タイ
ねてしるしもの類也　ヿカナ　ドモアツタラヨカロ

ナト有タラヨカロ　ドモナラヨカロ　もがもや　もがなや　二詞同　ドモア　もがもな　トモアルニシテミタラヨカロナア　も何てし
トモアルニシテミタラバヨカロ　ルニシタヤノ

が　も何てしがな　ヿガナルナラヨ　も何しが　ルヿガナル　も　ノモ　ドモ　もや何　もは上に同やはド　もぞ　ぞをめぐらして下に
カロ　二詞同　ナラヨカロ　ナドモ　へまして心うへし　ウニ又ワルイニなど

くはへて　もこそ　かぬるもこそ　こそを下にまはして　何ナトモ何ウコトジヤニとくはへてみるへしむかふるもこそ何ナドモ何ヿ
心うへし　シヤニ　よくみしりてわかつへし本抄に委　さもこそ　さもこそとよむ時の心え也　ソレコソ何モアラウズレ　ナン

ゝウ何ナ　ものから　何セヌデ何ケレト　何ハ何セヰテ　ものゆゑ　クセニ　もて　名もてデ　心もての類也きしかたもて　もの
レバトテ　何ハ何ケレド

おひになる物の類也 ドウリナモノ ワケナコト
リクツナモノ チガイナイコト

**や**

や 味のや也 冠のや みまさかやくめのさら山なと也 ノ 狀のや ヤノ コトヤノ
あちきなやの類也 中のや 花やもみちをなと也里同 下に別に何ヤカヤと
くはへて心うへし 末のや や 疑也 聲はきこ や何 同上 さす中のや やをハと里して下にソとつけて心うへしたてるやいつこの
はやをやの類也 イノ ゆやの類也 カ 類也 さゝぬ中のや やをまはして下の詞にカをつけてこゝろうへしことやわ
ひしきなとの や うたがふ伏や たれやなれやなと也たれやはデアルヤラなれやはジヤ、ラといふへし又やをハとも里し又はやを
類これなり ニヨツテと心えて下の詞にカ又ゾをくはへてもみるへし かへす伏や 花の名なれやの類也なれやをならんやの心
としるへし デアロカヤ ニアロカヤ ながむる伏や 便あれやの類也ヿカナと里して下の打合の下にハと やは カヤ 心かへりて落
くはへて心うへし ねがふ伏や テクレヨカシ 有明の月たにあれやなとの類也誂のやに混ずべからず 着する也 おくらさ
むやはのた やは何 これ又反語なり さす中のやは かやはかくるゝの類也やはをハと里して下何に カヤ やぞ 反語也そもしは
くひを云 カイヤィなとつけてみるへし さゝぬ中のやは 命やは何そはありてなと也 ハ何ジヤヤ それといふ也里
言はやはと同しく や あつらへ也なけや鶯 やる やらずやられすなとよむ也

**ゆ**

ゆめ何な なゆめに同しな ノ部 ゆめな何ぞ
あてゝ心うへし のたくひこれ也 サ チヤノ〳〵ト何モセヌ をみるへし
カマヘテ何スルヿハオケ ゆゑ 人めゆゑの 類也 里同 ゆく 里同 又詞の上にシダイ〳〵ニとつけ てもみるへし我そふりゆくの類也

**よ**

よ 味のよ也 ハイノ イノ ゾイノ コトハイノ よ 誂の
よ也いてゝみよな との類也 里同

**ら**

ら ヤナド ライ こひしらなと也 らん デアロウ ノデアロウ ジヤモノデアロウ アロウ 共に里言の下へヿヨとくはへてみるへし ○片ひゞきとは上の打合なき也 らめ
テアロウズレ らし サウナ らる ラレル らく みらくこふらくの類也 只くと同しく心うへし

**り**

り アル キル テアル テキル 雨にまされりの類也

**る**

る らるに同 里同

**を**

を かろきを それをこれをなといふを也 里同 色はひとつをなと也 ジヤノニ ノニ おもきを をば 何ヲコレハ 何ヲソレハ を何み 何カ何サニ 何ゝミ に心え同し

上のうけさま下のうちあひ古よりさたまりたるのりありてゆるがすべからぬことなれとあゆひ本抄にゆつりて今畧之引哥等も本抄をみてくはしくかうかへあきらむへし

# 題

○題　雄畧のみかど河上の小野にみゆきし給ふ時虻(あむ)とびきたりて。御たゝむきを噆(かん)けるに。蜻蛉(あきつ)又きたりて。あぶをかみゐてさりぬみかどあきつの心ざしをめで給ひつからまつれる人〻に。あきつをほむる哥よめと。みことのり有けるぞ題をもふくるはし(ママ)とやいふべき。又景行の御時。日本尊(ママ)みこと東よりの御かへるさ。おはりのくに尾津といふ所にいたりて。はしめ。東におもむき給ふとき。松のもとにわすれおかせ給ひし劔をみ給

　おはりにたゞにむかへるひとつまつあはれひとつまつ人にありせばきぬきせましをたちはけましを

とよませ給ふぞ題詠に似たる。かゝるたぐひはもろ／＼の古記にもおほくみゆ。万葉集には題詠かずしらずありといへども。大かた哥よりのち心はへにしたかひ題をくはへたるものなるへし。たま／＼さならぬも。心ざしをのぶることをむねとしてあなかちに題をつくすことをもとめず。中むかし。屛風のゑにつき。あるは哥合によりてよめるぞ今の題詠のはじめなれど題の文字をこと／＼くよみふするもあり。あらましなるも見えたり。これはまきるへき題のすくなかりけるゆへなるへし中頃の末より。なべてのうた。題詠にあらさるはまれにして一題かず／＼にわかれ難題おもひ／＼につくりいたされけるよりのちさはりおほくて題をつくすことたやすからずなれりける○結題幷組題の定　中ころよりをとつ世までは人がらのたかきいやしきにもよらず哥のたくみつたなきにもあづからずみな人心にまかせて。題をつくりいたしけると見ゆける(ママ)と見ゆ今の世にては時の宗匠（今式ニ古今集秘決ヲ傳受ノ上ニアラサレハ宗匠トイハツ こには傳受

（スミ人ノ哥フ（ママ）モ點削批判ナドスルカタ〱ハ點引兌ハラモ崩崢モイウ）のほかはこれをゆるされす結題とてもしかなり○句題　哥詩經文の句あり

霞にこめて　よるはほたるの　色なき露は

しくれ〱て　あかつきは　あはてとしふる

いつれも此たくひにて大かた三代集中の句にあらさるはなし今式にても同例なり

春水滿四澤（陶潛句）　螢火乱飛秋已近　獨釣寒江雪（柳宗元句）

廬山雨夜艸菴中（白樂天句）

なとのたくひにて一句をたちいたし題とす新式には朗詠集又は白氏文集（唐白居易集）の二集にいでずちかむかしよりまへつかたはあながち二集にもかきらすたちいたせるとみゆしかれとも本朝の名たかき詩句はおほく朗詠集にいり人の國よりきたれる詩文集のまれにして樂天の詩の名たかゝりけるによりたれもみな此集をたちいたされけるに今も此二集の句はをしなへてたち出しよむなるへし

卽身成佛　願成佛道　漸見濕土泥決定知近水

如日月光明能除諸幽冥　我等長夜臨習空法

これも新式には法華にいつることなしいにしへはあなかちにしからす釈尊六部の經（華嚴阿含方等般若法華涅槃）は大かたたちいたしけんなるへし今餘經をすて法華を用ゆるは滿足の集なれはなり○人名題　神世より。中むかしまでの天神地皇親王。女御。后。そのほか。世にいかめしく聞えたる人〻の名。もろこしにては。開闢より。李唐の世までの。聖。

賢。儒。佛。老。隱逸。才子。佳人。そのほか稽能。すくれたる人ゝの名佛にては。諸佛。諸菩薩の名のみにすぎず。又源氏物がたりにある人ゝの名をもよめり。これらも宗匠のほかは。さだまれる人名を用ゆとかや。〇物語題此題大かた寄戀(スル)の部にみゆ。凡物がたりくさ〳〵あれど題とするは。たゞ源氏物語。ならびに同し巻の名におらざるはなし〇讀題方　一字題は。大かた訓を用ゆ。たゞ與の一字のみ聲を用ゆ。又訓にてかける文字は訓にてよむ

子日　躑躅　山吹　雲雀　喚子鳥　苗代　春駒　卯花　五月雨　鵜川
照射　夕皃　蚊遣火　夕立　苅萱　女郎花　小鷹狩　稲妻　野分　時雨
枯野　椎柴　千鳥　網代　鷹狩　炭竈　埋火　神樂　關路　寢覺

又人の國さまに文字をくさりたるは。聲にてよむ。それも大かた。呉音を用ゆ

元日　新正　早春　遲日　首夏　新樹　七夕　納涼　佛名　早梅
連峰　野徑　蕭寺　遐年　万春　老人　眺望　閑讀　述懐　懐旧
羈旅　無常　往事　釈教　神祇　社頭　祝言

立春。元日はともに聲を用ゆ。立春子日(リツシユンノチノビ)は。上二字は聲を用ひ。下二字は。訓をもちゆ。此たぐひいとおほかり。たま〳〵關路晩涼(セキシノハンリヤウ)などのごとき上二字を訓を用ひ。下二字は聲を用ゆるも。あれとこれはいとまれなる例なり。又天象。地儀。植物。動物。器財。公事はすべて訓(クン)を用ゆ。佛氏の名ならひに經文詩句(ケウモンシク)はよみやすきにしたかひ音訓まじへ用ゆ諸越(モロコシ)の人名なとは漢音(カンオン)を用ゆといへど。孔子をくしとよめるたぐひにて。よみきたれるにしたがひ。よ

みかふることなし。後條にのする虚字の類は。大かた訓を用ゆ。但はれの會には。何の題にても訓をもちゆ。れんせい家にては。公私ともに訓をもちゆといへど。あながちにしもしからす。なを六部の中。題ごとの左右のかんなに。よみくせをあらはしたるをみて。くはしきをしるへし○出題　謌合。當座到着などには。むねとある人〻。これをつとむ。自分の獨詠。あるは勸進なとは。おのかじゝの心にまかせて。題をいだすを憚らす。やんごとなき御あたりの御會には。家の人〻。（哥ノ名家ヲ云）題者をつとめ給ふとぞ。又題をいだすに。心えあるべし。堀川院御時。長忠卿は夢後郭公と云題をいだし。孝言は。月暫隱といふ題を出し人のとがめけるとぞ但人間の泰否は哥にあづからずど（ママ）いへど。とがむる人もあり。憚らさる人もあれば。時所によりて。見はからふへきなり。哥合にあらざる時は。すこしのことは。こと〳〵しくとかめぬ事とぞ○題之廣狹幷同題。不同題之別　ひろきはせはきをかね。せばきはひろきをあはすべからす。かぬるを同題とし。あはせがたきを不同題とす

## 凡例

初春　元日
早春　立春
かく互書は同題としるへし

霞初聳
春從東來
貴賤迎春
東風來海上
なみよからすかけるは同題にあらさる也

初春海
早春天
雪中早春

但初春早春にては立春何早春何初春何なとの組題みなよむへきはさらなりほかもこれになすらへて知へし　雜題に同例の字をのみあけて全題をはふけるは季戀にもかよはしてしらしめんためなり　虚字助字閑字はみた異字を同例おくは讀かた同しきもはゝからさるゆへなり

## 季

初春　立春　殘雪　氷解　若草　綠艸　櫻
元日　春雪　殘氷　野草綠短
早春　春來　春雪　氷消　春艸　草漸青　花

霞中月　歸雁　上巳　山吹　蛙　暮春　三月尽
春月　雁別花　三月三日　曲水宴　春欲暮
朧月　去雁　桃花　欵冬　蝦　殘春　惜春

首夏
夏來

更衣

殘花
餘花

五月五日
端午

菖蒲
葵

時鳥
子規
郭公

橘
花橘
立花
盧橘

夏艸

水艸隔舟
草深
萠野艸
草滋
艸花先秋

鵜川
篝火
鵜舟

荷
蓮

夏月易明
夏月短

納涼
避暑

日涼
晩涼
夏涼
忘夏
逐涼
添涼氣

樹陰留客
樹陰風來
如秋
秋近
待秋

泉
向泉
對泉

樹陰流水
水風晩來
對泉石
泉爲夏栖
泉爲夏友

夏秡
六月秡
荒和秡

新秋
初秋
早秋

秋來
立秋
早涼

七夕

乞巧奠
星夕灯火

星河秋興
二星適逢
牛女悅秋來
漢霽月明

秋花
草花

萩
蘭
槿
女郎花

野花
野徑凌花

虫

蛬
松虫
促織
鈴虫

月前
月
月下

十五夜
明月

十三夜

曉月
有明月
殘月

殘烁
暮秋
秋暮
秋闌

秋徐暮
秋欲暮
惜秋
秋不留

九月尽
秋唯一日

初冬
冬來

初時雨
風從北來
時雨告冬
時雨知時

殘菊
冬菊
寒叢菊

前栽霜枯
庭草戴雪
寒艸
寒藂

寒芦
乾蘆

枯野
寒野

氷
凍

氷初結
始氷

冬月
寒月

霜夜月

水鳥
一鳥過寒水

鷹狩
狩場

埋火
炉火

早梅
年内梅花
梅先春開
梅告春近

歳暮
歳梢
歳深

送年
惜年

春漸近

春漸近
漸待春
春ト隣

時

日々
毎日
連日
逐日
随日

夕
日夕
日暮
薄暮
殘夕

幽夕

今夜
今宵

毎夕
連夜
歴夜
夜々
逐夜

曉
曉天
曉更
閑曉

深夜
夜深
深更

曛
夕
落照

晴
霽
雨後
晴後

冬
寒

昔
往昔

戀昔
懷旧
憶昔
忍昔
往事
思往事
旧情

歴幾年
經年
歴年
年久
久年
多年

遐年
遐齡
仙齡
延壽
延年

千齡
千年
千秋
萬歳
萬年

新
初
始
早

長
久
舊
古

前年
去年

雜

峰
嶺

山

外山
嵩

澗
溪
谷

澗戸

水
水上
水邊
水畔

水中
山水
流水
水路

波
浪
波間

淵
瀨
岸

河
河水
川
河上
河辺

池
池上
池辺

沢
沢辺

沼
沼辺

江
江上
江辺

澄江
江清
江上

瀧
滝邊
滝間
滝上

湊
湊辺

湖
湖上
湖辺

濱
濱辺

磯
磯上

浦
浦辺
浦畔

海
滄海
海上
海辺
海畔

海外
海村
塩屋
海路

嶋
孤嶌
嶋辺
遠嶋

渡
古渡

潟
汀

野

野水
野徑
野路
野亭

舟
船

舟路
船路

都
洛陽
華洛
洛中

禁中
禁庭
宮庭

仙家
仙室
仙宮

寺
蕭寺
古寺
佛寺
寺塔

山寺
野寺

田
畦
畝

山田
山畝

田村
田家
田里
田庵

里
鄉

水鄉
古宅
古鄉
古里

古宅
古屋
荒屋

庭
砌

荒庭
古庭
閑庭

籬
籬根
墻
垣根

軒
簷

園
苑

窓
牕

庵
艸庵

寢所
閨
閑閨

閑中
閑居
幽居
隱居

山家
山居
山館
山亭
山村

旅
旅中
羈旅
羈中

旅行

旅館
旅舍
旅宿
旅店
旅所

船中
泊
旅泊

神祇
社頭
叢祠

## 人

老
老人
年老

交
交友
侶
作

僧
淨侶

妓女
遊女
遊君
傀儡

客
旅人
行人
行路

釣漁
漁夫
漁客
釣夫
漁翁

白水郎
海人
船人

樵夫
樵客

樵歌
樵路
樵笛

隱
大隱

## 戀

初見戀
見始戀

欲言出戀
欲出詞戀

初言戀
言出戀
洩始戀
言始戀

忍久戀
忍經年戀

不遇戀
不逢戀

相互忍戀
互忍戀

纔見戀
僅見戀

忍通書戀
忍傳書戀

返書戀
被返書戀

尋緣戀
尋所緣戀

尋不逢戀
不尋得戀

憑示現戀
蒙示視戀

契戀
戀契

契違約戀
契不來
注契不來戀

契後世戀　疑眞僞戀　見不逢戀　來不遇戀　過門戀　違約戀
契來世戀
契他世戀　疑眞戀　乍見不逢戀　乍來不遇戀　過門不入戀　臨期變約戀

增　戀

逢增戀　邂逅會戀
逢切戀　稀逢戀

待　戀

忍待戀　互待戀　不待戀　稀待戀　待空戀
夕待戀　每夕待戀　待夜深戀　深夜待戀　曉待戀

夢會戀　羇中逢戀　逢無実戀
夢中逢戀　旅宿逢戀　乍臥無実戀

逢　戀

初逢戀　俄逢戀　隔夜逢戀
忍逢戀　俄初逢戀　不慮逢戀　隔一夜逢戀

別　戀

曉別戀　深更別戀　恨別戀　忩別戀
惜別戀　契別戀　忍別戀　急別戀

後朝戀

後朝增戀　猒後朝戀　逢不逢戀
後朝切戀　後朝恨戀　別後會難戀　一會後不逢戀

〃名立戀　歎名戀　歎無名戀　惜人名戀　〃顯戀　欲顯戀　契後顯戀　依涙顯戀　〃増戀　〃日増戀　逐日増戀　〃遇後増戀　逢増戀　切戀

春の哥には立春より三月盡までの題はいつれにてもよむへし夏の哥には首夏より六月秡までの題はみなよむへし秋の哥には立秋より九月尽までの題はいつれも用ゆへし冬哥には初冬より歳暮までの題はみなよむへし但春にて春の哥ならはその季にあへる題をよむへし（正月は殘雪梅鶯二月は花三月は落花藤山吹燕）なとしかるへし四季ともにこれに同し夏冬にて春秋の哥よむ時は暮春暮秋の題よむへからす雑にて天象地儀植物動物（ママ）居所なとをよめらんはいつにてもはゝからす（四季戀）旅別神祇釈教懐旧述懐公事哀傷祝なとはみたりによむへからす但同題おほくよむ中又は折にあひたる事なとはとかならしとすそれもまほならすよみいるへし神祇にはもろ／＼の神かす／＼の社頭みなよむへしといへとも法樂にはよせある神社頭をもちゆへし社頭にはもろ／＼の社頭（寄何社頭名所社頭社頭何）皆よむへしといへともこれも同しくはよせよき所しかるへし住吉の法樂は住吉の事北野法樂は聖廟の事水無瀬法樂なとも同しかるへき祝言にてはもろ／＼の祝みなよむへしといへと年賀なとは勸進のおもむきによりてよせよかりぬへき祝しかるへし戀にても。又よろつの戀。よむにさはりなしといへと。まつあひみんことを思ひこかるゝかつねなれは。不逢戀の心をよむへしとす。それもおほくよめらん時は。いろ／＼の戀の心をましへよむへし。何戀。寄何戀。寄何。みなひとつにして何そむ

ねとよめるもあり。又何をむねとせすしてよめるもあり。又何に雑の物をそへよめるも有。寄何たる述懐の哥もあり。又祝もあり。季もあり。季はたゝし當季しかるへし。釈教無常懐旧哀傷なとも。折にあひたる事しかるへし

う堂婦具ろ

三

# 哥袋卷之三

時節春部

目録

# 歌袋巻之三

## 時節

### 春部

あつさゆみ春とも。おして春ともよめるは。弓をおしてはるの義よりつゝけたる也。又おしてを。强てといふ心にも用たり○このめ春雨は。木の芽發(メハル)義によせていふなり○ころもはる風は。衣をはる義にてよめり○あらたまの春。あらたまの年。うちなひき春なとは。冠にいたしたれは畧す○佐保姫は。春を司る神の名也。もろこしにて。春の神を。太皞。勾芒といはむかことし

○年内立春　歳内立春　歳中立春　舊年(フルトシ)立春　歳暮立春　此五題共に同題也。いつれも冬の節分をよむへし。在原元方の。としの内に春はきにけり一とせをこそとやいはむことしとやいはむを本として。雪によせ。かすみにすかりて。いろ〳〵によむへし

年内立春

ふるとしにせちふむのはしめにて侍し日うめの花をよませたりしに

えたわけてにほひやすらむうめの花としの内なる春のしるしは　加賀守源兼澄

としの内にはるたちくれは一とせにふたゝひまたるうくひすの音　延久第三宮

あら玉の年の日かすは冬なからかねてそ春のけふ立にける　爲家卿

あらたまのとしのをのこる日數にもたかいそくとてはるのたつらむ　雅親卿

歳暮立春

くれやすきなこりをしたふ年の内に又をしむへき春もきにけり　称名院

○立春　節分をいふ。貫之君の。袖ひちてむすひし水のこほれるをはるたつけふのかせやとくらむ。とよみ給ふは。立春の哥なれと。元日に東風觧氷といふ心をおもひたまふやうにみえ。その外。ふるきあたらしき人の哥にも。立春。元日とさたかにわかれてもみえねは。ふるくかよはしいひけるにや。ひのはしめ。としのはしめなといふ事は。もろこしにて。三元。三始なといへることく。元日は。歳之元。時之元。月之元ともいひ。又上日なといへるかことくならん。忠岑の。春たつといふはかりにや

みよし野の山もかすみてけさはみゆらむ。素性法師の。あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝ物はうくひすのこゑ。なとを本として。いかにもたけたかゝるへし

立春

諸ともにわかなもつまむいもせ山やま田の沢の水もゝるめり　藤原長能

けさよりは波まのをふねみえぬ迄かすみの浦に春そきにける　藤原顯仲

けさみれはみわの神杦うつもれてかすむそ春のしるしなりける　同

月よめは心のうちにたつ春をいかてかすみのそらにしるらん　俊惠法師

たに河の氷ふきとく風のおとや春たつけふのしるしなるらむ　女房大貳

はるきぬと人こそいはめいつのまにけさ鶯のやとにつくらむ　俊惠法師

いつしかとふたみの浦のかすめるは明ゆくとしのしるしなりけり　法親王性覺

としなみのたちかはりぬるしるしにや氷りし水も下むせふなり　法親王守覺

あらたまのとしとはきくにいかなれはたゝ同し身のふりはゆくらむ　相納言長方

うくひすのいつしかいてゝつくる哉春は谷よりたつにやあるらむ　賴輔卿

春のくるしるしとみえてふるとしのたちへたつるは霞なりけり　同

はるきぬとそらにしるきはあさまたきかすみにきゆるあまのかく山　親盛朝臣

谷の水みねのあらしももろともにはるたつ今日といかてしるらん　寂然法師

春たつとしらてもみはや天のはらかすみはけさのおもひなしかと　小侍從

あらたまる春はけさかとおもふよりいつる日影もめつらしきかな　同

うくひすも出あへぬほとのあけほのにまつ春告る鳥の一こゑ　雅經

天のはらそらはゆきけの雲なからかすむにしるき春はきにけり　光經卿

山さとはたな井のこほりとけゆくに春きにけりと汲てしる哉　俊恵

あまのとの明かたちかくなく鳥の聲のうちにや春はたつらむ　雅有卿

うちなひきけふたつはるのわか水はたか板井にかむすひそむらん　新院御製

けふといへは雪けの雲もうちなひき春くるそらにかすみぬる哉　法印慶運

けふも猶ゆきけのかせはあらたまの年ともわかて春やきぬらん　同

はるのくるそらは神代もかく山やみとりにかすむ岑のまさかき　雅親

うちとくるみきはの氷あとみえてなみの千里も春や立らむ　称名院

あけわたる天のいは戸をいてし日の光かはらて春やたつらむ　雅世卿

――後雪

春はたちまたふるとしの雪はふりそらに心をわきそかねつる　大中臣能宣

――氷

はるかせもまたふきとかすいかはかりむすひかねたる氷なるらむ　大納言經信

○

元日　正月一日をいふ。此題にて此日禁中さま〳〵の儀式あるをよめるも少からす。中にも。元日宴なとをよめるはことさらにおほけれと。これは人からによれる事にて。下さまのまねふへき事ならす。さやうのことは公事の部にゆつりて。こゝにいはさるは。なへてよむへからさるをしらしめむかため也

元　日

きのふみし梢のゆきも鶯の鳴にしあれは花かとそ見る　俊恵

正月二日

雪ふるところもかさねしほともなくはなのひもとく春はきにけり　安法ゝ師

山里に冬こもりなから侍しに。正月一日猶雪のふり侍れは

ふる雪にそらは春ともみえねとも竹のよこめてうくひすそ鳴　康資王母

朝日のあしたにかゝみをみてよめる

身ひとつはこしつともなき年なれと老のすかたはさきたちにけり　源俊頼朝臣

○春從レ東來ル　春自レ東來ル　もろこしにて。東方の神を。太昊といひて。春を司る故に。こゝにても東より來るといふならむ。されは。あふ坂。名こそ。かすみ。なとの關をこえ。山をすくなとよめり。源師賢朝臣の。あつまちはなこその關もある物をいかてか春の越てきつらんなとを證としてよむへし但二題よみ方おなし

ふきくるも世のことふきにあゆの風枝をならさぬ春やみゆらむ　称名院

○幽栖春來ル　幽栖は。世をのかれたる住居をいふ

春かせにほらの陰くさうちなひき谷のとほそにたるひとく也　覺性

○初春　早春　二題共に同題なり。正月初旬をいふ。但此二題に。立春の心をよむ事はつねなり。立春の哥に。初春。早春の心はよむへからす

初春

こその冬ことしの春のしるしには山のかすみそたちへたてける　祭主輔親

あらためてけふしも物のうれしきは身のうさや又さまかはりぬる　紫式部

鳥羽殿に御方たかへに。正月十日行幸ありし。つとめてつかはしける

あらたまの春のはしめにふる雪はいつしかさける花かとそみる　修理太夫顯季

はる山にかすみたちいてゝいつしかと時のしるしやありけるとみん　相模

消あへぬゆきを花とやみよし野のよしのゝ山の春のはつかせ　雅經

玉しきや都にはるは立にけり東のかたやまつかすむらん　光經

いかにして氷とちたる柴の戸にもりくる春の苔の下みつ　俊成卿女
あさ日さすみかさの山の雲ゐよりかすみそめたる千代のはつ春　同
しらゆきのふりかくしてし梅花けさ色みえて春はきにけり　雅有
きりはれぬあさまのたけにいとゝしくけふは霞のたちやそふらむ　保憲女
くる春の色もみとりにあらはれて小松かはらに雪そ消ゆく　雅親
くりかへし春は來にけりあらたまのはしめをはりもなき年のをに　同

――霞
山かせもかよはぬはかり春きぬと都をこめてたつ霞かな　後土御門院

早春
かくれぬの氷とちたる冬艸のふた葉はつかに今やとくらん　能宣
とりの聲草木の心おしなへて春にやはらく時は來にけり　後伏見院御製

――霞
かすむめり世こそ春へになりぬらめなかめのうちはときもわかれす　同

――朝
朝かすみ朝ゐる雲にたちそひて山のは遠く春はきにけり　後花園院

――山
春の色のみちくる汐の山風やさらに八千世の色をそふらん　仝

○【春氷】氷のとくるよしも。又春猶さえて氷のまたむすふよしも。又消のころよしをもよむ也【氷解(トク)】【氷消(キユ)】【氷釋(トク)】いつれも。氷のとけ。又きえ。又なかるゝなとをよむ也【氷始解】この始の字に心なし。たゝ上の三題に同しと心うへし【雪消氷】又釋これは。雪も消。氷もとくる心にて。氷も又とよむへし【池氷盡開(コトヽヽク)】氷のこらすとくる心也【殘氷】【氷猶殘】共に去年の氷猶消のこりある也【一重殘(ヒトヘノル)】氷の結ひかさなれるが。次第にとけてうすくなりたる也【氷不レ解】去年の氷のとけぬをも。春の氷の消ぬをもよむへし

またいとうひ〳〵しきさまにて。ふる里に歸りて後。ほのかにかたらひける人に

とぢたりしいはまの氷うちとけはをたえの水もかけみえしやは　紫式部

かへし

み山への花ふきまかふ谷かせにむすひし水もとけさらめやは　よみ人しらす

みなかみのいはまのこほりとけぬらしいせきのしみつ聲まさる也　源賢法眼

打いてしいはまの波もたちかへり春さへこほる谷川のみつ　雅有

ゆき消ぬひらの山かせ猶さえて霞にこほる志賀の浦なみ　雅經

昆陽の池をみやりてよめる

春かせにみきはの氷とけぬらしさゝ波よするこやのいけ水　雅有

さよ千鳥はねうつなみの音す也よその春かせ氷とくらし　保憲女

○子日（ネノヒ）　拾芥抄曰。正月子ノ日。登レ岳遠望二四方一。得二陰陽ノ靜氣一。除二煩惱一之術也。とあり。万廿に。正月三日。玉箒をたまひ。各詩を賦し。哥をよませ給ふに。家持卿（マヽ）。はつ春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを。といふ哥みえたり。但上つ世には玉を身のかさりとし。たまたすきなといふ物をかけける。此玉はゝきも。ゆらくとよめれは。かさり物なるへし。さて。はつねも此ころよりいはひけるとみゆ。初子とは。正月上の子日をいふなり。又ふるき集に。中の子日といへる事もみえたり。源順集に。正月十五日。子日にあたる朝かゆの上に小松をおきてとあり。これ其一例なり。おほくは。我人のために。野へにいてゝ小まつを引宿にもうつし植るよしなとよめり。皆壽を延むとてするわさとみえたり。子日に松引ことは。いつの程よりか正月子日にかきれり。圓融院の。舟岳にねのひせさせ給ひけるも。寛平元年二月十三日なり。その外。伊勢。忠見。能宣。

道濟の集なとにも二月にねのひせしことみえたり。これは。む月の猗さえかへりて。野へにいつるに物うく。若菜もいまたもえいてす。あるは。事にまきれて。一たひ二月の子日を用られけるより。ためしとなれるならむかし

子　日

みよし野のちよのはる〳〵おひそはる小char松のみとり引つくさめや　能　宣

大后宮の人々。子日しに野へにまかりたるに。臺盤所よりとて哥よみてたまはせたりし

君か代ははる〳〵ことに野へにいてはけふの小まつに引おとらめや　よみ人しらす

又

のへまても何かたつねむ萬よは此みやまなる松をひきみむ　同

同し日。かはらけとりて

皆ひとの手ことにひける松の葉の數をそ君かよはひにはみん　能　宣

堀川院の子日つかまつりし

むらさきの雲のたな引まつなれはみとりの色もことにみえけり　實方中將

春の日にねのひの松を引つれてうらやみもなくみゆる千世哉　道　濟

かすか山ふもとのをのにねのひしてかことを神にまかせてそみる　俊　頼

つれ〳〵なりし日。人のふみおこせたるに

かすか野にたれかまつとは告つらむけふのねのひに鶯のなく　馬内侍

ねの日してよはひをのふるふな岡は松の千とせをつめるなりけり　經　信

ちよこめておひつるのへのひめ小まつひく手も千代のねもしられける　中納言家[illegible]

正月おとつれすとありけるに。七日子日なりけれは

いつしかとゝふひをまつにうくひすのけふめつらしきはつねなる哉　　弁乳母

つきもせぬねのひのちよを君かためまつ引つるゝ春の山みち　　相模

源大納言のねの日に

ねのひしてけふ引そむる姫小まついくたひ春にあはむとすらん　　右衛門督公任

かくら岡にて子日せし人に

舟岡も遠きあたりに子日してつな手に千代の枩やひくらん　　藤原隆經

かすか山ふもとのをのにねのひしてかことを神にまかせてそみる　　俊頼朝臣

いはひつゝけふしも松をひきつれははつねそちよのはしめなりける　　同

ねのひするいはねの松はいはねともふたはにしるし千代のけしきは　　覺性

ねのひする野中のまつにことゝはむいにしへたれかひきのこしけん　　光經

君に千代ちたひもちきれひめ小枩たか爲ならぬけふの子日に　　雅親

○［霞］春三月ともによむ也上古は四季にわたりてよめる例あれと後世は春にかきれりもろこしにて。霞といふは。里言にいふ。朝やけ夕やけとて。日の出。日の入る頃。空の紅に成たるを云後柏原院の。紅の名に立よりや心をは春の霞の色にそめけむ。とよませたまふは漢土の霞なり。霞は。漢名靄なり。又みとりの霞は。漢名青霞といひて。碧空。青霄なといふに同しく。空のあをくみゆるによりて。唯大そらの事をみとりのかすみとよみ來れり但(ママ)。みとりにかすむなとよめるは。靄の事にて。碧霞に同しからす。又仙家に紫霞といふ酒あるより。かすみくむなとゝ春によめり常のかすみに混すへからす［霞知春］霞のたつは。春の來るを知故たつならむと。推察してよむ也［霞始聳］［霞遠聳］此聳といふ字は。山に傍てかすみのたつをよめり［憐霞］これ

は一假名序の詞也。憐の字は。たゝ霞をおかしとおもふ心なり　霞添ニ春色ノヲ（ママ）　霞添ニ春光ノヲ（ママ）　此二題は。同題にて。霞のたつによりて。春の景色のまさるをよむ又霞の題に　籠　隔　繞　藏　の字。皆霞の立こむるよしをよみてそむかす

霞

雪さえぬひらのたかねも春くれはそれともみえす霞たな引　顯季

あさまたきかすみにけりなむこの浦にいつる友ふね数かくれゆく　信濃守源師光

心あるあまのすみかのいかならむかすみこめたる松かうらしま　同

炭かまの煙にむせふをの山はみねのかすみもおもなれにけり　左京太夫顯輔

よし野山峯の梢のたかけれはけさはかすみにうつもれにけり　源俊頼

谷河の氷もいまた消あへぬにみねのかすみはたな引にけり　長能

下の帯に細谷川はなりにけり霞をきたる吉備の中山　親盛

山―

雪分しいはの陰みちあと絶てかすみにたとる春の山ひと　俊成卿女

やまひめのかすみの袖を吹かせにたえ〳〵みゆる峯のしら雪　光經

あし引の遠山かつら春かけてやゝなかき日にかすむそら哉　雅有

暮山―色多

花の色はさなからこもる山のはの霞にあまる夕つく日哉　光經

たちまよふかすみをわけて出にけり山のは遠き夕くれの月　同

關路―

我はさはしらせて過はみえさらんかすみにまかふふはの關守　讃岐

橋辺―

かすみしくまのゝ浦わをみ渡せはとたえにけりなよとの繼はし　親盛

海―

もゝつたふ八十の舟路の夕霞いくへへたてつあはの島山　長方

浦―

あま衣はるくるそらの朝なきに袖しの浦はかすみこめつゝ　慶運

○**鶯** 源順抄曰。漢語抄云。鶯。又云。春鳥子なりと。今これを考るに。報春鳥これ也。鶯は。黄衣。朱啄。わか國のうくひすに同しからす。しかれ共。鶯とするより。友をもとめ谷をいて。喬に遷るなとも。ふるくよみ來れり。報春鳥も。出レ谷求レ友遷レ喬ことなきにあらねは。かよはしてよむとも。又雛なかるへし○一の物名に。うくひずとのみ鳥のなくらむとよめるは。必さ鳴にはあらねと。花のしつくにぬれて。羽のかはかぬをうしとなくやうに聞なさるゝ也。鶴の千代よはふなとよめる類にて。折から。所からにて。さ聞なさるゝなるへし○同集俳諧哥に。鶯のひとく〳〵といとひしもをるとよめるは。里言に。飛鳴といふこゑにて。ひとく〳〵となくか。人の來るを厭にやと聞なす也。今鶯を飼者の。巣をたつねて山に入るに。その巣に近つく時は。雛をうはゝれむ事を恐れて。必とひ鳴をすといへり。しかれは。いよ〳〵飛鳴するは。人の來るをいとふ聲にやとおほゆ○同集春上。鶯のこほれる涙今やとくらむ。とよめるは。鳴といふよりいへる也。これより。鶯の涙といふこと。おほくよめり。氷れるとは。冬をあらはせる也○巣もりとは。皆すたちたる跡にのこれるをいふ也

**春來鶯遲** 春には成たれと。鶯の音せぬ心也 **早鶯** **初鶯** 二題共に春早く來る鶯をよむへし **早鶯猶若** 早く來れる鶯の。また里なれぬ音澁るなとよむへし

鶯

いとゝしく音なつかしき鶯ははねもやうめのかにゝほふらん　俊頼
我やとのかきねのうめや咲ぬらむ鶯きなく聲きこゆ也　長能
われならぬ人きくらめやめつらしきあしたの原のうくひすの聲　紀伊
うくひすの花のねくらにとまらすはよふかき聲をいかてきかまし　顯輔
いとゝしく聲なつかしき鶯ははねもや梅のかにゝほふらむ　俊頼
かすならぬ身をうくひすと思へともなくをは人のしのはさりけり　同

花の木の枝にこつたふ鶯は聲のみならすみまほしきかな　長方
あさゆふにきけともあかすやとちかくねくらしめたるうくひすの音　賴輔
いつしかと都へいつるうくひすは谷のふるすや春はすみうき　同
うめかえをねくらにすれと鶯のこゑは心にとまるなりけり　親盛
心をやふるすにとゝむうくひすの出つるかたにたちかへりなく　同
うくひすの聲はみやこにふりにけりふるすはいまた雪もけなくに　雅經
うくひすのおのか羽風も吹とかていかにこほれるなみた成らん　慶運
聞 ―　よろつよの春にあひける鶯の音わかやけるけふにも有哉　輔親
雨中―　鶯はうめの花かさきたれはや雨にもこゑのしほれさるらむ　師光
水邊―　かすむ日はそこともみえぬ瀧の上のをくらの山のうくひすの聲　長方
山家―　山さとはつれ／＼になく鶯の聲より外はともなかりけり　俊頼

○若菜　荊楚歳時記云。正月七日。俗以二七種菜一作レ羹食レ之。人無二萬病一也但。七日を。人日といふは。正月一日を鶏日とし。二日を狗日とし。三日を猪日とし。四日を羊日とし。五日を。牛日とし。六日を馬日とし。七日を。人日とする故也。唐李嶠か詩に。七日最靈辰とつくれるをみれは。もろこしにてもいはふ事なるへし。唐の世には。我國とちなみ淺からす。風俗も。もろこしをうつされたる事すくなからす。ことに。荊楚はわか國にちかきあたりなれは。その風俗のうつり來て。かく作ことのためしとなれるにやと覺ゆ。さて菜を七種にさためし事は。日の數にあはせて。しかも成數なるを祝ふまての義にて。さらに別義なかるへし。かく七日をもてはやすにつけて。わか此より。若菜をつむことは。此日にかきるやうになりたり。一條禪閤に。かす

か野のとぶひの野らりいてゝみよ今いくかありてわかなつみてむ。又。あつさ弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらはわかなつみてむ。とよめるをみれは。上つ世中むかしは。若菜は。春いつとなくつみけるとみゆ。又九。菜は。食菜とするの名なれは。これをつむことは。七日にかきるへからす。又二春上に。左大臣。松もひきわかなもつますなりぬるをいつしかさくらはやもさかなむ。朱雀院の。まつにくる人しなけれは春の野のわかなもなにもかひなかりけり。又よみ人しらす。君のみや野へに小まつをひきにゆくわれもかたみにつまむわかなを。又みつね。春の野に心をたにもやらぬ身はわかなはつまて年をこそつめ。なと。みな。子日の哥なり。幷に朗詠子日の詩に。和二菜羹一而啜口期二氣味之克調一とつくれるをみれは。子日にも若菜をもてはやせしこと。疑なし。七種。幷十二種のことは。公事献若菜の條に出たり

若菜

わかなつむかすかの野へに雪まわけいまかく人の家ゐせさらむ　輔親

はるの野はゆきのみつむとみしかともおひいつる物はわかな也けり　和泉式部

かすか野の野へのかすみにたちましりしるもしらぬもわかなつむらん　源賢法眼

さそはねとかたみにそみるわかなつむ心は野へにかよひけりとも　紀伊

正月六日若菜人につかはすとて

身をしれはあしたのはらもたのまれてけふはかきねのわかなをそ摘　康資王母

夜もあけはあしたのはらに立いてゝ雪のきえまにわかなつみてん　源賢

人のもとよりわかなをおくりけるをみてよめる

いかはかりうれしからまし身につめるとしをわかなとおもはましかは　俊頼

小山田はゆきけの水のふかけれはあせつたひにてわかなつみけり　覺性

かすみしくひかたにあさるなにはめは心あてにやいそなつむらん　守覺

みわたせはわかなつむへくなりにけりくるすのをのゝ荻のやけ原　長方
水ふかき山田におふるわかなをはつむ手にやかてすゝくなりけり　親盛
はるかすみたちなはみゆきまれにふれわかなつむへきのへのかよひち　雅經
わかなつむ野への夕かせ猶さえてかへる袂はゆきにぬれつゝ　雅有
みわたせはわかなつむへきかたもなし荻のやけはら雪はふりつゝ　慶運
ふるさとゝなりにし野路のかたみとやふしみの田ゐにわかな摘らん　同
さそはねとおなし心にうちむれていく里ひとのわかなつむらむ　同
野――
けふみれはのへのわかなも萠いつるみとりにきゆる春の朝しも　称名院

○［春ノ雪］［殘雪］　春雪とは。春ふるをいひ。殘雪とは去年の雪ののこりたるをいふこと。定まれる事なれと。土御門院の春雪の御哥に。春もまたあさるきゝすの跡みえてむら〱のこる野へのしら雪とよませ給ひ。仲實朝臣の殘雪を。春きては花ともみよと片岡のまつのうは葉にあはゆきそふるとよめるを考るに。兩題。かよはしよむ例とみえたり。猶かよはしよめる例おほかれとはふきぬ［春ノ雪消ユ］去年の雪のきゆるをよむへし［春ノ雪欲ㇾ消スント］これも。こその雪の消むとするをよむへし［春ノ雪散ㇾ風ニ］［春ノ雪散ㇾ衣ニ］春ふる雪の。かせにちり衣におち。又は梢につもりたるゆきの。ちり落るなとよむへし［春ノ淡雪］春ふるをも。のこりたるをもよめり。いつれも春氣を帶て。消やすきこと。水の沫のことくなれは。淡雪といふなるへし。やかて沫雪ともかけり。

春　雪

ふりそはる春のゆきたにひまあらは山のみとりもけふはみてまし　輔親
ゆきふれはみやまやさむきしからきの外山にいつる鶯のこゑ　長方
はるも猶むすほゝれてやいはしろの野なかにたてる枩のしら雪　雅經
花はなほ風まつほともある物を枝にたまらぬ春の沫ゆき　同

いつしかとまたろゝ花の俤もちるはものうき春のあはゆき　雅有

うくひすもをしむとやなく朝くもりちり行雪のはなのなごりに　保憲女

春山雪　春も猶あらくま山はかせさえてゆつるはしろくゆきはふりつゝ　光經

殘雪　あやにくに春をしらするうめかゝに猶ふるとしとみするしら雪　俊惠

雲こほる空にはしはし消やらてかせのうへなる春のあは雪　慶運

野――　山のはゝ猶しら雪のふりそひて波ちはかりそかすみ初ぬる　雅有

岡――　あさ日さすみとりのくさはあらはれて木陰にのこる岡のしら雪　顯仲

濱――　大伴のみつのはままつあらはれてふれとたまらぬ春のあは雪　光經

○［餘寒］去年より。さむさの猶ゆるかぬをも。又春に成て。さえかへるをもよめり

餘寒　わかこゝろ春てふ事もおもほえすいとゝかしらの雪しつもれは　季通

二月――　春の哥とて

さくら花さきぬとみえしきさらきの空たのめして雪そ猶ふる　雅有

わきもこか衣きさらき比もへぬいつまてさゆるあらしなるらむ　慶運

○［梅］［梅花］全同し心え也。二題ともに白梅をも紅梅をもよむことつね也。唐韻に梅を。め。と云をやかて我國にても。うもしを添て。此音を用たるなるへし。萬の第五に。烏梅。二字をうめと點し。又同第廿に。宇梅。ともかきておなしく點せるをもてしるへし。かく烏梅。宇梅とも。万にはかき。又一の物名に。梅をかくしてあなうめにつねなるへくもとよめるをみれは。假名はうめとかくへきを。後世むめとかゝれたる事。いとことわりなし。うの字は。まことに音の便はかりに添たる也。馬の字。

唐韻まなるを。うもしを添て。うまと訓したるも。これに同し○催馬樂青柳。うくひすのぬふてふかさはうめの花かさとよめるは。鶯のよく梅に馴るをもて。うめの花をこそ。かさにはぬはめとおもひよせてよめるなり○一戀哥一にわかそののうめのほつえに鶯のとよめるは。一木のうちにもとりわきて。たかき枝を。ほつえといへり。万葉に。ほつえを。最高枝とかけるにてしるへし。江記第八。七月相撲の節會をかける中に。すまひの中にも。いと手たりなるを最手といへるにても弁へし○ふくめるは未開にて。俚云つほみ也

梅　かほらすはたれかしらまし梅花しらつき山のゆきのあけほの　顯輔
まつ人はおのつから來ぬわかやとの梅のにほひの色しこけれは　紀伊
ぬししらぬかこそ袂にうつりぬれかきねの梅にかせやふくらん　同
あしかきのおくゆかしくもみゆる哉たか住やとのうめのたち枝そ　清輔朝臣
しらゆきのかゝれる枝の梅花かをとめてたにわかれさりけり　雅有
みわたせはさとはかすみにうつもれてそこはかとなく梅かゝそする　同
うめの花いかにとめてかたをらましうはのそらなる風のにほひに　慶運
梅のはなまた此里にさかぬまそよそのにほひもわきてしられし　同
梅花　うめかゝのひまをもりくる春のよのあれたるやとはうれしかりけり　賴輔
はなはちりかはにほひくる梅ゆゑにうれしくつらき春のかせかな　長方
翫—　—　うつし植しわか木の梅のはなさかりめかれぬ色にならひそめぬる　光經
—遠薫　さよふけてをちの里なるうめのかの吹くる風にたくふなる哉　津守國基
夜　—　なには江やなみまもくらき夕やみにそれとはみえてにほふ梅かゝ　顯仲

夜－遠薫　なみのよるせゝの末までかほる也これや梅津のたかれなるらむ　源雅兼

水邊－　うめかえの下ゆく水も心あらははなちるほとはなかれさらたむ　心覺法師

遠村－　梅花さきにけらしな遠かたのかすみにしろき里のひとむら　光經

○柳　源順抄曰。兼名苑云。柳一名小楊。和名之太里夜奈木。したりやなき也。又同抄曰。本艸云。水楊。和名加波夜奈木。川やなき也又同抄曰。唐韻云。楊。和名。夜奈木赤莖柳也。やなき。いつれも同し種類なれは。哥にはなへて。やなきとも。青柳ともよみ。ことわけて。したりやなき河やなき。河そひ柳ともよめり○ふし柳は。臥柳にて。枝ふりの。たちものほらすして。よこをりたるをいふなり○玉柳は。うつくしきを。玉とは名つけられたるなるへし○西行法師の。玉のを柳は。漢辞の中にくはしく載たれは。こゝにいはす○しなゆるとはなよゝかになひく義也。万に。しなえをみれはとあるは。靡うこく糸をみれはといふなるへし。糸の用を狀にしていへるなり○貫之の。あを柳のまゆにこもれる糸なれはとよめるは。蚕のまゆをつくりこもれるかことく。葉の。いまた鋒の中にこもりて。ひろこらさるをいふ清少納言のさう紙に。柳なといとおかしきこそさらなれ。それもまたまゆにこもりたるこそおかし。ひろこりたるはにくしといへるにてしるへし。柳のまゆとは。葉の人の眉に似たるをもていふ也。又まゆかきたるゝとは。人の眉をかけるやうにしたりたるをいへり。こきたれて降雨は。雨の落るをいひ。柔こきたれては。俚にしごくといひて葉をおとすをいふなれと。これは。眉を書き。したらす心にいふなるへし。垂るをも。落るをも。かよはしてたるゝといふ事。もろこしにても。したり柳を。垂楊。垂柳といひ。おつる露を。垂露とかけるに同しかるへし。眉をかくは。書にて。卓文君の。遠山の眉を書き。張敞か。妻のために眉を書けるなともあり。又黛を。まゆすみといふも。眉は。書くものなれはなり○花田のいと。里言にいふ。花色なり。さみなしていふ也

柳

わきもこかまゆにたれはあを柳のなひくにつけてますなみたかな　手古良

春風にふきなみたりそわきもこかかつらにすてふ青柳のいと　基俊

はるかせにみきはの氷とけぬれと波によらるゝあを柳のいと　親盛
さほ姫のかすみの衣うちなひき袖にすかとる青柳のいと　慶運
さほひめのてたまもゆらによる糸やみとりになひく春の青柳　土御門院
たちこむる霞の袖のほころひにみたれてみゆるあをやきの糸　雅有

｜垂　青柳のなひくしつえにはきてけり吹はるかせやとものみやつこ　讃岐

墻｜似糸　山かつのそのふにかこふかきしはのたえまにみゆる青柳のいと　堀川

垣｜留客　あをやきのいとゝかきねになみよれはたちくる人も絶ぬ也けり　經信

雨中｜　はるさめに猶たちのほる烟かとみゆる柳のこすゑなりけり　師光
青柳のいとよりつたふ春さめやつらぬきあへすおつるしら玉　頼輔

池｜　あさみとり春のうすらひとくるよりむすひかへたる青柳のいと　康資王母

岸｜　青柳のいとをつな手にひく舟はきしちかくこそよらまほしけれ　伊勢大輔
神なひのみむろのきしの柳かけみとりもふかき水のいろかな　光經

岸｜垂絲　はるかせのたえす吹くるみきはには波そよりける青柳のいと　爲仲

岸｜映水　水の面に柳のかけのなひくをはそこにも風のふくかとそみる　國基

○若草　秋の荻。萩。薄。夏のさゆり。江のあしなと。なへての草の萠いつるをいふ。あるは。雨によりてあをみわたり。あるは。野をやきてもえそふよしなとよむ也。若草のつまといへる義は。冠の部にくはしく載たれは。こゝにいはす　春草　よみかた。若艸に同しきも難なし。しかれとも。若草は。たゝもえいつるさまをのみよみ。春草は。春花さく草。さいたつま。つはななとをも。

よむ也。但。わらひ。すみれなとをよむも難なしといへと。又一題として外にあれは。其題をよみふするやうにはよむへからす

若草　　春の哥とて

霜かれむほととほけにもみゆる哉今もえいつる春のわかくさ　相模

雪まよりみとりはふかし春雨のふるから小野ののへの若草　雅経

ゆくてにもむすふはかりはなかりけり雪まにあをきのへの若くさ　光経

雪きゆる庭のわか葉に露みえておもひやらるゝ秋のあさちふ　雅親

春草

あらを田のゆきまの草の淺みとりはやくも春にかへす比哉　實隆

――漸滋

はるふかくなり行まゝにあせにけり野中のしみつ草かくれして　覺性

湖辺――

わか艸のもえいてしよりいそなつむしかのうら人たゆるまそなき　同

春岡草

岡のへや猶しらゆきのふる艸に新くさましる春はきにけり　光経

○蕨　早蕨（サ）　漢字同レ之。二題共。よみかたかはることなし。初わらひとよまは。めつらしとする趣をよみそふへし。大かた。折を節にかよはし。つま木に折そへ。家つととし。もゆるといふより。火によせなとしてよむ事つね也○かきわらひとは。隕蕨といふにて。岩陰。木陰なとにおほくもゆる物なれは。いへる也。けときと。五音通すれは。かきとはいふなり○下わらひとは。木。草。雪。なとの下におふるをいふ。霞の袖の下わらひなとも。よめり○九條前内大臣の紫の塵もやましろ青柳のかけふむ山の春のさわらひとよみ給ふは。朗詠に。紫塵ノ嬾蕨人拳レ手と云句よりなれるにて。蕨の一名を。紫塵とはいへと。紫塵とはかりはよむへからす

蕨

むさし野のすくろか中の下わらひまたうらわかしむらさきのちり　長方

さわらひのもゆるのはらの夕かすみ春はたえせぬけふりとそみる　光経

早　蕨　はつくさのはつかにもゆる烟にも猶うつもるゝ野へのさわらひ　慶運

行路――　打やすむ道ゆきすりの手すさひにをれる蕨はつかねたになし　俊恵

採―遇友　ねのひせしのへにて君にちきらすはけふさわらひの折にこましや　同

○春ノ月　大かた。かすみのかゝりて。影のおほろなるよしをよめと。又冴かへりて。いまたかすまぬよしもよむなり　春ノ夜ノ月　同レ上　霞ノ中ノ月　もはら。霞のかゝれるために。影のかすめるよしをよむへし　朧ナル月　春ノ月朧也　春ノ月朧々ダリ　不レ明不レ暗朧々タル　月　春ノ月幽ニ　春ノ月幽殘ニ　かすみの爲に。影のかすかなるをも。又霞をいはても。おほろなる影。おほろ月夜なともよむへし　幽殘は。殘月の。おほろなるをよむなり　月流テ春ノ夜短シ　春は。日なかく。夜みしかき故に。月の傾やすきをよむ也　月入ル花瀨ニ　暗シ　これは。紀の曲水宴の題にて。谷あひの花に。月のかくれて。影のくらきをよむへし

春　月　いにしへの春ともみえす月かけは涙をそへてなほかすむなり　顯仲
すみれつむのをなつかしみねたる夜はわかためすめる月かとそみる　俊恵
たつねきてみる人やなき花さかぬ朽木のそまの春のよの月　長方
いりぬるかおほつかなしや山のはにかすみかゝれるはるのよのつき　寂然
あふ坂や山ちへたてゝかすむ也たてるやいつくせきのすき村　雅親
春かすみおほつかなしや小くら山まつの梢にうつる月かけ　雅有

春曉月　みよし野の山もかすみてあくるよの花にいさよふ入かたのつき　光經

春夜月　くもりなきそらもかすみにかすみつゝ光にあかぬ春のよのつき　頼實
雲はらふあらしをまては月ゆゑに花ををしまぬ名そたちぬへき　親盛

春山月　さらてたにたつことやすきこかけかは花にあり明の山のはの月　雅經

○春曙ハ　曉の後にて。夜のあけむとして。物の色なと。すこしみえそめ。山によこ雲のわたり。有明の月も。やう〳〵光おさまる比をいふ。たゝし。曙といふ題にて。明くれとよめるは。夜の明かた。又すこしくらめに成たる時をいふ。六百番歌合に。顯昭法師の。此よには心とめしとおもふまになかめそはてぬ春の曙とよめるを。俊成卿(ママ)判して。春曙なとこそ。あらはにはよむへけれ。かゝる難は。子細をしらさるに似たりとの給へり。これより。春曙秋夕の二題は。まはさすしてよむに難なし。沈思すへき題とす

春曙　たとふへきかたなき物はよも山をかすみこめたる春のあけほの　大貳

春は猶花のにほひもさもあらはあれたゝ身にしむは明ほのゝそら　季通

心あらん人ともいはし津の國のなにはの春のあけほののそら　雅經

都――　九重はかすみのうちのかねのこゑ花のほかより明ほのゝそら　称名院

○春雨　春あたゝかなる比。しめやかにふる雨をよむ。草葉のめくみとなるとも。野へのみとりをそふるとも。君の惠に似たるとも。花の父母(カソイロハ)となるともよめるたくひおほし但春のよせ詞たしかならは。あなかちに。しめやかなる雨ならぬをもよむへし。衣春雨は前にいへり。このめ春雨も前にいふ。このめ春かせに義同し。一春哥上(ニ)わかせこか衣はるさめふることに野へのみとりそ色まさりゆくなとを本としてよむへし

春雨　題しらす

うつらさへ住あらしてしやとなれは春さめのみそいまはもりくる　經信

わか身よにふるとしもなしゝかりとて袖やはぬれぬ春雨の空　慶運

春さめの日をふるまゝに片岡の荻のやけはら色つきにけり　俊惠

かきくらしこのめはるさめふる時はみとりにぬるゝ山のいろかな　長方

はるさめも日をへてふりぬみよしのゝよし野の山に花や咲らん　寂然

大かたのかすむを春のならひにてくもらぬ御代の春雨そ降　雅經

あしひきの山の木のめも春雨にぬれてとけゆく花の下ひも　光經

朝――　うめかゝのうつろふ袖もうちしめりうたゝあるさまの春のよの雨　雅有

なかむれは朝ゐるくものとちはてゝ山のは遠き春さめのそら　光經

夜春雨　はれやらぬうらみを空にかさねてやかすめる月に春雨のふる　雅俊

野――　山はみなかすみ斗の春のあめ野なる草木そ色はわきけり　称名院

○［歸鴈］暮春のころ。北へ行をふるさとへかへる鴈といふ。越路。又常世の國を。ふるさとゝいへり［春鴈］よみかた同レ上○只鴈とも。又鴈かねともよむ。但。鴈かねとは。もと鴈の音といふことなれは。鴈かねの聲とつゝくへからすといふ說あれと。万の第一に秋かせに山とひこえて鴈鳴之(カリカネノ)邑とほさかる雲かくるらし。二秋に。よみ人しらす。厂かねの鳴つるなへにから衣たつたの山はもみちしにけり。十春中に。菅贈太政大臣。厂かねの秋なくことはことわりそかへる春さへ何かかなしきとありて。上つ世より。かりかねのなく。厂かねのこゑとよめるは。鴈は音ありて。人にしらるゝものなれは。厂かねとつゝけて。鴈とのみいふ心になれるなりといふ說もあれは。雖とすへからすといへ共。くはしく其義を考るに。聲と。音と。すこしことなる義あれと。しはらくこれをいはす。はしめの證哥の外。万葉三代集等に厂かねと置て。さらに。聲とも。なくとも。おかすして。聞よしをよめる哥はおほく。厂かねのこゑ又は鳴とよめる哥のすくなきをおもへは。同しくは。声。又鳴なとつゝくる事は。この

むへからす○衣かりかねは。衣を借とよせたる也○おきめかりかねは。蜑人の沖の和布を苅にかけたり○たのむの鴈は田面の鴈なるへし。伊勢物語に。擧文 むかし男。むさしの國。いるまの郡。みよしのゝ里といふ所に。て。女をよはひけるに。その父よからぬ人にて。こと人にあはせむといひける。その母は。よはふ人にあはせむと心つけて。かのむこかねに。みよし野のたのむのかりもひたふるに君かかたにそよるとなくなる。おとこかへし。我かたによると鳴なるみよし野のたのむのかりをいつかわすれむ。此哥によりて。田面の鴈なりと。俊頼朝臣はいへり。基俊朝臣は。東國にて。かたみによりあひて。鹿狩するを。たのもしのかりといふ。これ也と云へり。顯昭法師も。此説にしたかひ。みよしのに。田のあるへきやうなし。下句にては。又鴈になして。鳴とは云なりと。ことわられたれと。俄に鴈になしたる。いとしひたる説也。又いせ物語の詞に。すてに。みよし野のさとゝあれは。田なしと云へからす。但。田面をたのむといふは。も。む。五音通へはなり○二秋に。行かへりこゝもかしこもたひなれはくる秋ことにかり〳〵となく。但。かり〳〵とは。假と云義也○一の秋に。秋かせに。芭をほにあけてくる舟はあまのとわたる鴈にさりける。鴈の鳴こゑの。櫓の音に似たれは。もろこしにてもこれを鴈櫓といふ。これらより。ひたすらに。鴈を舟になしてよめるなるへし○かりの涙は。なくといふより。涙もあるへしとてよむ也。鴈唳はなく聲也○鴈のつら。又一つら。又つらみたる。もろこしにて。鴈のなみて飛を。鴈陣といふより。つらとも。つらをみたるともよむ也。又つらをはなれぬとは。是又。連飛するものなれは也○鴈の玉つさは。もろこし。漢の。蘇武といふ人。軍にまけて。胡に十九年ありて。漢をこひしく思ひ。鴈の足に文をつけてやりける。その鴈。漢にふみをよせけるより。鴈の玉つさとも。又はかりの使ともいへり。但。勅使の代使を。假の使ともいひ鷹狩せさせにつかはし給ふ使を。狩の使ともいふ事は。これに同しからす。又鴈の玉つさといふより。やかて。鴈の羣飛するを。文字かきつらねたるにみなして。玉つさとも。文とも。おほくよめり。又夜のそら行鴈は。つらもみえねは。からす羽にかく玉つさともよめり

歸鴈 顯季

ことつてむ人とまつらむ春かすみたなひくそらにかへるかりかね

行かへるたひのそらにや日數へむはかきのとけくみゆる鴈かね　國基

たまつさをかけし時にやかりかねを春かへりこと契置けむ　意尊法師

ちきりけむほとや過ぬといそくらむよるもすからにかへる厂かね　顯輔

さくら花さくをみすてゝかりかねの雲路にかへるこゑそ聞ゆる　大貳

人やりの春ならなくに行かりのかすめは空にかへる鴈かね　雅經

あまのはら霞のうちにねにたてゝたかさそふとか厂のいぬらん　雅有

はることにこしの雲ちに關すゑよみやこへかりやおもひかへると　親盛

みよし野の花にわかるゝ厂かねもいかなるかたによるとなくらん　土御門院

さくら咲山のをのへをかつこえてわかれもゆくか春のかりかね　雅有

曉――

今ははや秋をそたのむかへる鴈かすみにきゆるありあけのそら　顯仲

夕――

夕くれにいつくをさして歸るかりかすみの上に遠さかるらん　長方

夜――

月をやはたのむのかりもたちまよひかすむくもちによこと鳴なる　雅經

山――

かへるさはぬさもとりあへしゆふたゝみ手向の山の春のかりかね　慶運

暮山――

月やまつくもちの末にとふ鴈のしはしやすらふ山のはのそら　雅經

水上――

ひきつらねことちをたてゝかへるかり波そしらへの音あはすなる　長方

湖――

しかの浦おきにかすみてゆく舟や遠さかりぬる春のかりかね　光經

浦――

かへる厂それともみえぬ春霞かすみの浦の夕くれの空　同

○春駒　王仁略曰駒馬子也。こうまといふをつゝめて。こまと云也。哥には。古は。[illegible]
へはかならす馬子にかぎりたらむを。後世になりて。哥には老少共になへて駒といふより。馬子を。ことさらにことわりて若駒とす。これは我の字を。若。又。赤と假字にてかき。又はよみ同しきよりよみあやまれるもあるへけれと。いつれに古の義をおもはゝ。若駒とはいふへからす。あかこまといふも。猶我駒と心うへし。春駒は。牧(ノカヒ)の馬の。野への艸。沢のまこも。河の蘆なとのわか葉をあさりつゝ。かつふみしたき。あるはひとりある駒の。友をよひていはゆるさま。あるは若草にも心とまらてあれゆくけしき。手になれて。とりつなくへくもあらぬなとよむ也。さま〳〵の駒の名。駒によせある詞は。雑部。獣の條をあはせてみるへし。

春駒

まこも艸つのくみわたる沢へにはつなかぬこまもはなれさりけり　俊恵

もえいつる春はけしきのことなれはわかはそ駒のこゝろなりける　長方

春くれは沢へのまこもつのくみてなつみしこまも引かへてみゆ　同

いかなれはさしものとけき春の日にこまの心のあれまさるらん　慶運

とりつなく人もなき野のはる駒はかすみにのみやたなひかるらん　大隅守盛経

故郷――

あさちふと庭こそならめぬしもなき駒さへあれてみゆるやとかな　俊恵

ふるさとのまかきのみかは春くれはこまの心もあれまさりけり　親盛

海辺――

濱荻のわかはをあさる春こまはいせをのあまやとりつなくらん　覺性

○雉　雉子　仝同。廣雅云。雉。一名野鷄。哥には。きしともきゝすともよめり。○やつをのきゝすは万の第十九。あし引の八峰の雉なきとよむあさけの姿みれはかなしもとあり。同卷に。あなし山椿さきたる八峰こえ。又第十一に。足曳の山鳥のをの

一峰こえ。かくいつれも峰の字を用られたるをみれは。をは峰にて。やつをは。ふかきみねの雉といふなるへし○さをどろ雉。これも万の第十九。すきの野にさをとるきゝすいちしるく啼しもなかむこもりつまかもとあるをみれは。雉のなかんとしては。鶏なとのことく小躍するをいふなるへし○朝たつ雉は。夜の明る比。とひたつ雉をいふ。鶴。鷺。鹿。たとのたつといへるは別なり○朝なく雉。子細なし○名なし雉とは。神代紀に。あしはらの國。邪神多きをたひらけむとて。高皇産靈尊。天稚彦をくたし給ふ此神まめならすして。かへりことまうさす。高皇産靈尊。その久しくかへりことせぬをあやしみて。無名雉をつかはしてみせ給ふ。雉とひくたりて。天稚彦か門なる。湯津杜木の杪にとゝまる。ときに。天探女。めつらしき鳥來れりとつく。天稚彦さきに天にてたまへる弓矢をもて此雉を射ころしつとみえたり○燒野のきゝすとは。春野をやきたるあとにゐる雉にて。かくれ所なきよしなとよめり○ほろゝうつ。又ほろ／＼となくなといふは。雉のとひたゝむとして。羽をうつ音也。ほろ／＼といふより。涙のこほるゝにかけていふ也○つまこひ。つまよふ。子をおもふなと。皆きしのありさまを云○しばうつりしてなくとは。雉は高く飛ことなく。柴なとをつたひありく物なれは也。赤人の。春の野にあさるきゝすのつまこひにおのかありかを人にしれつゝなと。本としてよむへし。

かりひとは聲をたつぬとしらねはや霞のうちにきゝす鳴らん　　源兼昌朝臣

あふことのかたのゝきゝすつまこひにむへほろ／＼とたちゐなくらむ　　常陸

すゝのおとやちかく成らんみかりのにかくろへかねてきゝすなく也　　大進

○雲雀　漢名。告天子。一名叫天子。崔禹錫食經云。雲雀似雀而大。和名。比波里。又漢語抄云。鶬鶊。和名同上。今案するに。鶬鶊は黄鳥の一名にして。ひはりにあらす。雲雀もかたちは似たれと。まことにしかるやいなやをしらす○あかる。おつる。雲に入。子をおもふなと。皆ひはりのありさまをいふなり○ひはりの床。又草葉の床とは。野にふす故にいへり。

雲雀　いつくよりあかるもみえてかすむ日になくねそらたる夕ひはりかな　慶運

いつくともねくらはしらす夕ひはりなかなくこゑはそらにのみして　同

たひ人のあさゆくのへのしはふよりひはりも床をはなれてそたつ　雅親

○喚子鳥　此鳥未レ詳。東野州常縁の。古今傳受箱内。切紙の説には。かつほう／＼となく鳥をいふといへり。或は猿といひ。鹿といひ。又つゝ鳥と云。これは鳥を呼に似たりといふ説あり。又万につゝといふことを呼子鳥とかけりといへと。彼集中さる事なし。仁和寺法親王覺性集に。ありまへおはするみちによふこ鳥の鳴けれは。山ちゆく我をとゝめてよふこ鳥いふことなしに谷をすく也とよませ給へれは。其比までも。それとさたかなりけるなるへし。小侍從の。杣木たつ斧のひゝきによふこ鳥おほめくほとをうしとおもふな。此哥をみれは。漢名靑鵠とて。但云。かんこ鳥といふに似たれと。小侍從も。しりてよまれたりけるかしらす。たゝいつれもたしかなる證もなけれは。今此題をえては。新式に春ふかく深山に鳴て。物さひしき鳥と心得よむへしとあるによりてよむへし。古は里ちかくも鳴。夏秋にも聞けるよしよめる例もみゆれと。其物たしかならさる上は。用へきにもあらす。おほく人をよふにかけてよめり。

喚子鳥　よる呼子とりを聞て

あと絶て人もかよはぬ山さとのなによもすからよふことりそも　源賢法眼

我をしもよふことりにはあらね共聲するかたに心をそやる　大貳

くるひともなき物ゆゑによふこ鳥なれもならしの山になくらむ　讃岐

みよし野の槇たつ山のよふことり花よりおくの聲そさひしき　光經

まち佗てたてつる邑によふことり雲井なからもこたへつる哉　馬内侍

うちむれてこえ行山のよふこ鳥われか人かといかてとはまし　慶運
花の枝にはねうちかはしよふこ鳥なけとも春はとまらさりけり　加茂女

○櫻花

花といふ題にて。さくらをよむはよしといひ。櫻と云題に。花とのみよむはこのむへからす。同しくは。さくらとよむへき也。履中紀に。天皇或時。舫を池に泛へたまふに。花のちり來れるを御覽して。其花の名をとはせ給ふに。侍臣對て云。佐久良なりと。云々但此花。唐名未レ詳。古は四季の花を。たゝ花とのみよみける事あまたみゆ。中ころより。花と斗よめるは。おほくはうめ櫻なり○したれ櫻。いとさくら。同物也。漢名。垂絲海棠と云は誤なり○文字集略云。櫻を引て。さくらにあつ。しかれとも其子大如₂柏端有₁赤白黒者₁と云。これは里言に。ゆすらもゝとも。庭梅ともいふ物也。唐土にてこれを。櫻とも。櫻桃とも云。○かばさくらは。玉篇云。樺。和名。加波。又云加仁波。と順か抄にみえたり。万葉には。櫻皮をかにはとよめり。顯注には。朱櫻といへり。されと順抄に。朱櫻は波ゝ加。一云。邇波左久良。とあれはかはさくらには異なり。また源の野分に。春の曙のかすみのまより。かはさくらの咲みたれたるこゝちすとあり。これをあはせ考るに。順抄の朱櫻。一名櫻桃。俗云ゆすらにて。我國のさくらに同しからす。万に。櫻皮をかにはとよめるより。櫻の皮のこと也とする說あるも。顯昭法橋の。朱櫻をかはさくらとするも。ともにくはしからす。かはさくらとは。色すこし赤き花にて。所謂。樺也万に。かにはを。櫻皮とかけるも。樺の皮の。器材の用とするによろしけれは也桃花蘂葉に。表蘇方。うら薄紅なるを。かはさくらといふといへるをもて。樺櫻の花の色をみるへし。○にはさくらと云に。二のかはりあり。一は和名の邇波左久良にして。ゆすらをいふ。一は帖に出されたる庭さくら也。これも櫻の外に出されたれと。哥は。あさことに我はく宿の庭さくら花ちるほとは手もふれてみむ。又四の巻に和泉式部。風たにもふきはらはすはには櫻ちるとも春のほとはみてまし とよまれたるは。花一種の名にあらすして只庭にある櫻とみえたり。かの順か抄の。には櫻には異なるへし○ひさくら。かはさくらは。帖に二所に出されたれと。詞し題にて。こと

さらに色の赤きをは。ひさくらとはいふなるへし〇いぬ櫻は未詳。花さくらは。帖に櫻の種の下に色こき櫻の名を出されたる中に。出されたれは。櫻の一種にやと覺ゆ。その哥に躬恒はなさくらいかてか人のをりてみぬ後こそまさる色も出こめとあるによりて。紅のすこし色こき櫻ならめと云説あり。又。花さくらをるに袂のひちぬれはつゆにかゝれる色にそありける。菅家上に。淺みとりのへのかすみはつゝめともこほれてにほふ花さくら哉。又重之集に。花さくらつもれる庭にかせふけは舟もかよはぬ波そたちける。又四の春に。遠山のさくらといふ事を。藤原清輔。よしの山八重たつみねのしら雲にかさねてみゆる花さくら哉なとよめるをみるに。色こきよしもみえねは。よくいはれたりともおほえす。後世になりて。櫻花。なてしこの花。秋萩の花とよみてよからぬ時。花さくら。花のなてしこ。花の秋はきなとよめる類にや。いつれも強ては云かたし〇櫻かり。三春に。さくらかりあめはふりきぬおなしくはぬるとも花の陰にかくれむとよめる。此さくらかりと云は。櫻をみありく事也といふ説あり。これは。秋の小鷹狩。冬の鷹狩は。帖にもありて。普通のことなれと。春夏鷹かりせしことまれなる故に。此説おこれり。されと源順集に。雉子のなくを聞て。かりにくる人もこそきけ春の野の朝なくきしのちかくも有かな。又。うめの香をかりにきてをる人やあるとのへのかすみのたちかくすらむ。此哥は屏風に春の野のかすめるに。梅花さけるに。鷹をすゑて。人行かたかけるをよめる哥なれは。春にも狩せしことたしかなり。此さくらかりも。花みかてら。鷹すゑありくなるへし〇山櫻戸万葉に。あし引の山さくら戸を明置て我まつ君をたれかとゝむる。顯昭云。これは櫻の木にてつくれる戸を云なるへし。槇の戸。杦の戸。松の戸なと云かことしと。京極黄門。山さくら戸をよませ給ふ哥二首あり皆さくらの花の側にある戸のやうによみ給ふは。とりなしたまへるなるへし〇うす櫻は。紅のうす花さくらと云に同しく。淡紅色の櫻なるへし〇櫻色。雜の部。衣の條にくはし

櫻

春はたゝいつしかみむとまつ物を遲くもさける花さくら哉　長能

人しれぬ心のゆきてみる花はのこる山へもあらしとそ思ふ　師光

君か代のはるかにみゆる山櫻としにそひてもにほひましける　伊勢大輔

さくら花にほはぬ春はなけれ共みるたひことにめつらしき哉　顯季

あさまたきかすみなこめそ山櫻たつねゆくまのよそめにもみむ　紀伊

ちる花ををしむはかりやよのなかの人のこゝろのかはらさるらん　顯輔

みわの山すきまをわけてたつぬれは花こそ春のしるし也けれ　俊頼

さくら花ちりなむ後のおもかけにあさゐる雲のたゝむとすらむ　登蓮

山ー

みわたせは山のつゝきにさきみちてそらまてにほふ花さくらかな　道濟

尋山ー

いつこともしらぬ山路にいりにけり梢のさくらたつねこしまに　伊勢大輔

深山ー遅

今はさけみ山かくれの遅さくらおもひわすれて春をすくすな　經信

遠山ー

かみ山にまゆふのぬさを引かけてさらすや花のさかりなるらん　俊頼

見ー花

さくら花ひらくるみれとあかなくにいかにせよとかにほひますらむ　道濟

花

花の色はあかしとそ思よろつ代をさなから春になしてみるとも　長方

ちるよりはをしむもくるし咲そむる花をのみこそみるへかりけれ　賴輔

さきそめて我よにちらぬ花ならはあかぬ心のほとはみてまし　讃岐

つねよりも山のはしろきあけほのはよのまにさけるさくらなりけり　同

山さくらにほふあたりをはなれねはかすみのうちそすみか也ける　親盛

ふるさとのおい木のさくらあはれ也いつれのよにかうゑはしめけむ　光經

みよしのゝ山にすむひとそれも猶花にはあかて春やくらさむ　同

なかめやる遠山ひめの花かつらかけてまたれぬ時のまもなし　慶運

このもとにきてたに雲そまかひける何を櫻とよそにみつらむ　同

なかめやる遠のたかねの花の色にくもりもはてぬ夕つく夜かな　同

みるまゝにしつえのうめもちりはてぬさも待とほに咲さくら哉　和泉式部

暁尋—　夢さめていそきそきつる山さくらあさふくかせのたゝぬさきにと　顕季

暁天尋—　かすみもや花のありかをたつぬらむかをさへこめてたな引にけり　俊頼

隨風尋—　ふくかせをいとひもはてしちりのこる花のしるへとけふはなりける　定頼

尋山—　うきよにはおもひもいらてよしの山花ゆゑならすいはのかけみち　師光

遠尋山—　またちらぬ花もやあると春かすみへたつる山をいくへこゆらむ　長方

尋—遠到　花みにと春は心のあくかれて山ちふかくそたつねきにける　大貳

晩尋山—　くれぬとも猶みにゆかむさくら花あすはあをはになりもこそすれ　長方

—尋樵夫　つま木をは花の陰にややすめつるさらはいつくと我にをしへよ　師光

追歳尋—　としことに山へのこさすたつぬれとまたこそあかねちらぬ櫻に　國基

山—未綻　かねてより猶あらましにいとふ哉はなまつ峯をすくる春かせ　守覺

—初開　さきそむるくも井のさくらいはねともそらにそ千代の春はしらるゝ　長方

山—初發　さくら花まつさく山のはつかせは外よりさきにいとはれやする　雅兼

山—未遍　おしなへて風こそかほれ春の山さくさくらあれはさかぬこすゑも　俊成卿女

盛　—　たえ／＼にわかれしみねのしらくものひとつにみゆる山さくらかな　顯仲

毎朝見—　さきしよりいくかへぬらむあさかすみたつたの山の花のあたりに　雅兼

見遠―　おほつかな一むらみゆるしら雲やよしのゝたけの春のはつはな　長方

見―不掃庭　春のうちはちりつもるとも淸めせし花にけかるゝやとゝいはれむ　兼澄

見―述懷　とし每に花みぬ春はなけれともあくことのなき山さくらかな　國基

見―延齡　なかむれはをののえさへそくちぬへき花こそちよのためし也けれ　顯季

思山花　さきやせむさかすやあらむさくら花そのみ山木は數もしられす　匡衡

夜晝思花　ちるはなのみえぬ斗そをしみける心はひるにかはらさりけり　讃岐

馴花　年ことにいく木の花になれぬらんむそちに及ふ春をかさねて　重有

折花　をりとらはひとやとかめむさくら花たゝ一枝とことなしふとも　同

曉花　明なはとたれおもふらん花のうへにこゝろをやとす春のよのそら　平忠盛

朝花　おのつからかすみにたまる色もなし山のはしろき明かたの空　光經

依花日短　ちらぬまにちよもへぬへし花のかけけふのさかりのみるほともなき　称名院

夕花　かすみつゝそれともみえぬゆふくれは花ゆゑにまつ山のはのつき　光經

夜花　おもかけはくらき軒はにみゆれとも花に月まつはるのうたゝね　雅親

月前花　まとろまぬ月にゆめちは絕はてゝ春のよひとよみつる花哉　中務卿宗尊親王

依花忘家　よとゝもに野へにてとしやすくさましときはにさける櫻なりせは　顯季

花無擇處　いつこともわかぬさくらの花なれはたつねいたらぬくまのなき哉　同

見花忘恥　山かつも花の陰にはやとれともおのか姿のえやはかくるゝ　多良

花下述懷　(校者云歌ナシ)

花自有情　物をこそいはねと花も心あれはさくへきほとをすくしやはする　同

對花厭風　あをやきのいともて花をゆひとめて花のありかへやらしとそ思　俊頼

霞間花　たちまよふかすみ斗ははらふとも花ふきのこせみねのはるかせ　光経

霞中夕花　山かけはゆふへのかすみたちこめてはやくくれぬる花のいろかな　顕仲

霞隔山花　行ほともかつはみるへき山さくらなとてかすみのたちへたつらん　橘為仲朝臣

雨中花　そほつとも花の下にをやとはせむにほふしつくに心そむへく　安法

雨後花　雨はるゝ山のかひよりあくる夜のひかりもにほふ花のしら雲　称名院

月雨見花　ちるはなのしつくにぬるゝ袖なれはかはくもをしき物にそ有ける　俊頼

依花厭雨　さくら花しほるゝたにもあるものをはるれは雲のかへしふくなり　親盛

山花　分まよふみ山さくらやさきぬらむ雲よりおくにかほる春かせ　雅経

深山花　みよし野の山のかすみやはれぬらん花もあらはにゆくあらし哉　光経

閑山花　のとかなるすまゐともなしさくら花さきちる山の春のこゝろは　慶運

山中花夕　庵しめて山のかひあるみよし野の花よりいつる月をみるかな　藤原範基朝臣

關花　心あてにそれかとそみるさくら花かすみのせきのはるの夕くれ　光経

關路花　あふさかの山の春かせこゑたてゝ花になりゆくすきのむら立　同

橋辺花　花みよとたれわたしけむあし引のさくらにまかふ雲のかけはし　土御門院

水辺花　春の池のみきはのさくら風ふけは波よりうへにつもるしらゆき　光経

花陰水匂　いやしきに波うちこすとみえつるはきしのさくらのかけにそ有ける　長能

花影浮水　（校者云歌ナシ）

池邊花　くもりなきいけのかゝみの底きよみうつしとゝめよ花のおもかけ　長方

花樹臨池邊　みなそこに花のにしきをうつしもて又あやおるはいけのさゝなみ　同

海辺花　さくら咲春のなかゐのうらならむ花にとまらぬふな人もなし　守覺

故郷花　ふりにけるしかのさくらの春ことにいくよの人の心みるらむ　師光

庭　花　おのつからとひくる人もみるはかり花ちる庭のあさきよめすな　光經

入隣家見―　我やとをとなりになしてなかむれは花のあるしと人やみるらん　親盛

―時無外人　はるくれはうとき人こそなかりけれおなし心にはなををしめは　國基

客依―來　春ならぬをりにも人のきてとはゝ花ゆゑのみとおもはさらまし　爲仲

―形見・　かたみには外のちりなむとはかりにをしへし花のかけもいつまて　称名院

惜　―　ちるとみてあるへき物か山さくらまちしにたにもつくす心を　慶運

散はなに心のひまのあらはこそかせのやとりもゆきてうらみめ　同

依―惜春　ゆく春ををしむ心はちりのこる花みるひとやのとけかるらむ　頼実

山―未落　うらみしな山のはかけのさくら花遲くさけとも遲くちりけり　經信

落　―　よし野河花のかゝみのはやき瀬は散かゝるにもくもらさりけり　慶運

みれはをし花ちるみねの夕かすみたちへたつるも心ありけり　守覺

ちる花をいかゝみるらん松にのみうらなれわたる住よしのかみ　堀川

そらにのみふるかとそみる春かせのふきこす峯の花のしら雪　慶運

落ー隨風　櫻さくなからの山にかせふけは空にもみゆるしかのうらなみ　登蓮

山水落ー多　此ころはちりしく花にうつもれて音斗する山河のみつ　光經

ー浮澗水　なかれいつるたきの水たになかりせはちりにし花を又もみましや　頼実

水上落ー　みつの面に花のにしきをしきみてゝ波のたゝむにまかせたるかな　長方

閑庭落ー　くるひともなき庭の面にちる花をふまてみるこそ心やすけれ　國基

落ー盈地　苔むしろみとりの色もうつもれてちりしく花にしく物そなき　雅兼

ー落薫衣　ちりかゝる花やむかしのわきもこかかさねし袖のにほひなるらん　在良

曉落花　さくらちる山のあらしやはらふらん霞にはるゝ在明の月　光經

ー日ゝ散　山かせのふきこぬひまはさくら花いかてとおもふにちらぬ日そなき　爲仲

名所ー　しらくもの色そかさなるかつらきのたかまの花やさかりなるらん　顯仲

志賀山越　こえ來ては花なりけりとおもひしろ山ちによするしかのうらなみ　親盛

ー經年香　さきそめしはしめもしらぬさくら花いくはる風ににほひきぬらん　雅兼

ー契遐年　よろつよにみるへき花の色なれとけふのにほひはいつかわすれむ　顯輔

○ **野遊**　思ふとち野にいてゝ。すみれつみ。つはなぬき。家をわすれ日をくらしあそふをいふ。唐土にも三月三日。野に出て遊ふを踏青と云ことあり。いつくも心をやらんためなるへし。万に。かすか野の淺ちか上におもふとちあそふけふをはわすられめやも。猶おほくみゆ

野遊　すみれつみ小たか引すゑあつさゆみはるのに人のくらすころかな　雅親

○遊糸　いとゆふとも。あそふ糸とも云。又かけろふのもゆる春日ともいへり。此かけろふは万の第一に東野炎立なとかけるよりいとゆふの一名とする說あり。又蜻蜓をかけろふとするは其さまのよく似たるより名つけたるにて万にもかゝりてかゝれたる也。いとゆふは。唐土にて。遊絲。晴絲。野馬なと云これ也。

遊　糸　さゝかにのくもらぬ空のいとなれはあそふけしきの絶すもある哉　俊　頼
　くもはれてあまつみそらにあそふいとのよる〳〵はなとみえぬなるらん　兼　昌
　しつけくて吹くる風もなきそらにみたれてあそふいとそみえける　忠　房

○春日遲　遲日　二題全同。春の日ののとかにて。くれかぬるよしを詠へし。されと。有家朝臣の。ゆふくれにおもへはけさの朝かすみ夜をへたてたる心ちこそすれとよみ給ふを。心いみしけれとあれとあまりにもとめ過したる趣なるへし。又家持卿の。つれ〳〵とくらしそかぬる山里に花さかぬまの春の心はとよみ給ふを花さかぬまといへる。正月の末。二月の初なとの哥なりと難せられたるをみれは。春にても三月なとの日のかけの。尤なかき時をよむへし

春日遲　行末にまつことあらはくれぬまをいとひもすへき春の日なかさ　称　名　院
遲　日　かくしつゝつもれはをしき春の日をのとけきものと何おもふらむ　隆信朝臣
閑居春日永　こともなきまとのねふりもあきぬれとまたかたふかす春の日かけは　覺　性

○三月三日　もろこし鄭の國の民。上巳の日。溱洧といふ川のほとりにて魂を招き。魄を流し。蘭をとり。不祥を抜除けるは。漢の襄帝の時とそ。そのゝち晋穆帝の永和九年三月三日に。王羲之といふ人大原の孫統なと。四十一人と。會稽の山陰の蘭亭にあつまり。禊して觴を水にうかへ。詩を賦しけることあり。又其後。唐の開成二年三月三日。河南の尹李待價。歳ゆたかなるとて。洛水といふ川のほとりにて。白居易なといふ詩人十五人をあつめ。舟にのり[illegible]亭より。[illegible]堤にわたり。津橋に

いたり。朝より夕まて。酒のみうたひなとしけるとそ此時は。我ならの都にあたれは。遣唐使。又は我國に來れる漢人に。此遊をきゝ。大伴家持郷三日の哥に。漢人も舩をうかへてあそふてふけふやわかせこ花かつらせよとはよませ給ふにや。延喜の御時には。三月三日。紀師匠の曲水宴は。躬恒。これひら。友則。興風（字院藤太）千里。是則。たゝみね貫之八人あつまりて。花浮春水。燈懸水際明。月入花灘暗の三題をよめり。序は。みつねかけり。これは。山陰のあそひをうつされけるなるへし。但曲水宴は。公事の部にもいつれと。それは禁中の曲水をのみいひ。こゝには。下さまの人もよむへき哥のさまをのみあく。又忠岑集に。三月三日。ある所にてかはらけとりて。三千とせになるてふもゝのことしより花さく春になりにけるかなとあるを六帖にみかの日といふ所にのせたるより。桃の哥よみても。此題にはかなふと思ふはことわりなし。三日を。もろこしにて。桃花節といへはをりからの物にはあれと。桃をのみよみふせたるはかりにては。題にかなはす。もゝの外に。すこし此日のことわりあるへき也

三月三日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　俊頼

たれもみなけさは櫻をうちすてゝもゝをたつねてすくす也けり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　民部卿家

めくりくるやよひもひさし三千とせになるてふ桃のはなのさかつき

○桃　和名もゝ。漢名。桃。一名錦桃。すもゝは。漢名李。一名黄杏。からもゝは。漢名杏なり。桃といふ題にて。すもゝからもゝをよまむは。難なかるへし。李。杏を。もゝとのみはよむへからす○忠岑のみちとせになるてふ桃とよめるは（三月三日の条に全哥出）西王母か琅苑の蟠桃は。三千年にして。一たひ実のるといふ心をよめるなれは。佳辰をいはゝれける心もあれは。三日の哥に入られけるにや。漢武故事曰。東郡獻短人。呼東方朔。朔至短人因指朔謂上曰。西王母種桃三千歳爲一子。此兒不良也。已三過偸之矣。後西王母下出桃七枚。母噉二以五枚與帝　留核著前。母問曰。用此何。上曰此桃美欲種之。母笑曰。此桃三千年一著子。此下土所植也とあるより。三ちよの花ともよめり○下てるみち。下てる山なといへるは。花の色紅にて。木下をてらすを云

桃花不言　此題は。漢の李廣の傳に桃李不言して下に逕をなすといふ詞を。すこしあらためたるにて。もとの心は。桃李の花あれは。人かならすめてゝあつまれは。そのこのもとは。みちなきも。程なくふみならして。道の出くるも

のなりといふ義也。是は人の徳あれは。こと人もそれにうつりて。たゝしくなるのたとへ也。いま此題にては。たゝ桃の物いはさるを。いはせてしかなともねかひ。ものいはゝ。ことゝはむなど。さま〳〵にとりなしてよめり【桃花曝(サラス)錦(ヲ)】たゝ桃花を錦とみたる斗にて。曝の字心なし。されとほすなとよまむも難とするにはあらす【桃ノ花】たゝ桃と一字の題に同し心得なり

桃

前ちかき桃のはしめて花さきたるに

うれしくもゝのはつ花みつる哉又こむはるもさためなきよに　公任

山かつのそのふの桃は三千とせの花ともしらて春をへぬへし　政為

たれかまたみてしのふらん山かつのそのふの桃のはなのこそめを　俊頼

○【梨】和名なし。漢名梨。又含消(カンシヤウ)とも云。やまなしは。漢名鹿梨(ロクリ)にて。和名抄に樆(リ)と云は。あやまり也。此やまなを。山にも。又止といふ詞にもとりなしてよむ也○帖に。おふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならすもねてかたらはむとよめるは。片枝枯のこりたる老木なれは。実(ミ)のなるならさるもはかりかたけれとといふ心を。男女のあひたの。心にかなひかなはさるにとりなしてよめる也。これよりおふのうらなし。片枝の梨なと多くよめり○つま梨は漢名未ノ詳。これを人の妻。衣のつま。軒のつまなとにとりなしてよめり○梨花一枝帯春雨(ノヲ)(ママ)といへるは。白居易か長恨哥の句にて。楊貴妃(ヤウキヒ)のさまを。なしの花のうるはしきに雨をさへ帯て。いひしらぬよそひにたとへたり。此句の心をもて。雨をおふる枝なとよめり【梨ノ花】心得全(ク)同し

梨

承香殿の宰相の君なしをさし出たれは

かくれなき身とはしる〳〵山なしのおふのうらまておもひなるらん　実方

梨花

いとふへき友さへわきて山なしの花にはあかぬいろをそへつゝ　後土御門院

○【燕】漢名燕。又鷰。同字也。又乙鳥(オツテウ)。玄乙(ケンオツ)。玄鳥。烏衣(ウイ)客(ノカク)。社君(シヤクン)なと云名多し。こゝには。つはくらめとも。つはめともよめり。毎年。鴈と相反(ハン)して。秋さり。春きたる○ある女。夫をうしなひてひとりありけるを。その後こと男をむかへむことをすゝめ

てやます。女たけきて。その軒にすくふ燕のあしにあかき糸をむすひつけてはなちぬ。此燕後はひとりにたり。けれと、猶かれす。その軒に來たりける。母これをみて。又すゝむることをやめけるといふこと大物にみゆ。これはもろこしに。長安(チヤウアン)といふ所に任(ニン)宗(ソウ)といふあき人のつま郭紹蘭(クワクショウラン)夫の湖湘(コショウ)といふ所へゆきて。久しくかへらさるをかなしみ。詩をかきて。つはめの足にむすひつけてやりぬ。その燕。任宗のかたにとまりけるに。宗。これをみれは。妻の手なりしと云〻。これに似たる事也

風燕双飛

双飛(ナラヒトフ)とは。つはめはならひすみならひとふといふ事。唐土にてもおほくみゆ。いつも一つかひつゝある物なれは也。風燕とは。つはめの風にふかれてとふさまをよむへし

燕

玉たれのへたてやおもふあかすのみこゝに馴きてかたるつはめは　三光院

あはれみの後のはるまてのこりけりつはめのあしにつけしいとすち　参議爲相卿

○春興

野山の春の遊望(ユウホウ)。花のもとのまとゐなとよむへし

春山盛興

春はたゝ花みかてらにたむけするきたのゝみやま道もさりあへす　雅有

山家春興

山さとの柳さくらもをりをえてみやこのみやはにしきなりける　守覺

やまさとは春のあさけそあはれなるかすみのそこのうくひすのこゑ　覺性

○春日遊覧

前の題に全同し心得なり

おもふとち春のゝへみにあくかれぬやとに鶯なかはつけなむ　覺性

○春望　眺望春

此二題同題也。たゝ野。山。海。川たとの春のなかめをよむへし

春日望山　山中春望　暮山春望　江上

春望　海辺春望　水鄕(ケウ)春望

なとはそれ〳〵の結ひ物によりてよむへし

水鄕春望

あさつまや雲のをちかたかすむ也花かあらぬかしかのうら波　藤原業滑朝臣

水鄕滿

玉しまやこの川かみのさとつゝきかすみにまかふはるのあをやき　光經

○｜菫｜菫菜｜菫花｜この三題たゝ同し心えによみて難なし。順か抄に。すみれは菫菜。又俗に菫葵といふとあり。但。菫は旱芹とて俗にはたけせりといふ物とも云。又こまのつめといふ草なりともいへり。今按。すみれは紫花地丁なり。こまのつめといふは圓葉の紫花地丁也。此はなを。今の俗すまひとり草と云。これはいとけなきものゝ。此蘤ふたつをくみあはせて。引きりひききらるゝをもて。まけかちとする故になつけたるへし。加茂の保憲の女か集に。かたわけてふくかせによるすまひ艸にうつるそかひなかりける又。すまひくさほてふく風にふきつらゝ本ノマ、なにそしるらんさためなきよを。此後の哥はよくも聞えねと。前の哥をみれは。今俗のいふすまひとり草にやとおほゆれと。菫の題にすまひ草とはよむへからす()つぼすみれは一種にや。漢名も未詳。もし。つぼ前栽にあるをいふにやと云人あれと。帖に。山ふきの咲たるのへのつほすみれこの春さめにさかり也けり。又。堀川か集には。やとちかきまかきのうちにさくをこそつほすみれとはいふへかりけれとあり。つぼのすみれといふ義ならさる故。かくとりなしたるをおかしとて。堀川はよまれたるなれは。上つ世はしらす。中むかしよりこのかた。すでにつぼの菫といふ義にあらさることしるへし。

菫

我たにもすみうきやとのあさちふにともにすみれのいかてさくらむ　源太府行宗

ゆきやらてこゝろのとまる春の野にしはしすみれの花やつまゝし　堀川

やとちかきまかきのうちにさくをこそつほすみれとはいふへかりけれ　同

とふ人もみえぬ蓬かもとなれや今はすみれのさかりなる哉　手古良

むらさきのねはふよこのゝつほすみれ春やゆかりの色にいつらむ　土御門院

朝野－

あさかすみたてるやいつこむさしのゝくさのゆかりにすみれつみつゝ　長方

若庭菫

つほすみれ花さく庭はむらさきのゆかりにこけもむつましきかな　覺性

古砌一一　雨たにもとまらぬやとの軒に來てたれとすみれのひとりさくらむ　藤原爲忠朝臣

○蛙　源順抄に。蛙は蝦蟇。一名螻蟈也とあり。蛙蟇は。一名土鴨。水鷄。田鷄。活東。など云。黒蝦蟇は。一名蛤子也。蛙黽は青かへる也。いつれも哥にてはかはつともかへるともよめり。万第十二寄蝦と云題に。朝霞（アサカスミ）鹿火屋之下爾鳴蝦（カビヤノシタニナクカハツ）とあるをもて。蝦をかはつとよめと。これはひきかへるを蝦蟇と云より。蝦の一字を用られたる也。かゝる假字を用るは万のつね也。蝦はゑびの一種なれは。かはつとはよむへからす。

蛙　をやまたの水のこほりのうちとけてけさはかはつもゆるきなくなり　源　賢

谷川のあさきせことにみかくれてつまよふかはつこゑきこゆなり　源忠房朝臣

くれてゆく春をうしとやもろ聲にゐてのかはつのすたくなるらん　常　陸

古池蝦蟇　もろこゑにうきぬの池になくかはつ同しこゝろになにおもふらむ　俊　惠

○苗代　なはしろとは。苗をとるところを云。春あら田をすきかへして後。川。谷水なとをひくをせき入るとも。せくとも。ひく共。又かた／＼に引をは。引わくるとも云。其水のおのつから流て田に入をもて。まかすとは云也。此水の田に過たるを。あまるとも。あぜこすとも云。あぜは畔也。田と田との間の小みちを云○水口まつるとは。此水のなかれ入る所をみなくちと云。さてそこに神をまつる也。これは豊熟をいのる爲なるへし。万葉十五に湯種蒔忌忌伎美爾（ユダネマキユヽシキキミニ）。これも種まく時は。齋なとすることある故。ゆゝしきとはつゝけたり○しめはへて。みしめ繩引かけなと云は。この田のめくりに繩を引わたし。其繩に四手をつくるを云○もと水を引て田をひたすは。田の土をやはらけむとて也。其中に種をまくを。たねおろす共。又やかて。まく共いふ也○苗代垣とは。そのめくりにゆひまはすを云。これは。人の種あるをしらて。をりたゝむことをふせく也。しめはゆるも。又

人にしらしめ。鳥をさけ。山田にては。鹿なとのふせきともするなるへし○苗代水。苗代小田なとは。心明なれは訳せす。

苗代　なはしろの水をひく〳〵あらそひて心うくこそまかせさりけれ　俊　惠

苗代はおのかひく〳〵いそくとも秋のたのみのさためなき哉　堀　川

なはしろのたのもにはゆるしめのをのしつみはしつむひく人はなし　土御門院

山田――　きのふけふせきいるゝ水のうたかたもすむとはみえぬ春の小山田　称　名　院

なはしろのまたきになへの色なるはみねの梢のうつるなりけり　藤原顯廣

山かはのあたりのをたのなはしろは水をこゝろにまかせたるかな　藤原盛忠

○春田　あらをたのさまをも。田をうちかへすをも。なはしろをもよむへし。あらを田とは。こその秋いねかりて後あれたる田といふこと也。その田の土のいたくかたまりたるを。やはらけむとてすくを。すきかへすとも。打かへす共いふ〇一の下總に。あらをたをあらすきかへしとよめるは。粗の字にて。あら〳〵とすきかへしたるをいへり。

あら小田にほそたに河をまかすれはひくしめ繩にもりつゝそゆく　經　信

こほりたにまた打とけぬあらを田をあらすきかへす春は來にけり　慶　運

○躑躅　順か抄云。羊躑躅。羊あやまりてこれをくらへは。躑躅して死するゆゑに名つくとかや。たゝ躑躅とはかりも云。山躑躅。紅――。㗲山紅。劍南紅。杜鵑花なとみな同し類也。帖にも。つゝし。いはつゝしとわかたれたり。つゝしは。今俗にいふつゝしにてたけたかきをいひ。岩つゝしは。俗に云さつききりしまの類也。白つゝしと云は。俗に云もちつゝし也。哥にはおしなへて。つゝし。又いはつゝし。白つゝしなとよめり。躑躅の題にていつれをよみても難なし

躑躅　はなのちるなくさめにせむすかはらやふしみのさとのいはつゝしみて　經　信

くれなゐのやしほの岡のいはつゝしこや山ひめのまふりてのそて　長　方

巖――　いり日さすをちの岡へのいはつゝし夕くれたゐの色そまされる　　爲　昌

巖上――　いはつゝしこのもかのもにさく比は過そやられぬみねの細道　　有　房

深山――　松をこそたねしあらはとおもひしかつゝしもいはのうへにさきけり　　兵庫頭　源仲正

――映水　きひの山ほそたに川を帯にしてしたもといろにさくつゝしかな　　覺　性

いはつゝし枝のたはむとみえつるはうつれる水をくめはなりけり　　同

○杜若　かきつはた。漢名燕子花也順か抄に此花なし。由跋をかきつはなといへり。もし此燕子花にや。杜若は俗に云やぶめうがといふ物にて。燕子花にあらす。万に。かきつはたにほへる妹とも。又かきつはたきぬにすりつけますらをかとよめるより。衣にする共。又かきつはたの。かきもしを垣に取なして。へたつるなとおほくよめり。伊物に。在中將のきつゝなれにしとよませ給へるより。くもてに咲るなとやつはしによめり。

杜　若　ひまもなくうゐへたつれと杜若こえてや夏のきなんとすらん　　季　通

池――　やつはしのくもてになひくかきつはたむかしのはなのなこりとそみる　　土御門院

春のいけの底にもうつるかきつはたにほの下みちへたつとやみむ　　雅　親

○款冬　やまふき。漢名棣棠也順か抄に。やまふき。又山ふゝきとありて。款冬。一名虎鬚とす。今考るに。款冬は俗に云ふき也。同抄に。蕗をふゝきといひ。茨を水ふゝきといふをみれは食菜になるは皆ふゝきなれは。これに同しからす。今俗に山ふきとて食菜になる草あり。此花雌黄色なれは。山ふきの名未レ詳ゆゐ。しはらく款冬の字をかりて用られけるなるへきは。朗詠にも款冬と題して詩には。點-着ヌ二雌-黄ヲ一天有リレ意款冬誤テ綻ブ二暮春ノ風ニ一とあるをみれは。款冬は。もとより山吹にあらさるをしりなから。

假て用たりとみゆ。又万に山吹の花とかゝれたるをみれは。棣棠は。上つ世よりやまふきといひけんことあきらか也。哥には。ひとへをも八重をもよみ。やまふきの。やまを山ととりなし。口なしの色を。物いはぬなとかけておほくよめり。

欵冬　底清き井手の河瀬にかけみえて今さかりなる山ふきの花　長能

色もかもみきはにやとる山吹の俤たにもちりのこらなん　保憲女

あかすのみおもふ心のかさなれはいくへともなしやまふきのはな　俊頼

欵冬露　朝ほらけ花のひもとく春風に露もこほれてにほふ山吹　公明

月下欵冬　月かけに色はみゆれとおほつかないくへかさなる山ふきのはな　良暹法師

水邊欵冬　山ふきの下ゆく水ははやけれとうつれるかけはなかれさりけり　顯綱

瀧下欵冬　たきつせのおちくる水にあらはれてまたきやちらん山ふきの花　盛忠

○藤　藤ノ花　二題全同。漢名も又藤也。白紫ともによみ。又ふちなみのなみをまことの浪にとりなし或はうら紫をうらむろによせ。こ紫を來とよせ。ふちを淵にとりなしなとしてよむ事常也。但うら紫は色ふかきをいふ。○藤のうら葉とは。末の字古語うれなれは。れら通ひて。うれ葉の義也。これは万第十四に。藤のうら葉のうらとけてと云哥あるより。二にもよみ。源の藤のうら葉にも此哥をうたへることみゆ○源の同巻。藤のはな松より過てとよめるは。藤の松よりたるゝにて。人を待に程過たるをかけたり○北の藤浪は。八の神祇に閑院の冬嗣公。興福寺の南圓堂を建立の時。春日の明神の御哥といへり。此こと元亨釋書に詳也。藤原の北家をさして。北のふち浪と云。贈大政大臣房前公は。其祖にて。冬嗣公は其胤也。藤原の南家は。左大臣武智麿を祖とす　藤花尙盛　此題は。春過ても猶うつろはぬ心にて。初夏の題也。いにしへは夏にもおほくよめり。即。一夏の巻頭にもみゆ

藤　時わかぬ松のみとりは紫のふち咲をりや夏をしるらん　顯綱
ひたすらに今もむかしもわすられて心にかゝるふちの花哉　顯季

藤花　梢よりこえておちくる藤波の井せきは松の下枝也けり　俊惠

雨中――　雲かへすあらしはふかてはれわたれあまりしほれぬ田子の浦藤　親盛

朝見――　あさ日さす峯のこすゑのよこ雲のはれぬやふちのさかりなるらん　覺性

松―　音たてゝふくにもきえすむらさきの雲こそうつめみねのまつ風　称名院

岸―　にほとりものとかにみゆるいけ水におのれきしうつ春のふちなみ　雅親

旅宿――　ひとりぬるなこのしほひのいそ枕なみたかくみゆ田子のうら藤　覺性

○［暮春］三月はしめより晦日までの心は皆よむへし［春暮］［春深］二題全暮春に同し［春欲レ尽］［春殘］［殘ノ春］なとは三月末より盡日までの心をよむへし［惜レ春］［春不レ留］二題よみ方かはらねと。惜春はをしむ情ふかくよむへし［歳時春尚少］は一とせの内にて。春は興多き時なれは。夏秋冬なとよりは。日數もすくなくおもひなさるゝ心を詠へし

暮春　あなかちにけふをゝしまは又もこむ春をいとふになりぬへきかな　季通
大かたも春のくるゝはをしきかとはなきやとのひとにとはゝや　清輔
あはれ也春とてしたふわかれまてうき世にをしむ心ならひよ　俊成卿女

春暮　身ひとつのなけきならねはくれてゆく春のわかれはとふ人もなし　讃岐

暮春霞　くれかゝる日かすしられてやよひ山うすく成ゆく春かすみ哉　經季

江――　うめかゝにとはれしことや一時の夢にくれゆくなには江の春　重治

舟中――　いさけふはかすみのうらにふねよせてこゝそとまりとはるをしたはむ　慶運

春暮花少　さくら花あをはのなかにみゆる哉春のなこりもいくかならねは　爲仲

○三月盡（サンクハツシン）　盡の字すみてよむへし三月晦日をよむへき也。仁德紀に。月盡とかきて。つこもりと點したるにてもわきまへしるへし○花鳥のわかれとは。朗詠に。送レ春不レ用レ動二舟車一唯別二殘鶯與一レ落花上ともみえ。又。留レ春不レ用二關城固一花落隨レ風鳥入レ雲ニなとつくれるより出たり。又鳥の雲に入るとよめるも。猶此詩をもとゝしたる也。

三月盡　わかをしむ心もつきぬゆく春をこさてとゝめようくひすの關　康資王母

としをへてけふに心をつくすかなをしむにとまる春はなけれと　大貳

ふく風のさそふに花はちるとみきたかかたらふに春はとまるそ　國基

さきたてゝをしみし花をやりしよりかへらぬ物とかねて知にき　俊惠

三月尽夕　なくさむるかたこそなけれ暮はつるこよひ一夜の春のなこりは　爲氏

田家三月尽　をやま田のなはしろ水はひきたれと春はこゝろにまかせさりけり　基俊

旅宿三月尽　おくれしとみやこをいてしかひもなくこよひや春にゆきわかるらん　顯廣

○春有潤　春三月（ミツキ）ともによみてそむかす　潤三月　にはやよひかさなる。後のやよひなとよむへし

春有閏　つねならはけふまてみましはるかすみ今ひとへさへたちそへつらむ　爲仲

○

春天象　きさらきやかすめるそらの春かせにうちゝる花のしたものとけし　後伏見院

春風　あさひさす山のしらゆき消そめてかすみにゆるゝ春のかせ哉　長方
春山　よしの山さのみは花もなかりけり人たのめなるみねのしらくも　同
春野　あさな〳〵きゝすなくなりむさし野のかすみのうちにつまやこもれる　同
春野風　しろたへの玉ののかすみふきわけてさくらいさよふ春の夕かせ　光経
春池鳥　はなになくこゑもものうきいかるかのよるかのいけを人のとへかし　同
春川風　河かみやゆつはのむらの夕けふりかすみにませて春かせそふく　同
春海　ゆふなきの春の汐干はしつかにてかすみに遠きわかのまつはら　中務卿親王
春浦松　春の日のなかゐのうらをみわたせはのとかにかすむ松のむらたち　光経
春里　もしほやくけふりと人やなかむらんかすみたなひくあしのやのさと　長方
春山家　よの中をいとはぬよりもとはれけり花のたよりのみよしのゝ奥　隆祐
春田家　かせさむしまたはつ春の雪とみてかへすなうつむ花のあらをた　正徹
春寺　もるか猶かさきの山のはるのあめこけの衣のいとゝしほるゝ　光経
春庭　水無瀬山なかめ捨けん春の色の霞と消しみちそ悲しき　義尚
春曉　かねのおと鳥のはつねも春といへはわか心からのとかにそ聞　季種
春晝　春のそらなかはめくるも冬の日の時にもたらぬ花の陰かな　正徹
春夕　はれはてぬ雨のなこりの雲なれやうすくかすめる夕くれの山　後伏見院
春夜　花をおもふよはのしらつゆおきもせすねもせぬころの床の山かせ　雅経
春人事　さま〳〵のたれかねかひもさもあらはあれ此春かなへ敷しまのみち　正徹

# 宇た不九呂

四

# 哥袋巻之四

時節夏部

目録

# 哥袋巻之四

## 時節夏部

四季はしめてかはる時なれは。よつのときうつろひそむるなとよめり○夏引のいと。夏かりのあしなとは。其條ゝにくはしくいへれはこゝにいはす。

○[首夏] 四月朔日より四五日のほとをいふ [早夏] [初夏] は心得かはること。立春早春初春の定におなし。時鳥を待。花のなこりを思ふ心なとよむへし○左近大將公相の。たちかはるけふはう月のはしめとや神の御室に榊とるらん。行家朝臣の。榊葉にうつきのみしめ引かけて三室の山は神まつる也なとよみ給ふは。神まつるう月共。榊とるう月共。卯月のいみをさすともいひて。此月は。加茂。平野。松尾。梅宮。稻荷。山科大和の三室。廣瀬。龍田。當麻。河内の杜本。當宗(マサムネ)なと。祭ある月なれは也○爲廣卿首夏の哥に。君しけふたまふ扇の薄からぬめくみを臣(オミ)やわきてあふかむとあるは。孟夏旬とて。公事の部にくはしくいへり○更衣の心をよむ事常なり。又新樹余花なともよむ也。これらはその條ゝにくはし。

首　夏　春かすみいつくはかりにかへるらんたちとゝまれといひやゝらまし　安　法

首夏風　ちらすとてうらみしかせのけふよりは花のゆかりになつかしきかな　親　盛

首夏藤　わかれにし春のかたみに咲藤のかへる波にもまたやうらみむ　雅　親

首夏山　もろひとのかふる衣のひとへ山うすくはみえぬ夏こたちかな　正　徹

林首夏　しろたへもしける林にかくろひてかふるか夏のさきの毛ころも　同

山家首夏　山ちかく家ゐしせすは春過てまたちりやらぬ花をみましや　少納言 藤原忠成

○[竹亭夏來] [樹陰夏來] [羇中夏來] いつれも。夏來は。首夏の心に同し

竹亭夏來　夏のくろ床に葉かせの聲すゝし竹のいほりのすとの明ほの　正　徹

樹陰夏來　春くれしこのしたやみそうの花のひかりも露もはらふ夏かな　同

霽中夏來　春くれて雲にいりにしとりの子のひなのなかちに夏も來にけり　同

○更衣　卯月朔日。春の服をぬきて。ひとへの衣にかふる也○櫻色の衣。さくら色にそめし袂なとよめるは。櫻かさねもさならぬもあるへし。哥にはたゝ櫻になれしみたる衣と心えよむへし。櫻の衣にも様ゝありて。中にも薄花櫻は。關白大臣なとの春の服なり。（面白裏紅）紅櫻。かはさくら。まつ櫻。みな庶人の服ならねは。人からによりてよみかたし。委しくは衣の条にてみるへし。又花の衣。はな衣。花そめの袖なと又。梅。櫻。山吹藤菫。躑躅。桃。なとさまさまの色あれと。おしなへてこれも庶人の服ならねは。今はたゝ春の衣と心えよむへし○白かさね。これ更衣のさたまれる服にて。面裏共に白也○蟬の羽衣蟬の衣手は。面檜皮色。裏青とも。又裏なきすゝし共いへり。哥には只すゝしと心うへし○かとりの衣は。裏あるすゝしの衣共。又すゝしのかさね着ともいへり。式に絁をかとりとよみたれは。うす物の名なるへしとおほゆれは。これも只うすものと心うへし○新式に云。なへての題は。月にむかへは花をわすれ。花にむかへは月を忘るゝよしよめと更衣は單の衣を賞せすして。ひたすら春の衣のぬきかへまうき心をよむ也とあり。

更衣

いつしかと夏のたちぬるしるしにはころもかへせぬ人のなき哉　爲仲

みな人もけふやころもはかへつらむひとへに夏のきぬと思へは　頼実

をしみかね暮ぬる春を夏衣ひとへにけふそたちへたてつる　俊恵

ひとかすに衣はかりはかふれともあらたまらぬは我身也けり　行宗

何とかはいそきもたゝむ夏衣うき身をかふるけふにしあらねは　堀川

をしみこし花の袂はそれなからうき身をかふるけふとなさはや　小侍従

墨染のころもはけふもぬきかへしうき世にかへる名をもこそたて　慶運

色みえて心は花にそめしかとかたみともなきころもかへかな　同

○遅櫻　夏に入てさくを云。但殘花余花の題にも遅さくらとよむ事つね也。古今集夏。あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとり咲らむ。なと本とすへし

くものゐる遠山鳥のをそ櫻こゝろなかくものころ春哉　宗　牧

○殘花　此題。春の末にも。夏のはしめにもいづ。組題の並。春の末ならは。春の殘花の心によむへし。夏の初ならは。夏の心あるへし。凡花には遅速あり。されは春の末に至りて咲をも殘花といひ。又外の花に散おくれたるも殘花なれは。春にも殘花はよむへき也。しかれとも。大かたは春におくれたるをいふ。又殘の字の心をえては。うつろひなから殘れる花をもよむへし

殘花少シ　花纔ニ殘ル　同題也あまたの木の中にて。一木二木のこれるをも。又一木の。かた枝ちりはてぬをもよむへし。

殘　花　夏山にひとえた春のみえつるはのこれる花のにほひなりけり　基　俊

尋殘花　たつぬれとみえすもある哉さくら花春のとまれる所なけれは　道　済

思殘花　かをたにも衣にいかにうつしてむのこれる花はけふもこそちれ　同

○餘花　夏にいりて咲をも春よりさきて夏まてちりのこれるをもよむへし全殘花に同し

余　花　くれにけり春の外にもちらすてふなをさへ花ののこしける哉　俊　頼

尋餘花　ちるさくらありてうかりし春過て又もやさくととふ山路哉　雅　親

余花何在　さくらかりゆけとも花はなつ山のしけみか上に雪そちりくる　正　徹

○新樹（シンジュ）　夏のはしめ。木ゝのわか葉しけり行を云。若葉さす。（さすは萌なり）若葉そひゆく。みとりそふ。深みとり。しけみ木陰。夏あをき木かけ。しけみ。しけりあふ。青葉の山。花のあとゝふ。みとりす[illegible]

たつ。葉ひろになるよしよみいるゝ事常也。若かへては。葉さき色つくところあり。楢。玉柏は雑木の部にくはし。櫨は。秋の部紅葉の条にくはし　[庭木結二金葉一]　金葉とは。いたくわか葉なるはこかねの色にたる物なれは也　[庭樹傾日]　これは葉のしけりて。あつき日かけもゝらぬさまなとよむへし　[庭樹結レ葉]　これは。う月にかきりたる題にて。木ゝのしけりゆくさまをよむへし

[庭樹緑葉]　[庭樹緑滋(シケシ)]　[庭樹陰葉]　此三題は新樹にかきらすよめる例あり。卯月初旬の題ならは。新樹の緑そひゆくさまをよむへし。五月六月ならは新樹のことわりなくて。たゝ緑のふかきさまをよむへし　[雨中木滋(シ)]　これもよみかた。同上にて。たゝ雨によりて木のしけるよしよむへし

新　樹　春はみし霞のひまの色たえてわか葉櫻にふく風もうし　雅　親

夏ころも袖かけてふくあさ風にみとりすゝしき若楓かな　同

雨中新樹　しけりあふわかはかたふきふる雨に木のまの山そしはしみえゆく　正　徹

林新樹　えそみえぬねにこしからすいくつれかとまる林はこの葉のみして　同

○[新竹]　あらたに生出たる竹をいふ。ことし生の竹共。若竹共よめり。筍(タカウナ)をもよむ也。よせ詞は。大かた新樹におなし。猶雑。草木の部をあはせて考へし

ことしおひのまかきのうちのくれ竹も秋はよなかくなりやしぬらむ　基　俊

○[卯花]　うつきとも。うの花ともいふ。漢名溲疏(ソウソ)といふ。今俗に云。うつきは。色薄紅を帯たるをいへと。これは箱根うつきとて。漢名錦帯(キンタイ)也。枕草紙にいふ。うの花しなをとりて何となけれと。咲ころのおかしう。時鳥の陰にかくるらんとおもふにいとおかし。祭のかへさに。紫野のあたりちかきあやしの家とも。おとろなる垣ねなとにいとしろう咲たるこそおかしけれとあり○あなうの花。身をうの花。世をうの花なとは。憂(ウ)とかけたる也○うの花くたしは。四月の雨の名也といへと。万の第十に。春されはうの花くたし我こえし妹かかきまはあれにけるかもと云哥をみれは。たゝ腐るを云へし。又同十九に。うの花をくたすなか

雨の水はなにともあれは。雨によりて腐るはいふに及はねと打まかせて雨の名とはすへからす。近昔以後は。雨の名にしてよめる哥多けれと。心してよむへし○八重のうの花は。京極黄門。あたらしや賤かかきねを假そめにへたつ斗の八重のうの花とよみ給へり○九のこれる雪。音なき波とみ。又月にたとへては。夕やみの垣ねの月。木のした月夜。うの花月夜なとよめり。又神かきに白ゆふかくるなともよめり。いつれもしろき物にたとへてよめり

卯花

うのはなのさくにつけてや山さとはなつのころもをおもひたつらん　顕季

卯花のさかりすきなむやま里はすむ人やみのこゝちこそせめ　頼実

うのはなのにほふあたりはしら波のたつたの川のゐせきとそみる　伊勢大輔

うの花のさけるかきねは布さらすさかみの市の心地こそすれ　基俊

卯花はかきねわたりの月なれやさけるさかりはやみなかりけり　大弐

うの花の比にしなれは山さとのかきねそ月のすみか也ける　俊恵

いたつらにさきてやちらむ山かつの身のうのはなはをりもしらねは　小侍従

あかさりし春のへたてはみるからにかきねもつらきやとのうの花　宗尊親王

思卯花

うのはなのちりかふみれは玉川のみつのみなわそ消かてにする　慶運

山さとにたつねにゆかむうの花はこそみしやとも今はまつらん　道済

月前卯花

月淸みをのゝ細みち分ゆけはみなうの花のかきねなりけり　後德大寺左大臣

朝見卯花

いまそみるうのはな山の花さかりあけても月のかけのこりけり　守覚

晩頭卯花

うのはなのかきねを過る夕くれはくもらはくもれ夏のよのつき　俊恵

夕見卯花

ゆふつくよいりぬとおもへはうの花のさけるかきねはかけそのこれる　同

卯花隠路　うのはなの色にも猶やたどるらん雪にまよひしをのゝ細道　後伏見院

河卯花　玉川のゐせきの水にかけみれは波にみたれてさけるうのはな　顕仲

海邊卯花　うらちかきしつのかきねのうの花はつゝきてよする波かとそみる　親盛

山里卯花　としをへてかよひなれにし山さとの門とつはかりさけるうの花　源相方

遠村卯花　みわたせはとをちの里のうつきはらうつきになれや花しろくみゆ　三位源頼政

卯花誰家　よそにみて過こしやともうの花のさけるさかりそぬしいとはるゝ　俊恵

卯花垣　いまはよにふるさと人もたつねこし身のうの花を垣にしたれは　基俊

籬卯花　春すきしまかきの外になつ秋をへたてゝゆきとさける卯花　称名院

○［葵］漢名未詳。これ細辛の類にて。双葉細辛といふへからむ物也。すへて加茂の祭にあつかる事にて。これをかさしにもさし。簾にもかけ。又はあふひを逢日によせ。髪又簾なとにかくるを。神に願をかくるによせてよむことつね也○あふひのふたは草とも。もろは艸共おほくよめり○もろかつらとは。かつらの枝のちいさきに葵をかけてそれをかさすを云。かつらは杜木也○ひかけにむかふとよめるは。左傳仲尼曰。鮑荘子之智不ㇾ如ㇾ葵。葵猶能衛二其足一葵藿之傾二葉太陽一。雖ㇾ不ㇾ回ㇾ光。然向ㇾ之者誠也。これらはみな。蜀葵の花のめくるを云にて。双葉細辛にあらす。蜀葵も。双葉細辛も。共にあふひといへは。かりてよむ也○雅親卿の。葵草手にとりもちて諸人のみあれをちかみ行ちかふみゆとは。加茂。松尾の社司。祭のまへの日より。しかるへき所ゝへ。葵をたてまつるよし。公源にみえたり。又。人ゝのかさゝむれうに。人にをらせなとするか行かふにてもあるへし。

葵　けふみれはかけてかへらぬ人そなきあふひそかみのしるしなりける　頼実

年をへてまつのを山のあふひこそ色もかはらぬかさしなりけれ　紀伊

なゝそちのおいのいのちのもろはくさかけしや今は末のたのみも　慶運

毎家鏡葵　けふといへは賤のあしすもをとらしと思ひかけゝるあふひくさかな　　俊惠

○郭公　源順か抄曰鷗鵜鳥唐韻云。鷗鵜和名保度ゝ木須。今之郭公也とあり猶漢土にて杜宇。杜鵑。子規。蜀魂。なとさま〳〵にかけるを。こゝにもかり用てかく也。時鳥とかけるは。夏の來るをしりてなく鳥なれは。時を知る鳥と云心にて。我國にてかきはしめたるもし也○山ほとゝきすは。只ほとゝきすとのみよむに。ことなる事なし。山に住鳥なれは。かくつゝくるまて也○してのの田をさは。一の下。俳諧哥に。いくはくの田をつくれはか時鳥してのたをさを朝な〳〵よふとあるより。郭公の一名とすれと。おのか名をよはむ事いとことわりなし。哥の心は。田を植るころ頻になく鳥なれは。田をさをよひて。田をうゑよと催す心によめる也。しては四手にて。田のめくりにしめをひきてそれにつくる也。されはしての田をさとはつゝけたり。田長とは田の主長を云○万の第九霍公の哥に。うくひすのかひこのなかにほとゝきすひとりうまれて己か父に似てしもなかすさか母に似てしもなかす云〻とよめるは。鶯の巣の中へ。霍公のわか卵を入れ置に。それを鶯のえさとらすして。我まことの子とおもひて。養ひたつる故に。おのか父母に似てもなかすとよめる也。此こと。古も猶ふるくいひつたへたる事にや。同集第十九に。う月したてはよこもりに鳴ほとゝきすむかしよりかたりつきつる鶯のうつしまこかもとよめり。今も。郭公の雛を将たる鶯をみる事折〻ありと。常に山へいる者の申侍き。又。山にてえたる鶯の中には。たま〳〵頭の毛の薄く成たるかあるは。必かの郭公の子を養ひて。餌をふくむることに。かの雛の觜大きなれは。その觜の頭にふれける跡也といへり。つねに好み〻鶯をかふ人のかたり侍つれは。今もさる事あるに疑なし○初聲。はつね。全同し○しのひねは。う月に鳴こゑ也○なかなくとは。汝か鳴と云也○名のるは。唯なく也○かたらふは。人に物かたらふことくに鳴を云○五月頻になく故に。おのかさ月共。さ月を時と共。又。さ月待山ほとゝきすとも。一夏にはよめり○紅にふり出てなくとは。漢土にても啼血と云これ也。觜の中赤き鳥なれはかく云也○をちかへりなくは。万に。百千遍鳴とかける心也○聲ふりたてゝは。いとこと〳〵しく。聲高く鳴也○なきすつる。かたらひすつるは。鳴すてゝ外へ過ゆく也○里なるゝとは。五月に鳴を云へし。四月まては。多くは山になきて。里に來ることはたま〳〵なれはなり○さ

とわかす鳴も。さ月によむへし。聲せぬ里もなきを云。聲をさ月の玉にぬくとは。万の第十に。ほとゝきすなかはつこゑは我にかもさ月の玉にましへてぬかむとよめり。聲をとゝめおかむとて云也。鳴とよむは。聲のひゝく也。響動なとかけり。一の物名。時鳥をかくして。くへきほと時過ぬれやとあり

漸待時鳥

う月になれは。時鳥をまつ心の。次第にそひゆく心をよむへし。すへて待の字あるは。四月と心うへし

時鳥數多 時鳥頻 時鳥不乏 時鳥遍

四題皆同し。數聲なくをも。又は聞かぬ人もなきをもよむへし

時鳥稀 時鳥声稀 時鳥漸稀 時鳥徐稀

こまかにいはゝ。時鳥稀と。時鳥聲稀とは。声の乏しく成たるにて。漸稀。徐稀は。次第にともしくなり行心なるへけれと。四題。たゝ同し心にかよはしてよめり。五月の末。六月にもなりて。聲の稀なるをよむへし。又只大かたのよかれをもよめる例あり。

郭公

たか里にまつ聞つらん時鳥夏はところもわかすきぬると　和泉式部

けふもまたこそのね山にほとゝきすはつねきくとやたつね入ぬる　經信

ほとゝきす夏のよさへそうらめしきたゝひとこゑに明ぬと思へは　顯季

としことにきくはかりにてほとゝきすあかて我世は過ぬへきかな　爲仲

ほとゝきすこゑなをしみそあやめくさ玉にぬく日をけふとしらすや　師光

ゆふやみになきてすく也時鳥かへらむときもみちなたかへそ　頼実

きゝつともきかすともなく時鳥こゝろまとはすさよのひとこゑ　伊勢大輔

きかてたゝあらまし物をほとゝきすみやまへかへるけさの一聲　弁乳母

ほとゝきすゆくへもしらぬ一こゑにこゝろまとはすさ月やみかな　紀伊

たかさとのかきねしのふと時鳥けさわかやとを過かてに鳴　基俊

をしめともとまらてすきぬ時鳥こゝろの關はかひなかりけり　頼輔

ほとゝきすなきつるそらのさみたれにぬれぬる袖もなつかしき哉　讃岐

きく人の袖しのもりのほとゝきすなれゆゑしけき露としらすや　土御門院

めつらしきはつねなれともとし毎にきけはふりぬるほとゝきす哉　雅有

なれをしそあはれとはきく時鳥さすか待えぬとしのなけれは　慶運

尋郭公

たれもさはまたきかぬかとほとゝきす人つてをさへたつねつるかな　俊恵

待郭公

むかしにもあらぬわか身にほとゝきすまつ心こそかはらさりけれ　周防内侍

毎人待郭公

さそひつゝ花をゝしみしもろひとは山時鳥まつもかはらす　覚性

待月与郭公

月は猶山のはもありほとゝきすいつれのかたのそらをまたまし　同

未聞郭公

さみたれのそらのなたてにほとゝきすきゝつとかたる人たにもなき　雅兼

人傳郭公

いかさまにまてはなくらむほとゝきす聞つとかたるひとにとはゝや　慶運

人傳聞郭公

ほとゝきすきゝつとかたる人ことにいくたひとひつあかぬあまりに　法成寺入道

人聞郭公

待わふるわれよりさきに時鳥ねたくも人にきかれぬるかな　雅有

初郭公

人つてもまたしきほとのほとゝきす此さとよりやはつね鳴らむ　慶運

聞郭公

まつよへしつらきところもほとゝきすなかなく里となりにけるかな　同

初聞郭公

かねてよりまたすはいかにほとゝきすおもひもあへぬはつねならまし　宗良

待聞郭公

うきくもにさわらぬこゑや月よりもまつにかひある山ほとゝきす　称名院

聞郭公遥声

ひとこゑもおほつかなきに時鳥くも井にさへも鳴わたるかな　兼澄

暁聞郭公

あさくらやこのまろとのの明かたに山ほとゝきすなのりてそ行　基俊

曉月聞郭公　ほとゝきすまたそらたかく有明の月をのこして山ふかき聲　称名院

待客聞郭公　時鳥なくさめけりな今こむといひしはかりのひとは音せて　同

隔山聞郭公　ほとゝきすふもとのさとに今そ聞きひの中山みねになくねを　俊惠

月前郭公　さやかなるこゑをきけとや時鳥山より月のいてゝなくらむ　宗尊

雨中郭公　さしてゆくかさとり山のほとゝきすこよひはこゝに雨やとりせよ　基俊

ほとゝきすたゝ一こゑのなみたにて雲ものこらぬよひの村雨　宗尊

夘月郭公　神まつるう月のしめのうちにたにこといみしけり山ほとゝきす　正徹

五月郭公　ほとゝきす里に出たるこゑすなりさ月は山やすみうかるらむ　宗尊

曉郭公　あかつきのしるしと思はむほとゝきすなれもやこゑになきわたらなむ　登蓮

暮天郭公　ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山夕ゐる雲のそこになく也　守覺

夜郭公　時鳥こゝろのやみもはれよとや山のはいつる月になくらむ　正徹

郭公何方　さたかなるみちしるへせよかへらむもそことさためぬ山ほとゝきす　称名院

郭公未遍　一こゑはなかぬになしてほとゝきすつれなき空を猶かこつかな　宗良

郭公遍　いまも猶ひとこゑなから時鳥またよひのまはたれもこそきけ　称名院

山路郭公　ほとゝきすかたらふこゑにかゝらすはのほる山ちやくるしからまし　親盛

岡郭公　とゝめはや岡の椎柴しはしたにやすらはてゆくほとゝきす哉　顯朝

杜郭公　きく人の袖しのもりの時鳥なれゆゑしけき露としらすや　土御門院

野郭公　まつことはあさからねとも時鳥野なかのしみつたえ〳〵そなく　堀川

宇た不九呂四

闕路郭公　あつまちにことつてやせしほとゝきす闕のいはかと今そすくなる　為仲

海邊郭公　時鳥なみたそへてやすきつらむさらてもほさぬあまの衣に　称名院

郭公山寺友　ほとゝきすよかれするよははつせ山ひとりこそすめさゝのかりいほ　覺性

故郷郭公　とふひともなきふるさとのたそかれにわれのみなのる時鳥かな　堀川

山家郭公　ほとゝきすきかすといはゝ山ふかみすむかひなしとひとやおもはむ　後伏見院

寢覺郭公　子規ゆめにきくやとまとろめはなれはねさめをまちけるものを　俊惠

羇旅郭公　とまりするかたみのうらのほとゝきすおもひいつへきよはのこゑ哉　親盛

名所郭公　まちえては人にかたらんほとゝきすいはてのもりの名にはかはると　同

郭公稀　しるやいかに山ほとゝきす時すきてかれゆくころのあかぬなこりは　慶運

郭公邑稀　たつねみてうらみははてむほとゝきすいつくゝかくやよかれしつらむ　守覺

○早苗（サナヘ）　漢名秩にて。早苗とるを挿（サシハサムヲ）レ秩なといへり。蒔たる種のめさして三四寸はかりのひ出るをとりて。田にうゝる也（植はうへうゝると）むろのはやわせは。早稲とてはや（はかくへからすうゑうゝるとかくへし）○さなへ。わかなへ。はつ苗。綠の苗なといへり。玉苗はほめて云也。わさなへ。くみのる稲の苗也○早苗をとり（とるとは苗代よりとるなり）又うゝる人を田子さをとめ。しつのめ。しつのをなといへり○うゑむと一田に入るを。おりたつとも。もすそぬらすなと云○早苗をいそきとるを。もろ手にいそく。雨のはれまもまたぬなといへり○なか雨ふりつゝきて。うゝる時過て。早苗ののひすくるを。ふしたつとも。おいゆく共いへり○うゑはつるとは。植終る也○うゑわたすとは。ひろき田に植るを云○小山田をのへ田。共。又山田門田（門前にある田なり）そしろ田（十代田なり）いほしろの田（五百代也）沢田（沢にある田也年にかりてとる共かつきの沢わさな）（へとるなといへり）みとしろ小田（神領の田十代あるを云）庭田（十代にもたらぬ──とよめり）わさ田（早稲をうゝる田をいふ）なとよめり○早苗をとるにつけても。水口に神をまつりて。秋の豊熟をいのる也初度百首に。俊頼朝臣。はつ苗にうすのたまえをとりそへていくしまつらむとしつくり江に。又同し口傳に。

うすの玉かけとは。田をつくる時。田の神をまつるとて。五十串(イクシ)たて。三輪酒をいふするなとするに。大豆をつらぬきて。うすのやうにする也とあり。此説何より出たるにや。今おもふに。古事記に。くまかしか葉をうずにさせとよみたるは順か抄に髻華をうずとよめれは。玉の枝を髻華にさせるに□とみえたりそれをはうすの玉えとはいひけるにこそ。古事記にすもしは受の字を用たり

早　苗　　いろふかくかと田のさなへなりにけりいそけしつのをふしたゝぬまに　　顯　季

たねまきしわさたのいねやおいぬらむしつこゝろなくみゆるさをとめ　　同

小山田にとるやさなへのけふりよりいなはの雲の秋そまたるゝ　　同

雨後早苗　　なこりなくはれぬめれともさなへとる田子のを笠はぬくよしもなし　　讃　岐

門田早苗　　かりにたにくるひともなき柴のかとたゝうゑこめよむろの早わせ　　顯　廣

○ 牡丹(フカミクサ)　ふかみくさ。漢名牡丹。又はつか草といふは。唐白居易か牡丹の詩に。花開花落(キツ)二十日満城之人如レ織(シルカ)とあるを。六の上春。法性寺關白前太政大臣。さきしよりちりはつるまてみしほとに花のもとにてはつかへにけりとよみ給へり。これらより。つひに廿日艸となつけゝれと。哥には廿日草とはこのみよむへからす。漢土にては。我國の櫻のことく。牡丹を。たゝ。花とのみもいふとかや。又。花王なりとも云。巾にも。姚黄は王なり。魏紫は后なりといへり。又。富貴なる花ともいへり

牡　丹　　さくはなの露もこゝろもふかみ草たゝなほさりの色とやはみる　　正　徹

○ 五月五日(サツキイツカ)　端午といふは。端ははしめ也。はしめの午と云義也。五月午にあたりたるを必竟のことゝすとも云。又端五とも云。歳時記に云。京師の人。五月一日を。端一とす二日を端二。三日を端三　四日を端四。五日を端五とすとあり。午。五。音同しき故に。かよはして端午と云にや。端陽。五ゝ節。丹午。重五。重午艾節。菖朝。懸艾(ケンカイノ)令辰。浴(ヨク)蘭令節。また。綵縷(サイロウノ)節なともいへり。此日菖蒲を詮とよめり。猶菖蒲の条下をみるへし。漢土にても此日を蒲節なといひて。蒲を水にうかめ。あるは蒲。又。

菖艾にて。人またはᶌなとをつくりて。門にもかけ。かしらにもつけて。群邪を避ることあり。我邦にても。これらの故事を用るなるへし○くす玉。又。さ月の玉ともいひて。藥にて玉をつくり。五色の糸にてあみ。すたれ。又は袖にもかくる也。これも漢土にて。續命縷とて。此日にもてあそふことあるに似たり。これは。むかし楚の國に屈原といひし人。此日。汨羅といふ水に身をなけけるを。楚人これをあはれみて。竹の筒に米をもりてまつりける。その後。漢の建武年中に。長沙の歐回といふ人。或時一人をみる。みつから三閭大夫（屈原の官なり）なりとて回にかたりていはく。君つねに我をまつり給ふことといとあつし。されとも。おくり給ふ所の物。蛟龍の爲にぬすまる。ねかはくは楝の葉にてその上をつゝみ。五色の糸にてあみて給はゝ。そのおそれなからむといひける事。續齊諧記にみゆ。これより漢土にては。今に角黍と云糕を。此をしへのことくにつくりて。水にうかふとかや。されは此くす玉なとも。これらよりおこれるなるへし。禁中にて。此日此藥玉をつくりて。糸所より奉るなり○爲家卿。みかきなす玉江の波のます鏡けふより影やうつしそめけむと。五日をよませ給ひけるは。五月五日。百練鏡とて。舟にのりて鏡を鑄る事也

五月五日　あしの屋のあしのやへふきふきそへて軒端ひまなきあやめ草かな　雅有

あやめひくみぬまをみれはから國にけふやかゝみの影をますらむ　俊頼

○菖蒲　漢名白菖なり。順か抄に。養性要集云。昌蒲一名臯蒲。和名阿夜女久佐なりと。但。菖蒲は今の石菖也。又。花あやめとて庭に植て花をめつるは。漢名蘭蓀なり。梁書に。太祖の后張氏。ある時庭の菖蒲の花をみて。侍臣にみたるやと問給ふに。みすと申す。后の曰。此花をみる時は富貴なるへしとて。とりてこれをのみ給ふ。此月。梁の武帝をうみ給ふとそ。又。後魏典畧曰。孝文帝南巡して。新野にいたり。潭水にのそみ。両菖蒲の花をみる。後つひに両菖蒲寺を建たり。又云。嘗ニ菖蒲ヲ石上にて九寸の節を生すれは。紫花尤善なとあり。これ皆蘭蓀に似たれと。猶石菖の花を云也。風俗通には。菖蒲の花を食へは命なかしといへり。又本艸に。韓衆と云人。菖蒲をくらふ事十三年。文。萬言を見。冬、衣を着ねと寒からすと云。又大中記曰、

呉興に沈姓たるものゝ家。潭水のほとりにありしに。水ぎはに菖蒲生けるか。葉のひろさ幾ばくといふになりけり。俗これをあやしみ。五月五日にあふことに。あらそひて此葉をきりて。邪をさけ。其根を醋とし。薬に入しより。つひに蒲を端午の物とはしけるよしみゆ。我國にもこれをつたへて。端午ことにこれを軒にふき。簾にかけ。かつらにゆひ。まくらにむすひなとするなるへし○神仙傳に。漢武帝。嵩山にのほりて。仙人にあふ。身のたけ二丈。耳たれて肩にひとし。帝これを誰と問給ふに。答て曰。我は九疑の人なり。中岳の石上。菖蒲の長さ一寸にして九節あるあり。これをくらへは長生すと来りとる也と云々。また草木狀に。番禺の東澗の中に。菖蒲あり。皆一寸にして九節あり。安期生これを服して仙となるといへり。これは九節とて根にふし九ある也。哥にもよめり。これらをおもひてや。なかきねを千代のためしに引なとよめり。○ひくとは。沼。沢。池なとにおりたちてとる也

菖蒲　万代をふへきよとのゝあやめ草なかきつまとや君もみるらん　顕輔

こやの池におふるあやめのなかきねはひくしらいとの心ちこそすれ　堀川

かすならぬわか身うきぬのあやめ草ひく人まつや袖ぬらすらん　慶運

江中菖蒲　なには江のあやめもいまはあらしかしひかてかへらぬ人しなけれは　頼政

池朝菖蒲　いけ水のなみよせかけてあやめ草けさひく袖はつゆそこほるゝ　後伏見院

○橘（タチハナ）　盧橘（同上）　花橘（ハナタチハナ）　三題全おなし心えにてそむくことなし。花をも。実をもめつるうちに。おほくは花さくころを詮とよめり○万の巻第十八。大伴家持卿長哥に（上下略）神のみよゝりよろしなへ。この橘を。ときしくの。かくのこのみとなつけけらしもとあるは。垂仁天皇紀に。九十年春二月庚子朔。天皇田道間守を常世の國にやりて。非時香菓をもとめしむ。九十九年秋七月戊午朔に。天皇崩し給ふ。その明年春三月辛未朔壬午に。田道間守非時香菓八竿八縵を賚て。常世よりかへり。なきかなしみていへらく。常世は神仙の秘區にて。俗のいたるへき所にあらす。あらき海をわたり。十年をへて歸り來る事。聖帝の神靈によりて也。しかるに。天皇崩したまひぬ。かへりこと申あくへきやうなし。臣いけるも益なしとて。天皇の陵に行て。叫哭して

死ぬとあり此香菓はすなはち橘也。これ此國におひひろこれるはしめなり〇天平八年。左大弁葛城王。賜橘姓時御製。たちはなは花さへみさへその葉さへ枝に霜ふれましてときはの木と万にみゆるを。多く本歌にとれり〇袖の香といふは。伊物に。むかし男宇佐の使にていきけるにしれる女のある國の祇承(キシヤウ)の官人のめになりて。かはらけとりて出たりけるに。さかななりける橘をとりて。さつきまつ花たちはなのかをかけは。むかしの人の袖のかそするといひけるにそ。思ひいてゝあまに成て山にいりけるとある故なり。また袖ふれしとも。むかしの人ともよむは皆これによれる也〇玉にぬくといふは花にあらす。万の第八。家持卿。我やことの花たちはなのいつしかも玉にぬくへくそのみなりなむ〇ほとゝきすの友とは。同巻に。同卿。わかやとの花橘に時鳥いまこそなかめ友にあへる時とあり。ほとゝきすのやとゝもよめり〇花ちる里とは。万の第八同卿。橘の花ちる里のほとゝきすとよめるより。後世花とのみいへは櫻又百花をもいへと。花ちる里といふは橘にかきれるやう也。それも櫻の花ちる里とよめるも。古今例多けれは。憚へきにはあらす〇ちかきまもりの橘。みはしのもとの橘は。紫宸階下の橘也〇十四夏。亀山院御製。わすれすよ右のつかさの袖ふれし花たちはなや今かほるらん。これも猶かの階下の橘也。右の衛府の陣にあたれは。袖ふれしとは給へり〇山橘は。万叉撰集にもおほくよめり。藪柑子也〇花橘は。別種にあらす。たゝ橘とよむに同し

橘　かほれともひとかたならぬ風なれははなたちはなをいかゝたつねむ　顕輔

盧橘　閑ちかきはなたちはなのにほひきてわか袖のかの名をそたてぬる　雅有

花橘　のきちかき花たちはなはいにしへをしのふの草のつまとこそみれ　小侍従

曙盧橘　さくら咲曙ふかくなかめこしおなし軒はにゝほふたちはな　後土御門院

故郷橘　すみすつるわかふるさとのたちはなやみしこともあらぬ老木なるらん　慶運

軒盧橘　たか袖のにほひなりけむふるさとにむかしをのこすのきのたちはな　頼仲

〇

楝(アフチ)　順か抄曰。玉篇云楝。和名阿布智。其子如檑鈴。白而黏。可以浣衣者也。これ俗に云せんたん也。今按するに。枕に同抄

に和名沼天とあれは。せんたんにあらす。されと。哥にはたゝ。せんたんをよめり。題には此字を用ひつけたれは。猶これに随て。今も此字を用へし○あふちを逢によせて。雨にあふち。人にあふち。折にあふち。のりにあふちなとよめり○古木(フルキ)の楝。一もと楝。楝はらなとゝよめり○花は紫にさけは。むらさきの雲にもたとへてよめり

楝

あふちさくこすゑにうつる入日かけ心にかゝるくものいろかな　雅親

わきてみゆひともとあふちむらさきの色こき時の野なる草木は　正徹

○**五月雨**　五月のなか雨のさまをよむへし。漢土にては。四月の雨を入梅(ニウハイノ)雨といひ。五月には黄梅雨と云。又黴(ハイ)雨とも云。黄梅雨とは。梅子の黄ばみ熟する時にふる故也。黴雨とは絹布のしめりて。かび生する故なるへし。哥にはすへて霖雨。淫雨。苦雨。久雨のさまをよむへし。さみたれ共。さみたるゝとも。さつきの雨とも云。梅の雨なともよめと。梅の緣なくしてはよむへからす○さみたれに。さみたれはのふたつのけちめは。にといへは。そのことわりにかゝりて物を正面にみすはといへは。古今のもみち葉は袖にこきいれて。又吹風をなきてうらみよ鶯はなとに同しく。眼の前に其物をあらせて云詞也委くはあゆひ抄をみるへし○さみたれを乱にもかけたり

五月雨

なかめには袖さへぬれぬさみたれにおりたつ田子のもすそならねと　和泉式部

かきくらしはるゝまのなき五月雨にふしのけふりは猶やたつらむ　爲仲

いか斗田子のもすそのそほつらん雲まもみえぬさみたれの空　伊勢大輔

さみたれにあさかの沼の花かつみそこのたまもとなりやしぬらん　顯季

さみたれの日をふるさとの庭の面はみくさもとらぬ池かとそみる　堀川

水まさる宇治の河をさたかせさす身をうき舟のさみたれの比　俊成卿女

いり江なるあまのすてふねうきはてゝうらになかるゝさみたれの比　隆祐

おとは河にこりておつるさみたれに水のこゝろのみえすもあるかな　慶運

山五月雨　夏ころもほさてやくちんさみたれのはれぬ雲井の天のかくやま　雅有

羇中五月雨　さみたれのはれせぬほとはなにはかたたみのゝ嶋そとまる也ける　覺性

閑中五月雨　さらてたに人やはみえし夏くさのしけれるやとのさみたれのころ　宗尊

○水鶏(クヒナ)　順か抄曰。崔禹錫食經云。䴇鳥。和名久比奈。漢語抄云。水鶏貌似水鶏。能食䴇。故以名之とみゆ。漢土にて。水鶏とは。かはつをいへとかたちの似たるより。こゝには水鶏の二字を假て用うとみえたり。○たゝくくひなとよむは。なく聲戸なとをたゝく音に似たれは也。まれにはなくともよめり○徹書記の哥に。水のにはとりとよめれとよからぬことは。詠格の中にのせたり

水鶏　たゝくともしはしとちなむ天の戸はあくれはかへるくひなりけり　頼実

里ことにたゝくくひなそきこゆなる心のとまるやとやなからん　顕綱

○夏月　よみかたふたつあり。一は月の明らかなる夜のすゝしさに夏をわすれ。霜雪とまかふなとよむなり朗詠にも。月照平沙夏夜霜とつくれり。一は月のおもしろきにつけてみしかよをいとふなとよむ也

夏月　ねさめする秋もこそあれ天のはらのとけくてらせなつのよの月　長能

なつひきのいとのみたれもかくれなくこやのしのやをてらす月影　顕輔

何ことにすゝしく物をおもはましいはまにやとる月みさりせは　清輔

あまの原くまなくすめる夏のよの月のかつらはをりやたかへる　俊恵

月かけのけしきは秋にかはらねと明ゆく空そほとなかりける　行宗

見夏月　そともなる菊のわか葉もしけりあひてさもなつかしき月の影かな　道済

夏月似秋　月きよみ荻のはそよく夏のよはをのへの鹿のなかぬはかりそ　俊恵

水上夏月　夏かはのいは瀬にやとる月かけやふゆにしられぬ氷なるらん　心覺法師

海邊夏月　わかのうらやあしの葉わけてよる船やうきねすゝしき夏のよの月　光經

杜夏月　なつのよはみつといふへきほともなしよとのむかひのもりの月かけ　宗尊

○瞿麥（ナテシコ）　順か抄に。本艸云瞿麥。一名大蘭和名奈天之古。一名止古奈豆。但。漢土にては。庭に植るを石竹と云。こゝにてからなてしことて。俗にも石竹と云これ也。又おのれと生するを。漢土にては瞿麥と云。これ。こゝにては大和なてしことて。俗に云かはらなてしこ也。さらしなの日記に。もろこしか原と云所も。すなこのいみしう白きを二三日ゆく。夏はやまとなてしこの。こく。うすく。錦をしけるやうになむ咲たる。これは秋の末なれはみえぬといふ。猶所〻は打こほれつゝ。あはれけにさきわたれりとみゆ。又。此大和なてしこの中に。夏過。秋冬かけても咲あり。貫之集に。なかけくに色をそめつゝ春も秋もしらてのみすく常夏の花。又。常夏の花をしみれは打はへて過る月日のかすもしられす。又京極黄門の。霜の上にひと花さける大和なてしこなとあることく。夏を時と咲花の。とことはにあれは。つねに夏なる心にて。これをとこ夏とは名つけたる也。此下の哥。とこなつとはよみ給はぬにても。床夏は大和なてしこなる事知へし。近式にも。床夏とはみたりによむへからす。妹と我ぬる床夏。ちり打はらふ床夏なとよめらんは難なし。よせなくては。なてしことよむへしと定められたるも。此御心をきて也。唯なてしこは。瞿麥石竹共にいひ。床夏は。瞿麥にかきれりと心うへし

瞿麥　からにしきまかきにかけてみえつるは咲とこなつの花にそ有ける　輔親

とこ夏につゆ置わたるあさほらけにしきに玉をかけてこそみれ　頼実

ちらぬまにいまもみてしかたかまとのをのへにさけるやまとなてしこ　宗尊

からなてしこ　しきしまのやまとにはあらぬなてしこの花はうへこそ世に似さりけれ　公任

近見瞿麥　手にならすあふきのかせにあやなくもつゆそこほるゝ床夏のはな　俊惠

籬瞿麥　きり〳〵すなかぬゆふへもあはれ也まかきにさけるやまとなてしこ　光經

瞿麥滿庭　わかやとは庭もまかきもおしなへていまさかりなりなてしこのはな　顯季

○【夏草】萩。荻。薄。葛。葎。芝。淺茅。蓬（蓬いたくしけれるをは蓬か杣ともいへり）水邊には蘆（夏しけり行をかるよしなとよめり　夏かりのあしと云これ也）まこもなと。すへて夏にいりて。しけくなりゆくさまをよむへし。源重之の。夏草はむすふはかりになりにけりのかひし駒もあくかれにけむとよめるをみて心うへし

夏　草　夏ふかく成そしにける難波女のあしまのこやのかくれゆくまて　俊惠

しけりあふみつのみまきの夏草に駒のすさめしあとたにもなし　慶運

春のゝにまつみしわかなうつもれてあらぬ末はのなひく夏草　雅親

夏草露　あさな〳〵おきもわたさぬ露のうへにしける草はの程はみえけり　称名院

野夏草　秋ちかく野は成ぬらし夏萩のおふの下くさしけりあひつゝ　宗峰

路夏草　かへるさのみちのしるへとみやきのの花まつ萩をしをりてそゆく　雅兼

待草花　ふちはかまはやほころひてにほはなむ秋のはつかせふきたゝすとも　美濃

○【鵜川】うは漢名鸕鷀。万にもやかて鸕とかけり。夏のよ。川舟にのり。一人はさをさし。今一人は手縄にて鵜ののとをくゝり。魚のふすあたりにいきて。篝火をたくに。魚の火のかけに集るをみて。うをはなちいるゝ也。さて。その鵜。水をかつき。魚を得て。これをのまんとすれと。のとをくゝられたれは。えのまてあるを。かの手縄をたくりよせて。鵜の口より魚をはかせてとるさまを。よそよりみてよむ也。うたなはとは。鵜をくゝりてはしを手にもつゆゑいふ也。うかひのある舟を。うかひ舟。う舟

なとよむなり○う舟のかゝり。又かゝり火の影。又篝さすとも云つ夜川。又夜川たつともいへり。たつとは川に立なり○う川たつも同し心にて。万の十七に。賣比川の早き瀬ことに篝さし八十伴雄は鵜川たちけりとよめり。只う川共よめり○しまつ鳥鵜とは。同集十九。島津鳥鵜かひともなへとあり島津鳥は。鵜のかうふりにて。鵜は大かた嶋にすむ物なれは也。津とは。天津風。瀧つせ。國つみ神なとの類にて。島の中の鳥と云義也○同集七に。眞鳥住うなてのもりのと云哥あり。此眞鳥を。鵜の名なりとする説あれと。住の字やすからす。又ある説に。鵜は。海にすむ鳥なれは。まとり住海といひかけたる也ともいへり○同巻に鸕八頭可頭氣氐とあるはあまたの鵜をかつかせてと云也。八頭とはたゝ數多きをいふ。かつけては潜の字にて水をくゝらするなり。同十七に。見潜鸕人といふ題あるにても知へし。又同集。鵜をひたすとよめる哥所〻みゆ。同十三に。鵜矣八頭潰とあり。これ。かつけてとよめるに心たかはす○夕やみ。曉やみなとむすひてよめるは。月のよは。鵜をつかはぬならひ故也

鵜川　おほゐ川みつのみなかみはる〳〵とやゝもとめくるかゝりひのかけ　慶運

ますらをかよな〳〵いつるうかひ火に夕やみしらぬうちのかは波　正徹

瀬鵜川　かゝり火のならひてくたるかけをみてよそにひろせをしる夜河哉　同

**照射**　夏のよ。狩人。鹿をとらんとて。山。又は野にいりて。木陰に松の火串をともし。鹿のねしたる笛なとふくに夏秋は。鹿のつまこふ時なれは。此笛のねにはかられてよりきたり。又はかの火串にもよりくるを。狩人これをいる也　但照射をともしといふは。火をともすといふを体に云也○帖に。あふことをともしの鹿のうちむれてめをたにみせはいるへき物をとあるは。ともしを乏によせてよりくる鹿の少きをも。又鹿のおのかつまにあふかともしきにもよせたり○鹿のめをもあはせぬとは。鹿のほくしのかけによる打つけに。これをいれは。めをみあはす程もなしと云也。又鹿の妻にあはぬをも。又みしか夜なれは。かり人のめをとちてぬるほとのなきにもかけたり○さつを。さ月かりする男と云か万の第十に薩雄とかけり。いにしへは。薩摩よりは隼人

をも奉りて。もとその國の人。力たけく心あらけれは。かりする者をもさつをとはいふか○さつをのねらひとは。万の第十。山のへにさつをのねらひおそるれとをしか鳴なりつまのめをほりとよめり。ねらひは。鹿をねらふ也○あらちをのかるやのさきにたつ鹿とは。万の第十六に。荒雄良(アラヲラ)ともみゆれはあらちをも。たゝ荒雄(アラキヲ)といふこゝろにて。きち音通すれは。あらちをとはいひけるならん。あらをといふは。女に對していふなり。万に。益荒丁(マスラヲ)とかけるも同し義也。ますらをは。神代紀には。男者。丈夫ともかけり。○きそひかりは。競レ獵(フヲ)也。万第十七。かきつはた衣にすりつけますらをかきほひかりする月はきにけりとみゆ。たゝ丈夫のわれも／＼と獵するをいふ也○万の十六に四月與五月間尓藥獵仕流時爾(ウツキトヤサツキノホトニクスリカリツカフルトキニ)（中略）吾完(ワカシヽ)は（肉をいへり）み膾(ナマス)はやし。吾伎毛肝(キモ)膾也みなますはやし。吾美義(ミキ)は。み塩のはやし（みきとは手足の枝なり）なとよめるをみれは。古人夏の鹿の肉を。藥とまてめてゝ。さて夏の狩を。藥獵といひしにや。今の人。鹿をしゝといひ。鹿狩をしゝかりといふも肉(シヽ)をかると云義也○火串(ホツシ)。ほくしの松とは松を串にしてもやすなり。又ほくしさすとも。又ほくしもしめるなともよめり。しめるは露によりて也○とも矢たはさみとは。かり人のさまによむ也。矢二すちを指に挿(ハサ)む也○せこ聲とは。鹿を追出す者邑をたつるを云。又せこたてゝとも云は。追出す人を並立るを云○もと山とは。せこの鹿を追ふ所の山也○かゐふみおこしとは。せこのあしふみたてゝ。鹿猪をかり出すを云○鹿の跡つなくとは。鹿のゆく跡をとめしる也。○鹿の星あらはるとは。夏來れは鹿の毛に斑文(マダラ)生する。その斑をほしといふ也

照　射

かりひとの夏のよふかくいるさ山ともしのかけのみえみみえすみ　　大貳

あつさゆみたかまと山にともす火はほくしにかけているにやあるらん　　顯輔

ともしすとは山のすそにたちかぬる我をや妹はまちあかすらむ　　俊惠

ともしするは山のすゑにたつ鹿のなかぬころたにつゆそこほろゝ　　土御門院

曉更照射

はをしけみをくらの山にいりぬれはあくるもしらすともしをそする　　顯廣

ともしすとさやまによをそあかしつる鹿もわか身もめをもあはせて　　賴政

○螢 漢名同し。又熠燿。螢燐。宵行。挾火。景天なともいへり。猶異名おほし。礼記に。季夏乃月。腐艸化爲螢とかけり。これより。哥にも多くよめり。もろこしにては。螢火といへと。歌にはこのます。されと火によせて思ひとよむより。もゆるともよめるは。源重之の音もせて思ひにもゆる螢こそ鳴むしよりもあはれなりけれとよめるより。おこりてかゝり火。いさり火ともまかふ。常のこと也。又玉にまかふより。人の魂にもよめるは。清少納言の。物おもへは沢の螢も我身よりあくかれいつる玉かとそみるとよめるよりはしまれり。其外。星。露なとにまかふも又つね也○身よりあまれるおもひとは。大和物語に。桂のみこを思ひかけ奉りて。めのわらはの。ほたるにそへてたてまつれる哥あり○漢車胤といふ人。家まつしくて。よる油なければ。絹の嚢に螢をいれてふみをてらしてよみけるより。文を學ふ事を。螢をあつむ共。窓にあつむるなともよむ也○螢を夏むしとよむこと。古は例もあれと。今はこのます。但。夏虫といふ題には螢もよむへし

螢
いかはかり歎をつめる身なれはかよをへてもゆるほたるなるらん　源賢
かへるさはかゝりもかけしもかり舟佐保のほたるのひましなければ　紀伊
大井河せゝにひまなきかゝり火とみゆるはすたく螢なりけり　顯季
むら草の下にとひかふほたるこそかせにこほるゝつゆとみえけれ　覺性
こすのとによひのともし火消やらてほのめく影は螢なりけり　同

雨中螢
くさむらの露の光はやゝきえて螢かすそふ夕くれのあめ　後土御門院

澗底螢火
谷ふかみ淺からぬ身のおもひとはよそにしられてとふほたるかな　後伏見院

野螢
あふせまつほしかとみえて天の川かたのゝみのにとふほたるかな　慶運

螢照水艸
夕かせの玉ふきはらふはちす葉はすたくほたるの光をそかる　覺性

海上螢　明ゆけはいかになるみの波の上によるく\はかりとふほたるかな　光経

叢中螢火　大あらきのもりの下くさ朽ぬらしうきたのはらに螢とひかふ　顕廣

晩夏螢　秋ちかくなり行そらのかせの色を光にみせてとふほたる哉　称名院

○夕顔　漢名壺盧也。源の夕顔の巻に。きりかけたつ物に。いとあをやかなるかつらの。心ちよけにはひかゝれるに。しろき花そ。おのれひとりゑみのまゆひらけたる。遠方人に物まうすとひとりこち給ふを。御随身ついゐて。かのしろくさけるなむ夕かほと申侍る。花の名は人めきて。かうあやしき垣ねに咲侍りけると申す。けにいと小家かちに。むつかしけなるわたりの。このもかのもうちよろほひて。むねく\しからぬ軒のつまことに。はひまつはれるを。くちをしの花の契りや。一ふさ折てまいれとの給へは下畧しろき扇のいたうこかしたるを。これに置てまいらせよ。枝もなさけなけなめる花をとて。とらせたれは下畧これみつにしそくめして。ありつる扇御覧すれは。もてならしたるうつりかいとしみふかうなつかしうておかしうすさひ書たり。へ心あてにそれかとそみるしらつゆの光そへたる夕かほの花下畧けにかはかりにてへたてあらんも事のさまたかひたりとおほして。へ夕つゆに紐とく花は玉ほこの便にみつるえにこそありけれ。露の光やいかにとの給へは。しりめにみおこせて。へ光ありとみし夕かほの上つゆはたそかれ時のそらめ也けり。これらの詞の心。哥の趣をとりてよめる哥おほし。又さならぬもあれと。大かた賤か垣ねにはひかゝりたるをよむ也

夕良　かくはかりしつかふせ屋のいやしきもさかりはみゆる夕かほの花　慶運

疎屋夕良　しつかたくをりしもつらくさく花の烟にくもるのきの夕かほ　雅親

○蚊遣火(カヤリヒ)｜蚊火(カヒ)　両題全同。もろこしにて。驅蚊烟(クワンエン)といひて。色く\の薬をあつめねりかため。それに火をつけけふりをたゝせて。蚊をはらふ物也。このかやりも。その用は同しけれと。たゝほた柴なとをくゆらせて。蚊をふすふるなり。されは大かた賤か家にて。夕くれより。かをかけてたくけしきを。哥にはよむ也。万第十に。朝かすみ蚊火屋か下に鳴かはつと云哥あり。此かひを。

蚊遣の事にしてよめる哥もあまたあれと。かひは鹿火にて鹿をふせかむために。田中の庵に火を置。烟をくゆらせて鹿のよりこぬまうけなりとも。又蚊遣ともいひて。いつれともかたよりていひかたけれは。六百番哥合に五條三品は両説共とり用ひられし也

蚊遣火　やとことにかはりてたつるかやり火の室には同しけふりとそなる　顕仲

さらぬたに夏はふせやの住うきにかひの烟の所せきかな　基俊

さひしとて柴をりくへしおもかけをけふりにのこす里のかやり火　慶運

遠村蚊遣火　けさみれはをの山かつもあれやこのせれうのさとにたつるかやり火　小侍従

閑居蚊遣火　かやり火のけふりたてすはいかにしてこの山かけの宿をしらまし　後伏見院

○

蓮(ハチス)　蓮花(ノ)　二題同し心得にてそむかす。漢名同し。又芙蕖芙蓉。荷とも云。又蓮は房を云ともあり。又蓮花已開を芙蕖といひ。いまたひらかさるを菡萏と云。其華菡萏といへるもひらかぬを云也。藕ははすの根也。茄ははすのくき也。蓮は荷に同。但。蓮房の蜂の巣に似たるによりて。はちすとは名つけられしならむ。古は。はちすとのみよめり。中比の人。ちを略きて。はすとのみもよめり。近昔より後はいつれをもよめと。同しくははちすとよむへし。又哥には花をもよみ。葉をもめて。露をもてあそへり○此題。仏説をとりてよめる哥おほし。佛の蓮をしもとり用ひ給へるは。他の花は。花ちりて実のり。蓮は花とゝもに實をむすへは法華の權(花也)実(み也)を兼たるにたとへ給ふ也。されは。法の花とも。たへなる法の花共よめり。又まことの色とは。法華經には。実相をあらはしたれはいふ也。又こゝのしなの蓮。はちすのやとりは。九品蓮臺をいへり。やかて蓮のうてなとも云へ葉はたち葉(立)。うき葉(浮)。まき葉(巻)なとたゝはちす葉ともよめり○露を玉とみ。又玉ゐる蓮なとよめり○香をよむ事は。帖に。はちすはのかは身にさへもしみにける哉とあり○にこりにしまぬとは蓮は。泥の中より出てしかも花のさまいと清き故にいへり。一の夏にへせうか哥あり○みをはちすとは。身を不レ慙(ハチ)によせたり伊勢の御か。にこり江はかたふかくこそあれにけれ身をはちすさへみれは生けりと。家集にみゆ○大寺蓮は。西大寺の池の蓮也

蓮　玉水をはすの若葉にまきこめてこほすや花の光なるらん　俊恵

池蓮　ぬきとむる池のはちすのいとはあれとうきはの露そ玉とみたるゝ　雅親

池上蓮　にこりなく池のこゝろやすみぬらんいまそはちすのあらはれにける　顕広

くれなゐにふかくもみゆるはちす哉池のこゝろはあさしとおもふに　伊豆守為業

蓮露　うらやましはちすはにゐるしら露をうき世にやとる我身ともかな　よみ人しらす

蓮乱晩風　夕されははすのうきはに風こえてうつしそかふるつゆのしら玉　俊恵

○氷室（ヒムロ）　漢名凌陰。仁徳紀曰。六十二年額田大中彦皇子。摂州闘鶏野に猟し給ひ。山上よりみ給ふに。野中に廬のことき物あり。使してみせ給ふに。使かへりて窟也と申す。因てつけの稲置大山主をよひて問たまふに。氷室也とこたふ。皇子其蔵ことを問給ふに。土をほること丈餘にして。草にて上をおほひ。あつく茅荻をしき。氷をとりて。其上におけは。夏に至れとも消す。其氷を。あつき比水酒にひたしてのむと也。皇子。此後其氷をすめらきに奉り給ふ。これより常に冬の末ことに。氷をかくして。春分より後。はしめて氷を散すと云。これ氷室のおこり也。此ことを初度百首に。つけのゝに大山もりかおさめたるひむろは今も絶せさりけりとはよめりその外もみち葉のちりやおほひし（信実朝臣の哥あり）すめらきのよゝの氷（少将内侍の哥あり）又消ぬひむろ。日かけにうときなとさまゝゝみゆ○ひむろのおものとも。おものたつなとよめるは。六月朔日。氷室守。氷を内裡に献して御供となるゆゑ也。おものとは供御をなへていふ○ひむろ戸とは。氷を納めたる室の戸也○世々氷室をおかれけるは。山城の宇陀。長坂。松か崎。大和の春日山。近江の大山なと。猶おほくよめり○一首の中に氷室とよみ。こほりとよむこと古は例多けれと今はこのます

氷室　なつの日もすゝしかりけりまつか崎これやひむろのわたりなるらん　顕季

いはひつゝ千代のためしにおく物は松かさきなるひむろなりけり　行宗

ひむろ山あたりはふゆのこゝちしてこすゑのせみそ夏とつけつる　俊恵

あさまたきむすひしひむろさえにけり春たつ風も吹とかすして　雅親

朝氷室　松か崎みやこのつとのしつくかもあさつゆこほるみちのなつくさ　正徹

遠山氷室　なか坂のひむろはみちの遠けれはけたてそなへむことをしそ思　頼政

○夕立　漢名急雨。驟雨なと云。順の抄に。暴雨。和名にはかあめ。楊子漢語抄云。白雨と出たり。これもゆふたちの類なれと。文字の心はすこしたかへり。夕立としもなつけたるは。雨のあしの木綿(ユフ)を裁(タチ)たるやうにみゆれはなり○万第十。暮立(ユフダチ)の雨ふる毎に春日野のを花か上の白露おもほゆと秋によめれと。例とすへからす

夕立　まつかせもはけしくなりぬたかさこのをのへの雲の夕立のそら　宗尊

雲おほふそらのみたれのほともなく日かけみえそめすくる夕立　雅親

ゆふたちのそらもとゝろになるかみの聲するかたにむかふあま雲　雅有

露たにもなこりはあらしゆふたちの雲よりあとのみねのまつ風　雅親

夕立過　みなかみと聞ほともなし山河のなかれにつれてすくる夕たち　同

○蟬　漢名同上。和名せみ（音をもて名としたることは下にくはし）万には第十五に。石はしる瀧もとゝろになく蟬のといふ哥たまたまみえて。ひくらしとよめる哥おほし。又同八に。晩蟬といふ題あり。歌には。たちいてきけはきなくひくらしとよめり。これは同巻に。おくての萩を。晩芽子とかゝれたるに同しく。おくれてなく蟬の義なれは。茅蜩(ヒクラシ)にてもあるへけれと。同第十に詠蟬歌。夕かけにきなくひくらしこゝたくのとも。又同巻に同題もたもあらん時もなかなむひくらしの共。又同巻に寄蟬とある題の哥に。ひくらしは時となけとも我こふるなと。いつれも蟬といふ題にひくらしとのみよめるをみれは。此晩蟬も。折おくれてなく蟬をはひくらしとよめ

るにやともおほゆれは。蟬。茅蜩。いつれともさためかたし。今これらをあはせ考るに。和名をせみといふは。蟬の字の音をやかて名とせる也。順か抄に。寒蟬。和名加無世美とありて。寒の字音を用たるにつゝきたれは。蟬の字も又音なることしるへし。ひくらしとは。夕くれにしもなけは。さ名つけたりと云説もあれと。二秋に。秋かせに草葉なひきてふくなへにほのかにしつるひくらしのこゑと。夕暮ならてもよみ。又大物に。ひくらしに（終日の義なり）君まつ山の時鳥なといふ詞の義例にもたかひてきこゆれは。二戀に。明たては蟬のをりはへ鳴くらし共。又同物名に。ひくらしをかくして。あしたよりおもひくらしのねをのみそなく共よめることくたゝ終日かまひすしくなく物なる故に。その義をもて。ひくらしとはいひけるなり。万にも。夕かけにきなくひくらしとも。二秋にも。ひくらしのなきつるなへに入日さすなりともあることは。其名のをりにあひたるを思ひてかくよめるまて也。されは上つ世にては。せみとはたゝ音をもていひ。ひくらしは義をもていひて。その種類のことなるにつけて。名をわかちたるにはあらす。たゝ蟬をも。茅蜩をも。おしこめてありけるとみえたり。中昔よりは。物も名もこまかにわかれて蟬はせみ。茅蜩はひくらしとせられたり。順か抄にもせみは蟬。ひくらしは茅蜩。爾雅云。小青蟬也。くつ〳〵ほうしは蛁蟟。陶隱居本艸注云。八月鳴者也とみえ。帖には。ぜみは夏の虫の中に置。ひくらしは秋の虫の中に出せり。世ゝの撰集皆これに同し。又うつせみといふは。古のうつそみの。そせかよひて轉したるにて。万にうつそみの世。うつそみのうつし心なと。數多みゆれと。たゝ皆現身の義也。蟬もと。もぬけする物なれは。中昔の頃より。其義をとりて。つひに蟬の名とはなれる也。いつれにも上つ世をつねにねかはむ人は。蟬。茅蜩をはいはす。かよはしてせみともひくらしともよむへく。中昔をもとゝせむ人は。蟬をせみともうつせみともよみ。秋なく茅蜩をは。ひくらしとよむへし。但近き世に。うつせみは蟬退(モヌケ)にかきれるやうにいはれたれと。ひか心得なるへし。前にもいへることく。うつせみとは。もと仙脱(モヌケ)するをおもひはかりての名なれは。いける蟬をいはむことあきらか也。されは一長哥に。夏はうつせみ鳴くらし共。又二に。うつせみの聲きくからになといけるをよみ。又蟬退をよめるは。一物名に。うつせみのからは木毎にとゝまれと共。源には。うつせみの身をかへてけるなとあるをみれは。いけるをも。もぬけをも。うつせみといはむ

に難なかるへし〔つ〕俊頼朝臣の集に。つく〳〵ほうしのなくをとあるは。かの貂蟟にて。くつ〳〵ほうしの誤なるへし○同集に。うつくしよしと蟬のなくらんとあるは。女郎花をむすひてよまれたれは。蟬の秋にいりて。鳴よはれる声の。うつくしよしとい
ふらんやうにきこゆれは。さはよまれけるなるへし

蟬

こゑたてゝいかになくらんうつ蟬のわか身からとはおもひしらすや　大進

夏山のそらひゝくまてなくせみにこのはもゆるくこゝちこそすれ　俊惠

なくせみのなみたしられてもる山のしけみにおつる木ゝの夕つゆ　爲相

林頂蟬

しけりあふ夏のみ山にこかくれてこすゑのせみの聲そ絶せぬ　爲盛

○扇　漢名同。又箑。翣篓なともかけり。但團扇。摺扇ともにあふきといへり。又紈扇輕紈齊紈なとは團扇(マロキ)なり。六百番歌合に。京極黄門の風かよふ扇に秋のさそはれてまつ手なれぬるねやの月かけとよませ給へるは。これ團扇也。又摺扇。蟬間なとは。たゝみあふきにて。蝙蝠(カハホリ)といふ。これは狀の似たるゆゑ名つけたる也。源氏紅葉賀巻に。源内侍のものすそを引おとろかし給へれは。かはほりのえならすゑかきたるをさしかくしてとあり○月にたとへし扇とは釈尊法華經をとき給ふに。上根の弟子は。とみにその心をさとり。中下根の弟子は。まとひて。えさとらぬをあはれみ。世間のたとへをかりて。かやすくさとし給ひつる心を。天台智大師のかき給へる詞に。月隱(ルレハ)二重山(ニ)一兮擧(テ)レ扇(ヲ)喩(ン)レ之(ヲ)。風息(ヤメハ)二大虛(ニ)一兮動(カシテ)レ樹(ヲ)敎(ユ)レ之(ヲ)とあり。是は摩訶止觀(マカシクハン)第一の文にて。重山は煩悩(ホンノウ)にたとへ。扇は權謀(コンホウ)。月は実相(シッサウ)。風は圓音(エンヲン)。大虛は法性(ホッシヤウ)。樹は方便(ホウヘン)にたとへ給へる也。又たゝ月とみなしてよめるも多き中に。前に出せる京極黄門の閨の月影。爲家卿のしろき扇の月かけもなとあるは。班婕妤の怨歌の詞をもとゝし給へる也　怨歌行中に有○法の扇といふも。上の摩訶止觀の文のこと也○しるしの扇とは。源氏花宴に。扇はかをしるし(ママ)に上りかへて出給ひぬ　下略
かのしるしの扇は。櫻のみへ。さね(ママ)にて。こきかたに。かすめる月を水にうつしたる心はへ。めなれたれと。ゆゑなつかしうも

てなしたり云々　櫻の三重かさねとは。檜扇の兩方三枚つゝを。さくらの薄様にてつゝみて。色々の糸してとぢて。あはひむすひに結ひたれたる也。清少納言か枕草帋に。なまめかしき物。三重かさねの扇。五重になりぬれはあまりあつくてとあり○しろき扇とは。源氏夕良にしろき扇のいたうこかしたるとあり（本文夕良の条下に出）こかすとは薫物にしめたる也○紫の扇とは。紫色の紙をはりたる扇也○黄なる扇は。世繼物語に大宅世繼。御室にて。夏山の繁樹にあひてふるき物語したる時。世繼かもちたる扇。くろ柿の骨に。黄なる紙を（ママ）はりたりしよしみゆ○さし扇は扇にてかほをさしおほふを云。面かけをなかはかくせるさし扇さても光そそふこゝちする（藻塩艸にたこの哥出）扇をゆゝしといふことは。扇は。夏のみもてはやされて。秋はすてらるゝによりて也。六帖に。なにしおはゝたのみぬへきをなそもかく扇ゆゝしと名つけそめけむ。此哥の心は。扇はあふといふことにかゝ（ママ）へは。たのみもすへきを。なそゆゝしと名つけそめたるにかといふかれる也。ゆゝしとは。忌々しきに同し。但いむともいへり。同帖にゆゝしとていむとも今はかひもあらしよのつきことはこれにつけてもとあり。此ことは。班婕妤か怨哥行に新製齊紈素。皎潔如霜雪。裁成合歡扇。團々似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼飆奪炎熱。弃捐篋笥中。恩情中道絶。これらよりおこるなるへし○六帖に。そへてやる扇の風し心あらはおもはむ人の手をなはなれそ。又あふけともつきせぬかせは君かため我心さす扇なりけりなとあるは。東晉の謝安か。袁宏に扇を贈れるに。宏か曰。當奉揚仁風と。世說にみえたり○枝あふきとは。枕草紙にきたの陣の楢の木のいとたかきを。成信の中將。定澄僧都の。枝扇にせさせはやとの給ひけることとみゆ。是は。定澄のたけたかゝりし故に。たはふれことにかくのたまひけるなれと。此木を扇につくることもあるにや

扇

袖のうちになかはかくるゝあふきこそまた出やらぬ月とみえけれ　　正三位季經卿

てにならす夏のあふきとおもへともたゝ秋かせのやとりなりけり　　後京極良經公

閨扇

もる月のしろきあふきは夏の夜のねやにも雪をあつめてそみる　　正徹

○

泉

漢名同。和名いつみと云は。出水の義にて。わきいつる水に云。歌には。いつみ。いつみの水。桜井の水（あくかたにいしたるかなり）い

は井。いはかきしみつ（めくりを石にてつみあけたるを云）なとよめり○むすふとは。手して水をすくふ也。もろこしにては掬の字をかけり泉辺（ママ）　向

**泉**　**對泉**

泉　みな泉のわたりと心えてそむかす

なつの日もむすふいつみのすゝしきは人にしられて秋やきぬらむ　大貳

みちとほみ板井のしみつむすひつゝけふはあふきもさしそおかるゝ　行宗

奥山のいはかきしみつせきとめて木のもとなからけふもくらしつ　光經

せきいれしいはまの水のかけさえて底にもむすふ袖はみえけり　土御門院

對泉忘夏　夏なからいつみすゝしきやとにては秋たつことをいかてわくらむ　經信

關路泉　あふさかのせきのしみつのきよけれはかけをとゝめて神もすみけり　覺性

依泉客來　まし水のまくらにそゝく山さとは大みやひともかとたゝくなり　同

泉辺秋近　いはそゝく谷のしみつにうちそひて秋も袂にかよひきにける　俊惠

○**避暑**　漢字同。又逃暑なともかけり。夏の日。あつきをのかれて。すゝしきかたに行よしをよむへし

避暑　をりたちてしみつのさとに住つれは夏をはほかにすくしたるかな　常陸

泉邊避暑　むすふ手もすゝしかりけりみな月のいはまのみつに秋やかよへる　曾丹

（京本標脫）**納涼**　漢字同。たゝ二字にてすゝむと云義也。よみかた。上の道暑（ママ）に同し。夕すゝみ下すゝみなとよ（ママ）

納涼　夏ふかみひはらの杣のいはせ河むすふ手ことにあきそこもれる　登蓮

むすふ手のすゝしくもあるか山の日のあかぬしつくは夏のゆふくれ　雅經

我やとにかた枝さしおほひしけるなるならのひろ葉の陰そすゝしき　宗良

杜邊納涼　すゝしさはひとへに秋のこゝちして夕かせたちぬころも手のもり　守覺

樹陰納凉　あやしくもときはのもりの夕かせに秋きにけりとおとろかすらむ　忠盛

松下納凉　このまゝにまくらにしめむゆふかせのすゝしさあかぬにはのまつかね　雅親

水邊納凉　すゝしさはそこゐもしらぬひろせ川袖つくはかりなにおもひけむ　為廣

○晩夏　六月ひと月の間のことは皆よむへし。暮春の心えに同し

ひくらしのなく夕くれにふくかせの音にそ秋はちかつきにける　雅有

○夏秡（ナツハラヘ）　六月秡（ミナツキノハラヘ）　名越秡（ナコシノハラヘ）　荒和秡（アラニコノハラヘ）　四題同漢名。修禊。禊事。秡除なと云。神代紀に。伊弉諾尊伊弉冊尊の黄泉にいり給ふをひ。しこめききたなきを御覧し。かへり給ひてこれを悔て。御身のけかれをあらひさらむとて。筑紫日向（ツクシヒウカノ）小戸橘（トノタチハナノ）檍原（アハキノハラ）にて。上（カミ）つ瀬ははやし。下（シモ）つ瀬はぬるしとて。中つせにてすゝき給ふ。これ秡（ハライ）のはしめ也。後世のはらひも。疫病。災難。諸罪を。みなあらひなかさむとてするなりみそきとは。身のけかれをすゝくの義也。御秡（ミソキ）とかけるは假字也。いにしへは。はらへも六月晦日にはかきらす。宝治百首の中。定嗣卿の哥にも。みな月の月みむとてや夏はらへ昔はけふとさためさりけむとみゆ。後世は唯六月晦日にかきれり。則。式にも六月十二月の晦日を。大秡の日と定められたり。名越秡とは。人の上にさわりをなすあしき神を。和平（ナコシムケ）むとてする秡なりとの義也。顕仲朝臣の。いにしへのさはへなしける神たにもけふのみそきになひくとそ聞。權僧正公朝の。あしはらや螢かゝやく神までも飛ちる斗はらへする也なとあるは神代紀下曰然彼地。多有螢（ホタル）火光神（ヒノカヽヤクカミ）及蠅聲（サハヘナス）邪神（アシキカミ）云々。これよりよめる也。又三条入道左大臣の。うき物とのみこもりの神とあるは。河乃瀬にます瀬織津比咩（セオリツヒメ）といふ神也。此神。諸の罪を大河原にもち出てはなち給ふとかや。其外。あらふる神なとよめり。○荒和秡とは。荒世（アラヨ）和世といふ物をもてはらへするより。其ふたつをあはせてかくいふ也。くはしくは。雑の部公事の条。大秡のところにのせたれはこゝにいはす。○茅輪（チノワ）菅貫（スカヌキ）とは（ママ）神。社考に云。素盞烏尊を武答天神と申けるか。或時。南海の女子にかよひ給ふに。日暮て宿を路の傍にかり給ふ。こゝに兄弟あり。兄を蘇民将来といひ。弟を巨旦将来といふ。兄は貧しく弟は富饒（ママ）。宿を巨旦に乞給ふにかし奉ら

おはゝ兄蘇民にかり給ふ。粟實を坐とし。粟の飯を奉る。その後八年をへて。神御子八人をゐて。蘇民か家に來り。さきの德をむくひむとて。をしへて茅の輪をつくらしむ。其夜。天下疫病大に行れて。人民死するもの數をしらす。唯蘇民の家のみ。まぬかれけり。武答天神。又云。我はこれ速須佐雄能神なり。今より後。疫もしおこらは。かならす蘇民将來の子孫なりといひ。茅輪を係て災をのかるへしと。これその濫觴也。御湯殿記に。晦日の夜にいりて輪に入とそ。但。輪は長さ尺はかりたる茅（いはゆる淺茅共茅ともいふ物なり）二三本を。紙につゝみ持て。左の足より入。右の足より出。かくすること三度也と云。爲家卿。貞應三百首の中に。としことにすつるちのわの御禊河　又同卿。毎日一首中。御禊河なかすちのわの程もなくなとよませ給へり。又。ちの縄とよめるもあり。これは左縄によると也。従二位顯氏卿。みそきするけふのあさちのひたり縄。又。久安百首に。隆季卿。思ふことあさちの縄なとみゆ。又。加茂神事次第に。次入菅貫之輪とありこれ菅にて輪を作とそ（万葉ニ菅禰鑑貫ナトニ同シク人ノ歷クヽル故云ニヤ）但。菅は順か抄に。須計と訓し。茅は智と訓す。いはゆる白茅にて。菅に同しからす。しかれとも文治二年女御入内の御屏風の哥に。後京極攝政。万代といはふ御禊は眞菅よきそかのかはらの夕暮のそらとよませ給へれは。菅を用られしこと疑なし。又堀川百首に。仲実朝臣。けふすかぬきの御禊しつれは。又。同御時。隆信朝臣。みたひすかぬきいのる御禊にともあれは。かの御陽殿記に（マヽ）。三度くゞることあるにもかよひて聞ゆれは。菅も又輪の具なるへし○人かたをつくりて。身の災殃をうつして川になかすことは。釈日本紀に。素戔烏尊その罪を贖むとて。手足の爪を拔給ひしをはしめとすといへり。されは。人形を贖物とも云。又撫物といふ則これ也。大衣の式に。金銀裝人像鉄人像。荒世。和世并御服御贖。節折なとある事は。これも公事の条下にくはし○あさちにて人かたをつくりなかすことは。釈日本私記にいはゆる。芻靈を久散比度加太といふことみえたり。此日。茅輪を用うるよりうつりてはしまれるにや。俊頼朝臣。沢へなるあさちを苅に人なしていとひし身をもなつるけふ哉。又。定家卿の。文治二年百首に。御禊河からぬ淺茅の末をさへみなひとかたに秋かせそ吹と。一方を人形によせてよませ給へり。又同卿。同五年の百首に。御秡すとしはし人なすあさのはも思へは同しかりそめの世を共あれは。麻をも。淺茅をも。人形には用うるにや未詳○麻のぬさ。又。

麻の枝を川へにたつることあり。安嘉門院堀川の。麻のはのぬさもとりあへす御禊河早瀬に夏をたむけてそやる。又久安元年。女御入内屛風。三条入道左大臣。御禊するみきはにたつる麻のはに又ゆふ波をかけてける哉。又爲家卿。みな月に麻のたち枝にぬさかけてなかすみそきは神そうくらむ。又後鳥羽帝。みそき河行かふそらやふけぬらん露なからをるあさの一ふさなと。猶例多し。但。麻の大ぬさともよめり○楢をもぬさとしけるなるへし。爲家卿家集に。此月の楢の大ぬさとりして丶あらふる神の御禊してけりとみえたり○しらゆふかくるとよめるは。法親王澄覺。布引百首に。布ひきの瀧もやけふのみそきして水のしらゆふいかにかくらむとあり○五十串(イクシ)たつることは。隆信朝臣。佐保川のたえぬ流にいくしたていのる御禊も昔か代のためとよめり。五十串とは。しめ繩をはる串なり○みわすゑまつるとは。万葉十三。神酒座(ミワスヱ)奉(マツル)とかけり。猶雑の部酒の条にくはし。千五百番歌合に。おなし朝臣。しらさりつみわすゑまつる御禊河神さへうけぬ思ひせむとはとよめり○貫之集に。はらへしたる所。此川にはらへてなかすことの葉は波の花にそたくふへらなるとあるをみれは。哥なとよみかきてなかしけるにや○名こしの神楽。法橋顕昭。喜多院法親王家五十首に。思ふことなか河上に打はえてなこしのかくら聲すみぬなりとよめり○新撰六帖に。光俊朝臣。ふけぬるかみちのちまたにみそきしてあさきりすつる里のむら人。又同帖。衣笠内府。さと人の同しみそきのやとことにけふは河原に千代いのる也なとあるは。いやしきもの丶はらへするさま也○はらへの名所は。名所の部河の所にみるへし。かみや川。いす丶川。なに波(ハ)なとのはらへは。斎院のせさせ給ふにて。水無月の祓にあらす。須广のはらへも。源氏にみえて不時のことなれは。おしなへての題詠にはよむへからす。されと。その所々の人の。そこにてはらへしたらんをみてよまむは。いつくの川にてもよむへき也○天慶三年。うちのおほせことにて。貫之の夏はらへをよめる哥。川やしろしのにおりはへほす衣いかにほせはかなぬかひさらむとあり。此河社のこと。先達の説おほし。今考るに。はらへする時に。川中にかりそめの社をたて丶。それに物そなへなとしけるなるへし。猶。匡房卿家集。河やしろ秋をあすそと思へはや。又土御門帝。みそきす丶しき河社かな。壬生二品の。河やしろほすや衣は名のみしてなと多し

夏　祓　みそき河なかれてはやき麻のはのよるへしら浪秋かせそふく　慶運
河夏祓　みな月や月日とゝもに暮はつる夏のみそきはけふやなかさむ　爲重
六月祓　みなかみのたゆるよもあらし年ことのなこしのはらへこゝにきてせむ　道濟
六月祓　神よゝりとしにひとたひ夏かはのなかれてたえぬみそき也けり　爲仲
おもふことみなつきはつるこよひよりやかてなこしのはらへをそする　大貳
名越祓　としことのみそきのしるしあらませは我何ことをけふいのらまし　雅兼
荒和祓　けふはみな千とせのいのちのへむとて河のせことにみそきをそする　行宗

○

水風晩來　ゆふつくよむすふいつみもなけれともしかのうらかせすゝしかりけり　顯季
臨晩有涼　夕されはなひくをさゝのおとにこそ思はぬ秋のかせはたちけれ　在良
山家晩涼　なつ山のこのはかくれの夕つくよもるかけすゝししのかりふき　覺性
微涼向月　川かせのふきくるはかりあらねとも月みるほとはすゝしかりけり　爲仲
晩涼如秋　ゆふされは一むらすゝきうちなひき鹿こそなかね秋のけしきそ　長方
水風如秋　川かせにふきかへさるゝころも手は秋きてのちのこゝちこそすれ　爲仲
樹陰似秋　なつの日のこのしたかせのすゝしきはしのひに秋やかねてきつらん　國基
田家待秋　ひこほしもあはれとやみるみたやもり秋まつほとのおなし心を　覺性

夏天　みとりこくほしのひかりはかゝやきて月まつなつのそらもすゝしき　雅親

夏日　庭の面のつちさへさくる夏の日にひとりつゆけきひめゆりの花　土御門院

夏月　あかている月のかたみにおくものは露よりさきのあふきなりけり　同

夏雨　里とほき田中のもりのむらさめに山ほとゝきすぬれてなく也　光経

夏風　たちはなのかはにほへとも我やとにむかしの風はのこるともなし　貞成

夏野　夏ふかみ草ふきわくるかせなくはたとりやせましまのゝつきはし　俊恵

夏瀧水　ぬのひきのたきのしらいとよるは猶螢かすそひ玉そみたるゝ　光経

夏日越關　夕たちにふしのしは山雲かけてきよみか關のなみちをそゆく　覺性

夏曉更　あり明の月にこかるゝほとゝきすしのはぬこゑを雲になくなり　光経

夏夜　まことにやあかしかぬらむ夏のよをひとりねさめのひとにとはゝや　顯季

夏衣　こぬ秋もうらめつらしきかせたちてなく夕かけのせみの羽衣　雅親

夏烏　木をめくりねくらにさわく夕からすゝしきかたの枝やあらそふ　同

夏木　さみたれのなこりのつゆの玉かしははもりの神のかさしなるらむ　同

うた婦く路

# 歌袋巻之五

## 時節秋部

### 目録

| | |
|---|---|
| 服飾 | 擣衣　廿五丁 |
| 雜 | 秋雜　卅五丁 |

# 哥袋巻之五

時節秋部　爾雅に。秋を白藏と云とあり○秋を司る神を。龍田姫と云。もろこしにて月令に。其帝少昊。其神蓐收といへるかことし。但。龍田彦は。秋を司る神にあらすして。風神也。万の第九長哥。上略　わかゆくはなぬかは過し龍田彦ゆめこの花をかせにちらすな。又長哥上略　山おろしの風なふきそと打こえて名におへる杜に風まつりせむなとあるにて知へし○西こそ秋のはしめとよめるは。禮に。西方以立秋謂白精之帝とも。鶡冠子に。斗柄西指而天下皆秋とも。又。杜甫か詩には。大火向西流ともありて。昔より秋は西より來るといへり○うき秋とよめるは。もろこしにても悲秋なといひて。秋は物ことあはれなれは也○秋を飽によせて多くよめり○水の秋とは。古今秋。坂上是則。もみちはのなかれさりせは立田川水の秋をは誰かしらましとあるをもとゝして多くよめり。水もと色なきに。もみちのうかひて秋の色みゆるをいへり

○【立秋】六月。七月の節分を云。後柏原帝の御集に。六月立秋といふ題に。夕すゝみ風さやかにてみな月の光なからに秋やたつらんとよませ給へるにてもしるへし。又。ふ月朔日二日のほとをもよむことつね也。立春の心得に同し。一秋の。秋きぬとめにはさやかにみえねとも風のおとにそおとろかれぬる。二秋の。俄にも風のすゝしくなりぬるか秋たつ日とはうへもいひけり。三秋の。夏衣またひとへなるうたゝねに心してふけ秋の初風なとを本としよむへし【秋來】全同し心得也【一葉散林】淮南子に。一葉落而天下知秋とある趣をよむへし

立秋

けふよりは心つくしの秋なれはいとゝわか身そおきところなき　行宗

かそふれはなみたのつゆもとゝまらすこれやみそちの秋の初かせ　土御門院

いつしかもわかとき衣ぬはぬまに夜さむの風のふくそわりなき　覺性

けさよりそうらめつらしく吹かへす岡のくすはの秋のはつ風　宗良

六月立秋　みそきせむ日數もまたてすゝしきは秋たつけふのかもの川なみ　雅親

立秋風　ひと葉ちる桐のたち枝に秋をはやみせもきかせもわたる朝かせ　同

○風告秋（風告ク秋ヲ）風の。人に秋を告しらする心をよむへし　風知秋　風の。おのれと秋をしりて吹かはる趣をよむへし

竹風告秋　さゝの葉にそゝや秋かせおとす也いつかよなかくならむとすらむ　俊惠

晩風告秋　夕まくれこはかきか花はさかねとも鹿なきぬへき風のおと哉　雅兼

○初秋　初秋（ソシウ）　早秋（サウシウ）　新秋（シンシウ）　いつれも。秋たちて五六日のほとをよむへし。又。立秋の心をよむも難なし

秋といへはちきり置てやむすふらんあさちかはらのけさのしら露　惠慶

山さとは庭のむらくさうらかれてせみのなくねも秋めきにけり　清輔

吹かへすまくすかはらのあき風もうらみそへたるさをしかのこゑ　宗尊

荻のはにむすひや置し風の音身にしむ秋の露のちきりを　同

さひしさも哀もいかにしのへとて秋のきぬらむ淺茅生の宿　同

初秋曉露　夏と秋と行かふかせやすきぬらし露ちりそむるしのゝめのみち　雅經

岡初秋　岡へなるわさ田の末におとたてゝまつほにいつる秋のはつかせ　雅親

海辺初秋　波によるみるめに秋はなけれとも松におとそふうらかせそふく　宗尊

泉辺初秋　松かけの水のしらいと秋くれはむすはぬさきに風そ涼しき　顯廣

早秋　秋たちてことそともなくかなしきは荻の葉そよく夕暮の空　長方

早秋風　夕すゝみなれしこかけにふきそめて間し袖とふ秋のはつかせ　雅親

山家早秋　山さとはいとゝあはれそまさりけるいくかもあらぬ秋のけしきに　雅　兼

○殘暑　秋に成ても。炎熱のいまたやまさる心をよむへし。秋あさき日かけに夏はのこれ共くるゝまかきは荻のうは風と。前大僧正慈鎭のよみ給へるにならふへし

殘暑　あきはまたてる日もつよくふくかせの身にしむへくもあらぬ空哉　正　徹

○早涼(サウリヤウ)　早涼至(ル)　いつれも。秋になりてほとなくすゝしく成たる心をよむへし

早涼至　身にとほるほとこそなけれうす衣袖の日かけをはらふ秋かせ　正　徹

早涼知秋　袖にむかふかせより秋のこゝろにていつかすゝしきみかつきのかけ　雅　親

○七夕(シツセキ)　俗これをあやまりて。たなはたとよめるより。女七夕(メタナハタ)。男七夕(ヲタナハタ)なといふこと皆ひか心え也。万葉十二に。七夕耳相とかきて。なぬかのみあふとよむにてもしるへし。たなはたとは織女の一名にて。万十にも。則。織女をたなはたとよみ。又。棚機ともかきて。一たひも七夕をたなはたとよめる所なし。もと織女といふより。棚機とも名つけたるなるへし。但。棚機は架のある機にて。俗には高機となり哥には。星合の影。星合の空。棚はたの行合の空。彦星の妻まつよひ。空穗物語に。天河うかへる星なともよめり○万又(ママ)一にたなはたつめとあるは。つは。天つ。國つの類にて。唯たなはた女といふ也。たなはた妻なりと云はあやまり也。○神代紀下(ノ)(ニ)。阿妹奈屢夜(アモナルヤ)。乙登多奈婆多廼(オトタナハタノ)。汙奈餓勢屢(ウナカセル)とあるは。在(レ)天(アルアメニ)織女と云也。おとは愛する詞也。又藻塩草に。七姫(秋さし姫　糸おりひめ　薫姫　あさかほ姫　さゝかに姫　かちかはひめ　百子姫)の名あれと何よりおこれるにか詳ならねは。哥には皆よむへからす○ひこ星とは。万葉。又もろこしにても。牽牛といひ。或は河鼓ともいひて。俗に云犬かひ星也。彦とは。佐保彦。立田彦山彦なとのことく。男の称也。月令廣義曰(ニ)。焦林大斗記に。天河の西に星あり。煌ゝとして參(星名)とともに出。これを牽牛と云。天河の東に星あり。微ゝとして氐(星名)の下に出。これを織女と云。世にいはゆる婁星なりとみゆ○ひこ星は形  織女は形  かくのことし○詩經に睆ゝ彼(タルノ)牽牛。跂(タル)彼織女。又。睆(タルノ)彼牽牛。不(ニ)以服箱(テセ)。終日七襄(ス)。又曰。跂(タルノ)彼織女。終日七襄(ス)。又夏小正にいふ。七月初昏(ニ)。織

女正向レ東。これらより。後人此事を附會しけるにや○齊階記曰。天河の東に織女あり。のち天帝の子機杼に勞役して。容理にいとまあらす。天帝その獨居をあはれみ。河西の牽牛の夫にあたふ。婚嫁して後。つひに女工をやむ。天帝いかりせめて。女を河東にうつし。たゝ一年に一たひ會せしむ○藻塩草に後成恩寺殿。鴉鷺記を引て。史記に。瓊に夫婦あり。夫を遊子といひ。婦を伯陽と云。夫は十六歳。婦は十二歳にて夫婦となり。暑文月にむかひて契をなし。伯陽九十九にて死す。或夜。鴉にのりて空を飛行す。遊子。ことになけきて。百三歳にて死し。天の星と成。烏にのりて天を飛行す。此ふたつの星。銀河を隔たり。帝釈。毎日此川にて水をあみ給ふ故に。水けかるとてわたる事をゆるさす。七月七日は。帝釈。華法堂にまいり給ひて水をあみ給はねは。わたることをゆるさる。これ年に一たひといへと。人にては一日一夜也。此時。烏鵲羽をならへて橋をなすとあり又續齊諧記曰。桂陽城の武丁。仙道あり。其弟にむかひて。七月七日織女河をわたる。諸仙こと／＼く宮にかへる。我もゆけは。爾と別るといふ。弟その故をとへは。しはらく牽牛にいたると。明日丁かありかを失ふ。謝肇か五雑俎に。牛女のこと。武丁か妄言。又は博物志に。漢の張騫と云人。槎にのりて天河にいたると云浪說よりおこれりと云〻○盧仝か詩に。擬牛与妓女不肯勤農業徒勞含淫思旦夕遙相望とつくれり○天の河。漢名。銀河。銀漢。天漢。天河なといふ。万葉にも。天河。天漢なとかけり。字彙云。天河は箕斗の二星の間にありて。其なかさ。天を竟すと。楊泉。物理論に。漢は水の精也。氣のはりて。精華上にうかひ。宛轉たる。これを。天河とも。雲漢とも云。衆星これに出と云〻。又枕草帋に。天の河は。此したにもある也とみゆ。これ。河内交野（枚方の北）にあり。即惟喬のみこかりし給ふ時。業平御供にてかりくらしたなはたつめにやとからむ天のかはらに我はきにけりとよめる時紀有常みこにかはりてかへし。ひとゝせに一たひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思。此こと。伊勢物語。古今等にみえたり○あまのかはらとよめるは。久かたのあまのかはらにぬえ鳥のうらなきましつともしきまてにと万第十にみゆ○天の川道とは。同　にあまのかはちをなつみてそくるとあり○天の河津は。同　にあまの川津に年そへにけるとあり○天の川かはととよめるは同　にあまのかは川門に立つわか戀し。又同十に。天川かはと八十ありとみゆ○天の川瀬。同集には

くよめり○天河八十瀬は同　にあまの河やそせ霧あひとよめり○天川やすのかはらは。神代紀下に。於天安河亦造打橋とあり。万第十にも。あまの河やすのかはらのありかよふ又天河やすのかはらのさたまりてとあり○出出の渡は同十に。やすのかはらにあり。かよふでゝのわたりとよめり。二星のいてゝしてあふわたりと云心に名つけゝるなるへし○こそのわたりは同巻に。天河こその渡とよめり○としの渡は一とせに一たひのわたりと云也○つまむかへ舟。つまよふ舟は。同十に。彦星の迎嬬舟。又牽牛嬬喚舟なとよめり○くほふねは同巻。七夕の哥に。具穂舟乃艫丹裳舳丹裳とあり。くほは窪の畀にて。舟は凹なる故。しか云なるへし○さを舟とは同巻同題に。ひこほしの川瀬をわたるさほ舟のとあり。たゝちいさき舟にてさはそへたるもしなるへし○かさゝきの橋は。淮南子曰烏鵲塡河成橋而渡織女。これより前の説ともゝおこれりとみゆ○紅葉のはしは。一の秋にあまの河もみちを橋にわたせはやたなはたつめの秋をしもまつとあり御抄に紅葉のはしはまことにあるにあらす。たとへは。あらましに云也。此御說によるへし。藻塩草に漢毛傳に。烏鵲の橋口紅羽をしき。二星の屋前風冷ゝと云。これは。牛女あかぬ別涙の紅。鵲の羽をそめたるを。あやまりて。葉とかけるにて。さてもみちの橋とは云也とある說は。不可用○たなはしわたすは。万第十に。天河たな橋わたすたなはたのとあり○うち橋は同巻に。天河うちはしわたすたなはたのとありて。かりそめにわたす橋と云義也。これは前に出せる。神代紀下の。やすの河のことよりよめるなるへし○玉橋は萬の第八に。玉はしわたしとあり。これより後世は。露の玉はしなとよせてよめり○乞巧菓(ママ)を俗に星祭といふこれなり。もろこしにて此夜隷すゝみていふ今茲孟秋。七夕。天女の孫。河皷に嬪せむとす。むかへて祠る者は幸にしてこれに巧をあたへて。褰拙をさり。手目開利に成て。組紝縫製。心に滯る事なし。これか爲に禱なりと云又周處か風土記に。七月七日夜庭を灑掃して几筵を施し。酒脯と時菓とを設け。香粉を。河皷織女に。散す。夜を守るも皆私願をいたすに。天漢の中のたゝしく淸き氣の五色にかゝやく時は。願の徵應也とてぬかつく或は富をこひ。壽をもとめ。子をねかふなとのたくひ。一人にひとつの願は。三年にして。かならす。そのしるしをうるとかや。二つの願はかなへすといへり○ねかひの糸は。柳宗元。乞巧文の中に。揷竹。垂綏とあり。朗詠に。竹竿頭上願絲長

とつくれるも。これによれり。又與地志に。梁武帝。層觀をおこし七夕には。宮人多くこれに登りて。穿レ針世に。これを穿針樓と云。又歳時記に。七夕に婦人綵縷をもて針の七の孔をとほし。巧を乞と云。又同記に。唐ノ宮中。七夕妃嬪おの〳〵。九孔の針に。五色の糸を執て。月にむかひ。これをうかてるものは。巧をうると云。これらをあはせて考るに。ねかひの糸も。その針にぬきつへき糸をは先竹なとにかけてそなへけるに事おこる成へし又天寶遺事に。此夜。蜘蛛を小合の中に閉て。曉にひらきみるに。絲網稀密なるを。巧をうるの候とす共みゆ。又江次第に。穿針のことあるは。雜の部。公事の所。乞巧奠の条に出す。其外。琴。笛。硯。薰物。扇なとをたむくる事も皆同条にくはし○糸をかす事も古今に。躬恒。たなはたにかしつる糸の打はへて年のをなかく戀やわたらんとあり○此夜。梶の葉を用ることは。ふるき世にはみえぬこと也。後世には。定家卿の。天の川とわたる舟のかちのはとよせ。家隆卿の。軒はの梶のとつ葉もなしなと。又は七葉の梶共よめり○梶の葉に哥をかくこと。これもふるき世には。みえす。かちは漢名楮にて。和漢ともに。紙は此木をもてすく也。されは。漢土にては。紙をは。やかて楮といへは。哥の道に。題二詩楮葉一なとつくれるを心えあやまりて。かちの葉に哥なとをかきそめむもはかりたし(ママ)○機をかすことは。空穗物語三にたなはたのあふよの露を秋ことに我から(ママ)機の玉かとそみると有○衣をかすことは月令廣義に。太液池の西に。漢の武帝の曝衣樓ありと云もろこしにては。七月七日。衣を曝す也。世說に。郝隆か腹中の書をさらし。晉ノ阮成大布の犢鼻を長竿にかけさらしけることとみゆ。これらにならひて。此日。庭にて衣をさらしけるか。上つ世。衣を人にかしたる事多き故に。此夜たなくる琴硯なとの類と心えて。後世。星にかすとあやまりつたへけるにや○たなはたの雲の衣とは。万葉十に棚機の雲の衣のかへる袖かもとあり○棚はたのいを機衣は。織女の五百機たてゝおり出せる衣なり。光吉朝臣のいな機に置や衣のたてぬきも乱てむすふ秋のしら露とあるは。內裏御會に。七夕露と云題の哥也。この哥。いを機の衣といふに打まかせてたなはたのことはりなしこれらは例としかたからん○たなはたのつきこひ衣は。耕雲千首によめり○天の羽衣は。新古今。大貳高遠。たな機のあまのはころも打かさねとあり○棚機の秋さり衣は万葉十に。たなはたの五百機たてゝおる布の秋さり衣とあり○天つなれとは。同卷

に。秋かせのふきたゝよはすしら雲はたなはたつめのあまつひれかもとあるより。千載にも。隆季卿。たなはたの天つひれふく秋かせにとあり○花のかつらは金葉に。師時。たなはたのあかぬ別のなみたにや花のかつらもつゆけかるらむとあり○草の露をとりて。硯の水とすること。家隆卿。草の上に露とるけさの玉つさに軒はの梶はもとつはもなしとよませ給へり。又藻塩草に。芋のはの露とることとあり。これは今もすること也○七草をたむくることは。たはむれて。七夕の數にあはせたるなるへし。但万葉集に秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花。又茅之花乎花葛花瞿麥之花姫部志。又藤袴朝貌之花とあるをみれは。これらよりおこれることゝみゆ○水かけ艸は万葉十に。天河水陰草の秋かせになひくをみれは時は來ぬらしとあるより。定家卿も。水かけくさの露の玉はしとよませ給へり。新後拾遺にみゆ○空穗三に。かくて七月七日に成ぬ。加茂川に御くしすましに大宮よりはしめ奉りて。こ君たちまて出給へり。加茂川のほとりに。さしきうちて。男君たちおはしまさふす。そのひ。せく。河原にまいれり。君たち御くしすましはてゝ。御琴しらへてたなはたに奉り給ふほとに。云々 これをみれは。古は此日。河原に出て。髮をあらひけるなるへし

## 七夕

ひこほしのあかぬわかれの涙ゆゑあまの河波たちやそふらむ　安法

あまのはらふりさけみれはたなはたのほしのやとりに霧たちわたる　經信

さよ更てしのふけしきのしるき哉霧たちかくすほしあひの空　守覺

天川水かけくさのゆふつゆにけふさへあやな袖なぬらしそ　同

けふはかりあまの河かせこゝろせよもみちのはしのとたえもそする　清輔

あまの川わたるこよひやたなはたのなか〳〵袖をしほらさらまし　頼輔

ひこほしのおもふこゝろはよふかくていかに明ぬるあまの戸ならむ　右京大夫行能

天河もみちのはしの秋かせにこそのわたりもうつろひそゆく　雅經

久かたのあまの羽ころもたまさかにきてもとまらぬ星合の空　慶運

七月七日　としことにまちもすこすもわひしきは秋のはしめのなぬか也けり　和泉式部

ひこほしのみけしのあやをいそくとてはたおるむしのこよひしもなく　俊頼

七月七夕　たなはたのあふよのかすをいたつらにすくす月日になすよしもかな　恵慶

七夕々　なか／＼にこの夕くれやたなはたのおもふこゝろをつくしはつらむ　小侍従

乞巧奠　たなはたにこよひたむけむよつのをの淸きしらへも雲井にそすむ　慶運

七夕木　おく露をけふたな機にかしは木の葉もりの神もたむけすらしも　称名院

七夕琴　かちのはにつゆの玉つささきたてゝかきなすこともそらにうくらむ　同

七夕墨　するすみのそのふちしろに秋かけてたえぬなぬかのかちのことの葉　為重卿

七夕柏　けふはまたみつのかしはのうらまてもとはてやたのむほしあひのそら　同

七夕床　まつよひのつゆの玉ゆかうちはらひ猶たなはたの袖やぬれなむ　同

七夕惜夜　たなはたのあふよはこよひ更にけりをしむなみたや露と置らむ　光経

七夕迎夜　天河中にありともたなはたの袖つくかるをえやはへたてむ　称名院

七夕後朝　たな機のかへるあしたのうき雲やあかぬおもひのけふりなるらん　覚性

七夕餘思　こゝろこそしつみはてぬれあまの川うきつのふねのかへさなれとも　親盛

七夕草花　年をへて名も久かたの月草にあらぬ契やほしあひのそら　称名院

七夕契　めくり來る一夜を年になすらへは別はしらしほしあひの空　同

七月八日　久かたのあまの河なみ明たてはぬれてやかへるくものはころも　雅兼

○荻（ヲギ）漢名同。随雅に。菼。乱。萑荻也とあり。但初生のほとを。菼といひ。やゝ立のひるを乱といひ秋になりて老たるを萑といふ皆荻にての別也○さゝら荻は。万第十四に。妹なろか（なろかはナルカ也）つかふ河泊豆のさゝらをきあしと一ことかたりよこともとあり。此さゝらは。小波をさゝら波。小石をさゝれ石なと云に同しく。小荻をいふ也○濱荻は同巻に。神かせのいせの濱荻をりふせて客宿やすらむ荒き濱辺にとあり。御抄幷童蒙抄に。伊勢國にては。芦を濱荻と云とあり。今考るに。万第十に。あしへなる荻のはさやき秋かせのとも。又前の同十四の。さゝら荻あしと一こととも つゝけたることく。荻は。芦あるあたりにも生て。しかもその良狀似たる草なれと。かならす別種なれはこそ。あしへなる荻とはよみことわられたれ。されと。田舍人ほと（ママ）は。つねにめなれても。詳にわかつことなく。荻をも芦と云。芦をも荻とあやまれるを聞て。やかて同物なりとさためられけむもはかりかたし○荻の葉。（荻の上葉とも）荻はら。庭の荻はら。軒はの荻。（源氏にもあり）軒の下荻。枕の下荻。露の下荻なとよめり。又多くは風をむすひてよめり荻の葉風荻吹風荻の上風荻の葉分荻の葉むけなとおほし○荻のともすりとは。葉と葉とのすれあふを云○さやくとは。万第十に。荻之葉佐夜藝とあり。此さやくは。荻の聲を云也。應神紀に。鑑鏘。仁徳紀に。寥亮。いつれもさやかとよめる。これ同し詞也。又神武紀に。聞喧擾之響焉とありて。注に。此云二左揶霓利奈離一とみゆるも同し詞にてさら〳〵なる音を云詞なるへし○そよくは。さやくの音便にてうつりなれる詞なるへし。六帖に。貫之。いつも聞風とはきけと荻の葉のそよく音にそ秋はきにけるとあり○荻のほに出るとは。宝治御百首に。高倉。いつも聞く荻のはそよく風の音もほに出て物は秋そかなしきとあり

荻

まつ人にあやまたれつゝ荻の葉のそよくにつけてしつこゝろなし　輔親

たそかれのをきの末こす秋かせは心つくしのしるへなりけり　行宗

夕されはまかきの荻にふく風のめにみえぬ秋をしる涙かな　土御門院

荻風

露ならぬ心を荻のうは風にさのみくたけて物おもふかな　宗尊

まかきなる荻の葉まては音たてゝしのふによはる軒の秋かせ　爲重

庭荻　すみの江のまつにたくひてひゝく也遠さとを野の荻のうはかせ　宗尊

○萩 漢名。隨軍茶。一名胡枝子。救荒本艸に。白花。紫花共にありといへり。いにしへは。萩をめつるも。花のみにかきらす。下葉のもみつるをも。枝もたはゝに置露なとをもてはやしける哥おほし。順か抄には。芳宜とのせ。万には芽子とかけり。又同集榛をはきとよめれと。猶胡枝子の假字也とも。又別物なりともいへり万第十をみるに。詠レ榛歌に。思子之衣将摺爾爾保比與 島之榛原 秋不立友とあり。此哥の上にては猶胡枝にて榛はかり字なるへし共みゆるを。同一に。二年壬寅太上天皇持統幸二參河國一時哥。引馬野ににほふ榛原入みたれ衣にほはせ旅のしるしにとあるは。續日本紀。文武天皇大寶二年冬十月なれは。其比まて。胡枝子のにほひみたれたることあるましけれは。榛は別物なるへきにや。但榛とは。はりの木とて。俗にはんの木と云物也○秋はきは。たゝ萩とよむにたかはす。万葉に。秋芽子。冷芽子なとかけり○糸萩は。枝ほそくしたりたる様を云○むら萩は。むらかり生たるを云。又万第八には。吾やとの一むら芽子を思ふまにともよめり○から萩は。和漢ともに未詳。もし。もろこしにて。天竺花といふ物にや。天竺花は。俗にみそ萩といふ草の種類也。みそはきは。もろこしにては。鼠尾草といふこれ也。又はこの鼠尾草にやすへてそのまことの物に似て。非なる物を。からといひつけたり。いはゆるから桃。からなてしこ王餘魚の類也○しら萩は。胡枝。天竺花ともにあり。又万第十にわかまちし白芽子さきぬとあるを。御抄には。しら萩と說おかせ給ふを。僧契沖は。白は。西方。秋の氣なれは。こゝも秋萩とよむへしといへり。此說もおかしけれと唯まのあたり胡枝花をよまむ時は。しら萩ともよみ出むには。此万葉の哥を證ともすへし○眞萩は。たゝ萩とよむに同し。眞はからの反にて。其稱類の中にも。よきをほめて眞といふ也。眞鳥。眞葛なと。皆同し義と知へし○もとあらの小萩は。万第二。又古今にも出 みやき野の本粗の小萩露をおもみ風を待こと君をこそまてとあり。但本荒ともかきて。下のまはらなる義也共。又古枝より花さきて。こはノヽしき也共云。曾丹集に。みやき野の焼生の萩の二葉よりもとあらにさかむ花をしそ思。これはふるえは焼て。新におひ出る萩を

いふにて。本新(アラタ)なりとの義也共いへり○小萩は。木の字にて。小の義にあらすといふは誤なり○古今に。秋はきのふるえにさける花みれはもとの心はわすれさりけりとある。此ふるえとは旧茎也。こその枝なから。葉もめくみ。花も咲を云○萩の下葉。又下葉もみつる。又下葉色つくなとよめり○枝もたはゝに置つゆとは。古今にをりてみはおちそしぬへき秋萩の枝もたはゝにおける白つゆとあり。たはゝはたは〱の畧にて。俗にもたはむと云詞也。万にも十尾(トヲヽ)なとあるも普通へるにて。たゝ同し詞なり○家隆卿。しらつゆの玉置しける秋萩とよみ。爲家卿は。萩の露をわきもこかかされる玉ともよみ給へり○萩の露風をまつとよむは。上のみやき野の哥より。おこれり○萩の下つゆ。又下葉の露、又萩の上の露とは。古今に。鳴わたる厂の涙や落つらん物思ふやとの萩の上の露とあり○萩の花を錦とみなしてよむ。つねの事也○萩か花すり。又袖の花摺なといふは。萩の花をもて。衣をすれるを云○はきのあそひとは。萩の咲たる野に出てあそふ也。万第十に。白つゆをとらはけぬへしいさことも露に爭而はきあそひせむとよめり。又はきの宴は。續日本後紀に。(承和元年八月)庚寅。上内二宴清涼殿一。号(ノ)曰(ク)二芳宜華讌一。又同紀。(同十一年)八月。天皇。御二紫宸殿一覽(ル)二芳宜花宴とあり○萩の戸は。大要抄曰。清涼殿の西。又菊の戸。五社百首注云。菊戸。萩戸同し。續千載。後京極。萩の戸の花の下なるみかは水やとせの秋の影そうつれるとあり○萩か花つまは。万第八に。家持卿の。吾岡にさをしかきなく先芽之花嬬問(ハナツマトヒニ)爾きなくさをしかとよみ給ふよりおこれり。又同九に。秋芽子を妻とふ(からすとふの類にていふのつまれる也)鹿こそひとつ子ふたつ子もたりといへとともよみ。又同(ママ)に。花やをしかの妻ならむなとあるは。いつれもまことの鹿のつま也といふにはあらす。たゝ鹿の妻こひする比。たをやかに咲出る花なる故に。おのつから。鹿のそのあたりをたちさらねは。萩の花はをしかのつまよとおもひなし。よみなしたる也。しかるに。寶治二年百首に。正三位知家卿。(又云蓮性法師)人はこぬ草葉のつゆの床の上にかたしきねたる萩か花つまと。全く鹿をは。萩か花つまとし給へる。いといはれなし○さをしかのしからみふする共。しからみふせてなく鹿なとあるは。鹿のふみしたくさま也○野なとにさける萩をは。鹿のねなからうつさむともねかひ。又源氏には。しかのねそはぬなともよめり

**萩散二潺湲(センエン)一**

拾玉には。花影の水にうつるをもよまれたれと。萩のちりうかへる心をつねとすへし

**秋心寄萩**

(秋情ーーとも) 秋の哀

を。萩に託する心也

萩　人もみぬかくれのを野に咲萩はこれこそよるのにしきなりけれ　顯季

うつら鳴こはきかもとを打みれはけふこそ花のさかり也けれ　大貳

はきか花おもけにみゆる露はかりちらさむ風はさもあらはあれ　小侍從

萩か花おもけにみゆる露はかりちらさむ風はさもあらはあれ　小侍從

しめ野ゆきむらさき野ゆき秋萩の花にしほるゝ袖そ色こき　宗[illegible]

宮城野の木下露もみえわかすもとあらの萩のちりのまかひに　慶運

萩露　宮城野のこのしたかせや過ぬらん露におくるゝ秋はきのはな　隆祐

なきわたるかりのなみたと置つゆといつれかそむる野への萩はら　光經

萩上露　つまこふる鹿のなみたか秋はきにこほれぬ斗おけるしら露　基俊

野亭萩露　まはきちるのへの夕つゆ身にしみてかり庵さむき秋かせそふく　雅親

庭萩　かせならてつゆもちらさし秋はきの花のあたりはあさきよめすな　顯廣

ともすれはしからむ鹿のなきのみやのへにかはれるやとのむら萩　賴政

水邊萩　風ふけは萩の葉末に水こえてえもいは波のみきはをそみる　俊賴

○女郎花(ヲミナヘシ)　漢名敗醬也。もろこしにて。女郎花と云は木蓮花也。順か抄には。をみなへしの漢名を出されす。ちめくさといふを。漢名敗醬とかゝれたり。此ちめくさ。いかなる草ともしらねは。これと同しきや。いなやも定めかたし。万葉四に。娘子部四同七に。姫押。同八に。姫部志。娘部志。同十に。美人部師。同十一に　美妾。新撰万葉にも。女倍芝なとのみありて。漢名を用たる

所なし。大かた女郎といふより。女にとりなしてよめり。但。おとこのよまむは。いかやうによむとも難なけれと。女房の此題をよまむには。みつからも。女なれは。女にたとへてよむうちにも。心あるへきことゝ亡父成章つねに申き○花色如蒸粟俗呼爲女郎聞名戯欲帮偕老却悪嚢翁首似霜と朗詠に源順か詩なり○古今秋。遍昭僧正。なにめてゝをれる斗そ女郎花われ落にきとひとにかたるな。此哥。家集には。さう〳〵しう侍しかは。馬にのりて。物にまかりし道に。女郎花のみえしを。及ひて折しほとに。馬より落てふしなからとあり。落にきは馬より落たるなれと。墮落（ダラク）のことにかけてよめるなり○花も一時とは。同集俳諧に。秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時とあり。又遍昭の哥也。あまりにさやうにないひそ。花も只さかりは一時の程そと云にて。女のかたちよきは。こゝかしこより心をかけて。かまひすしく人ゝいひさわくも。後はおとろふれはしかよめる也○女郎花うしろめたしとは。同集秋。敏行朝臣の。女郎花うしろめたくそ行過る男山にしたてりと思へはとあり。男女ひと所にあれは。氣つかはしと也。○後撰秋に。をるからに我名はたちぬ女郎花いさ同しくは花ゝにみむとあるは。只一枝をりても名のたては。いさ咲てある女郎花ことに折てみむと也。これも猶。女にしてよめり○女は几帳屛風なとにかくれて。あらはには人にみゆましき物なれは。古今秋に。人のみることやくるしき女郎花秋霧にしも立かくるらんとよめり○同俳諧に。花とみてをらんとすれは女郎花うたゝあるさまのうたゝはうたてにて里言エシレモナイと云詞なり名にこそありけれとあるは。只花と思へと。女の名をかうふれゝは。憚て。手ふれにくしと也○同序に。女郎花の一時をくねるといふは。女は。物事。ひとかたに思ひ定むることなけれは也○古今秋に。女郎花はなの袂。又をみなへし名をむつましみ。後撰に。花の心のあたなれはなと。すへて女のさまにとりなしてよめる。猶多けれと。しはらくこゝに畧す○まかきを花のまくらとは七秋に。吹かせにをれふしぬれはをみなへし笆そ花の枕なりけるとあり

女郎花

あたし野のたねとはみれとをみなへしうつろひかたき花のいろかな　輔親

ふくかせにたくひてなひくをみなへしたはるゝさまに人やみるらむ　安法

をみなへしあはぬあまりに袖ふれて花の名をりと人にみえぬる　俊頼

露にねて風にはすまふをみなへしなとひとつ野に片思なる　　覺性

色にいてゝまたきうつろふ女郎花たか秋かせになひきそめけむ　　雅經

かりそめのちきりはうきを女郎花草のまくらに何にほふらむ　　宗尊

野女郎花

今はたゝをらてや見ましをみなへしなひくさか野の風にまかせて　　爲重

籬女郎花

われならぬ人もこそをれ女郎花こほれないてそ竹のまかきに　　顯廣

○薄（スヽキ）　漢名芒。万葉には。旗須爲寸（ハタスヽキ）。細竹爲酢寸（シノスヽキ）。波奈須爲寸（ハナスヽキ）なと。猶さま〳〵みえたり○はたすゝきは。神功紀に。幡荻穗出（ホニイツル）吾也。万葉一。長哥　旗須爲寸しのをおしなみ草枕。又十に。吾妹兒（イモ）尓（ニ）相坂山之皮爲酢寸穗（ハタヽスヽキホ）庭開不出戀渡（ニハサキイテスワタルカモ）鴨なとあり。能因法師は。籏をさゝけたるやうなる也と云童蒙抄に篠すゝきをいふ。されはしのとつゝくる也とあるは。誤なるへし。今按。はたは。紀にも。順か抄にも。鰭をはたと訓して。物外にはり出たる義なれは。はた薄も。穗の出るさまをもて。はたとは名つくるにて。薄の一種にはあらさるへし○花薄は。万葉八に。めつらしき君か家なる波奈須爲寸（ハナスヽキ）穗にいつる秋のすくらくをしもと云歌のみありて。集中に又なけれは。はなは。はたにて。此集。太を奈と書誤れるにや。これは万葉の比までをいふ也。又奈良より以後につきていはゝ。新撰万葉。撰集なとをはしめて。花薄とよめる哥數をしらす。されは。たゝ穗を花といひけるにやとも。おほゆ○尾花は。漢名芒花にて。薄の穗はかりを云也。されは。万葉十に。人丸。さをしかの入野の薄はつを花とかさねてよみ。又同巻に。同人。乎花之末乎秋跡者将言（ヲハナカスヱヲアキトハイハン）なとあるにて知へし○しの薄は。同巻に。多く細竹爲酢寸（シノスヽキ）とかゝれたり。これは。其葉小竹に似たるゆゑなり。或説に。しの薄は。穗に出さる物といふは。同巻の哥。おほく。穗に出すとよめるをもていはれたれど。これは。薄のほにいつるといふ事あるにたよりて。人に忍ふ事を言（コト）に出さゝるをそへていはむとて。ほには咲出さるよしをよめる迄也。もとよりほに出さる物をかりて。いふにあらさるは。永久四年七月。忠隆家哥合に。藤原阿親。いつしかとしのた

のもりのしのすゝきひもとく秋になりにける哉とよめるをもてもしるへし○しのゝを薄。同上をは小にて。すへてちいさき物につくる助字也○すぐろの薄は。顯昭か抄云。やけ野のすゝきの末くろき也。すゑのゑもしをはぶきて。すぐろとはいふ也。基俊家集に。あはつ野のすぐろの薄つのくめは冬たちなつむ駒もいはゆるとあり○糸すゝきは。その葉ほそくて。糸に似たるを云○ますほの薄は。穗の狀眞苧に似たれはしかいふとも穗の色眞蘇枋なる故云とも兩說あり○初穗の薄は。はしめて穗に出たる也○初尾花同上○初花薄は。建長五年。百首歌合に。後九條内府よみ給へと。不好詞也○しらゆふを花は。柿本影供百首に。同公よみ給へり。これも好ましからす○一むら薄とは。古今に。君か植し一むらすゝき虫のねのしけき野へとも成にける哉とあり○一もと薄は。たゝ一本もとある也○人まねく。まねく袂。まねく袖なとよむは。穗の風になひくか。人の手をあけてまねくに似たれは也

薄

花すゝきなひかさりせはいかにして秋の野かせのかたをしらまし　行宗

はなすゝきまそほのいとをくりかけてたえすも人をまねきつる哉　俊頼

秋かせに色に出にけりはなすゝきかはかり露はむすひおけとも　基俊

すかるふすくるすのをのゝいと薄まそほの色に露や染らん　長方

花　薄

まかきよりほに出てみゆるはなすゝきたかふみむすふ枝となるらん　安法

行路薄

花すゝきわけゆくまゝの道のへにかへるともなき袖のあきかせ　爲重

薄當路滋

はなすゝきしけみかなかを分ゆけはたもとをこえてうつらたつなり　俊惠

野徑薄

たひ人のたえすいく野の花すゝきみたれやすらんわくる袂に　爲忠

原　薄

露にふすあしたのはらの花すゝきまた敷たへの袖かとそみる　宗尊

○淺茅（アサチ）これを。秋の題としもするは。秋は。葉色つき。花ちり。露すかりなとして。おかしけれは。いにしへより。多く秋に

よめれは也。春夏冬にもよめることつねなれと。風情おかしき頃なるか上に。秋よめる例の多きに隨て。なれは疑へからす。但。組題の中に秋の題に出されたらは。秋の風情をむすひてよむへし。今考るに。ちは。漢名白茅也順か抄に。茅。和名智といへり。同抄曰。大淸經云。茅。一名白羽草とあれと。白羽草未詳。哥にはちともよむ中に。多くは淺茅とよめり。淺茅の淺の字そひたる心は。此茅。たけみしかく。ふかゝらぬ草なれは。草をふかし。あさしなと云ゆゑに。さてあさちとは云也。あさちふ。ふは生たるなり あさち原。あさちか原。あさち野。好忠三百六十首中 ちはら。あさちか上。淺茅かもとあさちたつ庭。六百番哥合 寂蓮 其外行秋も末葉の淺茅。爲家卿文永十年毎日一首中 なひく淺茅なと多くよみつけたり○つはな。つち通ひて茅の花也 淺茅か花なとよめり。花とは。茅の穗を云。万葉に。つはなぬくと春によみたるより。匡房卿。衣笠内府。西行上人なとも。春によみ給へり。又堀川百首に。公実卿。つはなましりの菫の。み(ママ)し共よみ給ふ。茅の穗に出るは春也。又万第八に。秋はきは咲ぬへからし吾やとの淺茅か花のちり行みれはとあるをみれは。春出たる穗の。秋に至りてちる故なり。されはつはなの咲は春にて。ちるは秋と定むへし。但(シ)たゝつはな共。淺茅か花共よむは。春秋にかよはしよみて難なし○後みむためにしめゆふとは。万七山たかみ夕日かくれのあさちはら後みむためにしめゆはましをと人丸の哥也○あさちの色つくとは。新古今。人丸。矢田の野にあさち色つくあらち山みねのあは雪さむくそあるらしとあり。又此哥より。あらち小麓(ママ)の淺茅共よめり○色ことになるとは。一の戀四。秋風になひく淺茅の色ことになるとあり○あさち原とさまかくさまとは万第三。家持卿。淺茅原とさまかくさま物思へはとあり。かた〳〵にみたれ靡くをもていふなるへし。曲(トサマカクサマ)々とかけり○君に似るとは。万第七に。君に似る草とみるより我しめし野山の淺茅とあり詩衞風云手如二柔荑一とあるかつはなの白くうるはしきを女にたとへたる也。此万葉の哥は。秋色つけるを女の紅顏にたとへたる也

淺　茅

消やすき露のかきりをたつぬれは淺ちかはらの秋のゆふくれ

鴨長(ママ)

あれにけりたかつの宮のあさちはら猗玉しきのむらさめの露

○刈萱（カルカヤ） 順抄云。萱。和名。加夜とあり。今按。漢名茅にて。俗にちかやと云。これ也。もと。かるかやと云ことは。万第四に我かるかやのとよめるのみ見えて。皆たゝかやとのみよめり。六帖にも。かや野とよみ。堀川百首に。國信。たがかるかやそとよみ。順徳院御集に。苅萱の題に。岡のへのかやか下葉とよませ給へるなとをみれは。只かやとのみよむへう（ママ）を。前の万葉の哥により。又秋は萱のたけたかく生ひろこり。所せく成ゆけは。必かりとるへけれは。つひに体に言なして。中昔の比より。やかて名のやうにはなれるなるへし○ねしろたかかやは。万第十四。川かみの禰（ママ）自路多（ジロタ）の我夜（カヤ）あやに／＼さね／＼てこそことにてにしかとあり。これは川辺にあるが。水のかゝりて。根のしろくあらはね□のたるかやは丈（タケ）高きを云也。あやに／＼は。里言メツタニ。又ナセニヤラなと云心也。一二の句は。さね／＼てといはむ爲にて。萱のみたれて。をれふしやすき物なれは。人の寝るにかけてかうふらせたる也○さねかやは。同巻に。岡によせ。わかかるかやのさねかやのまことなこやはねろとへなかもとあり。これも人の寝るにかけて。をれふしたる萱を○（ママ）かる。上の哥にても思ふへし。これ又ねろといはむ爲に。さね萱とはよめり。ねろは只寝と云也○しとろもとろは。六帖に。まめなれとよき名もたゝすかるかやのいさみたれなむしとろもとろにとありしところは。しなへたをやく心。もとろは。戻にて。さま／＼に葉のをれかへりなとしたるさま也ねろはねよにて東の方言万第四に夜の程を夜のほとろと（ママ）ころは助字○七日苅とは。六帖に。七日かる萱は我身の上なれや人に思をつけてやみぬるとあり。同帖に。貫之。夏はらへに。いかにほせはかなぬかひさらむとよめるかことく。七日は只おほかたに云にて。多くの日數かゝりて苅たる萱の心也。おもひをつくるとは。火をかけて。此萱を焼心によめり○みたるゝとは。古今俳諧に。まめなれと何そはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなしなとありて。苅萱の詮とよむ詞也○つかねをとは。萱を束ぬる緒也。苅とらぬほとにもよめれと。猶先つかね置て。つひに苅とらむのまうけ也。これ又みたれふしやすきか故也○かる萱をつかのまもなくとは。堀川百首に師時の哥あり。これはつかぬる間もなきと云を。しはしも乱ぬ間なきにかけて云也。○野。岡のへ。庭。まかきなとによみつけたり。又かや。下葉。又末葉みたるゝなともよめり

苅萱　山かけやくれぬとおもへはかるかやの下おく露はまたき色哉　土御門院

もゝくさのませゆふ庭もかるかやは葉におく露そ猶みたれける　雅親

まくらにもかるかや人の引むすひあとみたれたる野へのあさつゆ　同

風前苅萱　さらぬたにしとろにみゆるかるかやをいとゝもみたす秋のゆふかせ　爲盛

よのつねは何かるかやの秋かせにふきかへされてみたれかちなる　頼政

○蘭(フチハカマ)　漢名蘭草。順抄云。布知波賀。(ママ)万。新撰萬葉集。用二藤袴(ノ)二字(ヲ)一とあり。上つ世にてはみぬ人のそのかにゝほふ。むへも色こくなと。あまたよみたれと。今は。古今敏行朝臣の。何人かきてぬきかけし藤袴くる秋ことに野へをにほはす。又同素性法師。ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたかぬきかけし藤袴そも。これらを本として。袴によせある詞を上下にたちいれてよむへし。ほころふ。にほふなとよみつけたり○安康紀に云大中(ナカツノ)姫命。いまた皇后に立給はさる時。御母にしたかひ。家にいまして。ひとり苑(ソノ)の中にあそひ給ひたるを。闘鶏(ツケノ)國造(ツクリ)馬にのりてそのほとりを行て。まかきにのそみ。大中姫をあさけりていへらく。よくそのをつくれる汝者(ナヒト)や。かついへらく。いて戸母(トジ)。その蘭一茎(アラヽキモト)をあたへよ。姫一もとの蘭をとりてやりて。蘭をもとめては何にかするととはせ給へは。答て曰。山を行に蠛(マクナキ)をはらふ也と。姫その礼なきをわすれす。皇后になり給へる年。かの蘭を乞し者をめして。昔の罪をかそへてころさむとし給ふ。此者地にぬかつきて。臣の罪まことに死すへしとはいへと。そのかみは。いさやけふの尊をしらすと歎けれは。死をゆるして。その姓をおとして稲置(イナキ)といへり

蘭　きてみれは野ことににほふ蘭たかうつり香そなつかしき哉　行宗

むさし野の草のゆかりのふちはかまぬしこそしらね色はむつまし　雅経

ふちはかまきつゝなれゆくたひ人のすそ野のはらけは(ママ)にかせそふく　土御門(ママ)

松かえに春はみし名のふちはかまおなしこかけにほふいろかな　雅親

雨後蘭　藤はかましほるはかりに成にけりしくれやしつゐ野はら篠はら　顯廣

きてみれは雨にぬれけりふちはかま露にはかゝるけしきこそせね　頼政

○草香　秋花さきて香ある草は。何にてもよむへし

○草花　これも。秋さく花は皆よむへし。萩。女郎花。葛花。月草。蘭。花薄（をはな共又ほにいつる薄ともよめり）又たゝ。秋の野の花。千くさの花。もゝくさの花なともよみつけたり。但野にも。庭にもよめり。

秋花　心得同上

草花　その色とおもひもわかす花といへは秋の野ことにちるこゝろかな　登蓮

あきの野はこほれぬ露にしるき哉花みるひともまたこさりけり　清輔

染いたす野への錦のいろ／＼にかへりてうつる秋のしら露　雅有

身にしみて袖にもつゆのこほるゝは花になみよるあきのゆふかせ　頼輔

むさし野のしけみにましるをみなへしこもりしつまのこゝちこそすれ　忠盛

うすくこき千くさの花のうつろへは花そかへりて露をそめける　雅有

草花始開　（校者云歌ナシ）

草花待露開　しらつゆやあたにむすひしふちはかまうちおくほとにほころひにけり　俊惠

草花告秋　ことにいてゝつくとはなしにいはれ野のこはきか色に秋をしるかな　行宗

近對草花　秋山のふもとをしむる家ゐにはすゑ野のはきそまかきなりける　伊家

雨中草花　むらさめに玉ゐぬ萩そなかりけるいつくに露のおかむとすらむ　親盛

雨ふれはおもひこそやれ露をたにおもけにみえしまのゝむら萩　顯季

草花露　まねくかとみれはま袖におく露をはらひてたてるをみなへしかな　爲重

朝艸花　このまよりさすや岡へのあさ日かけうつろふ露ににほふはきはら　雅經

夕見艸花　ゆふつくよしはしほのめけさきそむるこはきか花の數もかそへむ　俊惠

野草花　山かけのを野の秋はきみる人のなくてさかりのすきぬへきかな　爲重

草花廻水　秋の野をうつせるやとの池なれはきしのまゝにそ花はにほへる　國基

水上艸花　夕まくれみきはにたてるをみなへし波のよるこそうしろめたけれ　頼輔

草花靡風　花すゝき草のたもとの露ちりて手たまもゆらに秌かせそ吹　慶運

秋花非一　いつれとかおもひわくへき秋の野のちくさの花にとまるこゝろは　爲仲

秋花催興　あきはなほ鹿のねきかぬゆふへたに袖に露おく庭の萩はら　光經

前栽秋花　わかやとは花のやとりとなりにけり野へのあるしと人やみるらん　頼実

野　花　かへるさはいそかれぬかな花のかの日をへてかはる野へにきつれは　同

移野花　秋くれはのはらの萩をませの内に露もおとさすうつしてそみる　雅兼

野花隨風　さためなき秋の野かせになひきつゝかたみにまねくはなすゝきかな　尾張

野花秋久　うつしうゝるけふより後のゆく末のかすもしられぬ野への秋はき　爲仲

○

## 秋野

秋の野のさまはひろく何にてもよむへし

秋　野　いはれ野の花の千くさの香をひとりさそひてすくる野への夕かせ　俊惠

さをしかのいる野の尾花ほにいてゝ妻とふくれにあきかせそふく　雅經

秋野眺望　しめゆはぬ霧のまかきのこはきはらまたあかなくに日もくれにけり　頼実

○［槿］漢名牽牛花。いはゆる花朶如鼓子花。碧色。日出て開。日西して萎と云物也。順抄に。阿佐加保。九人取之牽牛易薬故以名之とありて。漢名を牽牛子とかけり。今考るに。牽牛子はあさかほの実也。古今物名に。けにこしとあるこれ也。又ふるく題に。槿の字を用きたれ共。これはむくけにて。別種也。此槿の花も。いともろくうつろふ物なれは。白居易も。槿花一日自為栄とつくれる句を。朗詠にもあさかほの所にのせ哥の題にも槿一日栄と。此句をつゝめて用られたるも。すへてその花のさまの槿と。牽牛花と相似たる故也。又俗に蕣の字を用ゆれと。これも別種也。文字集畧云。蕣地蓮花。和名。木波知春と。順抄にみえたり。但あさかほは。彼かほ鳥。かほ花なと云かことく。朝にかほよしと云義也。万葉に。朝貌。朝杲なとかけるは。皆假字也。今題詠には。日かけをもまたす。もろくしほむさまを。詮とよむ也。又露にかゝれるとも。又人の朝の顔にたとへても。よめり。むかしは。おほつかなたれとかしらむ。秋きりの絶まにみゆる朝かほの花。又あさかほの朝露おきて咲といへと。夕かけにこそ咲まさりけれなとよめり

槿　みちのへのたちかくれなき朝皃をねたしや人はいかゝ見るらむ　行宗
つれもなくうき世をすくす心をやもとかしとみるあさかほのはな　親盛
色かへぬ竹のまかきのあさかほをおのれはあたの花にそありける　土御門院
はかなしと何かはいはむよの中はかくこそありけれ朝皃のはな　宗尊
朝かほのかゝる笆のなよたけはおのか花とや人にみすらん　覚性

戸外槿　松の戸のときはのかけはしはし猶あさひかくれにのこるあさかほ　雅親

籬槿　花みむと思はぬ柴のまかきをもうつむはかりにさける朝かほ　同

墻根槿　あさかほはかきねの竹にまとはれてうきよをえこそはなれさりけり　仲正

○［小鷹狩］爾雅云。秋獵為獮。郭璞注云。獮為順殺氣。六帖に。大たか狩を冬とし。小鷹狩を秋とす。詞なとは。冬部。鷹狩

の所にてみるへし

○露　漢名同上。大戴礼云。露陰陽之氣也。夫陰氣勝則凝爲霜雪陽氣勝則散爲雨露。又月令云。涼風至白露降。いにしへより。四季にわたりてよむ事。今もかはることなけれと。秋を詮とせり。しら露。あかつき露。朝露。夕つゆ。萩の上の露萩の下つゆとも稍葉のつゆ。しはふの露。あさちか露なと。さま〳〵によめり。又おく。きゆる。むすふ置に同おつる。みたるゝ。かはかぬ。もろき。ちる。しけきなと。皆露によみつけたり但露むすふとは。秋ならてもよみ。露吹むすふとは。秋にかきるへし○露けきとは。けは。こに通ひて。濃の心なれは。只しけき義也○葉のほる露とは。葉のもとにむすへる露の。おのつから。葉の末にのほるをいふ。○衣手に置。袖に置なとはまことに。露にぬれたるをも。又涙をも。そへていへり○玉とまかひてよめるは。伊勢物語に。しら玉か何そと人のとひし時。康秀か。つらぬきとめぬ玉そちりける。猶玉とみるまて。玉にぬく。草の葉なとにかゝれる露の玉をつらぬきたるか如くなる也なとよめり○あた物とは。古今に。いのちやは何そは露のあた物をとあり。もろき故にかくいふ也○千くさにそむる。又色はひとつをなといふは。古今に。敏行朝臣しら露の色はひとつをいかにしてのへのこの葉をちゝにそむらんとあり○枝もとを〳〵。又たはゝ共いふは。露のふかくして。枝なとのたはむさま也○木下露とは。催馬楽に。みさふらひみかさと申せ宮城野のこのした露は雨にまされりとありされは。宮城野にかきりて。雨にまさるなとよむ也○笹わけし袖とは。古今に。秋の野の笹分しあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりける。本句は露。末句は涙。ふたつなから。かくしてよめり○露。又露のま。又露はかりなと。もと露のもろくはかなきより出たる詞にて。すこし又。しはしの間。又すこしはかりなといふ心也。又露の身。露の命。露かゝりきとなとも。皆此心なり○我うへにおく露とは。古今雑上に。我うへに露そ置なる天川とわたる舟のかいのしつくかとあり。これは。貴人なとにめされて。酒なとたまひけるを。かくよめるにや

露　ひろへとも袖のみぬれてとまらぬは玉とみえつる露にそありける　惠慶

玉かとてとれはきえぬるしらつゆを置なからこそみるへかりけれ　和泉式部

さゝかにのすかく淺茅の末ことにみたれてぬける白露の玉　長能

かせかよふよもきかもとの苔の庭露もしつくもわかれさりけり　宗尊

朝露　おきてうきこよひの夢のなこりかはあしたのとこの秋のしらつゆ　同

秋夕露　なくしかのなみたにまかふゆふへ哉おのかすむ野の秋のしらつゆ　光經

庭露　庭もせに咲すさひたる月くさの花にかゝれる露のしらたま　俊頼

袖露　こゝろなき草木はさそなはらふたにたもとにあまるあきの夕つゆ　慶運

草上露　何ことにおもひきゆらむ朝露のうきわか身たにあれはある世に　基俊

曉露點萩　なつかしき色はかりかはこはきはら露もうは葉にありあけの月　覺性

叢露似玉　朝ことのくさ葉の露とみる物をわすれておける玉かとそおもふ　相模

○虫

漢名。蟲。但虫又何虫又虫何なと云題にては。只虫とも。又蛬。促織。松虫。鈴虫。轡虫なとをもよむへし。王仁裕開元天宝遺事曰。毎至秋時。宮中妃嬪輩。競以小金籠。捉蟋蟀閉於籠中置之枕函畔夜聽其声。庶民之家。皆效之。又高僧傳曰道貴聞蟋蟀曰。時聞此声足代蕭管云〻　本邦にても。昔より。虫のねをもてはやしたり。又その品をわかち。さま〳〵に名つけられたり。順か抄に。いへらく。はたおりは。促雞。又絡緯なり。いねつきは。斯螽。又蚣蝑。又蟿螽。又舂黍なり。きり〳〵すは。蛬又蟋蟀なりと載られ。たれと。いとくはしからず。今考る所下。にくはし○きり〳〵すは。陸機詩。義疏に。似蝗而小。正黒。有光澤如漆。有翅及角。善跳好闘立秋後則夜鳴といへる物也。俗にいとゝといへり。古今につゝりさせてふきり〳〵すなくとあるを。一説にさせは。蛬の一名といへれと。誤にて。蛬の聲のさ聞なさるゝ也。新撰万葉に。蛬　己歟綴砥木之葉緒曾刺ともあり。易通繫卦蟋蟀之蟲。隨陰迎陽居壁向外趣婦女織績女工ともいへり。宇穗物語に。ゆきまさと

いふ人涙のかゝりたる。袖をとり。はなちてあて君につかはしけるに。蛬ものうけなる御袖かなとて。かへし給ふとあり。これもものうくて。つゝりもさゝぬ心にいへり○題に。蛬思とあるは。樂天か句に。霜草欲レ枯虫思苦とあるなとより。おこれるなるへし。此題を。爲氏鄕。(ママ)蛬おもひのほとを鳴ねにそしる。又此題ならても。續千載に。爲家卿。きり〳〵すおもふ心をいかにとも。玉葉に。爲敎鄕。(ママ)蛬おもふ心はかよひしもせしなとよみ給へり○捜神記曰。朽葦爲レ蛬とあり○詩周南に。螽斯羽詵〻兮又時珍曰。𧒂螽。一名負蠜。江東呼爲二蚱蜢一。又云。在二草上一者曰二草螽一。在二土中一者曰二土螽一。似二草螽一。大者曰二螽斯一。似二螽斯一而細長者曰二蟿螽一又云。皆類レ蝗而大小不レ一。長角脩股善跳有二青黑斑數色一。亦能害レ稼。五月動レ股作レ声。至レ冬入二土穴中一これ。まことのはたおりにて。俗にきり〳〵す。又ぎすなと云物也。詩豳風に。五月斯螽動レ股六月莎雞振レ羽。七月在レ野。八月在レ宇。九月在レ戶。十月蟋蟀入二我床下一。朱善注云。斯螽。莎雞。蟋蟀。一物。隨レ時變化而異二其名一と云は。あやまれり。微玄衍義に。斯螽蝗也。莎雞促織也。蟋蟀。蛩。又王孫。又蜻蛚也といへるも。斯螽と。促織とを。二物にしたること。いまたくはしからねは。皆用へからす。○新撰万葉に。促織乃管子纏音之切〻砥爲とよめり○方言曰。王孫卽趣レ織也とあり○まつむしは。漢名未レ詳。おほく人をまつによせ。眞の松にかけなとしてよめり○源氏すゝむしの卷に。秋のむしの聲。いつれとなき中に。松虫のなん。すくれたるとて。中宮の。はるけき野へを分て。いとわさとたつねとりつゝ。はなたせたまへる。しるくなきつたふるこそすくなかなれ。名にはたかひて。命の程はかなき虫にそあるへき。心にまかせて。人きかぬおく山。はるけき野の松はらに。聲をしまぬも。いとへたて心ある虫になんありけるとあり○鈴虫も。漢名詳ならす。もし陳扶揺か花鏡云。金鐘兒似二促織一身黑不レ長。銳レ前豐レ後。其尾。皆岐以躍爲レ飛。以レ翼鼓鳴。其声則磴稜〻如二小鐘一然。更聞以二紡績蟲之声一秋レ夜聞レ之。猶如二鼓吹一此蟲暗則鳴曉卽止。瓶以二琉璃一。飼以二青蒿一。亦點二綴秋園一之一助也。不レ因二其微一而棄レ之といへる。これにや。但似二促織一といへるは。前にいふかことく。促織と。蛬とを。一物とおもひあやまりて。かけるなるへし○源氏鈴虫に。けに聲〳〵きこえたる中に。すゝむしのふり出たるほと。はなやかにおかし。又鈴虫は。心やすく。今めいたるこそ。らうたけれとあ

り。又哥には。ふりすてかたき。鈴虫の聲。又猶すゝむしの聲そふりせぬなと。皆鈴のよせあれは。多くふるとよめり○鈴虫の宴とは。同巻に。こよひは鈴虫のえんにて。あかしてむとおほしの給ふとあり○くつは虫も。漢名未ㇾ詳。そのなく聲。鑣（クツハ）の音に似たるをもて名とせり。哥にも。多く鑣によせてよめり。曾丹集に。くつはむしゆら〳〵おもへとあり。ゆら〳〵は。くつはのゆらくにかけたり○むしえらひの事は。禁祕抄に。松蟲。鈴蟲類。人々進ㇾ之。或被ㇾ召ニ賀茂社司ニ。堀河院御時。頭以下向ニ嵯峨野ニ誠有ニ逍遙ニ是採虫屋向選ㇾ虫奉ㇾ之とあり○むしの聲共。又虫のねともよむことつね也。その外むしのうらむる。虫のわふる。鳴よはる。鳴あかす。聲しけき。すたくむしのね。（すたくは集る也）むすほゝれたる聲。聲のあやおるなとよめり

虫
なくむしのひとつ聲にも聞えぬはこゝろ〳〵にものやかなしき　和泉式部
よをさむみ草むらことに鳴むしの涙ややかて露となるらん　行宗
すゝむしをみかりのたかの音かとてのへのきゝすや草かくるらむ　長方
きり〳〵すすきにし秋やしのふらむふるきまくらの下になく也　土御門院
露むすふをはなかもとのきり〳〵すよさむや秋のおもひなるらむ　慶運

尋虫声
まつむしのこゑする野へをたつぬとてくさむらことに袖ぬらしつゝ　光経

臨暁聞虫
かたしきのねさめのとこのむしのねはあはれ身にしむ物にそありける　在良

夕虫
夕つゆのやとりあらさぬあさちふにふるき笆の松むしのこゑ　隆祐

夜虫
秋かせも露もよさむのあさちふにうらみそへたるむしの聲かな　為重

雨夜虫
（校者云歌ナシ）

野虫
のへの色はまた霜おかぬ秋かせに我ゆか遠き虫のこゑかな　称名院

嶋辺虫
秋かせにをしまかいそのまつむしは波とゝもにやこゑをたつらむ　顕廣

古郷虫　としをへてあれゆくさとの秋かせにいとゝふかくさまつむしそなく　慶運

山家虫　よのうさをきかしと思ふくさの庵に猶ことしけきむしのこゑかな　宗良

叢虫　秋ふかくなりゆくよはのむしのねは聞ひとさへそ露けかりける　匡通

籬虫　(校者云歌ナシ)

旅宿虫　むしのねは岡のかや野にみたるれと露はまくらの下におくなり　親盛

暮秋虫　なきよはるうらみもさそなきり〳〵すよさむのゆかのあきのくれかた　爲重

松虫　さひしさはいつともわかぬ岡のへも秋は一木にまつむしのこゑ　雅親

鈴虫　秋ことにきゝならせてもいかなれはふりせさるらんすゝむしの聲　大貳

蛬　わかことく物おもふへしきり〳〵すぬともきこえてよもすから鳴　安法

　　きり〳〵すおのかかやねによもすから鳴ねみにしむ秋はきにけり　俊頼

はたおり　むしのねにはたおるこゑはうちはへて秋となりにし日より絶せす　輔親

くつはむし　駒なへてくる人もあらしと思へともおとろかれぬるくつはむしかな　大貳

○秋風　商風(商は蕭に同し)商飈(飈は風なり)凄風(凄はかなしむこゑなり)悲風なとは。皆風の声をいふ也。又金風。(秋は盛徳在金と月令にあり)素風(秋をも素秋といふ又節を素節といふ又[illegible]に秋を白藏とするよりいふ也)哥には。初秋かせ。秋の初かせ。秋風の声(音)。秋風さむき。西吹風。秋の風色とる風。荻の上風。荻の葉分なといへり。又厂かねさそふ。音のさやけさすゝきうこきて。すたれうこきておとに秋をしる。よさむそふ身にしむ。秋かせは身を分てしもふかぬなとも。多くよめり。又手枕のすきまの風秋風の寒き朝共秋風さむし共よめり。其外。秋の草木。鳥獸にせ。雑部風の条にて。詞をもとめてよむへし

秋風　大とものみつのはま松神さひてむかしなからのあきのはつかせ　經信

ひとへたにあつかりつゝな夏ころもかさねきるまて秋かせそふく　　相模

ふきすくるゆふへのかせやさそふらん露もなみたもとまらさりけり　　雅有

かりいほのいなはかうへの袖まくら吹かへすかせのよさむなるかな　　覺性

○秋嵐

○鹿　爾雅曰鹿（和名加）牡麚（和名佐乎之加）。牝麀（和名米加）其子麛（和名加呉）四声字苑云。麖（和名於保之加）埤雅曰。鹿如鹿而大其尾辟塵取置帛中能令歳久其毛不蠹。以拂氈則蠹　説文曰麠麞也（和名久之加）唐韻云。鹿屬也。爾雅曰。麛牡麚。牝麜（音栗）其子麆（音如）○しゝとは。万葉三（上下畧）長哥鹿猪践起とあり。これ夏部照射薬猟の所に云ごとく猪ともに肉をめつるにつけていふ也○かせきとは。推古紀に。越國貢白鹿三頭とあり。鹿の一名也○かこしものと万の第九に（長哥）鹿兒自物吾獨子之。又二十に。可胡自母乃多太比等里之氏とあり。順抄にも。加呉は。麛なれ□。雄畧紀に。圓大臣の妻。夫をさして。飯豨能古簸といひ。同紀みつからなから鳥之慮能古とよみ。又馬の子を。万にも（ママ）。多くこまといへと。又吾駒とも多くよめるをみれは。後世鹿といふ名はいひけるやうにみゆされは。あはれみうつくしむ物には。子とそへたるなるへけれは。こゝも。只鹿とのみ云心ならん。万第七に。海中にかこそ鳴なるとよめるも。猶鹿そなく鳴（ママ）なるといはむを。水主によせてよめり。但万第一に。鴨自物。同六。馬自物。同二。鳥穗自物。同十一。男自物なとあるに同しく。しは助字にて。こゝも。鹿と云物となるへし○しゝしものとは。万第二（長哥）鹿自物伊波比伏つゝぬは玉の。同三（同上）四時自物伊波比拜目とあり。此上の哥は。高市皇子尊城上殯宮の時。下の哥は。長皇子遊獵地池の時。人丸朝臣の詠なれは。齋祝拜の心とみゆ。これは。鹿のもとより。脚をふする物によりて。いふなるへし○をしかは。牡鹿也。惜にかけてもよめり○さをしかは。万第八。狹尾牡鹿。同十二。左男牡鹿なとかけり。猶上に同し。牡鹿のことにて。さは助字也。小夜なとの類也。同集に。棹鹿ともかけるより。鹿の角の棹に似たれは也と云は。あやまり也。○かは。鹿也。万第八に。秋茅子を妻とふかこそとあり○かなるまとは。万第廿に。あらしをのいを矢たはさみむかひたちかなるましつみてゝとあかくるとあり。鹿の鳴あひだはしつまりてと云也○角おちかはるとは。空穗七に思ふらんことはしられて夏の野につの落かはる鹿とこそきけとあり○をしか

の角のつかのまとは。六帖に人丸。夏野ゆくをしかのつのゝつかのまもとあり。夏は。鹿の角落かはりて。たゝ一つかほとある角おひ出る也。されは。みしかきことにいふ也。夏の鹿にかきりていふへし。唐土にても鹿茸なといひ里にはふくろ角と云へり○むねわけとは。万の八に。さをしかの胷別(ムチワケ)にかも秋萩の。又同廿に。さをしかの牟奈和氣(ムナワケ)ゆかむ秋の萩はら共あり。鹿は。胸の出たる物なれは。萩を胸にて分ゆくをいへり。又むねわけにちる萩なともよめり○あさふすとは。万の十。さをしかの朝伏小野の草わかみかくろへかねて人にしられむ(春の鹿なるへし)○鹿のたゝすみありくもめつらしとは。源氏若紫北山の所にあり。これも春の鹿也。立ありくを云○つまこひ共。つまこふ共。つまとふ共いふは。牝を求るを云○きたちなくとは。來立鳴の義也○たちならす。又嶺たちならしなと云は。そこに立馴る也○すかひ〳〵にをしか鳴とは。追すかふなとの心にて。引つゝき〳〵鳴也○よひさらすとは。呼やます也(よふは鳴に同し)○山よひとよみ共。山下とよみ共。山とよむまて鳴鹿ともあるは。万葉。響動なとの字を。とよむとよみたれは。山もひゝく斗の聲になく也○ひとり鳴(不及注)○のへより山に入とよめり○秋はきしの鳴とは。萩を押分てなく也○しからみふせて鳴は。萩の条にくはし。又しからみやつすともあり。萩を引敷てそこなふ也○さをしかのつめ(爪)たにひちぬ山川とは。淺き川を云○とこゑとは。俊頼朝臣。つまこふる鹿のとこゑにおとろきて身のかすかにも成にける哉とあり。とこゑは遠音にや○ふしととは。臥所なり。をのの草ふし共よめり○立まふ鹿は。立まよふ也○朝たつ鹿とは。ふしとより朝に起立たる也○かひよと鳴とは。六帖に伊勢。なそやいきてのかひよとそなく。又古今に。なそ我戀のかひよとそなくなとありかひは。鹿の聲を云又驗(カヒ)の心にもよめり(かひしるしのわかれ詞の部装に委し)○仁徳紀。三十八年秋七月天皇皇(ママ)后と共に高臺にのほりて。暑をさけ給ふに。毎夜兎餓(ウカ)野にて鹿の鳴けるか。月盡(ツコモリ)に其聲せす。天皇これをあやしみ給ふに。明日。猪名縣佐伯部。苞苴(オホムヘ)を献す。天皇これ何物そと問給ふ。佐伯部こたへて鹿なりと申す。天皇。又いつこの鹿そとの給ふ。又答て。兎餓野なりと云。こゝに。天皇かの鳴つる鹿なるへしとて。つひに。佐伯部を。安藝の渟田(ヌタ)になかし給ふと云ゝ○霜おくゆめ。夢野の鹿なとよむは。同紀に。昔ある人兎餓の野にやとるに二(ツ)の鹿かたはらにふして。鷄鳴(アカツキ)に。牡鹿(ヲシカ)。牝鹿(メカ)にいへらく。われ。今夜。夢に。白霜多くふりて。

身を覆ふとみつ。これ。何の祥ならんと。牝鹿こたへて。これは人のために射られて白塩を身にぬらるへき也といふ。こゝにやとれる人。これをあやしむに。いまた昧爽ならぬに。猟人この牝鹿を射ころしつ。こゝをもて。時人諺云。鳴牡鹿矣。随相夢也とあり。又荘子に。鄭人薪於野遇駭鹿一斃之恐人見也蔵之隍中覆之以蕉(マヽ)俄而遺失遂以為夢ともあり○景行紀に。日本武命信濃に入給ふ時山神白鹿に化して命をくるしめ奉らんとす命ひとつの蒜にてはちき給へは眼にあたりて死す云々

鹿　いつこにか鹿のはつねは聞ゆらん萩の下葉のみまくほしきに　安法
たれよりも秋のあはれやまさるらんこゑにたてゝもしかそ鳴なる　頼輔
色ならて身にしむものは秋の野につまこひかぬるさをしかのこゑ　顕綱
つゆけさはよそにきゝてもしられけり妻とふしかのをのゝ草ふし　慶運

初聞鹿　(校者云歌ナシ)

月前聞鹿　とにかくに秋のあはれそしられぬる月すむよはのさをしかのこゑ　雅経

暁鹿　さよふかくすそのにいつるしかのねもをのへになりぬあり明の月　顕仲

鹿邑遠　ふきおくるをのへのかせやよわからむ末はきえぬるしかのこゑかな　親盛

暮山鹿　さひしさはしくるゝ雲のたつ田山夕日かくれにしかもなくなり　光経

澗底鹿　(校者云歌ナシ)

野鹿　夏くさのかけにしのひしさをしかのねにたつはかり野は成にけり　宗尊

○ 秋望　大かた秋の花霧露紅葉月なとを眺望したる趣をよむへし春望なとに同し

○秋望　（校者云歌ナシ）

○［秋興］秋のあそひ又なかめともに興あることをよむへし

秋　興　（校者云歌ナシ）

旅行秋興　萩かはらをかやか野へを分ゆけはしかもうつらもおのかこゑ〳〵　覺性

○［秋夕］秋は。むかしより。悲秋とて。物かなしき習なるに。まして夕くれはことさらに。悲愴きはまれる時なれは。野。山。草。木。鳫。虫。鶉。霧。月かけにつけても。その悲感のふかき心を詮とよむ也。但。外の題にて。かやうのむすひ題は。文字をわりてよみいるれと。春曙と此題とは。前大納言爲尹卿の。又今さらの秋の夕くれと題のまゝにあらはしても。又定家卿の。この里のみの夕とおもはゝと下に夕の字を置。上の句に。秋よたゝなかめすてても出なましと。秋の字を置給へるかことく。文字をわりてもよむ也［秋夕情］秋夕につけて。我心はへをのふる也［秋夕傷心］秋夕の物あはれなるによりて。我心をいたましよしをよむへし［秋夕感思］秋夕に感慨したる趣をよむ也［秋夕思］これも感するにつけて。我思ふ所をのふるなり

秋　夕　たよりにもあらぬ草木に秋はたゝ心をつくる野への夕くれ　宗緣

夕くれの秋のこゝろをこゝろにて草葉も露もわかぬ袖かな　雅親

秋夕情　なかめわひたちいてむそらも夕きりのはれぬ思ひは行かたもなし　称名院

關屋秋夕　秋とふくふはの山かせ軒ちかみ關もる人もゆふへかなしな　雅親

○［稲妻］漢名。電。一名霹靂。一名列鈌。一名靈華。莊子曰。陰氣伏。重泉上。通於天。陰陽分爭。故。爲電。淮南子曰。陰陽相薄感而爲雷激而爲電電は。雷を帶たるもあれと。哥には。雷のそはぬをのみよめり。これを稲妻と云は。此字のことくに。秔稲の実のる比の夕かけて光をはなては。稲のみのるへきはしの心にて。いなつまとは名つけたるなるへし。俗にも。電するに稲

ひて。秔稲みのるといへり。されは。六帖に。いなつまはかけろふはかりありしとき秋のたのみは人しりにけり、又ときにぬれ
物とはなしにいなつまの秋のたのみを空にたつらん。又朝つゆのおくてのいねはいなつまをこふとぬれてやかはかさるらむなと
あり。但此奥の二首は。人の妻のこゝろにかけてよめり○古今戀。秋のたのほの上をてらすいなつまの光のまにも我やわするゝ
とは。電の光の。みるひまもなく消る故に。いとしはしのほとを電光石火と仏説にもかゝれたり○いなつまの影又光とも宵のいな
つま。てらす稲つま。光みえさす。時ゝてらす。てらしもはてぬ。やとりもはてぬ。かよふいなつま。木のまもひかる。かけろ
ふわたるいなつま。ほのかにすくる。みる程もなき。しはしほのめくなと。多くよめり。又夕やみ。夕つくよ。雲ま。むらくも
つたひなと。むすひたり

稲　妻

さゝかにのくものふるまひあらはれて軒のしのふにかよふいなつま　　雅　親

いなつまのひかりのまにそしらつゆの草葉にやとるほともみえける　　同

かせあらき雲のたえまのいなつまにありとこたへぬ露もはかなし　　称名院

○**秋田**　早稲より。晩稲かるまてのけしき。又秋田をもる心をもよむ也。又霧。露。鴈。鳴なともよめと。これは。同条それ〳〵
の題にみるへけれは。こゝに畧す○わせは。早稲速稲なと万葉にかけり字彙曰。七月苅収（スルヲ）者。爲二早粳一とあり。又時珍曰粳（カク）稲ニ
有（リ）二早（ワセ）中（ナカテ）晩（オクテノ）三収一六七月収者爲（ス）二早粳一（ト）と云ゝ○ゆきあひのわせとは。万の十に。をとめらに行相乃速稲（ユキアヒノワセ）をかる時に成にけらしもは
きの花咲とあり。ゆきあひとは。穂の実のり。かたふきて。かたみにゆきあひたるにや。或説に。夏と秋と行あふ比に。みのる也
とも名所とも云○むろの早わせとは。源太府卿集に。さなへよりむろの早わせしるきかなとあり。むろとは。よろつの花なとを
室にいれて。また時至らぬほとに。さかするたくひにて。また苗のほとさやうのことをして早く実のらするにや。又は。播广の室
といふ所のたねなるいねをいふにや。いつれに。わせに。又早の字そひたるをみるに。早稲の中にも。ことにはやくみのるを云。
○かつしかわせ。万十四に。にほとりのかつしかわせをにへすともとあり。かつしかは下総葛餝郡也。かこ（ママ）のわせを云鳰はよく

かつけはかくはつゝけたり〇門田わせは。万第十四にあり。不及注〇なかてのいねとは。中粳也。八月かり収むるをいふなり〇おくては。時珍曰。八九月収者爲遲粳これ也。をしねも。をそきいねと云をつゝめたるにて。猶遲粳なり。但をしねは。おくての中にも。ことにをそきなれは。苅のこせる趣をよめり。をしねたつとよめる立の字も。此趣なることみるへし。唐土にて。十月収者を晩稻といへるは。おくてに似たれと。晩は時におくれたる義なれは。同しからす。〇しら露のおくての稻葉。初霜のおくてのいな葉は共ニ置にかけたり〇はつほは。早稻の穗也〇わさほ。同上。〇わさほのかつらは。万八に。秋の田のわさほのかつらみれとあかぬかもとあり。かつらとは。穗のなかくてかつらのこときを云。童蒙類聚には。蔓をほくみと點したり〇いなほは。稻穗也。ほと云は。皆花をいへり〇いなほかほるとは。花のかほる也〇ほにいつると多くよめり〇ほなみたつ。又なひくほなみ。いなはのほなみなといふは。穗の並ひたる也。さて穗の風にて波のよるやうにみゆれは。波にもかけてもよむ也。藤なみなとのことし。淵明か詩に。麥浪迯遠風ともいへり〇八束穗とは。神代紀に。八握莫ミ然甚快也とあり。豊年のさま也〇稻の花ともよむこと。つね也〇田の実は。憑にかけてよめり〇いなはは。稻の葉なれと。葉をかろく心えて。稻と云ことによめる哥多し〇いなはのほなみ。これらは葉の字かろし〇稻葉色つくとは。秋ふかく成て。黄はむを云〇片よりになひく末葉とは。一方になひく也〇稻葉の雲とは。葉の密なるを雲にたとへて云也。爲家卿。田面のをしねなす雲のともよみ給へり〇おきふしとは。稻の起。又伏を云〇かるとは。よく熟したるをみて。刈とる也〇かり敷とは。苅たる其田に敷置てほす也〇かりつむとは。苅て積おく也〇かりしほとは。苅とらむに。よきほとなるを云〇初かりのいねとは。早穗をかるを云〇もるとは。鹿鳥なとをおとろかさむとて。守る也。庵もる袖。山田もる。門田もる。小田もる賤なと。よめり〇とりほす。かりほすなと云は。或は田にしき。又は竿にかけなとして。日にあつる也〇かり庵さすとは。田を守らむとて。かりそめに廬をむすふなり。かりほの庵。同上〇いなふきの山田の庵とは。稻をもてふきたる也〇苫をあらみとは。苫をもてかりそめにふきたれは。ひまあらきを云〇ひたとは。鳴子に同しく。鳥獸なとをおとろかす物也。ひきいたをつゝめたる也。万第八に。引板共よめり。ひたのかけ繩。ひたの繩。ひた

引ならす。又山田にかゝるひたふるになとゝも。よめり〇鳴子。同上。なるこのつな。なるこひくなとよめり〇山田のそほつとは。古今俳諧哥に。あし引の山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしきこととあり。これは。古事紀に。山田の曾富騰(ソホツ)と云神あり。田の畔ことに。此神を置しこと也。その神像やかて鳥おとろかしと成たるにや。ふほ通ひて。そほつと云也〇くえ垣とは。壊垣なり。俊頼朝臣。小山田のいなはをこむるくえ垣のあれまくみれは鹿入にけりとあり〇年あるとは。豊年也〇わさ田は。わせの田也。其外門田。山田なと。夏部早苗の条にくはし。猶山のすそ田。野田。沢田。湊田なとよめり

秋田　をやまたの秋はてかたにみゆるかなのこりすくなくかりやしつらむ　頼実

かせわたる田面のすゑにきりはれていなはのつゆに月そうつろふ　宗良

〇稂田　順抄に。穭。和名。比豆知。穭禾不(ハ)下因(ル)二播種(ニ)一而生(セ)上也。其不多(クハシ)秕(ヒナ)也とあり。廣雅に。稲已刈而復抽(ソ)(ママ)曰(フ)二稲孫(ヲト)一又字彙に。秣(ハ)再。生(スル)稲也。稂は。詩曹風下泉篇云。洌(タル)彼下泉(ノ)浸(ス)二彼苞稂(ヲ)一又爾雅云。稂(ハ)董粱也。禾粟之叢生而不(ル)レ成者謂(フ)二之董(ト)一又説文(ニ)。稂又作(ル)レ䅎(ニ)。姚炳云。莠(ハ)乃悪草。稂非(サル)二悪草(ニ)一耳　哥には。をしねをも。かりはてたるあとに生出て。ほにも出ぬよしを詮とよむ也。古今。秋かれる田におふるひつちのほに出ぬは世を今さらに秋はてぬとかとあるを。本としてよむへし。ひつちいね。ひつちはら。ひつち田なとよめり

〇秋夜　なかきよしを詮とよみ。又月。鹿。虫なとをもよむへし。朗詠に。白樂天。燕子樓中霜月夜。秋来只為(タニ)二一人(ノ)一長(シ)とつくれり。古今に。秋のよをしむ哥よみける次によめる。かく斗をしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらむ人さへそうきとあり

秋夜長　全(ク)同題と心うへし

秋夜　いつのまに程なくあけし夏のよのねさめせらるゝ秋になるらむ　為仲

○秋夢 夜いたく長けれは。いくたひも夢をむすふよしをも夢さめて後も。また夜の明やらぬよしをも。よめり 秋枕夢 秋夜夢 これら皆上に同し

○秋雨 秋の景物をむすひ。又は秋の雨。秋のむらさめなと〻も。よむへし。但。秋をむすひて。しくれをよめる例もあれと。このましからす 秋村雨 同題也 秋時雨 これも。必秋のかけあるへし

秋雨　ぬれ〳〵もあけはまつみむみやき野のもとあらの萩やしほれしぬらむ　長能

秋山雨　秋も猶すきの葉あをきあしからのやへ山しくれなにをそむらむ　光經

秋時雨　みるま〻にとやまのまさき色つきぬをのへの秋はさそしくるらむ　慶運

○初霜 六の秋能宣朝臣。はつ霜も置にけらしなけさみれは野へのあさちも色つきにけり。但。霜は。冬の題なれは。こ〻は。秋といふことわりなくはあるへからす。されと。あなかち。初霜とことわらても。秋の影たしかならは。難なかるへし 秋霜 同上

○月 淮南子曰。月者太陰之精也ト云 尚書大傳書曰。哉生明哉 生魄これ。朔後には。月明生して魄死し。望後には。月明死して魄生するを云也。楊子云。月未望則載魄于西。既望則終魄于東。其遡於日也○盈虧とは。万七に。隠口乃泊瀬之山丹照月者盈昃爲烏人久常無 未出月 無子細 月欲出 やかてのほらむとして。光のみゆるを云 月初昇 初昇月 二題同。山のはをのほるを云 月漸昇 漸昇月 次第に空たかく成を云 停午月 中天にあたるを云。月の眞盛と云心にて。光多く影すくなき心をよむ 漸傾月 やう〳〵落か〻るを云 やう〳〵は漸にヨソホトと云 既傾月 山のはちかく成たる月也 欲入月 入か〻る月也 已入月 入はてたる月なり 惜入月 入らむとするを殘念におもふ也 入後月 月のいりて後も。心に月のわすられてよむ也 入後[illegible]月 上の題の心に。月をしたふ心を詮とよむへし 三日月 漢名。恒月詩經 又謂魄[illegible]月 又纖月。万十一には。若月清不見雲隱

とかけり○万六。坂上郎女。月たちてたゝみか月のまゆねかきとあるは。洞日より只三日也と。ありのまゝにいへり○われてとは。古戀。よひのまに出ていりぬる三か月のわれて物をおもふころかなとよめり○三日月と。女の眉にたとへたるは。帖に。家持卿。ふりあふきて三か月みれはひとめみし人のまゆひきおもほゆるかなとあり○新月。これに。二説あり。一は。毎月三日にはしめていつるを云。韓退之詩に新月似レ磨レ鎌とつくれる。これ也。一は。夜はいつにてもあれ。はしめて出たる月を云。白樂天か。二千里外故人心と作れると也。○夕月は。三日月にかきらす。月の上旬の稱。夕くれに見る月は。みな云へし。新月と云題にて。夕月三日月共によむへし○夕つく夜は。俗に云。宵月夜なり **弓張月** **絃月** 二題同。釋名云。弦月月之半名也。其形。一旁曲一旁直若張二弓絃一也和名由美八利。源順。弓張月を月をまつ弓はりとしもいふことは山のはさしていれは也けりとよめり **上絃月** **下絃月** 九七日八日の月を上絃と云て。西の山ちかくみゆる也。律暦志云。弦之日日照二其側一人觀二其旁一故半明半魄也是爲二近一遠三一。上絃。廿二日廿三日の月を下絃と云て。東の山のはに月虧一半如二弓之下一レ絃也。下弦是下絃月を。万三に初月を。問人宿称大浦。(ママ)天のはらふりさけみれはしらまゆみはりてかけたる夜路はみえむ。(ママ)石清水御法樂廣元。ものゝふの名にもめてゝやさよふかみ心ひくらむ弓張の月すへてかく弓にかけてよむ也○かたわれ月は。半輪を云。三戀三に。よみ人しらす。あふことはかたわれ月の雲かくれおほろけにやは人の戀しきとあり **十五夜** **八月十五夜** **三五月正圓** 三題同。仲秋望月也。説文曰。望月滿也。與レ日相望。如レ朝レ君从レ月从レ臣从レ壬壬朝也。釈名曰。望月滿之名也。日月遥相望者也。周礼註曰。月大十六日望。月小十五日望。但。仲秋者。月令廣義曰。秋九十日。是日爲二仲秋一。釈名云望月和名毛知都岐月大十六日。小十五日。日在レ東。月在レ西遥相望也。哥には。秋のもなか。秋のなかはなとよむ。三に。源順。水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋のもなかなりける。又九に。登蓮法師。かそへねと秋の半そしられけることよひにゝたる月しなけれは。又定家卿。明ぬれは秋の半もすきぬへしかたふく月のをしきのみかは○望月を。散木集に。引わくる駒そいはゆるもち月のみまきのはらや戀しかるらむ。又一秋。貫之。あふ坂の關のしみつに影みえて今やひくらん望月の駒。又六秋。藤原朝信朝

臣。引こまの影をならへてあふ坂の關路よりこそ月は出けれ。これら皆。望月を。信濃の望月牧の駒迎にかけてよめり。又万九（長哥上下畧）望月之滿有面輪花如云々と斗もよめり○滿月万十二（長哥上下畧）十五月之多田波思家武登伊勢集に久方の月のまとかになる比はもみち散ともしられさりけり。貫之集に。八月十五夜に。難波かた汐さしくれは山のはにいつる月さへみちにける哉。抱朴子云。月之精生水是以同滿而潮濤大也。又物理論曰。月水之精。潮有大小。月有虧盈この心にかなへり清輔朝臣家集に。大かたの秋は半と聞物を月の光はみちにける哉○名月九に。寂超法師。あまつ空こよひの名をやをしむらん月にたな引うき雲もなし○こよひの月を翫ふことは。孝元帝。もろ〳〵の上達部。ふみのつかさめして哥よませおはしませしよし。國史にみゆと。長明四季物語にあり○もちくたり。万八。望降淸月夜云々これ。十五日過をあらましにいふ也

不知夜月　源末摘花に。もろともに大内山はいてしかと入かたみせぬいさよひの月この哥によりて。いさよひの月は十六日の月也とす。しかれ共。遊仙窟に。猶豫をいさよふとよみ。その外。万七。山のはにいさよふ月をいてむかと待つゝをるに夜そ更にける。猶いさよふ波。いさよふ雲なともありて。月にかきらす。又月にても。十六日の夜にかきるへからす。その上。いさよふは。万に。射狭夜歷。又不知夜歷なとかけるを。近世。不知夜と書て。いさよひとよみ。又いさよひのひはふの通音なるを。ひの字より。宵と心うる人あり。甚あやまれり。しかれ共。今の式にしたかはむ人はあらためすして。十六夜の月をよむへし。尙書曰哉生魄望後月明死而魄生也。日月相望謂之望既望十六日也

立待月　尙書所謂既生魄也。源夕かほに。十七日の月さし出てとあり。丹後守家百首に。あるしの朝臣。人しれす待たてる哉あし引の山よりいつるかつらおとこを。これ。待こと久しからねは。たゝすむ程には出へき月と云ならむ。俗に。十七夜より。廿三夜まて七觀音の裹日に配當して。月まちの本地供等を修するに。立て月の出るを待と云義は。用ゆへからす

居待月　十八夜也。万には。坐待月とかけり。丹後守家百首に。頼政卿山かつの外面の庭にすゝみゐていらぬさきにもいつる月哉

臥待月　十九日也。源若菜下女樂の試の日。（ママ）の所にふしまちの月はつかにさし出たる心もとなしや。後柏原院御製。さよ枕心みしかくふし待の月をそしと夢をやはみむ○ねまちの月。同上。寢て待と云義也皆に。待まつと思ひゐる我をある物をは

まちの月はかたふきにけり。又井をのみ起ふ。まちの月なれはなとあり **廿日月** 無[illegible]
にくれ竹のはつかにやとる露の月かけ。又顯廣。家百首月後字 椎葉やしけきみ山の月かけはことなへならねとはつかにそみるおほかた僅
と云詞にかけたりふけ待といふも。廿日也といふ **在明月** 御抄に。匡房卿往生傳を引て。十五日以後のよし載られたることく。
朔までのこれる月を云。万十一。在明月又長明などの字を用う。俊成卿。廿秋のよのふかき哀はあり明の月みしよりそしられそ
めにし **曉月** あけかたにいつるをも。のこるをもよむへし○あさつくよとは。万一。長哥上下略 朝月夜清爾見者楮乃穗爾 とあり。
朝に月のこれるを云 **十三夜** **九月十三夜** 二題同。此月を阮（ママ）ふは。中右記。崇徳七十五保延元年九月十三夜。今宵雲淨月明。是寛平
法皇。明月無双之由被仰出。仍我朝以九月十三夜為明月之夜。又無題詩に。藤原忠道公。九月十三夜翫月詩曰。閑窓寂々月相
臨。從屬窮秋望匝禁 潘室昔蹤凌雲訪 蔣家舊徑踏霜尋 十三夜影勝於古 數百年光不若今 獨憑前軒回首見 清明此夕價千
金。又菅公配所。九月十五夜の詩あり。俗人五の字を。三の字に改て。此夜の據とするは。誣たる説也。又兼好法師かつれ〳〵
草に婁宿之説あれと。これも信しかたし。又明十二家詩中。鄭少谷。何大復。十三夜の詩あれと。これ又。此夜を賞したる詩に
あらさるへし。十。忠慶。をしといへと秋の半の月はまたこよひもありとおもひなされき **松門到曉月徘徊** これ。白樂天か陵園
妾の句なるを。和氣雅成朝臣。松の戸の明かたちかき山のはにいらてやすらふ秋のよの月とよめり。此哥全陵園妾の意なし。
しかるを。十二雜秋に。入られたる心えかたし **夜雲収尽月行遅** 朗詠の。郢展か句に。秋水漲來 船去速 とある對句なり
**緇素見月** 緇は淨衣にて僧を云。素は白衣にて俗を云。則僧俗ともに月をみる也○月よみ。神代紀下に。次生月神一書月弓尊月夜見尊月讀尊
其光 彩亞日可以配日而治故亦送之于天。但月弓。月讀は。猶月夜と云にて。よとゆと音かよへる也。又神代にて。
かおほく。かみろきかみろみ。又伊弉諾。伊弉冊。又海神を。少童なといへは。陽神をきといひ。陰神をみと云けるにやとおほ
ゆれは。こゝも猶此例に同しかるへくや。造天地經には佛令下吉祥菩薩造上月とあり。我国にては。此月よみの神は。諸冊二尊
の御子也。万十五。月余美能比可里乎伎欲美。同七。月讀 明 少 夜者更下乍なとあるも。もとは。神の御名なれと。こゝに

ては。只月とのみいふに同し。同集に。家持卿。月よめはいまた冬也とよませ給へるは。月次の月にて。これらに同しからす○
万十三。月夜見乃持有□越水何取來而公奉越得之早物。淮南子曰。積陰之寒氣。大者爲水水氣之精者。爲月又物理論曰。月水之
精。又抱朴子曰。月之精生水今番人の千里鏡にて。月をみれは。月中に。水波動搖の象ありと也○月讀壯士（同）月人壯士（同）月桂　桂
男（同）月人乃楓（同）月內之楓なと。さま〳〵あるは。虞喜安天論曰。俗傳。月中仙人。桂樹今視其初生見仙人之足漸已成形。桂樹
復生焉。又酉陽雜俎曰。月桂高五百丈。下有一人。常斫之。樹創隨合。其人姓吳。名剛。西河人。學道有過謫令伐樹。これ
らをとりていろいろに云なるへし。万四に。めには見て手にはとられぬ月內之楓のこときいもをいかにせむ。同十に。もみちする
時に成らし月人の楓の枝の色つくみれは。同十五（七夕哥）おほふねにまかちしゝぬきうなはらをこきてわたれる月人乎登祜。一（雪岑）久
かたの月のかつらも秋は猶もみちすれはやてりまさるらん。二（淑望）空とほみ秋やよくらむ久方の月のかつらの色もかはらぬその
外。かくよめる哥多けれと畧す○さゝらえをとこ。万六（坂上郎女月哥）山葉左佐良榎壯士あまの原とわたる光みらくしよしも。注云月別
名曰佐散良衣壯士也緣此作此歌とあり。又同二十（寂印）薩羅芝代玉松かえを吹風に與路津葉分野左左良之光波但小漣をさ
ゝら波といひ。小石をさゝれ石といひ。允恭紀に。小紋の錦を。さゝらかたにしきのひもなと云に同しく。人間よりみる月の形
はいとちいさけれは。その中にある男なれはとて小男と云也。えは。よの音かよへるにて。夜の義なるへし。又さゝらの光とよ
めるも。月の別名となれる故にかくはいへりとみゆ○月のうさき。張衡靈憲曰。月者。陰精之宗。積而成獸象陰之精其數偶又五
經通義云。月中有兎與蟾何月陰也。蟾蜍陽也。而与兎竝明　陰繫于陽也。易乾鑿度云。月三日成魄八日成光。蟾蜍體就
穴鼻始萌（穴決也決鼻兎也）又法苑聚林云兎爲天帝釈入火尋卽死。此時老夫復帝釈身餘燼收體感其心不泯其迹寄之月輪傳乎後
世。故彼咸言月中之兎。これら皆附會の說にして。月輪の中の影をみて。さま〳〵に附會せられたるにて。たゝ兎の形に似た
るまてなるへし○月鼠。佛說譬喩經曰。有黑白二鼠。互に樹の根をくらふと云々。但樹根は命にたとへ。黑白二鼠は晝夜にたと
ふ。又樓炭經云。人虎に追はれて野中の井におち入らむとするに。その岸の草をとらへて。下に其井の底をみれは。[illegible]には

口をひらきてのまむとす。又黒白二鼠ありてそのとらへたる草の根をくらふ。せんかたなくてつひに猛虎毒蛇のために害せらると。云々但。此虎といふは。我平生の造悪の罪業にたとへ。黒白の二鼠は。日月にたとへ。毒蛇は。地獄にたとふといへり。此こと。俊頼口傳にものせられたり。高光集に。世中はかなくのみおほえて。ほうしになりなむとおほゆるころ。たのむより月の鼠のさわくまの草葉にやとる露の命を○月のかゝみ。神代紀上。伊弉諾尊。右手持二白銅鏡一則有二化出之神一是謂二月弓尊一經信卿集。久かたの空にかゝれる秋の月いつれのさとも鏡とそみるとある哥。よせありとは云へし。しかれ共ますかゝみを。月のといはむは。いといはれなし○月のふね。万七詠天あまの海に雲の波たち月の舟星の林にこきかくるみゆとあり。これは実にしかるにあらねと。さみなして云也。洞冥記にいはゆる。遊月舩。觸月舩なとあるは。人の月を弄する舟にて。これとことなり○月よよし。万七大伴四綱月夜吉 河音淸 之。又一戀に。月よゝし夜よしと人に告やらはなとあり○老となるとは。一。業平朝臣。大かたは月をもめてしこれそ此つもれは人の老となるもの○千々に物のかなしき。とは一大江千里。月みれは千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと○鴈の數さへみゆる。とは一に。しら雲にはね打かはしとふかりの數さへみゆる秋の夜の月○月のかさ。月暈又弁色立成云也。月院。郭知玄切韻云。暈氣繞二日月一也。万三。人丸。反哥久堅乃天歸月乎綱尒刺我大王者盖尒爲有。これは。月暈にあらす○月の都。龍城錄云。開元六年八月望夜。明皇與二中天師洪都客一作レ術臥二遊月宮一見三一宮榜二廣寒淸虛之府一下視三王城嵳峩 若二萬頃琉璃之田一有二素娥十餘人一皆乘二白鸞一舞二於廣庭桂樹之下一音樂按二其調一作二霓裳羽衣曲一。又天宝遺事云。唐明皇遊二月宮一見二天府榜一曰二廣寒淸虛之府一見二素娥十餘人一皓衣乘二白鸞一舞二於桂樹之下一。逸志曰。羅公遠。開元中。中秋夜。侍二玄宗一宮中翫レ月公遠曰。要レ至二月中一否。乃取レ杖向レ空擲レ之化爲二大橋一其色如レ銀請同登行 數里 淸光奪レ目寒氣侵レ人遂至二大城闕一公遠曰。此月宮也。見三仙女數百素練寬衣舞二於廣庭一帝問此何曲曰霓裳羽衣曲也。大江千里。てる月の都に道はありといへとたつねてゆかむかたもしられす。これより帝都を。月宮に比して。月の都共いへり。○をは捨山の月のことは。大和物語畧文信濃國更科の里の男。老かゝまれる姥の。とし比あひそひてありしを。よめ。心うくおもひて。此姥の心。よからす。すて給て

よとせめけれは。月のあかき夜。男此をはをひて。いとふかき山にすてゝかへりけれと。とし比おやのことくやしたひつゝあひそひてありけれは。いとかなしくおほえけれは。此山より月のかきりなくあかく出たるを。夜ひとよいもねられすして。我心なくさめかねつさらしなやをは捨山にてる月をみてとよみてなん。いきてむかへかへしぬと。云ヽこれより。をは捨をよめは。此哥をとりてなくさめかぬるよしを。さま〳〵の趣にとりなしてよむ也又さならぬ哥もあり。此外月の名所いと多けれと畧之○准南子曰。月中有ルレ物者。山河ノ影也。其空ハ處海ノ影也。と云ヽ○月のかほ。人の顔を。月のまろきにたとへてほめていふ也。俊成卿のふかきよの光も聲もしつかにて月のみかほをさやかにそみるとあるは。釈尊の御かほ月のこときを云也。○月のさかり。とは月の明らかなる最中をいふ。四ノ秋。頼家朝臣。しきたへの枕のちりやつもるらん月のさかりはいこそねられね○いみて影にあたらぬよひ。とは西行上人いむといひて影にあたらぬこよひしもわれて月みる名や立ぬらん（われてはわりなくの心なり）これは。月蝕を題にてとあり今も俗に。月蝕の夜は。影にあたらぬ物そと云也○月の隈。とは雲にてもあれ。何にてもあれ。影にさわる物をいふ也。されは。月のいとあかきをくまなしとはいへり○光おさまる。とは明かたに。月光なくなるを云。源ノ箒木に。月はあり明にて光おさまれる物から影さやかにみえてなか〳〵おかしき曙なりとあり。此句にて。光と影とをわかち知へき也○月さゆるとは万に。集又冷の字をさゆるとよまれたれは。秋にはよむへからす○影をさしても月といひ。又月輪をさしても月といふことつね也

月

君みるとそらにしれはやくもりなくよろつ代をのみてらす月かけ　　伊勢大輔

月かけのすみわたるかなあまのはら雲吹はらふよはのあらしに　　経信

あまのはらおなしそらゆく月かけの秋しもいかててりまさるらむ　　行宗

いかはかりくまなくてらす月なれは心のやみもはるゝなるらむ　　顕輔

軒はよりもりくる月をわきもこか玉ものすそにやとしてそみる　　俊頼

なかきよのやみをおもへは月かけのかたふくかたにすむこゝろかな　　同

なかむれはいとゝ物こそかなしけれ月はうき世のほかと聞しに　俊惠

つくはねのしけきこまより月もれはこのもかのもの雪の村きえ　守覺

やほか行濱のまさこを數かへて玉になしつる秋のよのつき　長方

あさちはらは末にむすふ露ことに光をわけてやとる月かけ　親盛

くれぬとてまちつる月の影きよみいつれはひるにまたなりにけり　讃岐

まてしはしおなしそらゆく秋の月又めくりあふむかしならぬに　俊成女

ひとりぬる身はならはしの秋風に手枕さむき月のかけかな　宗尊

待月

はれぬまそなか〳〵影もうつりける月まつ山の雲はいとはし　慶運

終夜見月

露なからかたしく床のすかむしろすからによるは月そやとれる　同

恨身見月

月みれは身のうきことのおほゆれはくもるはるゝ心ちこそすれ　俊惠

對月忘愁

うきなからやとらむ月をまつほとにいつれはかはく袖のつゆかな　守覺

惜月

あちきなくおもひもいれし山のはにかたふく月はたれもみるらむ　光經

曉明月

あまの川いはこす波やあらふらんきよくもすめる月のかけかな　俊頼

八月十五夜

いかなれは月すむ空のむかしよりこよひは雲のたえまなるらん　覺性

九月十三夜

いつもてる月そとおもへと長月のこよひは光ことにみゆらん　大貳

雨後月

しくれつる山のこのはにうつるよりぬるゝかほなるむらくもの月　光經

雲間月

さたまらぬ雲の絕まの月かけはきえて又ふるゆきかとそみる　讃岐

雲晴月朗

雲の波山のあなたにふきよせて月もてはやすあまの川かせ　親盛

霧間月　かくはかりまれなるきりのとたえにもしらてや月の空にすむらん　慶運

在明月　山さとのかけひの水に影すみて心ほそきはあり明のつき　堀川

曉更月　あたにみし露はくさ葉にあり明の月そなか〱かけはきえゆく　守覺

樵路曉月　松かせのおともさひしきあかつきの月にうたひてすくるやま人　覺性

月似晝　秋のよのそらにくまなき月かけはなけきやすらむかつらきの神　頼実

夕月　いたつらにそらのなかはをめくる迄みぬかけをしき夕つく夜かな　雅親

山月　すみのほると山の月にきこゆ也まさきかつちる秋かせのこゑ　慶運

月欲出山　いてぬるかひかりはよそにみえなから松のかけなる山のはのつき　宗良

林中月　神ますと人はいへともかしは木のもりのこのまはつきのみそもる　長方

野月　よもすから月はくもらてみやき野のこのした露や雨とふるらむ　宗良

野宿月　しろたへのをはなかりふきこよひさへ猶むさし野の月をみるかな　光經

關路月　あふさかのせきのしみつのなかりせはいかてか月のかけをとめまし　顯輔

坂月　ゆらの戸は月もくもらてふちしろのみさか吹こす秋のしほかせ　慶運

水邊月　くまもなき月かけうつすこよひこそおほろの淸水名にかはりけれ　小侍從

月浮水　あき山のしみつはくましにこりなはやとれる月のくもりもそする　忠宣

池月　さる沢のいけの玉ももくもらねは月にそうかふひとのおもかけ　宗良

江月　湊江や夕しほふかくなるまゝに月にそうかふうらのまつはら　同

河月　はやせ河月のこほりのけぬかうへにあた波かけてあきかせそ吹　慶運

湖上月　すはのうみや神のちかひのいかなれは秋さへ月のこほりしくらむ　宗良

浦　月　をしてるやなにはの秋を身にしめてこよひも月をみつのうら風　同

海上月　なるみかた我とゝもにそ出にけるふなちも月はおくるなりけり　親盛

礒　月　わすれめやきよみか礒の浪まくらせきちの月をおもかけにして　宗良

禁中月　さやかなる月のひかりを明ぬとてしめしやすらむ衛士のたく火は　覺性

名所月　月かけのこほりしきつのうらかせにおとはしくれの住の江の枩　光經

社邊月　すみよしとあとたれそめしそのかみに月やかはらぬこよひなるらん　小侍從

古寺月　初瀬山かたふく月のあり明をそらにもつくるかねのこゑかな　称名院

故郷月　いつくとも月はわかしをふるさとは物さひしかるかけそそひける　忠盛

山家月　山ふかみうき世にしのふかくれかをありとやこゝに月もすむらん　宗良

閑庭月　庭にみしかけはあさちのうつもれて軒のいたまそ月はくもらぬ　同

田家月　よもすからひた引ならす秋の田はおとろくはかり月もすみけり　覺性

船中月　わたのはら風そたよりとおもひしをよふねは月のさそふ也けり　慶運

松間月　山さとのまやのあしふきもる月や軒はのまつのこのまなるらん　同

月照松　しくれとやおもひはてまし松かせをこすゑの月のもりこさりせは　雅兼

竹間月　窓ちかき竹の葉分にもる月のかけさたまらぬよはの秋かせ　宗良

旅宿月　みやこいてゝとをちのさとのたひねにもおもかはりせぬ秋のよの月　堀川

月前秋風　(校者云歌ナシ)

月前橋　あかてのみあくるもつらしかつらきやくめちのはしの秋のよの月　雅有
月前葛　ふきかへすまくすかはらの秋風に月にうらみてしかもなく也　同
月前鴈　なくかりのなみたなるらし月かけに數さへみゆる庭のしら露　宗良
月前鶉　(校者云歌ナシ)
月前鹿　月ゆゑやおのれなきても秋をしることよひあり明のさをしかの聲　雅經
月前筏　おほゐ川月すむよはのいかたしは氷のうへをわたすなりけり　親盛
月前遠情　月よにはおもひそいつるもろこしに友をたつねし人のこゝろを　行宗
月前述懐　さよふけてくもらぬそらにすむ月はたちかくれなきうき身也けり　俊頼
月前思故郷　したひくるかけはたもとにやつるともおもかはりするふるさとの月　土御門院
月前無常　(校者云歌ナシ)
月前念佛　(校者云歌ナシ)
月毎夜友　おもひくまなくてもとしのへぬるかなものいひかはせ秋のよのつき　俊頼
月照衣　雪かとて千たひころもをはらへとも何かはきえむ月のひかりは　行宗
月添秋思　あはれともたれかみるへき月かけにかしらのゆきそひとへそひぬる　同
月契千秋　いつよりも月ののとかにみゆる哉千とせのあきのはしめとおもへは　在良

○駒迎　諸國の牧より。貢の駒を引來るを。左近少將を勅使にて。あふ坂まて出て。これをむかふるをこまむかへといへりさてその駒を。南殿の前にひき來たれは。これを公卿以下にわかち給はる時は。馬のさしつなをとりて。御前にすゝみて一拜す。とりのこしの駒を。次將をもて。院。東宮なと然へき所〻へまいらせらる。これを引わけの使と云よし。公卿にみゆる次第にも

と八月十五日也。依二朱雀院御國忌一十六日を改用ゐるのよしみゆ。式には。諸牧。其貢馬ヲ各日時ヲ定ム。へ甲斐國勅旨牧ニ八月七日柏前ノ牧眞衣ノ牧両牧三十疋穂坂ノ牧三十疋三ケ所合六十疋へ武藏國勅旨立野ニ八月廿五日貢レ馬ヲ石川ノ牧由比ノ牧小野ノ牧次第に以上八月廿日とす立野ノ牧二十疋四ケ所合五十疋へ信濃國勅旨牧十五箇所ニ八月十五日山鹿ノ牧鹽原ノ牧岡屋ノ牧宮處ノ牧殖原牧大野ノ牧平井手ノ牧笠原ノ牧高位ノ牧新治ノ牧大室ノ牧猪鹿ノ牧萩ノ倉牧塩野ノ牧長倉ノ牧以上十五牧なり望月ノ牧二十疋八月廿三日十六ケ所合テ八十疋へ上野國次第裏書に八月廿八日とす利刈ノ牧有馬ノ嶋ノ牧治尾ノ牧久野牧大藍ノ牧拜志ノ牧新屋ノ牧塩山ノ牧市代ノ牧九ケ所合テ五十疋右諸牧駒者毎年九月十日國司牧監若別當人等と牧に臨み。檢印して共に其帳に署し。齒四歳以上用に堪へき者。調良を簡み繫く。明年八月。牧監等に附て貢上す。若賣却するあらは。正税に混合せよ。其貢上の馬は。路次の國各その秣夫を遞に前處に送り。其國解者主當寮外記に付て。大臣に進り。奏聞を經て兩寮に分給て。其品を閲定めよとあり○又或書に。遠江國四疋相模四疋。武藏十疋。上総十疋。下総四疋常陸十疋上野三十五疋。下野四疋周防四疋。讃岐四疋。伊豫六疋。毎年十月以前。長秣貢上。並近都の牧に放飼すともあり○二条輔朝臣左近少將に侍ける時。むさしの御馬むかへにまかりたつ日。にはかにさはることありて。かはりに同しつかさの少將にて。むかひにまかりて。逢坂より隨身をかへして。いひ送り侍けるとあり○伊勢集に。こまひき。望月の駒引わたす影みれはおほつかなくもみえすそありけるとあり

駒迎　　空にすむ月毛にはあらぬ駒なれと秋のもなかの雲ゐにそひく　　雅親

夕まくれみちたと〳〵しもち月のこままつほとのあふさかのやま　　同

關駒迎　　引とむるほとゝそみゆるせきの水うつれるかけのもちつきのこま　　爲重

雨中駒迎　（校者云歌ナシ）

深夜駒迎　（校者云歌ナシ）

○ 鴈　月令曰。仲秋之月鴻鴈來ル。又曰。季秋之月鴻雁來賓ス。注ニ云。鴈は仲秋先至者を主とし。季秋に後至者を賓とす。故儀礼

曰。九大夫贄用鴈雁有先從後列故以爲贄。又昏義曰。壻執雁入揖讓升堂再拜奠雁○鴈にさまくの別あり。鳱。鵝。互音雁多則適南集于水于故字從于春則嚮北集于山岸故字從岸小者曰雁大者曰鴻鴻は大也多集江渚故字從江梵書謂之僧婆○今俗に四種をわかてり。蒼黒にて胸腹に白黒の班あり。其觜白く。脚黄なるを。眞鴈とす。眞雁の末長して。腹白く班なきを白腹とす。白腹の如くにて。全体蒼黒にて。額白く眼辺黄はみ。觜赤くして細く。脚黄はめるを。鴈金とす。但鴈かねのことは。春部歸厂の条にくはしく弁す○又全体白く翅翮黒く。觜と脚と赤きを。白鴈とす。これは文昌雜錄曰。北方有白鴈似雁而小色白秋深則來といふ物也○順抄に。鴻和名於保加里。又云。比志久伊。雁に類して大に。背頸倶灰色。翮黒尾本白。脚黄に觜と翮と黒く。鼻辺に黄なる條あり。又和名加豆羅比志といふ物あり。鴻より小にて。背頸倶灰色。頸に茶褐班あり。○頭頸は灰白色。觜端と翮と黒く。腹は白く。脚掌は蒼黒。背は黄赤にして。紫豹文あり。后趾及ひ蹼なきを鴇といふ。時□曰。案に羅願云。鴇者有豹文故名獨豹而訛爲鴇。陸佃云。鴇性群居如雁有行列故字从与音保相次也。詩云。鴇行。是也○わさ田かりかねは。早稉をかるといふにかけたる斗にて。雁の別種にあらす。此外哥によむへきこと。大かた春部歸雁の条にのす

初雁

鴈のはしめて來たる趣を詮とよむへし。又さならすてもよめり

雁

くもちよりやとかりきぬる厂金はたひの空なる壱にこそなけ　輔親

秋ことにたひの空ゆく厂かねはおのか羽風やよさむなるらん　伊勢大輔

よふねこくおとはかりしてしら浪のあとなきそらに厂やなくらん　宗良

初雁

(校者云歌ナシ)

旅雁

そらにのみこゑのきこゆるかりかねはあまのかはらにやとやかるらん　頼実

遠鴈

よと〻もにそらに聞ゆるかりかねはしらぬ雲路もあらしとそ思　同

夕雁

折からや鴈のなみたの玉つさも袖にまちとる夕くれのそら　雅経

深更鴈　ふかき夜のね覺のそらにおとつれて涙をさそふかりのひとこゑ　爲仲

霧中鴈　はれやらぬくもち分くるはつかりの羽かせになひく峯の秋きり　雅經

雲間鴈　（校者云歌ナシ）

月前初鴈　萩のうへのつゆもあらはに厂かねのきこゆるそらに月ふけにけり　雅親

○霧　源順云。霧和名岐利。霧は遮の上を畧したる義也。されは万一。霞立春日之霧流。又二に秋之田上尒霧相朝霞なとゝあり。又同九に。掻霧之雨零夜乎。又十一。打霧雪はふりつゝなと皆同義也。神代紀上に。伊弉諾尊の。我所レ生之國唯有二朝霧一而薫滿之哉との給ふよりはしめてみゆ說文曰。霧者百邪之氣爲レ陰冒レ陽本二于地一而行二于天一也。釈名曰。霧冒也。氣蒙冒覆二物色一昏暗之時則爲二妖災一明王聖主則爲二祥端一。爾雅孫炎注曰天氣下レ地。不レ應曰レ雺地氣發。天不レ應曰レ霧。霧謂二之晦一〇万二に。霧已曾婆夕立而明者失等言とあり〇神代紀上。於是天照太神乃索二取素盞烏尊十握劍一打折爲二三段一濯二於天眞名井一齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧とあり。これよりあまのさ霧とよめり〇あまきりあひとは。万七に。天霧相日方吹羅之とあり。上つ世は秋ならてもよめり。空のみえぬまてくもれるさま也〇水きりあふとは。同巻に水霧相奥津小島尒風乎疾見船緣金都心者念杼とあり。水霧は漲の字也と云說あれと。相の字もそひたれは。猶天きりあひに同しく。海あるゝ時は。天も必かきくもり。霧なと必立物なれは。かくいへるなるへし〇伊勢集に。秋とてや今はかきりのたちぬらんとあるは。かきりに霧をかくしてよめり〇はれぬとは。一に。かりのくる峯の朝きりはれすのみとあり〇おもひまとふとは万十三長哥朝霧のおもひまとひてとあり〇ふるとは。源棆わかれの櫛の所に。霧いたうふりてたゝならぬあさけにとあり〇とちらるゝとは。同夕霧に。夕くれの霧にとちられて云ゝ〇わたるとは。同巻に。空のけしきもあはれに霧わたりて。山の陰をくらきこゝちするに云ゝ〇秋霧。朝霧。夕霧。川霧なとよむことつね也無二子細一〇たな引とは。三雜秋。炼霧のたなひくをのゝ萩の花とあり。万には。霏ゝ。輕

引なとをたな引と訓す。すへていとうすく立わたれるを云○こむるとは。帖に。秋きりのふもとをこめてたちぬれは空にそ秋の山はみえけるとかり。又兼盛集に。戀しくは川せの霧のよをこめてとかけてもよめり○霧にぬるゝとは。万二人丸長歌。夕霧尓衣(コロモ)者沾(ハヌレ)而草枕。又万九。秋きりにぬれにしころもほさすしてともあり（沾尓之衣不下而）○音もせてふるとは（ママ）　心みに我戀めやは音もせてふる秋霧にぬるゝ袖哉謙徳公○ほのめくとは定家卿集。秋。暮にけり又此秋も花薄ほのめく霧に霜むすふ迄○霧のまきれとは。帖に。ことならははれすもあらなむ秋霧のまきれにみえぬ君と思はむ○立まふとは。帖に。秋きりに立まふ峯の山くちはとあり○しほるゝとは。八太上天皇。霧にしほるゝ槇の下つゆとあり○へたつる。かくすなと多くよめり。立かくすともあり○朝きりかくれとは。万十一。曉之朝霧隱とあり○八重たつ霧とは。源夕霧に。おきはらや軒端の露にそほちつゝ八重たつ霧を分そ行へき○霧ふきかくるとは。雅親卿集。露なから霧ふきかくる秋かせにとあり○山霧とは万十人丸拭手折多武山霧茂鴨(タチタナリ)○なけきの霧とは。万十五。我せこか歎の霧。又同巻霧たゝはあか立歎く息としりませ○夜霧とは。万九。黒玉(ヌハダマノヨギリ)夜霧立衣手○初秋霧とは。三雜。むつましきいもせの山としらねはや初秋きりの立へたつらむよみ人しらす○袖の秋霧とは。八右衛門督通光。明ほのゝ川せの波のたかせ舟くたすか人の袖の秋きり○天津霧とは。宝治二年百首定繼卿。山辺をかくすあまつ霧かも○霧の中とは。躬恒集。霧の中のみ山かくれのもみち葉は。又兼盛集。あまの河かはへの霧の中分てなとあり○波の浮霧水のうき霧とは。水の上にたてるを云。又そらにうくともよめるは。一に。朝なく〳〵たつ河きりの空にのみうきて思ひのある世也けり○薄きりとは。清輔集。うすきりのまかきの花の朝しめりとあり○きりの海とは。人丸集に秋くれはかふかの山に立きりの海とそみゆる波たゝたくに○きりのまかきとは。八又家集曾丹。山さとに霧のまかきのへたてすは遠方人の袖はみてまし○霧の關とは。西行上人。にしきはる秋の梢にみせぬ哉へたつる霧の關をつくりてとあり

霧

花みむとしめしかひなく秋霧のあしたの原をたちこむる哉　　稲実

玉ほこのみちゆきちかふかりひとのあとみえぬまてくらきあさ霧　　忠岑

春日野にたつあさきりも君かため松の千とせをこむるなりけり　俊頼

よしの山なき名やきりのたちぬらんいもせの山のなかをへたつる　顯輔

朝霧　花みるといそきおきつるわれよりもまつ朝きりのたちにけるかな　相模

山路霧　これやこのやみのうつゝのうつの山きりにわけいる蔦のしたみち　雅有

川霧　もかみ河霧の下こくいなふねののほるもみえぬあきの夕くれ　光經

田家霧　けさはたゝなるこもひかしいなすゝめたちへたてたる霧にまかせて　覺性

閑居霧深　きりふかきまやのすみかはのきちかくなれくるとりの聲そ聞ゆる　俊惠

○擣衣　漢の砧。音砧 擣繒石也。六書正譌別作枯礁椹竝非とす。順曰。唐韻云。礁亦作砧和名岐沼伊太。碪又同。以石扞繒也。字林云。直春曰擣。古人擣衣兩女子對坐執杵如舂米然今易作臥杵俱云ヨコツチ 對坐擣之取其便也もろこしにては石にてつくり。我國にては木にて作れは。衣板といふをつゝめてきぬたと云にて。礁の字を用るは假てかける也但東宮御事に。太子納妃有石砧一枚又搗衣杵といふをみれは。石にてつくれるもたまくあるへけれと。そのおこりは猶板なるへきは。砧又碪の和名みな岐沼伊太なるをもてしるへし。哥には。秋のよさむになるまゝに衣をいそき。ねられぬまゝにも。又月をなかめかてらも。或は旅にある人に送りやらんとてもうつ心をよむ也。秋の砧。いそくきぬた。里の砧。よるの砧。砧のおと。杵の音。衣うつこゑ。衣うつひゝき。月にうつ。霜をかさねて衣うつなとさまくよめり○詩に九月授衣といへり○朗詠白居易句に。八月九月正長夜。千声万声無了時。又劉元叔句に。北斗星前橫旅宿南樓月下擣寒衣。又菅篤茂句に。擣處曉愁閨月冷 裁將秋寄塞雲長。又後中書王句に。風底香飛双袖擧月前杵怨兩眉低。又同王句に。年ゝ別思驚秋鴈夜ゝ幽音到曉鷄なとみゆ○文選謝惠運擣衣詩云。上略 欄髙砧響發楹長杵音哀 微芳起兩袖輕汗染双題紈素既已成君子行未歸裁用笥中刀縫爲万里衣盈篋自余手幽緘候君開腰帶准疇昔不知今是非○してうつとは。四手打又靜打。御抄にはしつかに打也ともの給ひ。仙覺抄には神帑

を四手共しつともよむ。ともにしつむるの義也なと云はよからす。これは繁打の義にて。げで通音なれは也。四に伊勢太輔。さよふけて衣してうつ聲きけはいそかぬ人もねられさりけり○千たひやちたひ。又千たひ打とは。七に基俊朝臣。たか爲にいかにうてはかから衣千たひやちたひ聲のうらむる。八に式子内親王。千たひうつ砧のおとに夢さめて物思ふ袖の露そくたくる○衣かへすとは。衣は木に巻てうつ也　つちの音の風にとたえて聞えぬはしつか衣をまきかへすほと

**擣　衣**

から衣うつ音しけく聞ゆ也さむきあらしのおとにそへつゝ　　頼　実

ひとりねをうしとおもへは大かたのよさむをよそのきぬたにそしる　　顯　仲

よもすからあはれとそ聞山ひこの聲打そふるしつのさころも　　覺　性

はつしものふるさと人もいまよりやなれぬよさむにころもうつらし　　慶　運

をちこちのさとの秋風ふくるよにたかいねかても衣うつなり　　同

遠聞擣衣　たか爲といそくなるらんよもすからまきのしまひと衣うつなり　　顯　輔

擣衣何方　かせにうつきぬたのおとそ聞わかぬふけはまちかしやめははるけし　　覺　性

曉擣衣　此ころのあかつきさむき月かけにさとものこらすうつころもかな　　光　經

擣衣驚夢　衣うつきぬたのおとに夢さめてこゝそともなくぬるゝ袖かな　　俊　頼

月前擣衣　衣うつおとをそなたに聞なして月みてそ行まきのしま人　　覺　性

遠鄕擣衣　巻かへすほとにやあるらむから衣とをちのさとはうちたゆむなり　　頼　政

覊中擣衣　みやこにはかせのつてにもまれなりしきぬたのおとをまくらにそ聞　　宗　良

○**鴫**　順抄に。鷸を之木とす。田鳥と云。今鴫の字を用るはこれ也。鴫の字またみることなし。漢名鷸。戰國策に。所謂鷸蚌相持と云物これ也。陳藏器拾遺云。鷸如鶉。觜長在泥塗間。作鷸鷸聲。□村民云。田雞所化。亦鵪鶉類也。[illegible]

黍鷸黄脚鷸京女鷸羽斑鷸杓鷸山鷸あり。これ三才圖會にのする所也。又保登鷸。多識篇に枚鷸あり。時珍曰、臨海異物志云、閩越有枚鷸常居枚樹下頭上有長黄毛冠頬正青色如垂綏亦可食とあり又草鷸。木雀鷸。東宇補鷸等の數品猶多しとかや○川鷸は左近集に。そらにこそつゝき數かけ川しきのもゝ羽かきには過やしぬらん。これはたゝ川邊の鴫なるへし○鴫のはねかきもゝ羽かきとは一の戀五にあかつきの鴫のはねかきもゝ羽かき君かこぬよは我そ數かくとありこれ羽虫なとありて羽かきするにあらす。立ありくに羽をつかふを云。百羽かきとはしけきをいふ。されは万葉（ママ）に。春まけて物かなしきにさよふけて羽ふりなく鳴たか田にか住。近昔にては家隆卿六百番哥合に。明ぬとて沢立鳴の一こゑは羽かくよりもあはれ也けり。これらにて。とぶ〳〵つかふ羽音なることとみるへし○のほり羽。源仲正。明ほのの鳴ののほり羽かきつかむ雲ゐはるけき戀もする哉。これ立あかる羽と云なるへし○物さひしき物かなしきなとを鳴にそへてもよめり

鴫

山田もるあきのかり庵のいなむしろしきの羽おとにゆめもむすはす　雅有

夕きりのへたつる庭はしらねとも鳴たつかたや沢辺なるらむ　宗良

暁鴫

かすく〳〵のしきのはねかき夢さめてとりのやこゑはまつとしもなし　称名院

田鴫

もろひとの袖いかならむ夕まくれ物さひしきの沢田たつおと　雅親

月前鴫

しろたへに沢辺のみつは月すみてまたふかきよに鳴そたつなる　同

○ 鶉

順抄に。和名宇都良。漢名同上。但有班曰鶉無班曰鷃。詩小南云。鶉奔〻。莊子。聖人鶉居。荀子。子夏之衣懸結如鶉なとあり。時珍曰。鶉性醇竄伏淺艸無常居而有常匹隨地而安。莊子所謂 鶉居是矣。其行 遇小草即旋避之亦可謂醇。和訓にもうつらはうつるの義にて。其居をかふるによりて云也とあり。劉禹錫食經曰。鶉蝦蟇所化也。楊億談苑曰。□道二年夏秋鶉者車載積市皆蛙所化 猶有未全變者萬畢術。亦曰。蝦蟇得瓜化爲鶉。交州記云。南海有黄魚九月變爲鶉。宗奭曰。鶉有雌雄常於田野屢得其卵何得言化也。時珍又曰。鶉始化成終以卵生。故四時有之。これらの說いつれかし

かる事をしらす。月令云。三月六日田鼠化爲鴽。時珍曰。鴽如田鼠化。終復爲鼠。故夏有冬無。しかれとも今鶉を養ものをみるに。冬も猶あれは。かたよりて云かたし〇かたうつらは友なきをも云。又妻なきをも云。毛に斑文なきを鵪と云これ也と云說あり。これ班文を俗にもかたと云故なるへけれと。古義にかなはねは用へからす〇五十戸良。万五貧窮問答の長哥に。五十戸良我許惠波寢屋度麻低來立呼比奴とあり。仙覺曰いとうとを通はしいふは。魚をうをと云かことし。季吟も門の外迄。鶉の來鳴なりといへれと。前後の詞意に叶はす。これは數十人の負債をはたる邑にて。鶉にはあらし〇うつらなくふりにしさとゆ思へとも。同十一。鶉鳴人乃古家に。同十七。鶉鳴布流之登比等波於毛幣禮騰なとあり。鶉はあれたる處の野と成たるに栖ものなれは。かくつゝけられたり〇鶉成伊波比とは。万二人丸。うつらなすいはひ廻雖侍候。此外にもあまたみゆ。鶉ははひまはる物なれは。祝にかけてよめり。いは發語也。寂蓮法師。西行上人とひて侍ける返哥の中に。うつらはふ門はこの葉にうつもれて人もさしこぬ大はらの里〇かけうつら。藻塩草に云。馬にて鷹をすゑて持て。鳥をたてゝあはする也。かけとはかくるゝ也とあり。哥に。秋風に尾花か波のかけ鶉袖吹かへすまのゝかり人。今案此哥は尾花か波のかけとそへて。鹿毛といふ義にや〇はとのうつら。源仲正集戀。人心鳩のうつらか箸鷹のせめてこふれとのかれのみ行。鶉の一種。鳩の毛色に似たるにや。よくかくれまはるものなるへし〇うつらの床。新帖に。かへりさす鶉の床や寒からしとあり。鶉の臥とをいへり〇鶉おとなふ。俊頼朝臣集秋興。山田もる木曾のふせやにかせふけはあせつたひして鶉おとなふ〇うつらかり。万代よみ人しらす。よろの子はまろにたはらん手にすゑて栗津のはらの鶉からせむ〇うつらふす。うつら立なと多くよめり〇鶉之奔ことは詩鄘風にあり鶉は行先に細き草あれは道をさけかふるを云〇うつらとなきてとは。憂とかけたり。一戀業平朝臣か。いとゝふか草の哥のかへし。野とならは鶉となきて年はへむとあり

鶉　　露をふくあさちかはらのあきかせにゆふへはさそなうつらなく聲　　雅親

里鶉　さとはあれてふりそふころの露霜にかはらぬ床もうつらなくなり　　同

故郷鶉　すまはこそならへてもみめふかくさやうつらの床のよゝのふるさと　俊重

○野分　順抄云。暴風。漢語抄云。和名八夜知。又乃和木乃加世。月令曰。仲秋之月盲風至。注云。盲風疾風也。尓雅曰。暴風曰出而風曰暴風從上下曰頽風從下上曰飈。又曰。扶搖風。但暴は思ひかけすおこるを云。しかれは俗に云俄風なるへし。野分はもと風の名にあらねと。野辺の千種を吹分るはかりの風は。秋に吹故に。帖に。秋かせは野分山わけふくなれと戀のみゝにはわく人そなきとありて。風の部に野分と云題をおかれす。されと秋ふかくなりては。かならす野分する風のふく物たれは。中むかしの末より。野分を風の名とせりとみゆ○源野分に。のわき例の年よりもおとろ〳〵しく。空のけしきもかはりて吹いつ。中略もとあらの小萩も。はしたなく待えたる風のけしき也。折かへり。露もとまるましう吹ちらすを。略いとうたて。あはたゝしき風也。みかうしおろしてよ。略風こそけにいはほも吹あけつへき物なりけれ。略風のさきにあくかれありき給ふもあはれにみゆ。略またかくさわかしき野分にこそあはさりつれと。たゝわなゝきにわなゝき給。おほきなる木の枝なとのをるゝ音もいとうたてあり。略おとゝの瓦さへのこるましう吹ちらすに。略かせさわきむら雲まよふゆふへにもわするゝまなくわすられぬ君。これをとりて六百番哥合に。夕まくれ村雲まよひ吹風に枕定めぬ花の色〳〵。又寂蓮法師。思ひやる我心まてしほれきぬ野分するよの花の色ゝなとあり○野分たつ。たつは起也 野分の風。野分する。野分のゆくへ。野分のあと。野分の後なとつねによめり

野分　をしかふすあとたにつらき秋萩の錦をしなみのわきたちぬる　雅親

○葛　蘇敬本草注云。葛穀一名。葛實名也。和名久須加豆良乃美。葛脰。和名久須加豆良乃補。葛根。入地五六寸名也。詩邶風旄丘之葛兮何誕之節兮。又同。葛覃兮施于中谷惟葉萋ゝなとあり○まくすとは。眞は。葛の類にくまつゝら女かつらさねかつらえひかつら青つゝらすひかつらくそかつらなとあるにわかたむとて也○くすとも。又くすかつら共よめり。家持集。神なひのみむろの山の葛かつらうら吹かへす秋は來にけり○くす花万第七草の旋頭哥に。尾花くす花とあり。花は紫色にして藤のことし○くす葉。又まくす葉。又くすの葉なとあり。花をもめつれと多くは葉をよめり○うらみとは。葛はよく風に隨ひて。葉の吹

返さるゝ物なれは。裏を見のの（ママ）心に。恨をそへてよめり。帖定文。秋かせに吹かへさるゝ葛の葉のうらみても猶うらめしき哉〇はふとは。万七長哥。延葛乃弥遠永。又帖兼覧王。あし引の山下しけくはふくすの。又一秋下貫之。千はやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり〇まくす糸くるとは。万七。女郎花生る沢辺のまくす糸いつかもくりて我きぬにきん。これいはゆる葛布葛衣にて。詩葛覃にも爲レ絺爲レ綌服レ之勿レ斁といへり。くるとは糸に繰て織むとする也。眞阿法師の。秋をへてあるゝかきほの葛かつら風こそかよへくる人もなしとよめるはこれにこと也。これはかつらのよせにいへる也〇はひかゝるとは。八雑上曾丹。山さとのくすはひかゝる松垣の隙なく物は秋そかなしき〇夏葛のたえぬとは。万四。夏くすのたえぬ使のかよはねはとあり。夏ならすともかつらのよせなれは。たゆともたえぬともよむへし〇ひかはよりことは。帖。あしからの箱根の山にはふ葛のひかはよりこねしのひ〳〵に〇あやかりやすきとは。帖。風はやみ峯のくす葉のともすれはあやかりやすき人か心か。あやかるは俚同。風ふけはやかて葛葉のみたれやすなるを云〇うつろふ。又色つくとは。帖。かれかねて霜にうつろふ葛のはの。又。我やとのくすは日ことに色つきぬとあり〇玉まく葛とは。蔓の輪のことくしけくまとひて。手に玉をかけたらむやうになるを云。七夏に藤原定通。焼すてゝふる野のをのゝま葛はら玉まく斗成にける哉。此哥より藻塩草に。玉まくは夏といへと。十三秋上太上天皇。置もあへすみたれにけりなしら露の玉まく葛に秋風そ吹とも。又現在秋にも玉まく姿あれは。いつれにもよむへからん〇まくすはら。吉水僧正の。我戀は松をしくれのそめかねてまくすかはらに風さわく也の哥より。ま葛か原は。吉水の南とも。又比獻（ママ）の横川共いふは。兩所ともに此僧正の住給ひし所なれは。後人のさためたるなれと。葛の多く生たる原は。いつかたにても眞葛か原とふるくよめり

葛

よのうきめみえぬ山路の葛の風いかにふけはか先うらむらん　　宗牧

かせわたるしつかかきねにはふ葛のくるしやなにのうらみなるらん　　宗良

岡葛風

露の身をいつくに岡のくすはらや一葉もやすき秋のかせかは　　正徹

○菊　順抄曰。四邑字苑云。菊日精草也。和名加波良與毛木。一云可波良於波岐。同抄白蒿、和名亦云、加波良与毛岐。又茵蔯和名比岐与毛木。今俗是謂二加波良与毛岐一。これらをあはせ考るに。加波良與毛岐はもと白蒿之路与毛木の名なれと。菊の葉の似たれはあやまりてしか云にて。もと此國になかりし花なることは。仁德天皇七十三年。始渡二異朝一青黄赤白黒菊種一也とあるにしるし。異朝とは三韓なるへし青黒の菊未詳　されは菊の邑岐久を。やかて訓に用ひたるなるへし。さて菊に數種あれと。もろこしにて菊とのみいへは黄花なりと云。これは月令に。盛德在レ金といひ。吳淑秋賦に。金氣方勁なとあるより。金商金素庚金を秋の一名とし。又金風を秋の風とす。されは史正忠菊譜序にも。菊草屬也以レ黄爲レ正。又范至能後序にも。金譜先レ黄而後レ白とあり。黄は秋の正氣とする故也。しかのみならす黄花は其味もその香もことさらなれは也。我國にてはなへてもてあそへるは白菊なりといふは。一秋下敏行朝臣。久かたの雲の上にてみる菊はあまつ星とそあやまたれぬる。又聖廟御哥に。秋かせの吹上にたてる白きくは花かあらぬか波のよするか。朗詠には紀納言九日句に。先二三遲一兮吹二其花一如三曉星之轉二阿漢一。其外しら菊をよめる哥多し。これらよりしら菊はかりをめてけむよと思ひはかりての說なれと。帖草部に。菊のはな千くさの色をみる人の心さへにそうつろひぬへき。又伊衡。ひとくさにさくはかひなしもゝ敷にうつしてのちは色かふな菊なとよみ。又一に菊の哥の中にて躬恒の。白菊をよめるとことわられけるなとをあはせてみるに。中むかしの比はしら菊のみ多くありて。外の色すくなかりけれは。しら菊を多くよめる斗にて。あなかちにしら菊をもてはやせるにもあらし○いにしへはしら菊のうす紫にうつろひたるを。はつ花のやうにもてあそひけり。一に大江千里。秋を置て時こそありけれ菊のはなうつろふからに色のまされは。又よみ人しらす。色かはる秋の菊をは一とせに二たひにほふ花とこそみれ○山路の菊。一秋下素性　ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我はへにけん。これは南陽酈縣有二菊潭一飮二其水一者皆壽此心也。これより齢をのふる事を多くよめり。天曆八内裏御屛風。水にさへ流てふかき吾やとは菊の淵とそ成ぬへらなる○俊成卿。山ひとの折袖にほふ菊の露打はらふにも千代はへぬへしとあるは。神仙傳有二康正一者服二菊花一成レ仙と云におこれり○一秋下。菊の花のもとにて人の人まてるかたかけるをよめる友則花みつゝ

人まつ時はしろたへの袖かとのみそあやまたれけるとは。續晉陽秋曰。陶潜嘗九月九日無酒宅邊東籬下菊叢中摘菊盈把坐其側未幾望見白衣人至乃王弘送酒也即便就酌醉而後歸○四秋下伊勢大輔。めもかれすみつゝくらさむ白菊の花より後の花しなけれは。これは唐元愼か句に。不是花中偏愛菊此花開後更無花と云心をとれり。されは梅を兄とし菊を弟とするも此故也。十四（齊時）咲そめし梅より菊にうつる迄花のいく色なれてみつらん。又季經卿（喜多院法親王家五十首中）百草の花の弟となりぬれはやへくにのみみゆるしら菊。又菊といふことをいはすして。崇德院（久安御百首）はつ春の梅をたにとそをしみしかおもへは今はひとつこの花。又六秋（道命）ことしまた咲へき花のあらはこそうつろふ菊にめかれをもせめ○菊合。一秋下聖廟御詠の詞書に。同し御時（寛平）せられけるきくあはせに。洲濱をつくりて菊を植たりけるにくはへたりける哥。吹上の濱のかたに菊うゑたりけるをよめるとあり。又著聞集に。延喜十三年十月三日（ママ）御記云。仰侍臣令新菊花十本分三番相争勝負賭以中時各方領花參入（一番人自仙華二番人自瀧口）次第進花立庭中（一番種花以洲濱形二番栽火桶各藏人所二人取立御前）左衞門督藤原朝臣候御前傳作勝負十番勝方簾中拜舞選進菊中各四本栽西方小庭この時の菊の名所は水無瀬廣沢紫野大井となせ田簑嶋佐保川吹飯いせあしろの濱相坂關川なり○菊をつむとは。楚辭。屈平朝採木蘭之墜（ママ）露夕飡芳菊之落英又陶淵明。九月九日に東籬下菊叢中摘菊なとあり。三秋（みつね）長月のこゝぬかことにつむ菊の花のかひなく老にける哉。又五（顯季卿）千とせまて君かつむへき菊なれはなとあり○菊花をかつらにゆふは。二秋下。おとこの花かつらゆはむとて。菊のありと聞所にこひにつかはしたりけれは。花にくはへてつかはしける。みな人にをられにけりと菊の花君か為にと露は置ける○むら菊（經信卿）うつろへはにしきにまかふ色をみてむへむら菊と人はいひけり。これいはゆる叢菊也。きぬ一疋を一・むらといふにそへたり○紫菊四秋下（善忠藝臣）紫にやしほそめたるきくの花うつろふ色とたれかいひけむ○ひともと菊。一秋下。に一もとゝ思ひし菊を大沢の池の底にもたれかうゑけむ。又兼輔集。むらさきの一もと菊によろつ代をむさし野にこそたのむへらなれ○八重さく菊。又八重菊共。四秋下（長房）朝またきやへさく菊を九重にかゆるは霜のおけは也けり。又忠房。八重菊の花の枝をあすとや（ママ）菊のうはきを猶かさぬらん○黄菊。法印靜賢。川淵のこゑねをたつるとみえつるは岸なる菊をあらふ也けり○新白菊を

大貮高遠卿 白かねとこかねの色に咲まかふにの菊の花にそありける○そか菊三雖一かのみゆる池辺にたてるそか菊のしけみさ枝の色のてこらさ。そか菊は承和菊にて。承和帝よりはしめて菊をもてあそひ給ふ。此御時はいまた黄菊のみありけるとそ。されはそか菊は黄菊也共。又ひともと菊也ともいへるは用へからす。紀又万にも。背向をそかひとよめれは。こゝもまほならすみゆる菊と云ならん。しけみは繁也。さえたは小枝也。てこらさは照濃さと云也。いつれも哥によからぬ詞也○菊のきせ綿。又菊のわたきぬとは。二秋下。隣にすみ侍ける時。九月八日伊勢か家の菊に。わたきせにつかはしたりけれは。云々 これは藤原雅正かきせにやりし也。又紀事曰。菊綿傳言今日唱門師詣大黒参禁裡種菊花於常御殿之前明朝官女等取綿使蒙階下菊花是謂菊綿又稱衣綿也。傳云。菊綿挿小兒之衣領之内無疾病故節後頒賜之云。新帖に信実朝臣 垣ねなる菊のきせわたけふみれはまたきさかりの花咲にけり。又建長八哥合行家卿 色ゝにきくのわたきぬ染かけてまたきうつろふ花とこそみれ○菊を聞にとりなせるは。四秋下赤染衛門 きくにたに心はうつる花の色をみに行人はかへりしもせし○白菊のしらを知にかけたるは。同秋下經衡 植おきし人の心はしらきくの花よりさきにうつろひにけり○花のあるしとは。堀川太郎百首に匡房卿 かはかりのにほひはあらし菊の花うへこそ花のあるし也けれ。又長明伊勢記菊の長哥に。しら菊は草のあるしとなりなから云々 ○菊を薬とするとは。永久四百首 九月九日仲実 けふことに菊をくすりとする人は千とせの秋をすくる也けり○ちらぬとは。定家卿集に。しら菊のちらぬはのこる色かほに春は風をもうらみつる哉。又爲実卿九十九首の中 かれぬれはちらてもねにやかへるらんふるえの。菊は若葉さすなり。唐太宗句に。菊散滿庭金とも。又所によりて散菊もあれと。大かたのはちらぬ也○菊の關とは。此花開後更無花の心にて。此花の後又花なけれは關とはいふ也。(ママ)女秋新院御製。秋ふかみ花には菊の關なれは下葉に月はもりあかしけり○まさり艸。寛平御時菊合の哥よみ人からす すへらきの万代までにまさり草たまひしたねをうゑし菊なり。此外四季菊ほし見艸千代見草金草霜見草乙女草なとの名いと多けれと。哥にはこのみよむへからす○權大納言長家卿集に。雲の上に菊ほりうゑてかひの國つるの郡をうつしてそみる此哥注云。風土記に。甲斐國鶴郡有菊花山流水洗菊飲其水人壽如鶴云々 ○をるとは。忠峯集。をる菊のしら露

おほみわかゆてふぬれきぬをこそ老のうへにきれ。又貫之集。一枝の菊をる程にあら玉の千とせをたゝにへぬへかりける○かさすとは。顯季卿集。色もかもむつましき哉菊の花千とせの秋のかさしとおもふ［菊閑中友］宋周茂叔。愛蓮説曰。菊花隱逸者也。又范至能菊譜序に。此幽人逸士之操雖ニ寂寥荒寒而味道之腴不ㇾ改ニ其樂一也。これ菊の趣を云也［菊制頽齢］陶潜詩云。酒常(ママ)祛ニ百病ニ菊爲ㇾ制ニ頽齢一。よはひのかたふかむとするをとゝむるといふ心也［殘菊］殘はもとそこなはるゝの義にて。のこると云義はなけれは。菊のうつろひたるをこそよむへけれと。菅家文集に。黄華之過ニ重陽一世俗謂ニ之殘菊一とかゝせ給ふをみれは。中昔より殘をのこるとよみて。重陽におくれたるをいへり。又根源に。殘菊の宴を十月五日とあるをみれは。冬かけてうつろひのこるをも。又折おくれて咲そむるをもよむへきは。躬恒集にのこりの菊を。菊の花けふを待とてきのふ置し露さへ消て今さかりなるとあり。又組題によりて。秋にも冬にも此題をおかるゝも此例に同し。これは其組題の定に隨ひて心してよむへし

菊
めもかれすみつゝくらさむしらきくの花よりさきの花しなけれは　伊勢大輔
ひまもなく咲みちぬれは八重かうへに八重かさなれるませの白菊　覺性
老せすは猶とりそへん菊のはな千世もとおもふ人のかさしに　宗尊

山路尋菊　をのゝえのくちにしあとをいつくとも君にやとひてしら菊のはな　爲重

庭上菊　夕つゆにみたるゝ花の色そひてまかきにあまる庭のしらきく　顯仲

籬菊花　いつとなくまかきの竹はときはにてうつろひ身(ママ)りしら菊の花　雅經

谷　菊　(校者云歌ナシ)

水岸菊　水にうつるかけなかりせはしら菊のたゝ一むらとみてややまゝし　頼政

菊浮川水　(校者云歌ナシ)

月前菊　しらきくの下葉にやとる月かけはをれふす枝の花かとそみる　覺性

菊露　あさた／＼うつろふ菊におく露ゝ花ゆゑにこそ色かはりたれ　宗良

菊関中友　（校者云歌ナシ）

菊花薫袖　（校者云歌ナシ）

残菊　霜かゝるはしめとみすは白菊のうつろふ色をなけかさらまし　雅光

残菊匂　打はらひをる袖さむくにほひけり霜のまかきにのこるしら菊　光経

○

【九月九日】　月令廣義曰。九月九日故曰重九。又潜確類書曰。魏文帝与鍾繇書云。九爲陽數而日月並應故曰重陽。廿七隆祐朝臣。めくりあふ月日も同し九重にかさねてみゆる千代のしら菊○續齊諧記曰。汝南桓景隨費長房遊學長房謂曰九月九日汝家有災厄令家人作絳袋盛茱萸繫臂登高山飲菊花酒此禍可消景如其言擧家登山至夕還雞犬皆暴死長房。曰代之乎今人至九日飲菊花酒始此。又孟嘉傳曰。嘉爲桓温參軍既和而正温甚重之九月九日温遊龍山參僚畢集時佐吏並着戎衣有風至吹嘉帽墮落不覺。又襄陽記云。鳳嶺高處有三隥即劉弘山簡九日宴賞之所。續撰吟一逍遙院。にきはへる民のけふりの秋をみむたかきにのほるけふを待らん。又公條卿。あまつほしの光にちかき山のかみのほりてむかふ菊のさかつき。共に此故事を用ひたまへり○西京雜記曰。漢武帝宮人賈佩蘭九月九日佩茱萸食蓬餌飲菊花酒云令人長壽相傳自古莫知其由。又朗詠紀納言九日の辞に。採故事於漢武則赤萸挿宮人之衣と作れるはこれ也。此下句に。尋舊跡於魏文亦黄花助彭祖之術。莊子逍遙遊云。彭祖乃今以久特聞但其年八百歳云。詳于列仙傳。又魏武帝与鍾繇書曰。九月九日草木遍枯而菊芬然獨秀今奉一束。これらをおもひ誤りて作られけるにや○此日菊を服すれは人老すと云は。太淸諸草木方曰。九月九日採菊花與茯苓松脂久服之令人不老○菊の盃は。漢武の故事。其外にもあまたみゆ。菊を酒□うかふる事は。齊民月令曰。重陽日必以糕酒登高眺迥以暢秋志採茱萸甘菊泛酒とみゆ○此題は大かた。菊又は菊の盃なとをむすひてよめり。重陽宴。残菊宴は。公事の条にゆつりてこゝにいはす

【重陽日】　全九月九日に同し

九月九日　をる人はいのちをのふと聞なへにちることしらぬきくの花かな　　道済

○【蔦】【蔦紅葉】順抄に。絡石。又三才圖會に。烏蘝苺。ともに豆太と訓ぜり。保昇曰。絡石生大石間凌冬不凋葉似細橘葉著處即生根鬚包絡石旁花白子黑。これ俗云定家蔓也。本綱云。烏蘝。塍塹間多其藤柔而有稜一枝一鬚凡五葉葉長而光有疎齒面青背淡如白蘝（和名やまかゝみといふ）葉故名烏蘝七八月結苞成簇青白色花大如粟黃色四出結實大如龍葵子生青熟紫內有細子。これ俗に云夏蔦にて。秋はもみちする物也。又同書に。地錦生林下葉如鴨掌藤蔓着地節處有根亦緣樹石冬月不死。これ俗云冬蔦。三才圖會云赤草にして。哥によめる蔦にあらす。蔦は。陸佃埤雅云。松柏上寄生女蘿松上浮蔓。又俗に松蘿とす。陸機詩疏に。松蘿蔓延松上。和名萬豆乃古介。一云佐流乎加世。又本草云蔦一名寓木。所謂寄生草也。葉似當盧子如覆盆赤黑□美。しかれは皆ことなりといへとも。烏蘝これにちかしといふへし○おのかむき〳〵とは万九（長哥上下略）蔓都多乃各各向〻天雲乃別石往者とあり。蔦のかつらの樣〻にのひ行を云○わかるゝとは同十九に（長哥略）波布都多能和我礼尓之欲理。これも上と同義也○蔦かつら。はふ蔦。色つく蔦なとよむことつね也。又軒垣松その外木〻の梢にかゝるさま多くよめり○うつの山。蔦を名たかくよめり。伊物上。うつの山にいたりて。わかいらむとする道はいとくらうほそきに。つたかえてはしけりとあり。これをはしめとして。蔦の下道。蔦の細道。なとうつの山によめり○兩題共に。秋ふかくもみちするさまをよむへし

蔦　　夕しくれふるさとさむき秋かせに軒はにもろきつたのもみち葉　　後伏見院

○【柞】【柞紅葉】漢語抄云。和名波波曾。俗云ほうそ也。詩小雅折其柞薪。注云。柞櫟也。詩緝曹氏曰。柞堅忍之木新葉將生故葉乃落附著甚固。又本綱云。柞乃為橡櫟之異名蓋櫟枝長葉盛叢生有刺。詩晨風。山有苞櫟。陸璣曰。即柞櫟也。秦人謂之櫟徐人謂之杼或謂之栩其實謂之皂時珍曰。櫟柞木也。此木堅忍可為鑿柄。これより今の俗。鑿子木を柞といふは誤也。但柞有二種一種不結實者名曰棫不心赤詩大雅旱麓瑟彼柞棫。又同大雅云。柞棫拔矣。是也。今案。柞は楢の類にて枹のことく。葉さやかにして秋もみちす。しかれとも色濃からぬ也。一秋下□佐保山の柞の色はうすけれと秋はふ

かくもなりにける哉〇はゝそ葉。万二十長歌 島守にわかたちくれははゝそ葉の母のみことはとあり。これははゝそに母をつゝけてよめり。又はやかてはゝそといふに母をそへてもよめり〇柞の森は大和の名所なり。定家卿。時わかぬ波さへ色にいつみ河柞のもりにあらし吹ころ〇はゝそ原。万九。山品之石田乃小野之母蘇原〇うすきならひとは。爲尹卿千首中 柞はらうすきならひをわすれつゝしくれにかこつ秋の山こえ。又たゝ色のうすきをはいはて。もみちするよしをのみよむもつね也

柞紅葉　そむれとも千しほはみさほさほ山の秋を色にもふるしくれかな　雅親

〇 櫨 櫨紅葉 和名波尓之。はしとのみ云は畧せる也。今黄櫨木也。救荒本艸に。田田䤄とあり。又陳藏器曰。黄櫨生商洛山谷四川堺甚有之葉圓木黄可染黄色。呂氏春秋曰。箕山之東有盧。注云。櫨果名夏熟しかれは今の櫨にして。天子の黄袍を黄櫨染と云もこれにてそめたる也。又弓につくるもこれにて。ぬるでの類なり。万二十家持卿の哥に。はし弓を手にきりもたしとありて。古より弓につくれりとみゆ〇はしを端にとりなせるは。信太杜千首宗良 ゆく雲の外山にうすきはしもみち猶奥ふかくみせぬ色かなとあり〇はしの立枝は。六秋仲実 鵙のなる櫨のたち枝の薄もみちたれ我宿の物とみるらん〇かた野河内によみつけたり。八秋雅経 鶉なくかた野にたてるはしもみちちりぬはかりに秋かせそ吹

櫨紅葉　（校者云歌ナシ）

〇 檀 檀紅葉和名萬由美。詩伐檀曰。坎坎伐檀。陸機詩䟽曰。檀楡之類也。陳藏器曰。樹體細堪作斧柯至夏有不生者忽然葉開當有大水農人候之以占水旱号爲水檀但檀有黄白二種葉皆如槐皮青而澤。其肌細膩。其體重堅。其實如楝子而小成簇。始青熟淡赤裂皮內有紅子二三粒其葉秋紅。いにしへより。もはら弓につくれり。故に哥も多く弓のよせある詞をとりてよむ也。みちのくにの檀紙もこれにてつくれる也。源末摘に。みちのくに紙とあるこれなり〇しらまゆみは。白檀にてこれに同しからす。雜部木条にくはし〇岩かきまゆみは。治承三年九条殿下家哥合 大貳入道紅葉の哥に。秋ふかき岩かきまゆみもみちして錦をかこふみ山への里。これは一秋に。おく山の岩垣もみちとあるに同しく。岩垣のわたりなるまゆみなり

○檀紅葉　（校者云歌ナシ）

○黄葉　万には黄葉をもみちと訓したれと。後世此題には薄もみちをよめり。但。柞は前にもいふことく。色あさき物なれは。此題に多くよみつけたり。又其外の木〻も。皆いまた色ふか〻らぬほとの心を詮とよむへし

黄　葉　くれなゐのふかきはまたき下染もかつ〳〵あかぬ山のいろかな（ママ）　雅　親

○紅葉（モミチ）　大よそ。きぬを紅にそむるには。紅花をもみ出して染る也。されは紅葉の色ももみ出して染たらむやうなれは。もみいづといふをつ〻めてもみづるとはいふ也。万にも。秋付者丹之穂尓黄色（ツケハ）（モミツ）。又我屋戸尓黄變蝦手（ワカヤトニモミツルカヘテ）なと訓し。二［　］かく斗もみつる色のこけれはやともよめり。かくある詞を体にして。紅葉をもみちともいひける也。もとぢはいでのつ〻まりたる音なれは。猶用にして。もみちはしむる。もみちする。もみちぬなともよめり。但。もみち葉とは。万には紅葉霜葉赤葉黄葉（黄葉はこ今のたかひあると上の黄葉の条にいへり）なと皆もみち葉と訓したれと。今はた〻もみち葉とのみ書へし〇古より紅葉をふかくめてけることは。万一。天智天皇詔二内大臣藤原朝臣一（鎌足公なり）競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時。額田王（ヌカタノ）以レ哥判レ之（長歌上下畧）秋山乃木葉乎見而者黄葉乎婆取而曾思奴布（コノハヲミテハモミチヲハトリテソシヌフ）云々。これ秋を勝れりと判せられたり。又源乙女六條院の所に。九月（ナカツキ）になれは。もみちむら〳〵色つきて。宮（秋好中宮）の御まへ、えもいはすおもしろし。風打吹たる夕暮は。御はこのふたに色色の花もみちをこきませて。こなた（紫上）に奉らせ給へり。（中畧）御せうそこには。心から春まつそのは我やとのもみちを風のつてにたにみよ。（畧）おと〻。此もみちの御せうそこいとねたけなめり。春の花さかりに此御いらへは聞え給へ。此比もみちをいひくたさむは。たつた姫の思はむこともあるをとあり。又万七。秋山黄葉何怜浦觸而（ニモミチアハレトウラフレテ）ともみゆ〇かへての紅葉をよめるは。万八我屋戸尓黄變蝦手毎見（ワカヤトニモミツルカヘテミルコトニ）とあり。かへては。漢名未詳。楊氏漢語抄には鶏冠木を加倍天とす。又万には。楓は加都良として桂にあて。加倍天は蝦手とかけり。これ葉の蝦蟆の掌に似たれは。加比留提（カヒルテ）の木と云を略してかへてとは云也。本綱云。楓葉有レ岐作二三角一至二霜後一葉丹可レ愛　又格物論云。楓香樹似二白楊一大數圍。高亦數丈。枝條榦。葉圓岐分二三角一有二脂香一毎レ至二秋抄一其葉皆赤如二錦爛然一可レ見。又云　楓花白實大如二鴨卵一此ころ雅波の何かしか花園に行てみ

るに。もろこしの楓あり。けに前の本綱格物論等に載たる處に露たかはす。葉の形木のさま共に楕に似て。我國の蝦手のごとくなよひたる木にあらす。又一とせ肥前の長崎にあそひしに。呉人ゝ五粒枩と蝦手を多く買て歸るよしを聞て。譯人何かしにとふに。しかりといふ。但かの國にも松蝦手はあれと。八岐の蝦手と。五粒松の葉のみしかきかなけれは。さてそれをなんかふといへれと。この呉人も譯人も。草木のことにくはしからねは。さたかならぬことなれと。ある人の家にて。停レ車坐愛楓林晩霜葉紅レ於二二月花一と云句の心を。明人の爲にかけるをみるに楓のかたち蝦手にことならす又金瓶梅といへる小説の圖の中に。蝦手のことき木を。呉人の渥朱にていろとれるあり。又ある人のもたる。宋元の比のにやとみゆる畫のおもてに。蝦手に似たる木を爲かけり。これらをみれは。もろこしにも楓の外に蝦手ありやいなやをしらす。漢語抄にいへる鷄冠木は。もろこしのふみ〳〵にみることとなし。これも蝦手と同しく。狀によりて我國にて作れる名なるへし。又今用うる楓は。皆かつらとよみて。順抄に一名乎加豆良といふ木なれは。かの有レ脂而香ものにや同しからむ。又万十四には。こもちやまわかかへるての共よめり○さくらのもみちは。一秋下。貞觀の御時。綾綺殿のまへに櫻の木ありけり。西のかたにさせりける枝の。もみちはしめたりけるを。さふらふをのことものよみけるついてによめる。藤原勝臣。同しえをわきてこの葉のうつろふは西こそ秋のはしめなりけれ○楢の葉かしはのもみちは。十一秋信実みるまゝにならの葉かしはもみちしてさほのわたりの山そしくるゝ○まさきのかつらは。神樂庭燎。み山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけり。又たゝかつらをよめるは。十一秋西園寺入道秋の色にしくれぬ松もなかりけりはふ木あまたのかつらきの山○菊は後柏原院御製白妙の袖の外なる色もみつ菊のかきねの庭のもみち葉○ぬるては。順抄に楊。和名沼天。辨色立成云。白膠木和名上同とあり。又崇峻紀にも白膠木とみゆ。これ也。爲尹卿千首の中村しくれぬるても櫨もみえわかすとあり○萩は。家持集。下葉色つく我やとの萩○柿のもみちは。伊勢集詞書。上畧。柿の紅葉に哥をなむかきつけたりける。人すますあれたる宿を云ゝかへし涙さへしくれにそひて云ゝとて。ねすもちの紅葉にさしてなんやりける畧○かつらのもみちは。三秋忠岑色ゝのこのはなかるゝ大ゐ川しもはかつらのもみちとやみむ○初もみちは。万八我念君者秋山初黄葉尒似許曽有家礼

云〻〇薄もみち。無二子細一〇岩垣もみち。一秋。おく山の岩かきもみちとあり。岩垣のわたりのもみち也〇下もみちとは。下葉のもみちせる也。山森露なとの下もみちとつゝくるは。其物の下の心なから。猶心あるへし〇にほひとは。万十七。秋佐礼波黄葉爾保比。又同十九。長哥畧 秋葉之尒保比尒照有なとあり。にほひは光澤をいへり〇もみちの賀は。紅葉の陰にて賀筵を催す也。源紅葉賀に。行幸にはみこたちなとよにのこる人なくつかうまつり給へり。畧 こたかきもみちの陰に。四十人のかいしろめかさしのもみちいたうちりすきて。かほのにほひにけおされたるこゝちすれは。おまへなる菊を折て。左大将さしかへ給とあり〇紅葉の舟は上東門院東三条殿にいてさせ給ける時御舟のやかたに紅葉をしたる事。俊頼口傳にみゆ〇錦にまかふは。一序に。秋の夕龍田河になかるゝ紅葉をは。みかとの御めに錦とみ給ひ　〇一秋下貫之 みる人もなくてちりぬるおく山のもみちはよるの錦也けりとは。孟子如二衣レ錦夜行一。とあるをとれり〇はた物もなき錦とは。二秋下。から衣たつたの山のもみち葉ははた物もなき錦也けり〇はたはりひろき錦とは。三秋躬恒 水うみに秋の山へをうつしてははたはりひろきにしきとそみる。はたはりひろきとは。機のはゞひろきをいへり〇もみちかさねは。雑の部衣の条にくはし〇時雨の染るとは。一秋。神無月しくれもいまたふらなくにかねてうつろふかみなひのもり〇露のそむるとは。一秋。しらつゆの色はひとつをいかにして秋の木葉を千〻にそむらむ〇そむるうつろふ色かはる色にいつる色つくなとみなもみちするを云。又万三。みれとあかぬいませし君か黄葉乃移伊去者かなしくもあるかとあるも。猶もみちの色に出るをいへり。いは助字にて。うつり行の心也〇龍田姫。又山姫のそむるとは。十一雑躰 龍田ひめしくれぬさきの初しほは何に染たるみねのもみち葉。爲兼朝臣。たてぬきにおらぬにしきや山姫の千くさにそむるみねのもみち葉。龍田姫山姫共に秋を司る神也〇一しほ初入は色淺き也。もゝしほはやゝふかきを云。いたく深きをは千入やちしほなとよめり〇もみちをぬさとたむくるとは。一秋下兼覧王 立田姫たむくる神のあれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ。又同貫之 秋の山もみちをぬさとたむくれはすむ我さへそたひこゝちする。又同深養父 神なひの山を過行秋なれは龍田川にそぬさはたむくるなとあり。これは旅たゝむとする時に。五色の絹紙なとをきりて。嚢に入て持行て。さてこれをちらして道祖神をまつる也。こ

れをぬさをたむくると云也。その絹紙なとのちるに　紅葉のちるをみなしていふ也。されはこれらの哥。皆此心あるをみるへし○もみちにあける神とは。一別素性たむけにはつゝりの袖もきるへきにもみちにあける神やかへさむ。これより。九入道太政大臣しくれにあける神なひのもりとも。又十八後嵯峨帝さらてたにもみちにあける神なひのともみゆ○紅葉を焼ことは。朗詠白樂天秋興の句に。林間ニテ煖レ酒ヲ燒ニ紅葉ヲ一。此心を政爲卿もみち葉を折たく人の心をやくみて千しほの色にみすらむとあり○大井川行幸和歌序。貫之もみちの葉のあらしにちりて。くもらぬ雨ときこえとあり。又三秋。同人の哥に。秋のよに雨ときこえてふる物はかせにしたかふもみち也けり。これともにもみちのちる音を雨といへるなり○もみちをかさすは。万一長哥略秋立者黄葉頭刺理一云黄葉加射之。又同三。長哥略黄葉乎手折挿頭跡なとみゆ○すへて此題は。もみちとあらはしても。又山森梢なとの色かはるよしかくしてもよみ。又そめつくさぬをも。そめのこさぬよしをも。枝わきてそむるをもよむことつね也

**紅葉色取**　既に紅葉とありて色とるといはむはくた／＼しきことなれと。これはもともみちすへき木の。いまたもみちぬが。やゝ色つくよしをいふ也。大よそ題にはかやうのことあるならひ也

**紅葉盛**　そめものこらぬをよむへし

**擇紅葉**　紅葉の中にも。わきておのか心とまるをえらふ心也

**紅葉如酔**　もみちの色の。人のゑひたるかほの色のことき心を。さま／＼によむへし

**林葉漸變**　はやしの緑の次第に紅になり行さまをよむへし

### 紅葉

もみち葉のちれるからへにちりつめはにしきかさぬる庭とこそみれ　國基

もみち葉をみくらの山に初霜は朝戸明てやおき初つらん　俊頼

みねはるゝ霧のなこりに露落て夕日色つく山のもみち葉　雅有

くれなゐにやしほやそめし山姫のもみちかさねのころも手のもり　俊成女

下もみちよのまの雨やそめつらむあしたのはらのきのふよりこき　土御門院

おしなへてまた色うすきもみちかないつれはゝその梢なるらん　慶運

尋所〻紅葉　いつこにかこまをとゝめむもみち葉の色なる物はこゝろなりけり　長能
初紅葉　けさみれはもみちしてけりたつた山きのふの雲やしくれなりけむ　宗良
紅葉淺　いつしかも色にいてしとしのふ山下葉よりこそもみちそめけれ　守覺
紅葉深　染つくすのちは何かは色そはむもみちにあやな露もしくれも　雅親
紅葉有淺深　色あさくはしのたち枝のみゆる哉みなくれなゐのみねのつゝきに　覺性
月前紅葉　立田川月のこほりの下もみちちらても冬の色はみえつゝ　爲重
雨後紅葉　あまくもは猶はれねともももみちする岑はいり日のさすかとそみる　覺性
紅葉滿山　はゝそはらしくるゝまゝにときは木のまれなりけるも今こそはみれ　小侍従
隔河紅葉　あさ日山みねのもみちのさかりには心あらなむ宇治の川きり　雅經
故鄉紅葉　ならの葉の名にあふ宮も今さらにしくれふりそふ秋の色かな　同
杜間紅葉　もみち葉の千えのにしきとみゆる哉しのたのもりの秋の夕くれ　顯廣
松間紅葉　すみよしのまつのたえまのもみちにやつもりのあまは秋をしるらん　顯輔
紅葉散風　こゝまてもふかはふきこてもみち葉をさそひ捨ける山かせそうき　宗良

○秋ノ霜　大かた秋の物をよみ入て。朝霜夕霜。又は秋の霜秋の初霜とあらはしてもよむ也。説文云霜喪也（和名八豆之毛）
よをさむみいまはあらしの乙女子か袖ふるやまの秋のはつしも　雅經

○惜ム秋ヲ　惜春に同しく。秋のくれ行をゝしむ心也
送秋　これは秋のかへりゆくを送る心なり
くれてゆくそらにこゝろそとまりけるけふをし秋の關とおもへは　頼実

○暮秋　九月はすへて暮秋といふへし。暮春に同しく。秋の日數のやう〳〵くれゆくをも。又くれはつるをもよむ也
秋徐作

秋の日數の次第にくれ行を云　**秋將レ暮**（ニシント）　二題全同秋の日數くれちかく成行をいふ　**商律欲レ尽**（ントス）　これも上に同し

**秋日易レ暮**（ノシ）　これは秋の日の短きを云　**秋欲レ暮**（ストス）　**秋晩**（ノ）　秋の日の夕くれ也以上兩題は。心えたかはむ人もやとて。こゝにことわりおく也

暮　秋　けふくるゝ秋のかたみやこれかさはおくもあたなる露のしら玉　小侍從

かけろふのをのゝあさちふうらかれてあるにもあらぬ秋の色哉　慶　運

をしからぬ露のいのちのなからへてなにそは秋をまたしたふらん　同

あさちはらかつ霜かれてわかれてふことは色にもみゆる秋かな　同

暮秋夕　風まぜにしくれてくるゝあし引の山のもみちの秋もすくなし　光　經

暮秋風　かせはやみよを今さらにくすのはのうらみやすらん秋はてぬ也　宗　良

山家秋暮　山さとのふもとの野へのまくすはらかへる秋こそうらみなりけれ　堀　川

深　秋　くれなゐの色とる山のこすゑにそ秋のふかさはまつしられける　惠　慶

○**殘秋**　秋の日數のくれのこりて全からさるを云　**秋闌**　同上　**秋唯一日**　九月尽に同し

○**九月盡**（ククハツシン）　九月つこもりの日を云○鳴しかの聲のうちに暮るとは。一秋下貫之　夕つくよをくらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらん○秋のかたみ。三秋兼盛　くれて行秋のかたみに置物は我もとゆひの霜にそありける○明ぬかきりは秋とは。二秋みつね　いつかたに夜は成ぬらんおほつかなあけぬかきりは秋そと思はむとあり

九月盡　くれてゆく秋しをはなの末ならは手をりてもたん立やとまると　俊　頼

かきりそと思はて過しゆふへたにたゝやは秋のそらはなかめし　宗　尊

もみち葉のちりてつもれるこのもとやくれ行秋のとまりなるらん　土御門院

かきりそとおもはて過しゆふへたにたゝやは秋の空はなかめし　宗良

閏九月盡　なか月のひかすをそふることしさへあかても秋のをしまるゝかな　爲忠

○

秋聲　さひしけの秋のみ山の夕くれや梢にあらし雲にかりかね　後伏見院

秋色　(校者云歌ナシ)

秋懷　しらさりしねさめも今はふかきよのあり明の月によをのこしつゝ　雅經

秋志　秋かせのさむき岡辺の柳かけすさましきよの色になりぬる　後伏見院

山家秋思　あはれとふみやこのひとのあらはこそなくさめもせめ秋の夕くれ　雅經

山家秋意　(校者云歌ナシ)

秋山朝　あさきりのはれまをみれは槇のはに露うちゝりて山風そ吹　雅親

海上秋泊　舟とむる田子のうらわの夕しほにふしのみたけは霧こめてけり　覺性

秋寢覺　ねさめしてひさしくなりぬ秋のよは明やしぬらむ鹿そ鳴なる　道濟

秋燈　かくて猶かはらぬかけもいつまてそ我よふけたる秋のともしひ　後伏見院

秋蓬　露しろく月しつかにてさよふくる蓬か庭は秋かせもなし　同

秋鳥獸　野への鹿雲井のかりもあはれしれや秋をそ時とねをもたてける　同

秋牛　(校者云歌ナシ)

秋旅　月よ猶さやのなか山なかく〵になにおもかけの秋のふるさと　雅經

秋雑　秋のいろをかつはつらしとみ山木のこりすしくれる袖をかすらん　同

秋祝　神かせやみもすそ川の夕波に千とせの秋の邑はつきせし　同

# 莵多不具路

六

# 歌俳卷之六

## 時節冬部

### 目録

# 歌袋巻之六

時節冬部　蔡邕月令曰。冬ハ終也。萬物於テレ是終ニル也。漢書律暦志曰。太陰ハ者北方。尚書大傳ニ云。北方ハ伏方ナリ。萬物之方ニ伏スル也。冬ハ中也。物方ニ藏ルニ於中ニ也。礼月令ニ曰。其帝ハ顓頊。其神ハ玄冥。左傳ニ云。脩及トレ熙爲スト玄冥ト。但シ脩熙相代ヒテ爲ナル水官ト少皡氏之子也。尒雅ニ曰。冬ハ爲タリ玄英。一ニ曰。安寧。注ニ云。氣黒クシテ而英青。應鐘ハ其ノ律ナリ。月令ニ曰。其音ハ羽。律ハ中ハ應鐘。十二月を三冬月とよめる哥あれと。万葉みな三冬盡にて。初冬仲冬季冬盡の義也。月令ニ曰。三冬ハ冬三月。九冬ハ一旬ヲ爲ス一冬ト也

○初冬（ソトウ）　初春初秋に同しく。十月朔日より四五日のほとをいふ。露結テレ成ルト霜の心。しくれふり。嵐の音かはり。物すこき趣をむねとすへし。一冬。神無月ふりみふらすみ定なきしくれそ冬のはしめなりける。四冬。前大納言公任。落つもるもみちをみれは大ゐ川ゐせきに秋もとまるなりけり。八俊成卿。おきあかす秋のわかれの袖のつゆ霜こそむすへ冬やきぬらんなと本とすへし

初冬　かせのおとにのこりあらしとおもひしを秋のかたみの紅葉こそちれ　相模

置まよふ霜の下くさかれそめてきのふは秋とみえぬ野へ哉　土御門院

風さむみ冬のはしめは山里のしつの松かきひまなくそゆふ　紀伊

はゝそ散いはたの小野の朝嵐に山ちしくれて冬はきにけり　慶運

山家初冬　いつしかと人めもくさもかれねとやおろすあらしのけさははけしき　俊恵

海辺初冬　けふよりは冬になるをの浦さえてはけしかるへき沖つ汐かせ　雅経

初冬時雨　かきくらししくるゝけふのけしきこそ冬きにけりと空にしらるれ　爲業

○時雨（シグレ）　孫愐カ曰。霡雨ハ小雨也。音与トレ終同シ。漢語抄ニ云。和名之久礼。字彙ニ[illegible]。[illegible]。久[illegible]。又[illegible]しくれといへ

と。樹はそゝくの訓にて時雨にあらす。又液雨とは。時珍曰。立冬後十日爲入液至小雪爲出液。亦曰藥雨。百蟲飲之皆伏蟄。至來春雷鳴乃出也。これは時節にあたれはかりていへるなるへし。但釈名に。時雨はしはしくらき也。らとれと通音なり。時雨ふる程はしはらくくらくなる故にかくは名付たる也。此説そのことわりあれと。万にも爲暮なとかき。源には空のしくらく成ことあるをあはせておもふに。しはたゝ添たるにて。空のくらくなる心の名也。雅章卿口訣に。時雨とおし出したる題は。かならす冬の題也。哥には秋の紅葉より讀ならはせとも。冬の題なるへし。秋の物によそへ侍らは。秋の時雨なるへし。たゝよまは冬也としるへし○初時雨。二冬。初しくれふれは山へそおもほゆるいつれの山かまつもみつらん。はしめてふる時雨也○村時雨。十四後京極。吹過るひはらの山の木枯に聞もわかれぬ村時雨哉。をやみかちにふる也○よこ時雨。信実集。風わたるみねの木間の横しくれもる山よりも下葉そむらん。俗に云吹ぶりなり○一しくれ。源仲正集。梢より一しくれして過ぬ也しつえのもみちぬれもはてぬに。一とほりふるを云○朝時雨。壬生二品集。爪木こる賤の衣のあさ時雨ほすもやさむき冬の山かせ○夕時雨。廿一宗久法師。立かへるをのへの空にさそはれて又山めくる夕時雨哉。又待賢門院堀河は。たそかれ時のしくれともよめり○小夜時雨。廿一済繼。さよしくれふる郷人も此ころや同し雫に袖ぬらすらむ○うちしくるゝとは。里にチヨツトしくるゝと云也。廿。わきて又くもるとはなき村雲のゆきゝにつけて打しくれつゝ○山めくりするとは。時雨の雲の山をつたひて過行を云○しくれをはやみ万六長哥讃久迩新京 秋者天霧合之具礼乎疾。とく過行也○しくれこゝ地。帖。貫之。大空はくもらさりけり神無月しくれこゝちは我のみそする。なみたも落ぬへきを云○時雨のつね。万十九。十月之具礼能常可吾世古河屋戸乃黄葉可落所見。つねとはならはしの心也○くれなゐの時雨。帖。紅のしくれふれはや石上ふるたひことに野へをそむらん○しくれの秋。万十三長哥九月之四具礼之秋者云々○時雨のあめ。万十八長哥秋豆氣婆之具礼能雨零。又一旋頭哥にも。しくれのあめのそめる也けり○時雨ふりおける。二雜源順。神無月しくれふりおけるならのはの名にあふ宮のふることそこれ○しくれふる。しくれする。しくるゝなとよみつけたり

時雨

とふ人もなき我やとの村しくれふたよりみよりおとろかすかな　伊勢大輔

夕されは散しく庭のならの葉にしくれおとなふみ山への里　雅兼

かみな月みふねの山はしくるれと色にそそまぬ瀧のしらいと　土御門院

いつまてか袖ぬらすらむむらしくれうきたる雲のほともなきよに　慶運

曉時雨　かねのおとのあかつきつらきねさめより我袖ぬらす村しくれ哉　光経

冬朝時雨　あり明の月はのこりてうき雲のしくれに遲き朝日かけかな　顯仲

枕上時雨　一とほりふるかと聞しまくらよりあとよりはれて行しくれかな　称名院

山家晩時雨　かた〳〵にあはれつきせぬねさめ哉山おろし吹てしくれふるなり　親盛

旅宿時雨　とへかしなみやこ戀しきたひの庵にしくれもりそふ艸のまくらを　俊頼

月夜時雨　さためなき空にもあるかなみるほとに時雨にくもる冬のよの月　頼実

○落葉　漢名同上。或墜葉。或搖落。或黃落。或落木。もろこしにては大かた秋也。魏文帝燕歌行秋風蕭瑟天氣涼草木搖落露爲霜。又楚辭。嫋〻兮秋風洞庭波兮木落下。又善哉宋玉之言悲哉秋之爲氣蕭瑟兮草木搖落而變衰。かく秋にのみ見ゆ。我國にても朗詠に。三秋而宮漏正長空階雨滴万里而鄕園何在落葉窓深。又秋庭不掃攜藤杖閑蹈梧桐黃葉行。これらは皆秋也。哥にも。一秋下。吹風の色のちくさにみえつるは秋のこのはのちれは也けり。四秋下には。月前落葉といふ題をのせ。五にには秋にも冬にも入られ。六には雨後落葉を秋に入れ。落葉埋水。落葉有声を冬にのせられたり。八には。秋に落葉をのすることなし。しかれは落葉を冬の題としも定められけるは。此新古の比よりとみえたり。しかれとも桐の葉のおつるよしは初秋にさたまり。もみちのちるよしは。即事はいふに及はす。題詠にも秋によめる哥多し。今ももみちの散よしは。秋の題にもよめと。おなしくはちらぬ紅葉をよむへし。たゝ木葉のちるよしは秋にはたえてよめる事なし。但。落葉の題にて紅葉のちるよしは。今

も擱らすよむへし。又た、落葉とも。この葉ちるともよむこと常也。源順句に。隨レ風落葉含二籟思一渡レ石飛泉弄二雅琴一二冬。神無月しくれと、もに神なひのもりのこの葉はふりにこそふれ○袖にこきいる、。一秋素性。もみちは、袖にこきいれてもて出なむ秋はかきりとみむ人のため○木葉の衣。太平廣記。女仙部云。秦時婦人衣二木葉一。二秋。なほさりに秋の山へをこえくれはおらぬにしきをきぬ人そなき。又。もみち葉を分つ、ゆけは錦きて家にかへると人やみるらん。是は。朱買臣衣レ錦返二故郷一の故事也。又このはの衣とは。菅万上。秋之蟬さむき聲にそ聞ゆなる木之葉之衣緒風やぬきつる○落葉の衣。ころも共。きぬ共。二秋下。秋のよの月の影こそ木間より落葉衣と身にうつりけれ。菅万には末の句墮者衣砥みえわたりけれとあり。上はこれをよみ誤れるか。さならすとも。山人なとの落葉をひろひて衣にさせるを。落葉衣ともいふへきにや○袖にうくる。菅万下。黄葉のちりくる時は袖にうけむつちにおとさは疵もこそつけ○落葉の雨にまかふは。白居易句に風吹二枯木一晴天雨。源順句に。梧楸影中一邑之雨空灑。四冬。源頼実。このはふる宿は聞わくことそなきしくれするよもしくれせぬよも。同俊成卿。まはらなるまきの板やに音はしてもらぬしくれや木葉なるらん○木葉の舟。一秋興風。しら波に秋のこのはのうかへるをあまのなかせる舟かとそみる○ちる。ふる。ちりしく。おちしく。おつる。つもる。ちりつもる。風にみたる、。ふりしく。雨とふる。ちりまかふ。木葉吹まく。山もあらはに。梢まはらになと多くよめり○かはく。六冬大江嘉言。山ふかみ落てつもれるもみち葉のかはけるうへに時雨ふる也

落　葉　もみちは、ちりてあはれそまさりける秋のかたみのとまりと思へは　頼輔

しなか鳥ゐなのしは山吹風におろすもみちやこやの八重ふき　俊恵

谷川にこの葉つもれはきひの山冬は錦の帯をこそすれ　覺性

終夜聞落葉　ひとりぬるふせやのひまのしらむまて荻のかれはにこのは散也　俊頼

月照落葉　は、そはら雨と木葉のふるま、にもりのみまさる月のかけかな　登蓮

落葉埋路　おもへともいらぬ山ちはあともなしことしもさてやこのはふりつ、　雅經

河落葉　神なひの山のあらしやたつた河水の秋のみふかき色かな　同

落葉藏水　けさみれはたつたの川もうつもれて木葉にたてるみをつくし哉　覺性

落葉埋橋　小くら山みねのあらしの吹まゝに谷のかけはしもみちしにけり　宗良

海辺落葉　心あらはあまもいかにかおもふらんもみち散しくまつかうらしま　堀河

山中落葉　さそひゆく嵐を道のしるへにてみねうつりする木々のもみち葉　守覺

雨中落葉　このはをは閑のいたまにとゝめ置てひとりもりくる初しくれかな　俊惠

○霜　禮月令曰。季秋之月霜始降。則百工休。大戴禮曰。霜陰陽之氣也。陰氣勝則凝而爲霜。月令章句云。露凝爲霜。但秋霜の条にのする如く。もろこしにては。霜は季秋の物とす。我國にては。季秋より三冬にわたる物とせり。されは。万十寄霜。春去者水草之上尓置霜　消乍茂我者戀度鴨。これ冬おく霜の春に成て消る證也。今の題詠にては初冬の心によむへし○初霜。秋霜の下にのするか如く。秋によむへし。源蘭。九月にも成ぬ。初しもむすほゝれえんなる朝とあり○朝霜。万七。朝霜乃消安命○夕霜。無子細○夕こりの霜。万十一。夕凝霜置來朝戸出に跡ふみつけて人にしらるな。夕霜のいたくこりかたまれるを云○よるの霜。万十一長哥　栲乃穗尓夜之霜落○さゝのはのさやく霜夜。万廿。佐左賀波乃佐也久志毛用尓奈奈弁加流。又一[illegible]。さかしらに夏は人まねさゝのはのさやく霜よを我ひとりぬる。さやくの義。荻の条にくはし○霜の夜。帖に。妹かあたりの霜のよにねむ○むすひかふる。西行上人集。哀みえし袖の露をはむすひかへて霜にしみゆく冬枯の野へ。これに月令章句云。露凝爲霜。又千字文云。露結成霜なといふをとれり○霜氷るとは。霜のこりかたまる也。一長哥。みつね。あられみたれて霜こほり○霜くもり。これは。霜ふらんとしてくもる事なけれは。雪の字ならんと云説あり。今俗冬の夜くもれるを。霜くもりと云。これ古語にや。万七。霜雲入爲登尓可將有久方のよわたる月のみえぬおもへは○霜まよふとは。霜氣のたちまよふを云○霜八たひ置とは。たゝ多く霜を經るを云。一大和物語。霜やたひおけとかれせぬさかきはの[illegible]○霜ふりかゝる。[illegible]

の云々〇行あひの霜とは。行あひのわせなとに同しく。はしめはむら〳〵とみゆるか。いたくふるまゝに。ひまもなくなるを心えていふ也。されは。たゝいたくふる霜と心うへし。伊勢集。ふけし夜の行あひの霜にうてしかとたと身にさむくあたらさりけん〇もとゆひの霜。一。君こすはねやへもいらし小紫我もとゆひに霜はおくとも〇いたゝきの霜。元輔集。いたゝきの霜うちはらひなくたつを云々〇葉分の霜。笹によめり。定家卿。冬來ては一夜ふたよを玉笹の葉分の霜の所せきまて。葉をおしわけてふる也〇消かへるとは。霜のきえては又むすふなり〇ひにさえわたる。万十三。吾衣袖尒置霜文氷丹左叡渡。氷のことくにさゆると云也〇せめらるゝ。一長哥たゝみね。冬は霜にそせめらるゝかゝるわひしき身なからに〇霜はしら。新帖。霜に光俊朝臣。谷ふかみいはやにたてる霜柱たれ冬こもるすみかなるらん〇いやかたまれる。一長哥みつね。あられみたれて霜こほりいやかたまれる庭の面に云々〇霜のふりはとは。霜のふり様といふ也。一大哥所。水くきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも〇松の葉とつる。順徳院御百首中。をしほ山松のはとつる夕霜に色こそなけれ杜のこからし〇露霜とは。露の霜となれるを云。又露と霜とをもいふ也〇あれたる霜。帖。山かけにあれたる霜の我なれや思ふ心のとけてのみふる心のまゝにふれる霜なるへし〇はたれ霜とは。もと木の葉のたれたるにふりかゝれると云義にて。それより木の葉ならても。いとひまなく眞白にはあらて。はら〳〵とふりたる霜をいへり。葉の垂たるにかゝりたる霜をみてさとり知へし。万十薄垂霜零〇ふる。むすふ。おく。さゆる。きゆる。とくる。ふかし。しろしなと多くよめり

霜

霜かれとたれかいひけむおくからに千くさの花の咲とみゆるを　大貳

さむしろにおもひこそやれさゝの葉のさやく霜よのをしのひとりね　宗良

駒なへてあさふむ野ちのをかやはら枯葉の霜にかせさわく也　雅有

おく霜はしのひのつまにあらねともあしたわひしく消かへるらん　紀伊

竹霜

なかきよのねさめの窓の竹のはにあかつきさむし霜や置らん　光經

野　霜　（校者云歌ナシ）

旅宿霜　あつま野のをはなかりしきさぬるよの衣手さむし霜や置らん　慶運

河辺霜　（校者云歌ナシ）

霜埋落葉　さそひこしあらしもおのかま〵ならて霜にくちぬる庭のもみち葉　為家

○ 残菊　くはしくは秋の部菊の条下にのすれはこゝにいはす。冬の題ともすれは又こゝに出す

残　菊　しものおけるのこりの菊はなか月のなかきためしにゝほふ也けり　清慎公

秋ふかく成ゆくま〵に菊のはな日にそへてこそ色はそめけれ　頼実

翫残菊　おいらくはのこれる菊そあはれなる霜いたゝける人にまかへて　道済

池辺残菊　むらさきのうつろふ色の影みれは松にもかけぬ池のふちなみ　覚性

○ 寒草　寒蘆　無子細。何の草にてもあれ冬枯のさまをよむ也。されは寒草の題に寒芦はよむへし。寒芦の題にて寒草をはよむへからす○人めも草もかるゝとは。万に離をかるゝと訓したるに同しく。人めの絶ゆくを枯によせたる也。一冬（新宰子）山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは○冬草一（みつね）我またぬ年はきぬれと冬艸のかれにし人はおとつれもせす。これも離の心にそへたり○霜枯。無子細霜にてかるゝ也○うらかれ。長秋汐かせにいせの濱荻うらかれてとあり。末の字方にうれとよめり。その通音にてうらかれは末の枯ると云也。今も九州の人はうらといふなり。これ梢のこと也。又は心の字方にうらとよみて。うらかなし。うらさひしなとに同しく。中心よりかれたるをもいふへし○下かれとは。雪霜なとの下にかるゝをいふ。必雪霜なとにつゝくへし○霜霰雪嵐なとむすひてよむへし○枯葉不及注○もろくくたくる（山家集）霜枯のもろくくたくる荻のはをあらく分なる風の音哉。又芦にもよめり。いたく枯はてたるさま也○冬野枯野なと多くよめり○冬かれ無子細　枯野　たゝ野への冬かれのさま也

寒草　かれはつる色とみしよりおく霜の下にすくなき庭の冬くさ　為重

庭寒草　雪はいさ草葉はかれて道もありとつけはや人に庭の朝しも　称名院

野寒草　むしのねも花のいろ〳〵かれはてゝみしにもあらぬのへの淋しさ　雅有

寒蘆　はかくれのさはへのあしも霜かれてにほのうきすもあらはれにけり　親盛

しらつゆのおける玉江の芦のはにむすひかへたる冬かれの霜　土御門院

ほり江にはをれふす芦のひまをなみたなゝし小舟こきそやられぬ　行宗

橋本寒芦　やつはしのとたえをみれは霜かれの芦のはのみそくもて也ける　顕季

朝寒芦　霜こほる玉江のあしのあさな〳〵はらふもさむくふくあらし哉　隆祐

枯野　かれたてるすかた斗はそれなからその色となきをはな刈かや　後伏見院

○木枯　草木をからす風と云也。これを風の名とせしは。中比よりのことにて。中昔までは木からしの風とはよみたれと。風とつゝけすしてよめる例なし。されは六帖の四季の風の中にも木枯といふ風なし。今式にては木枯とのみも。又木からしの風共よむ事つね也。京極黄門の消わひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露とよみ給ふことく秋にもよめと。木枯の題にては冬によむへし○木からしの杜は駿河なり。十三戀よみ人しらす　人しれぬ思ひするかの國にこそ身をこからしの杜はありけれとあり。多く風をそへて此名所をよめり。又此哥のことく身を焦(コカラス)心によせてよむも多し

木枯　かた岡にこからし吹てすこかすむまへの松かき今かこふらし　道済

朝木枯　たちかへり朝けのけふり吹そしく落葉かきたく宿のこからし　正徹

○椎柴　椎漢名同。かんなにてはしひとかくへし。今しゐとかくはあやまり也。さて椎柴といふことは。椎はかならす柴にきり

おろす物なれは。いまた柴にせさるをも椎柴とはいふ也。枕草帋云。椎の木ときは木はいつれもあるを。それしも葉かへせぬためしにいはれたるもおかしとあり○椎まく。万七片崗之此向峯椎蒔者今年夏之陰尓将比疑○椎のこやて。万十四於什波夜母奈乎許曾麻多賣牟可都乎能四比乃故夜提能安比波多家波自。こやては小枝にて。やとえ。たとて。通音なれは也。一本には於曾波也母伎美乎思麻多武牟可都乎能思比乃佐要太能登吉波須具登母とあるをみれは。いよ〳〵こやてはこえたといふなるへし。むかつをとは向ひの峯と云也。椎は小枝いとしけくさす木なれは。さて柴にするによろしき也。されはその枝〻あはひちかければ行あふ故に。あふとはつゝけたり。哥の心は椎の小枝のことく逢ことはたかふましけれは。遅くとも早くとも待つけむとの心也。下の哥もあふといひつけたるにゆつりて。はふきてよめるまでにて。たゝ同し心なり○しひ柴。三。はしたかのとかへる山の椎柴の葉かへはすとも色はかはらし。はし鷹は今云灰鷹也。とかへるとは飛かへると云也。則飛行て又飛歸るへきほとのちかき山といふ心也。葉かへとは葉の落て生かはるを云。さりなからもみちせぬ木故に。色はかはらぬよしよめり○もみちぬ。二。わするなとうらみさらなむはし鷹のとかへる山の椎はもみちす。これも上に同しく。椎の色かへぬを心の不變にとりなしてよめり○椎かもと。帖。うはそくかおこなふ山の椎かもとあなそは〳〵し床にしあらねは蜻蛉ニモ出そは〳〵しは稜〻の心にてかとたちたるを云。山のたひらならぬをいへり。又源椎か本。薫大将宇治の宮世をさり給ひし後にとふらひ給ひて立よらむかけとたのみし椎かもとむなしき床になりにける哉とてはしらによりゐ給へるをも。わかき人〻はのそきてめて奉るとあり○椎のうら葉。白きよしをよめり

椎　柴　　いつまてか猶しひ柴の折からに心ひとつの色かはりつゝ　　雅　経

山ふかみひろふ人なきおち椎の下柴かくれとつる冬かな　　正　徹

○〔氷〕漢名同上。説文曰。氷水堅也。月令曰。孟冬之月水始氷。地始凍。淮南子曰。水向冬則凝而爲氷。こほるとは。凝といふをのはへて云也。こほると云時は必用なること明らか也。こほりと云時は。体にも用にもわたる也。又氷をひと訓したるは。

古事紀に。氷椽を比義ととゝみ。臆抄には氷を比とも古俣利とも訓せり。万一異本磐床等川之水凝冷夜乎の哥の此水凝の二字を氷凝なるへしと云説あり。げに疑は凝の誤なるへし。水は氷とあらためすとも。川のみこほりとよむへき也。万八石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春尒成尒来鴨。これを新古今にはいはそゝくたるひの上のとあらためてのせられたり。それよりたるみをも氷柱とする説あり。用へからす。たるひは氷柱也。たるみは水のしたゝりおつるをいへり○朝氷無子細○夕氷又無子細。中務卿親王家謙倉(ママ)か哥にあり○うすらひ。薄き氷と云也。万廿佐保河波尒こほりわたれる宇須良婢のうすき心を我思はなくに。千五百番哥合寂蓮 波さわくをしの羽風もさたまりぬむすひやしつる池のうすらひ○薄氷。たゝ上に同し○つらゝ。七経房卿をし鳥の浮ねの床やあれぬらんつらゝゐにけりこやの池水。八惟喬親王。うくひすのなみたのつらゝ打とけて。同俊成卿。としくれし涙のつらゝとけにけり。又五には経信卿。水とりのつらゝの枕ともよめり。里に氷柱をつらゝといへと。これら皆。たゝ氷といふに同しく。氷柱にはあらす○氷の鏡。帖。氷に。ほりて置し池はかゝみと氷れるをみることなくて年そへにける。又恵慶集。冬はみつ二見のうらの朝氷とけぬ程こそかゝみなりけれ○ひも鏡。万に。ひも鏡能登香乃山とつゝけたり。これは丸き鏡の。脊面に紐のつきたる也。氷面鏡也と云説は用へからす。たとひ氷をひも鏡にとりなしてよむとも。氷面の義はゆめ〳〵思ひかくへからす○氷の関。俊頼朝臣。つらゝゐて守るいはまの関なれは世をへてかたく成まさる也○岩間の関。氷のこと也。水鳥によめり○氷の床。又水鳥によめり○氷の下のかよひち。鴎鳥によめり○下帯にむすふ氷とは。釼を云○氷のくさび。四好忠。いはまにはこほりのくさひうちてけりほゐし水も今はもりこす○くさる。山家集。川はたにをの〳〵つくるふし柴をひとつにくさる朝氷哉○ひわれ。源仲正。みなといつるかこの友ふねゆすれともひわれもやらぬ朝氷哉○梅の氷。元輔集。花を雪雪を花かとみてそふる梅の氷のとけぬかきりは○氷つく。附 上の哥の詞書に。梅の花に雪のこほりつきたるをみてとあり○棹にくたくる。十顕昭。舟出するひらの湊の朝氷さほにくたくる音のさやけさ○諏訪の湖。氷あつく成ぬれは。人馬その上をかよふといへり。又その土俗の云。狐まつわたる。人そのあし跡をみて渡るといへり。述征記に。北風勁。河水始合。要須狐行。此物善听氷下無水然後過河といふに尋

かよへり。俊頼朝臣しみ氷るすはのとなかのかちわたり打とけられぬ世にこそありけれ。家長朝臣。駒とめてすはのと渡るたひ人の氷のはしの音のさやけさ○とつる。氷する。むすふ。ゐる。かさぬる。下むせふ。なとあまたよめり

氷　住よしのきしの松風わたる也ほそ江のみきはつらゝゐぬらん　覺性

いはくゝる水のおとこそ絶にけれ細谷河やつらゝゐぬらん　親盛

秋はてし枯野の草にむすひつゝ氷そ露のしるしなりける　俊成卿女

袖こほるさよの川かせさむしろにかたしきかぬる宇治の橋姫　同

氷未遍結　はらの池のみきはゝつらゝゐにけらし湊をさして傳ふあちむら　長方

芦間薄氷　(校者云歌ナシ)

瀧辺氷　山かくれ人もとひこぬ瀧水はつらゝにのみそむすはれにける　小侍従

河氷　あさき瀬やはや氷るらし大ゐ河みきはに遠き浪の音かな　顯仲

谷河氷　(校者云歌ナシ)

池氷　嶋つたふ池のみきはゝふりにしを氷をあゆむ道もありけり　覺性

池氷作鏡　わかやとのいけのこほりをかゝみとてみれはあはれに老にけるかな　基俊

朝氷　山かはのいはにせかれてたつ波のさなから氷ろ冬のあけほの　光經

氷逐日結　なにはかたみきは日をへて氷るらしうらはの波も沖に成ゆく　行宗

氷不鮮　こほりけりみたれてみえししら糸をむすひとめてや音なしの瀧　称名院

○［冬月］源朝臣に。月さし出て。うすらかにつもれる雪の光にあひて。なかなかいとおもしろきよのさま也。又同卷。冬の夜の月に。雪のひかりあひたる空こそ。あやしう色なきものゝ身にしみて。此世の外のことまておもひたされ。おもしろさも哀さも

殘らぬ折なれ。すさましきためしにいひ置けん人の心あさゝよとて。みすまきあけさせ給。河海抄云。簀日記に。しはすのもちの比の。月いとあかきに物かたりしけるを。人みて。あなすさましのしはすの月にもある哉といへりけれは。春をまつ空のかきりとおもふにはこの月しもそあはれ也けるといへるよしを引たり。又同抄。枕さう紙に。すさましき物。おうなのけさう。しはすの月夜とありとみゆれと。普通の本にはみえす。但。冬の月は。光のさゆるよしを詮とよむへし。其外冬の物にそへてもさま〳〵によめり

冬　月　しくれ行雲にはつれてもる月はひとつ空ともおほえさりけり　覺　性

ひろさはの池のこほりに影さえて友かゝみともみゆる月哉　雅　有

さゆるよも月そなかるゝひさかたのあまのかはらや氷らさるらん　慶　運

さえとほる霜よの袖は薄くして月そはたへにむ（ママ）こゝちする　後伏見院

寒山月　（校者云歌ナシ）

冬曉月　霜こほる庭の冬くさうちなひきあり明の月にあらし吹なり　雅　有

旅宿冬月　くさまくら霜をかたしく袖の上にまた影氷る月のさむけさ　同

○衾(フスマ)　漢名同上。冬の臥具なり。詩召南云抱衾與裯。衾大被裯單被。被名始于漢。狀似蒲團。既謂寢衣。可有襟袖也○まとこおほふふすま。神代紀下云。高皇産灵尊。乃用眞床覆衾裝皇孫天津彦根火瓊々杵根尊。而排披天八重雲。以奉降云々。いと大きなる衾なるへし○たくふすま。仲哀紀并万十五に。栲衾新羅国。同十四に。多久夫須麻之良夜麻可是能云々。栲は木綿也。こゝは栲布の衾の白きとつゝけたる也。同集。しろたへを白栲とかける所多し○むしふすま。古事記の哥に。阿夜加岐能布波夜賀斯多介牟斯夫須麻介古夜賀斯多介多久夫須麻佐夜其賀斯多介云々。又万四に。蒸被奈故也我下丹雖臥与妹不宿者

肌之寒霜。これらをみれは。身をむしあたゝめむために。厚くやはらかにつくれる衾なるへし。尓古夜も奈故夜も。ともに和。又柔の字なれは。たゝ同意也○あつぶすま。帖に。上の万四の哥をあらためて。あつふすまなこやか下にねたれともとあり。又永久四年百首哥合に忠房。うす紅のあつふすま共よみ。又久安百首に教長卿。あふことはせめてなこやかあつふすま。又同二年。顕輔卿家哥合に季行。思侘なこやのふすまよそにみてなとみゆ○あさて小ふすま。万十四。尓波尓多都安佐提古夫須麻許余比太尓都麻余之許西祢安佐提古夫須麻。たゝ麻の小衾といふ也。麻てのては。蝦手なとのことく。人の手に似たれは麻手とはいふ也。同四に。庭立麻手苅干ともあり○あさ衾。同上。万五。寒之安礼波麻被　とあり○あさの小衾。亦同上。朝にかけても多くよめり○まだらふすま。万十四。伎倍比等乃萬太良夫須麻尓和多佐波太伊利奈麻之母乃伊毛我乎杼許尓。まだらは班にて。衾の染色の一色ならさるを云。きえ人は妹也とも。又遠江に伎倍郡ありともいふ説あれと。彼国になし。わたさはたは。綿を多くいれなと云也○まだらこふすま。同上。永久四年百首仲実。あせいらはうれたく妹か思はしや人はたふるなまたらこ衾○ゆたけの衾。保延元年家成卿家哥合。戀顕仲。打ふさて戀しあかせはさよとこのゆたけの衾よそにこそみれ。ゆたけはゆたかの詞にて。ひろくゆたかにて。もろともにも引おほひつへきを云○あけの衾。六百番哥合経家。さゆるよのさむけさ今はあらしかしあけの衾のあつくみゆれは。紅衾也○もやの衾。同哥合家隆卿。雪のよはおもふ斗もさえぬこそもやの衾のしるし也けれ。もやは母屋にて。諸の屋のもとゝする屋なれは。外の屋よりはさむさもゆるき也。されは。思ふ斗も冴ぬとはよみ給へり○閨の衾。同哥合に寂蓮。ねやの衾にさゆる霜よにとあり○をしの衾。鴛鴦を繡たる衾也。同哥合。後京極摂政。さゆるよのをしの衾をかたしきて袖の氷をはらひ兼つる。又寛喜二年。女御入内御屏風。光明峯寺摂政。池にすむ鴛の衾もさむきよに上毛の霜やいとゝかさぬる。これはまことの鴛鳥の臥衾にしてよめる也○ふるき衾。無子細○妹とふすま。永久四年。百首哥合。源兼昌。ねやの上にあられたはしるよはなれと妹とふすまはさえすそ有ける。妹と臥にかけたり○花の衾。花の散しきたるを云也○苔の衾。これも苔のむしかさなれるを。みなして云也○引かゝふるとは。引かぶる也。万五。寒之安礼波麻被　引可賀布利○おほふ。又引。又物はつかしみ衾おほひかともよめり

衾　かさねすはあけの衣も何ならし身をあたゝめよあさてこふすま　季經

寒夜衾　霜のうへに猶そかさぬる板まあらみ月もるねやのまたら小ふすま　正徹

○網代　網のかはりに魚をとる也。指掌雑字云。魚箔潮來則魚入其中潮退則魚不復出。又陸象漁具詠曰列竹於海曰滬濵。これらのたくひなりといへとも。制すこしこと也。氷魚をとらんために。秋より打て春まても殘れるよしみえたり。式曰。山城國氷魚網代一處其氷魚自九月迄十二月貢之是謂氷魚使 とみゆ氷魚はいはゆる香魚の子也。順抄云。切韵云。魦音小。石山の縁記に。網代のこと出たるをみたれと。こと多けれははぶきぬ。今世には網代の制絶て詳ならす。こゝにあくる所は。ふるき歌をかうかへ合せてしるす也。文治五年百首定家卿。よをへてもみるもはかなきあしろ木にこしのみ空の風を待らんとあるをみれは。北かせ吹比を待えて。網代はうつなるへし。されとも。もと氷魚をとらむ爲なれは。氷魚の多くよらむとする時をはかりて打へけれは。秋よりもうつ事。あるましきにもあらす。帖に。宇治川のせゝにありてふなしろ（ママ）木に。又五經信卿。月清みせゝのあしろによるひをは。なとあれは。河の瀬に木を杭なとのやうに打ならへて。その木に布なとをはるにや。山家集に。紅葉するあしろの布の色とめてひををくりとはみゆる也けりとよみたり。其傍に小き屋なとつくりて。床なとかきたるをあしろの床とは云也。顯仲朝臣集に。田上やそのむらきみにあらなくにまつあしろ木に來てそうちみる。建久二年百首定家卿。後のよの心もしらすみゆ。これ式にいへることく。貢となる故のことなるへし。此あしろ守をは。あしろ人ともいふ。堀川院百首行家卿。をちかたに聞えしもせし網代人船よふ聲は波にまかひてとあり。又俊頼朝臣。月明網代を。あしろには月の光もあるものを何ますらをのかゝりたくらむとあれは。よる／＼篝火をたくなるへし○紅葉の。網代になかれかゝるをよめる哥多し帖。なかれくるもみちの色のあかけれは網代にひをのよるもみえけり。同貫之。落つもるもみちはみれは百とせの秋のとまりは網代也けり。又同人。紅葉ゝの

なかれてとまるあしろには。なと猶多し○都より。人のみにゆくよしをもよむことつね也○せわけのひを。瀬をわけてのほる氷魚也。顕朝卿家百首（信実朝臣）。あまたせく田上川のあしろ木にせわけのひをのよるも定めす○神に手向る。（ママ）（久安元年百首）為家卿。程遠きやそうち川の網代をも神にたむけて誰はしめけむ○ひをへて。ひをふるなとの詞を。氷魚にかけて多くよめり○名所は。宇治川田上川又田上のあその山川とも近江のうみよし野河なと名たかくよみつけたり

網代　　つかのまにつもるあしろの木葉まて日をへてとらんほとをしる哉　　雅経

　　里の名もうち山おろしさむきよの川音ふけてあしろうつ聲　　正徹

月照網代　　山のはの雲をはなれてあしろ木にいさよふ月やこほるしら波　　同

雨中網代　　あしろ木の水にふりくる雨のあしをひまなくひをのよるかとそみる　　盛忠

網代見月　　月かけもいは波たかきあしろにはうすき氷のよるかとそみる　　頼実

○千鳥（チトリ）　俗用二鵆（ニウ）字一。万葉には。乳鳥（チトリ）。又智鳥（チトリ）。なとありて。皆訓にてかけり。上つ世より。百鳥。五百鳥（イホ）。千鳥。百千鳥。なと多くは春にみえ。又秋冬にもみゆ。帖には。千鳥といふ題の下に。濱千鳥のみあり。近昔以後は。百千鳥は春。千とりは冬とす。上つ世此定なかりしことしるきは。万十六。吾。門之榎実毛利喫（ノエノミモリハム）百千鳥千鳥者虽來（クレト）君曾不來座（ツキマサヌ）とあり。これ今いふ千鳥にあらす。諸鳥をいへり。又今の千鳥。諸鳥をおしこめていふにあらさることは。すてに千鳥のたゝひとつといへるをもてしるへし。先ちかくは。鴨川のわたりに。冬のよる／＼むらかり立るして。ちよ／＼となく鳥あり。されといかなる鳥にや。まさしく姿もみえねは。いふへくもなかりしか。一とせ東に下りし時。伊勢の四日市といふ所にいたりしに。海辺に鳥の多くあつまれるをみるに。彼画にかける千鳥と云鳥によく似て。聲も鴨川にて聞し鳥に同し。さて毛色はましろなると。鼠色に白みのまじりたると。白黒ましれるとかあり。又形ちいさきは燕はかりあり。やう／＼大きやかなるは鳩はかりたるもありて。此大なるかぎりは鷗にことなることなし。そこの土民のいへらく。千鳥年ふれは皆鷗に成といへり。しかれは。かの白黒うち変れるは。さなからさる鷗と成にやと

とへは。としふるに随ひて。皆黒みはうせて。白く成侍といへり。さて鷗と千鳥との聲は同しからねと。その中に。やう／＼大きやかなる千鳥のこゑは。やう／＼鷗の聲にちかきをまのあたり見聞程に。土俗のいへるも僞にもあらし。形状とても相似たるをみれは。常らすとも遠からしと。一たひはおもひしに。又外にて。かうやうにあつまれるをもみす。もろこしのふみにも。鷗はあれと。鷗兒まてくはしく載たるもあらす。いにしへもかくたとりかねて。たゝその多くむれて立ゐする鳥故。千鳥とはかりいへる成へし。或説に。千鳥種類四十八品ありと云。又或人のいへらく。海辺にかま鳥と云物千鳥によく似たれは。うち見にはみわきかたけれと。これは鷸(シギ)の種類にて。足も長く。翼も千鳥のことくなよひやかならす。又千鳥の立は空にむかひ。かま鳥は横さまにとふをもてみわくるとかや○あそふ千鳥。万七。佐保河尓小驟千鳥(サホカハニアツフチトリノ)○千鳥妻よふ。万六。清湍尓(キヨキセニ)千鳥妻喚○友よふ千鳥。万四。狹夜中尓(サヨナカニ)友喚千鳥物念(オモツト)跡○千鳥しはなくとは。屢(シハ／＼)鳴の義にて。たえす鳴心也。万十六。吾門尓千鳥數鳴起余起余(シハナクオキヨオキヨ)。又六に。上邊者(カミツヘハ)千鳥數鳴(シハナク)。又十一に。可旭(アケヌハク)千鳥數(シハ)鳴なとあり。數の字をかけるにても。あまたたび鳴心は明らか也○鳴千鳥まなしとは。鳴聲のちよ／＼とひまなき物なれは也。万十二。眞菅吉宗我乃(マスケヨキソガノ)河原尓鳴千鳥間無吾脊子(マナシワカセコ)吾戀者(コノラクハ)○河千鳥。万に。夜降而鳴河(ヨクダチテナクカハ)波知登里○夕波千とり。万三。淡海乃海(アノミノウミ)夕浪千鳥汝鳴者(ナカナケハ)。たゝ夕波の立ほとにとふを云○さよ千鳥。夕千鳥。河原の千鳥。家持卿集小嶋の千とり。定家卿うら千鳥。礒千とり。礒への千鳥。むら千鳥。多くつれたちたるを云友千とり。同上むれゐる千鳥。同上むれたる千鳥。同上後鳥羽院濱千とり。ねさめの千鳥。十一前太政大臣友なし千鳥。一羽也なといへり○かよふ。飛かよふ也たつ。ゐる。又立居とも。波なとにそへて六さわく。住。わたる。飛わたる也浦つたふ。遠よる。公朝汐風やゝ一千鳥など多くよめり○千世となくと。祝にかけてよむは。聲のさ聞ゆる故也。一賀。しほの山さしての礒にすむ千鳥君か御代をは八千世とそ鳴ともあり○あとふみつけよ。跡をとゝめて。同し跡。跡をとむ(求)る。なとよみつけたり。友千鳥にもよめと。濱千鳥によむ例多し。書籍のことにかけてよむ也。

千鳥

うら風に吹上のはまの濱千鳥波たちくらしよはに鳴也　紀伊

あなし吹をしまか礒の濱千とりいはこす波にたちさわく也　俊頼

むれてゐるおのか羽風に浪たてゝ心とさわくはま千鳥かな　守覺

住よしの松の梢をこす浪のいり江にかよふ千鳥なりけり　雅有

みたれ芦のかれはをしなみ夕汐のさしこす浪に千鳥なく也　慶運

曉千鳥　あかつきの千とりのこゑは過ぬ也ねさめのつまとおもひし物を　伊勢大輔

薄暮千鳥　いそのまつたつきもしらぬ夕汐におほつかなくも鳴千鳥哉　称名院

深夜千鳥　ほり江には千鳥鳴らし松浦舟梶おと絶てふけぬこのよは　慶運

月前千鳥　とにかくに心そたへぬ淸見かた月すむよはに千とり鳴なり　光經

嶋千鳥　さゝ嶋のいそこす波にたつ千とり心とぬれてなかぬ夜そなき　親盛

○水鳥(ミツトリ)　鴛。鴨。鳰。千鳥をもよみ。あきさ。あちむら。くゝゐ厂かね。鷺。すかとり。鷗。又たゝ水とり。或は水の村鳥とあらはしてもよむ也。又冬の影さへたしかなれは。たゝ鳥と斗もよむに難なし。正治二年哥合後京極。さゆるよになれゐる鳥の音なれや氷の上に波を聞哉。又建保四年哥合越前。霜ふかき難波のあしのしたはれてむれゐる鳥の跡もみえけりなとみゆ○うき鳥。新帖信実。浮鳥のさなからぬるゝ水あそひとあり○世をうき鳥。十一道譽法師定めなきよを浮鳥のみかくれて下安からぬ思ひ也けり○すか鳥とは。繁鳥と云也。音かよへはかくいへり。冬のよせなくてはよむへからす 仁安二。新林苑。哥合 祐盛法師。いつかたも同しうきねを何とかは浦わたりするさよのすか鳥○くゝゐ厂かね。玉吟上。なかきよの沼のねぬなはふみしたきくゝゐ厂かね霜はらふ也 くゝゐは鵠也なとあり○水鳥の脚(アシ)。喜多院二品親王。水とりのあしにひかるゝねぬなはの云々○水鳥の青羽。万八。水鳥のあをはの山。青葉を羽の青きにとりなしてつゝけたり 此外はね。はかひ。つはさ。上毛。なと多くよめり○うきね。うきねの床。玉もの床。つらゝの枕。同床うかふ。しつむ。あそふ。かつく。なとよみつけたり かつくの義は夏部鵜河の条下に委○水鳥のたちのいそき。只飛立を。旅たつによせてよむ也。いそきとは何くれと旅の用意いそかはしくする也。万廿。美豆等利乃多知能已蘇伎爾(ミツトリノタチノイソキニ)云々。同十四。水鳥のたゝむ裝(ヨソヒ)になとあり。一。立といひつけたり

鷺

崔豹古今注曰鴛鴦文禽匹鳥也。似鳧毛有文彩頭白雌雄未嘗相離。得其一則一相思而死。時珍曰。鴛鴦終日並游。有宛在水中央之意。或曰雄鳴曰鴛。雌鳴曰鴦。但我國にてをし鳥と云は。漢名鸂鶒なり。順抄云。乎之。楊氏抄鸂鶒と云とあり。但鴛鴦は頭白き鳥也。故に卓氏白頭吟あり。哥にはをし鳥ともをし共よむ也。藏器曰。鸂鶒南方有短狐處多有。性食短狐也。人家宜畜之。形小如鴨。毛有五采。首有纓。尾有毛如船柁形。時珍曰。鸂鶒其形大於鴛鴦而色多紫。亦好並遊。故謂之紫鴛鴦。されは哥にをし鳥をよむに。鴛鴦の故事を用うるも。其よく形似たる故也。搜神記曰。大夫韓明一名憑。其妻美。康王奪之。明怨王。囚之。明自殺。妻乃陰腐其衣。王與之登臺自殺。臺下左右提衣。不勝手。遺書于帝曰。願以尸還韓氏而合葬。王怒令埋之。兩塚相望。經宿忽見有梓木生二塚之上。根交于下枝連其上。又有鳥如鴛鴦常棲其樹。朝暮悲鳴。南人謂。此禽卽韓明夫婦之精魂 ○をしの衾。鴛鴦衾也。もろこしにて鴛鴦の相はなれさるをめてゝ。女の具につくる也。鴛鴦瓦。鴛鴦帳。鴛鴦幌。鴛鴦枕なとあり。又夫婦の緣の。幽冥の中より定まりたるをしるせる冊子を。鴛鴦牒なともいへり。寛喜女御入内御屏風に家隆卿。霜もらぬをしの衾のおほひ羽も千代をかさぬるやとの池水。延文御百首(ママ) 有光卿。池にすむをしの衾のさゆるよに上毛の霜や猶かさぬらん。これらは鴛の池にうかへるを。衾をおほひてあるにとりなしてよめる也○つるき羽。新帖信實。池水にをしのつるき羽そはたてゝ妻あらそひのけしきはけしも。これは脊にある小羽の。劍を建たるやうなるをいへり○おほひ羽。是も同上なるへし。上に證哥あれはまたのせす ○をしの青羽。文治六年百首 俊成卿。はらひあへぬ上毛の霜のいかなれはをしの青羽のかはらさるらん○くちばし。嘴也。式子内親王御集に。くちはしも氷とちてやをし鳥のさむけきよはに音なかるらむ○をしの毛衣。霜の毛衣。千五百番哥合 兼宗卿。あはれなり下のおもひやいかならむ氷をたゝむ鴛の毛衣。同哥合 隆信朝臣。さむけしやつかはぬをしのよもすから波にかたしく霜の毛衣○手かひのをしとは。只飼置たる鴛を云。又手かひになつくなともよめり○鴛を籠にいるゝことは。小大君集に。をし鳥をこにいれておこせたるに。人よれと今はたちけもなき鳥のこにこもれるやなにのうたかひ○をしを惜にかけたるは。万廿にもをし鳥のをしきとよみ。三雑。よしのふに車のかもをこひにつかはして侍けるに。侍らすといひて侍け

れは。藤原仲文かをさして馬といふ人ありけれはかもをもをしとおもふなるへし○梢の鴛。池の鴛鳥。をしの一つかひ。友ねの鴛。數たにか〻て。ならひすむ。影をならふる。鴛の諸こゑ。つかはぬ鴛。友なき鴛。ひとりなく鴛。獨ある鴛。鴛の獨ね。ふし木にねふる。しはしまつま戀かねて。うかへる鴛。妻なきをしなとよみつけたり。此外。水鳥の下をあはせよむへし○鴛とたかへと〻は。万三人不搒有雲知之潜爲鴦与高部共船上住とあり。たかへは鴛の類鳥を云成へし。又をしたかへともよめり。惠慶集。水鳥波にあそふと云題にて。みる人はおきつあらなみうとけれとわさとなれぬるをしたかへ哉とあり○鴛を錦とみ。もみちとまかふは彩文あるか故也。基綱をし鳥のむれゐる水や江にあらふからの錦のよそめなるらむ。雅經卿梢よりをしのむれゐる山川を嵐にうかふ紅葉とそみる○妻あらそひ。建仁元。老若五十首。嘉陽門院越前たれきかむ生田のおくにさよふけて妻やあらそふ鴛の諸こゑ。又上に出せる新帖の信実朝臣の哥にもみゆ

## 鳧

順抄云。加毛楊氏抄云。鳧鶩。尓雅云。鳾。沈鳧也。鳧性好没故也。又時珍云。俗作農鳧云鳧常以農飛。亦通東南江海沼中皆有之。數百爲羣聚。夜蔽天而飛。声如風雨。所至稻梁一空。陸機詩䟽曰。狀似鴨而小雑青白色。背上有文。短喙長尾卑脚紅掌。水鳥之謹愿者肥而耐寒。尓雅集注云鴨野名曰鳧家名曰鶩。但鴨の種類多し。一は眞鳧。尓雅云食用緑頭者爲上。これ哥に。かも又あしかもと云なるへし。万十四。於吉都麻可母能奈氣伎曾安我須流上畧。鴨の息はなかき物なれは。我歎によせていへり。なけきとは長息をつ〻めたるにて。里にといきと云これ也。あし鴨とは。た〻鴨といふへきを。鴨は多くあし辺にすめはかくよみつけたる也。万十七長哥奈伎佐尓波阿之賀毛佐和伎。一は阿伊佐。尓雅云尾尖者次之と云。これ哥にあきさと云なるへし。ちときとは通音也。万七山際尓渡秋沙乃往將居。頼政集。すみのほる月の光によこきれてわたるあきさの音の寒けさ。又俊惠集。あはちしま松吹風のおとすかときけは礒へにあきさたつ也。又長明集。むれわたるいそへのあきさ音さむし。又公朝百首中。あきさゐるあらき濱への松かねに。又同。なるみかたあきさ渡るとみしほとになとみゆ。一は鈴鳧。哥にもさよめり鈴にかけてよめるは羽音の似たる故也。源仲正集に。水鳥夜遊。よもすから沖のす〻かもはふりして渚の宮にきねつ〻みうつ。一は味鳧。これ哥に。あちむら又あちのむら鳥なと云成へ

し。此鳥よく群する故に。必むらとそへていへりあちむら上に出せり。とかくに群するさまをよむへし。万四。味村乃去来者行跡。いさとつゝけたるは多くつれたちてとへは也。同巻山羽尒味村騒。同十七。奈呉乃海尒波安遅牟良佐和伎。猶多く例あり。又あちむらすたく。みきはにおつる。手かひにそするなともよめり。其外白鳧。美古鳧なといふ類猶多かれと。哥によまねはもらしぬ○あしかものすたく。万十一葦鴨之多集池水雖溢儲溝方尒吾将越八方。すたくは此多集の義也○あしかものさわく。一戀あしかものさわく入江のしら波のしらすや人をかくこひむとは○沖にすむかも万十一吾妹兒尒戀尒可有牟奥尒住鴨之浮宿之安雲無。又十四於吉尒須毛乎加母乃母巳呂云々。これもすもはむの通音にて。沖に住といふ也。をかもは小鴨なり。もころは如といふに同し。猶十五には。沖になつさふ鴨すらもとよめり○めよはふとは。獨ある鴨のつまをよはふ也。万三。奥辺波鴨妻喚とあり○鴨の羽衣。柿本影供。後九条内大臣置霜は青羽のうへに重ねつゝ柳にみゆる鴨の毛衣○鴨の羽かひ。万一。葦辺行鴨之羽我比尒霜零而○しろたへのはね。万十五。由布佐礼婆安之敝尒佐和伎安氣久礼婆於伎尒奈都佐布可母須良母都麻等多具比底和我尾尒波之毛奈布里曽等之路多倍乃波祢左之可倍氐。これは白鳧を云なるへし○鴨の水かき。新帖。知家卿世にふれはかもの水かきやすからす下の思ひは我そくるしき○鴨自物とは。只鴨といふ物と云義也。万一。長哥鴨自物水尒浮居而云々○かもといふ船。万十六奥鳥鴨云船之二首あり。これは前にもみゆることく。鴨は沖に多くすめはかくはつゝけたり。こゝは船の名なり○鴨つく嶋。古事記に意伎都登理加茂度久斯麻邇。つくとはそこにゐつく心也○鴨の羽色。万八。水鳥之鴨之羽色乃春山乃とあり。春山の青きにたとへたり。又同二十には。水とりのかもの羽の色の青馬をともみゆ○鴨かねとは。鴨の音といふ也。万十四。上略可母我冝乃之牟伎由布敝思とあり○鳴かも。ゐる鴨。かも鳥。鴨のむら鳥。むれゐる。うきね。うらつたふ。みなるゝなと。上の水鳥の下にのせたるをかよはしてよむへし──

鳰──順抄云。郭璞方言注云。鸊鷉辟低二音和名迩保野鳧小而好沒二水中一也。野王案鸊鷉其膏可三以瑩二刀劒一者也○ふたりならふ。万十八尒保騰里能布多理雙坐とあり○浮巣は。夏つくりて子をうむなり。しかるに。月清集の下に。水鳥知レ主。にほとりの波にまかする浮巣たになれぬみきはにわきよるらし。とあるは冬にかなはす。作例とは

すへからす。又源三位頼政の。五月雨に鳰のうきすのなかれきてとよみ給へと。鳰のうき巣はなかるゝ物ならすと難をおひたり〇下のかよひち。鳰はよくかつく鳥なれは也〇下にはやすくかよふ。同上。禪林寺殿七百首　爲氏卿。冬の池の上はつれなき氷にも下にはやすくかよふにほ鳥〇にほとりのおきなが川。万二十。尓保杼里能於吉奈我波伴多延奴等母伎美尓可多良比己等都奇米也母。鳰はとりわきてよくかづきして。水の底にあるほといとなかし。されは水の上にうかひ出るまては息をつめて。さて出たる時なかき息をつぐ也。この故に息長河といふ也。おい通音也。おきなか川は地名なり　後世このことをひか心えして。沖中川といふ。これ沖に出たるしかま川なといふ哥の類と思へる也。此説かたく用うへからす。沖中川にてあるましきことは。万の假名に奈我我波と。かもし二字とも濁音を用られたるにてもしるへし。源夕貞に。おき中川と契り給ふより外のことなしとあり。これ此哥によれる也。紀廿八に。息長横河。式廿一に。息長墓あり。是を考るに近江坂田郡也

水　鳥　河ふねのあしまをわくる梶の音にをしの羽風の先聲そする　經信
よもすから霜やおくらむ水鳥のはらふ羽音の絶すきこゆる　顯季
なには江の芦のふし葉やをし鳥のうきねの床のかこひなるらん　雅經
氷してみきはのひまやせはからんむれゐる鳥の飛わかれぬる　後伏見院

夜水鳥　よとゝもにいくへの霜か置そへむかものうはけに波のこさすは　慶運

月前水鳥　みたれあしのしたにかくるゝをし鳥はてる月影を霜かとやみる　俊惠

池水鳥　冬の池のみくさをしなみふる雪におのれもしろきかもの村鳥　光經

河上水鳥　いかはかりしたさわくらむ波の上にやすけにあそふをしのむら鳥　頼政

湖上水鳥　（校者云歌ナシ）

嶌辺水鳥　たまもかるまつかうらの鳰風さえてかものはかひに霜やさむけき　親隆

○霰 漢名同上。順抄云。雹。和良礼とあるに。万十。我袖尓霰手走。此哥冬の中にあれは。古は霰雹かよはして用けるにや。詩小雅曰。如彼雨雪。先集維霰。説文曰。霰稷雪也。又釈名曰。星也。水雪相。摶。如星而散。今名濟雪。亦曰濕雪。又詩補傳。霰米雪。又粒雪。箋曰。將大雨雪時。必微温。雪自上下。遇温氣而摶。謂之霰。久而寒勝則大雪。なといへり。又雹は時珍曰。程子云。雹者陰陽相搏之氣。盖沴氣也。或云。雹者砲也。中物如砲也。漢文帝後元年。雨雹如桃李。深三尺。景帝二年。秋雨雹大者五寸。永初三年。夏河西縣大雨雹。大如栝棬大。或如斗。漢武帝元封三年。冬雨雹大如馬首。宣帝地節四年。夏山陽雨雹大如雞子。深二尺五寸。殺人飛鳥皆死。陸佃曰。陽散陰為霰。陰包陽為雹。形似半珠。其粒皆三出。雪六出。六出成華。雹三出成實。これその別なり。雹は俚云ヒヤウにて。四季にわたりてあり。霰は冬にかきるへき也○玉のをとけてこきちらし。霰みたれて霜こほり云々。あられのふるさまを。玉をつらぬきたる緒のとけて。その玉のみたるゝによせていへり○あられふりかしま。万七。霰零鹿嶋之崎乎。これは霰の音のかしかましきによりてつゝけたり○あなかま。八冬崇徳院。みかりするかたのゝみのにふるあられあなかままたき鳥もこそたて。俚云アラヤカマシの義也○たばしる。万二十。下畧 霜上尓安良礼多婆之里云々。さら／＼とも物にあたりてはしりみたるゝをいふ○あられまつはらは。攝津の名所。住吉のかたはら也。万一。霰打安良礼松原住吉之云々○丸雪とは。万七にかけり。これはたゝ義をもてかける假名也。○ふる。ふりしく。ちる。みたるゝ。くたけてちる。あられの音。霰にさゆる。おつれはこほる。枝をつたふ。葉をつたふ。なとヿまく／＼よめり。又玉あられ。見たてゝいふ也あられの玉とも。又朝あられ。夕霰。さよあられ。こほれる雨なともいへり

霰

かきくらしにはかにもふるあられ哉み山おろしの風にたくひて　紀伊

人めにはあられたはしる我そてを衣につゝむ玉かとや見る　顯季

空さゆるあり明の月はありなからむら雲みたれちる霰かな　雅有

をしなへてしくれしまてはつれなくて霰におつるかしは木のもり　土御門院

夜霰　とふ人もなき冬のよのさよなかに音するものはあられなりけり　爲仲

屋上聞霰　いとはれししくれの後のまきの屋におともかはらてふるあられ哉　爲家

山家霰　かきくらしあられたはしるみ山へは心くたくるものにそありける　忠盛

閑庭霰　庭の面はふるやあられのたまさかにふみわけてとふあとたにもなし　雅有

○霙(ミゾレ)　雨に雪のましりてふるを云。但同。順抄ニ云。霰和名美曾礼。韻會ニ曰。霙ハ霰也。尒雅ニ曰。雨雪雑リ下ルヲ曰レ霰ト。海篇之說亦同。又廣雅ニ曰。霙ハ雨雪雑リ下ル也。文選ノ雪賦。井孫愐同上。朗詠中には。以テレ霰ヲ爲ス二稷-雪ト一仙覺の抄には兩義通用せり。今の世はおしなへて霙の字を用〇みそれふる。みそれよこぎる。みそれする。みそれの空。みそるゝ空。雨ましりふる雪。こほりもはてぬ雨。庭にたまらぬ雪なとおほくよめり。すへていたくさむき趣によむへし

霙　世はさむくさえこそまされふる雪のみそれになれる夕暮の空　後伏見院

霙濕旅衣　たひ衣きそのあさきぬぬれとほりみそれにとまる坂の下庵　正徹

○殘鴈(ノコルカリ)　秋におくれて冬來たる雁を云。續撰吟雅世　白たへの衣かりかねわたる也ふゝきにくもる雪の山もと。これは白鴈をよめる也。文昌雑-録ニ曰。北方ニ有リ二白雁一。似テレ雁ニ而小ク。色白シ。秋深キハ則來ル。此說によりてよみ給ふなるへし。されとこゝにては。白鴈は中秋まつきたる也。夫よりもろ／＼の鴈はくるといへり。鴈のこと。春秋の部歸厂初厂なとの下にてみるへし。それに冬の物をよみ合すへし

○寒鴈　此題。殘鴈の下に組つけたるを。行宗卿寒鴈といふ題を。我こひはことにふれてもまさる哉まさるのかりはよつきならねととよみ給へり。これ全く冬の心なし。今考るに。秋にもよたむとも(ママ)。又方にはさむきゆふへとよみ。源仲〓にも。假にはたさむき夕くれなとあれは。此題秋冬かよはして組へきにや

殘鴈　山もとのを田のいなくきふみしたきおれるゝもあ雪はらふなり　正徹

○雪　漢名同ㇾ上順抄云。和名由伎。大戴禮曰。天地積陰。温則爲ㇾ雨。寒則爲ㇾ雪。春秋元命包云。陰陽凝而爲ㇾ雪。雪者爲二五穀之精一也○はつ雪。万二十。下畧　波都由伎波知敝尓布里之家云々○はつみ雪。たゝ初雪に同し。みの字の義下に委　承久四年百首初雪　源兼昌。はつみ雪ふりにけらしなあらち山こしのたひ人そりにのるらし○むつの花。雪の異名也。このみよむへからす。月令廣義曰。草木之花皆五出。雪花獨六出。莫ㇾ喩二其理一。朱文公謂。地六水之成數。雪者水結爲ㇾ花。故六出。古今詩話曰。天上有二瑞木一。花六出注云雪也。これらよりいふ也○あは雪。紀万ともに沫雪とかけり。もと雪は沫の凝あつまれるかことき物なれは。しかいふなり。しかるに。春雪は沫のことくもろく消やすけれは。新式には春にのみよめり。古はたゝ冬ふるをいへること例いと多し○みゆき。これもたゝ雪といふ也。みもしくは眞の通音にて美稱也。万に深三なとをかけれと本字にあらす。ふかき雪をみゆきといふ説は。後世の人此深の字よりひか心えしたる也。又行幸にかけてもよめり○おほ雪。万二。吾里尓大雪落有大原乃古尓之郷尓落卷者後。又同卷。長哥　大雪乃乱而來礼者云々。いたくふるを云今もいふかことし○時なき。万一。長哥　其雪乃時無如。冬にいたれはともすれはふる故に。時とかきりたることなくふるといふ也○時ならぬ。万一。其雪不時如。これも上の義に同し○時しく。万三。時自久曾雪者落家留同一にあり。これ又上に同し。紀に非時とかけるにても心うへし○雪にて火をけし。火にて雪をけすとよめるは。万三長哥　燎火乎雪以滅落雪乎火用消通都とあり○雪消する。又雪けの道。万三。長哥　雪消爲山道尚矣。同卷。上畧　雪消乃道矣名積來有鴨。なつむはなやむなり。雪どけといふに同し。けもし淸てよむへし○雪氣とは。雪の氣にて消る義にあらす。けもし濁へし。雪げの雲。雪げのそら。又雪げもよふなといへり。やかて雪ふるへき氣のしるきを云○打きらし。秋の部霧の条下にいへることく。雪のふるにて我見る所を遮る心也。万八。打霧之雪者零乍然爲我二吾宅乃苑尓鶯鳴嘤とあり。此哥二春には。初五ことかきくらし。末の七こと鶯そなくと改めてのせられたり。かきくらしは空いたくくらかるを云○風ませにふる雪。万八。風交雪者虽零実尓不成吾宅之梅乎花尓令落莫。風にふかれなからふるを云○ふ

ゞきふゝき。又ふりふゞきなといふは。風ましりにふる雪を云。又くたけふゞきとも云。曽丹。三百六十首中ふりふゝき雪まもみえぬ冬の日のはれぬくもゐに厂そ鳴なる。又家隆卿は。木間よりなひく夕日のほともなし嵐にふゝくさ夜の中山共よみ給へり○雪しまきとは。雪ませにふる時雨の風にきほふを云。又雪しまくとも云○すかの葉しのきふるとは。菅の葉をおし分てふる也。万三奥山之菅葉凌零雪乃。又一には。おく山のすかのねしのきふる雪の共よめり。同上○かのこまだらにふるとは。雪の鹿の子の毛の斑のことくふりたるをいへり。家持集。白山のみねなれはこそしら雪のかのこまたらにふりてみゆらめ。又人丸。時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらむなとあり○はたら。はだれ。又雪のはたれとも云は。霜の終下にいへることく。たら〳〵と雪のふれる也。万十。庭毛薄太良尓三雪落有上畧。万八。沫雪香薄太礼尓零登見左右二流倍散波何物花其毛。此哥の趣にても。ちら〳〵とかろけにちるにはあらて。里にボタ〳〵フルなといふ雪をいふことみるへし。又万二十上下畧落乱雪驪ともみゆ。又此はたれをやかて体にいひなして。雪の名のやうによめるは。万十。小竹葉尓薄太礼零覆消名羽鴨とあり○ほどろ。万十。上略沫雪零有庭毛保杼呂尓とあり。これもはたらに同し。はとほ。たとと。らとろ。皆通音也。ひそかに思ふに。今俚にボタボタといふ詞の古語なるへくや。或説に。はたらほとろ共に斑也といへり。これもその一理あり○此もとほりの雪とは。万十九。長哥大殿之此廻之雪莫踏祢。又同反哥に。上畧大殿乃此母等保里能雪奈布美曽祢。これは。此めくりに雪のふりしきたるをふむなといふ也○うとみもなし。万十。零雪乃膚毛無跡。うとみ遠さけまほしきことなく。いつとてもめかれぬ心につゝけたり。又は他人をうとき人とよみ。疎をうとしなとよめれは。まはらにあはひ遠きことなれは。こゝも雪のひまなくふり敷たるをうとみもなしといへるにやとも聞ゆ○ちさとふりしき。万十。沫雪千里零敷○雪ふみならし。万十九。下畧新年之初者弥年尓雪踏平之。ならすとは。里に同しく。何に一もあれ高下浅深なくたひらにする也○いちじろく。万十。零雪之市白兼ニ。同巻。見山雪之灼然なとあり。キラ〳〵と光あるさま也○雪そゝくとは。麗也。杜詩に舟雪灑寒燈とあり。ふりかゝるさまをいへり。拾遺愚草に。こしの山又此ころのいかならむなへてのみねにそ

ゝく初雪。正治二年百首。六条入道前太政大臣 ゝく花のこすりのかり衣なとみゆ〇雪かくとは。かきはらふ也。源仲正集 雪春。よもすからふせやの上につむ雪をいくたひかきつこしのさと人〇雪しみて。又しみたる雪。正治二年百首。三条入道左大臣 ふゝきすゐきそのみ坂に雪しみてはらへとのひぬまくり手の袖。又宝治二年百首。信実朝臣 積雪。いつまてかふみも分けむみ山へにしみたる雪は道たえにけり。しみ氷るなといふかことく。俚ニ云凍イテたる心なるへし〇雪をれ。又雪の下をれ。雪折の声圧。下折の声圧。雪いたくふりつもりて。木の枝なとのをるゝを云〇しるしの棹とは。雪ふかき國にて。雪のふかさ淺さをしらむためにたつる棹也。大炊御門右府。家佐公 こしの山たておく棹のかひそなき日をふる雪にしるしみえねは。又万代集同公。初雪のしるしの棹はたてしかとそこともみえすこしの白山〇友まつ雪とは。雪のつもりたるか。又ふらむをまちかほなるを云。家持集白雪の色わきかたき梅かえに友まつ雪そ消のこりたる。二貫之。降そめて友まつ雪はむは玉の我黒かみのかはる也けり。兼輔かへし。黒かみの色ふりかはる白雪の待つる友はうとくもある哉〇そり。漢名橇。雪ふかき道をゆくに。足にふみてゆく物也。そりにのるとよめり上のはつみ雪の下に證哥を出せり〇かしき。俚ニ云カンジキこれ也。これ又そりの類なり。源仲正。法輪百首哥合に述懐。かしきはくこしの山路の旅すらも雪にしつまぬ身をかまふとか〇雪山にみつ。枕草紙に。明ぐれのほとにかへるとて。雪何の山にみてると打ずんじたるはいとおかしき物也とある。是は朗詠に。謝觀か白賦の詞に。曉入二梁王苑一雪滿二群山一。梁王とは孝王也。漢文帝の子也。文選の注に。竹苑にて雪の朝は人ゝをめして遊ひ給へることとみえたり〇雪を物にもりたることは。同草紙に。村上の御時。雪のいとたかうふりたりけるを。やうきにもらせ給ひて。梅の花をさして。月いとあかきに。是に哥よめ。いかゝいふへきと兵衛の藏人にたひたりければ雪月花の時とそうしたりけるこそ。いみしうめてさせ給ひけれとあり。是は文集に。琴詩酒伴皆抛レ我。雪月花時最憶レ君とあるをいへり。やうきとは楊器也〇雪の山とは。釈尊法を說給へる所也。されは釈尊を雪の山人ともいへり。又雪にて山をつくれるをもいふ。源権。一とせ中宮のおまへに。雪の山つくられたりし。よにふりにたることなれと。猶珍らしくはかなき事をしなしたまへりしかな。又枕草紙にも。雪いとたかうふりたるを。女房ともなとして。ものゝふたにいれつゝ。いとおほくおくを。

同しくは。庭にまことの山をつくらせ侍らんとて。さふらひめして仰ことにていへは。あつまりてつくるに。殿守司の人にて。御きよめにまいりたるなどもみなよりて。いとたかくつくりなす。中畧此山つくる人にはろく給はすへし。雪山にまいらさらむ人には。同しからすとゝめむなといへは。中畧けふの雪。山つくらせ給はぬ所なむなき。御前のつほにもつくらせ給へり。春宮。弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へりなといへは。清少納言こゝにのみめつらしとみる雪の山所〳〵にふりにける哉。中畧雪の山は。まことにこしのにやあらんとみえて。きえけもなし。中畧此雪の山いみしくまもりて。わらはへなとにふみちらさせこほたせで。十五日まてさふらはせ。云々又同段に。物のふたにこ山うつくしうつくりてといへり。是も雪のこと也。すへて此一段雪のことをかけり○山陰の雪とは。晋王子猷居二山陰一。大雪夜開レ窓命レ酌。四望皎然。因詠二招隠詩一。忽憶二戴逵一。時在二剡溪一。便乗二小舟一詣レ之。既造レ門而返。或問レ之。對曰。乗レ興而來。興盡而返。何必見二戴安道一耶○ゆきをあつむるとは。晋孫康。家貧。常映レ雪讀レ書清談。交游不レ雑といふをとれり○雪まろばし。源氏にわらはへなとおろして雪まろはしせさせ給ふ。中畧いとおほうまろはさむとふくつけかれと。むさほる也遊仙窟に貪生をはふくつけ人と訓すえもおしうごかさでわふめり。かたへは東のつまなとに出ゐて心もとなけにわらふ。云々俚云雪コカシ也

雪

あさほらけ雪ふるそらをみ渡せは山のはことに月そのこれる　道済
花とのみ梢の雪はみゆれともちらて消るそしるし也ける　紀伊
村しくれあとよりはれし山のはのやかてくもるや雪けなるらん　雅経
人やたれやとはいつくとうつもれし木葉に雪の猶つもるらむ　俊成卿女
へたてつるそのふの竹はをれふしてそともにつゝくみねの白ゆき　後伏見院
ことゝひし花かとそおもふ打わたすをちかた野へにふれる白雪　宗尊
さえくらす時雨のあめや氷るらんかつみるまゝに雪に成ける　雅有

たらちねはあつめしはかりあつめぬや光もうすき窓のしら雪　慶運

初雪　みわたせはいはまのをさゝうへしろみけさ初雪はふりにけるかな　弁乳母

いそのかみむかしのあともはつ雪のふりしきぬれはめつらしき哉　俊頼

初雪未深　（校者云歌ナシ）

行路初雪　道すからふるとはすれとゆく駒のつめもかくれぬけさの初雪　長方

古寺初雪　さそはるゝ雲のまよひにかつふりて雪もはつせの山かせそふく　爲家

曉雪　はつせ山あらしはたゆむ明かたに雪分のこすかねのおとかな　隆祐

夕雪　山の雪のつもりしつまる夕くれの日かけにみかくをちこちの峯　後伏見院

夜雪　よもすからあはれつきせすなかめする雪と月とのあり明の庭　同

松雪　（校者云歌ナシ）

木ゝの雪さくらに似たり　かみな月もみちにふれる白ゆきはをりたかへたる山さくらかな　弁乳母

山雪　けさはしもあをねかみねに雪つみて峇のさむしろしきかへつらむ　俊頼

遠見山雪　ほと遠みみねのしら雪ふりにけり雲のまよふとみえまかふまて　爲仲

野雪　（校者云歌ナシ）

河邊雪　玉しまやこの川かみの道たえてわか里まよふ雪の夕くれ　覺性

海邊雪　しらゆきのふりしくときはおしなへて波まともなき淡路しま山　雅有

海辺松雪　ふる雪はつもりにけりな白浪のおとせてこゆる末のまつやま　爲家

湖雪　志賀のあまのつりする袖やさむからし雪になりゆくひらの山風　光經

| | | |
|---|---|---|
| 杜雪 | 神なひのもりのこからし聲もなし下草かけておもるしら雪 | 同 |
| 故郷雪 | 人にこそとはれし物を古さとの雪ふみ分て我はきにけり | 顯仲 |
| 關路雪 | きよみかたせきの戸いつるたひ人のうらちにつゝく雪の明ほの | 光經 |
| 行路雪 | おもはすにたひの日數そつもりぬるのはらの雪のふまゝ（ママ）をしさに | 親盛 |
| 旅宿雪 | ひとり住草のまくらはさゆれともふりつむ雪をはらはてそみる | 國基 |
| 雪中旅人 | み山ちをけさや出つるたひ人の笠しろたへに雪はふりつゝ | 經信 |
| 雪中待人 | こほりあへぬ山田の沢にふる雪の下消かへり君をこそまて | 基俊 |
| 雪朝待友 | けさしもあれあやなのとけき我身哉雪まは人やたつねくるとて | 爲仲 |
| 庭雪厭人 | とはれける身のならはしのありかほに跡いとはるゝふはのしら雪 | 爲家 |
| 雪埋遠樹 | そのはらやふせ屋は雪にうつもれてありとみえつるはゝきゝもなし | 覺性 |
| 雪埋寒艸 | おいぬれは我みとのみもみゆる哉よもきか上にふれるしら雪 | 在良 |
| 雪与歳深 | 山たかみいくよの松のふかみとりつもれるとしをうつむ雪哉 | 称名院 |

○**鷹狩**（タカガリ）　山。野。又江のわたりにて。鷹をあはせて鳥をとる也。但春秋も鷹狩はすれと。冬を專らとす。されは。打まかせて鷹狩といふは冬の題也。哥にはたか狩とも。又とがりともよむ也。（とかりは鳥狩の義也）万十七。安米能布流日乎等我理須等とあり。尒雅云。鷹鶆鳩。月令云。仲春鷹化爲鳩。七月鳩化爲鷹。又云。仲春之月。鷹乃學習。孟秋之月。鷹乃祭鳥用始行戮矣。もろこしにても鷹かりは專すること也。樂天鷹詩。本爲鳥所設。今爲人所資とあり。我國に鷹はしめて出。又鷹狩おこれるは。仁德紀云。四十三年秋九月庚子朔。依網屯倉阿弭古。捕異鳥獻天皇曰。臣毎張網捕鳥。未曾得是鳥之類。故奇而獻之。天皇召酒君示鳥曰。是何鳥矣。酒君對言。此鳥類多在百濟。得馴而能從人。亦捷飛掠諸鳥。百濟俗号此

鳥一曰俱知是今時鷹也乃授酒君令養馴未幾時而得馴。酒君則以韋緡著其尾居臂上献于天皇是日幸百舌鳥野而遊獵。時雌雉多起。乃放鷹令捕。忽獲數十雉。是月甫定鷹甘部。故時人号其養鷹之處曰鷹甘邑也とみゆ〇みかり野。すへて天子の御狩せさせ給ふ處を云。又行幸し給はすとも。日次のにへなとのみかりする所をもいふへし。西能因。打はらふ雪もやまなむみかり野のきゝすのあともたつぬはかりに。直人のかり場は。たゝかり場とのみよむへし〇鷹山。西園寺相國百首中 たか山にあさるふもとの云々。かり場にする山を云〇神のにへ鷹。同上 人もとかめし神のにへたかとあり。神に奉る贄のれうにする狩也〇すはのみかり。定家卿三百六十首中 すはのみかりにとりやかはましとあり。諏訪の神に奉る贄のれうの狩を云。午末にあたる日也といへり〇吉備のにへ鷹。同上 まかねふくきひ津御神の贄たかや諏訪の御代よりひさしかるらむとあり。吉備つ御神は備中にあり〇日次のみかり。日つぎとめ又日なみのみかり共よめり 毎日内裏へ鳥を献する也。但六齋日をは除くと也。西園寺もゝしきの日次のにへをたてむとて。延久百首。宗經 今も猶たえぬひつぎのみかり人。範宗。ひなみのみかり千代はあれとも。定家卿 日次のみかりいつの御代より。雅經卿 昔よりひつきのみかり絶せねはなとみゆ〇とまり山。二日三日もそこにとまりて狩する山を云。定家とまり山酒をすゝむる云々。上つ世よりとまり狩はせしことにや。万十七。安之我母能須太久旧江尓乎等都日毛伎能敷母安里追と。鷹狩をよめる長哥の中にみえたり〇いて山。西園寺 かり歸るかたのみのゝ（ママ）出山にとあり。山を出もて狩を云。歸るさの義也。交野には米山といふ所あるよし也。そこにてかりすること。同相國よみ給へり〇すみの柱をぬくことは。延喜帝。野の行幸の時。鳳輦の角の柱をぬきてとらせ給へるよし也。同上 たゞさきのすみのはしらにかはりてや御こしのまへに鳥のたつらむ。但これは小鷹狩によむへきこと也〇たつる使。三光院 雪のうへのみゆきのみかは御かりのやたつる使の道ものこらむとあり。御狩場へ勅使をたてらるゝこと也

**鷹ヲ出セル所々**

〇陸奥のいはで。大和物語に。ならの帝の御時。みちのくにいはての郡より奉れる鷹。いとよき鷹にて。帝いとになくおほして。鷹飼のつかさの大納言に。かの鷹をあつけ置せ給ふに。大納言あやまりてそらし給へり。さてそのよしをかしこまり奏し給ふに。帝物をもの給はねは。大納言おしかへして。なとか仰こともし給はぬと奏し給へは。帝。いは

ておもふそいふにまされるとの給ひけるよしみえたり。くはしくは物語をみるへし。異文〇陸奥のしのぶ。定家しのふの鷹のみたれふとあり。猶多し〇伊与。定家 伊与路ゆくこれ山すみはとあり。必逸物なるさまによみたまへり〇ひらかのみたる。出羽。新帖。光俊 いてはなるひらかの御鷹立かへり云々〇いらこの鷹。志摩。引すへよいらこのたかの山かへり云々 家隆卿〇いはせの鷹。同上すゝか山伊勢をの鷹はとあり鷹〇はしたか。順抄云。鷂。兼名苑云。鶚一名鷂 鷂音遥 諸延反 鷂也。野王案鷂。[illegible] 似鷹而小者也とあり。今。はいたかといふこれ也。但定家卿三百六十首の中に。はいたかのと書たる所二ところ斗みゆ。これは誤寫にや。又は俗語のまゝをはよみ給へりけるにや。はしたかとはすへて小鷹をおしこめていふ惣名也。獣にもさる故に多くよめり〇大鷹。順抄云。俗説雄鷹謂二之兄鷹一雌鷹謂二之大鷹一也とあり。されと今いふ大鷹は雌雄にかきらす。帖にも。大鷹かり小鷹かりと題をわかちて出されたり。大鷹は大鳥をとるゆゑに。専ら冬の狩にはこれを用う。即この帖のも。大鷹かりといふは冬也。小たかゝりといふは秋也。これはその專なるをもていふにて。冬も小鷹を用うることもつね也。定家 大たかのおほ羽とてはやをちに行らむとあり。大鷹は羽つかひも大きなれは。早きやうにはみえねと。遠くのす也。大羽とぶとは此心にて。大きなる羽つかひ也〇はやぶさ。同上。はやぶさを二もとまてそあはせつるふる川のへの秋のかりかね。はやぶさとは。又小鷹の一種也。わさいときゝたる鷹也。俗にもしかいふ也。二もとゝは二羽といふ義也。すへて鷹一羽をは一もとゝいふ。さて河洲にては。一ツ鷹とて。必鷹二羽を。鳥一ツにあはすがならひ也といへり。〇ほつ鷹とは。万十七。奈我古敷流曾能保追多加波とあり。これは集中に。最高枝をほづえとよみたるに同しく。ほは最にて。つは助字也。逸鷹をいふ也〇朝鷹。同上 あさたかにすゝのこさして云々。これは朝狩にいつるをいふ也。一名にはあらす。但狩に出さまにのみよむへし〇このり。同上 おなし秋わたるこのりは云々。かの順抄にいへる兄鷂也。又西園寺相國は。すこのりともよみ給へり。これは今年。巣よりおろし來て飼たてたるをいふ〇あらたか。いまた馴ぬを云。一名にあらす。手にもたまらぬあらたかなとみゆ〇はや鷹。はやぶさなるへし。定家はやたかの七十あまり云々〇小たかとは。たゞはやぶさなと。すへて小さき鷹を云。同上 かた野にかり小鷹とかふ云々〇拾たか。同上 拾たかのすゝ手のかいこあたゝ

めてとあり。たゞ鷹の母といふ也○鷹の子。信実 手がひにかろきたかの子は云々。又定家 あし引の山てふ山にかくる巣に白鷹の子のなとなかるらむともあり。白たかのうみたる子は必逸物なるへし○若たか。順抄云。鷹。廣雅云。一歳名ニ之黄鷹一（俗云和賀太加）これ也。若たかは。胸毛かならず黄なりと也。又定家卿。毛をかへはかはり行へき若たかやとやぎはまての赤ふなるらむともよみ給へり。されは胸は黄に。符は赤みある也○秋のはつたか。定家 みえぬをわさる秋のはつたかとあり。秋ははしめて鳥屋より出して。さて狩にいづれは。鳥屋出の後はしめてなる心にて。はつたかとはいふ也○秋のわかたか。同上 ふるとびに似る秋の若たかとあり。ことし巣よりおろしたるを鳥屋にいれて。さてその程に毛をかへて。年へたる鵄のことき色になれるを云。此とびのことき符あるはよき鷹のよし也○あかたかとは。若鷹のこと也。一説あとわと音かよふ也といへるは誤れり。猶上にいふことく。赤き符あるは即若たかなれは。これは赤鷹といふ也○あかふのたか。定家 こぞの赤ふのなこりなるらんとあり。これはかの若鷹のことを。翌年よみ給へる也○野ざれとは。野にて年をへたる鷹を云。野鷹といふに同しく。とりもかはぬを云。又それを飼たるをもいふへし。同上 あられふる冬の野ざれや云々○かたがへり。順抄云。鷹。廣雅云。二歳名ニ之撫鷹一（俗云加太加閉利）これ也同上 とやまさりするかたかへり云□。片鳥屋をへたる義にて。二歳めの鳥屋前なるを云○そばみ鷹。西園寺 そばみたか羽杖をつきて云々。いためる鷹を云。風なといたくさむけれは。鷹いたむよし也。羽杖とは。羽をひろげて拳を押ふるを云。いためる鷹の力なき故にするわざ也○やせ鷹。無子細。しゝをひくなとよめり○はとやのたかとは。一條院の御時。鳩屋のたかとて逸物なりし共。又廿とやをへたる鷹也とも云。二條殿下連哥の中 そのすかたはとやのたかの鈴ならし戀しき心やはたくひあるとあり○羽とびの鷹とは。羽の一段とき鷹と也。定家 羽とひのたかやよりてとるらむとあり○もろかたがへり。又もろかへりともいふは。鳥屋を二度へたる義にて。二歳の秋より。三歳のとや前までをいふ也。定家 もろかたかへりすきぬ也とあり○とや出のたかとは。鳥屋より出たる鷹といふ也。秋によむへし。下にくはし○しらふのたか。万十九。須惠氏曾我飼眞白部乃多可。又。麻之路能鷹乎ともあり。これは鳥屋を多くへたる也。年をふるまゝに次第に白くなる也。ましらふましろ。只同し。眞はほめてそへたる也。輔親集 あまた

年とやふむたかはましろにてとあるをもてもしるへし。又順抄にも。廣雅云。三歳名二之青鷹白鷹一とあるは。たゝ上に同しく。白の字は年へたるまゝに名つくる也。但三歳より後なりともしらふとはいふへきこと也。青鷹といふも猶白鷹也。その故は。定家卿 青たかを雪とみつゝやとあるにてしるへし。青白をかよはしてよむことは。白馬をあを馬といふたくひ也○大ぐろとは。万葉自註 蒼鷹之名也といへり。万十七。多加波之母安麻多安禮等母矢形尾乃安我大黒介とあり。かく。鷹の中にもとよめれは。大くろはいと逸物なるへし○きぐろふのたか。定家 女郎花はなの色そふきくろふのたかとあり。これも逸物なるよしによみ給へり。黄色に黒みをおびたる府(ママ)あるをいふへし○霜すりのたか。二条殿下 名はしもすりの鷹の一すゑとあり。これ白鷹をいふにや○みとりの鷹とは。府(ママ)に青みあるを云にや。定家卿 秋山のみとりのたかの云々。又二条殿下 たかのみとりの草ふしてなとあり○くろふ。定家 からすふのくろふのたかや。これ逸物なるさまによみ給へり。きぐろふ此類なるへし○うづらふのたか。鶉の胸毛のことくなる也。必逸物と也。同上 より數をもゝにかきれるうつらふの鷹とあり○鴫ふのたかとは。鴫に似たる府(ママ)あるを云へし。これ又逸物と也。同上 もゝはがきともに鳴ふのたかのよりかす○もみぢふとは。赤府(ママ)にて。上にいへることく若鷹を云にや。同上 秋の山ちのもみちふの云々○藤ふとは。紫色をおびたる府(ママ)あるを云へし。同上 時ならぬふちふのたかとあり○みだれふとは。府(ママ)のならびの。正しからす打みたれたるを云へし。又一説。鷹くつろげは。府(ママ)必みたるゝともいへり。同上 しのぶのたかのみたれふとあり○たでふ。同上 もみちする蓼府(ママ)のたかの云々。注に青府(ママ)也とあれと。もみちするとあれは。猶赤府(ママ)にや。たで府(ママ)未詳○手なれの鷹とは。よくなつきたる也。同上 かり人の手馴のたかや云々。又延久百首。只空 たなれの鷹の手にもたまらぬ。是は。いとなつきたるなから。はやりて。それだに手にたまらぬといふ也毛○あかげ。毛の赤きにて。若鷹にいふへし。西園寺 あかけのたかのあくとしもなしとあり○遠山毛。みとりのいとうすき色したるをいふにや。定家 とは山毛なる鷹をすゑつゝとあり○はら毛。同上 外山の霞のはら毛とあり。注に。四毛のわきにあるを云といへり○つばな毛。同上 夏かひのとやのうちなるつはな毛とあり。注に。ほろの脇へ白く出る毛を云とみゆ。夏にこのむへし○をばな。をばなすり毛なとあるは。腹の毛に[illegible]。背にみなし毛といふよし注

にみゆ。同上はしたかのをはなもみゆるとやのうちに云々〇松はらの毛同上あられふる松はらの毛の云々毛の名といへと。同卿。
鼻毛を。梅のはな毛のとよませ給へるに同しく。腹の毛といはむを。松原によせてよみ給へるなるへし〇さ月毛。同上さ月毛は
いつれをさきに先おとすらむとあり。すへて夏は毛をおとす也。中にも五月の頃おとすをは。さ月毛といふ也〇ねくらの雪。同
上はしたかのねくらの雪をふみちらし云々。これは夏によむへし。ねくらは鳥屋（ト）也。夏は綿毛とて。しろく雪のやうなる毛を。
とやの内にておとす也。されはみたてゝかくの給へり〇日かげの毛。又日かけの羽ともあるは。羽うらの毛をいふ。羽といへ
るも。こゝは翼（ツハサ）にはあらす。毛といふに同し。同上日かけの毛さへぬれつゝそゆくとあり〇かた毛。同上とやいづる片毛の鷹
に云々。全羽をかへすして。古毛の半（ナカハ）残れるを云。秋によむへし〇かげの毛とは。下おとがいにある毛也といへり。同上かけの毛
よりは先はみゆらむ〇七そぢあまり三（ツ）の毛。同上はやたかのなゝそぢあまりみつの毛やとあり。毛の數。七十三枚あるを云。は
や鷹ははやふさなること上にいへり[羽]〇ひだり羽右羽。同上左羽みき羽つかふらしとあり。左右自由に羽をつかふを云。逸物の
わさ也。但ひたり羽とは左へゆくへき羽づかひ。右羽とは右へゆくへき羽づかひといふ也〇みより。たゞさき。みよりは身に寄
の義にて。すゑたる人の身のかたによれる羽といふなれは。鷹の右の翼（ツハサ）也。たゞさきは手前（タヽサキ）の義にて。すゑたる手先（サキ）の方にあ
る羽といふなれは。即鷹の左の羽を云。すへて鷹は左の手にすゆる物なれは。そのすゑたるさまにつきて。左右の翼の名とした
る也。此義は。定家卿はしたかのみよりたゝさきかはる也もろこし人は右にすゑつゝとよみ給へるにてもしるへし。唐土にては。
左にすゆれは。鷹の左右の翼の名も。我國には同しからすとの義也。又みよりのつばさともあり。すへて羽といへるも。翼（ツハサ）にも
毛にもかよはしていふことつね也。これらは皆翼の義也。又十三。法性寺はしたかのみよりのさかはかきくもり霰ふる野にみか
りすらしもとあるは。霰なとのふり來て。風のはけしきにふかれて。鷹の右の羽のさかさまにたちたるを。身よりのさか（逆羽）はとは
いふ也〇鈴もちとは。定家みとりのたかのすゝもちや云々。上毛の上に。鈴かくしといふ羽あるをいふよし也〇をひ羽とは。鳥の
行かたにむかふ羽づかひを云。同上おしつけて行鷹のをひ（追）羽にとあり〇遠羽とは。鳥の遠くのすやうにつかふ羽を云。同上かり人

の音にや鳥の遠羽行らむ○君しらずとは。羽うらの片かへりに。二枚づゝある羽を云と也。同上君しらすとや羽をはいはまし○あまおほひ（雨覆）。同上あまおほひ一羽あるかとみゆる尾たゞみとあり。これは上の羽也。十二枚あるをは。一枚にみゆることく。かされて居るさまをかくよみたまへり顔○わしかほの鷹とは。鷲の皃（カホ）に似たるをいふへし。同上つぎ尾もさそなわしかほの鷹とあり○つみがほの鷹とは。雀鷂（ツミ）の皃に似て。目あひ。嘴（クチハシ）の根へさしよりて。うつくしき鷹と也。又つみの若たかともよめり○尾やかたを。万十七。矢形尾（ヤカタヲ）乃安我大黒（アカオホクロ）尓。又同十九。矢形尾（ヤカタチ）乃麻之路（マシロ）能鷹（タカヲ）乎なとあり。尾の矢のかたちしたるを云共。又一説。屋の形の府（ママ）あるをいふ共いへり。されと。万。皆矢形と書たれは。上の説にしたかふへくや。七。仲実やかたをのましろのたかを引すゑて云々。又館（ヤカタ）によせて。十九。為家卿みしまのやくるれはむすふやかたをの共あり。又如願法師野もりもみえすくちの居かたをともあり。くちとは。前にいふ仁徳紀に。百済（クダラ）の俗。鷹をくちといふよしみゆれは。それを用ゐてくちとはいふ也。たゝ鷹といふに同し○とび尾。定家猶もとび尾のたかやまはましとあり。鵄（トヒ）の尾に似たるを云へし。鵄は尾のひろがる物也。されは注に。とび尾は舞心あれは嫌也。鵙（モズ）尾といふを好むといへり○つぎ尾。同上つぎ尾もさそな云々。又西園寺白尾（シラヲ）つかずは尾かけみましやとありて。注に。一條の院の。御かりの行幸の時。鷹古山をおもふけしきありけれは。政頼卿。鷹の尾をきりて。くらゐの君しらすにて。白く尾をつけたまへるに。鷹。尾の上の白毛をみて。いまた尾の上に雪あるこゝちして。古山をおもひわすれけり。帝御尋の時。政頼卿。きさらきの尾の上の雪はしらねとも心にまかせたつねてそゆくと。つかうまつりたまへりけるよしみゆ。これによれは。鷹の山心なと出たるに。尾を継（ツク）とみえたり。春によむへきこと也○たすけ尾とは。上尾の次の下にあるを云と也。定家鷹のをの名のおのつから人をたすけし云々。又西園寺たかのをのたすけは人の云々。此注には。鈴つけの下のかさね也といへり。即上と同所なるへし○しら尾。上にくはし。定家はしたかのしら尾斗やよろもみゆらむとあり○あをさし羽。西園寺倚の野に同し色なる青さしば云々。これは尾さきの青き也と云。赤さし羽。そこ（黒）さし羽なといひて。皆尾さきの色につきていふよし也○ならし羽。二条殿下木にはあらさるたかのならしばとあり。尾の名に一文字打の上にありと注にみゆ。さて楢柴（ナラシバ）によせ一よみ給

へり爪〜鳥がらみとは。爪(ツメ)の中にも長きをいふ。此爪にて。とれる鳥をからみふする也。[illegible]鳥からみとも[illegible]猶も聞にたる鈴○しらぬりの鈴。万十七。之良奴里能鈴登里都氣氏(シラヌリノスヽトリツケテ)。又定家鷹の鷲毛のしらぬりの鈴なとあり。白くぬりたるにや。又は白銀なとしてつくれるを。しかみたてゝ。白塗といふにてもあるへし。すへて鈴を鷹につくることは。行方のしるからむため。又落たる所をもしらむため。又そらしたらむ時のためにに。必これをつくる也。今も其鷹の主の名なとを。鈴にえりてつくる也○小鈴もゆらに。万十九。白塗之小鈴毛由良尓(シラヌリノコスヽモユラニ)。定家卿もこれをとりて。小鈴もゆらに雫はふりつゝとよみ給へり。ゆらにとは。手玉もゆらにとよめるに同しく。ゆらめくを云○しるしの鈴。初度百首。河内はしたかのしるしの鈴のちかつけは云々。たゝ上に同しく。聞わき。聞しらむ印につくる鈴と云也○七嶺(ナヽミネ)の鈴。定家草とる鷹のなゝみねの鈴とあり。注に。七嶺より一度に待あはせてあはする也といへり。又一説。一條院御時。七嶺をとぶ鳥あるを。こやどりといひけるよしみゆ。二条殿下末残るかたのゝ鳥をたつねかねなゝみねわくるけふのかり人とあるよりの說也。いと詳ならさる事なれと。猶おもふに。七嶺は。たゝ多くの日數のことを。いにしへ七日といへることとく。多くの嶺といふ義也。されはかり人の手を分て。嶺ゝへのほりて。鳥をもとむるにや。されは多くの嶺よりあはせたる鷹の。おのかしゝ。落くる鈴の音する心によみ給へるなるへし○鈴のこさすとは。鈴の口へ樱皮(カバ)をは細くきりてさしいれて。鳴らぬやうにする也。これは鷹をあはせぬさきに。鳥に此鈴の音をきかせしとてするわさ也。定家朝鷹に鈴のこさして出るかり人○めざしの鈴。同上はし鷹のめさしのすゝをならさぬは云々。未詳。もし此鈴のなる方にかり人の目をつくれは。めさしの鈴といふにや○をふさの鈴。例多し。これは鷹につけたる鈴の。鳥を追さまになるをは。を(追)ふさの鈴と云なるへし○鈴をさすとは。鷹に付るを云。定家卿はしたかに鈴をさしつほとなれや。又同卿尾にさす鈴をならさゝるらむなとあり○鈴を袋にいるゝとは。夏。鷹をとやにいるれは。鈴も用なけれは袋にいれ置こと也。四月のはしめによむへし。同上鷹はとや鈴はふくろにいるゝよりと云々 **鷹具**○大緒(オホヲ)あしかはとは。皆鷹をすゆる時に用うる也定家卿花紫のおほ緒あしかはとあり。注に。紫は諏訪の御狩にかきれるよしみゆ○ふせぎぬとは。鷹を風にあてしとてきする物也と也。但きぬとはいへと。あつき紙を用うといへ

り〇ほこ。又とぼこともいふは。鷹をする置架を云。但その架につくる木は。春は梅。夏は樟秋は檜。冬松也。同上かたのゝみの三椚若木やたかのほこと成らむとあり。又爲廣雪やこよひのとほこならまし共あり〇餌袋とは。竹にてくみたる物と也。鷹の餌をいれて。かり場へ持行袋也。又いけ袋ともいふ。これは餌とすへき鳥を。いけなから持行也。定家卿いけるをはなついけ袋かな。西園寺餌ふくろにうさきのかしら云々〇おき縄とは。大鷹を手にすゆる時につくる縄也。但いとあらき鷹ならてはこれを用ゐす。二條殿下月も夜するのたかの置なは。四十ひろ也といへり餌〇口餌といふは。かり場にて鷹にかふ餌をいふ也。ひくとは鷹の飡ふことにや。定家はしたかに口餌ひかする程なれや云々〇おき餌とは。手に鷹を置なから。かふ餌なるへし。延久百首。爲明おき餌さしあへすかへるかり人〇餌をひたすとは。夏は鹿を水にひたし置てかふと也。定家鷹にかふ餌をひたしてそおく〇ほし餌。同上さてもや人のほし餌かふらむ。これは上のことくひたしたるを。又ほしたるを云へし。以上二条は夏によむへし〇もみ雀。同上もみ雀餌をうとむとや鷹にかふらむとあり。鷹いたみて餌をくらはぬをうとむと云。さやうの時は。雀を紫色になるまでもみてかふと也鷹事〇とやふむとは。鳥屋に入たるよし也。輔親あまた年とやふむたかは云々〇たかへるは。手に歸るの義にて。いとよくなつきたるさま也。但鳥を追きりて歸るを云。例多し〇山わすれ。鷹の古山をもわすれて。よくなつきたるを云。二条殿下たかやあかせの山わすれ云々〇いくつかれ。龜山殿七百首百雄いくつかれ客とる鷹の落草も云々。より數かさなりて。度こつかれたるを云〇つかれのたか。いたく勞たるを云〇かけおとすとは。鷹の鳥をとりなから落くるを云。例多し〇野とる。定家はやふさの野とる鷲もや云々。たゝ野にて。鷹の鳥をとれるを云也〇とやぎはちかきとは。春の末によむへし。同上春ふかみとやきは近くなる鷹のとあり。夏は必鳥屋にいるれは也〇かへりさす。同上てぶくろ引てかへりさす也とあり。必夜するによむへし。よするは下に委これは鷹のねふたがりて。首を後の方へむくるを云と也〇一もとりとは。本の方へとひかへるを云。方にも。たもとほるなといひて。徘徊の義也。同上一もとりこもつちきゝの羽やつかふらむとあり。こもづちきゝとは。鷹を席などにあむ槌のことくに。[illegible]ふくたちあちこちと自由につかふ羽を云。西園寺はしたかのこもづち羽の一[illegible]

し○て。はなれ。万十七。手放毛乎知毋可夜須伎とあり。手をはなるゝさまも。又落来ることも。いとやあく／＼とすると也。きはめてよき鷹のさま也。かやすきのかはたゝそへたる也○ゆるすことなくとは。あはすたびことに。必鳥をとりそむせぬ義にて。逸物を云。万十七。於敷其等尓由流須許登奈久とあり。おふとは。鳥を追也。白居易か詩に。百擲無二一遺一とつくれるも。即此義也○山心。又野心といふは。鷹の野にあり。山にありつる程のことき。あらき心のあるをいふ。又山野をおもふ心に用うるも。たゝ同義也。定家あら鷹や野心もなくやかてみゆらむとある。これはやかてなつかむとの心也○ながおひ。同上春の日の長追しつるはしたかや云々。鳥を。いつくまても追ゆくさま也。春の日とは。只よせたるなれは。秋冬もよむへき也○め鳥づきする。同上めとりつきする箸鷹の云々。西園寺めとりづきにはやすくなるらむなとあり。春は雌鳥。子をはらみもてれは。羽おのつからよはし。されは。取やすけれは。鷹必。雄鳥よりは雌鳥につきて追ふを云。ことに。春は雌鳥味よしと也。春によむへし○山がへりとは。山にて年をへたるを云。定家けにおもしろき山かへり哉○小山がへり。同上小山がへりのあら鷹を云々。これはしばし。山にありし鷹を云○ふる山がへり。同上十とせをもふる山かへりとあり。古を経にかけたり。是はいとあまた年。山にありつる鷹を云○こぬけする。同上こぬけするみ山のたかは云々。これは林なとの中を。あなたこなたくゝりて。鳥を追さま也○とかへるとは。飛跡るといふ義也。二。はしたかのとかへる山の椎柴の云々。鷹の。鳥を追ゆきて。さて又とひかへる山といふにて。下の心はいと程ちかき山を云也○毛をかふる。夏也。無子細○石をとる。定家心きゝてや石をとるらむとあり。鳥屋の内にて。子鷹の爪をとがせむとて。親鷹。石をにぎらするを云と也。夏によむへし○西へゆく。同上ゆふべの鷹はにしへ行らむとあり。夕くれは。鷹。必西のかたへ飛物と也。されは夕くれにそらしたる鷹は。西方をたつぬるならひあるよし也○このはがへり。二条殿下吹たつる木のはかへりに風みえて云々。小鷹の羽つかひは。木葉の飄ことくなれはしかいふ共。又小鷹の中にもちいさきを。しか名つくるともいへり○ぬすはむとは。とりたる鳥を。鷹人にしらせすして。鷹のくらふを云。又ぬすみはみするともよめる此義也。例多し○かざなかれ。二條殿下はしたかも風なかれする云々。又為廣冴くらすみ山のたかのかさなかれなとめり（ママ）。鷹の。風のはけし

きにふかるゝさま也。すこしつかれたるさまなるへし○とやまさり。定家去年よりはとやまさりする云々。鳥屋入てより。其以前にもまさりて。鷹のよくなれるを云○かなぐりおとす。同上あら鷹のかなくりおとす鳥の毛を云々。爪にかけて。鳥の毛を空にてかきおとすを云○はやるとはすゑたる鷹の。鳥をみては早くたゝむとするを云。同上みすゑ鳥たかのはやるをはなちてそやるとあり○面(オモ)ぎらひするとは。一人になつきて。こと人にはなつかぬを云。同上面きらひする鷹のけあしさ○すがけするとは。鳥をとりそんじたる也。いとまだあらき鷹によむへし。同上たゝすかけするあら鷹や云々○くむとは。鳥に引くむ也。同上おくるゝ鷹やゆきてくむらん○たぶるひとは。すゑたる手の上にて身ぶるひする也。つかれをやすむる時にすること也。同上口餌ひきたふるひしつゝ云々○あげすつるとは。鳥を空高く追行て。追捨るを云。同上あけすてゝまひも落へき云々○まひおつるとは。鳥を追すてゝ。のとかに落くるさま也○空どるとは。鳥を追ゆきて空にてとりえたる也西園寺空とる鷹を目にかけて云々○たもろきとは。鳥をみてはやれる鷹を。あはさむとする時。はなつを待かねて。手の上をもろくたちゆくを云。同上たもろくみゆる鷹のふるまひ○あたりおとすとは。鳥を蹴おとすを云。同上山ひこもこたふはかりにあたりおとし云々○ゆく鳥このむとは。羽のきゝたる鷹のわさ也。居る鳥をたてたるなどはとらで。飛ゆく鳥をこのみてとるを云。同上ゆく鳥このむ古山かへりとあり○とやかへりとは。鳥屋をいくたひもふれと。鳥をいとよくもとらぬをいふ。同上はしたかのとやかへりする身をはなけかでとあり○木居とる。又たゝこゐとも。又木居にかゝるともいふ。定家木居とる鷹のあとやみゆらむ。又西園寺つかれの鷹のこゐをなみ云々。又亀山殿七百首有忠はしたかはこゐにかゝりて云々。なとあり。これは鷹の鳥を追つかれて。木の上なとにゐてやすむを云草○草とる。西園寺めにみねど草とる鷹のふるまひは云々。十三。則祐くれぬるかつかれにかへる箸たかの草とる道もみえぬはかりにたとあり。これ又木居に同しく。鷹のつかれて。草に落てやすむを云。又西園寺おちまはり草かすとれはたゝかねてくたりに鳥そ羽をたれて行とあるは。鳥を追てはやすみ。休みては又追ふ故に。鳥はいたくつかれはてゝ。羽もえつかはすして行と云也○をしへ草。定家かり人のをしへ草とか云々。二条殿下そこともしらぬを鷹のをしへ草。又十八。仝條かりくらすとたちの鷹のをしへ草なとあり。

これは。鳥の草に落たるを。その上を鷹とひまはりて。狩人に。そこに鳥のかくれてあるを。教るを云と也○おち草。十三。慈圓みかりはのつかれの鳥のおち草に云云。又定家卿あまたゝひつかれの鳥の落草になとあり。これは。鳥のをはれてつかれたろか。草に落てかくるゝをいふにて。鳥にかきれる詞也。鷹の落くさとはよむましき也○いり草とは。鳥の草に入てゐるを云。西園寺いり艸にたもろくみゆる云云。［巢］○巢まさり。定家卿まもりたてたる鷹のすまさりとあり。巢の中にても。ことによき鷹を云○巢鷹。西行すだかわたるいらこか崎とあり。まだ子鷹なるを云。わたるとは。取かはさるさきにとひわたる也○巢おろし。定家すおろしのとやのうちより云云。巢よりおろし來たる子鷹を云。これは春の末より。夏にかけてよむへし［鳥］○鳥の名をあらはしてよみつけたるは。ひばり。雉。うづら。鴈。鷺。なと也。其外は。只鳥とよみ。又小鳥ともよめり○木鳥。西園寺かりまはすつかれにあかる木鳥をは云云。鳥のかりたてられて。木にのほるをいふ。木にゐる鳥は。鷹とらねは也○ぬすだつ鳥。西園寺鳥もはへぬすたちぬらむ云云。ぬすみ立の義にて。鳥の人にしられぬやうに。しのひてたつを云○とだち。鳥立也。これを体にいふ也。七。仲実うだのとだちを狩くらしつゝ。又廿。土御門院とたつ野つらにと。用にてもよみ給へり○いけ鳥とは。活なから。かり場へ持ゆく餌鳥をも。又鷹のとれる鳥を。生もぎにもぎとるをも云。定家はなつかりばのいけ鳥や云云○里づかれとは。鳥のをはれつかれて。里へ逃入たる也。同上鷹の行山のふもとの里づかれ云云○つかれの鳥。無子細。例いと多し○かくれかぬるとは。心明らか也。十九。忠基卿いる野の草の霜かれにつかれの鳥やかくれかぬらむ。但つよく狩まはされての事也。又十七。公寒卿かくれもあへす立きゝす哉ともあり。たゝ同上○とまりなきとは。夕暮に鳥多く鳴を聞ては。必其夜はとまり狩すれは。しかいふ也。されはとまるを催す聲といふほとの心也。定家とまり鳴する鳥そはかなきとあり○とぶさの鳥とは。鷹のとびさまに取鳥を云。二条殿下とふさの鳥を引すはめ云云○はふ鳥とは。かくれのがれむとて。草の中を這を云。西園寺はふ鳥を草にみふする云云○ひらむとは。地にそひて横さまににぐる也。定家枯野にひらむ鶉をも云云○鳥聞こむるとは。彼處に鳥のゐるといふことを。其鳴聲にて聞すゑて置を云。同上鳥聞こめて出るたかゝひとあり○聞ふする。只上に同し。同上鳴鳥をよる聞ふするとあ

り。夜のまに聞するゑて置をよみ給へり○聞するゑ鳥。これ又上に同し義也。同上 聞するゑておく鳥やたゝましとあり。ふするゐ。又するといふは。俗に。聞ぬいて置(ク)なといふ詞也○みふする鳥とは。鳥のゐると云事を。見ぬきたるを云。同上 秋の野の草にみふするかた鶉云々。秋にはかきらぬことは也○みするゑ鳥。同上。例多し○打まはす。定家 打まはしあがる鶉や云々。鳥のをはれたる時。輪をなして。空へ舞あがりてにぐるを云。さて鷹は又。鳥とは逆(サカサマ)に輪をなして。行ちがひさまてとらむとする也。これは必小鷹のするわさ也。大鷹は。只一蹴(ヒトケ)に蹴そんすれは。又はをはすして歸る物也○ひく鳥。同上 鳥の引山かたつきて。又永徳百首 為重卿 あたちの山にひく鳥の。又逍遙院 たつ鳥のひくにまかせて行末のなとあり。鳥の行方にひかれて。人も鷹もゆけは。ひくとはいふ也。導(ミチビク)の心也○としばとは。鳥柴の義にて。鷹のとれる鳥をつけて歸るを云。これは冬也。又二条殿下 君かためとそとしばとりけるとあろは。日次のにへ鳥をつくる也。柴の枝。五尺に伐(キリ)てつくるといふ。常にも此尺に伐にや。さて春は梅。櫻なとにもつけ。又は。つねには松にもつくることもみゆ。又小鳥は。小鳥かりはすへて秋也されは秋は小たかを用ゐてこれを小鷹かりとはいふ也 荻。すゝき。馬鞭草(アノツヅラ)なとにもつけ。又は荻はかりにつくれは。よは／＼としたれは。柿の枝を折そへてもつくろよしなと。皆定家卿の哥にみえたり。同卿。暮てゆくとしばの雉と。よせてもよみ給へり○鳥をたて。又ふみたつるなとも云。万十九。乎知許知尓鳥布美立(ヲチコチニトリフミタテ、) 云々。又十七には。朝獦尓伊保都登里(アサカリニイホツトリ)多底暮獦尓知登理布美多底(タテユフカリニチトリフミタテ)云々。すへて鳥のをりゐる所を聞ふせ置て。さてその鳥をは。わさとおとろかして。立(チ)さまに鷹をあはする也。ふみたつるといふも。かり人の。其鳥のゐる所の草なとをふみてたつるを云。五百(イホ)つ鳥。千(チ)鳥は。たゝ多くの鳥といふにて。數をかきれるにはあらす。[人]○たかゝひ。たゝ飼(カフ)鷹(ヲ)人也。例多し。其外たか人。かり人なとつねによめり○犬かひ。たゝ飼(ヲ)犬人也。榮雅 いぬかひの柴の下道かる聲に鷹もこゐをやうつりゆくらむなと。鷹狩にむすひてよめる例多し。鷹をすゑ。犬をひかせて出たるさまによむ也○みたかゝひとは。鷹司の人を云。家隆卿 きゝすたつかたのゝ冬のみたかゝひ云々○遠目(トホメ)。又遠(トホ)見共いふは。鳥のゐるゐぬをみせむとて。そこゝ見ありかする人を云。定家 たかゝひのおける遠目。又西行 りよといかて遠見よふらむなとあり[人事]○とやにいるゝとは。四月八日也。同上 春ふかきとふ火の野もり今いくかありてか鷹をとやにいれまし。又[illegible]と

やにいるは八日薬師の日たれはやたとあり。初とや出しの若たかなとあるは。七月十四日に鳥屋より出す也。此夜に。魂祭の供にそへたる。師からの箸をたきて。その火影にて鳥屋より出すと也。同卿鳥屋いたす夜にともすなるはし鷹のとあり。これを心えあやまりて。はしたかとは箸鷹の義なりといふは。いふかひなき説なり。用うへからす。たゝ定家卿。さるならひあるより。箸とよせてよみ給へる也。但唐土にては。十月にとやより出すにや。白樂天か詩に。十月鷹出レ籠とみえたり○とぐらゆふ。万十九。鳥座由比須恵氐曾我飼云々。とぐらは即鳥屋也○すゆるとは。鳥屋にいれ置をも。手におきて狩にいつるをも云○かきなづるとは。鷹をいつくしむ也。万十九。屋戸尓須恵可伎奈泥見都追云々○鷹をあはすとは。鳥のたつに合せて鷹を放つ義也。同上。小鈴毛由良尓安波勢也里云々○夜すゑ。定家あら鷹のよすゑいくよに成ぬらむ云々。あらき鷹は。よるすゑありきて。ねふらせもせすして。手の上になるゝやうにつからする也。夜すゑは。あらき鷹ならてはせぬこと也○鷹そらすとは。鳥にあはせやうのあしければ。鷹必そるゝ也。同上大みや人や鷹そらすらむとあり○鷹をおこすとは。鳥屋より出して。とりつくろふを云。同上足革さして鷹そらすなりとあり。秋によむへし。足革は。狩に出むとてはさす物也○とさけび。鳥叫也。遠見の。鳥の立を鷹人につけむとて。よばはる聲を云。鳥よく／＼と三たびいふならひと也。同上とさけひのしけきにしるし。又西園寺とさけひの聲や待らむなとあり○おごゑ。定家卿おこゑをもまた聞なれぬあら鷹に云々。はなちたる鷹を。よび歸す聲を云○あさるとは。狩するを云。すへて求レ食の義にて。鳥の上にもいふことつね也。こゝは狩人の上にいふ也。十九。法性寺みかりすと鳥立の柴をあさりつゝ云々○鷹をたづぬるとは。それたるをもとめありくを云。定家卿たかをたつぬるくれのさひしさ○おきとるとは。放てる鷹をよびとりて。手にすゆるを云○おきかぬるとは。きはめてあら鷹の。手にすゑかたきを云。定家身を置かぬる世にも住かなと。よせてよみ給へり○あひあはせとは。鷹人ふたり。ふたつの鷹を一度にはなつを云。同卿駒をはやむるあひあはせ云々○もろ餌かふとは。やせ鷹をは肥さむとて。朝暮に雀ふたつをかふ也。同卿もろ餌かけもろ餌にかひて云々○よる（ママ）と鳥の居る所へ。ちかくよりゆくを云。さて鳥をたてゝ鷹をあはする也。一より。二より。いくより。よりかずなと多くよめり○たばなすとは。手の上より。鷹を

はなちやるを云。即あはすに同し。西園寺ひとよりにたばなしぬれは云々○かり場にて神まつるとは。鷹のとりたる鳥の。上の毛と尾の毛とをとりて。神に奉る也といへり。西園寺笠の上に上毛下毛をたむけ置てけふのかり場の神まつりつゝとあり。山口まつりともいふ。定家卿さと近き野への草より立鳥に山口まつりするほともなしとあり。これをみれは。狩せむとする前に。神をまつりてさて。狩をはしむるなるへし。山口とは。山へのぼり口を云也［鷹狩ニヨミ付ケタル所々］いはせ野越中。うだ野大和。かたの河内　かたのゝみの共。あだちの山陸奥。水ぐきのをか近江。ならしの岡大和。くるす野なと多し山城。此余にもあれと。いと名たかくよみつけたるを出せり。又たゞ。入日さす夕かりを野ともよめり。これは名所にあらす。又とをちの原大和。なともよめり

鷹狩　雪つもるかた野のみのをかりゆけはきゝすのあともかくれさりけり　行宗
みかり野のつかれのとりの草かくの（ママ）かくれはてよとくるゝそら哉　慶運
いつまてかつかれのとりのなからへんことはかた野に草かくるらん　同
日陰さすとよのあかりにみかりすとかたのゝみのにけふもくらしつ　俊頼
かきりなきけふのとたちもこひ侘ぬしのふの鷹の雪のみたれに　同
晩頭鷹狩　かりくらしこゐもしられすはしたかのうちふる鈴の音はかりして　顕廣
鷹狩日暮　みかりするかたのゝま柴をりしきてたひねをすへきこよひ也けり　小侍従
連日鷹狩　かりくらしきのふの鳥のおちくさをけふ猶たとる明ほのゝそら　雅親

○［爐火（ウツミビ）］埋火ともかけり。漢字同上。うつみ火とは。湛を灰にてうつむといふを。体になしていふ也。俚言云。火バチ手爐。手あふり。火桶なとも皆うつみ火なり。哥には。たゝおしなへて埋火とよむへし。但火桶は。源幼（ママ）に。火桶まいらすとみえ。枕草紙に。すさましき物。火おこさぬ火桶すびつ。又人の家につき／＼しき物は。竹篭ゑかきたる火桶なとかけり。是は内を[illegible]なとにてはりて。外は桐の木をくりてつくり。木地を[illegible]用或箔なとをおして[illegible]色この[illegible]なとかける物也。[illegible]

三。夏はあふき冬は火桶に身をなしてつれなき人によりもつかはや。十月の更衣には。火桶をもて扇にかふとかや○春のみち。

四。素意法師埋火のあたりは春のこゝちして散くる雪を花かとそみる。菅相公の詩に。看無野馬聽無鶯。臘裏風光被火迎。此火應鎖花樹取。對來終日有春情。この心よりよめるなるへし。文治六年百首。俊成卿うつみ火にすこし春あるこゝちしてよふかき冬をなくさむる哉。又同卿。千五百番歌合うつみ火のあたりにちかきうたゝねは春の花こそ夢にみえけれ。これらも前の詩哥よりうつりてよめる成へし○ふせごの下の埋火ふせごは。いはゆる熏籠とて沈をたきて。衣に香をしむる器也。建久元年百首。定家卿打にほふふせこの下の埋火に春の心や先かよふらむ○ほたとは。榾也。榾柮も又ほた也。説文曰。柮斷也。榾柮短木也。俊成卿述懐百首山かつのほたさしあはせうつむ火のありともなくて世にもふる哉。さしあはすとは。榾柮をこなたかなたよりさしあはせて。其末のもえさしの火を。灰に埋むをいふ也○はいの手すさひ。火にむかふにつけても。火をかきおこし。炭をうつみ灰をならしなと。今もする事なり○うつみ火のあたりのまとゐ。當爐環坐する也○閨の埋火。夜半の埋火。埋火のもと。埋火のあたり。埋火のかけ。又むかふ。かきおこす。炭さしそゆる。柴折くぶる。よりそふ。消ぬ。消のこる。したにかくるゝ。灰の下なるうつみ火。灰の色も雪となるなと。多くよめり○うつみ火に薫物をたくことをもよめり。梅花といふ薫物をよめり。早梅なとによせてよむへし

爐火　いかにせむ下にこかるゝうつみ火のかきあらはせて消ぬへき身を　行宗

冬の夜のなかきおもひのたくひにて下にもけたぬうつみ火のかけ　土御門院

寒夜爐火　さむきよはあるかなきかにうつみおく灰の下なるおきあかしぬる　称名院

爐辺閑談　老人の道しるよはのことわさもしつかにふくる埋火のもと　雅親

閑居埋火　おきゐつゝおこしそゝふる山さとはうつみ火ならぬ友しなければ　盛忠

○炭竈（スミカマ）山上に。土の窰をつくり。それに木をつめて火をかけ。窰の口を閉てむしやきにやく也。この口の烟すこしつゝ立の

ほるを。哥には多くよめり○すみやきとは。炭を燒人を云。文治六年百首。俊成卿冬くれはをさゝ炭やき木をおひて時にあへりとおもひかほなる○世にすみかま。住とかけたり。百首哥合。僧都源信なからへてよにすみかまとおもへともはては煙となるそかなしき○爪木とりくへ堀川院百首公実卿年をへてつま木とりくへ炭かまに煙をたえぬ大はらの里○すみ木とは。炭にやくへき木也○すみやき衣コロモ。又炭やききぬともいふは。炭をやくものゝ衣を云。曾丹。三百六十首中冬山の炭燒衣なれぬとて人をは人のたのむ物かは。建長八年百首哥合行家卿たえす立けふりの程はをの人の炭やききぬのすゝけにそ知○まきのすみかま。文治五年百首。俊成公をちかたや都の巽タツミ誰レ住てまきの炭かま煙たつらむ○まつのすみかま。土御門小宰相つくはねの松のすみかまおしなへてときはにしけく立烟哉○小塩山の炭竈。家忠卿家哥合をしほ山雪ふりつみてすみ竈の烟斗そしるくみえける○をのゝ炭竈。作例いと多けれは不ㇾ反ㇾ引○炭うる市。無子細。これは炭竈よりはこひ出してうる也。大和の十市のさとによみつけたり○炭車。市に炭をはこふ也○横山炭いつみなるよこ山すみとよめりしろきよしを詮とよめり○やく炭かま。炭竈の里。峯の炭かま。又烟くゆる。けふりたつ。立のほる。薄烟。けふりをだえぬ。遠山烟。なと多くよめり

炭竈

すみかまのそこともみえすふる雪に道絶ぬらむをのゝ里人　　俊惠

わすれては雲かとそおもふ雪分て煙たな引をのゝすみかま　　雅經

いつくよりたつともみえぬけふり哉雪のそこなるをのゝ炭かま　　慶運

夕炭竈

山たかみ夕ゐる雲にたちそひてけふりほのめくをのゝすみかま　　親盛

○神樂カクラ　十二月。内侍所にて御神樂を行はるゝ也。江記ニ云。自二一條院ノ御時一。始テ十二月有二御神樂ミカクラ一又云十二月中撰ニ吉日ヲ被ㇾ行ハ侯ㇾ所ニ陰陽師勘ニ申ス之ヲ一とあり。されと。神樂哥とて上つ世よりありて。古今集にも。即神あそひの哥とて出されたり。儀式なとの定まりけるは。一條院の御宇なれとも。其前も月日なとは定まらすして。神前にてかの哥共をうたひ舞することはありし也。そのもとは。

神代紀上。天神窟戸にこもり給へりし時。天鈿女命。則手持茅纏之矟。立於天石窟戸之前。巧作俳優といふよりおこれるなるへし。内侍所とは神代紀上。天神宝鏡を。天忍穂耳尊に授たまひて。吾兒視此宝鏡。當猶視吾。可與同床共殿以爲宝鏡とあるこれ也。されは。もと主上同殿にまし〳〵けるを。垂仁帝。始めて別殿に御せらる。又江記云。故院被仰云。内侍所神鏡昔飛上欲上天女官懸唐衣奉引留。依此縁女官所奉守護也といへり。その夜の式等は江記にくはし。哥に川なきことははふきぬ。同記云被定召人。殿上人六人。撰絃歌者陪從六人。清撰也衛府召人六人。近代以御贄子孫為本拍子。哥には。神わさ。神あそひかくらなと。又さよかくら共よめり。里かくらとは。内裡ならぬ所々の社頭なとにて。かの神樂哥をうたひ舞をいふ也。九。法印慶算 里かくらあらしはるかに音つれてよそのねさめも神さひにけり。又十四。入道前太政大臣 山もとやいつくとしらん里かくら聲する杜は宮ゐなるらむなとあり○本末とは。神樂哥に。一首をもとゝし。一首を末としたるもあり。又上の句下の句を本末としたるもあり。其夜。本方。末方と。人をわかちてうたはせらるゝ也。本末の聲。本末うたふなとよみて。即神樂哥のこと也○やまとことのは。これ又神樂のことをいへり。爲実卿。やまとことのはすみにけりとあり○とり物とは。榊。幣。杖。篠。弓。劔。鉾。杓。葛。の九種也。古今集には。榊。葛。弓。杓。四くさの哥を出されたり。これら皆。手にとり持て舞故に。とり物といふ也。これらをよめる例いと多けれははふきぬ。多くは榊とる。かつらをかくる。まゆみつき弓おしかへし。さかきみてくらたり〳〵て。なとよめり○うたふ榊は。とりもの也からかみに袖ふるほとそ。星うたふ。又明ほしうたふ。明ほしの聲。朝くらうたふ。あさ倉の聲。その駒うたふなとあるは。皆神樂の哥の名也。江記云。次本末打拍子出歌。先取物。榊御幣等也。及韓神人長起舞云々。託佐井波利。次星。次起倉。陪従歌之次楚駒。人長起舞云々。これ神樂をうたふ次第也。されは今これらをよまむ時に其次第をよく心えて。その夜のさまなと。事たかはぬやうによむへし○くりかへしうたふ。押かへし。又朝くらかへす。ともいふはその一哥を。又ふたゝひかへしてうたふを云也○たちまふ袖。五の冬に榊はや立まふ袖の追風になひかぬ神はあらしとそ思ふ。起舞也○かなつる袖。初度百首降源 ひろまへの庭火の光明らけくかなつる袖をみるそうれしき。これもたゝ舞こと也○糸竹のこ

る江記云。召二御琴可レ仕者一。其人把二和琴一着二膝突一彈レ之云〻。又云。召二御笛可レ仕者一云〻。又云。召二篳篥可レ仕者一云〻和琴と笛とは本方の座の上につき篳篥は末方につきてこれを合奏する也○庭火。初度百首師頼ちはやふる神の心もには火たくこよひのかくらうけさらめやはとあり。江記云。綾綺殿額間西砌。立二鉄輪一燒二庭燎一とあり。又庭火の烟。庭火の影庭火の前。なとよめり○御火白く［　　］初度百首。俊頼からかみに袖ふるほとそとのもりのともの宮つこ御火しろくたけ。江記云。人長云二主殿寮御火白仕礼一云〻○しらにきて。顕仲しらにきてたくさの枝にとりかさりとあり初度百首。神代紀上云下枝懸二青和幣白和幣一とあり。これは磐戸の前にて。わざおきし給へりし時のこと也。されは此夜も手艸にかくる也。たぐさとは。古語拾遺同し所に。以二竹葉飫憩木葉一爲二手草一今多久佐とあるこれ也。草は種の義にて。手に持へき種はひをいふ也○しらゆふ。又ゆふしてを。此夜榊にかくることも多くよめり。これもたゝ其夜のさま也。木綿をもて四手としたるを云○をみの衣。慈鎮雲の上のをみの衣に霜さえてとあり。かやうの神事なとの時に着る衣也○おもしろし。初度百首。師時猶あさくらのおもしろき哉。又同。河内面白しとや神もみるらむたとあり。古語拾遺云。當二此時一上天初晴。衆俱相見面皆朋(ママ)白云〻。又云。阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱阿那言衆面明白也とあるより出たる也。これ天神。わざおきをきこしめして。磐戸をひらかせ給ひける時の事なれは。神樂にはよせたしかなる事なり

## 神樂

あしひきのみ山にとれる榊葉の色こそまされあらしふくらし　道済

よもすからとるさかき葉におく霜のとけさらめやは神の心も　俊恵

みしまゆふかたにとりかけ榊葉のときはかきはにいのる神かき　雅経

今も猶かみ代のかせやかよふらむあつまの琴のあさくらのこゑ　雅有

あめかした道あるときそ同しくは神代にかへせあさくらのこゑ　雅有

八こゑなくゆふつけとりに六のをのしらへもすめる里かくら哉　雅親

月前神樂　さえわたる月のひかりのくまなさにいとゝ庭火そしろくみえける　盛忠

○佛名（フツメヤウ）　佛名經云。若有二善男子善女人一。聞二是三世三劫諸佛世尊名号一。歡喜信樂。普禮二一切十方三世諸仏一。不レ逢二苦息一。國豊民安とあるより。仏名をとなふるにつけて。年中つくる所の。つみあやまちほろふと云て。十二月十五日の夜より。十七日まて三夜。上下共に。僧をむかへてこれを修行して。その僧に酒をすゝめ綿をかつけなとする也。年中行事哥合には。十九日より廿一日まて。三ヶ夜也ともみゆ。宝亀五年十二月に。はしめて佛名はおこなはれたり。仁明承和五年。始宮中置二仏名院一。見二于續日本後紀一。式云承和五年於二清涼殿一修二佛名懺一。帳限以二音靜安法師一亦爲二導師一。依二佛名經說一。云。としの内につくれる罪はかきくらし降しら雪と共に消なむ。又あら玉の年もくるれはつくりけむつみはのこらす消やしつらん兼盛○かづけわたとは。被綿上にいへることく。僧におくる綿を云○三世過去現在未來を云○三世の師とは。佛を云。三よの佛ともよめり。散木集。みよの師の御名となへつるしるしには罪もやこよひのこらさるらん○佛のみ名をとなふる。無子細○名をあらはす。六百番哥合。兼宗卿これや此みよの仏ももろ人も名をあらはしてあくるしのゝめ佛の名を唱へはてゝ後。又我名をも名のりてまかづるとみゆ○のぶしとは。野伏の義にて。師をいふ。慈鎭和尙百首。三世までの仏をなのる野ふしたち春のせまりにまいる人かは○山ぶしをよめるは。帖に。仏名君さらは山にかへりて冬ことに雪ふみ分ておりよとそ思ふとあり。是も師をいふ也○かへるしとは。師を饗するを云。新帖衣笠内府あさましや仏の御名を聞さしてなとかへるしのほとにたちけむ。同帖。信実朝臣諸人のみきをすゝむるかへるしのよそひの程に夜そ更にけるとあり。饗をはかへりあるしといへる畧語なるへし○竹の燈。此夜にともす也。仏名にかきりてよめり○清少納言草紙に。御佛名のあした。ぢごくゑの御屛風とりわたして。宮に御らむせさせ奉り給ふいみしうゆゝしきことかきりなしとあり。公根に。ひさしに地獄變の御屛風をたつとに。（ママ）佛名にはこれすたつる也（ママ）

佛　名　　　　　顯　仲

ことのはにみよのほとけの名をかけてつくれるつみはつゆもとまらし

○早梅（サウバイ）一冬梅一年内梅一年内梅花一旧年梅花　以上五題全同。漢土にても。早梅。又寒梅なといへり。荊楚記云。小寒一候

梅花發。戎昱詩。一樹寒梅白玉條。柳子厚詩。早梅發高樹なとあり。たゝ年内にさく梅を云○春の隣に咲。三元夏梅花にほひのふかくみえつるは春の隣のちかき也けり。又頓阿うつもるゝ垣ほの雪ににほふ也はるの隣にさける梅かえ。春のとなりは年内の義也○冬木の梅。無子細。万八今日零之雪尓競而我屋戸之冬木乃梅者花開二家里○一とせにふたゝひにほふ。十七。貫之一とせに二たひにほふ梅花春の心にあかぬなるへし。此春咲たるが。又年内に咲たるをよめり○とく咲。またきに時とにほふ。春のこなたに咲。冬こもりせぬなとよめり

**梅告春近**　梅咲出て。春の近きことを告るよし也

**梅先春開**

**梅先近春**

二題同しく。たゝ春より先に咲よしをよむへし

雪中早梅　雪つもるかきねにうめやさきぬらむみのしろころもかにそにほへる　覺性

年内梅　春きてもあまきる雪のふるとしのけふをやみまし梅のはつはな　称名院

○**歳暮**　漢土にてもしかいひ。又歳終。歳晩。なとさま〳〵にいへり。十二月の日數ものこりすくなゝるほとを云。されと。又十二月尽日をよむことも。つねのこと也○もみちぬ松。一冬。雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみちぬ松もみえけれ。冬の中。雪霜をへても。松のもみちせぬことは。年の暮る時にみゆるといふ也○けふにはつる。二冬。敦忠 物おもふと過る月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく。心明らか也○けふそ限。帖。暮て又あくとのみこそ思ひしかことしはけふそかきり也ける。無子細○年のをはり。無別義。一。元方 あら玉の年のをはりに成ことに雪も我身もふりまさりつゝ○春を待。二冬。關こゆる道とはなしにちかなから年にさはりて春をまつ哉○春をはあす。三冬。重之 ゆきつもるおのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき○年を送る。廿一 伏見院 いそくへき春の心もしらぬ身はのとかに送るとしの暮哉○春いとふ名。五。成道 人しれす暮行年ををしむまに春いとふ名のたちぬへき哉。年をのみをしむゆゑ。春のくるをきらふといふ名にやたゝむと也○玉まつる。六 曾丹 玉まつる年の終に成にけりけふにや又もあはむとすらむ。これは月令廣義云。除夜祭祀。即懸眞像于家庭供奉以拜節。又周處曰。除夜祭其先祖なといへるこれ也。又清少納言草紙に。ゆつり葉をしはすの卅日にしもときめきて なき人のくひ

物にしくとあるもこれをいふ也。十二月尽日には。先祖の魂を祭るを云〇年の暮。としの暮かたくれ行年。年くるゝ。年帰りゆく。過ゆく年。春ちかきなとつねによめり。又年の末。年もこよひにくるゝ共。又年並(ナミ)を波によせて。早くなかるゝ心によみ。又水なとによせて。年そなかるゝなと。年の過る事はやきをいへり 年欲(ホッス)レ暮(ント) 年の已にくれむとする心也。たゝ歳暮にかはらねと。いたく暮はてたる心にはよむへからす 送(オクル)レ年(ヲ) 歳暮に同し。やかておくる共よむへし 惜レ年(ヲ) 無子細

○春漸近(ヤウヤクシ) 春次第に近づき行よしを詮とよむへし 春卜(ム)レ隣(ヲ) 春已(ステニ)卜(シム)レ隣(ヲ) 春の隣となれるを詮とよむへし。卜(シム)とは。卜居とて。家をかふるには先卜してさてそこにうつろふ也。こゝも此義にて。春。冬の隣へ居を卜したる心也

歳暮

行としをおくりはてつるうたゝねの夢ちにちかき春の明ほの　國基

さためなきならいとしれは老かよに及はぬ身にもおしきとし哉　雅經

ふたとせといへは久しき名のみしてけふとあすとはほとなかりけり　雅有

大井川はや瀬にくたす筏士のつなかぬものと年そくれゆく　慶運

歳暮雪　雪は猶ちりかひくもれをしめともくれゆく年のみちのゆく末　称名院

山家歳暮　そともにはもとよりたてる松なれは何をかあすもめつらしくみむ　親盛

海辺歳暮　音ふくる浪にやとしも帰るらむたちくる春はちかのうらかせ　雅經

舟中歳暮　沖つ波そことをしへよくれはつるとしのとまりにわれもとまらむ　顯廣

老後歳暮　なかれゆく年のとまりをたつぬれは老の波よる我身也けり　雅有

○潤(ウル)十二月 十二月に潤あるをそ一(ママ)冬。この月の年のあまりにたゝさらは鴬ははやなきそしなましとあり千文にも潤餘成(ノリハス)レ歳(ヲ)といへるこれ也

○除夜(ショヤ) 漢土にてもしかいへり。十二月卅日の夜を云。顯仲。除夜の哥に。月よめは十月あまりてふた月のみそかになるはこよ

ひ也けり月令廣義云。除日除尽今歳以テ更新ニナルヲとあり〇けふはかりことし。初度百首。公実 あすよりは春のはしめといはふへしけふ斗こそことし也けれ〇あすの春。十四肥後過ぬれは我身の老となる物を何ゆゑあすの春を待らむ〇門松をたつる。初度百首。匡房かと松をいとなみたつるその程に云々〇よすから守る。前内大臣千首ゆく年をよすからあかすまもるとは云々。月令廣義云。除歳達シテレ旦ニ不レサルラ眠。謂フ二之ヲ守歳トー一とあるこれ也。卅日の夜いねすしてあかす也。これを年をまもるといふ。此外。歳暮の下にかなふへきをとるへし

除夜　なかれゆくとしはけふにそ成にけるおもてに浪のしはをとゝめて　行宗
けふくれはことしも過ぬあすからやきのふと思ひし春のあけほの　土御門院
なやらふをいそくはかりに行年もをしまぬほとの雲のうへひと　雅親

〇

冬日　冬かれの草葉にさわく日の鼠きのふはけふになるそかなしき　土御門院
冬月　ふゆかれのあさちかるかやふししをれ雨さむき日の夕くれの庭　後伏見院
冬星　よをさむみ雪ふりはるゝあかつきのあらしにみかくほしのかけ哉　同
冬夜　さえとをる冬の心そしられぬるふくれは薄き床のさむしろ　後伏見院
冬曉　さゝの葉は霜をかさねてそよく也みやまの月のありあけのそら　雅有
冬烟　なかめやる雪ははてなき山もとにうつみのこせるけふりをそみる　後伏見院
冬路　あさあけのこすゑの日影にほひそめて雪落かゝる杜の下道　同
冬鳥　またしろき霜のあさけの軒ちかく鳴おつる厂の聲そさむけき　同
冬獣　さきたちてたれか山ちを尋けむ駒のあとある野へのしら雪　同

冬田　秋はつるかり田のとまやあれはてゝ心のまゝにもるしくれかな　雅有

青冬　草も木もなへてひとつの霜かれに杳のみとりそ冬もしられぬ　後伏見院

黄冬　冬かれのかきほのあさち朝な〳〵霜にくちゆく色そさひしき　同

赤冬　ふけぬるかのこりすくなく消なりてよさむしらるゝ閨のうつみ火　同

白冬　猶そやまぬよのまはかりの雪にたに軒はの竹ははやをれぬ也　同

黒冬　いたつらにあはれよそちの霜をへて我くろかみそ色かはりゆく　同

冬景屬閑居　冬こもるやとのあるしはこたへねと竹のあみ戸をたゝくこからし　土御門院

冬林帶夕陽　ちりはてし梢のあとの夕つく日さそはぬ色そ木ゝにのこれる　後伏見院

冬竹　つもりけるよのまの竹の雪をれにたのむかきほそ野へひとつなる　同

冬人事　うつみ火のよふかきまてにむかひゐて道をおこさぬ身を歎つゝ　雅親

冬無常　あさひまつをさゝか霜の消ぬまを世にふる友とたのむへき身か　後伏見院

冬神祇　もとかしは神のすこもにふりそゝきしろきくろきのみき奉る　同

冬祝　霜の後みとりをそふる冬の松の千とせを契る色そ久しき　同

時節　終

戀雜裝名所諸瘕雜式等嗣出

寛政五年癸丑秋

平安書肆

北村四郎兵衛
武村嘉兵衛
西村平八
山田屋夘兵衛
佐々木惣四郎
葛西市郎兵衛
(同　嘉兵衛)イ

# 和歌以禮ひ裳

全

おほかたのむなきたるきえつりまてみなはしらをたのまぬはなしはしらのかきりは石すゑをたのまさるなしさき草のみつはよつはなるよりはしめてよろしき室あやしき屋なとおしなへて石すうるかなかにいとむけなるは月日へすしてほと〳〵かたふきしつみはて〳〵はおほかたのくつれをとりいつへし中のきはのは此いしこそかしこくはすゑたれとみゆるもかたへには口をしきもうちましりていとふひんなるへしかみなききはのはかなたこなたの石いかにそやかためあひてはしらくつるまてゆるきそはむ事なかるへし柱といへとふとしきもほそきもまろきもかとあるももとよりまき(ママ)もあさきもありてたてもあへすたふれぬへきもあり千年もくつましかるへうみゆるもありまたほそき柱をはおほきなるいしにすゑふとしきをちいさきにすうるひかわさもいとすくなからすかしされはいにしへいとかしこくすゑおきけむ石ともをさなからかりてふさはしからむはしらをのみすゑならはゝもとより石のかきりいとうるはしうかたまりあへるにひかれてはかなき室といへとおのつからめてたからしやはそこつ磐根にふとしきたてしにもをさ〳〵たちおとるましうつひによの人の室壽うたはむにいたらんとこそはおのかほと〳〵につけてたれも〳〵おもひねかふへけれ

寛政六年十二月ふちはらの成はるいれひものはしめにみつからしるす

# 和歌いれひも

## おほむね十三條

おほよそ哥よみはしむる人は思せはく心一首をむすふちからなけれは歌ことにをれく、たけくた〳〵しきやうにのみなりいつへしわれ此としころその故をはかつみかつおもひあつむるまゝに一首のあゆひうちあはてとゝのはさるによれりとはしりぬされは古人おもひをふるまひ詞をとゝのへ姿をみかゝれたる哥とものあゆひをはかり用ゐてさなからに名裝揷頭こゝろ〳〵にその間〻にくはへてよみならはせんとて此書はつくれりみつからいてぬちからをいれなき手をいたしてゑせ哥をのみよみくるしまむよりひたすらこれをならはむは一首十首にまさるへし

又云これをならはむにおのつから十のさちありよろつ心のふるまひは脚結のつかさとる所なれはこれをならふほとにその心理うけさまなとやう〳〵あきらめらるへきひとつ也いととく、よみなりよみのほられぬへきふたつ也古人のすかたおのつからうつりてしらす〳〵いうになるへきみつなりあゆひにひかれて思さま〳〵にいてつひに心のすちあきらかに成ぬへきよつ也よみいてたる人の哥にてはをしへむとおもへとをしへかたきことゝもおもふまゝにをしへもしとはれもすへきいつゝ也かみ

しもに脚結のうちあふやうおのつからしらるへきむつ也さま〳〵の姿おいつからつひにわかものとなりぬへきなゝつ也古人さま〳〵のおもひをかりてわか歌としゝかもふる哥にあらさるへきやつ也よに哥よみならふ人おほくは古人の哥の詞をそこゝかすめ來りてわか哥かほにならふかゆゑにとゝのひかたきのみならすわかにしてわかならぬもときをもおふへしかしこゝぬつにはわかちからにもまされる哥とも脚結のうちあひにひかれていてきぬへしさえのありなしをもいはすよみなりよみならふにもかゝはらすそのほと〳〵につけてちからをそふへきとを也これをいれひものとをのさちといふ

又云これをならはむに心えあり此ふみもとよゝに玉こかねとあふかるゝ集の人々におにかみとかしこまるゝ人の哥ともの脚結よにいふてには也はかりをとり一首のうちの名物也挿頭またきいつれなとの詞を云装おもふみるきくなとの詞を云をは点にかへて出せるなれはその一首これをよまむとおもふ哥の脚結の上下うちあひたる心をよくみしりてさてふと思はむことをも題をかまへてもこの点の數にあはせて名挿頭装をはたちいるへしおのつから一首とゝのひたけたかく詞つきもいうなるへし

又云われはかりよみならふ時はいふもさら也友なとうちつとひて當座なとせむにもこのうちいつれをもはしめにさためてそのとれる題にてたれも〳〵よみなともすへしよみたてゝ後は師たらん人又

は物の心しれらん人にもみせて脚結のこゝろ又はかさしよそひなとのかなひかなはぬけちめをはとひあきらむへし

又云点あらんかきりは私にほかのあゆひをくはふへからすされとやむことなきことあらは を| の| に| なとそへてもくはへてもよむへしいたしおけるあゆひのかきりはふきかへなとは一もしとてもゆめ〱私にすへからすくはふるはその心たにかなはゝ一首を妨くましくはふきかふることは一首をそこなふへけれは也

又云今これをならはむさまをしらせむとて一うたふた歌をこゝにいたす

○○○○(やまかは)の○○○(きしね)に○○(あま)る○○(みつ)なれど○○○○○○(やよひをとき)と○○(おと)そ○○○○(かれゆく)

　　これは古今春上春の日のひかりにあたる我なれとゝよめる哥也

○○○(けしき)にも○○○○(はやみえ)なゝん○○○○(やまのは)に○○○○○○(またるゝつき)を○○○(いてぬ)と思はむ

　　これは同集戀一こむよにもはやなりなゝむとある歌也

○○○○(いつの世)の○○○(ちきり)なれはか○○○○(うきひと)の○○(けふ)の○○○(こよひ)を○○○○○(わすれはつ)らん

　　これは同集秋下たか爲のにしきなれはかといふ哥なり

かやうのたくひによみならふへしその人のちから〱ほとはかならすいかにも歌いてくへきなり

又云今こゝに六百首を出せるやう原哥にあるあゆひをもはふけるありこれはよみならはむにいかにもひろからむにますことあらしとて也されと一首の要となれる脚結はかりにもはふける所なし又挿頭をも所〻いたせるはその哥のうちあひにあらてはあるましけれは也又さむしなとのしもしこひしきなとのしきうきなとのきなと脚結ならぬをもいたせるはたよりにしたかひて也又もなしやはせぬとやみんなと裝をもたま／＼いれたるは挿頭をいたせる心に同しと知へし

又云あゆひには各心ことわりうちあひうけさまなとあり脚結抄にくはしくみゆれはそれをもみしり師にもとひあきらむへしこの六百首からちといへとさま／＼のうちあひあれは脚結を心えむにもこれにますことあらし脚結の心しれらん人はさら也しらさらん人の爲に右のかたはらに里言をつくされとこれはあゆひ抄にくはしけれはそれにゆつれるもありもと脚結の心いふかひなき里言もてはつくすへからねはかへす／＼かの抄をこまかにまねふへし

又云脚結抄にくはしく例をたてられたるか如くやもしといへと疑誂詠なとさま／＼なれは原哥の心にしたかひて左のかたはらにそのまきれをわかちてしるせり詠詠歎の詞なり去過去のことは也誂人物にいひあつらふる也禁さはなせそといさむる也疑うたかひてよむことはとも也此外片響よにいふめくらはねのこと也かくす打合まれにこよひそあふ坂なとそもしのうちあひをやかて名としたるなとこれ也中のけんらんむ詞の中におく也よみつむるにまきらせしとてしるすやはのやかのかはなとはいふに及はす猶くはしくはあゆひ抄にてみるへし

又云ひきあひ（よにいふ文字あまりを云）は原哥にあるをもみな点は三十一字としおけりひきあひのさためにたにたかはすはいつことてひきあはすましきにもあらねはなり

又云脚結のうちつゝかなはおほやけの御いさめなれは世みなこれをよまねとこれはたゝよみならふにつけてかゝる心ぞと心えさせむとて此あゆひある哥とてもえりのこさゝりし也よますしらぬはいふかひなししりてのちよむましきにはよまさらんこそめやすかるへけれ

又云此書の名は古今集の戀にいれ紐の同しこゝろにいさむすひてんとよめるによれり脚結とあゆひとの間へ名挿頭装をいるゝわさのいれ紐の如くなるかうへに古人の名かさしよそひをかへてそのあゆひとも同しこゝろにて一首をいさむすひならはむと人〻おもひたてよとてやかてこれか名とはさためたる也

又云今六百首をいたせれとも古人あゆひの變化かきりなけれは今つき〳〵に此ふみつくりかさぬへしいにしへの哥をみるにすへて脚結多くよみつめの名なるはまれ也たま〳〵あゆひならぬよみつめも多くはうちあひをはふかれたる也これをもて後世の哥の心ふかゝらぬはしるにたれりされはひとへにこれをならひてつひにとほしろき道をなすにいたらんとつとむへし哥よみならふ人のこうしてよみやむはおのか歌のおろかなるをなけきてなれはひとへにこの法をならはむにはかの十のさちお

のつからありて一うた〳〵によみなることゝちしてつひにいさむれとやめぬさかひにいりなんとこそ

寛政六年冬十二月

平安　冨士谷成元　識

# 和歌いれひも

平安　冨士谷成元　著
弟　冨士谷成孚　校
門人　本間平格

○○○○て○○し（去）（タ）○○の○○○○を○○○○の○○○や（ガ）○○らん（デアロカ）

○○○○に○○○○にけり（テシマウタヿジヤ）○○○○の○○る○○○○や○○らん（デアロカ）

○○○○の○○○に○○る○○なれど（ジヤケレド）○○○の（ガ）○○と○○そ（カ）（何カシラズ）○○しき（シイ）

○○○ぬ（去）（ナシマウ）と○○は○○ども（ケレドモ）○○○○の○○ぬ（不）○○は○○○○とそおもふ

○○○○に（デ）○○る○○○の○○ごとに（毎）○○る○や（疑）（ガ）○○の○○○。（カ）

○○○○の（ガ）○○より（カラ）○○る○○○○は（ホラハ）○○○○○を○○か（ガ）○○まし（ツゾ）

○○れど（ケレド）○○○も（トドモ）○○○〔不〕ぬ○○○○は○○○○○○に○○○○ぞ○○

○○○には（デ）○○の○○だに（デサヘ）○○なくに（モセヌノヒ（ママ））○○○は○○の○○○○○けり（ヿジヤ）

○○○○○○○て○○○○○○○○〔去〕ぬ（テシマウタ）○○さへ（マデ）○○ば（ナラバ）○○○○○てむ（テミヨウ）

○○○○○○○○に○○て○○○○○○○○○○○に○○は○○つゝ（テソレナリニ）

○○○○の○○○○○に〔疑〕や•○○○○の○○○○○○て○○の（ガ）○○らん（デアロカ）

○○○○○○○○の○○○○○○○み（サニ）○○○○にこそ（何ヨリモ）○○○へらなれ（デアリソニ思ハル）

○○○○る○○の○○○も（トイヘ圧）○○（を）○○ば（ルト）○○○○○○の○○○○○けり（ヿジヤ）

○○○○○○○○○○○○○○○○に○○の○○○ぞ、（ナニカシラズ）○○○○ける（ヿジヤ）

○○○○の○○○○○○る○○しもぞ（ニカギッテナニカシラズ）○○○て○○の（ガ）○○○○にける（テシマウタヿジヤ）

○○○○○○○○○○○て○○○○を○○○〔詠〕も（サテモ）○○る。（ヿカナ）○の○○○〔哉〕か•

○○○○の○○○も（ナドモ）○○〔不〕ぬ○○○○に○○○○○○〔詠〕も（サテモ）○○○○○かな（ヿカナ）

○○○○ば（ルト）○○○○○なり（ワイ）○○○○の○○○○○○に○○や•○○まし（ウカ）

○○○○○○○を○○○て○○○○は○○○○○○に○○〔疑〕や•○○○る•（カ）

○○○○○○○○○○○じ（マイ）○○○○○○○○○○○に○○○○○けり（ウヿジヤ）

○○○○○○○○○ばかり（バッカリ）○○しより○○の○○○る○○そ○○ける
○○○○の○○に○○てふ（トイフ）○○○○○○○○て○○○○む（ウ）○○○○やと（カト）
○○○に（デ）は○○○も○○ず○○○○○○○○○○て ぞ（ナニカシラス）○○べかりける（ハヅデアルヿジヤ）
○○○○○○○○も○○ず○○○○は○○ぞ（ガナニカシラズ）○○○の○○○○○ける（ヿジヤ）
○○○○に○○○る○○を○○○○て○○○（不）ぬ○○に○○や（ガ）•○○（去）なん（テシヤハウカ）
○○○○て○○の○○○と○る○○は○○○○○をや•○○○○○らん（デアロカ）
○○○○を○○に○○○て○○○てば（テオイダラバ）○○は○○とも（トイフ𪜈）○○○ならまし（デアラウゾ）
○○○○て○○べきものを（ハツナモノジヤン（ママ））○○○○○○○○○○○の○○に○○れる
○○（去）ぬとも（テシマハウトモ）○○たに（ナリ𪜈）（誂）○○○○○○○○○○○○○○の○○○○○にせん（ウホドニ）
○○○より（カラ）○○○○○○る○○○○○○○てふ（トイツ）○○は○○○（誂）ざらなむ（ズニアッテクレイ）
○○○○み（サニ）○○も○○○（不）ぬ○○○○○○○○な•○○そ○（ルヿハスルナ）○○○○○○む（ウホド）
○○○○に○○て○○○の○○○○せば（シテミダラバ）○○の○○○は○○○からまし（ウアラウゾ）
○○のみ（バッカリ）や•○○に○○○む（ウカヤ）○○○○○○○○に○○て○○○○にせん（ウ）
○○○○ば（ヤハノヤ）○○○○○○を○○○○て○○○ぞ（ナニカシラズ）○○の○○○なりける（デアルヿジヤ）

○○も○も○○○○○○に○○らめど(デアラウズレドモ)○○○る○○そ(ナニカシラズ)○○○○○げる(ヿジヤ)
○○○か゛•も(サテモ)○○て○○つる(タノゾ)○○○○○○○○○○らん(デアラウソノ)(中ノラン カラ)○○の○○○を
○○○○○○○にけらしも(テシマウタヿソウナサテモ)○○○○の○○の○○より○○る○○○○
○○○○の○○○に○○る○○○○○○○かとのみそ(バッカリナニカシラズ)○○○○○ける(ヿジヤ)
○○○○○○○○○○○る○○たにも(デサヘモ)○○の○○○に○○○や•は•せぬ(セヌカヤ)(不)
○○○○と○○こそ(何ヨリモ)、、れ○○○○○○○に○○なる(ニアル)○○も(トイヘドモ)○○けり(ヿジヤ)
○○○○ば(タラバ)○○○にも(デサテモ)ある(ヿカナ)(哉ノカ)○○○○○○○○○○○○て○○○○○○む(ウ)
○○○○に○○○は○○○○○て○む(ウ)○○の○○なん(テシマハウソノ)(去 中ノナン)○○の○○○に
○○○○の○○○○○○に(ジヤニ)○る○は○○○なん(テシマハウソノ)(去 中ノナン)○○そ(ナニカシラズ)○○○かる(ウアリツナ)へき
○○○も(ナドモ)○○○○○○○の○○○○○○○の○○なん(テシマハウソノ)(去 中ノナン)○○ぞ(ナニカシラズ)○○まし(ウジ)
○○○○○○○そ(ナニカシラス)○○○き(イ)○○○○○○○て○○○○○○の○○れば(ニヨツテ)
○○○○に○○○○ぬべし(テシマヒツナ)○○○○○○○の○○○に○○○○○○て
○○○○の○○も(サテモ)(詠)○○○か(ヿカナ)(哉ノカ)○○○○○○○○○○○に○○○○にけり(テシマウタヿシヤ)
○○○○て○の○○○○も(ナドモ)○○○○に○○し(タ)○○○も(サテモ)○○○○にけり(テシマウタヿシヤ)

○○よりも○○に○○にし○○なれは○○ても○○の○○とこそ○○

○○○○○○○○○ぬとも(テシマハウトモ)○○○○ず(ズソ)○○の○○○ぞ(ナニカンゾ)○○○○○○ぬ(不)(ズコジャ)

○○とのみ(バッカリ)○○たに(デサヘ)あるを(ノニ)○○○○○○○○○○と(トイフコデ)　か・○○の(ガ)○○らん(デアロゾ)

○○○○み(サニ)○○○○○○し(タ)○○○○○○○は○○○に○○○べらなり(デアリソニ思ハル・)

○○○○の○○は○○○か(疑)○○○○○○○を○○○ぬ(不)○○し○○れば(コノヤウニ ニヨッテ)

○○○○○○○ぬる(テシマウタ)○○の○○○には(デハ)○○○○○○に○○そ(ガナニシラズ(ママ))○○ける(コジャ)

○○○○と○○にし(テシマウタ)○○の○○○にも(デモ)○○は○○○す(ズニ)○○は○○けり(コジャ)

○○○○も(ナドモ)○○○○○○じ(マイ)○○○○ば○○○○○○に○○○○○けり(コジャホドニ)

○○○○を○○も(詠)(サテモ)○○○か(疑ノカ)(カト)○○○○○○○に○○○ぬ(不)○○や(ガ・)○○らん(デアリカ)

○○○○か・(疑)○○に○○○の○○○○む(ウゾ)○○し(サヘ)○○ずは(不)(ヌコナラハ)○○も(トイヘ疋)○○へし(ソウナ)

○○○○に○○○る○○を○○○○て○○○ぬ(不)○○に○○や・○○なん(テシマハウカ)

○○○○○○○○○ならば(デアルナラハ)○○○てし(テキタ)○○○は○○も(イイヘ疋(ママ))○○○○なまし(去)(テシマハウゾ)

○○○○に○○○○○○る○○ならば(デアルナラバ)○○○○○○は○○○○○まし(ツゾ)

○○○○も(ナドモ)○○もの・(モノ)ゆゑに(クセニ)○○○○の○○つる(タソノ)○○を○○てげるかな(テシマウタコカナ)

○○○○は○○○ながらに(グルメニ)○○なれど(ジヤケレドモ)○○かは○○を○○○○たる(タヅイ)

○○○○○○○の○○○に○○○つるは(タノハ)○○○○の○○の○○かも(カサテモ)

○○○○○○○の○○○は○○○けれど(イケレドモ)○○○る○○は○○○○そ(ナニカシラズ)○る

○○○れば○○○さへに(マデガ)ぞ(ナニカシラズ)○○○ける(コジヤホドニ)○○には○○じ(マイ)○○もこそ(ナドモ)○れ(レバワルイニ)

○○○○の○○○○○○に○○○れば○○○○○○に○○○そ(ナニカシラズ)○○ける(コジヤ)

○○○○を○○て○○○よ(誂)○○○は○○やは○○に○○○て○○たる(タカヤ)

○○○○の○○○にし(デサヘ)○○る○○ならば○○○○○に○○○ましやは(ウカヤ)

○○○○る○○○や(ガ)(疑)○○しき(シイカ)○○○○○○○の○○の○○○○の○○

○○○○○○○も(サテモ)(詠)○○かな(コカナ)○○○○の○○○のみ(バツカリ)○る○○ならなくに(デモナイノニ)

○○○○て○○○に○○む(ウ)○○○○は○○○のみこそ(バツカリ何ヨリモ)○○は○○らめ(デアロウズレ)

○○○○を○○か(カハノカ)○○○む○(ウヅイ)○○○に○○○も○○に○○○ものかは(カイ)

○○○○は○○○にけりな(テシマウタコジヤナア)○○○○○に○○○○○る○○○○○に

○○○○○○○の○○○を○○○れば○○○○あへず(テヰルマモナウ)○○ぞ(ナニカシラズ)○○ける(コジヤ)

○○○○に○○○○○むと(ウト思ッテ)○○ものを(ジヤニ)○○○○○に○○は○○○ぬ(ナシマワ)

○○○○て○○の○○○に○○る○は○○の○○にも○○そ○○ける

○○○○と○○の○○とし（ガモトヨリ）○○○せば（ニシテミタラハ）○○○○○○の○○を○ま・しや（ウカヤ）（ヤハノヤ）

○○○○に○○る○○○○○○○○○○○○○にのみ（バッカリ）○○の○○らん（デアロウヿヨ）

○○○か・も（（ママ）サロモ）○○○○○らん（デアロウカ）○○○○の○○○の○○の○○○○の○○（片ヒ・キ）

○○○○に（デ）○○○る○○も（トイヘド）○○なくに（モセヌノニ）○さへ（マデガ）○○○○○○○○○○○

○○○○は○○○な・○○そ（ヿハオケ）○○○むと（ウト思フテ）○○けん（タデアロウソノ）（中ノケン）○○が○○○○なくに（モセヌノニ）

○○○○○○○の○○○○○○○○に○○の○○さへ（マデガ）○○○○にけり（テシマウタヿジャ）

○○○○○○○の○○○○○○にけり（テシマウタヿジャ）○○の○○○に○○まし（ウ）ものを（ジャノニ）

○○○○○○○の○○○に○○○○て○○とも（トイフヿモ）○○ぬ（不）○○○○てしが（テミタイ）

○○○○○○○○○しより（タカラ）○○○○の○○○○○○も（サテモ）（詠）○○○○○かな（ヿカナ）

○○○○る○○し（モトヨリ）○○れば（ニヨッテ）○○○○も（トイヘド）○○は○○○○○○（去）ぬへらなり（テシマイソウニオモハル）

○○○○る○○のまに〱（ソレシダイニ）○○○れば○○にも○○は○○○○にけり（テシマッタヿジャ）

○○○ども○○○○なくに（ウカヤ）○○○○○○る○○にし（コノヤウニ）○○（去）ぬとおもへば（テシマウト云所へ氣ガツケバ）（フニヨッテ）

○○○べき（ソウナ）○○とはなしに（トイフデハナイノニ）○○○○も（サテモ）（詠）○○○○ごとに（毎）○○○○○か（ヿカナ）（誰ノカ）

○○つゝも(テソレナリニサテモ)○○て○○つる(タノジヤゾ)○○○○に○○は○○○も(モ又)○○じ(マイ)とおもへば(フニヨッテ)

○○○○と○○を○○○ぬ(不)○○たにも(デサヘモ)○○○○○○○○○の○○かは(カイ)

○○○○の○○の○○○○○○にけり(テシマウタ┐シヤ)○○○○○○○○○か・○○○む(ウゾ)

○○○てふ(トイフ)○○を○○○に○○○と(ト思フテ・)や(疑)○○に○○○て○○○○らん(デアヤカ(ママ))

○○○○ば○○も(ナドモ)○○なん(去)(テシマハウ)○○○○○○○○○○○の○○を○○ばや(タイゾ)

○○○○に○○○○ぬらん(テシマウタ┐デアロゾ)○○○○の○○○○○○○○○そ(ナニカシラス)○○なる(ワイ)

○○○○○○○○○○なる(ワイ)○○○○○○○○○○○に○○は○○なん(訛)(テクレイ)

○○○○○○○○○○れば○○○○○○○○○○○に○○そ(ナニカシラス)○○なる(ワイ)

○○○○○○○○○○○ば○○○○○○○○○○○ぬ(不)○○○○○はた(ハマタ)

○○○○○○○き○○○の○○○○○○○ばかりこそ(ガ何ヨリモ)○○○なりけれ(デアル┐ツヤ)

○○○○に○○○○○○○○○○らば(ルナラハ)○○○○○○に○○な(ヲ)○○○そ(テクレナ)

○○○○○○○○○○○ば○○○にし(テシマウタ)○○○○さへそ(マデガナニカシラズ)○○○かりける(ウアルーシヤ)

○○○○○○○○○○○の○○○れば(ルニヨッテ)○○○○○○ぬ(去)(テシマウタ)○○○ものから(ノクセニ)

○○は○て○○○は○○ぬ○○○○○○○○○○○の○○を○○なん(テクレイ)

○○○○し○○○○○○も（トイヘドモ）○○なくになど○○○○○○○○○ぬらん

○○○○の（ガ）○○かとすれば。（ハヤ）○○○○○○○○○○○に○○る○○○○

○○○○に○○○○○○や（ガ•）○にけん（テシマウタデアロカ）○○○○○○○て○○○○○○○

○の○○○○○○○てし（テオイタ）○○○○○○○かあらぬか（カツデナイカ）○の（ガ）○○○○○ぬ（ヌノハ）（不）

○○○○の○○○も（トイヘドモ）○○に○○○○○なにを○○とか（ト思テ•）○○○○○らん（デアロゾ）

○○○○○○○○も○○ず○○○は○○○に○○○○を○○○や•は•せぬ。（カイヤイ）

○○○○○○○○○○○に○○○れば（ニヨツテ）○○○○○○に○○○○○○けり（ヿシヤ）

○○○○や（ガ）（疑）○○も（トイヘドモ）○○しき（シイカ）。（ナゼニ）○○○○○○○○○にしも（ニカキツテ）○○て○○らん（デアロウゾ）（片ヒ・キ）

○○○○○○○とはなしに（トイノデハナイノニ）。（ナゼニ）○○○○の○○○の○○に○○○○○らん（デアロウゾ）（片ヒ、キ）

○○○○は○○○○ながら（ナリニ）○○ぬるを（テシマウヤウニナルノニ）○○のいづこに（ドコニ）○○○○○らん（デアロゾ）

○○をだに（ナリドモ）○○じと（マイト）そおもふ（何シラズ）（ママ）（ゾ）○○しより（タカラ）○○○○○る○○○○の○○。（ジヤ故）

○○○○と○○は○○○に○○○ども（ケレドモ）○○の○○にそ（デ何カシラズ）○○○○○ぬる（ルヤウニナル）

○○○○の○○○○もある（サテモ）か（ヿカナ）（疑ノカ）○○○○る○○○○○にや•○○は○○らん（デアリカ）

○○○○の○○の○○○の○○○○○○○○○○なば（テシマウタラバ）○○○○○てよ（テクレヨ）

○○○○○○○を○○に○○○ばや(ニヨツテ)•○○○○○の(ガ)○○をしも○○。(ソレニカギツテ ヿカ)

○○○けん(ダデアロウソノ)(中ノケン)○○そ○さ(ガナニカシラズ イゾ)○○○の(ガ疑)○○に○○○○○は○○かは(トイフモノカヤ)

○○○に○○とはすれど(ルケレ圧)○○○の○○の○○そ○○(ハナニカシラズ)○かりける(ウアルヿシヤ)

○○○に○○つる(ダソノ)○○の(ノヤウニ)○○○て○○の○○○○○や•○○○む(ウカ)

○○○○む(ウソノ)(中ノン)○○には○○じ(ヨセノノ マイ)○○○の○○○○に○○もこそすれ(ナドモスレバワルイニ)

○○○○○○○る○○は○○○○○○○ぬ(不)○○に○○そ○○ぬる(ガ何カシラズ ルヤウニナルゾ)

○○よりは(カラハ)○○○む(ウソノ)(中ノン)○○の○○○をそ○○(ナニカシラズ)○○とのみ(ト思テバツカリ)○○○○へき(ツウナ)

○○○より(カラ)○○○る○○の○○○れば○○○○○の○○○○にけり(テシマウタヿジヤ)

○○○の○○○るからに(トイフトハヤ)○○○こそ(ヲ何ヨリモ)○○○○ものと(ジヤト)○○○○ぬれ(テシマウゾ)

○○○に。(カギツテ)○○○○にし•も•(デモ)○○なくに(モセヌノ)○○○○○○ば○○そ○○しき(ナニカシラズ イソ)

○○○ごとに(毎)○○そ○○しき(ナニカシラス イゾ)○○○つゝ(テソレナリニ)○○○○○○を(ノヲ)○○○とおもへは(フニヨツテ)

○○○る○○は○○○に(デハ)○○ねども(ヌケレドモ)(中ノツ•)○○る○○は○○○かりけり(ウアルヿワヤ)

○○○○○は○○ねど(ヌケレド)○○○○そ○○(ハナニカシラズ)○○○○の○○○なりける(デアルヿワヤ)

○○○○○○○○○を(ワヤノニソレチ)○○○に○○○○らん(デアロウソノ)(中ノラン)○○さへそ○○。(マデガナニカシラズ ゾ)

○○○○と。○は○○ぬらし○○○○の○○○る○○に○○○○る。み[illegible]

○○○れば○○に○○こそ○○○けれ○○○○○の○○にはあらねど

○○○○の○○の○○○も○○はなほ○○○○ればや•○○○るらん

○○○○の○○の○○○し○○ければ○○○の○○も○○ぬへらなり

○○○○○○○な•○そ○○○の○○○○○は○○そ○ ○れる

○○○○の○○るも○○ず○○○は○○○○○や○○○かるらん

○○○○も○○○ぬれば○○○○○○ぬごとや•○○は○○しき

○○○○は○○こそ○○○○からし○○○ことに○○の○れは

○○○○○○○に○○る丶○○○○は○○○○○○そ○○○かりける

○○○○に○○も○○○ぬ○○○○の○○○る○○に○○や○○まし

○○○○に○○○○○○の○○○なり○○○○○て○○○○○む

○○○○の○○て○○れる○○○に○○を○○○○○○らん

○○○○の○○つるなへに○○○ぬとおもふは○の○○にそありける

○○○○の○○○○○の○○○は○○より。ほかに○○○もなし

○○○○に(デ)○○ぬ(不)ものから(ノクセニ)○○○○の(ガ)○○○○○○の(ガ)○○○○○かな(ヿカナ)

○○○○に(デ)○○○○○○そ(ガナニカシラズ)○○○なる(ワイ)○○○○○○を○○て○○らん(テアロゾ)

○○○○に(デ)○○○○○○の(ガ)○○なへに(ヤサキニ)(ニアハセテ)○○○○○○に(デ)○○は○にけり(テシマウダヨシヤ)(ママ)

○○○○も(サテモ)(詠)○○ぬる(テシマウ)○(名)○か(デモアルヿカナ)(哉ノカ)○○○○の(ガ)○○○る○○も(トイヘ圧)○○○○なくに(モセヌノニ)

○○○○○○○○て○○し(タ)○○○○は○○そ(ナニカシラズ)○○なる(ワイ)○○○○○○に(デ)

○○。○(ガ)○み(サニ)○○○○○○○○○なへに(ニアハセテ)(ヤサキ)○○の○○○も(モマダ)○○○○にけり(テシマウタヿシヤ)

○○○○に○○を○○○て○る○○は○○の○○る○○にそ(デナニカシラズ)ありける(ルヿジヤ)

○○○○を○○○○○○て○○○○の(ガ)○○こそ(ナニヨリモ)○○れ(ルワイ)○○の○○○○

○○○○は○○こそ(ハナニヨリモ)○○○○○○けれ(ヿシヤ)○○の(ガ)○○○に(テ)○○○○○つゝ(テソレナリニ)

○○○○に(デ)○○○○○○○○○○○の(ガ)○○○○○○そ(ハナニカシラズ)○○は○○しき(イゾ)

○○○○に○○○○○れば○○○○の○○○○○○○○○の(ガ)○○らん(デアロウヿハ)

○○○○の○○○○にけり(テシマウタヿジヤ)○○○○の○○○の○○は○○や•○○らん(デアロカ)

○○○○の○○○に○○る○○○れば○○の○○○は○○○ざりけり(ズニアッタヿジャ)

○○○○の○・○○○○○○○○より(カラ)や•○○○る○○の(カ)○○○○○○る(ルカ)

○○○○る○○の○○○や○○つらん○○○○○○の○○○○の○○

○○○○○○○に○○むと（ウト思テ）○○ば○ぬ（ナシマウ・）（去）○○○む（ウソノ）（中ノン）○○は○○○○○○よ（訛）

○○○○ば（タラバ）○○そ（ナニカシラズ）○○へき（ソウナ）○○○○の○○も（トイヘ𪜈）○○○に○○る○○○○

○○○○○○○らん（デアロウソノ）（中ノラン）○○の○○○○に○○てを（コチハ）（思立）○○む（ウ）。○○（ータトヘ）は○○とも

○○○○に○○○○○○は○○なれや（チヤニヨッテ•）○○○○○○る○○の○○○○。（カ）

○○○○て○○るばかり•ぞ（ノコジヤゾ）○○○○○○○○○○○○と（トイフテ）○○に○○○な（禁）

○○○○○○○○○つゝそ（テソレナリニナニカシラズ）○○○○る（ルゾ）○○○○○にし（コノヤウニ）○○○とおもへは（フニヨッテ）

○○○○に（デ）○○○○○へし（ソウナゾ）○○○○○○○○○○○み（サニ）○○ならなくに（デモナイノニ）

○○○○○○○○る○○に（デ）○○○せば（シタラバ）○○○○○○の○○や（ガ•）○○なん（テシマハウカ）（去）

○○○○○○○の○○○に○○○○○○○○○○○を（疑挿）○○に○○らん（デアロゾ）

○○ならで（デナシニ）○○○○○○き○○○○○○○○○○○に○○ぬものゆゑ（ノクセニ）

○○○○る○○そ（ガナニカシラズ）○○なる（ワイ）○○○○○○○○○○○の○○と（トイツコハ）○○ずや（ヌカヤ）

○○○○○○○○○○○る○○○○は○○○○○ねど（ヌケレド）○こそ（ハ何ヨリモ）○○けれ（イコジヤ）

○○○○る○○や（ガ）（疑）○○しき（イニヨッテ）○○○○○○○○○にのみ（バッカリ）○○○○るらん（レルデアロカ）

○○○のみ（バッカリ）○○○るよりは○○○○○○○○○○○に○○○○ましを（ウモノジヤニ）

○○○○○○○○○○○〔詠〕も（サテモ）○○○かな（ヿカナ）○○たる（テアル）○○に○○○○○れば（ルニヨツテ）

○○○○〔不〕でなに（ズニナニシニ）○○○らん（デアロゾ）○○○○○○○○る○○に（デ）○○まし（ウ）ものを（シヤニ）

○○○○〔疑〕か（ガ）○○○○○○〔去〕し（タゾ）○○○○○○○○○○○に○○を・○○○〔今〕す（ノハ）

○○○せし（シタ）○○の○○○〔疑〕か○○○○○○○○○○○○○○○○○つゝ（テソレナリニ）

○○○○〔不〕ぬ○こそ（ナニヨリモ）○○○れ○○○○に○○○○○○〔去〕し（タ）○○○○○ぞも（ジヤゾサテモ）

○○よりは（カラハ）○○てたに（ナリ𪜈）○じ（マイゾ）○○○○○○○○る○○は○○○かりけり（ウアルヿジヤホドニ）

○○○○の○○の○○○〔疑〕か（ガ）○○○○○○○○て○○○○○と○○らん（デアロカ）

○○のみや（バッカリ）・○○○と思はん（ウカ）○○○○○○○○○○○の○○○○○○○

○○○なる（ナ）○○○○○とそ（ナニカシラズ）○○は○〔去〕し（タガ）○○は○○○の○○にそありける（デナニカシラズアルヿジヤ）

○○○○の○○の（ガ）○○○○○○○○に（デ）○○○○○○む（ウホドニ）○○な・○○○そ（テクレナ）

○○○○に（デ）○○○は○○ん（ウゾ）○○○○に（デ）○○○○○○は○○○○ぬとも（テシマハウトモ）

○○は○て○○は○○〔去〕にし（テシマハタ）（ママ）○○なれや（ジヤヤラ）○○も○○○も○○の○○なる（ナハ）

○○も○も○○○○○ども（ケレ𪜈）○○○○の○○の○○にそ（ニハナニカシラズ）○○○かりける（ウアルヿジヤ）

○○○○ぬ（不）○○の○○は○○○○の○○にや○○を○○○○るらん

○○○○て○○そ（ナニカシラズ）○○なる（ワイ）○○○○の○○の○○は○○○○ぬ（去）らん（テシマウデアロウ）

○○○○○○○○も（トイヘ圧）○○○○○なくに（モセヌノニ）○○て○○○○○○○の○○

○○○○○○○○○○○の○○○○に○○は○○じ（マイゾ）○○○○ものを（ツヤニ）

○○○○を○○て○○○の（ガ）○○○は（ノハ）○○○こそ（ハナニヨリモ）○の○○○なりけれ（デアルヿジヤ）

○○○○の○○にし（去）（テシマウダ）○より（カラ）○○○○○○の○○○も（モマタ）○○○○にけり（テシマウタヿジヤ）

○○○○の○○は○○を（ジヤニ）○○○○○○○の○○○を○○に○○らん（デアロゾ）

○○○○の○○をば○と（疑挿）○○なから（ナリニ）○○の○○○や（ガ）○○を○○らん（デアロカ）

○○の○○○○○○○に○○ばこそ（ニヨツテナニヨリモ）○○の○○○の○○○なるらめ（ニアルデアラウズレ）

○○○○も○○○も○○○○る○○は○○○○○ず○○○○にけり（テシマウタヿジヤ）

○○○○ど（ケレド）○○も（トイヘ圧）○○じを（マイノニ）○○○○の○○は○○○か○○○○けん（ダデアロゾ）

○○○○○○の○○○に○○○も（トイヘ圧）○○にはあへず（ダマリカチテ）（疑）○○○にけり（テシマウタヿジヤ）

○○○○○○○○○○の○○○○は○○○○の○○さへぞ（マデガナニカシラズ）○○。（ヿジヤ）

○○○ども（ケレドモ）○○てぞ（ナニカシラズ）○○さ（イヿジヤ）○○○は○○○○○の○○と○つれば（ダツジヤニヨツテ）

〔疑挿〕○○○の○○○なれば(ジャニヨッテ)か•〔疑〕○○○の(ガ)○○の○○○を○○○○らん(デアリゾ)

○○○は○○はな•○そ(テクレナ)○○○の○○○の○○○○にても(デナリ圧)○ん(ウホドニ)

○○○の○○○の○○は○○けれど○は○○○も(サテモ)〔詠〕○○にけるかな(テシマウタヿカナ)

○○○○ば○○○○○や•(ヤハノヤ)○○ざらん(ズニアロカ)○○こそ(ハナニヨリモ)○○め(ウズレ)○さへ(マデガ)○○めや(ウカヤ)

○○○○の○○の○○にて(デ)○る○は○○○○○とぞ(ナニカシラズ)○○○○ける(ヿジャ)

○○ながら(ナリニ)○○て○○○む(ウ)○○○○○○○○○の○○○かるへく(ウアリソウニ)

○○し(タ)〔去〕○○。(ニ)○○○○○に○○○し(タ)〔去〕○○。(ガ)○○○○に○に○○むとや(ウ)•(ヤハノヤ)○し(タカヤ)〔去〕

○○○○の○○○に○○る○○○○は○○か•〔疑下同〕○○○か○○の○○○か

○○○○○○○○の○○の○○○○にいつか•○○○○を○○は○○けん(タデアロゾ)

○○○つゝ(テツレナリニ)○○○○○は○○○○の○○かとのみぞ(バッカリナニカシラズ)○○○○ける(ヿジャ)

○○○○と○○○し(タ)〔去〕○を(ジャニ)○○○の○○の○○にも(モマタ)○○か(ガ)○○けむ(タデアロゾ)

○○の○○○○○○○○は○○てん(テミヤウ)○○○○○○と(トイソヿモ)○○ぬ〔不〕○○○を(ジャニ)

○○○○に○○○ばや(ダラバ)•○○ん(ウカ)○○○○の○○○○○る○○○の○○

○○○○る○○の○○をば○○○○に○○○○○○○○○○とこそ(ナニヨリモ)○れ

○○○○て○○こそ○○れ○○○○○○○○○からに○○の○○れは

○○○○し（去 タ）○○し（ガモトヨリ）○○れば（ルニヨッテ）○○○○○○○さへ（マデ）にこそ（ナニヨリモ）○○○にけれ（ナシマウタコツヤ）

○○○○の○○○の○○○○○ぬべみ（去 テシマイソナニヨッテ）○○さへ（マデ）○○と。（イフ心デ）○○○○○○○

○○○○の○○○○○○○○○ぬべし（去 テシマイソウナ）○○○○○○○○る○○○○て

○○○○○○○○○○○て○○○めり（オモムキジヤ）○○らば（タラバ）○○○○○や（ガ）○○なん（去 テシマハウカ）

○○○○○○○○○○○る。（ガ）○○○○の○○○の○○に○○○○○らし（去 コソウナ）

○○○○は（ナラバ）○ても（ナリトモ）○○○ん（ウホドニ）○○○○を○○な・○○○そ（テクレナ）○○○○の○○

○○○○に（デ）○○○○○ぬる（テシマウ 中ノヌル）○○○○の○○○○○○ぬ（不）○○ぞ（ナニカシラズ）○○しき（イ）

○○は○ぬ（去 テシマイ）○○○は○○に○○○○ぬ（去 テシマウタ）○○○○○○て○○○○は○○

○○○○て○○にや・（ヤハノヤ）○○ん（ウカヤ）○○○○の（ガ）○○○○○てし（テオイタ）○○と○ながら（ナリニ）

○○の○○○○○○○○に○○○るは（ノハ）○○る○○○の○○を○よとか（トイフ心カ）

○○○○の○○の（ガ）○○○に○○つるは（タノハ）○○の○○○の○○ばなりけり（ニヨッテヾアルコジヤ）

○○の○○○○の○○こそ（ナニヨリモ）○○からし（コソウナ）○○の○○○の（ガ）○れば（ルト）○○○る（ハ）

○○○○の○○て○○○る○○○○は○○○○○○○○○○○○けり（コジヤ）

○○○○の○○○て○○る○○○には(デハ)○○○○○○○○○や(ガ)○○らん(デアロカ)

○○○○○○○○も(トイヘ圧)○○ず(ヌゾ)○○○○○○○○○○○に(デ)○○○○○とは(トイフヿハ)

○○○つる(タツノ　中ノツル)○○も(ナレ圧)○○○ず○○○○○○○の○○○の○○○○○○に(ノデ)

○○○○の○○○の○○を○○○○ば○○○○○○る○○○こそ(何ヨリモ)○れ

○○○○も○○て○○ぬる(テシマウ　中ノヌル)○○○○の○○○は○の○○○○なりけり(テアルヿジヤ)

○○○○○○○○る○○の(ガ)○○ばこそ(ニヨツテナニヨリモ)○○の○○の(ガ)○○と。(ミエルヤウニ)○　○らめ(デアロズレ)

○○○○○○○○を○○と。(イフヤウニ)○○○れば(ニヨツテ)○○○○さへぞ(マデガナニカシラズ)○○○○○○る

○○○○の○○を○○○○○○なれば(ジヤニヨツテ)○○○○にぞ(ナニカシラズ)○○は○○○る

○○○○に○○の(ガ)○○○の○○○るを(ノヲ)○○の(ガ)○○○る○○かとそみる(ナニカシラズ)

○○○○の(ガ)○○ざりせば(ズニアルニシテミタラバ)○○○○○の○○をば○○か・○○まし(ウゾ)

○○○○に○○の(ガ)○○たる(タツノ　中ノタル)○○○は○○○も○○ぬ(不)○○○なりけり(デアルヿジヤ)

○○○○ば○○る○○○○○○み(サニ)○○ぬ(不)○○さへ(マデカ)○○に○○つゝ(テソレナリニ)

○○○○○○○を(コチハ　思立)○○○む(ウ)○○○は○○と。(同シヤウニ)○とも○○は○○○じ(マイ)

○○○○る○○の○○○に○○○は○○○○○の○○○なりけり(デアルヿジヤ)

○○○○ぬ○○○を○○と○○○○○○○○の○○に○○〔不〕ぬ○はなし
○○○○に○○る○○○の○○〔不〕ぬは（ヌノハ）○○○○○○に○○○○〔去〕ぬとか（テシマウダトデヿカ）
○○○○は○○に○○○て○○○〔去〕なん（テシマハウ）○○は○○○と○○○の○○
○○○より（カラ）○○○る○○の○○○てぞ（ナニカシラズ）○○は○○○と○○○○○ぬる（ヤウニナル）
○○○○に○○○○○○○○○○○○○○〔疑〕や（ガ）○○の○○○なるらん（デアルデアロカ）
○○○○○○○○の○○に（デ）○○○○の○○の○○にや•○○は○○らん（デアロカ）
○○○らば○○○も（テナリ𪜈）○○む（ウ）○○○○を○○と。（同ジヤウニ）○○て○○○○にけり（テシマウダヿジャ）
○○○○は○○ぞ（ナニカシラス）○○○○○○○ける（ヿジャ）○○○も○○も○○〔去〕ぬと（ルヤウニナルト）おもへば（フニヨッテ）
○○○○の○○の○○○し（ガモトヨリ）○○ければ（コトジヤソジヤニヨッテ）○○○〔去〕し（タ）○○。（ガ）ぞ（ナニカシラズ）○○○○○ける（ヿジャ）
○○○れば○○○○○○し（イ）○○○○の○○○の○○に○○○○らし（ヿソウナ）
○○より（カラ）は○○て○○〔誂〕なん（テクレイ）○○○○の○○○○○○○○○る○○○
○○○○は○○ぞ（ナニカシラズ）○○らし（ヿソウナ）○○○○の○の○○○○○○○○るなり（ワイ）
○○○○に○○○○○○る○○○○の○○の○○そ（ガナニカシラズ）○○○○るらし（ヿソウナ）
○○○○は○○○の○○し（ガモトヨリ）○○ければ（イヿジャニヨッテ）○○○も（トイヘ𪜈）○○○○〔不〕ぬ○はなし（イゾ）

○○○は○○○○○○て○○も（トイヘドモ）なし（イ）○○○○て○○○○し（ガモトヨリ）○○れば（ニヨッテ）
○○○れば○○○○○○る○○も○も○○に○○○（不）ぬ○○ぞ（ナニカシラズ）○○ける（ヿジヤ）
○○○○の○○○も○○ず○○○○ば○○○にも○○○○とこそ（ナニヨリモ）○れ
○○○○の○○の○○○○○○るらし（ヿツウナ）○○○○○○○○○○○○なり（ソイ）
○○○○○○○○る○○は○○○○の（ガ）○○の○○○○○○かとぞ（ナニカシラズ）みる
○○○○の○○の○○○○○○○○て○○にし（テシマウタ）（上）○○の（カ）○○○○も○（不）ぬ
○○○○の○○て○○れる（ツテアル）○○○○は○○○○さへや（マデガ）・○○○○○らん（デアロカ）
○○○○て○○も○○○（不）ぬ○○なれや（ジヤニヨッテ）・○○○○○○○○○○○○らん（デアロカ）
○○ながら（ナリニ）○○より（カラ）○○の（ガ）○○○るは（ノハ）○○の○○○は○○にや（デ）・あるらん（テアリカ）
○○○○○○○○○○（不）ぬを（ヌノニ）○○○より（カラ）○○と○○まで（クラヰニ）○○ぞ（ガナニカシラズ）○○ける（ヿジヤ）
○○○○○○○○の○○と○○まで（クラヰ）に○○○の○○に○○る○○○○
○○○○にまたも○○○（訛）○○○○○○○○なば（テシマウタラバ）○○○○○にこそ（ナニヨリモ）○め（ウズレ）
○○○○○○○とも○○ず○○○○の○○○る○○の○○て○○れは（ニヨッテ）
○○○○は○○に○○○て○○すとも○○たに（ナリドモ）○○○○○の○○べく（ヤウニ）

○○○○の○○○る○○に○○○せは○○か○○○○○○て○○まし

○○○れば○○○に○○ぞ(ガナニカシラズ)○○にける(テシマウタヿジヤ)いづれ(ドレ)を○○と○○て○○まし(ウゾ)

○○○○ぬ(不)○○は○○れど(ケレド)○○○○の○○にし(テシマウタ)(去)○○は○○○○も○ず

○○○○の○○の○○○に○○ごと(毎)に○○も○○○も○○○○○つゝ(テソレナリニ)

○○○○て○○の○○ぬる(ルヤウニナル)○○にこそ(ナニヨリモ)○○○○○○ぬ(不)○○も(トイヘ𪜈)○○けれ(ルヿジヤ)

○○と○○○○と○○○て○○○○○○○○て○き○○○なりけり(デアルヿジヤ)

○○○○の○○○も(サテモ)あるかな(ヿカナ)○○○○○○○○○さへ(マデガ)に○○ぬと(ルヤウニナルト)(去)おもへば(フニヨッテ)

○○○○は○○○○○○に○○○○の○○○と○○て○○の○○まで

○○○○の○○の○○○を○○○つゝ(テソレナリニ)(中ノツヽ)○○○○○○の○○○○にせん(ウ)

○○の○○○○○の○○に○○○○○○○○○○をば○○○とぞ(ナニカシラズ)○○

○○○○○○○○○○○に○○○○て○○○○○ては○○○○にせよ

○○○○○○○の(ガ)○○けん(タデアリツ)○○からに(トイフトハヤ)○○○の○○も(トイヘ𪜈)○○ぬへらなり(ルヤウニナリソニオモハル)(去)

○○○つゝ(テソレナリニ)(中ノツヽ)○○○○○○○○○○○て○○○○○○に○○よしもがな(シカタナドモアッテホシイ)

○○○○○○○○○○○れ(訛)○○○○の(ガ)○む(ウ)と○○なる(ワイツノ)(中ノナル)○○○○○かに(ドモスルヤウニ)

○○○○の○○の○○○を○○○○る○○の○○○○○○の○○かも（カサァモ）

○○○○に○○る○○○は○○○○で（不）○○○て○○○○○ぞ（何カシラズ）○○○き（イゾ）

○○○れば○○に○○○○○○○○○○○○○○○の○○○とぞ見る（ナニカシラズ）

○○○○に○○き（去・タカ）○○ずは（ヌデハ）○○ねども（ヌケレドモ）○○○の○○○○○に○○○ん（ウ）

○○て○○○○て○○○る○○○○は○○ぞ（ガナニカシラズ）○○らん（デアロウ）○○○○の○○

○○○○も（トイヘド）○○○の○○は○○なくに（モセヌノニ）○○ぬ（不）○○○に○○○○○てん（テオカウ）

○○○○○○○にぞ（ナニカシラズ）○○を○○○つる（タゾ）○○○の○○に○○む（ウ）と思へば（フニヨッテ）

○○○○に○○○○○つゝ（デソレナリニ・中ノッ・）○○○○を○○○○○○は○○ぞ（ガ何カシラズ）○○らん（デアロウ）

○○○○み（サニ）○○○に○○る○○○○○○○○の（ガ）○○て○○ぬ（不）○ぞ（ハナニカシラズ）　な　き（イゾ）

○○○○○○○ならなくに（デモナイノニ）○○○○○○○○の○○を○○ずも（サテモ）あるかな（ヿカナ）

○○○○の○○を○○○○○○からに（トイフトハヤ）○○○○○○る○○○○○○○

○○○○○○○の○○○○○○ぬらし（テシマウヿツウナ）○○の○○○も（ナドモ）○○○○○○○

○○○れど○○も○○○ぬ（不）○○○○○○○の○○○を○○ぞ（ガナニカシラズ）○○ける（ヿジャ）

○○○○の（ガ）○○○○○○は○○○○の○○○○○○に（テ）○○ぞ（ガ何カシラズ）○○ける（ヿジャ）

○○○○○○○○の○○に○○る○は○○○○○○○○○○へらなり

○○○○○○○の○○○○○○○○て○○○○○○を○○とか（ト思テ）•○○む（ウヅ）

○○○○○○○○の○○に○○るとも（レルトテモ）○○を○○○に○○○○むやは（ウカイノウ）

○○○○の○○の○○○と（思テ）。○○○○る○○○ばかりは○○な•○○○そ（ルヿハオケ）

○○○○○○○は○○○と○○○ども（ケレド）○や（ガ）○○ぬらん（テシマウタデアロカ）○○の（ガ）○○○き（イノハ）

○○○○○○○とは○○ど（ケレド）○○○○○○○○○○なば（テシマウタラバ）○○○かるべし（ウアリソウナ）

○○○から（トイフトハヤ）○○○○ものを（ジヤノニ）○○○○の○○なん（テシマハウツノ）〔去中ノナン〕○○は○○○○○む（ウヅ）

○○○ては○○を○○○と○○○ばや（ニヨッテ）•〔疑〕○○○○○○に○○て○○しき（イノカ）

○○○ども（ケレドモ）○○し（モトヨリ）○○ねば（ヌニヨッテ）○○○○ぬ〔不〕○○○を○○に○○○てぞ（ナニカシラズ）○る

○○○○の○○し（サヘ）○○しき（イ）ものなら（デアルナラ）ば○○○○○○る○○を○○○よ〔詠〕

○○○○○○○○は○○じ（マイ）○○○○の○○てし（ソノヤウニ）○○ば（タラバ）○○べき（ソウナ）ものを（ジヤニ）

○○○○に○べき（ソウナ）○○とし（モトヨリ）○○○ねば（ヌニヨッテ）○○○○○ぬる（テシマウ）○○○○○なり（ジヤ）

えぞ（ドツモナニカシラズ）○○ぬ〔不〕○○○○○○よ〔詠〕○○○らば（ルナラ）○○や（ガ）〔疑〕○○○る。（カ）○○や（ガ）〔疑〕○○ぬ〔不〕と（ヌカト云ヿヲ）

○○○にも（トイヘドモ）○○○○○○の（ガ）○○○ねば（ヌニヨッテ）○○る（レル）と○○に○○ばかり（バッカリ）なり（ジヤ）

○○○○の○○○○○○に○○○○○○○○を○○と。○（同シヤウニ）○○○○かな（コカナ）

○○○○の○○に○○○る○○にても（デモ）○○○む（ウ）（中ノシ）○○に○○○○○○な（禁）

○○○てふ（トイフ）○○は○○にも（デ）○○なくに（ナイノニ）。○（ナゼニ）○○に○○て○○○かるらん（ウアルコデアロゾ）（片ヒヽキ）

○○にのみ（デバツカリ）○○や•○○○む（ウカ）○○○○の○○○○へくもあらぬ（ソウニナドモアリモセヌ）○○○は

○○○○○○○○○○○て○○○○○○○○○○○を○○○べらなり（デアリソニ思ハル•）

○○○○に○○て○○○よ（誂）○○○○○○○の○○○は○○○。や•は。（ハ•）あらぬ（ナイカヤ）

○○○○の○○に○○○て○○○なば（テシマウタラバ）○○ぬ（不）○○○に○○や•○○○ん（ウカ）

○○○だに（サヘ）○○○に○○○ものならば（デアルナラ）○○か•（疑）○○○の（カ）○○○からまし（ウアラウゾ）

○○○○の○○ならなくに（デモアリモセヌノニ）○○○○は○○○○○○て○○○○○なん（テシマハウ）（去）

○○○○て○○し（タ）（去）○○○の○にしあれば（デモトヨリアルニヨツテ）○○○○○には○○も（ナドモ）○○○ず

○○○○て○○○も（サテモ）（詠）○○か（コカナ）（哉ノカ）○○○○は○○○○○なる（ナ）○にこそ（デナニヨリモ）ありけれ（ルコジヤ）

○○○○○○○の○○○○○○ねども（ヌケレドモ）○○のまに〳〵（シダイニ）○○は○○ん（ウ）

○○○○の○○○は○○と○○な〵ん（テシマウテクレイ）（去）（誂）○○は○○じと（マイトイフテ）○○○るべく（ヤウニ）

○○○をば○○の○○○に○○○てん（テオカウ）○○む（ウ）○○○じは（マイ）○○のまに〳〵（シダイニシテ）

○○○○に○○○○○○○○○○なん○○の○○○に○○○○るべく

○○○○ば○○○○るべく○○○なん○○○は○○の○○にや・は・あらぬ

○○○して○○○る○○○○○に○○○○○○るとや・○○は○○らん

○○○の○○をば○○に○○○ども○○をば○○て○○とこそ○○

○○○らん○○の○○○を○○ぬまに○○の○○○と。　○そ○○にける

○○○れど○○○○もあるか○○○○○○○○ぬ○○になにを○○まし

○○○して○○○る○○の○○○○は○○○○○○と。○○○てぞ○○

○○○○○○○○○○○に○○○ぬる○○は○○○じ○○む○までに

○○○○○○○○○○なん○○○○に○○○○○○て○○を○○む

○○て○○○○を○○○む○○○○○○○○を○と○○○まて○○

○○○○の○○○に○○る○○○○の○○○も○○に○○○ぬるかな

○○○○の○○は。○○○○○○○とも○○○○ても○○○とそおもふ

○○○○○○○○○○れば○○○なる○○○の○○に○○し○○かも

○○○○○○○○○○○て○○○ぬと○○には○○よ○○の○○○

○○○○と○○の○○の○○○○に○○○○○○○○○をしそ思ふ

○○○○○つ丶○○にし○○しあれば○○○○○ぬる○○をしそおもふ

○○○○ば○○○○○ん○○○○○○○○○○○は○○や○○やと

○○へ○○○○ぞ○なる○○○○し○○は○○でぞ○○○べらなる

○○○○○○○の○○ぞ○○○しきいつれ○○○の○○○なるらん

○○○○る○○し○○れば○○○なる○○○○○○は○○にぞありける

○○に○る○○ならなくに○○○○の○○○○○○も○○○るかな

○○○○み○○○○○○を○○○つ丶○○の○○○に○○○○○ぬ

○○○○○○○○○○○を○○○○○○○○の○○は○○てこそ○め

○○○○○○○○○○○に○○○○む○○の○○○に○○○にけり

○○○○に○○○○○○○○○○○ば○○○○○○も○○じとぞおもふ

○○○○は○○も○○○ず○○○○○○○○の○○○○○のまに〳〵

○○○には○○○の○○も○○べきに○○○に○○る○○や○○○ん

○○○○○○○の○○○に○○○つ丶○○○○と・のみ○○の○○らん

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(去)ぬれや〇〇〇〇〇〇て〇〇〇〇なる〇〇〇の〇〇〇を〇〇〇〇ぬ。

〇〇〇〇〇〇〇れば〇〇ぞ〇〇〇ける(コジヤ)〇〇〇ば(タノバ)〇〇に〇〇〇〇〇むや(ウカ)

〇〇〇より(ヨリホカニ)〇〇〇て〇〇を〇〇〇めや(ウカヤ)〇〇〇〇〇と〇〇〇〇むかし(ウカサナ)

〇〇〇に〇〇〇〇べくも(ソウニハサテモ)〇〇ぬ(不)かな(コカナ)(ヤハノヤ)〇〇〇かるべき(ウアリソウナ)〇は〇〇〇つゝ(テソレナリニ)

〇〇ども(ケレドモ)〇〇の〇〇には(デハ)(詠)〇〇〇れで(レイデ)〇〇〇〇ごとに(毎)〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇し(ツノヤウニ)〇〇れば(ニヨツテ)〇〇〇〇も(ナドモ)(不)〇〇〇〇〇て〇〇〇べらなり(デアリソニ思ハル)・

〇〇〇〇も(トイヘ疋)〇〇は〇〇こそ(ナニヨリモ)〇〇〇けれ(コジヤ)〇〇〇む(ウ)〇〇を〇〇〇〇〇ば(ニヨツテ)

〇〇〇の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇の(ノヤウニ)(ヨセノノ)〇〇〇〇〇〇ぬ(不)〇にこそ(デナニヨリモ)ありけれ(ルコジヤ)

〇〇〇の〇〇〇の〇〇に〇〇〇〇る〇〇をか・〇〇の〇〇とみつらん(ダノデアロカ)

〇〇〇ぬ(去)〇〇(テシマウタ)や・〇〇の〇〇〇〇〇〇〇〇〇む(ウカ)〇〇の〇〇さに(デ)

〇〇〇〇〇〇〇〇の(疑)(ガ)〇〇になる〇〇をいかゞ(ドウマア)〇〇〇と〇〇〇ざるべき(ズニキラレウゾ)

〇〇〇ゆゑ(ニ)〇〇〇〇の(ザ)〇〇〇は(ナラバ)〇〇〇〇〇にや(ノニ)・〇〇〇〇〇む(ウカ)

〇〇ぬれば(ヤウニナルト)〇〇は〇〇〇に〇〇〇を(ジヤニ)〇〇〇〇ずも(ズニサテモ)〇〇〇〇かな(コカナ)

〇〇は〇〇〇〇にそ(ナニカシラズ)〇つる(タゾ)〇〇〇を〇〇なる(ナ)(詠)〇〇と(ジヤト)〇〇べかりけり(ハヅデアツタコジヤ)

○○○○を○○に○○と。や（イフ心デ）・疑○○○○の（ガ）○○にも○にも○○を○○○し（タノカ）去

○○○○を○○○○○つゝ（テソレナリニ）○○○むと（ウト思テ）○○ぞ（何カシラズ）○○○を○○○○○ぬる（ヤウニナル）

○○○○○○○○○○○○○○○○の（ガ）○○けん（タデアロウソノ）（中ノケン）○○を○○○○ぞ（ガナニカシラズ）　な　き（イゾ）

○○○○○○は○○にけり（テシマウタヿジヤ）○○○○の○○る○○○も（トイヘ𪜈）○○○○○○○

○○○○て○○○○○○の○○○むと（ウト思テ）○し（タノニ）去を○○○そ（ガナニカシラズ）○○○○にける（テシマウタヿジヤ）

○○○○の○○○○○○○○○○○む（ウ）○は○○れば（ニヨッテ）や・疑○○○しも（カギッテ）○る。（ノカ）

○○○○て○○○ぞ（ハナニカシラズ）○○き（イゾ）○○○○の○をば○○とや・○○○○○てん（テオカウカ）

○○○○に○○とや・（ヤハノヤ）○○の○○をみん（ヤウカヤ）○○○○○○の○○るばかりを（バッカリジヤニ）

○○○○○○○ざらめども（ヌデハアラウズレドモ）○○にけり（テシマウタヿジヤ）○○にし（テシマウタ）去○○○○○○○もがな（ナドモアッテホシイ）

○○○○み（サニ）○○に○○○の（ガ）○○○○は○○○も（ナドモ）○○ず○○ぞ（ガナニカシラズ）○○ける（ヿジヤ）

○○○○○○○の○○にや・疑○○○にし（テシマウタカ）○○とは○○ど（ケレド）○○よしもなき（手ガ・リナトモ　イゾ）

○○○○の○○は○○○に○○○れど（ルケレド）去○○の○○○を○○ぞ（ガナニカシラズ）○○しき（イ）

○○○○の○○に○○か・は・○○○○む（ウゾイ）○○○にだにも（デサヘモ）○○ぬ○○○を（ジヤニ）

○○○○は○○○○○○○○○れども（ケレドモ）○○○○○○ぞ（ナニカシラズ）○○は○○ける

○○○とて○○を○○○に○○けれは○○○○○○に○○○の○○

○○○○○○○とも（トイノヤウニモ）○○ぬ（不）○○○を○○か・○○○と○○○○けん（タデアロゾ）

○○○○に○○○○○にぞ（ナニカシラズ）○○○ぬる（テシマウタ）○○○○○をば○○に○○つゝ（テソレナリニ）

○○○○○○○○な・○○そ（ルコハオケ）○○○○に○○○る○をば○○ぬものから（ノクセニ）

○○○○の（ガ）○○○○○○に○○○るは（ノハ）○○の○○○や（ガ）○○○○るらん（ノデアロカ）

○○○○る○○の○○○を○○なれば（ジヤニヨツテ）いかゞ（ドウマア）○○る○○とみざらん（ズニヰラレウ）

○○○○に（疑）○○○○○○に○○○けん（タデアロゾ）○○○は○○も（ナドゼ）○○○ざりけり（ズニアルコジヤ）

○○○○○○○○○○○て○○○めり（オモムキジヤ）○○の○○とは（トイフコニハ）○○や（ガ）○○らん（デアロカ）

○○○○の○○○○○○や（ガ）○○○らん（デアロカ）○○○の○○に○○る○○○○

○○○○の○○○に○ば○○○の○○○○○と。か・（イツコデ）○○る○○。な（ガ）き。（イゾ）

○○○○の○○は○○れる（ツテアル）○○○の○（ノヤウニ）○○○の○○○○○○かな（デモアルコカナ）

○○○れど○○○○○○の○。や・（ハ）は・○る。（ヨセノヽカヤ）○○○を○○と○○○ばかりを（ジヤニ）

○○○○に○○○○○（去）し（タ）○なれば（ジヤニヨツテ）○○○○○とか・は・おもふ。（ゾイ）

○○○○○○し（モトヨリ）○○○○○○せば（ニシテミタラバ）○○る○○は○○○ざらまし（ズニアラウゾ）

○○○○る○○だに（デサヘ）○○ぬ（不）○○○○○○○○む（ヤウソノ）（中ノン）○○や・（疑）○○は○○○む（ウカ）

○○○○の○○○て○○る○○なれど（ジヤケレド）○○には○○ぬ（不）○○○とぞ（ナニカシラズ）○○

○○○○○○○○○やとて（カトオモフテ）（疑）○○○○ば○○○ぞ（ナニカシラズ）○○に○○ぬ（去）べらなる（テシマイソニ思ハル、）

○○○○○○○や・（詠）○○○の○○○○○○○○も（ナドモ）○○ぬ（不）○○も（詠）（ヲサテモ）○○かな（ヿカナ）

○○○○○○○○○○○○○○○○の（ノヤウニ）○○○ぞ（ナニカシラズ）○○を○○○○○てし（テオイタゾ）（去）

○○○○の○○○○○○に○○○○も（ヨセノヘトイヘ圧）○○ぞ（ガナニカシラズ）○○○の○○○なりける（デアルヿジヤ）

○○○○○○○に○○つゝ（テツレナリニ）○○○○の○○の○○○に（デ）○○を○○かな（ヿカナ）

○○○○○○○○とぞ（ナニカシラズ）おもふ○○にても（デモ）○○に○○○を○○○○○○○

○○○○は○○こそ（ナニヨリモ）ありけれ（ルヿジヤ）○○○○の○○○ぬ（不）○○も（ナドモ）○○○かりけり（ウアルヿジヤ）

○○○○○○○か・（カハノカ）○○○○○○て○む（ウゾイ）○○○のみこそ（バッカリガナニヨリモ）○○○なりけれ（デアルヿジヤ）

○○○にもあらぬ（デモナイ）○○○の○○○○は（ノハ）○○○を○に○○るなりけり（ノデアルヿジヤ）

○○○○○○○○に○○を○○しより（タカラ）（去）○○○○にのみ（バッカリ）○○○○かな（ヿカナ）

○○○○は○○○○○○に○○○○の（ノヤウニ）（ヨセノ・）○○に○○つゝ（テツレナリニ）○○○○るかな（ヿカナ）

○○○○を○○○○○○に○○○○て○○ずは（ヌナラバ）○○を○○○○こさん（ウソ）

○○○○い○○の○○○に○○ぞ○○○○○○○なる○を○○とて

○○○○○○○○○○て○○○○○と○○○らめや(デアロウヤ)○○し(バモトヨリ)○○ずは(スナラバ)

○○○○○○○をや・(疑)○○○○○○○○○とは○○○(ヤハノヤ)とは○○○む(ウカ)

○○○○○○○の○○○の○○○○○○○○○も(ナドモ)○を○ぬ(不)○はなし(イ)

○○○○は○○○○○に○○ぬらし(テシマウタヿソウナ)○○○○ども(ケレドモ)○○○もなし(イハ)

○○○○○○○の○○○○○○ぬ(不)○はあれども(ルケレドモ)○を○ぬ○はなし(イヅ)

○○○○○○○や・(詠)○○○の○○○○の(ノヤウニ)(ヨセノ、)○○とも(トイフヿモ)○ぬ(不)○○も(ヲサテモ)○かな(ヿカナ)

○○○○の○○○○○○の○○○○て○○○○○○を。(ナニカシラズ)(不)○ぞ・(詠)○○つる(タゾ)

○○○○○○○○○○○○○○○○の○には○じ。(マイヅ)○(タトヘ)○は○○とも(トイフテモ)

○○○○の○○にも○は○てふを(トイフノニ)など(ナゼニ)○○○の(ガ)○○○とも(トイフヿモ)○。(ヿゾ)

○○○○み(サニ)○○○○○○の(ノヤウニ)(ヨセノ、)○○にのみ(バッカリ)○○○て○○む。(ウゾ)○○は○○とも(トイフテモ)

○○○○○○○の○○の○○○○○○○ばこそ(ニヨッテ)あれ(ソウハアレ)(タトヘ)○○○○ものを(ジヤニ)

○○○○○○○○ば○し(シイニヨッテ)○○○○の○○○○○○の(ノヤウニ)(ヨセノ、)○○に○○なん(テシマハウ)(去)

○○○○の○○に○○○○○○の(ノヤウニ)(ヨセノ、)○○にや・○○む(ウカ)○○○○み(サニ)

○○○の○○○○○○○○○ごとや○に○○つゝ○○○○○○○る。
○○○れば○○に○○○る○○○○のいつまで○○○○○○○○む
○○○じと。○○○○○○に○し○○○○は○○○ぞ○○にけらしも
○○○てふ○○だになくは○○かは○○の○○○の○○○○にせん
○○○には○○○○○○ぞ○○にける○○○○○○○○○○○ものを
○○○は○○○○らめや○○○○の○○○のみこそ○○ば○○。らめ
○○○の○○○○○○○○○○とも○○○○らめや○○○なしに
○○○○○○○○やなぞと○○○の○○○けれども○○○○の○○
。○○○とも。○○とも○○む○○なれや○○○も○○○○○る○○○○
○○○○を○○な○○○そ○○○○の○○の○○○に○○○○○ぞ
○○○○に○○○る○○の○○なれや○○○○○○を○○○○○つる
○○○○の○○の○○○○○○○○て○○○とのみや○○○○○む
○○○○○なに○○○を○○○けん○○○○○の○○○なりけり
○○しあれば○○にも○○は○○にけり○○○し○○ば○○ざらめやは

○○○○○○○○○○○の(ヨセノ、)○○にのみ○○て○○○の○る○なりけり
○○○○る○○し(ガヱトヨリ)○○れば(ニヨツテ)○○○○の○○○○○○て○○のみぞ(バツカリトニカシラズ)○○
○○○○○○○○○○○になる○○は○○○○○○ぞ(ナニカシラズ)○○は○○しき(イゾ)
○○○○に○○○○○○む(ウツノ)(中ノン)○○もなし(ナドモ)(イゾ)○(疑挿)○○○し(タ)(去)○か・(疑)○○に○○けん(タデアロゾ)
○○○○に○○○を○○る○○ならば○○は○○○ぞ(ナニカシラス)○○べかりける(ソウニアルヿジヤ)
○○○○も(トイヘド)○○○○○○を(ジヤニ)○○○して(ニヰテ)いざ(ドリヤ)○○○○む(ヤウ)○○や・(疑)○○ると(ルカト)
○○○れば(ルト)○○○○ものを(ジヤニ)○○○○○○○○てふ(トイフ)○○たれに○○○ん(ウゾ)
○○○にも(ナドモ)○○○○(去)なゝん(テシマウテクレイ)(訛)○○○○に○○○○○○を○○とおもはん(ウホドニ)
○○○○○○○を○○とて(トイフテ)○○○○の○○○○○まで(クラヰニ)○○○つる(タ)かな(ヿカナ)
○○○○に○○○○○よりも(ソレヨリモ)○○○は(ノハ)○○○○○○○を○○なりけり(ノデアルヿジヤ)
○○○○○○○○は○○に○○○○ば(ニヨツテ)や・(疑)(ノカ)○○○○○○だに(ノデサヘ)○○○らん(デアロカ)
○○○○る○○○○○○に○○や。(疑)○る。○○○○○○○に○○○の○○
○○○○に○○○む(ウ)(中ノン)○○を○○○つゝ(テツレナリニ)○○○る○○は○○○○もなし(ガサテモ)(イゾ)
○○○○と(テ)○○○○ならし(テアルヿソウナ)○○○○の○○は○○○に○○に○○つゝ(テツレナリニ)

○○○○○○○○○○○る○○○には(デ)○○も(ナトモ)○○○に○○ずぞありける(ナニカシラズアルヿジヤ)

○○○○にあらぬ(デアリモセヌ)○○○のなそも(ガナニジヤノサテモ)○○○○○の○○に○○て○○らん(デアロヿハ)

○○○○の○○と○る○の○○○○は(ノハ)○○○て○○に○○○なりけり(ノデアルヿジヤ)

○○○○に○○○○○せば(ニシテミタラバ)○○○○の○○○の○○に○○○○ましを(ウモノジヤニ)

○○○にも○○ぬ○○○の(ノヤウニ ヨセノ、)○○○○に○○○てのみや。(ハツカリ)○○○○なん(テシマハウカ)

○○○○の○○○○○○の○○○○の○○ず(ヌ)や(カ)〔疑〕○○を○○○○むとは(ウト云ヿハ)

○○○○○○○○を○○に○○○○る○○の○○こそ(ハ何ヨリモ)○○○なりけれ(デアルヿジヤ)

○○○○の○○も(ナドモ)○○○〔不〕ぬ○○○○の(ノヤウニ ヨセノ、)○○○○○○を○○は○○なん(テクレイ)〔訛〕

○○○○の○○○○○○も(ナドモ)○○○○○○○や(ガ)〔疑〕○○○○○のみ(チバツカリ)○○らん(デアロカ)

○○○○○○○に○○○る○○○○○○○〔不〕で(ズニ)○○○に○○○こそ(何ヨリモ)すれ

○○○○の○○は○○○る。(ノハ)○○なれ(ジヤニヨッテ)や。○○○○○○を○○○の○○。(ノカ)

○○○○て○○○む(ウ)○○に(デ)○○○○の(ガ)○○○〔不〕ぬ○○は○○じ(マイ)とぞ思ふ(何カシラズ)

○○○○○○○ものにもが(デナドモアッテホシイ)(ガナノガ)○○○○は○○○○○○と○○に○○○む(ウホドニ)

○○にして(デ)○○れば(ルト)○○し(シイ)○○○○の(ノヤウニ)○○○○○○に○○○○○てん(テミナツ)

○○○○ば○○る○○○の(ヨセノ、)○○○○○○○○○○○は○○に○○なん(哉)

○○○○ば○○の(ガ)○○○○○○○○○○○は○○○の(ガナニヨリモ)。○○こそ○○れ

○○○○の○を○○○○に○○○○も(ナドモ)○○○○○○に○○てなりけり(デアルヿジヤ)

○○○れば○○○○○○○○○○○に○○の○○さへ(マデガ)○○○○つゝ(テツレナリニ)

○○とても(ジヤト云テ)○○○○○ずは(ヌヿハ)○○○ども○○の○○○は○○○かりけり(ウアルヿジヤ)

○○○○○○○こそ(何ヨリモ)○○を○○ざらめ(ズニキヤウズレ)○○か(カハノカ)○○○に○○○しもせん(ニカギツテハ ウソイ)

○○○○の○○○を○○○○○○○の○○○○○にも(デモ)○○や(ガ)○○○る(レルカ)

○○○○の○○れば○○に○○○つゝ(テツレナリニ)○○○○○○の○○○○○かな(ヿカナ)

○○○○の○○○○○○○○る○○の(ノヤウニ)○○とか(疑)○○む(ウカ)○○の(ガ)○○○に(ノデ)

○○○つゝ(テツレナリニ)○○ば(ニヨツテ。)つ(ママ)○○の(カ)○○つらん(タノデアロカ)(ヨセノ、)○○○○○せば(ニメミタラバ)○○○○ましを(ウノニ)

○○○○に○○○○○○を○○しより(去)(タカラ)○○てふ○○は○○○○○　て　き(テオイタヿデゴザル)

○○○○て○○○○○○は○○○○の○○の○○○を○○○てそ(ナニカシラズ)○　る

○○○○の○○○○ければ(イニヨツテ)○○○○○○○をぞ(ナニカシラズ)○○○○○る○○に

○○○ども(ケレドモ)○○に○○○ぬ(不)○○○○は○○○○○○の○○○なりけり(デアルヿジヤ)

○○○なる（ナ）○○○ぞ（ナニカシラズ）○○に○○は○○○○は○○○ず（ヌゾ）○○○○なれば（ジヤニヨツテ）
○○○○て○○○る○○に○○○○○○○の○○○は○○○ならなん（デアツテクレイ）
○○○○の○○○○る○○○○さへ（マデ）や。○○の○○○○○○○○○らん（デアロカ）
○○○○は○○○○○○の○○なれ、や（ジヤ、ラ疑）○○○○○れど（ルケレド）○○○○の（ガ）○○
○○○○も（トイヘ𪜈）○○○○○○る○○○○に○○○○○れる（ツテアル）○○も（ヲサテモ）詠○○かな（ヿカナ）
○○○れば○○○よりけに（ソレヨリモカクベツニ）○○○ども（ケレドモ）○○○○○ばや（ニヨツテ）。○○の（ガ）○○○○。（カ）
○○○○の○○の○○○に○○○○の（ノヤウニ・ヨセノ・）○○○○○てぞ（ナニカシラズ疑）○○○かりける
○○○○に○○○○○○の（ノヤウニ・ヨセノ・）○○○○て○○に○○○不ぬ○○も（ヲサテモ）詠○○かな（ヿカナ）
○○○○○○○○○○○の（ノヤウニ・ヨセノ、）○○○○に○○て○○○○○○に（デサテモ）詠もあるかな（ヿカナ）
○○○○る○○○の（ガ）○○に○○ぬれは（ルヤウニナルニヨツテ）○○○○○○○とぞ（ナニカシラズ）○○は○○ける（ダヿジヤ）
○○○○○○○も（ナドモ）や。すると（カト）○○○○に○○○○○○○○○○○○なん（テクレイ）詠
○○ぬれば（テシマウタニヨツテ）○○て○○○む（ウ）とおもへども（ウケレドモ）○○てふ（トイフ）○○ぞ（ガナニカシラズ）○○○○○なる（ナゾ）
○○○○も（サテモ）○ても○○ても○○○○か（ヿカナ）○○○を○○○○○は○○○む（ウ）
○○○○に（ノテ）詠○○て○○○○○○○なば（テシマウタラバ）○○○○○○の（ガ）○にや○○○む（ウカ）

○○○○る○○○し○○は○○○○○○○の○○○は○○○○なまし

○○○○に○○○てぞ(ナニカシラズ)○○○○○○○○○も(トイヘル)○○○ぬ(ザ 不)○○○なりけり(デハアルヿジヤナゾ)

○○○にも○○や(ガ)○○らん(デアロカ)○○○○○○○○る○○の○○て○○○ぬ(ヌノハ)

○○○○て○○に(デ)も(モ)○○を○○る○は○○○の○○ぞ(ガナニカシラズ)○○○かりける(ウアルヿジヤ)

○○○○の○○○なりせば(デアルニシテミタラバ)○○○○○○○○に○○は○○○ざらまし(ズニヰヤウゾ)

○○○○て○○にしかども(テシマウタケレドモ)(去)○○○○に(デ)○○にし(テシマウタ)(去)○○と(ジヤト)○○ば(タラバ)○○○む(ウヅ)

○○○○○○○や(ガ)(疑)○○しき(イニヨッテ)○○○○○○○○○○○○○○○○○らん(デアロカ)

○○○○○○○○を(ガ)○○み(サニ)○○○○○○○○○○なる(ナ)○○も(ヲサテモ)○○かな(ヿカナ)

○○○○の○○○○○○○○○○には(デハ)○○○の○○も(ナドモ)○○○○なくに(ウカヤ)

○○のごと(ト同シヤウニ)(如)○に○○ては○○○ども(ケレドモ)○○のみこそ(バッカリナニヨリモ)○に(デ)○○○○○○れ

○○なれば(ジヤニヨッテ)○○○○○まで(クラヰニ)○○○に○○○○○めや(ウカヤ)○○○○○○○は

○○○○に○○○て○○る○○○○の(ノヤウニ)○○○に○○を○○○○○かな(デモアルヿカナ)

○○○して(デ)○○を○○○ば○○○○の(ヨセノ、)○○○の(ノヤウニ)○○と○○○○の(ガ)○○。(ヿヨ)

○○○○○○○○は○○に(テハ)○○○ども(ケレドモ)○○○にのみも(ヨセノ、デバッカリサテモ)(詠)○○○○○かな(ヿカナ)

○○○○に○○○○○の○○にさへ（マデナゼニ）。○○○○○○の（ガ）○○○かるらん（ウアルデアロゾ）

○○○○は○○○の○○の○○○○○○○○○にのみ（デバツカリ）○○○○かな（片ヒヽキ、ヿカナ）

○○ならぬ（デハアリモセヌ）○○○を○○に○○○○て○○○○ごとに（毎）○○○○ぞ○○（ガナニカンラズ）

○○○○○○○○の○○の○○○○○。（タトヘ）○○○○○とも（トイフテモ）○○は○○○じ（マイ）

○○○○の○○は○○れる（ツテアルノハ）○○なれや（ジヤニヨツテ•）○○に（デ）○○○て○○○○○らん（デアロカ）

○○○○に○○○○○○ぬ（不）○○○○の（ノヤウニ、ヨセノ、）○○たる（テアル）○○も（ヲサテモ、詠）○○は○○かな（ヿカナ）

○○○○に○○て○○○る○○○○○○○て○○○ぬ（不）○○○○も（ナドモ）○○

○○○○の○○の○○○○○○○○になにしか（ナニシニ其ヤウニ•）○○を○○○○○けん（タデアロゾ）

○○○○の○○○の○○に○○はあれど（アルケレド）○○を○○○は○○ずぞありける（ナニカシラズアルヿジヤ）

○○○○て○○ぬ（不）○○○は○○ながら（ナリニ）○○の○○○は○○○○けり（ヿジヤ）

○○○○は○○ぬ（不）○○○にあらなくに（デハアリモセヌノニ）○○○○○○ぞ（ハナニカシラズ）○○○かりける（ウアルヿジヤ、ヿデハアルゾ）

○○○○の（ノヤウニ）○○○つゝ（テソレナリニ）○○○○○には（デハ）○○○のみこそ（バツカリナニヨリモ）○○○○けれ（ヿジヤ）

○○○○と（ヨセノ、云ヤウニ）。○○し（タ、去）○○○も（トイヘド）○○○れば（ニヨツテ）○○○○○○に（ノヤウニ、ヨセノニ）○○○にけり（テシマウタヿヂヤ）

○○○○をなにか（ナントシテ•）○○けん（タデアロゾ）○○○○○○○も○○○に（デ）○○ぬへらなり（テシマイツニ思ハル•）

○○○○ば○○に○○○る○○○○の○○て○○○○○○○○○○か（疑ノカ ヤウカ）

○○○○に○○○を○○る○○ならば○○○○○○も（トイヘ𪜈）○○○とや・みん

○○○○ば○○○は○○じ（マイ）○○○○の○○○○○○と○○は○○とも（トテモ）

○○○○で（ズニ）○○○○にけり（テシマウタヿジヤ）○○○○○○○○○○○は○こそ（ナニヨリモ）○○○ね（不ノ子）

○○○○○○○○のみこそ（バッカリハナニヨリモ）○○○けれ（ヿジヤ）○○○○○をば○○のみぞ（バッカリナニカシラズ）○○

○○○○て○○ぬ（不）ばかりぞ（バッカリジヤゾ）○○○○○○○に（デ）○○○て○○しき（イ）ものを（ジヤニ）

○○をのみ（バッカリ）○○○○に○し○○なれは（ジヤニヨツテ）○○○○○○○○○るなりけり（ノデアツタヿジヤ）

○○○にも○○○て○○○○○ものは○○○○○○の（ガ）○○るなりけり（ノデアルヿジヤ）

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○こそ（ハナニヨリモ）○○れ（ルヿジヤ）○○の○○○は

○○○○は○○○も（ナドモ）○○ず○○もなし・（ナドモ イ ダ）○○を○○○と（ジヤト）○○ばかりぞ（バッカリジヤゾ）

○○のみぞ（バッカリナニカシラズ）○○○かりける（ウアルヿデハアルゾ）○○○○も（トイヘ𪜈）○○（不）で（ズニ）○○○る○○し（ガモトヨリ）○○れは（ニヨツテ）

○○は○○○○○○ましを（ウ ノニ）○○○むと（ウトイフテ）○○○（去）し（タ）○○ぞ（ガナニカシラズ）○○○なりける（デアルヿジヤ）

○○○つゝ（テソレナリニ）○○で（ズニ）○○る○○○○○に○○（不）ぬ○○○を○○は○○（訛）なん（テクレイ）

○○○・や・は・（ハ）なにぞは（ナンジヤゾソレハ）○○の（ノヤウナ・ヨセノ・）○○○○を（ジヤニ）○○にし（サヘ）○○ば（ルナラ）○○○○なくに（ウカヤ）

○○も(ナドモ)○ず○も(ナドモ)○で(ズニ)○○を○○○ては。(又)○○の○○とて(トイノテハ)○○○○○○つ(タ)

○○○の○○○に(デ不)○○る○○○○○○○のみ(バッカリ)○○て○○○○もなし(ガサテモイヅ)

○○みこそ(サニナニヨリモ)○○は○○らめ(デアロズレ)○○○○○さへ(マデガ)○○○と○○ば(タラバ)○○○む(ウ)

○○○○み(サニ)○○こそ(ナニヨリモ)○○○○○つれ(タレ)○○は○○○○と○○にき(テシマウタゾ)

○○○○に○○ては・(又)○○るものゆゑに(ノクセニ)○○○○さに○○○○つゝ(テソレナリニ)

○○○の(ガ)○○○○○と(ト同シヤウニ)○○(去)なば(テシマウタラバ)○○さへ(マデガ)○○に○○へきもの(ソウナ)を(ジヤニ)

○○○○に(デ)○○○(去)し(タ)○○の○○よりも○○○○○ぞ(ハナニカシラズ)○○○○ける(ヿジヤ)

○○○○○○○○を○○と○○ねばや(ヌニヨッテ)・○○(去不)なで(テモシマハイデ)○○の(ガ)○○○○○る(ルカ)

○○ずして(ズニサテ)○○○○(去)なば(テシマウタラバ)○○○の(ノヤウニ)(疑)○○○や・○○を○○○と思はん(ウカ)

○○○の○○○○○(去)し(タ)○○○より(カラ)(ヨセノ、)○○○○(疑)ばかり(ホド)○○○○はなし(イヅ)

○○○の○○○にし(モトヨリ)○○○○なれは(ジヤニヨッテ)○○○てのみ(バッカリ)ぞ(ナニカシラズ)○○○○ける(ヿジヤ)

○○○より(カラ)○○に○○○○○○なれや(ジヤニヨッテ)・○○○○○に○○○○らん(ノデアロカ)

○○○に○○と○○なる(ワイソノ中ノナル)○○○○○○○○ては○○○かりけり(ウアルヿシヤ)

○○○て○○○○の○○○○○○で(ズニ)○○む(ウヤウナ)○○ならなくに(デハナイノニ)

○○は○○○は○○○の○○ければ○○も○○も○○とを（思ふ）○ん

○○○に○○○○○は○○ぬべし（テシマイツナ）（去）○○○○ぬ（スツノ）（中ノヌ）○にし（モトヨリ）○○○ば（ニヨッテ）

○○○ぬ（不）○○○○の○○○は○○○○に○○も（ナドモ）○なゝん（テシマウテクレイ）（去）（誂）

○○○れど（ルケレド）（不）○○しき（イ）○○は○○○の○○より（カラ）○○の（ノヤウニ）○○てこそ（ナニヨリモ）○○

○○○○て○○に○○○ぞ（ハナニカシラズ）○○○の○○○○○○は（ミセノ）（ママ）○○ずもあらなん（ズニナドモアツテクレイ）（誂）

○○○も（トイヘド）○○○なりけり（デハアルコシヤ）（カクス打合）○○○○ば○○○○○○○○ぬるものを（テシマウ）（ツヤニ）

○○○と も（ナドモ）○○○（ナニカシラズ）ぞはてぬ（ヌカレヌコジヤ）○○○より（カラ）○○○からの（カラオコツテノ）○○○なれば（ジヤニヨッテ）

○○○の○○○○と○○○ば○○○○○○○○ぞ（ナニカシラズ）○○しき（イ）

○○ぬとて（テシマウトイフテ）（去）○○る○○には（デハ）○○○て○○も（ナドモ）○○○も（ナドモ）○○○○○つゝ（テソレナリニ）

○○ぬとて（去）（テシマウトイノテ）○○の○○○。（ガ）○○からになど（トイフトハヤ）（ナゾニ）○○○ぬ○○○○○らん（デアロゾ）

○○○の○○○を（ガ）○○み（サニ）○○ぞ（ハナニカシラズ）○○○○○○○に○○○○つる（タゾ）

○○○○○○○か（疑）○○○か（疑）○○○の○○て○○○し（去）（タ）○○○○の○○

○○○○○○ば（タンバ）○○○○○○ぬべみ（テシマイソナニヨッテ）○○○○しを（去）（ダノニ）。○○（ヤツハリ）けんかも（ダデアロカサテモ）

○○、は（ニカギッテハ）しも○○けん（ダデアロウソノ）（中ノケン）○○も○（トイヘド）はざりつ（ナンダガ）○○○○ぞ（ハナニカシラズ）○○て○○しき（イゾ）

○○○○の○○を（ガ）○○○み（サニ）○○○○ば（デミレバ）○○○○○にも（サテモ）〔詠〕○○○○るかな（ヿカナ）

○○や（ガ）〔疑〕○し（タカ）〔去〕○○や（ガ）〔疑〕○○けん（タデアロカ）○○○○ず（ヌゾ）○○か〔疑〕○○○か〔同上〕○○か〔同上〕○○○か〔同上〕

○○○○○○○○の○○に（デ）○○○にき（テシマウタヿデゴザル）○○○○○と（云ヿ）。は○○○○○○よ〔訛〕

○○○○の○○の○○○は○○○なる（ナソノ）〔中ノナル〕○○に○○○も（ナトモ）○○○ざりけり（ズニアルヿデハアルゾ）

○○○○て○○○○○○る○○○○に○○ずも（スニサテモ）〔詠〕○○を○○○つる（タ）かな（ヿカナ）

○○○○も（ナドモ）○○○も（ナドモ）○○じ（マイ）○○○○○○○とも（ナドモ）○○な○○き（タゾ）とも（ナドモ）○じ（マイ）

○○○○○○○の○○○○○○○○れば（レタラバ）○〔疑挿〕○○○む（ウ）と。か（禁ノ心デ）•○○○○けん（タデアロゾ）

。（タトヘ）○○○○○○○の○○は○○○とも○○の○○には○○じ（マイ）とそ（ナニカシラズ）おもふ

○○○○は（ナラバ）○○にを（ソチハ）○○○○○○○の○○○の○○○○○○○なゆめ（ルヿハカマヘテオケ）

○○○○○○○○て（アツラヘ）○○ば（タラバ）○○○○み（サニ）○○○○○○の○○○○つゝ（テソレナリニ）

○○○○○○○○○○○○○○○○ばたれ（タラバ）に○○○て○○○○○む（ウゾ）

○○○○る○○○に（デ）○○の（ガ）○○○なば（テシマウタラバ）○○○がてら（ニ）○○こそは（ナニヨリモソレハ）○め（ウズレ）

○○○にはさもこそ（デハサウナドモナニヨリモ）○○め（ウズレ）○○にさへ（マデ）○○○を○○と○○か（ノガ）○○○さ（イヿヤ）

○○○○○○○○の○○に○○も（ナドモ）○む（ウ）○○○をさへに（マデニハ）○○は○○○じ（マイホドニ）

○○○には○○も○○○す○○○ども○○○に○○○○ごとはあらず

○○○ども（ケレドモ）○○○○○○の（ガ）○○けれは（イヿジヤニヨツテ・）○○○なが（ナリニ）らえこそ（ドウモナニヨリモ）（如）○○ね（ズソ）

○○○○の○○○○○○をなにし（ナニシニソノヤウニ•）かも（サテモ）○○○○○○の（ガ）○○○○○らん（デアロゾ）

○○○○の○○には○○じ（マイ）。○（タトヘ）○○○の○○に○○○て○○は○○とも（トイフテモ）

○○○○に○○○○○○の○○○○○○○に○○○と。○（イフヿチ）○に○○○な（禁）

○○○○に○○○○○○の○○○○み（サニ）○○は○○とも（トイフテモ）○○に○○めや（ウカヤ）

○○○○の○○○の○○の○○にだ（デ）に（モ）○○の（ガ）○○べく（ソウニ）○○○めかも（ヤウカヤサテモ）

○○○○の○○○○○○を（ガ）○○○○み（サニ）○○○の○○に（テ）○○をこそ（ナニヨリモ）○○

○○○○の○○○とも（ナドモ）○じ（マイ）○○○○み（サニ）○○○て○○に○○む（ウ）とおもへば（フニヨツテ）

○○にのみ（デバツカリ）○○れば○○し（シイ）○○○○○○○て○○○む（ウホドニ）○○な•○○○そ（ルヿハオケ）

○○○○を○○○○○ては○○○○の○○○○○○の○○○○（去）ぬべし（テシマイソナ）

○○○○は○○○も（ナドモ）○○○○○○（去）なん（テシマハウ）○を○○○○に○○○○○○し（イヿヨ）

○○○より（ヨリホカニ）○○○○○○も（ナドモ）○○○○を○○○○あへず（テヰルマガナウテ）○○○つ（タ）るかな（ヿカナ）

○○○○ば○○○○○○の○○なれや（ジヤヽラ）○○○○○○て○○（去）ぬべらなり（テシマイソエオモハル・）

和歌いれひも

○○に○○○○○○○○の○○○○み○○○とすれど○○○○にけり
○○○○は○○○○ばかり○○○○は○○○の○○の○○○○のごと
○○○の○○にし○○○○○○○に○○○○○とも○○○○○めや
○○により○○○は○○に○○○○○○にも○にも○○○○にけり
○○といへば○○○○○○で○しものを。○○○○○○の○○に○○らん
○○○○に○○○○にけり○○○○を○○とや・○○む○○○とや・○む

寛政七年乙卯五月

皇都書肆

京極通五條上ル町

葛西市郎兵衛

# 歌道解醒

# 歌道解醒

一夜のみたる酒は一日にもさめ三夜のめるは一日にはさめかたし此千歳ちかく酔たる人ゝなれは一時にさまさむ事いとも〳〵かたき事とは存候へとも此酔をはまつさまさせ申さす候ては美肉も咽喉をくたらすたとへくらふとも味を弁へさるへけれは今涼風をまいらするにて候此千歳の酔と申すは紀貫之か古今(集)の部立の事なり涼風と申すは速須佐之男命の御をしへをのこし給ひし哥道の本意の事也そも〳〵哥道の肝要をいかにといふに凡言行にいたせは禍に(かゝ)なり心中に忍へは病ともなりぬへき事ある時それをなくさめてその禍を除かんか(ナシ)爲なりこれを要と心えて詠哥する時は内(に)。欝する情なく外言行つゝしまれてまことに無上の良薬也されは言行かとみれは哥あり哥あるかとみれは不言也いはすしてしかもいひいひてしかもいはさるは即天神の御心に合するか故に人力のあたはさる不思議の福をは得る事あるにて候されと此理容易に聞えかたき事なれは成元これまて人にかたれとも有力の人はおのれか持たる棒にうたれて成元をそしり無力の人はそらに聞て信せすこれいはゆる三日のみたる酒のさめかたきにて候成元か日夜のなけき唯此ひとつにとゝまれり人みな信せすして或

はうとみ或は譏るをもこりすして猶閉口せぬは物にくるへるかことくに候へとも　神は御身を隱して萬物をあはれみ給ひ佛は菩薩道を行して衆生の憂惱をすくひ給ふ成元かいふかひなき身を神佛に比し候にあらす候へとも一升の糧をたに貯へかねて活計をくるしめる人に百斛の糧をあたへむとていとゝ口さかなさのまさりゆくにて候今哥道の禍を除く良藥なる理比喩をもつて申すへしある人清淨なる事を好みて家のうちをつねにはらふに隈ゝ（には）。猶塵垢ありて一日片時も潔き事をえすしてよるひるこれをわひたりその友そのあるしの心をあはれみてをしへていはくそのくま／＼までも塵埃をのこさしとおもはゝいつかたにもあれ一處その塵埃の捨處をさため置てつねにその所へのみ塵埃を捨られなは家のうちは心のことく清潔ならむといふにあるしよろこひて後園のかくれに捨所（處）を定めてつねにそこにのみ塵埃をすてけれはつひに家のうちのくま／＼まて清淨をえたるかことし學者なといひていかめしく思へる人はことに此理をえ弁へすして哥道の妙法なる事をしらすかの命の御恩をも弁へさる也學生もまなひいたれは此理は知るへし不學の人はかへりてたのむ所の理なきか故に今此比喩とく心えらるへしたゝ／＼哥道の人身に妙藥なる事をよく弁へて哥もよむへき也成元かねて十四五歳の比より哥をよみならひ候うち哥たゝ一首にて天地鬼神の感動する道理甚不審に存し候故さま／＼心をくたきて考へ候へともとにかくに功勞のつもりたるかいたす處にこそとのみ存て候

ひきしかるに年月をつみて次第に哥數をもよみ古哥をも多く見あつめ候に貫之は・へありとほしをはとよみて馬のあしたち能因は・へ（ナシ）なはしろ水にとよみて雨ふりしかといつれも秀逸ともおもはれすかのいにしへのへあさくは人をとよみて葛城王のいかりとけへよはにや君かとよみて高安のさとへの二心やみたりしこれらは實に名哥といふへくしてこれにくらふれはかれは難すへき所ある哥とも也されとも名たゝる貫之能因なれは・へ（ナシ）あかても人に・へ（ナシ）あるかなきかの・へ（ナシ）いりあひのかねに・へ（ナシ）あしのかれ葉になといふ秀逸はあるをなとさやうに難ある哥にして感動の妙用はありけん不審せてかなはぬ事ならすや かのへありとほしをはへなはしろ水にの二首もさしもの貫之能因なれは妙なる事こそあるらめと名におちたる人ゝはおもふへけれと哥のうへの善惡をこまかに論する時は無上の出來とはいひかたき也この事はこゝにいへはかへりて今いふ所の意趣に混すれはきかまほしからん人はまのあたり申（す）。へしこれは亡父かたてたりし五級をくはしく心うれはをしへをまたすして難ある事はしられ申へきにて候 しからは哥は難なく難あるにかゝはらす功者不功者にかゝはらすして別に天神に感通すへき所はあるへき事明らかには候はすやされともかの教外別傳なといふ心にはあらて哥よまては感通の路もなきことなれは不立文字とかたつけて一向に哥よまぬもかたは也しかりとて又哥とゝのふる事にのみうちかゝりて鼻油をつけむくの葉にてみかきて別に妙處ある事をもしらさるもかたは也稽古と修行をかねてこそ感通の道理けにもとしられ申へきにて候へ成元はしめは頓阿慶運か徒をしたひてよみならひしに感動の道とほきをしりそれより次第にまなひのほりて爲家卿のさかひより俊成卿西行清輔かあたりをうかゝひ猶俊頼基

俊能因長能等かかきねを過てつひに躬恒貫之かいほりをとひ候ひしにこゝこそむかし今ともになかるゝ事なく質に過す文に過す花實相兼たる境なるへしとおもひなり候ひて多年か間三代集を的としてよみならひ候ひきされ共人丸赤人を聖としも申す事いまたその故をさとりえす候ひしかはたゝ明くれにみる物には萬葉集そのほか猶ふるく國史の哥ともを心をいれて見候ひしにはしめは考へすぎ（き）てさま〳〵入りすぐしたる事ども（と）を思ひよせて候ひしかわか身の實況にあはせ試み次第にくるしみをつみてつひにその山上より平地に出ていひ（候）しかば無上と存たりし三代集は雨後の桃李を見るかことくおもひなされぬさらは世に萬葉体なといひてよむ人ゝの等類かとおほしめさむなれと成元か萬葉を貴ひ候はさらに〳〵すかた詞の事には候はす嫌はむ人は今のよの姿によむとも感動の路ふたかるにはあらねは姿の新古をあらそふかこときいやしきつとめにては候はす下文にいたりて弁し候へし（成元等ことさらにこひねかはされとも詞おのつからふるき世のつかひやうとなりふるき世の詞ともをもつかひ候は義の正しきとよみ處の愼ふかきをまなふか故也）萬葉集をはいにしへより心をいれし人ゝ仙覺律師をはしめとして契沖眞淵かともから也されとこれは哥の表又は事實の相違を正すいとなみを出す上古の哥の言靈に解釈のをよべる人いまたなしたゝ我國ふりはありのまゝにしてかくれたる事あるやうに思ふはから人の心のくせ也なと得手にいひなしてひたすら表をのみ正すを詮とせられしはをしむへき哉かれらか中にて言靈に眼をよひなは成元等はねふりなからにとそ感通の道

はえめされと表においてはこれらの思によりてさらに骨を折候にも及はす十に一二はその穿鑿のを
よばざりし所〻あるはかり也されともかれらか垣外の事としてしかも肝要なる所あるか故に年來萬
葉集に心をくたきたるにては候へかくのことく古人の哥よみたりし道はわきまへ候へともその法に
よりてみつからよみ試み人にもみせてその人心(ナシ)(ヒト)に受る様子をも證知せされはひろく世にいひつよく
人にをしふへき事ならすと猶私あらむ事をかへりみ候てかの古人の法をふかく心中にをさめてよみ
試み候に表にいさゝかさはる事なきか故にさる法によりてよむそとは一人もしる人なく候ひしかと
感通をもえたりし事いくたひも候ひき猶そのうちにも國史中の哥とも又は萬葉集等こまかに法を正
し候にいよ〳〵(か)決定せられて候也体の新古はさしおき成元か申す哥道は哥をよくよむはかりの事に
あらすよまて叶はぬ時ありてよむ物そとのみ人にをしへ候をある志たかき人聞てそしれるよしをつ
たへ聞たりまして志ありともみぬ人は譏る人數をしらすうけ給りぬされと成元は古哥に徵し自哥に
試み人情におしわたしたる事に候へはさらに譏をわふる心も候はすまけしたましひも候はすもとよ
り其人〻の咎にはあらて千歳近き病にをかされたるなれはたゝさやうに思はむ人は成元をよひよせ
てたに詰問し給へかし來りても論せられ候へかし千歳の夢をおとろかし。(て)無益のかたに費さむ力を
まことの筋に入れさせんものをと存候へともたゝ物蔭にてそしる人のみありてまのあたり詰問する

人もなきは口をしき事に候そも〳〵此千歳ちかく感動の道を塞き世に此道の惑をはしめられし人は紀貫之そのたねとなれる物は古今集の部立也これを聞誤るへからす貫之も時にあたりてよまれたる哥ともはいにしへの道にその法たかはすして感動ありきその余の題詠とも古の法にたかへる事をはしめられて千歳のまとひとなりたるを云也古今集の事もはしめて部立をせられしを咎むる也その一集の哥をおしといふにあらす古今時代よりふるき世の哥とも丶多く加へられ當時の哥も法正しきも多けれはさらに古今集をは難するにあらすたゝその部立が貫之の見識より出たる事とみえてこれより此かた題詠さかりになりたるをとかむる也猶くはしくは下文をみて返〻心えたかふへからぬ事也貫之と申し古今集と申し千歳已來都も鄙も神のことく寶のことくおもひ來れる事なれは成元式がかやうに申たりとて信する人もあるましきはよく弁へしりて候信せぬのみならす成元を狂氣したるかといはるへしとおほえて候凡たれも〳〵人にほめらるゝこそうれしけれそしらるへき事をしりなからいはむやうはなき事なるにこれを知りつゝ申すは　建速須佐之男命のことさせ給ひて天下後世までの人の禍をすくひ給ふ御教をはつひにいたつらにしその神詠より此かた哥人たちの愼獨をむねとよみおかれて言靈いまに嚴然たる哥ともをつくり物のやうにみなし天下の人の禍を除かんにこれにまさる道なきを默する罪今世の人にいまれ譏られるよりはふかく恐ろしくおほえ候故の事にて候まつ古今集の假名序貫之か所作と世にいへともうけかたき事ともあれは學者すてに沙汰しおかれたりそれはしかりされと眞名序は紀淑望か所作にて貫之か親屬といひおのれか　勅を蒙て撰集せらるゝ古今集の事なれは序文の意趣哥道の意旨にたかひ且古今集撰輯の本意にそむかは貫之これをゆるして序とせらるへきやうなししかれは眞名

序の文意貫之同意せられたる事疑なし眞名序曰〽時變ニ澆-漓ー人貴ニ奢-淫ー浮-詞雲ノ興艶-流泉ノ涌
其-實皆-落其-花孤-榮至レ有下好-色之-家以レ此爲二花-鳥之使一乞食之客以レ此爲中活-計之媒上故半爲二
婦-人之右一難レ進二丈-夫之前一云々おもふに此文此集の部立を嚴重にせられし主意とみえたりこれひ
とへに漢土の詩經の正雅なるをうらやみてわか國の哥も(は)多く男女の間によむが正しからすおもはれ
ての論とみえたり眞名序はしめに(ナシ)〽倭歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌云々　これ詩
經をうらやまれたる證なりしかるに他域の事はしはしさしおきぬわか　御國の風俗をしるへきは神
書これ也それより神代已來の詠哥ともをみるに他域にはことなる風俗なり中にもよく明らかに證と
すへきは萬葉集第十三卷に柿本人麿歌
〽葦原　水穗國者神在隨事擧不爲國雖　然辭擧叙吾爲云々 長哥下略　この反哥に〽志貴島　倭國者事靈之
所佐國叙眞福与(リ)具とあるをみるへしわか　御國はかくのことくたゝ何事も神のまに〱言を出さ
ぬか風俗なりされはいはてもありぬへき事はさてもありぬへけれといはてはえあるましくしかりと
ていひては時宜にたかふへき時の爲に哥といふ物はかの命のをしへおかせ給ひしなり詩のあるやう
はしらす歌のよむへき故はかくのことさの物なれはひとへに私情のいふましからむ時に言には愼み
なから心はなくさむる事哥の必用此道の本意なれはもとより私情欲情を發するか哥の本體なり男女

の情欲は命をさへうしなふ物にてことに人〻愼かたきすちなれは神代よりもその情はひとしくして戀の哥のみ多かりし也卽八雲の神詠も櫛名田比賣によりてよませ給ひ　八千矛神の御詠もいつれも戀のうたともなりこれをはしめて世〻に戀の哥かちなる事今更いふに及はすされはかく戀の哥多きこそかへりて人〻の愼のほともしられ愼を思ふ人の多かるもしられていとあはれなる事にはあるをこれをしもいみ嫌はむはわか御國の風俗をはしめ哥もといかなる故よしにてよむへしといふ事をも弁へられさりしにやとおほしき也かつてその比しも戀哥の多くなれりしにあらす神代よりしてかくのことしもしかの眞名序の論たゝ近來はその愼みよりよむ道もしらて男女の媒とのみせしをいやしまれし歟ともみゆるにそれも猶不吟味の論也いかにそといふにたとひ愼の道はしらすとも哥をよみたらんはおのつから男女の間の私情の言にいつへきをは愼めるにあたるそかし今貫之か部立をたてゝ霞鳥月雪の哥と引わけて詩の詠物に同しくせられしは一向に哥道の本意をうしなはせられし物ならすやいかにたくみにうるはしく物ふかくあはれによめりとも月雪花をよめる哥に天神人の感動せんやうやはあるあかめて（却て）。殺したりといふへしいやしきなからもさしおかは猶此千歳以來も活てあらむ道なるに此部立より感通の道ふたかりたりとはこゝをもて申す也古人たゝ時節の景物なとをのみよみたりとみゆる哥もみた哥のうへの愼にてその實事をそれに託してよみたる物なるを哥の表に

眼をとゝめ心を奪はれて月の哥雪の哥なりとおもはれしは貫之に似合はぬ事ならすやされと貫之のみならす此比此法すてにほろひたりし事しるきは大中臣能宣か〵（ナシ）君にひかれて万世やへんとよまれしを父の頼基（アキナシ）・帝の御賀にはいかなる哥を（か）。つかふまつるとてうたれし事也（アキナシ）・帝にも申すへき言を入道の宮に申さ（ママ）ほしけれはこそ哥ともなりぬれされはこそ能宣は今のよまても哥仙とたゝへ頼基はさもなきはかく道をしるとしらさるとによれる事かとおほしき也されは古今集中春部秋部なとゝたてゝ出されし哥ともゝその比の哥人の哥こそ實にさくらならは櫻の哥なれそれたに躬恒か〵（ナシ）ちりなん後そ戀しかるへきとよめるなとは古の法のことし貫之か哥とても〵（ナシ）花そむかしのかににほひけるなとは猶むかしの法なるかことく梅の哥にして梅の哥にあらすさくらの哥にしてさくらの哥にあらさる也まして載（せ）。られたるふるき世の哥ともは皆その法たゝしくして戀の哥なといと多かるを猶春夏なと部して出されたる心えぬことゝもなり所詮子夏か詩の序に引たふされてわか國の哥の道にはよくも穿鑿せられさりし事とおほえて候すへてつよく彼にかゝつらへは我にくらくなり候事はつねの事にて候成元つねに申す如く哥といふものをいかなる物そとしらんには言語といふ自由の物あるからへに又詠哥といふ事のあるをうたかふへき也此うたかひつよき人は直至道場たるへし言語といふものはもと人にさしつけていふへき物也此故にわか情人の心に直にあたりかつ無形には語るへか

らす又詠哥といふものはもとうたふが本意にてむかしは皆うたひしもの也今の世にこそ紙にのみかきてみすれとされと猶それたに言語にいふとは聞人の心にうくる處輕き事大にたかへり此故に言語は有形の間を專門とし詠哥は無形の間を專門とすされとも哥とても言のたくひの物なれは猶それをもよまぬにしく事はなけれとも事理によりてはいはて叶はぬ時はある事也もし人〻それかつゝしまれなは詠哥は不用なりつゝしまれぬ事理は必あるへきか故にかく詠哥の道はある也されは言にして言にあらす不言にして不言にあらさるか詠哥也されと上にいふかことくそれたに猶不言にはしかさるか故に古人哥の詞の上をもつゝしみてあるひは傍をよみ或は異物をよむ事也此故に哥の上は千變万化したれとも內はたゝ喜怒哀樂愛惡欲の七情の節に過時にかなはさるをもてよめる事新古賢愚の別はあれとも一すちに歸する也月雪花につけてのみ情も私情を言に發するの一端なからたとひ言語(ナシ)にていひたりとも人倫をあやまり人情をやふるほとの事いかてかあらむすへて後世のさまをみるに人〻さまて言語にも害なき事を無益の哥によむのみならす言語にいひて害ある事はかへりて思惟なくいひのゝしりあふ事いにしへの哥人の心とは天地懸隔の相違也いひては必宜しからす思ふといへとも猶いはて叶はぬ事ある時は哥ならては何をもてかその時を全うせんとする後世の今までも人〻さる時にせん方あるましからんとおほしめしあはれみ給ひてこそ速須佐之男命は哥道をのこしおか

せ給ひけめとおほえて假へは此神も御思ふかくたしこそたて[illegible]出して[illegible]
るへき事をはつねに哥とよみいつへししかる時はおのつから言をつゝしむ身となりしかも欝情はなくさみぬへし凡よに欝情をなくさめ言をつゝしむほと人ゝかたき事はなし此故に哥といふ物をよみならひて欝情のなくさむへく言のつゝしむへきある時は必哥とよむ事いにしへ人の常そかしかへす〳〵部立にまとひて月雪花をよむものそと心え給ふへからすまへにもいふかことく古哥はのこらす此法にてよめる物なから現顯にその證あるをは今ひとつふたつ出してみせまいらすへしまつ古事記(ナシ)・に神武段に兄猾いつはりて降りて天皇を請し殿の内に押機をかまへて弑し奉らんとせしを弟猾これを訴へたりしかは道臣命大粂命二人をつかはされて兄猾を誅し給ひし時によみし歌

〳〵宇陀能多加紀介志藝和那波留和賀麻都夜志藝波佐夜良受伊須久波斯久治良佐夜流　長哥下略

これは嘲笑もの也と哥の下に注せられたりこれ言語にして嘲りわらふ時はさすかにわれはかほなるを慎てうたひしもの也しかるに此哥鴫羂とよみ鯨さよるとあれは鴫の哥鯨の哥かと見ゆるに今いふことく題は哥の上の愼の爲なるをしるへし此哥の次下に

〳〵美都美都斯久米能古良賀阿波布介波賀美良比登母登　云々

〳〵美都美都斯久米能古良賀加伎母登介宇惠志波志加美久知比比久　云々

〵加牟加是能伊勢能宇美能意斐志尒波比母登富呂布志多陀美能　云〻

此三首粟田に韮をよみ垣もとの薑をよみ伊勢の海の細螺をよみたれともみな韮薑細螺の哥にはあらすいつれも登美毗古をきり給ふによりてさきの五瀬命のいきとほりを散し給ひしことをよせてよみしものなり又同段に

〵佐韋賀波由久毛多知和多理宇泥備夜麻許能波佐夜藝奴加是布加牟登須　此次にも又一首あり略之

これは神武帝崩御の後その嫡后伊須氣余理比賣のよみ給へる也庶兄當藝志美美命その弟三人を殺さんとはかり給ひし時うれへ給ひてよみ給へるにて言にてこれを告給〻んは當藝志美〻命への恐あるか故によませ給ふもの也これ又哥のうへはたゝ木葉と風の哥のことし又景行段に

〵袁波理迩多陀迩牟迦弊流袁都能佐岐那流比登都麻都　云〻　長哥下略

天皇この松のもとにて御食し給ひてわすれ給ひし御刀の御歸路に猶こゝにありしかはよみ給ひし也此松の功をふかく謝し給はむとすれと非情の物なれは言語の道斷たり此故に哥とよみ給ひしもの也此御刀をうしなはて猶ありし事を謝し給ふ御哥なからさはの給はてたゝ松を御鍾愛し給ふはかりによみ給ひたれはうちみにはたゝ松の哥とみゆかし又清寧段に

〵斯本勢能那袁理袁美禮婆阿蘇毘久流志毘賀波多傳爾都麻多弖理美由

これは袁祁命志毘臣によみかけさせ給ひし也[illegible]

しをいきどほりたまふ言をつゝしみ給ひし也これらも御哥のうへは鮪の哥とみゆるそかし萬葉集第十八に田邊福麿をつかひに諸兄公丹後へつかはされしにその時家持丹後守にて此福麿を饗應せられし時福麿か哥に

〽奈呉乃宇美尓布祢之麻志（暫也）可勢於伎尓伊泥氐奈美多知久夜等見氐可敝利許尓(ム)

これは京人にてはしめて丹後にくたりし事なれは海邊の遊覧とくせまほしけれと守か饗應中(なれは)。言を愼しみてよめりその上哥の上までも海邊見たしともいはて波のたちくるかとみてこむといへるまことに後世の人の思ひもかけぬ處也哥の上をさへかく愼むへき事そかし波のたちくるたちこぬはもとより拘りなき事なるをかくよめるは内に愼たる情ある事明らかなり古人の哥はすへて如斯哥のうへに道理のつまらぬ事必あるものなりこれみな愼をもとゝするか故なり又同集第二に額田女王を弓削皇子吉野よりとはせ給ひし御哥を謝し給ひし哥に

〽三芳野乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言乎持而加欲波久

これは松の功勞を悦ひたる哥のことくなれと弓削皇子の御志の厚きをふかく謝し給ひし也これはもとより他郷といひ言語は道斷たるか上に此皇子の御志を悦ひ給ふ事をつゝしみ給へる事詞の上に明

らか也伊勢物語に紀有常か〽これや此あまの羽衣〽秋やくる露やまかふとゝよみしこれ即此御哥と同し道なり謝せされば情通せす謝すれは諂はしからむを慎める物也後世心にては謝する言をつゝしむなと。(は)無益の事と思ふへしされとけによく思へは心の厚き事感するに堪たり哥よまむと思ふ人はかゝる事までに心を厚く用ひて言を哥にかへむこそむかしよりの教とはおほゆれ又同集第十九に

〽春苑　紅尓保布桃　花下照道尓立出媙嬬

これら後世のよみかたにしては何の事とも聞えみたし此をとめに心ありなと言に出ていはむは斟酌なる事にて輕卒にもあれはつゝしめるにてまことにかきりなきよみさまなる哉これら實によき手本そかし又同集第七に詠葉と題せられし哥

〽古尓有險人母如吾等架彌和乃檜原尓挿頭折兼

此哥拾遺集にも出されて古今世人たゝ三輪の檜原をよめる哥也とおもへりこれしからす戀の哥也いにしへにありけん人とはこれまての男を云檜原は女にたとふ我よりさきに男やありけむしからはわれかく心をかくるも詮なからんと斟酌してよみつかはしゝ哥なりすへてあらはにいひにくき事は言語の道斷たる事いふに及はねは古人みな愼みたり詠葉と題もあるからは題詠とのみ思ふも理なれと此集なとの題はたゝ家持か目しるし心覚なとにこそつけられたるへけれ後世の題詠の心にはあらす

後世に題といへとも成元か、よはにしたかて、よまは［illegible］
て成元かいふ所たゝ世に古學者など称する人のいふにはたかへる事をしり給ふへしよみ人の法をふむとふまさるとにて題も哥も

そのまゝ死活ある事にて佛説の一水四見のたくひなり　此哥を今かくたしかに申すは卽此哥のならび(ひ)に同題にて

〽往川之過去人之手(不)。折者裏觸立　三和之檜原者

此哥にてしるしこれは女の哥にて上の男の哥の返哥也(なり)しかれとも贈答ともかゝれさりしかは世人古今にこれをしる人なく又上の哥をも戀の哥とはしらぬ也家持ことに詞書をもかゝで詠葉として二首出しおかれしはその比には哥よむ法は別にしるさで(て)も人ゝよくしり(たり)。し故なる事かくことはられさりしにて却て明白なる事に候はすや人のしらぬ事はことわらては叶はぬ事也ことわらさるは人よくしれるか故そかし猶この哥ともの前に詠花として出されたる〽あさりすといそにみし花風ふきて波はよるともとらすはやましといふ哥も花は女にて戀の哥なるを思ふへし萬葉集中のうた一ゝかくのことくなれはことにとり出ていふには候はねとまつその一二を申す也すへて古人はかたはらをよむ歟あらぬ事になしてよむ歟の二筋なり(〽)。とふ鳥のあすかのさとを置ていなはといふ御製も明日香の里はもとよりつれてゆかれんやうなき物をかくよませ給へり〽(ナシ)妹か家もつきてみましをといふ御製も妹か家のなにかさやうにつねにみたくおほさんあすか(の)里はその志し給ふ人の事也家といふは妹か顔の事也これをもても古人哥の上の愼ふかき事を思ひやり給ふへしすへていはまほしき事は言語はいふに及はす哥にまてもいふ事なき事古人の法

なりさらに謎〻のやうにわざとたくみにいふにはあらすかやうにそらし又(また)はあらぬ事になしていふを巧なりと思ふ人もあるへけれと夫は猶心の道にいたらねは也俊成卿の時代題をまはすといふ論ありこれに似たる事なれとこれは題をはまはすにて主意をはまはすにあらねは今いふ所には混すへからす題をまはすはたくみ也今いふ所は愼なりよく／＼思ひわき給ふへし少しそらしてよみたる哥にこそわか今いふ所を信する人もあるへけれ塵ほともその氣なくよみたるは信する人すくなかるへしされと此道理をよくみしりわか哥にもよみ試みて後は必信せらるへきにて候萬葉第一に(ナシ)・川上のつら／＼椿つら／＼にみつゝおもふなこせの春野をとよみしは巨勢の野をよめる哥のやうなれと旅にして女を思ひてよみし哥なりと明らかに定め候事はたとへは百首かうち七八十首は此定にかなふか故に押て信する事にて候人〻哥の上の道理あはぬをうたかはぬのみならす詞書に無用の事あるをも疑ふ人たになし古今集に

＼ちはやふる神よも聞す龍田川から紅に水くゝるとは

此詞書に二條の(ナシ)・后の御屏風のゑに云〻とありこの二条后のといふ事無用なるに書かれたるは此哥紅葉の哥。(に)あらて后の事をよみし物也といふ事をさとしたる也かくのことき詞書はよく／＼目をとゝむへき事也(なり)すへて[illegible]

の海つぬの浦わを浦なしと人こそみらめかたなしと人こそみらめ云々といふ哥すへて三十九句ある哥なり此哥人麻呂（麿）石見より京へのほられける道にて妻をおもひてよまれたるなれは公事の中に私情さかりなれは必忠をあやまるへきを愼まれて心を慰められたる也されは妻をこふる事をこそむねとよまるへきにその三十九句かうちはしめ廿三句は石見の海の事なりをはり十六句か郷思なりしかるに古よりこれを疑ふ人なきは心えぬ事也長哥といふ物三十一字のことく句數定まりある物ならはこれも序哥とのみいひてありぬへし句數心にまかすへき長哥なるに三十九句のうち廿三句まてあらぬ事をいはれしはいかなる事そや序といへとも限こそあるへけれ肝心のいふへき事よりは無用の事のかたを長くよまれ。（け）んはうたか（が）はで叶はぬ事ならすやこれをよく考ふるに哥といへとも言語の類なれはよまさるにはしかねとも默しかたさに此事をえすよむ事なるか故にこの長哥なとはうちみには公に石見の海の事をそよまれけんとみゆるやうに三十九句を廿三句まてはよまれし也さて玉藻といふより〱よりねし妹をおく霜の置てしくれは云々と私にうつりてまことにその玉藻のついでにふと妹の事をよみたるさまにせられしもの也これひとへに公をおそり（れか）愼まれたるより無用の方句數多く有用の方はかへりて句數すくなき也さはかり聖と申す柿本の神詠なれは此長哥一首にてもすへての哥のよみかたは明らかなるを見給ふへしこれらをもて成元かいふ所なぞ〱のことき いやしきつと

めにはあらさるをも弁へ給へ短哥にしても序哥まくら詞なと皆此みじかきにて有用の詞にかへてよむにて慎よりおこる事そかし此故に古哥をみむには此哥はかやう〳〵にそ(こそ)いはまほしかるへき哥ぬしの心ならむと解くへき也たとひ百萬首たりともたゝ此一法を出へからすわか哥よむとてもまたかくのごとしかくはいはで叶はぬ事と一向におほゆる事をつゝしみて或はかたはらをよみ或は月花に托してよむへき也しかる時はその哥人の心厚き所おのつから哥の中にこもりて無量無邊不可思議の妙用をなす也これをは言靈とは柿本神のよみたまひし也されは天地神人の感動をひく事は人力にあらすして此言靈のたすくる也人はたゝ哥になくさめて欝情を言行に慎(む)。まてを限とすへしこれたによく守らは言靈は自然と鎮まり感動は自然とあるへしあやふむへからす疑ふへからす哥にかぎ(き)らす大道の奥祕たゞこゝにある事なるをや神道佛道儒道ともにその源をきはめて問ひ明らめ給ふへしとれをは言靈の感動するそとはしらでたゝ人工のいたす所と心えたるより後世の人貫之を祖としてよゝの先達もた(ナシ)ゝ功者已達のうへこそ感動はあれと心えられたりもし已達といふきはにいたらされは感動なしとせは世に誰かはその際によみいたらんことさらはしめにいひしことく貫之能因等かさまて秀逸ならぬに感動ありし理はいかに今成元かいふ所のことくはたゝ此道の法をさへ身に守らん人は今日唯今よみかゝりし人とてもその哥感動は必あるへき事疑なしこれその人に妙用にあらすして

その言靈の妙用なれは也天下國家ををさむるにもその王者の一人して治むへきにあらすみつからは身を脩め徳を施しその羽翼たる公卿太夫の聚歛邪遯の者を遠さけてよく賢者を用ゆるその間にこそ治國平天下の妙用はそなはるなれゆめ〱人力のいたす所とおもふへからすかく申せは又哥はいかやうによみてもくるしからすと申すやうなれとすへてなに事もよからんにます事あらし稽古の功勞つみて哥よくよみたらんは鬼にかな棒とや申すへき言靈のしつまりてたすくへき道も心根に徹底してよむ故にそのいさをし格別なるへき也しかりとてよくよまさらんも猶感動の道はひらけたる事まへにいふかことし此故に成元つねに稽古と修行とは別に心えてふたつなからす。（こ）むへしとは人々におしへ候よ佛小乘大乘をいふは感動を已達のうへの事とすると未達にも道ありとするとのふたつ也此法うしなはれて千年に近き事を成元短才愚頑にして心に徹せるは實に冥加にこそかなひたりけめ今この短才をかへりみすして先達のいはさる所をいふは須佐之男命をはしめ奉り柿本神への報恩にて候貞觀の前後まては世にも此法傳はりたりけらしその比の人々の哥には法ある哥ともあり古今集にも〱心さしふかくそめてしをりけれは消あへぬ雪の花とみゆらん〱うめか枝にきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝその外戀の哥なと雜部哀傷別なとには延喜の比の哥人のも法たゝしきも少からす此法世にのこ。（れ）りし事の中にもしるきは在五中將なりその證を申さは

〽世中にたえて櫻(さくら)のなかりせは春の心(こゝろ)はのとけからまし

此哥世に櫻の哥とのみ思へれとさくらとは二條后の事をよまれたる也(改行)〽ちはやふる神世もきかす云〻(改行)これまた水とは后をいふ也から紅とは清和の帝を申す也中將の妻となるへき女の后となれる事は神代(よ)も聞かぬ事也とうらめしさをなくさめたる也まへにいふかこと(如)く詞書にこれをさとされたるをや

(〽)信濃なる淺間(あさまの)かたけに立(たつ)煙遠近人のみやはとかめぬ

これ(の)煙とはこれまた后の御事也后にたちたまへるを表せられたり遠近人のみやはとかめぬとは他人これを見とかめぬかやとねたましさによめる哥也この(此)外

〽名にしおはゝいさことゝはん都鳥　云〻

〽いとゝしく過行かたの戀しきに　云〻

〽から衣きつゝなれにし妻しあれは　云〻

〽するかなるうつの山辺のうつゝにも　云〻

〽大(ナシ)はらやをしほの山のひめ小松　云〻

これらはしるく后の事を歎息と聞ゆる也また

〽時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらん
此哥なとは又世の人みなふしの哥とおもへりされとこれまた后はとてもをよひなくなり給ひしもの
を猶業平のみつからの心はむかしと同しくわすられぬ事をもとかしみてよまれし(れ)哥そかしかく紅葉
を見ても櫻をみても山を見ても鳥を見ても同しなけきをよまれしは此道の法の(アキ)のこ。りし證也執着
のはなれかたきはむかしも今も同し事にてかくことにふれてなくさめられけんは。帝へ對してふか
く愼まれしゆへならすや實に中將の心のあはれさ思ひやられてあはれ也しかあはれなる心さまゆへ
にこそ(ナシ)・〽人しれぬわかかよひちの云々とよみ給ひし時あるし・(ナシ)の關守をゆるし給ひけんにさる感動
は必あるへき言靈とおほえ候哥の表にこそみへ・(え)ねたれも〳〵執着したる情にのみひかれてことゝあ
る時はあやまたるへけれは折にふれつゝ哥はよまれしなるへし古今集の部立よりは此法やう〳〵う
しなはれゆきて詠物の哥ともいと多くなれりしそかしされとも時の此法におのつからかなひし時の
哥ともは古今集は申すに及はす後撰拾遺よりも猶末の集ともにも法たゝしきも少からねは一概にみ
な法なしといふには候はすいはゆる基俊の〽あはれことしの秋もいぬめり小式卩か〽いくのゝ道の
遠けれはなとの類またあけてかそへかたけれは今いふ處をひかめて聞へからすたゝ部立にまとひて
詠物となれる哥をはあしとは申す也貫之もさすかの宗匠にてありしからには人丸赤人のさかひたえ

て弁へられさりしにはあらさるへけれと半信半疑(ま)なりしにやその見解の筋たゝすみゆる事前文にいひしかことし貫之をしひて譏らむ事無用のこと也たゝ志あらん人は上古の人の哥よみし法を師として中古の貫之等か名にまとふ事なかれとは申すにて候されとさはかりにてはくはしく御心も落ゐましけれは今又こまかに申候はんまつ眞名序に貫之同意せられしからは哥は正しき心より生する物と思はれしやうなりこれさにあらすしてきたなきか中にもきたなき心よりいつるもの也成元つねに哥は一向心を因とすと申すはこれ也ひたふる心とはいひてあしくしてあしき理はよく弁へなから猶いひもせて(で)も叶はすおほゆる心をいふ名也源氏物語に(ナシ)ゝぬす人なとやうのひたふ(る)。心なるものといへる此名によれる也盗人といふものよからぬわさ也とよく弁へたれはこそひるはえ來らすよるも人の寝たるをうかゝふ也いかてかこの心を因なりと定むるそといふにたとへはこれはいふもするもあしとよく弁へたるに随ひて言行つゝしまれなは哥もよむに及はさる事也されと事により時によりていはてはやみかたくせてはあるましくおほゆる心いてくる物也これを一向心とはいふ也此時には哥ならてこの時の心をなくさめ身を全うする道なきか故にこの心を因とは定めて候學問なとする人は天地の理をも明らめたるうへはさる心はいかてか出こんとおもへりこれ夏もさむく冬も暖なる事ある理をしらぬひか心得也されとも理はひろくわきまへんにしく事あるましけれはいかにも二六時中神

書にもあれ佛書にもあれ經書にもあれまなひ知りて心中の私情幼志をあたふへき也されと大にて足れりとする人は琴柱に膠するたくひ也もし時處事理によりてその理をもおし倒すはかりの一向心いて來たらんにはいかゝ顧りみふせかんとするその一向心といふものさすかに私情はかりにては出こぬものにてかならす私情の上に公理を引かつきて出るもの也たとへは人の面前にて俳優せんとするにいかにしても恥かしくおもはるゝを面なとかつきていつれはやすく出らるゝかことくかの學生(士)たちのおもふ所はその心こゝにいたらさる也(なり)此故に聖智佛智神智にいたれるはさて置ぬなま學(問)問したる人は文盲なる人よりも却て一向心は多くいつるもの也(なり)恐るへし愼むへしかくのことく私情なから公理あるか故にやゝもすれは言行をあやまつ人多し此故に哥といふ物ありてかゝる時はその公理のいよ／＼公なるか私なるかを糺すにもをよはす哥とよみいつれはその欝情はやかてなくさみ言行は愼しまれて時宜全き也哥道しらさる人は危ふき哉智者はかへりてまとひて言行を思はすあやまり身を禍におとし入るへし此ひたふる心のいつる時ははやこれまての學力もあたはさる所なれは人として哥の道しらさる事や候へき哥道世にあれはこそ人その身を全うしなから心を慰むる道はあれかの命の御恩洪大なる事ふかく思ふへしかの八雲の神詠哥道をよく弁したる人なきか故に今まて此命の御本意に達したる解をみす（宣長か註なともわか國の風をのみいふ人に似す哥はもてあそひ物と心えられしかは近昔の哥をとく法をもて此神詠をも解たり信すへからす）この故に今これを

序に申候ひて此道のおこりをさとし申へく候まつ此命は天照大御神をわつらはし奉り給ひし罪によりて根の國にやらはれ給ふその道にて八岐大蛇を斬て草薙劔を得たまひこれを天にたてまつり給ひしかはその御功ならひなきか故にかの櫛名田比賣とともに出雲の宮にとゝまり住たまひて根國にはおもむかせありぬへくおほしゝを猶つゝしみてさる事を天にもこひ給はすしてつひに根國におはしけるはひとへに此神詠にて御心をなくさめたまひし故なりかの草薙の神寶なくはさる一向なる御心も出ましきを思へはまして淺ましき成元等つねにいか斗かあやまら(ナシ)さらんとおもふにいとも〳〵くるしく覺(ナシ)え候されははしめ學ひて善不善を弁ふるは理のうへの愼也次に一向心を哥になくさむるは心のうへの愼なりさて又そのうへに哥の上をさへあらぬ事によみなしかたはらによみそけなとするはわさのうへの愼にてかく理と心とわさとの三ツ(ナシ)(みつ)の愼哥のうちにこもれるか故に言必靈あり靈かならす妙用ありて感動にいたる也不學蒙昧なる上からはその愼三段かゝりたる物なれはいかなる拙哥鄙詞たりとも天地神人いかてか感せさらん已達のうへならては感動なしと心得さするは佛のいはゆる佛性を殺すにて候へはかへす〳〵貫之か辟見をみやふらさらん人は柿本の階にのほらん事思ひもよらさる事也貫之豪傑なりと聞てその見識のほと度量のさまをもはからす無二無三におそれたふとみてこれにしたかふは河豚をくらひてしなんとして死せさるかことくなるへしよく〳〵心をむかふ

へはせすもとにかへして以上の論を味はひ此道の修行し給ひて建速須佐之男命の鴻大の御恩を身にしり給ふへしさて又稽古。(と)申すは公任長能俊頼基俊俊成定家をはしめて代々の先達髓腦ともにをしへおかれし事はみな稽古のうへの事なりそれらをよく〳〵見しるへしされと古今集の部立より題といふものいて來てそれより哥合といふ事いて來ぬそれも寛平なとのはたゝ哥をあつめられしまでの事なりしを天德の哥合より左右を判して勝負をなすことゝなれり此故に世々の先達の教とも概するに哥合に負さらんやうの教にして當世の哥の教とするものみな此哥合のさかりなりし世の餘波也これらの事はゝかる(ナシ)へき事もあれはくはしくは申さす古今集の事もさはかり公にひめさせ給ふ集の事なれはさらに手にもとるなと申すには候はす法のあるとなきとを取捨し給へと申す也代々の撰集もこれに同しさてその哥合はたゝ二首左右とたゝかはせられし時のかまへはかりなれは全体の哥の教には不足なる事そかし亡父成章古來はしめて詞の三具をわかちなしてより成元等古哥を見わか哥をよむに可否用不用を弁する事神のことし此三具を明らめ同しく亡父かをしへたる五級のさまをくはしくみしること稽古の專門也近來の國學者いとかしこく精蜜のまなひするといへとも詞の三具に通達せる人なかりしかは力に及はぬ詞はみなにけ詞をもて責をふせけり逃辭とはいはゆる　〽助字〽やすめ字〽發語〽相通横通〽をとにとかよふといふ類これらを云我家學これをはつる所也助字や

すめ字發語なといりてよき事ならは詞毎にも哥毎にもあるへきに詞により哥によりてあるはいかに五音相通も勝手次第にかよはせてすむ事ならは五十音はわかれて無益ならすやをとにとかよふといふ類はことに拙くをさなきことと也くはしくは來りてとはせ給へたゝ一音とても天地の變動を含めるものを一字一句をもとり除きて見ばいかて(で)かむかし人の魂をもしらんこれを恥る學者ならすはともに語るへき人とはおほえ候はす成元かよむ哥おほえすふるき世の姿となるが(か)故に古風をこのむと人みないふ事成元か腸を吐てみせまほしき事なりさらにひかみてこのむにあらす後世の哥には無用の詞多きか故に有用の詞つまりてのひらかならすのひさるは必無用の詞あるか故也されはその無用の詞をとりのけて有用の詞のつまりたるを引のへゆけはしらす〳〵すかたはいにしへにかへる也もとよりいにしへの詞は正しくして義深けれは用ふるさまも又心を用たる事ともなりこの理を弁へて後は後世のすかたによまむとすれともよまれ候はぬ也されとも成元は無用を削り有用をのばえて慎を本としてよむか故に古体になるなれと當時の人氣に叶はす耳に入らすなといひて近体をこのむ人はそれもまたいやしむへきにもあらす稽古のうへこそ一句一言(首)をもみかきたてんとはすへけれかの感通のうへにてはふるきも可也あたらしきも可也これは人ゝ(ナシ)の志によるへしされと稽古の功つみたる人はことにいはすともおのつからふるきすかたとなる事也いつれにも体にかゝはりて哥よむほとの

人ならは感動の道はおもひ絶てよむへけれは自業自得は佛力にもすくひかたしとはらへなるかなた
ゝ千歳ちかき醉をとく〳〵さまし給ひてこの美饌の味はひをはよそにしたまふな

文化二年七月

藤原成元友かきに示す

冨士谷御杖大人著

# 詞道學要

全

# 歌道學要

平安　富士谷御杖著

哥道をしらむには。まつ言語と詠哥の別をしるべし。言語は人にさしむかひたる時の用也。詠哥は人とへだゝりて言語の及ばぬ時の用也。もと言語詠哥ともにもはらわか情を人に通するための物なれど。其用かく遠近の別ある也。たとひさしむかひたる人にても心おかるゝ人。又かたはらにきく人あるなどは。さしむかはぬにひとしかるべし。かゝるたぐひは猶人により時によるとの用也とするべし。此故に詠哥もゝと言語におなじく。人にわが情を通する爲によむべきに。此京になりて。古今集をえらばるゝに到り。春夏秋冬等の部立はじまり。其後題詠おこりて。つひに哥はわが情を人に通せむための用を失ひ。たゞ花鳥風月を詠ずるもてあそびものとなりにたり。（賀哀傷戀旅別などは情をのぶる事上古に同じされど猶詞づくりは古にたがひたりくはしくは下にいふべし）上古は花鳥風月をよみたるも。皆情を人に通せむに。直言ならじとてよめる物にて。たゞ花鳥風月のためのもてあそびにはあらざりし（マヽ）也。しかるに今人は情を人に通せむに。何かは迂遠に物によすべきとおもほゆべけれど。わが御國言をおもはする事。神典につまびら

かなり。その理ことに(ママ)いひつくすべからねど。その大畧をいはゞ。おほよそ言はわが情のまゝをいふ時は直言なれば。其情すなはち其人に通ずべき事なれどしからず。それも私情こそ通ずまじけれ。私ならぬ情は直にいはむに。いかでか通ぜざらんとおぼゆる事ながら。わが爲なる情はいふもさら也。人の爲を思ふ情とても通ずまじき事は。もとわが爲をいはず。わがおもふ情といふ情こと〴〵く私情におつればなり。しかれども私ならざる情も私におつといふ事。人みな心えがたかるべし。これ其情の私ならざるか。私なるにはあらず詞を直(ママ)につくるが故にて。詞を直につくる時は。私ならぬ情も私情におなじぐ(ママ)。人に通せざるものなるをいふ也。されば私情はいふもさらなり。私ならざる情とても。詞を直につけず。麁なるまじき也。これわが御國言を尊ぶ所謂ぞかし。さればわが情に詞をつけむに。いかにせば私非私をいはず。わが情人に通ずべきぞといふに。神武紀に。以二諷-歌倒-語一。掃二蕩妖-氣一。倒-語之-用。始起二乎茲一。とある。これわが御國言のつげさるをさとされたる濫觴なる也。此倒語といふ事。倒とは。たとはゞゆくをゆかずはといひ。見るを見ずはといふ是也。されどこれらは事のうへ也。情のうへにも倒あり。おもふ所をいはずして。おもはぬ所に詞をつゞるこれなり。これをおしこめて倒語と心うべし。すべてわがおもふ情には戻りそむく事大かた人情の常也　故にわざと倒を詞とする事。すなはち人をわが情に同意せしめむ爲の妙法也　その理

千里鏡をもておもふへし。このゆゑに古人其思ふ情をは。直にいはずして思はぬ花鳥風月の上に詞をつけられたる物なり。されば詞のうへはたゞ花鳥風月にゝて。その情をよせたるものとはさらにみえざるがゆゑに。後世の題詠のごとくよめるものぞとはこゝろえ。古今集四季等の部立にて。いよ〳〵つひに題詠さかりになり。よせたる情ありともしらず。たゞ其おもはざる花鳥風月をば。かへりて主のごとく心うる事となりはてにたり。かく倒語する事をば。たとはゞ人のもたる物をひそかに取る時は偸盗とにくみ。强て乞とる時は多慾といはむに。其物をば其人の心から贈らむに。それを得たりとて。偸盗多慾と名づくる事あるまじきがごとく。其物をえたる所は同じくして。偸盗多慾におつるとおちざるとの別。たゞ其人の心より起ると。心よりおこらぬ所をするとにあるを思ふべし。されば詞をわがおもはぬ所へつくる事。あるは不実のわさのやうに思ひ。あるひは誰々（校者云謎々ナルベシ）のやうにおもふ人も有べけれど。さらに〳〵さるわざにあらず。たとひいさゝかも私なき事とても。人の心よりおこらぬ所を詞とする時は。猶私におつる事。かの偸盗多慾のたとへの如くなれば也。このゆゑに思はぬ所を詞とする時は。きく人其心もて察してわか情に思ひ到るべし。しかる時はその端を起す所。われにあらずして人にあるが故也かし。古人おもはぬ所に詞をつけたる法。くさ〴〵にしてかぞへ盡すべからねど。そのひとつふたつをいはゞ。旅にして家の妹をおもふ心をよまむと

ては。衣なれやぶるれどもときあらふ人なきをわび。約をたがふる人をうらみむとするには。言をふかくたのみしわが心のはかなさをもどくなどの如し。この倒語に二樣あり。一は比喩なり。比喩はたとへば。花のちるをもて無常をおもはせ。松のときはなるを云て。人の壽をさとせるこれ也。二には比喩にはあらずして。外へそらすこれ也。たとはゞ妹を見まほしといふをば。妹が家をみまほしとよみ。人の贈りものを謝するに。其物の無類なるよしをよむ類也。此中に事物のうへにて倒語をいふと。情のうへにて倒をいふ。二種ある事まへにいへるがごとし。事からにより。思ひのさまにもよる事也。この二樣のうち。比喩はよみやすく。そらすはよみがたきもの也。此故にそらす方を倒語の到りとはすべきなり。しかれどもこれまた事がら時宜によるべき事にて。所詮はこの二樣をおしこめて倒語と云。これ神武紀にいはゆる諷歌也。この倒語の事。世にかくれて千餘年なれば。今の世にてもいとかたきわざのごとくおぼゆべけれど。しからず。まづ今哥一首よまむとするに。かう〳〵のすぢをよまむと思ふ。其情は詞のたえてなき所也。さて其わが情の一筋より外は。宇宙のうちにあらゆる詞は。こと〴〵くわが用をなすべきれう也。此故に直にて詞をもとむれば。もとより詞のなき所なるか故にせばく。其直を除きてその餘をもとむれば。廣大にしてはかりなき也。かゝる廣狹有ともしらず。後世人は直言をば實情をのぶるなど心えて。ひたすら直に詞をつけむと

するが故に。いと苦しくからくして。詞を思ひえても。殊に、こま〲しきに。詞のなき所をしいてつくるが故也。直を除きて詞をつくる時は。もとむる所廣きが故に。くるしき事もなく。しかも變化自在。意の如くなるべき也。かばかりのたがひめある事。よみしりてのちぞ思ひうべき。しかのみならず。此直を除たる詞には。こと〲く神やどり給ひて。其いはざる所のわが情をたすけ給ひ。人に通し。さきはひ給ふ。その詞をつかさどり給ふ神を。言灵とはいふ也。直言には此言灵なしとしるべし。言灵なしといふ所謂は。わがおもふ情のまゝを直にいふは。わが力をたのむとするわざなる故に。神の御心あはれみ給はねばなり。たとはゞ寸畧（ママ）ある人は。かたはらよりたすくるものなきがごとしとしるべし。万葉集第十三。人丸しき島のやまとの國は云々。同集卷五。憶良（オクラ）神世より云つぎけらく云々。續日本後紀の哥に。言たまのまさき國とぞ云々。などみえたるこれ也。此卷五なる。憶良ぬしがうたに。今のよの人もこと〲。めのまへにみたり知りたり云々。とよまれけるをみれば。其世までは。此言灵の道。よに人もしれりし事明らか也。此京になりて。やう〱此道かくれゆきけれど。貞觀の頃までは。其なごりありきとおぼしき也。かへす〲古今集の部立より。四時の景物どももと諷諭の爲のものともしらずなりて。つひに題詠におちいりて。詩の詠物のごとし哥の巧拙を論ずる事。世にさかりになれり。されば所詮は後世の哥のよみざまは。哥合の弊なる事明らか也。

寛平哥合などは。後世哥合のごとく。左右をわかち。判者これを判じて。勝負をなす如くはなくて。繪合根合などのたぐひにて。たゞ哥どもを集られしもの也しに。天徳哥合に（標目ニ付ケアルノナリ）はじめて左右をわかちて。勝負をたてられたり。これを祖（マヽ）夫より共きそひさかりになり。つひに（トクコ）獨鈷鎌首にいたれり。此故に判者に難ぜらるまじきやうにのみ哥をよみならひて。こともなき哥をば正風などゝとなへ。かへりていにしへをそしり。或はさしおきなと。えもいはぬひが心えども世にはびこれり。されば詠哥のをしへなどいふものも。まことに哥道の本意にはあらで。みな世ゝの判者の詞をのりとす。げに判者はその世ゝには宗たる人ゝなれば。信受するもことわりながら。歌道の本意こそあれ。哥合のよみかたどりを。大かた哥道のをしへのやうに心えたるは。あさましき事也。かゝるさまになりゆきたる。其起をたづぬるに。倒語のをしへをうしなひて。題詠にたくみをあらそふ事となれる故也。もと哥一首の。心よりなり出たることを。いはゞまづ第一に情。第二に詞づくり。第三に哥となる次序也。題はこの詞づくりのうちにあるものなるが故に。まづ題をえて哥よむは。（第一ハ既ニ済メテアルカラ）第二第三と次序する也。（第二第三ト次序スル也）かく本然の次序に叶はぬわざなれば。題をえてのち哥よまむは。理に背くわざなり。されば予が門生無題の哥をよみならはして試るに。此次序正しきしるしには。有題の哥よりは。其詞づくり抜群にして。すゝみもいと疾し。この故に題詠をよむまじきものなれども。今世となりては。

哥とだにいへば。題を構てよむ習ひとなりたれば。一概にもいひがたければ。題詠もすべし。しかれとも第二第一第三と。乱れたる次序をばつたはずしひて心もて第一第二第三と。つたひてよむべし。題をえたるにまづ其題はえぬ心になりて。さてわが情を主とたて。倒語のためにかのえたる題を用ひてよむべき也。親屬朋友など。つねに交はるうへには。さまざまいはまほしき情。は起る物なれば。それをば哥にはよむべし。されどさのみにては方角なきやうにもあるべければ。題をえてよみ習ふも亦しかるべき也。かの次序の順逆をよく心得なば。題にてよむとも難なかるべけれど。前にいへるが如く。宇宙のうちにもとむべき詞の。その題に縛せらるゝが。いといぶせきなるべし。されば詠哥の本意は。言語をいふべからぬ間の用にて。其詞づくりのやうは。わが情をわれよりことわらずして。きく人より察すべきやうをむねと。心うるより外なきことなるべし。かく心うる時は。言に自灵ありて。其靈おのづからわが情をたすけて。人の心に通徹せしめ給ふ也としるべし。おほよそ哥となる情は。古人も今人も。賢者も愚者も。たがふ事なきもの也。その情に詞つくるに及びて。巧拙賢愚もわかれ。古人と後世の別もみゆる所なり。世に趣向ととなふる物は、題をえてその題の意を。さまざまとりなすをいふ。此趣向といふは。もとわが情を人の察すべき詞をもとむる事也。同じやうなる事ながら。趣向と詞をつくるとはたがひめあり。其故は。趣向と心えては。

此道のために背く所出來(デ)べきなり。そむくとはもと題をばとりなすを趣向といへば也　しかのみならす。詞を宇宙にもとむる心とは。心ちもいたくたがふ事也。かく詞をもとめ。その詞づくりをするに心えあり。萬葉卷十三。人麿あしはらのみつほの國は神ながら。言擧せぬ國云〻。言擧(コトアゲ)セヌト云ヘハ物チ云ハヌ也スレバ無言ノヤウナレ𪜈カノ倒語ノ次第ニテ打付ケニ云ヘバサハリ出來テ遂ニ言ノ果サヘナキ事モ有レバミダリニ氣マヽニ云ハヌ也　猶多けれど畧す　この心は。神道にだにしたがへば。言語の用をからでも。おのづから情通ずるもの也との心にて。これわが御國の風俗なり。されど事がらにより時によりては。いはで叶はぬ時必あるもの也。やむことをえず言をいださむに。もと言擧せぬを。本と心うべければ。（ママ）國のてぶりに背かざるやう。いかにも〳〵言(コト)ずくなに。すこし理たらぬやうに詞をつくるべき也。後世哥はをさなくよむべしといふをしへあるも此ゆゑなり。是(レ)ひとへに人の心もて察せむことをむねとすれば也。理すぎざらんやう。言ずくなに詞をつくらむに。さま〴〵の手段あり。いはゆるよせ。序哥なり　うちよせ。序哥のみじかきなり　冠詞。まくら詞なり　插頭。詞上につく詞也　裝。詞の中につく詞也　脚結。てにをは也

以上三を。亡父三具といへり。よせ哥はたゞ詞のいうならんやうによむのみのわざにもあらず。いはむ事のなさに。他の事をいふにもあらず。いふべき事はあれど。理すぐべければ。人の心にゆづらんが爲に。わざと本句上句なりをば。あらぬ物をおく也。うちよせはよせ哥のみじかきにて。これ一句二句など。無益の詞をおく也。たゞ長短までにて心えはよせ哥におなじ。冠詞はうちよせにひとしく。一句を冠とするなり。されどうちよせは比すべき物をおくをいふ。又はたゞ秀句のやうにいひ

かくるといふがたがへり。心えも倚よせ哥うちよせにおなじく。そこにはおくべき詞は有ながら。ことわりすぎむ事を思ひて。わざと無益のものをおく也。これらの詞。皆言擧せぬ國の御てぶりよりおこりて。われより理ハりすぎむことをいむが故に。調べたるを（作ニカケレバ上品ナルヤウニト也ウツクシイ又ウルハシイノ也ミヤビヤカト云モ同）みやびのためのやうに心えきたれるは。もと哥よむべき道をくはしくせぬが故ぞかし。さればその哥に無益なる詞をおくが本意なるを。後世に到りては。末句下句なりよせなくてはとて。其冠詞のよせをば。末にしひておくなどは。いとあさましきわざ也。三具は情の變動ヲさとするものなれば。義をくはしくすべき事いふも更也。そが中におほかた哥よむに。物の名は變化なきものなるが故に。已達も。初學も。用る所に巧拙ある事なし。たゞ三具は。よみ人の力による物也。中につぎて（ママ）あゆひは麁なるまじき事にて。哥一首の意は。たゞ脚結の意也。早竟物名は死物也脚結は活物也しかのみならず。心うべき事はすべて兩端をいはざれば。其理盡ざるを。片方ばかりをいひて。兩端をしらするものは。脚結の專要也。これ又彼言擧せぬ御國ぶりによる事にて。今片方をもいはむは。理すぎ。しかりとていはざらんは。理たゝざるべければ。脚結もてそのいはざる片方をおもはするなり。たとはゞ。入江のあしはかれぬといふは。池などのあしはいまだかれざるにといふべきを。いはずしての|は|ぬにて。そこをおもはせ。又我こそ物おもへといふは。人の物もおもはでをるにといふべきを。いはずして。|こそにて思はするがことし。さればおの

れ哥よまむに。脚結はことに心を用べき事いふもさら也。古哥古文をとかむにも。これを明らかにせずしては。作者の意をうべからず。これら皆詞づくりのために。古來心を用おかれし手段ども也。くはしくいはゞ。猶かゝる手段どもかぞふべからねど。今は其大様をいふなり。

先達哥のすがたの事をいはれたる事。いとねもごろ也。近頃もしらべなど。世にいひはやして。哥は句調をむねとするやうに心えたる人多し。げに句調もよきにしかざる事ながら。古昔に句調の事をむねといへるものを見ず。みな其論。中昔より末の事也。此句調の事。詞のうはべにて。なす事と心うるは。近きがごとくにてとほき事也。いかにといふに。今わがいへるがごとく。詞は大かたわが情を。そらしつぐるをいたりとす。しかれどもそのそらすに遠近あり。はじめおもひよれる詞は。必わが情ちかき物なるを。いくたびもすれば。次第にとほくなる物也。そこを案じぬきて。いかにも遠き所に。おもひえたる詞を極とすべし。此遠近の別。遠きをよしとすべしといふは。近きは猶。われとわが情をことわるにひとしければ也。遠きは人の心にゆづりて。心いよ／＼切なればなり。されば人の心にゆづる心の切なる故に。言灵のたすけ給ふ力つよきによりて。人心に通徹する所。かへりて近かるべければ也。かく詞のいたりをきはめむに。哥となりて後句調のあしかるべきやうはなき事也。此理をわきまへず。詞の條理に疎にして。みだりに詞の上にて。詞をよくせむ

とするは。影をば月なりといはむがごとくなるべし。奈良以往の人の哥の。調よきはみな詞も條理を正しくきはめられたる所より。おのづからなれる調にて。さらにうはべにてつくりとゝのへたるにあらず。わが御國もと。とせむ。かくせむ。とおもふ筋は。皆自然にならむことをむねとするみてぶりなるが故に。神典の御教。さらに孝悌忠信をとき給はずして。おのづから孝悌忠信となりぬべきことを。ゝしへたまへるに。おもひ合すべし。まづ倒語をもとめて。後猶いくたびも案じ〳〵て。いかにもとほき境におもひえたらむ。詞の調おのづから晴ルことは。詞の條理をつくし試みて。後ぞ思ひしらるべき。

哥の体の事。中昔の詞すら耳どほくなりぬれば。まして上古の詞は。わが國の詞ともおぼえぬまでなりにたり。上古よりやう〳〵うつれる事。亡父か六運の圖説にてしるべし。此故に今世のひと。上古の体をよめは。万葉体などとなへ。中昔の姿をよめば。古体などゝいふ事となりぬ。しかいふもことわりながら。みなたゞその詞のうへをまねびたるばかりなれば也。上古の体は。上世の人のよみ所。中昔にたがひたるが故に。おのづから上古の体なり。中昔以來みなまたしかり。この故にまことに上世のすがたといふは。上世の人の哥のよみ所。四具のけぢめをくはしくしりて。さてよみ得たるをぞいふべき。中昔すらはや上古の詞のつけざまをうしなひゆきて。後世ぶりの端をおこ

せり。詞のつけざまかく時勢につれてうつる物なれば。ふるき詞を用むは。今の時勢にそむけりとのみ。大かたに心うる人多し。詞のつけざまよからむには。後世の詞とても用べし。上古の詞とても用べき事也。一首のうちに。上古中昔近昔などの詞のまじりたらむは。いとみぐるしきものなり。彼六運の圖説をみて。よく詞の時代を弁じおくべきことなり。詞の條理をふかくもとめ入る時は。上古はそのもとめに切なりしかば。詞もおのづから倒語に切なり。中昔よりやう〳〵情近く。詞をつくる事となりにたれば。詞もおのづから倒語にうとし。いかに時勢なればとて。詞の道にそむかむ。詞を用むやは。詞の道に背と。時勢に背と。いづれか罪の重かるべき。能〻おもふべきことなり。此故に体は新古を論ずべからず。たゞ詞の條理をつくし。いかにも直に遠ざかりたらむ詞づくりならむをば。哥のいたりとぞいふべき。新古体の議論。世に紛〻たれども。概するにたゞ。哥の外体の論にして。詞の道をもて論ぜるにあらねば。畢竟おのがひがみにしたがふにて。私なき論にはあらざる也。予みづからの哥よむも。人を導も。予が好む所におとし。いさゝかも私あらじとて。上古より以後。古人の詞をつげられたるすぢをたづねて。倒語の道をうかゞひたりしかば。年來この道をとき。おのれも力こそたらね。いかで直に詞をつけじとするに。千歳あまり世にかくれたる言靈の道なれば。今予がはしめていひ出たらむことのやうにおぼゆるにや。しるもしらぬもおしな

べて。あさましき事にいふをきくたびに。こなたも又あさましくおぼほゝ、さばかりあやしく心ぐるしくおもはゞ。いかなるひがみぞと。まのあたり予がいふことのすぢをも詰問すべきに。さる人もなく。たゞしりうことのみ。きこえくるは。わが爲のいきどほろしさにはあらず。此道のため。なげかしきことならずや。

文化十四年丁丑十月下浣　　御杖

故北邊成章大人の。はやく六運。五級。四具。のけぢめ。さだかにさとされしより。おほみくにぶりの。學びの規矩なむ。まさやかに。あきらけくなれりける。しかはあれど。かざしあゆひの二抄のみひろごりにたなるに。かつ〴〵心うる人だにあらぬは。(頭 いと(嘆息也)(頭 いたう(イトイタク也イタクトハ痛也イタウハイタクノ音便也)あたらし(アッタラモノト云)とて。御杖のうしの。敷しまの道ゆきぶりに。物せられて。和魂漢才の友もがなと。そが要領をあけられたるになむ。

文政七年甲申仲秋　　福田美楯

# 神明憑談

# 神明憑談

今よの人の心になき事ともをいへは人皆神ちりとやきくらむと
てなむ

（中臣御杖）イ

○或人云大人今五十にあまりて世に用ひられすその用ひられぬ所以は世の普通に随はれぬゆゑ（故）イなり本（必）それには故あるへき事なり大人に親炙する人はその故もとひ（問）イ聞て解すへけれと遠境の人なとは疑ひかつあやしむへし今（と）イわか問ふ所を答（ナシ）イへられよ錄すへしと云（いふ）イ

答（て）イ。曰我とても世にそしらるゝはほめらるゝやうにはなけれは普通に随ひたけれとこゝにやむ事を得さる故あれはなりそのやむこと（事）イをえぬ故といふは古書にをしへたる所なり（也）イいさゝかもわか（我）イ儘をいふにあらす予もとよに用ひられすは用ひられぬまてのことよ（事）イ是非なき事なりとおもひ（思）イてわか練磨のみ專らとし居れとも今足下のいふ所も一理あれは答（こた）イ（す）イへ申へし

○その人とふ（問）イまつ大人の（の）イ詠哥（歌）イ奇怪にして古人もよまぬこと（事）イよの人もいはぬ事をのみよみ人にもさやうにをしへらるゝは歌の邪路なりとよのそしりたえすいかに

答へていはく(曰)イ予か奇怪なる哥(歌)イを讀(よむ)イはさらに奇をこのむにあらす予か亡父成章ひろく古今の哥(歌)イにわたりて哥(歌)イに五級ある事を明らめたり此五級のやむことを得さる事さらに哥(歌)イの級のみにかきらす人物の級もこれをまぬかれすその五級とは一二三四五に上中下をたてたるこれなり(也)イ奈良以後よしとせる所今の世に(ま)イて哥(歌)イの正路とおもひたる(ゝ)イは三の級なりされと此京のはしめまては二をよめる人もありけるはさすかにいにしへに近かりけれは也(なり)イされは(と)三上より以上には哥(歌)イのイはなき物のやうにおもひ古人の秀逸もみな三上なりとおもへりさやうにおもふ(思)イも尤なる事にて三と一とは同し物のやうにみゆる(見)もの(物)イなりこの故に三をつねによめは直に一に進まるゝ事と心得(え)イて三をのみ人皆よむ也(なり)イまことの哥(歌)イにはあらねとも上手らしくみゆれは世(よ)イに上手と称する人三上を超るはなきものなり(也)イ三と一とはたとへは画に書(かき)イたる花とまことの花とのことく(如)イかたちは似て雲泥なり(也)イされは三をのみよむ時は生涯三にてつひに一にすゝむ事あたはさるへし哥(歌)イよむ冥伽(加)イにはせめて一生涯のうち一首なりとも一の級によみいたりたきか予かねかひなれはよの普通にはそむくなり

○又問一の級にすゝ(進)イまむとするに世によむ所の三の級よりはすゝみかたからん(む)イ(ナシ)事はさもあるへしそれには稽古のしかたもあるへきに古人もよまぬ奇怪なる所をよむはいかに

答へて曰たとへは武藝をならふにまつ最初にかたといふ物を教ふるなり(也)イそのかたといふ物みなその

一流の祖たる上手の妙理をきはめ(極)イてこしらへたるものなりされは日夜その妙手に鍛練せはいかなる堪能にもならるへきこと(事)イなりされとかたをつかひて直に上手になりたる人を聞かすある武術堪能の人にとひ(問)イしにそれにたかはすといへりかたに鍛練したるうへはしあひといふ事をさするなり(也)イそのしあひには相手の人いかなる手を以て向はむもはかりかたしその時それはかたにはつれたる手なり(也)イかたのことく(如)イ。むかへ(にイ)(向)イ(てイ)とはいはれすいかやうの變化に逢(ひ)イてもこなたも自在を盡さねはならぬ事ならすやこの自在を得たる人堪能。(とは)イ(也イ)なるなりこの故に哥(歌)イも變化自在をえむために古人もいはぬ所をよむなりかつて(へイ)奇をこのむにはあらす自在をふる。(ま)イへはおのつから奇なるやうにはみゆるなりされとも變化自在も事物をはしめ詞ならひに古人の法則をわきまへ。(はイ)その(其)(イナシ)法則の中にて自在をはたらかはいかやうの事をいふとも條理にはつるゝ事はなきものなり亡父これを二といへりかの武藝にてしあひに熟せされは堪能にいたりかたきに同しく二に鍛練せさる人の一の級にいたらむ事おもひもよらぬ事なり武藝に。(も)イはしめよりしあひをさする流義あるよし尤なる事なり(也)されと人をしふるに初學の人は多くは三なる物(ものゝ)イ(也イ)なり(也)イさやうの人はまつ三を以てみちひくなりその人に(の)イ材によりて半年はかりにて二をを(を)イしへらるゝもあり一年二年。またねはならぬもあるなりされは予つねに心かくるは二の級なりしかりとてこゝを最上の所(ところ)とおもふにはあらす稽古なり上手にならむとおもは(思)イむ(ぬ)イ人はいかや

うともすへし堪能の場にいたらむとおもはゝ稽古はたゝこゝより外はなきものなり古人のいひおきたる事をいふは上を撫たる。如きものにていとやすきことなりしかのみならすつゐに自在は得かたかるへし古人いはされはいは。ぬ事なりとおもふは心得ちかひなりよにある事物詞なに事かいふへからす。禁せられたる事古書にみえたる甚愚なる事なり

○又問稽古はいかにもさやうなるへき事なりされときこゆるきこえぬは別の事なるへし大人の哥はよにきこえすといふはいかに

答ていはく。世に聞ゆるといふは三なり理を詞につくす故にきこゆるなりしかれとももと詞といふもの高さは低きものある故の名なり短。は長き物ある故の名なりされは詞に理のかた〱をいへは片方。おのつからきこゆるものなりこれを詞に力ありといふへしされとも此片方をいふはまことはやすきものなり詞の最上は兩端いつれともわからぬ詞なり古書のかきやう古人秀哥のよみやうみなこの妙を得たり今体哥のきこえぬか哥。本意なり。聞ゆるは。皇國風にあらすいかにといふに哥はもとあらはにいはれぬ事をいふものなり。神武紀。以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎玆とあるこの倒語わか御國の詞のつかひやうにて。神武天皇の御時よりはしまれる大規範なりこの事はわか萬葉集燈の大旨にくはしくいへりそれをみるへし古今集の部立よりこのかた哥は詠物となれりその

詠物の哥は論の外の事なり混しおもふへからす御杖等か哥は高のしれたる事なるにきこえすといふは不審のことなりおもふにおのか力を御杖かみかきたる所まてみかゝぬ故なるへし予先年ある所の當座にゆきけるに同席の人皆三をいたりとする人。なれは予も三をよめりかやうのときはとても稽古もせられぬ事なれはいつとても三をよむなりこの時二首よみたるに端の哥は詞の都合あまり拙。きにすこし詞をかへたりしにその席の魁たる人をはしめみな奥の哥をよしといひけれは奥の哥を清書してかへりたりこれ奥の哥のよきにはあらすそのよしといへる人ゝの中に奥の哥相應したるか故なりされは予か門人に人の哥をみたりともいつれをよしとはかつていは。ぬ事なりおのか力のみゆることなりと申。いさめたり此故にきこゆるといはるゝもよろこはしからぬことなりすへて詞はわかいはむとおもふ所には本なきものなりそれを無理にいはむとする故の詞の心にまかせぬなり詞のつきかたきは皆この故なり共いはむとおもふ所のかたはらをもとむれは却て詞は自由にありてそのいはむとおもひし所をいひしよりも心よくこもりてよき詞はある物なり此事を人にをしへしにいはむとおもふ所たにいはれぬにましてかたはらのいかてかいはれむといひし人皆かくのことく心えたりそのいはれぬはもと詞のなき所をもとむる故にいはれぬなりとも弁へぬ。心から獄中にくるしむにひとしされとももとわかいはむとする狄着はなれかたきものなりよく〳〵練磨すへき

ことなりこのかたはらをたによくいひおほすれはよにいふたけもすかたも風調もおのつから具足すへきそかしもと。皇國の詞こと〳〵く此かたはらにつかふに宜しきやうに設けたる物なれと人〻さやうにはおもはすたゝわか門にあそふ人ならては解しかたかるへしされはよく聞ゆる哥よむ。上手なりといふもと。御國ふりにそむける事也このかたはらを云は即倒語なりこれに二筋ある物にて比喩も倒語なりまた比喩ならすしていはむとする所をはつれたるあり比喩はやすく比喩ならぬは難しされは初學のうちは比喩をよみならふへきなり

○又問しからは上古は倒語はかりにて正面をいへる事はなきにや

答て曰それは事にもよるへし正面にいひても妖氣にあたるへからぬことは直言せりいへは本妖氣。あたるへしとおもふ事はみな倒語なり哥はもといはれぬことをいふか本意なるに後世のことくいはてもよき事を哥によむは論の外の事なりたとへていはゝ佛の大小乘をいふかことしはしめに華厳をとかれしは大乘なりしかるに人皆これを信せさりけれはしはらく大乘をとかす小乘をとき後に人の心をはかりて法華涅槃をとかれたりそれさへ猶増上慢の五百の比丘はたち去りしとかや哥ををしふるにもかくのことく人のほとをはかりされは大乘ををしへかたき事なり小乘とても哥にあらすと云にはあらすかの五級の三なりされともそれも詞のつけやうによりては大乘たる哥も三下にも有

事あるものなれは大小乘は級にあてゝはいふへからす詞のつけやう大事なる事これにて察すへし

○又問大小乘の別さもあるへきことなりされとわか力の及ふましき所を志とせむは恐らくはかへりてすゝみかたからむはいかに

答て曰小乘より大乘にすゝむへき事勿論也前にいふかことくとかくは人による事なりから國にて自暴自棄とて自暴とはわか力のほともはからす無二に無二にすゝむっを云自棄とはわか力のとても及はさる事なりとすっるをいふ大乘をこゝろさすといへとも大抵法則あることにて自暴にてはかへりて進まれぬ事なり又自棄して大乘を心かけぬ人もあり稽古の志かたちてすゝまれましき所へもすゝまるゝ物なり全体志はいかにも高からむにます事なし躬恒貫之を至極とせはいかやうに勝達しても躬恒貫之には劣るへきなり人丸赤人を聖とせはつひに人丸赤人にはおよふへからすこれ哥にかきらす何の稽古。もかくのことし

○又問：議論甚高上なりしかるに大人の先輩學者契沖東丸眞淵宣長久老かたくひいかなれは哥にさほとの議論なくその詠哥ともその境にいたらさりしにやさはかりの學者みないはさりしことを大人ひとり論せらるゝは信しかたしいかゝ

答ていはくそれらの先輩學者いつれも博覧多識なりしかれとも古昔の後世おほつかなくなれる事と

もをたつぬるを専務として哥（歌）イはかはかりたつね入（る）イ。へき事ともおもはれさりし（ナシ）イなるへしさはかり各有力の人なれは此大乘の境（さかひ）イに入られなはいかなる秀哥（歌）イもよみ出らるへき事勿論にて残念なる事なり今の世とてももしこの境に入らはしたゝかなるへき人も少からねとから人のいはゆる先入主となるにて今まて學（ひ）イ。たるか捨かたきは（也）イをしむへき事なり予大小乘をわきまへたるはひとへに亡父かたてたる五級の恩によれり亡父か詠哥（歌）イ三なりしは次第によみ登らむの心なるへし不幸にして亡父四十二歳オイにレイ（ママ）。て沒せり亡父もと皆川愿か弟にてわかき時はともに漢學せしに兄弟おなし（同）イ事せむんイは無益なり（也）イとて中年より國學にうつれりされは國學に入（り）イ（の）イ。て。年限みしかくして遂に志をとけさりしは（ナシ）イくちをしき事なり也イ予今亡父（ナシ）イか志を繼てこれを述る事年を經にたり（し）イかの先入爲主のみならす予かいふをあなつらはしくおもふ（思）イか故によに信する人すくなきは（し）イ是非なき事なりしかれとも今さら心（更）イ（こゝろ）をあらためかたきは古書ともの敎なれはなり（也）イ予をあなつらはしくおもふ（思はゝ）イていかほともあなつるへしかつていとはすたゝ（アキ）イ。皇國風のかたしけなさを皆人にしらせたき事予か念志イ願なり也イ

○又問神妙の御答なり也イしからは五級を心得むこと（事）イ肝要なるへしその心得を傳へられよ

答ていはく（曰）イはしくは書とりかたし猶口授すへしその大抵をはイいはゝ四より末は罰なり三以上を哥（歌）イとすされは前にもいふかことく（如）イ三をよむもイ世の哥（歌）イも更に／＼哥（歌）イにあらすぬイといふにはあらす三をのみつね

によめはつひに一にいたりかたき事をいふなり二は人の力を盡し自在變化をきはめたるなり此故に。堪能の哥の一と二とをくらへてみれは一より。二は級くたりたれとも。おとろかるゝまておもしろく一の哥はかへりてさまてもおもはれぬなり予もこれはいかなる故そと年來あやしくおもひしにこれ。さやうあるへき事にて二はもと哥の極なり一はかへりてその二の力を詞の外にあましたるものなれはなりから人も顔淵を如愚といへるこれなり力は十二分にみかきて六七分によむを一といふと心得へしされは一は二のうへにはあるそかしこの故に三はかへりて一に似たり二はよに奇怪なりともいふなりけりもし三より直に一にいたらるゝならは勞もすくなきことなるへけれと。今人古人ともに二のよめぬ人の一をみすこれ五級の肝要なりなにのわさ。にても堪能はやすくといたらるゝ物にあらすよくくおもふへし

○又問二を專と心かくへき事さもあるへしされと二を心かけなはおのつから古人もいはぬ所をよむへけれはおのつから奇怪をまぬかれかたかるへきはいかに

答て曰全体古人とてもいひのこしたる事は多かるへき事勿論なりそのうへ古人のいはさりし事はいふへからすといふ事古書にいまたみすかつ奇怪なる事はよむなといふいましめも古書にいまたみすさやうの事に着しては二の稽古はしかたかるへしそれもと人にほめられむとする心まぬかれさる故

にさやうの事心にもかゝるなり(也)イもと二は哥(歌)イの稽古なるならは(か)イ人にみすへきにあらすこゝに決斷よわくては一(二)イはよみかたし柔弱なる心をかりにももたはまことの稽古はせらるへからすとにかくに人にほめられたきは人のさかまイなる事(アキ)。神書につまひらかなり也イ是非なき事ことイなりされと志あらん(む)イ人はこの心得肝要の事そかし

○又問けにさる事なるへしされとある人のいふは哥(歌)イはさほと心をくたきてよむ物(もの)イにあらすたゝすら〳〵とよむ物(もの)イなりといふ(云)説あり大人の説にとイ表裏なるはいかに

○答て曰その説は古人の哥(歌)イともをみれはさのみ心をくたきたる物ものイともみえすたゝすら〳〵とよみたるやうにみゆれはなり(也)ことに心をいれ(入)イイナシてふかく考(ナシ)イへたる説にあらすたゝうはへ(べ)をみての根なし言也さやうの説にまとはゝ生涯常人たるへきそかし古人の哥(歌)イうはへべイのすら〳〵とよみたるものゝやうにみゆるは哥(歌)イによまむとする情をうつすへき倒語を案するにさま〳〵と心をイナシくたきふとよろしき倒語のすちをおもひ(思)イ得(え)イたる時すら〳〵とよめる物なる故に内の思案は詞にみえすしてたゝすら〳〵とよめる物のやうにみゆるなり(也)倒語をえむ事なみ〳〵の構思にてえらるゝ事にあらすみつからよみ試みてしるへしこの説をいふ人のよみたる哥(歌)イをみるにさらに〳〵古人のなみにあらすゆめ〳〵さやうの根なし言にまとはすしてさらるゝほと骨はをるへき事そかし

（）又問骨ををらむには專ら詞の條理をたつぬへきにや詞の檢紲は先輩學者おの〳〵ぬけめなく紲されたり猶その外に詞をくはしくたつぬへきたつねやうもあるにや

○答。ていはくけに〳〵先學者心をくたきおかれたれはその上にはしかたもなき事のやうにおもはるゝ事なりしかれともその紲されたるは詞の義ならひに用ひかたの例なとなりそのうへはくはしくも紲しおかれぬなり共ひとつふたつをいはゝ發語助字やすめ字のたくひ何の故ありてこゝには發語をおくそともたつねすなにの故ありて助字を用ふるそとも紲さすなにの故ありてやすめ字はおくそとも穿鑿せすたゝ發語助字やすめ字なと云名はかりなるは麁なりとやいふへきこれにかきらす枕詞なとはたゝ哥をのとむるためなりなと大やうにいへと古くは人名に枕詞をおきたるか多し哥文にはしかもあるへけれと人名に冠らするまてにその檢紲いたらすその外てにをはもなにの故にておくそともたつねぬをいかてかいたれりとはいはむされは後世は枕詞は緣語をいくつもつかはねはえおかぬ事となれりこれ枕詞の本意をしらぬゆゑなりてにをははさのみ紲すに及はす自然とかなふものなりとて檢紲にわたらぬ人ありけに古人の口拍子をよくおほゆれは大抵そこ〳〵にはなるものなれとふと新意を求むとする時は古人の口拍子にかはる故におもはぬあやまりもいてくるそかしやかけりにけりの別もしらさらむは危き事にあらすやされはよく紲してあしきといふ事はあるへからすこれ

にから〔くイ〕すすへての詞義をしりたるはかりにてつかひやうをしらされはもとつかはるゝ物にあらす義をしりて義にかなはするほと〔の事イ〕。はいとやすき事なりよく〳〵おもふ〔思イ〕へし詞はよく糺さゝ〔イナシ〕れはおも〔思イ〕ひかけぬあやまり〔誤イ〕もいてくへきは古今集序に花になく鶯水にすむかはつ〔蛙イ〕の聲〔こゑイ〕をきけは云〻〔云ゝ〕とあるこ〔りイ〕の花になく〔はイ〕。さもあるへし鶯は花にも松にも竹にもなく物なれはなり〔也イ〕かはつは水にすまさるはなか〔けイ〕れはかくはいふへからすすへて物いはぬ草木鳥獸の類はものいはすとは〔もイ〕いふましきなり〔也イ〕鳥虫なとのなくといふも今まてなかさりしか鳴く心なれはそこを心にもたすしてなくといはんは〔むイ〕あるましき事なり〔也イ〕これらの事。心えて〔よくイ〕いふへき事なり〔也イ〕

○又問よに哥〔歌イ〕は風調よくたけたかくすかたやすらかなるを貴ふこれはいかに心うへきにや答ていはく〔曰イ〕ふるくはいはぬ事なり〔也イ〕いつれも中ころよりの事なり〔也イ〕されと風調よくたけたか〔高イ〕く姿やすらかならむにしく事あるましき事なれとそれを的として哥〔歌イ〕よむへきにあらす詞の檢糺今いふかことく〔如イ〕よく行とゝきて麁に詞をつか〔はイ〕。ぬやうにすれ〔よイ〕は風調もおのつからよくたけもおのつからたかく姿もおのつからやすらかなるへき也〔なりイ〕詞に檢糺せすしてこれらを的とするは末なりよく〳〵おもふ〔思イ〕へし中にも調といふ事は詩に句調といふかうつれるにてたのむへき事〔ことイ〕にあらす

○又問しからは哥〔歌イ〕はいかなるをよしと〔はイ〕。しいかなるをあしとはすへき

答ていはく、もと哥に巧拙をいふは本意にあらすたゝいはむとおもふ情よくこもりてさとしたるそらになくて詞いとをさなきを哥の本意とし詞に情あらはれていひさまいやしきをあしとはすへき事なり古昔ともに哥のよしあしをいへる事なきを以てしるへしたゝ萬葉集中防人等か哥を載られたる所に拙劣なるは除留みゆされと今の世巧拙をいふにはいたくことなりしかし家持卿延暦中にうせたる人なれは是を巧拙を後世いふ祖なりともいふへしふるく哥合と云は根合菊合画合扇合なといふにおなしく人々をして哥よませてあつめられたるはかりなり天徳哥合にはしめて判の詞有て哥の難をいはれしよりよゝにさかりになりて後には獨鈷鎌首にさへ及へり畢竟今の哥の巧拙を。のみいふは哥合の弊なることとみつへし

○又問哥の体新古いかゝ大人の哥ともすれは古体なり又社中に。も古体をよむ人多し古体貴くもあらめと今の人の耳に遠き詞はかりにて畢竟時勢にあはぬ事なるへしその議論きかまほし

答。ていはく。さらに／＼古体をこのむにあらす好むにあらねは社中にもさらに／＼すゝめす今体一首古体ならはたゝ一言も後世の詞は交ふへからす一首新しくは一言も古言をましふへからすふと古言のましれるは古言をしれるを慢するやうにて甚みくるしきものなり哥には短けれはまゝ新古を糺して詞をつかふ人も多し文は長篇といひいふへき事も哥とはことなれは新古をまし用ひたる人

もあり哥も文もたゝ古くは仝くふるかるへし新しくは仝く新しかるへき事なりしかるに古言は言
靈の道ありし世の詞ともなれはすへててにをはのつかひやうにて倒語によろしかるへきやうにかま
へたり後世言靈の道かくれて後は直言のそなへなれは倒語をならはむとするに。古言甚情よくこも
るものなりそのうへ古言は質朴にて不自由なり後世は詞も自由なりと今の世におもふは古言をしら
ぬゆゑにて古言新言をくらふれは古言は自在なる事百倍なるもの也この故に言靈を貴ふにひかれて
おのつから古くなるにてさらに〳〵。好むにあらす社中の人も此心をえたるはおのつから古言を用
ふるなりされとも人の耳遠きことをしりなからいかにしてつかふそといふにもと古言の今の人の耳
に遠くなりたるは此京のはしめの人つかはさりけるかならひとなりたる故に耳遠くなりたるにてさ
らに〳〵。古言のとかにはあらすしかるを古言のとかのやうにおもひていみ嫌ふはあやまりにあら
すやされは聞えぬは畢竟しらぬゆゑなりわか社中よくしりたる同志はいかなる古言も耳遠くはなき
にておもふへしおのかしらぬことを恥ともおもはすみたりに時勢にあはすなといふは遁辞にあらす
や仝体世間一統かくのことくなれと國処によりてこゝは古体行はれすなといふ所あり所詮はその國
處いまた古言をしらぬか故也としるへしそのうへに後世つかふ所の詞といへとも多くは古言なりそ
の中に轉用せるもあり又はあやまりたるもあり又俗語の雅言のやうになれるも少なからすそのあや

まりをしらむにそ古に明らかならてはしらるへからすこれか聞ゆる聞えぬの別をいはす稽古には古言もよくつかひしるへきことなりされと古言といへとも哥はよみかた詞のつかひやう後世なるか多しこれはたゝ古言なりといふはかりにて新体同前なりすへて詞に時代あることはいふに及はす詞のつかひやうに時代あるものなれとこれを論する人なしなけくへき事也されとつねに社中の人々にも言はかりをふるくなして萬葉体なといはるなといさむるは此故也あまりに人の聞えぬことを専らとせは第一　御國ふりに逆ひきく人の器量たけつゝに哥をよまねはならぬやうになりぬへしそれは哥をよむにはあらて哥によまるゝといふへきなり予もよにいみ嫌はれたくはなけれと人の心にかなふやうにせむとすれは　御國ふりにたかひ　御國ふりにしたかはむとすれは世の人の心にかなはすやむことを得さることなり

（一）又問：御國ふりのためによの人の心にたかはるゝこと神妙の御事なり全体さほとまて心をくたきて哥をよむはなにの益ありてにやいかはかり御國ふりにかたしけなき事ありて世の人の心にもたかひ給ふそやきかまほし

答ていはく予十一歳にして父をうしなひ叔父成均亡父に學ひたりしに教導せられてこしをれをもよみならひたりきしかるに予つらつらおもふやう哥をよむ事みつから。益なく人にも益なき事ならは

たとひ父の志たりといへともおもひ捨て經書の一巻もよまむにしかしもし益あることを見出したらは生涯哥もよまむとおもひよりぬ今おもふにこれ今予か世に行はれぬたねなりけりそれより古書ともに詞をつかふ教となるへき語はこれかれを徴して旨をたつね全体古書のかきかたにも心をいれて廿三四才の頃やう／＼疑をときしかはわか伯父皆川愿に物かたりのついてにわか御國言の至妙なることをかたりしに倒語のいたり深きこと大に感して予かふかく考へたるを賞せりされとそれを以てわれを。益し人をもをしへむとの心なるへけれと人はもと言行ふたつを具せされはかなはぬものなりしかるに夫はたゝ言のをしへなり行の教へとなる事なくては全からすさほとまて言の事いたりをきはめたるに行の事具せさるはいとをしきことなり言もさはかりの深長あるからは行にも本大益のをしへあるへし此國の光をあらはすへきわさなれは今一案してふかく心をいれよといひしかはいたく感腹しわか愚昧をはしてそれより熟思しけるにわか御國にて行のをしへとなるへきもの

神書より外なしと世々の末書ともをくりかへしみしに或は儒に牽强し或は佛に附會し又は儒仏をはなれたりとすれともその説私にていつれも人の教とすへきにたらすわか御國のてふりともいふへからぬ事ともなれは數年本書をくりかへしたりしに諸家の流もと倒語をしらすしていたつらにおもひを費しけるにてとるへきはひとつもなししかるに倒語[illegible]を以て多年みしにからこともあらす天[illegible]

にもあらす別に人事に切なる事思ひもかけぬ妙理あるに心つきぬすへて人智を超たる事のみなるはことわりなる哉神書一部すへて神智を述たるものなり予三十七歳まていかてこの御教あきらめさせ給へと念し奉りし。冥加にや凡智の及はさる事とも心えられてその年の九月にはしめて講しきそれより今年まて十七八年わするゝ事なくおもひをこらしたりその間意外の事ともにあひけるにこの御教の御かけにてことしまて。恙なしすへてよの道理そむかれぬものなる事いふに及はねとその道理より外にそむきかたき事有これ則自然なりこれを儒は天命とし。佛は因縁といふけに心より外にやむ事をえさるものなれはしかおもふも尤なる事なりこれわか御教にいふ神なりされはこれたゝよに自然といふものにあらすしておしなへての理にたかひたる眞理なりされともよに自然と理或は理外の理なといふものあり今少し物をへたてゝ痒をかくかことし世には自然の理にてやむことを得さること也とのみおもひすつれとそれをおもふにもとおしなへたる理をまことの理とおもふより自然の理をよそにおもふにてこれ大なるあやまりなりそのおしなへたる理はまことの理にあらす自然の理か眞理也とおもふ時はさらに世人のおもふかことくはあらさる物なりかくいふ故はその世に理とおもへる理は人智なり自然なりとおもふ理は神智にして人智神智は相反するものなりこの眞理甚たのみかたき物なれとこれをまことの理とたのまされは神に近つき奉ることえかたかるへししかれと

もそのおしなへたる理人智にはこれより上の理なしとおもひえぬものなれはその理にはかゝはるなといふにはあらすこれより外に理なしとおもひ眞理をまことの理と心におもふかの別をいふなり仝体神は御かたちおはしまさねは御口も御手足もおはしまさすしかとみとむる事はせられねと莫太の妙用おはしますものなりこれを御教の本としたまひしからには神事にをしへられたる事ひとつもあらはにせよとにはあらすのこらす心術なれはといふ所の理もこの心わするへからすすへての人事天下を治むるより國家の諸經濟一小事にいたるまて神力をかり奉らすして。何の成功も大ならさるものなりたとへは農民のたかへし種まき苗うへ草きるたくひは農民のわさなりそれより稻生長し花さき実のる事はかつて農民の力の及はぬ所なりこれ神力なりたゝいさゝかなる一事をもおもへみなかくのことくその成功はたゝ神力をたのまねはならぬ事なり何事の成功。もみなわか成功力なりとおもふはあやまりなりされと人事の中には人力にて成功したるやうなることもあるものなりたとへは世。諺にたゝきやめはくひやむといふかことくけにたゝきやめはくひやむものなれは世人これを信すれとも我心から懶惰にてたゝきやめはくひやむ人は論の外なりもし病してやむ事なくたゝきやまむは是非なきことにあらすやそのたくひは病にてくひやむ事やむことなき事にて自然なりとあきらむるなりこれ大なるあやまりにてそれは人力をたのむ故なりたゝきやみてもくひやまぬは神力そな

し又たとへは合戰に五百騎にて二三萬騎の敵にむかはるゝは神力なりわれも五百騎かれも五百騎ならはたゝ人力の剛柔によるへしかはかりかたしけなき神力ゝたのまさるはみつから幸をしらぬなりしかれとも。神慮はたのみたのまさるの差別なく人をあはれみ給ふ物なることは柴薪の乏しき越後の新かたに砂もえ石のともしき安房の國には一年に一たひ海中より石をふきあくるたくひにしるき事なりされといのらぬといのるとには神力を來らしめ給ふ厚薄はあるへきなりされは神力はいのるにしかすといへとも愚夫愚婦の神をいのるかことくするをいたりとすへきにあらす神の來りたすけたまはむに都合よからむやうに言行をなすへしこれ神力をねかふのいたりなりこれをたとへは人も酒を好む。は酒をこのむ人の家には來よきかことくゝ神の御心にかなふへきやうに言行をなすへきなり前にもいへるかことく眞理はたのむにかたき物なれはたゝ神慮のことく言行を用ひねはならぬ事なれはこれをたのむ。こと肝要たるへきことなり儒のいはゆる仁義孝悌忠信のたくひ人としてまぬかれかたきことなるに神書に一所もこれをしへられすとの故に人儒教をたふとへともわか御國ふりにてはつとめてするはまことの孝悌忠信にあらす心法にておもはす孝悌忠信となるへきその心術を敎へられたるもの也されはすへての説格物のをしへなしとおもふはくはしく神書をみさるか故なりこれかの眞理となへての理との分別そかしされとも此別人としていと

心えかたき物なる。故に祓をはこの初門とすよに祓。は不浄をはらふわさなりと心得たるは例の詞の表をのみたのむか故なりもと祓とはいへと悪祓善祓のふたつをあはせて祓とはいふなり大祓祝詞に天津罪國津罪をはらふ事をいへる是なりこの善悪。一祓の事わか。御國ふりの第一の事なり悪祓はさもあるへきことなれと善祓におひて誰も〳〵解しかねたり先達學者もおの〳〵説をかまへたれともいつれもおのか推量をいひてその義神書にわたらすこれ公ならぬ證なりもと人として善悪は大切の事なれはこれをしも心をくたきてよくたつぬへき事なりこれにおもひかねてにや先達の説にから國の老子といひし人のいへるかことき事を云説もきこゆれともと諸書に徴。すしてわたくしにいへるなれはこれ又うけかたしこの善悪二祓明らかになくは惣体わか御國ふり垢ぬけはせしとこれにくるしみけること數十年やう〳〵これか心を推したりしも神の御恵とそおほゆるとにかくに神を本としたる御教なれは不言。して妙用あることをたつとふなりされは直言をいみて言靈の敎そあるなりされとも直言もまたやかて倒語となる事も有へし能おもふへき事なりされは哥はいにしへこそ詞もよく人に通したりけれは人事の間にその用も有けれ今は俗語といふものいてきて哥の詞は通せさる人多けれは（されは世に狂哥といふものをたつとふその理あるやうなれと哥にはすくれて貴き事あり爰にくはしくいひ。かたし議論あらはいふへし）畢竟言語に倒語

を用ふへき稽古なりと心得てよむなり人もかく心えてよむへしとをしふるなり此故に哥道はゝ神道の一端なれはおろそかにすへき物にはあらすこゝを以て前にいふかことくよにいは。ぬ事ともをはいふなり仝体世にある人ゝ士農工商にかきらす遊民まておのか自業はおのかさちなり神書に海さちはおのかさち〳〵山さちはおのかさち〳〵とあるこれなりされは神道はその自業〳〵には一切かゝはらす自業は端にて神のたすけ給ふ所は別なりこゝを以て予今處士となりて外にしならひたることもなけれは哥を以て妻子か飢をしのけは哥は予かさちなり人ゝにさちあらせむに哥ををしふるもその一端なりとはいへとも世の人ゝたゝきやみてもくひやまぬさちあらせむには神道を。しふるにしくはなしこの故に何ことと。のもてあそひ又は儒佛のかたはしのやうにきゝなしてかはかりかたしけなき御ををしへともおもはぬは千年余よにかくれしゝるし是非もなきことなり先年浪花の篠崎長左衛門といふ儒先生に奥村何かしか家にてあひし時予にいへらく足下。皆川鈴齋の姪にて儒を學はれたらむ事勿論なり儒書をみるもの佛書をみぬ人なしさためて佛書もみられつらむを今儒佛を捨て神學にのみ心をよせらるゝは神道の儒佛二教にまさりたる故ならむたゝ一言その勝劣をきかむといへり。予答へていふにはさらに勝劣を以て儒佛を學はさるに。あらす諸教すへてその國ゝの風俗にし

たかひてたてられたる物なれはから國の人ゝ儒教。しかるへし天竺。人は佛教かなふへしわか國人は。神道を學はむは風俗にかなひてすゝむに近道ならむとてなりとこたへし事ありかつて勝劣するにはあらねとかの仁義孝悌忠信のたくひもおのつからなるを眞物とする。ことくすへてこれわか御國の風俗そかし言行といふかうちにわか御國はことに言を先とす神書に靑柴垣之件力競之件と次序したるこれなり他の國にては理たにあれは直言することをいますしかれとも直言は。神を蔑にする事多きものなれはかへすく哥を讀て言の人の心に入る入らぬの別を明らめしるへしこの道世にかくれて千年にあまれは今更せむかたもなけれと予つらく多年此道のよに行はれぬことを考ふるに予この御教を人に說。事數十年そのかひなきもことわりなりかくたにあらはふたゝひ世に行はれ天下の人士農工商。遊民にいたるまてわか力の外なる幸をうへしとおもふことあれと公におそりかつわか力の能はぬことなれはたゝ數十年。神慮をまつ心くるしさいはむかたなしか。はかりの御敎をよに埋もらせおかむこと玉を淵に沈めたりとやいはむ錦を暗室にをさめたりとやいはむ予か年ころの歎。たゝこのひとつなりかはかり予は人しれす心をいたむるを近頃世にわか御國人は敎に及はす神書もたゝ皇御祖の御はしめを記せられたるものなりといふ人ありてその說よにひろこりますく予か歎を妨くることとあさましき事ともなり畢竟古書は倒語なることを弁へすたゝ詞のうはへ

にめを奪はれたる妄説そかし神書は教ふみにあらすといふ證古書にみたる事なしこの京の物なれと古今六帖の哥に葦角のもえいてしより天地と人とのしなはさたまりにけりとよめるをいかてかわたくしにをしへふみにあらすと。さたむへきかやうの妄説さへ世におこり來。る事ひとへに。御教かくれて久しくなれる故なりかへす〳〵予か人しれすおもふ人ふしたに時いたらは或は儒佛に混し或は。御國のいにしへを貴ひなからわたくしの妄説をおこして世人をまとはすこともなくなり神ゝの御稜威ます〳〵さかりになりな。むものをとこれをはなけかて何をかなけくへからむいにしへは神祇官をは太政官より上とせさせ給ひしをたゝ。神のたふとき故なりとはかりおもひなかすは心くるしき事なり御政の本たれはこそあれゆめ〳〵此道世にかくれて後の妄説ともにまとはさるましき也

以上答へたる条ゝいさゝかも私意を以ていはすいつれも古書にみゆる所をのふるなり今一条ことにその證をひくにいとまなし疑はしくは來てとふへしゆめ〳〵世の古證もなき説ともにまとふへからす

文政五年壬午冬十一月　須賀室にしるす

（ナ）・御　（シ）イ・杖

（以下ナシ）イ
ゆふたすきかけまくもあやにかしこき神典のくすしき中のくすしき八雲の五句三十一言のことたま
のさきはひと尋常のうみのふかさ山のたかさのことなかりぬともなにとして神しるしのなからのた
へなる神ことのちゝのひとつたにたゝへらるへきはやく須賀室の門にいられむ人はよしやその室に
はいりかたくともあなあたらしやとてかつ〳〵きゝうへけめともおのかしゝきゝひかみつゝうつろ
ひゆくへきうつゝのいめさませとてことあけすめりし人にことあけせぬいにしへふりはとありかく
ありとしるされし此とひこたへをしもよくよみえてはうへも言代主のおほみ神の大人にかゝりまし
けらしとまなはさらましやあふかさらましや

文政六年癸未二月　　　　美　楯

イ奥書
この文よみけるに毛も
いよ立はかり貴くかしこ
けれはよめる
左東丸

ひちりこの下に朽(ママ)なん

うましたま

そひらにおひて

出しかめはも

文政六癸未年六月寫之

右者左東丸君之御所持則御哥御直筆にて珍物なり大久保俊雄大人より借用してうつす宗匠之うつし給ふ本には美楯翁のかきそへあり

明治十三年三月宇津壽 春章

# 北邊家秘

# 北邊家秘

男成壽藏

## 催馬樂三歌の事

神樂は心のおもふきをさためさいらは事におるへきやうをいへり

折 時 事 詞 身 人 物 心 かたち すかた さま よし 所 わさ

阿那尊 事にあたりてよくおもひやれる也

あなたふとけふのたふとさいにしへもかくやありけんけふのたうとさ

(朱)ニモコノヤウナヿカアツカシラン(ママ)

古語拾遺に事の痛切なるをあなといふといへり古人痛歎のことはにて今の人のあらあつあらさむなといふことはなり(朱)腹ノ痛ヲアナハラナトモイヘリ物ノ痛ナル𪜈ヲ云也此上モナクイタリキワマル𪜈也

たふとはしたしみかたくとり得かたきかたちある物をおそれかしこまり思ふ心也

けふとはむかひたる折をいふ(朱)只今ト云ヿ也今ト哥ニヨム𪜈ハ今ヨリ先未來ニカヽル也

たふとさのさはあちはへる心あり(朱)コノタウトキヤウノヿガト云心也今俗ニウレシサ目出タサナト云ト同サトマハ通スル心モチアリ眞ト云ンカコトキヿモアリ

あなといひけふといふにて心ひとへなるさまをみせたり事のたふとく心にも詞にもあまれる時は

まことにきしかた行末をも思れぬ（ママ）はかりなる風情をかたとりたる二句也

いにしへとは時の行時のきたるをいぬるかたくるかたとしてきのふよりおちをいにしかたといふ

へは野へ山へ春へなといふに同し詞也

其所をひろくさしていふことはなり

（朱）今目前ノヿ也目前ニナクテモ片〻ニ主トスルモノヲオキテ云言ハナレハ其主トスルモノト引クラブル也

かくはむかへたる折のありさまをつゝめていへりいにしへもかくやありけん（ママ）はためしを思へる也

ためしを思ふはつゝしみのきはまり也人のかみとなりつかさのをさるとなる人のうたへをきゝ事

をはからふにまつふるきためしをひきてとりおこなふもたふとめる心也めのまへにあまりに尊く

かしこく思ふにつけてわか身をもおもひいにしへもかゝるためしありやと思ひやれはさるかしこ

き折にあひたふとき事におるへき心もちひのさましらるゝ也

## 新年

あたらしき身のとほくなかゝらん事を思ふ也事にあたりてよく思ひやれはつみあらためやすし

（朱）アラタシキト云ヘシ新ノ字ノ心也アタラシキト云ヿハ心ニオシミ思フヿ也

アタラ此身アタラヨアタラ月ナトモイヘリ近古混セリ

あたらしき年のはしめにかくしこそ（朱）ノゴトクニテ つかへまつらめ（朱）ウヨ 万代までに

（朱）シハ助辞也只助詞トノミ古来云キタレトモ（マヽ）故ナクテ人ハキニアラス是ハ物ヲタツナ

モチアハセ云ヰニツカフ詞也コノシ字モカクト云言ニ何カ一物ハアルナリソノ一端

チトリイテヽアラタシキ年ノハシメト心ニモチアハセンカ為也

あたらしとはよくあらたまれるをほめていへりいにしへは物の（朱）チをしくいたはしき（朱）ナおもあたらしき

（朱）以下ノ文コ、ロヨカラズ

といふはあらたにきよけなる物はけかれん事をおそるゝ心ありとしのはしめは人も物もあらたまれる時なり

つかへまつらめとはかみにしたかふ也つねの時もあれと年のはしめには人も物もきよらなるこゝ地するをかくてこそたふとき事にもあ[ら]めと思ふ也

よろつ代までにとはとほくなかゝらん行末をかねていへり

古今に大なほひの歌とていたせるは古人此哥をもて大なほひの神をまつれる也大なほひはいさな

（朱）古今大直日ノウタ　アラタシキトシノハシメニカクシコソチトセヲカネテタノシキヲツメ　日本紀ニハトチ本哥ヲ出セリ　（朱）大直日神　神直日神ハ

きの尊みそきし給ひ曲れるをためさせ給ひける時にあれましゝ御子にてつみをあらため心をきよ

人ノ神氣ノ屈曲スルヲノバハセ玉フミタマ也クハシクハ神典ヲマナビテシルベシ　ツミヲアラタムルト云テハオロソカ也

むる事をみたまとしいまそかる神也さて人のあしくまかれるをもよく見なほさせ給ふによりのと詞に大なほひといふ神きゝ直し見直し給ひてむとあるもこれ也凡人つみなからむ事はきはめてかたしたとへはいみしききぬといへとも久しくしてはちりをうけけかるれはあらひあらためむにはしかすけかれしとてきすしてあらはきぬといふ物にもあらしされは罪なからむよりはつみをよくあらためむこそ大なほひの神のみ心ならめよくあらためて万代までにけかれしと思ふは行末をつゝしめる也

## 梅枝

よくきよまはりぬれは時いたらねと遠からぬをいへりとほくなかきにあらされは時まち得かたし

うめかえにきゐる鶯はるかけてなけともいまたゆきはふりつゝ

(朱)クケレド(朱)ヤツハリ　(朱)ガ　(朱)フリスルハ

(朱)ハルカケトハ冬ヨリハルマテト云心暗ニ冬ト云ヿチフ、メル也

うめかえはきよまはれる所なり

鶯はきよまはれる身也梅の本上冬よくしつかにて春をむかへてめをはり花さき葉をいたす鶯の本上ふるとしよくこもりゐてあたらしき年を時としていつきよまはらむとする人の心もかくそあるへき

きゐるとは身清まはりてはおのつからきよまはれる所のさりかたさに久しくをる也

春とは其時をいふ

かけてはきゐるの詞にあはせて冬より春へかゝる頃をいふへし

なくとは身にそなはりたるいさをしの外にあらはるゝ也よく鶯をやとすは梅のいさをしそなはれる也よくなくは鶯のいさをしそなはれる也かく身にあくまて清まはりて猶時をまつへき也道をしれる人はよくさきとのちとをはかりてあやまらす所をえて時をまつはよく時をしる也時をまち

(朱)テ
轉所をさたむるは時をしらぬ也
いまた雪ふるは時のまたしき也またしきにはちかつけることはりありとりていはむにおほそらよりいたつらなる雨のふりくるにあたゝかき氣のせまりてこほりて雪となれは冬のきはまりにしてはるのきさしを見するもの也梅も鶯もよく清まはれる心はあらみたま也よくはるをまつ心はにきみたま也

おほうたこゝにいたりて人のふたたまをのへたり

阿那尊はきしかたをつゝしみ新年は行末をつゝしむきしかた行末をつゝしめは身おのつから清まはりて梅枝の所を得春の時をもまつへきをいへりたとへは人の身すくやかならむ事を思へとあるはわらはおひより父母にうけえてよはきもありさらても人となるにしたかひて心に思ふ事身にふるゝ事よりやまひと成てつねにこれをうれへなほしおさめはやと思ふかことしいたつらに思ふは思はぬにはまさらすさる人の事にふれてつゝしみあやまらぬ心もちひあれ[は]やまひさりて身すくやかなるかことし

## 影の事

歌にかならす影あり古人もよめる事也所詮題詠の心得なれとも耳にちかく心得らるゝは此事也このかけの事すこし哥よみつけたらん人是は影也かれは影也なとこそ思ひえねつねによむ處也凡影によみつけてさたまれるかけあり哥よくよみえさるほとは此さたまれる影のみをよみいつる也たとへは連哥師の連哥したらんかことしさたまれるかけといふはたとへは雲に風雨花に色香なとつねの事なりまた本哥をとるにもおのつからかけありたとはゝ宮城野をよむに木の下露かけとなり又雨にまさるなと影となるかことし此外名處によみつけたる景物なと大かた影となる物也されとたとへは月といふ題を得て姨捨山をよみ山吹をえて小島をよむ時は景物主となりて名處影となるへしうたかふへからす又しのたの杜の千枝末の松山の波室の八島の烟なとみなさたまれる影也哥めつらしきといふはかけのやかてめつらしき也月をよめるにつもらぬ雪をはらふ秋風なと雪をかけとしたる類なり哥よくよまさらん人のめつらしきすかたのみあるは此影のさたまれるをのみ思ひうるまゝによみ出るゆへなり古人は心にかけをたてゝもよめり詞にも心にも影はある物也其理を深く思ひひろく見しるへし

六義のこと貫之かかける古今の序もはら子夏か詩序をこひねかひてかきたれは六義に比して哥のさま六つなりからのうたにもかくそあるへきといへりしかるに詩の六義もとより六くさのすかたといふにかなはねは細注すてにこれをもとき先達さま〳〵に注せられたり予つら〳〵思ふに哥のさまむつなりといひてそへ哥かそへ哥なんと名をおほせたるは貫之か所爲なれはそへうたを風かそへ歌を賦と思ひあてゝ詩の意にかなはすとて貫之をそしらんことあやまれるにあらすやかならす詩の六義に同しくせんとならは哥におひて益なきのみにあらす細注にひける哥もかなへりとも見えすこれらは貫之か心をえぬ故也所詮貫之かゝける所にしたかひて六くさをさためんにはしかし予ちかき世まてをとりて貫之か心をくみて六くさをわかちたることあり今しるしてのちの人のうたかひをまつ

そへ歌　詞に心をあらはさすひとへに物のうへをいひたるをそへうたとす

めつらしや（朱）シヒカナ 花のねくら（朱）チ にこつたひて谷のふるすをとへる（朱）ウタル うくひす

かそへ哥　詞のえんにすかりて心をあらはにせすうへによみつゝけたるをかそへうたとす

わすれすよ（朱）ハセヌゾ おもひおきへの浦千鳥なく〳〵出しあとの月かけ

なすらへ哥　物ひとつの上をわか心になすらへてこゝろをあらはしてよむをなすらへうたとす

沼ことに袖そぬれけるあやめ艸こゝろに似たるねもとむとて

たとへ哥　たとへそれはさりとも是はかゝりなといふたくひをたとへ哥とす

(朱)クマヒゾヨ

なひかしなあまのもしほ火たきそめて烟はそらにくゆりわふとも

たゝこと哥　注をまたす詞のえんにもよらすたとへをもとらすありのまゝなるをたゝことうたとす

さはかりとおもひやらるゝ窓の内はたゝかたことも聞にゆかしき

(朱)サハカリハ心ノ中ニ主トスルモノアリテソレヲ言外ニアラハス也

明ぬるか鴫のはねかき閨過て袖に月もるふかくさのさと

いはひ哥　貫之詩の六義に頌あるを思ひて此一くさをまうけられたりされといはひ哥とて六くさのひとつにそなはらんことおほつかなし今たゝことうたの中よりいはひの心あるをいたしていはひう[た]とす

神かせや玉くしのはをとりかさし内外の宮に君をこそいのれ

これらや貫之か心にはかなふへからん凢今の哥を見るに大やういつゝ有へしひとつにはのはへうたふたつにはかさねうたみつにはまもらへ哥よつにはよせうたいつゝにはむかへうたなり

のはへ哥　貫之かいへるたゝこと哥也そのなかに上にいたせるいはひ哥もあるへし

ニ哥ハ畢竟
ノ[ハ]ヘル爲ノ物ナレハ
ニノハ[ヘ]ウタナリ

ニカクノコトクハカ
キハ具[illegible]ニオモ
サマヲ言ニイタシ
ヲノハヘウタ[ト]スヘシ
ニ次テ
テイヘルヲ
予ウタト
カ
古事ナ
ハラニモチテ
ナマモラヘウタ
…た

いつ(朱)ガはりのなき世(朱)デアラバなりせはいか(朱)ドレホドニマアはかり人のことの葉うれし(朱)カラウゾイノからまし
としのうちにはるはきにけり(朱)テシマウタヿカナ一とせをこそとやいはん(朱)イハウカヤことしとやいはん(朱)イハウカヤ

かさね哥　本哥　古歌古詩本文あるをとりてよめる也

青柳をかたいとによりてうくひすのぬふてふ笠はうめの花かさ

このうたを本哥として

鶯(朱)ガのかさにぬふてふ(朱)トイフうめの花(朱)ナ折てかさゝん(朱)カザシテミヨウ老かくるやと(朱)カクレルカト思フテ

まもらへ歌　古事　本説あるにすかりてよみたりかさね哥に似たれとこまかにあちはへはわかれり

(朱)花ナ雫トミマカフト云ヿチ本ニトリテヨメル也
花見つゝ(朱)チシイ〳〵人まつときはしろたへの袖かと(朱)カシラントマデのみそあやまたれける

(朱)万葉ニチヌ男アシヤ男ノ女ナアラソヒテ河ニシヅメルヿヲトリテヨメル也
(朱)アヽこひわひぬ(朱)タヿカナちぬのますらをならなくに(朱)デハナイケレド生田の川に身をやなけまし(朱)ナゲヨウカシラン

よせうた　秀句　詞のよせあるにすかりてよみなせるをいふ上つ世より多くよめり中昔よりのちはむねとよみたるすかたなり

又曰からふり詞皆よせたる詞也但今の哥にいにしへのからふり詞ありとてよせうたとはさためす

又曰よせにふたつの筋あり一にはよせたる哥二にはそへたるうた也
よする詞よせかくる詞ありよすとは其事此ことまたく同しけれは引たかへてよみなすをいふたとへは牛を厭とよせ菊を聞とよするかことしよせかくとはなかはをとりていれてよむ也たとへははしたなしといふことを身ははしたかのとよみしらぬといふことをしら雪しら波なとよむたくひ也
そふる詞ありそれにもいふへく是にもいふへくして詞も心もたかはぬをかりてよむ也霞によせてこむへたつ露によせておくむすふなとよむこと也またことはのえむによれる也

むすふてのしつくににこる山の井の(朱)河洄水ノヿ也あかて(朱)不飽も人にわかれぬるかな
なき人のかたみと思ふにあやしき(朱)画見はえみ(朱)咲ても袖のぬるゝ也けり

むかへ歌　對語　一うたのうちにことはをむかへてよめる也

(朱線)氷たにとまらぬ春の谷風にまた打とけぬうくひすの聲
(朱線)あけたては蟬のをりはへ鳴くらしよるはほたるのもえこそわたれ

いつれもこのいつゝにはいつへからすそかうちに此よつをふたつそなへて
まもらへてよせ　よせてむかへ　まもらへてかさね　まもらへてむかへ　かさねてよせ　かさねて

むかへなとよめるもありいにしへもかくのみそあるうちにはるかにあかりての世にはかさね哥は
まれ也今はいまいとまあらんときにしるすへし

## 次第の事

それ歌をあんするに次第のあるもの也人ゝ巧拙ともに次第なきにあらすつたなきは次第やかてあしき也これはならひてなほすへし古哥をみるにもまついかやうに思ふ心より哥よまんとして何事をさきにとりいれたるそとしるへき也

かく次第をしりてのちにも歌のあしきは程をしらぬゆへ也次第はたかはねとよみもて行まゝに詞をしらす物をしらぬにおほはれてあしくなる也

次第よしとはむねのよき也むねに大むね小むねありいつくさの哥ともにこれあるへし大むねをまつきはめて小旨をたつへけれと時にのそみては小旨よりいてくるもあるへし難とすへからす




(朱)小ム子トハウタトナリイツル所也モノニフレテ言トナルモノニシアレハソノ感物ノ所ヲ謂ナラン

(朱)大ム子トハウタトイフモノヽヨリテ出來ルユヱンノモノナリ

心定まり詞をつくるにいさゝか巧拙あり五句にまはして置へき處のあしくもよくもなる也所をさた(朱)所ヲサタムルトハウタニヨムヘキモノヲ云也次ニ云ル境ノヿ也ウタハ思フヿヲミルモノキクモノニフレテ云出ル也事ニフレテ感ヲ發シヤカテウタトナルハ則此モノ所也感アッテウタヨマントスル時ハ言バノツク所ヲサタムル也スヘテウタノ大ムネナズラヘウタト云タルモノ本色ナレハ也スヘテウタハモノニナズラヘテヨムヘキモノナレハ也思フ心ヲ物ニヨラズテ云出サハウタナキニハシカジヨク／＼アヂアフベシ
むること主意也これは心をたつる時にもある又所にかゝはらすして心をたてゝよむ哥もあり此とき詞をつくるにかならす所をすうへし

境　日景日情

題をみ事にあたりてはやかてさかひに入る

壽按景情の二境は物にふれ事にのそみ目に感し心に感する事を心中に落しつくるをいふ凡さかひは哥となり出へき象のたつなりこのうちより旨趣を生す

旨趣　さかひをかたらむとて哥思してむねおもふきをう

壽按心の象を諷詠すへき物にせむとするに思慮を本としてとりあつかふを旨趣とす大旨は決定の主意也うこかさるものなり小旨はさま／＼によみあらためら（ママ）る所にして動く也旨と趣ともとひとつにて相應してなれる物也一字の義をいふ時は旨は心のあらはるゝ所おもふきは所のさまをいふへし(朱)旨トハカナシミニマレヨロコビニマレウタトヨミ出ヘキトヿロニシテウコカヌモノ也趣トハ其コヽロヲハ松ニテ云ハフカ鳥ニテ云ハフカ雲ニテ云ハフカトアツカフヿ也

又按さかひ旨趣（朱）旨ハワカウタトヨマントオモフ所　趣ハ心中ニ案スル所也のふたつは我心に與へていまた外にあらはれさる所也

体　むね趣を安からしめんとすれはかた定る（朱）則趣ノ定リタルヲ体ト云也

壽按決定し置たる旨趣にてはしめの境のうかふうかはぬかの所也心の淺深哥のよしあし旨の顯隱なと皆こゝに定るへし

上　あけはむね趣をえてやかて定るもあり又かたを定て後に定もあり壽按あけは哥になしたつるをいふ也是は上下のすへ處をいへり旨趣の定まりたる處にてあけ定るはかたをいまた定さる前をいへり

姿はへちのことなり（朱）是ハウタノ風韻ノヿ也

哥はよつをしるへき也ひとつにはほとをしる（朱）ソノウタノ位ヲ云カ二にはよしあしをしる三には理をしる四には道をしる也かくみしりたる人は哥をはやくよまむおそくよまんあしくよまむよくよまむこと心に随ふ也是は（朱）ウタニナリイツマシキヿヲウタトナシタルハ道ニソムクトイハンカ我国フリ云ハテモアリナンヿハ云ハヌ国フリニテ心中ニヒタブルニオモヒノトメカタキヿヲウタニナクサムナレハ也云ハデモヨキヿヲウタトヨミ出ナンハ何ノ徳カアルヘキ伎藝ニヒトシカランウタノトウトキヿコヽニアリマナンテシルヘシ其人のさえたかくひきゝにもよらすつとめてうること也つとむるも深く心をつくすまてもなしいかにもして万葉集三代集を心をとめて二かへりはかりよむなり此うちにさえたかき人は一年さらぬ人は三年をふへきなり

## 囲文心法

囲文の哥をよむへき心法之事

一なかをさたむ

しかのねの　しらやまや　ゆふはかは　如此下三字の「めくる」へきをえらひて又上二字の心を思ひふくめて置へしいくつもあるへし

一かしらをさたむ

むらくさにはなの　なかつまをみきはに　右古集なとをすゝろに見てそのうたことのかしらをめくらして見又は末をめくらして見れはおのつからうることあり是第一也

一二字をさたむ

第二句のはしめ二字也すてにかしら定まれはそれを七もしにめくらしてよみはつる時はふたもしたらぬをまつ思ひめくらすへし

一五字をねる

かしらと第二句の二字とはすてにさたまりぬよろしからんなかをすえてみてめくらしよめは第四

句のかしら二字もすてにさたまれり此二字と第二句の二字とゆきあふへきなゝもしこそ大事なれ

廻文のかたきことこのいつもしにあり

右又古集の哥あまたあるを見て哥ことの第二句第四句等のなゝもしをめくらして見て第四句のかしら二字につゝくへき詞をえらふへしたとへは

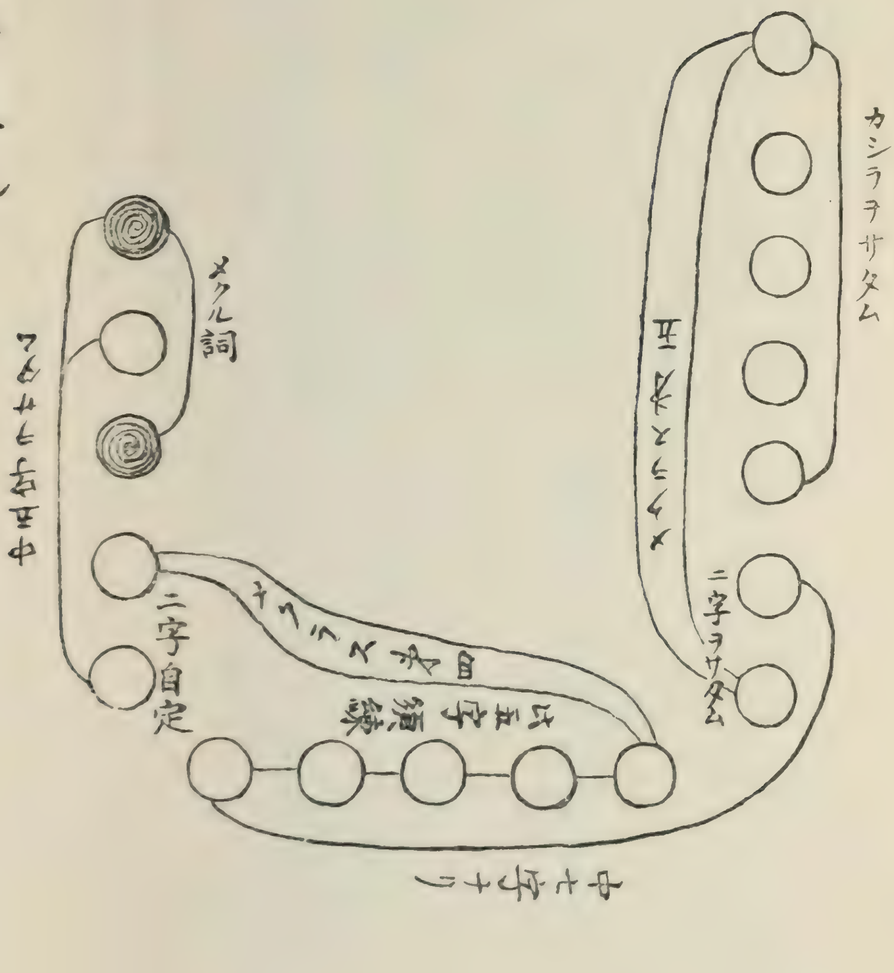
ひとつまつならは　とひ何〻　しかのねならは　かし何〻

かくのことく何といふよりさきをねる也

一圖によりてあちはふ

圖は左にいたす

北邊家秘




以上秘訣也

# 古今和謌集

## 假名序

# 古今和歌集

平安　北邊二世富士谷成壽　述

## 序　辨

榮花物語云こきむにはつらゆきしよいとおかしうつくりてつかふまつれりこせんしふにもさやうにやとおほしめしけれとかれはその時のつらゆきこのかたのしやらすにていにしへを引いまをおもひゆく末をかねておもしろくつくりたるに今はさやうのことにたへたる人なくて口をしくおほしめしけり云々此序中云つらゆきらか此よにおなしくうまれて此ことの時にあへるをなんよろこひぬる云々これらによりて此序者は古來貫之と定まり來れりしかるに京極黄門勘文(万時)云如此序者文武天皇御世柿本山部列座之由歟見万葉集柿本人麿所詠之哥皆藤原宮之由注之山部赤人哥神亀元年以後天平年中之由注之雖其年月不遠相並之由無所見ハ自文武大寶元年至ニ(于)延喜五年二百五年文武以後延喜十八代歟縱奈良御時雖存聖武天皇御世其前後廿四年三代(元明元正)也以此序爲平城天皇證據(顯昭付之)大同年中無可撰和歌

之人不載称徳天皇以後歌於平城之説者勿論不足言歟これよりさきの哥をあつむる文又以不審多强不勘時代年限課文章所書歟〻道因之所載勘文不注此等子細〻古今序此等事頗不似披見万葉集之人如何なとうたかひをのこしたまへりけにさる事也黄門以後の人々さま〳〵にさためわつらひて貫之をそしるにいたれる事少からす今おもふに此序の心をふくめたるさま章段のかきやうよりはしめてすへて此みちの事をこまかにあきらめたるさまをみるにけにおしなへたる人のかけるにはあらすしかるに貫之の土左の日記のふみの体をみるに簡古にしていとすなほなり此序をあはせて思ふに此体すこし後の世の人のにやとおほしき也されとかれはにきこれは序なれはかきさまもかはるへきことはさらなれと大井河行幸和哥序等の体をみるに猶此序の体よりはふるめかしすこし後のよの人のかけるにやともみゆれと猶させる證もなけれはまつ貫之にさたむへきにかの黄門のゝたまへるかことくならの御時といへるを文武帝とさたむれはそれより後元明天皇和銅三年藤原宮より奈良にうつらせ給ひけれはならの御時といふへからす聖武天皇を申さはゝかのおほんときに柿本の人まろなんとこゝ此ことはあたらすこの勘文の如く持統文武より聖武帝のはしめの比まてやよにありけんとおほゆれはその御世さかりにあるらんやうにかけるおほつかなし又大同と定むるは眞名序にも平城天子なとかけれはさもあるへきに人丸赤人の時代もあはすかつ万葉集をはこれよりさきの哥といへるあまりに

おほとかなるこゝちすれはしかるへからすこの事たれも〳〵うたかはれてその弁よゝにたえすけにいといふかひなき事也しかるにこれをいふかひなしとして貫之はそしるとも此序をはいかにかすへき貫之をそしらは此序もなにのかひもなき物といふへけれはしみのすともしかくつちにたてまつりもすへしおもふに此序此道のこゝろえとなる事かみしもいとおほし貫之にもあれたれにもあれこの序の用うへきからにはかの不審のことゝもゝいかにもして理にたかはさらんやうにせむこそ此みちのためも此集のためも此序者のためもこよなきいさ（忠）をしならめ又六義の事小注をはしめて人〻あたりあたらすさためかねてこれまた世〻あるひはそしれるやうにあるひはしたかひてもそのことわりくはしからすなとさま〳〵なり眞名序にはやかて子夏か毛詩序によりて風賦比興雅頌といたされたり此序中にもからの哥にもかくそあるへきとあれは猶これをおもひてとみゆしかるにこれは哥のさまなれは詩六義にはあたらぬ理也とあたらぬよりいひ又は小注なとには六くさにわかれんことはえあるましなといへりもと詩は風雅頌にて賦比興は風雅頌にわたりてのことなれはけに六くさにわかれんもおほつかなし（此故にわか父北邊哥の体をいつゝにわかちさためられたり）しひてわけむとすれはしひことのいはるへしおほよそ此六義の事をおもふに序文のうちに引歌なとせんこといとおほつかなしいはゝたゝ六くさにわかるゝことのありとはかりはいふへし抄物のやうに哥をひかれたらんいかゝ也しからは哥はかりは後に添

たるらんといふに哥の下にといふなるへしと本文にかけてかけれは猶本文なるへけれは哥はかりもはふくへからすしかのみならすふみの上下の心を考るにはしめに哥のよみかたくはしくかゝれて六義より下にへ今の世のなか色につき云〻なといへるより今世の色このみの家のもてあそひとのみする事ほいにあらす哥には六義といふ事ありてこれをは哥の体とするといふ心なりと心うれとその花鳥のつかひとなることをいましめたるはすなはち十四十五の章にてことたれゝは序文の体をいてふみの心に用なきをおもへはうたかふへくもなく後のよの人のこゝにくはへたりけんとおほしきなりしかもふみのかきさまをもしらぬ人のかけるなるへしされと猶貫之の所爲とせんとならは此序のためならすしてたゝ哥にも六義こそあれとふとおもひえられけんまゝを物なとにかいつけおかれたりしを人にみすへくもなかりけれはよにあらはされさりしにたれにかあらんこゝにかいくはへてそも〳〵なとにつかはしくそへたる物なるへし榮花物語のころもすてに貫之とさためられけんからにはふみのすかたこそいかにそやかはりたれまつ貫之としてもてあかむへしさはかりの人なりけれはふみのすかたもかきかへられたりけんもしられすされととかくおなし人のやうにはみえぬ也又小注は後世の人のしかもいふかひなき人の所爲とみゆ貫之自注といふ説不可用みつからかきてみつから難せんことわりなしその故は六義のうちに貫之をもときてみつからひける歌の猶そのすかたにあたるへうもあらぬをみるへし年ころこれらの

ことおもひわつらひけるにふと此序の章をこゝかしこに置かへて心えたるに年代も人丸赤人か時代もすへて黄門より疑をのこしたまへりし詞ともおの／＼所をえてしかももとのまゝにしおける心に露たかはすとてある人にかたらふにしかるへからすいにしへよりかくてつたはり來れるを今さらそこのかく置かへたらんはわたくしなりけをふききすをなといさめたるにこたへていふさらはもとのなからにし置て貫之をは年代時代もおろかに六義なとも明らかならす人まろかつかさくらゐなといとおほつかなしといはすしてそしり注しなから此序をやりすてたらんやうにしたらんと貫之をは中昔のひしりとし時代のあやまりなく此序を全くしてこれをたうとひまなはむ事いつれかよからんといふにけにとてゆるしたれはいよ／＼これに心をさためて六義小注をはふき所〻の衍文をもかうかへはふき章をましへかへて注をくはふされはかの年代も新撰和哥貫之自序によりてかのおほん世といへるならの御時をは元明帝和銅三年後とさため世はとつきといへるをは弘仁まてとしくれ竹のよゝかた糸のより／＼といふをは弘仁以後とさためそれからちにて又わかちて延喜にちかき所をちかき世といへるなりとせりしかれは帝の御目にはといへるを元明元正のわたりのみかとゝさため奉り万葉集の時代も家持卿聖武孝謙の御宇にあつめたまへりとす万葉第十六巻まては天平十六七年までにあつめ十七の初はのこれるをひろひ同卷天平十八年七月に越中守となりて下られけるより十九卷に勝寶二年八月五日に彼任はてゝ上りたまふまては都にての哥なとも越中にての聞書也こゝをもて世〻の疑をときふみのことわりたゝしくなれ

りされとたゝはふきかつましへたるわたくしなる名はのかるへからねと上にいへるか如くわか心も
とより貫之をたうとひ此序をあふく心よりのわさなれは神もみそなはしあはれみたまへとなん

一　やまと哥は［もとよりワカ國ノ哥ナレハ今更ニやまと哥トイフヘキヤウナケレトカラ哥ニ別チテイハントテカクイヘルナリ／乃はトイヘル脚結ソノ心ナリやまとゝハモト和州ノ名ナルヲ嘉号ナリトテニヤツヒニ此國ノ惣名トナレルナリ］ひとつこゝろを［普通ノ本皆人の心トアレト下ノ萬トイフ字ニムカヘテハ／ヒトツトイハン方マサルヘシ顯昭法橋ノ本ひとつトアリ］たねとして［草木ノ種ヨリ幹枝葉ナト生スル理／ニ同シケレハタトヘテイヘルナリ］よろつのことの葉とそなれりける［コノ集古名ヲ續万葉集トイヘリシヿ眞名序ニアキラメラレタリサレハコヽモ万葉ノ字ヲ用／テ草木ノ葉ニ詞ノヿヲヨセラレケルニヤ〇ナレリケルトハ種ノ所ヨリ葉ヲ生スルヿヲ未來ニ〆イヘル義ナリ本ヲ思ハセントテ也ナ／リケルトイハヽ只過去ニナレルヿヲ云也］

此章は哥の大本大綱をいへる也數万の［ヨロツトノミイヘレト／タヽ大數ナレハカク云］哥といへとも皆ひとつおもひいれる心をたねとしてなれる物也と也かくしもいへることは詞を先とし心を後とすることは哥のほいならぬ事をさとす也

二　よの中にある人ことわさしけき物なれは［コトワサハ諺ニアラス言ト爲(ワサ)トナリ言トハツ子ノ物イヒ也ワサトハ態也オキ／出ルヨリイヌルマテ言態ハ繁カラヌ人ハナキ也ソノ言爲ノ間ヨリウレシカナシナト思フ心ハイツヘケレハコヽハ喜怒／哀樂ノ生スル因本ヲイヘルナリト知ヘシ］心に思ふことを［コレ乃喜怒哀樂ノ情發ルヿヲイヘリコレハオノツカラ欲スルヨリ／生スレハ歎息モコヽニアルナリサテコレハ感ノ種トナルモノ乃コレナ／リ］みる物きく物につけていひ出せるなり［ミル物キク物トイヘルニ六根ニフルヽヿハ皆カ子テイヘルナリコレ乃カノ／心ニオモフヿト感スル物トモナリ感トハタトハヽ人ノ梅ヲカタハラニテ喰フナミレハ必ワカ口中ニ酸氣ヲ生スルモノナリコレ感スルナリイカニトナレハ梅実ハ自ラ酸キ味ナリト喰ヒ知リテアル故ニ乃人／ノ喰フナミレハヤカテ酸氣ワカ喰ハヌ口ニモ生スルナリシカル寸ハイカニ酸キソナトオノツカラトハルヘシコレ乃哥ナリ甚シクシテハ物ヲ隔テ人ノ梅実ヲ喰フ音ナキヽテモ如此コレキク物ニ感スルナリソレノミナラス人ノ死スルヲミテ我身モイツカシカラ／ントカナシメル心アル寸ニフト花ナトノ散ルヲミタランコヽチ木ノ葉ノオツルヲキヽタランコヽチヤカテカノ悲シミヲ振ハレテ默止マシクナルニハアラスヤコレラ乃哥ノヨミ所ナリコレヲ哥ノ時トイフ猶新髓腦ニ委シ下ニイタリテコヽノ微ヲアケラレタリ／十四十五ノ章乃コノ哥ノ時ヲハイヘルナリ〇につけてトイヘル詞オロカニ見ルヘカラス後世ハ題ヲ專トシ月花ナトナメツルカタチケシキノ上ニノミ心ヲヨセテ詞ヲミカクナリソレモ思フ心アランハサモアルヘシ月花ニ吾思ノ感スル故ニソレラニツケテコソ／哥ハヨムヘケレヨク〳〵心ウヘシ哥トナリ出ルノ次第ワカ朝夕言態ノ繁キ間ヨリ喜怒哀樂ノ情ヲ生スルニフト見聞モノヽソノ情

ニ感スルヿアル寸ハ中心ヨリオノツカヲヨマント思ハヌ哥モヨミ出ラルヘシサル寸ヤカテソノ物ニツケヨセテワカ思ナウタフナリ心ニオモフヿハ主ナリ見聞ク物ハ客ナリ後世ノヨミカタノ如クナラハ主ナ客トシ客ナ主トストイフヘシ〇イヒ出セル也トハ乃オノツカラ哥ハル、歌ノヿ也

前章は綱也此章は目なりその心をたねとしてことの葉となりゆく次第はかくのことしといへる心也と知へし十二章の今のよの中といへる所をかなしふ心よりそのよむへき次第時をもしらてはほいならすといましめられたる也もはら月花のにほひ。(に)まとひてこゝを忘れんことをいさめたる也

・

三　花になく鶯水にすむかはつの声(ママ)きけは 九有情非情トナク声アルモノチハコノ二ツニカ子タル心也 いきとしいけるもの ふきとふきぬるこひをしこひはナトノ語勢ニ同シク活ルモノ、カキリハト云也 いつれか哥をよまさりける コノかノ字ハかはのかナリ声ハ只哥ナレハイケルモノ有情非情ナイハス哥ヨマサルモノナシトノコトワリナオモヘトノ心ニテかトイヘル也

此章はみる物きくものといへるをうけて下の章をおこさむ為に声の論をこゝにいへり心はもはら禽獸たにかゝりまして人をやと勸學のこゝろをのへたりよみたにせはつひには次の章のことき妙用をもえられん道そとをしへたる心也さて一二の章は哥となりいつるよしをいはれたりかの心におもふ事をといへるは內也見聞ものにつけていひいてたるは外也此內外をすふるものは声也さて次の章哥の妙用をいへりかのいひいてたる哥もこゝにいたるをむねとすればうたふなりそのうたふ声感動感通をつかさとれりその故は文字は人より外に通する事なし

それもから人はいかてかみしらん神(鬼)あめつちにこゝろを通せむはたゝ哥にあり人とてもそのうたふ哥にはかならす感する事あるへし國語に神人以哥合とてまつりの時音樂を用うるはその律に鬼神の心とまつるものゝこゝろとの同律なれは通するをもて也此故に哥もうたふをもとゝする也おほよそ哥はあめつちの理をもて人のこゝろに感し得たる所なれは義にもよらす理にもかゝはらすあめつち(の心)をかよはし鬼かみの心をうつし人の心をあはせむにけにこれにしく物あるへからすをよふへからぬに及ひて妙用あるものなれは感通感動はもはら哥にある事をしりてかくこゝにまつ哥をいはれたる也されは此章は上をうけて下をすうる寄法なり

四　ちからをもいれすしてあめつちをうごかし　天地ノ情ヲウコカスナリウコカスト云ヨリカヲモトハイヘル也天地ノ情無情ナレト孟子に誠者天之道也思誠者人之道也トアレハ人ノ誠ノカヨハンニイカテ天地ノアハレマサラン能因雨ヲイノリ西行晴ヲイノリタルカコトキヿコレナリ　めにみえぬ鬼かみをもあはれと思はせ　淮南子云鬼神之形不形於目これ也伊勢物語ノ岸ノヒメマツ貫之カ蟻通ノヿ式門カイナリニテ月ノサハリアリシ寸ノ哥ナト皆コレナリ鬼トハ死セル人ノ魂ヲイヒ神トハ形ナクシテ何トナク妙用アルモノヲイヘト鬼モ神モオシナヘテ只人情ノアツマリテ理外ニ理ヲナセルモノヲ云コレヲ鬼神トモ又鬼カミノ心トモイフヘシ新髄脳ニクハシクイヘリ　をとこをみなの中をもやはらけ　伊勢物語ノ沖ツシラ浪ナトコレナリ古來相聞ノ哥ノ中ニコノヿ多カレハイフニ及ハス　たけきものゝふのこゝろをもなくさむるは哥也　下ニ出タル葛城王ノヿモノヽフトイフヘキニハアラヲトタケキ怒ヲナクサメタル也袋草子ニ貞盛カ妻ノ陣ニトラハレタルニアハレミテ將門カ衣ヲオクレル哥アリたけきものゝふもしれりトカヽレタルモ猶同シコヽコナリコノはモジヨク心ヲツクヘシカヤウノ難キヿヲナスヘキヿ又アランヤトノ心ヨリは哥也トカケルナリ

此章は哥の徳哥の妙用をさとせりこれ皆人の誠よりなす事也荘子にも藐姑射山の神人神こり

て物をして疵癘せしめさりしといへるもはら此妙用をのふる也こゝの事新髄脳にすへて委し一二の章は哥を人につけてをしへ此章は人のわさをはなれたる妙用吉をもてなさるゝよしをいひ上の章にてつとむへきよしをいひたすけてむすへりさて此よつの妙上ふたつは人のわさのかゝらぬかたき中のかたき事をいひ下ふたつは人にちかくしてやすかるへきか中にかたきことをいへり

五　此うたあめつちのひらけはしまりける時よりいてきにけり　コレハ渾沌未分ヨリヒラケタリシ寸ノヿヲイフニアラス天地万物ト、ノホリソメシ寸ヲサシテヒラケハシマルトハイヘルモノナリ諾冊ふたはしらノ神ノヨロツノ物ヲウミ玉ヘリシ寸ニ陰神陽神行アヒテあなうれしやうましをとめ（ママ）にあひぬとたかひニノ玉ヒシヲ哥トイフ也哥ノヤウニコソアラ子ナホ哥ナラサルヿヲエス御心ニ感シ得玉ヒシ心ヲヤカテ御詞ニノヘタマヘルナレハオノツカラ哥ナリ古語拾遺云一聞開闢之初伊弉諾伊弉冊二神共爲夫婦生大八洲國及山川草木云々コレニヨラレケルニヤ

この章上四章をつかねうけて哥のおこれる濫觴をいへり此國も山川草木中にも月日なとゝともにおこれる此道なれはあふくへきよしをいふ也

六　しかはあれと　前章此哥あめつちトモニオコレルニテニアレトモト也（ママ）　世につたはることは　今カクコノ世ニ哥トシテ傳ハリソメシハト云也　久かたのあめにしては　久カタハ天ノ冠詞ナリサマ〳〵古説アレト天ハ蒼々トシテマロク虚ナレハ瓠形トイフ心ニテタトヘラレタル心ニヤアラン猶冠抄ニ委　下てる姫にはしまり　地神大巳貴神ノ女ナリ庶ハラノ國ニアシキ神アルヲウカヽハントテ天ヨリ天ノ稚彦ヲ下シ玉ヘリシニ大巳貴神ニ諂テ女ヲ妻トシテカヘリコト申サス高皇靈尊（ママ）アヤシミテ雉ヲ使トシテミセ玉フニ稚彦コレヲイル矢天神ノミマヘニカヘリノホル卽投カヘシ玉フソノ矢ニ中リテ稚彦ハコノ國ニ死セリソノ死後ニ天下照姫天ニイタリテヨメル哥コレナリ地神ノ女ナレト天ニノホリテヨメルナレハ天ニシテハトイヘりあもなるやナトノ哥也神代紀ニ見ユ　あらかねのつちにしては　荒金ハ眞金ニムカヘテアラカ子ホトナ云コレハ地中ニアレハ冠トセリコノ冠

菅家万葉ニアルつちのしたにてト云ヘル哥ニハシマレ、ハモト土ノ下トツ、クヘキニイヒナリテつちトノミモツ、クル也冠抄ニ委下準之すさのをのみことよりそおこりける天照大神ノ御兄ナリ天神ナレト出雲ノ國ニテノ八雲たついつも八重かきノ御哥ナイヘハ地ニシテハト云也コノ神詠ハ紀ナ考ルニ下照姫ノ哥ヨリサキナレトコ、ハ天地ノ次第ナモテイヘリ前後ナルヿ知ヘシ

此章かみの五の章に哥の濫觴をいへとも猶くはしくしらせむ(ママ)とて哥として今世につたはる天と地とにてのおこりをいへりかくおこりをいへるはいよ此道のたかくとほしろきをあふけとての心なり

七 ちはやぶる神代にはチハヤフルハイチハヤビタルノ義ナリ神トモ人モウチモツ、ケタリ祟ハシク近ツキ馴カタキ威儀アルナ云冠抄ニクハシ哥のもしも定まらすカノ下照姫ノ哥古事記ノ沼河姫八千矛ノ神ノ哥等也タ、思フヿチノヘウタフモノナレハ定マラサルヘキ理ノモノナリアヤシフヘカラスすなほにして質朴ノ義ナリヘツラフ心ナクカサラスシカモマコトアリテシテタ、シキ也此故ニ文字モ定マラス言ノ心モワカヌ也寄法ノ詞也ことの心わきかたかりけらしコト、ハ詞ナリ古語ナレハ人ノ世トナリテハソノ義弁シ知カタキテ(ママ)アリケルナルヘシトノ心也日本紀ナミルニ舎人親王ノ自注ニ此古語未詳トイヘル所雄畧紀元年ニミエタリサモアルヘキヿ也ケラシトハワカ心アタリノ如ク彼カ内ノヤウスハアラント推シ思フ詞ナリコレハ人ノ世トナリテ哥ノ体イツレチカ學ハントセシ人ノ心ナハ推シハカリテイヘルナリソノ人ノ心ニ神代ノ哥モハ文字ノ數モ常規ナクスナホナレハオホトカナルヤウニテ詞ノ心モ弁シ知カタキ故ニコレソト取タテ、學ヒテ世ニツタフヘキコ、チモセサリシナルヘシト也

此章第六章をうけて下の章をすゑたる寄法也こゝに神代といふは天神地神ともにおしこめていへるなれは第六章に天地とわきていへるを又つかねて論せる也けらしは次の章のへはよみけるといふにあたりてかける也

八 人の世となりて素尊ハ地神ナレハ天神ニ對ヘテ人トイフト思フヘカラス文ノ法ナシラサルヨリノ誤ナリ下ニイフヘシ素尊ノ八雲ノ御哥ナハ文字ノ數モコトノ心モマコトニ天地ノ數ニ叶ヒ人情ニモ自ラカナヘリトテコレマ子ヒツタヘ

トシテコレチタルナリ人ノ世トハ神武ノ帝以來チイフヘキナリすさのをのみことよりそカラオコリテコノ一句寄法ナリ人ノ世トナリテ三十モシ餘リ一文字ノ体ハヨミケルトイハンチソノ体チマナヘルハ乃素戔鳴尊ノ神詠ヨリトリマナヘルナリトイフ心チ以テ中ニハサメルナリよりトイフ詞チミシラヌ故ニ上ニイヘルヒカキ、モアルヘシコレハカラオコリテト里スレハ文意ハ明ラカナリみそもしあまり一もしはよみける本句長ク末句短キハ易ノ繫辭傳ニ天尊地卑トイヘル象ナリサテ五七ノ句ノ字數モニ陽ノ數ナレト本句十七字ハ陽數末句十四字ハ陰數ニシテ天ハ陽地ハ陰ノ象ナリサテ三ハ物ノ成數易經ニ不速之客三人來ナトイヘルモコノ義ナリ三十ハ成數ニシテ陰數ナレトモ靜ナリ一字チアマスニ活用ノ妙チナスヘシ筭術ニモ天元ノ一トテソノ一チ尊フ〻コノ理ニ同シカヽル數チハコノ神ノカマヘテヨミ玉フヘキニアラス神慮ノオノツカラユキタル數ナレハ人ノハカリイフヘキニアラス今數千歳ノ後マテモヒトリ此体ノミサカリナルハイカニモコノ數ニ妙理チフクミタルナルヘキ也

此章は第六章につゝきたる心也八雲の神詠おのつから人情にかなひあふかるゝをもて人の世となりてたれとなくこれをもとゝしてまねひはしめたりと云也此神詠よりしも三十一字のすかたをよめる心は神代の哥ともは質朴なれはもしの數も心〻にことはの心もわきかたき事ありける故なるへしとの心にて上の七章はおける也さま〳〵の体のうちにひとり此体のすくれたることをさとさむとて七八の章はかけるなり

九

かくてそかやうにつたハリハシメテヨリコノ方トノ心ナリ花をめで花ニ百草百木チ兼タリメヅトハ感賞ノ義日本紀ニ感チメツトヨメリ鳥をうらやみ禽獸蟲魚ノ類チカ子テイヘリ羨ムトハ万葉ニとひたちかねつ鳥にしあらねはあかるひはりに成てしか伊勢集鶯に身をあひかへはナト也かすみをあはれひ雲霧烟ナトチカ子タリあはれふトハ何憐ノ義也コレチおもしろしらましかなしナトヨム皆同シコヽロナリ露をかなしふ雨霰霜雪ナトチカ子タリかなしふトハ愛ノキハマレルナリ愛キハマレハ悲シクモナレハ同シ義ナリ子をかなしふナトイフモキハメテ愛スル〻チ云也こゝろ詞おほく、さま〳〵になりにける心詞トハ上ノ四コトチカケテイヘルナリコレスナハチ哥ノコト也後世ナニカニツケテ哥チヨム〻トナリテ數万首ニナリタルチ云也

此章第一章にいへる万のことの葉となる所をいふ也さて第二章のみる物きく物といふに應したりこれは此道のさかりになれるをいへり

十 とほき所もいてたつあしもとよりはしまりて年月をわたり 白香山座右銘云千里始足下高山起微塵吾道亦如此行之貴日新これをモト、シテカケルニコソ猶礼ノ中庸老子莊子等ニコノ事出タリ千里ノ遠キモタ、今首途ノ足ノ下ヨリ行ハシメテソノ中ニテ年月ヲワタラサレハカノ遠キトコロニモイタリカタシト云也 たかき山もふもとの塵ひぢよりなりてあま雲たなひくまておひのほれるかことくに ひぢトハ細泥ニテ埃ナリ一条禅閤ノ御説ニ二条家ニテハぢりひぢトヨミ冷泉家ニハぢりいぢトキコユルヤウニヨム也ト寛ヘリモト麓ニアリシ塵泥ナトノツモリ／＼テ高キ山トイヘ圧ソレカツモリテナリノホリテツヒニ天雲ノ峯ニタナヒクマテニナルトイフナリアマ雲タナヒクトハキハメテ山ノ高キヲ云オヒノホルトハ次ニ重リツミユクヲ云上ノ年月ヲワタリトハ遠キ所ヘ至ラン道ノ間ノ事也コノ天雲タナヒクマテトハタ、至高ノサマヲミセントテイフナリト知ヘシ 此うたもかくのことくなるへし 哥ノ次第ニサカリニナレルモカクノ如キ同シ理ナルヘシトイヘルナリ

此章は七八九の章の心をつかねてそのことわりをのへたる也心は千里といへと首途の足下よりはしまりてその路の間に年月をわたらてはいたりかたく高山といへともと麓にありし塵ひぢのかさなりつもりたるよりなりのほらては天雲のみねにたな引までにもいたるへからすかゝることわりつねのことなれは此哥も今の世かくさかりにさま／＼なる心詞多しといへとももとかの八雲の神詠を誰となくふとまなひ初たるよりおほくの年月をへてかく數しらす成ゆきたる物にてかりそめにかくなれるにはあらさるへしといふ也物おほよそさかりになれは初を忘る理なれはもとはたゝかりそめなるやうなる事より年月をへたるよりかくはさかりにな

コ、マテ第一段也

れりといふ理をしれは後世のあたなる哥なとは末なりいかにも本をあふくへき事と人の心にも思はむなれはこの事をためしを引てさとされたる也第十二章にいたりて今のよの中といへるをみてもとにかくに古をあふかせむの心なる事知へし遠き所高き山は哥のさかりになれるにたとふ足もと麓の塵は第七章の心也

十一　なに波津のうたはみかとのおほむはしめなり　なには津に咲やこの花トイヘル哥コレナリ百濟ノ國ヨリ來レル和迩吉師トイヘル人ノ仁徳帝ニ奉レル哥也トイヘリ仁徳帝ノ御弟太子ト卽位ヲユツリテ三年ニ及ヘルニ太子自殺シテ御兄ニ位ヲス丶メ玉フニ猶仁徳御位ニツキ玉ハサリシヲ和迩吉師コノ哥ヲモテ卽位ヲスヽメ奉リシヨリヤムコトナク卽位マシ／＼キトイヒツタヘタリ事ハ日本紀ニ委クミユレトコノ哥ノヿ諸書ニ見ユル所ナシコレヲ思フニ日本紀竟宴ナトニ仁徳帝ヲヨメル哥ナトニヤ哥ノ姿モソノ頃ノ姿ニシモアラヌヤウニミユレハカヘス／＼附會セル說ニコソサレトサスカニ中昔ヨリノ姿ヨリハフルメカシキカ上ニコノ序者モ貫之ニハアラス𪜈イトイタククタレル世ノワサトモミエ子ハコノ序カケル頃ハヤ此ナニハツノ哥ハクタラノ和迩吉師カ哥トイヒツタヘタレハコソカクハカヽレタルヘケレハカヘス／＼不審ノヿナリ○御ハシメナリトハ卽位マシ／＼タリシヲイフナリ○コノハナトハ梅ヲイフナルヘシト小注ニミユレト日本紀神代下ニ木花開耶姫トミエ又其生兒必如木華之移落(チリオチナン)云〻ナトアレハ只百木ノ花ト云ナルヘシ　あさか山の歌(こと)のははうねめのたはふれよりよみて　万葉第十六ニあさか山かけさへみゆる山の井の淺き心はわかおもはなくにトイヘル哥也此哥の左に右傳云葛城王遣于陸奥國之時國司祗承緩怠異甚於時王意不悅怒色顯面雖設飲饌不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝而詠斯歌尓乃王意解脫樂飲終日とアリコノ水ヲウチシヿヲタハフレトハイフ也葛城王ハ諸兄公ニアラヌヿ餘材抄ニ委天武紀ノ葛城王コレ也トイヘリ　此ふた哥はうたのちゝはゝのやうにてぞ　王仁カ哥ハ天下ノヿニ徐アリテコノ哥ヨリ天下ニ帝ヲエテ四海シツカナリシナリ采女カ哥ハ王ノ怒ヲトキテ國司ノ緩怠ワサハイナク打トケタリシ徐アリシ也公私ニツケテコノ二詠ノ恩莫大ナルヨリ父母ニタトヘタリ王仁ハ男采女ハ女ナレハ父母ノヿヨク叶ヘリトイフヘシサレト心ハタヽ恩ノトホシロキ故ニ父母ト云也　手ならふ人のはしめにもしける　コノ一句ハ添法ナリ父母ノヤウナリト恩ヲ思フ心ヲ補ヒテ○イ(添テ)ヘルナリコノ恩ヲ思フアマリニ手習ヲ童子ニセサスル初ニ先コノ哥ヲカキテ手本トスルモマタクコノ哥ノ徳也トイフナリもノ字アルニテ添法ナルヲ知ヘシ父母トイヒテ童子ノヿヲイヘル文力神妙ナリ今モ西ノ國イツコトカ此哥ヲ手習フ初ニストソ人ノ申シ源氏若紫云なにはつをたにはか／＼しらつゝけはへらさめれはさ枕草紙云たゝおもひまはさてたにはつ

をなにもふとおほえんことをとせめ給ふ云々手習フ初ニコノ二詠ヲセサスルモコノ思ヲ思フアマリニヲサナキモノマデ此思ヲシラセンノ心ヨリナラハセソメシニヤ

此章哥は公私につけて益ある事をのへたり哥はかく公にも私にも益ある物にてはかなきもてあそひにあらねは末のさかりにしてあたなるにまとはされとの心をもて上の章の心をとゝのへたる也第四章は哥の妙用をのへこれは哥の公私に益あるたゝしき道なるよしをいへりさて次の章に今の世の事をいはむ爲にはへをあらせてこゝにまつこのことをいへる也かゝる物なるを忘れて今の世中云々と下の章にうつりて心うへしこゝまて十一章第一段とす

十二 今のよのなか色につき 色とは目にみゆる所をスヘテイフナリ目ニ見ルヿノウルハシケレハ内ハイカニアランモ弁ヘス先ソレヲ愛スルト云也凡目ニフル丶所ノ慾サカリナル人心ヲイヘリつくトハソノ方ニ片ヨリツクノ義也 人のこゝろ花になりにけるより 花トハ実ニ對シテイフ也マコトナクタ丶ウハヘハカリノナサケヲハ互ニ貴フ世ノ中トナレリト云也色につきハ体外ナリ花になるハ体内ナリ外モ色ニツキ内モ花ニナルトハスヘテ人心軽薄餝偽ヲ專トナレルヲノヘタルナリ第七章ニすなほにしてト云ヘル反也 あだなる哥 里言ニタノミズクナキトイフ詞ナリアタナル哥トハ相聞ノ哥ノミニカキラスタ丶詞ノ上ヲカサルヿヲ專トスル故ニソノヨミ人ノ心思ハレテタノミスクナク思ハル丶哥ヲイフ也外ヲカザルハ色ニツク故ナリ外ヲカサルヲ專トスル故ニ実ナクテアタニミユルナリ実ナキヿヲ恥サル故ニ人ノ心花ニナルナリコ丶ヲモテにけるよりトハカ丶レタルナリヨク味フヘシ いてくれは ハカナシトハはか〳〵しきノ反ナリ一トフシモナク重〳〵シカラヌ義ナリコレ又内ニ実ナキヲ恥ズ外ヲ專トカサル故ニ全体ニ古ノ言ニ比スレハ物〳〵シカラヌ言トイフヘケレハカクハ云也心ハタ丶あたなる哥トイフニ同シケレトあたなる哥トハソノヨミ人ノ心ヲハカルニアタナリト云也はかなきことトハソノ言カラノ古人ナトノ哥ニクラフレハはかなきナリトイヘル也上ノにけるよりノ詞コ丶ヘモカケテカケルナリ次の章ノさかしおろかなりとしろしめしけんトイヘル反ナリ外ヲカサルヿヲ專トシ内ニ實ナキヲ恥サル寸ハ賢愚ノケヂメモシラルヘカラス古ハ賢愚ノ矩ト哥ヲセラレタルホトノ物ナレハアタニハカナキ哥ハ哥ノ本意ナラスト云也 はかなきことのみ 色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝなりて 男女ノ間ニ忍ヒニ心ヲカヨハスモテアソヒト此道ノ埋モレハテ丶人ニモシラレヌヤウニイカニモ哥ハ忍ヒテヨム物ノヤウニナレリトイフナリ色コノミトハ好色者ナリ家にうもる丶ト云カケテ埋木ヲイヘリ埋木トハ土水谷ナトノ下

ニ朽ノコレル木ヲ云サレハ人しれぬノ冠トセりらもれ木のノのモジハノ如クトイフ義也人シレヌトハ人ニシラ
レサランヤウニスル心ナリ人しらぬニハコトナリ眞名序ニハコレヲハ花鳥ノ使トナレリトイヘリ乃コノヿナリ　まめなる所に
はマメトハ眞実ノ義ニテ實目ナル所ニヘハ君父ヲハ　○花すゝき　ほにいたすへきことにもあらすなりにたり　花スヽキハホノ冠
シメ友ノ中モ隔意ニ公シキトコロヲサセルナリ　ニオケリホニイタ
ストハ人ノ目ニツカンヤウニ出シアラハシ見スルノ義ナリ此頃カヤウナル哥ヨミタリト実目ナル人ノ所ニテ出シ見スヘキヿニモ
アラヌヤウニ成テアリトイフ也にたりハヌタリト聞ユルヤウニヨムヘシコレヨミクセ也にハぬノ立居ニテ過去ノ詞サヤウニ成リ
ハテタルヲ云たりハテアリヲツヽメタル
ナリシカアルサマヲタテヽ見スル詞ナリ

此章は第一章より第十一章までの心をうけて今のよの人本を忘れ哥をやくなき物とし月花の
もてあそひ花鳥の使となり哥は徳も用もなからん物のやうに心うるをなけきてかけり

## 十三

そのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬ　ハシメトハ今ノ世人ノ如クアダナル哥ハカナキコトナヨミイテヌサキ
ヲサシテイフナリ第八章ノ人の世となりてトイヘルヨリハ後ノヿ也か
ゝるへくトハカクアルヘクヲツヽメタルナリカクトハ前章ヲツカ子テイフナリ古ハカヤウニアタ　いにしへのよゝの帝春の
ニハカナクハナカリシナリト云ナリなんトハソノヿノユルカスヘカラヌヿヲ人ニシラスル詞ナリ
花のあした秋の月の夜ことに　此フタツハ面白カラン折ヲ出セリコレニカキルニア　さふらふ人ゝをめして　ソノ折
ラス花月ニ催サレ給ヒテ哥奉ラシメタマフ心ナリ　ニアタ
リテ伺公ノ　ことにつけつゝ　花ノ折ニハ花ノ哥ヲト仰下サレ月ノ折ニハ月　哥をたてまつらしめたまふ　哥ヲ奉ラシムト
人々ヲ也　ノ哥ヲト命シタマフヲ云ヿトハ乃花月等也　ハヨミオケルヲ
奉ラシメラルヽナルヘシ下ノ詞ヲミレハ當座ニテハアルマシケナリ此集中ニ哥奉れとおほせられし時よみて奉れるトイヘル詞書
アマタ見ユコレ皆コヽト同シ心ナルヘシモシ當座ナリトイハヽソノ時ノ景色ニアタリテノ心ヲヨムヘキニ下ノ詞心エカタシ此序
者ソノ古ニモ題詠トイフヿアリトシテカクカヽレケルナラハ當座ノ義　あるは花をこふとて　あるはハ或ハナリこふハ戀ナリ
ナリ中昔モ初ノ頃ハ題トイフモノハナキナリ猶ノ詞ヲアハセテ知ヘシ　普通ノ本皆そふトアレト心エカ
タキヨリ思フニこトそヲアヤマレルニヤトオホシ　たよりなき所にまとひ　便ナキトハ遠キ野山ナトノシレル人モトマランヤト
キナリ花ヲコフトハ見ンヿヲ欲スルヲイフナリ　ナトモナク不便利ナル所ヲモキラハスマトヒアリク
ヲ云ナリマトフトハ心ノトカクノ弁　あるは月をおもふとて　月ヲ思フモ見ンヿ　しるへなきやみにたとれる　シルヘト
ヘカタキ義也路ノシラレヌヿヲ云　ヲ欲スル心ナリ　ハ案内者

ヲイフ也郷導ナリ道ノアナイシレル人モナキ闇夜ヲモ月ミン爲ニハヌトリアリクヲ云タトルトハ思慮ノ及ハヌヿヲシヒテオモヒサクル心ナリ闇夜ノ路シラサル所ヲ強テサクリユクヲ云コノ二ツハカノ奉ラシメ給フ所ノ人〻ノ哥ノヨミ出タル所ノ趣ヲイフナりたてまつらしめ給ふマテハ上ニモイヘル綱ナリ以下コヽマテハ目ナリト知ヘシ こゝろ〳〵をみ給ひて 心ヲミルトハ心ハ見テソノ形ヲシルヘカラヌ物ナレハ観シ知ル義ナリ哥ノ詞ノサマヲミテ心ノサマ〳〵トワカル、サマヲソレコレト弁ヘ観シ知ルナリコレハ哥ノ巧拙ヲミルニアラス全体ノ心ノ用ヒサマヲシルナリ さかしおろかなりとしろしめしけむ（タテアロウ） カノ人〻ノ賢愚ヲシラセ玉ヒシナリ巧拙ヲミルニアラスソノ哥ノ心サマニテ用ウヘキ人カ又ハ用ウヘカラヌ人カトイフヿヲ観シワカチシリ玉ヘルナリ賢愚ハオノツカラ言外ニカクレテ見シラルヘキヿハ新髄腦ニクハシクイヘリ第二章ノ如キ物ナレハ也

此章は今のよに反したる古に立かへりて哥は言外の意趣を観して賢愚の矩（ノリ）ともすへかりけれかく哥はおほやけものなるを今の世まめなる所にはほにいてかたくなれるうれはしさよといふ也これかゝる事をしらさる故也と云也

## 十四

しかあるのみにあらす 前ノ一章ノ心ヲツカ子テシカトイヘルナリ哥ハオホヤケ物ニテ賢愚ノ矩トスヘキ物ナルヿヲシラサル故ニカクアタニハカナキ哥トハナレルナリトイヒタレ氏ソレヲ忘レタル故ノミノヿニアラス凡哥ハヨムヘキ時トイフヿアリコレヲ知レハ哥ノオノツカライハル、時アルヘシコノヨムヘキ時ハカノ第二章ニイヘル所ノ人凡ツ子ニ言爲シケキ物ナレハ詠哥必用ノ時ハイト多キ物ナリコレヲ知ラサル故ニ花鳥ノ使ノミナ専トスルヿニハナルナリトナリサレト此章ノ中ニ人ヲコヒトイヘルヿモアレハ相聞トテモ邪淫ナラヌハ猶哥ノ時ナリソレヲ専ニスルカアシキナリトイヘル心ナリコレニツキテ一議論アレトクハシクハ新髄腦ニユツリテイハスコノ章ト次ノ章トハスヘテ哥必用ノ時トナルヿヲアケタリソノヒトツノ、皆コノ古今集中ノ哥ノ詞ヲトリテカヽレタル故ハ卽コノ集中ノ歌ノアフキタウトヒマナフヘキヿヲサトセル妙ナリ さゝれいしにたとへつくは山にかけて君をねかひ 〽わか君は千世にやちよにさゝれ石のいはほと成て苔のむすまて〽つくは山このもかのもに陰はあれと君かみかけにます陰はなし君ヲ子カフノ詞ハサヽレ石ツクハ山フタツニカケテイヘルナルヘシサヽレ石ハ小石ナリ君ノ齢ノ末ナカキヿヲイヘル哥ナリツクハ山ハ君ノ恩澤フカキヿヲヨメル哥ナリ子カフトハ君ノ德ヲ頌シテ御イノチナカヽレコノ御德久シカレト神ニアカヒ思フ心ナルヘシカケテトハ間アルモノヲソノヿヲコノヿニカケ寄ル心ナリ君ノ御陰ニツクハ山ノ陰ヲカケヨスルナリ（欄外書入）「カクハ注シタレ氏下文皆對句ノ体ニカケレハサヽレ石ニタトヘノ下ニ脫文アルニコソトオホシキナリ又高砂住吉ノ句ノ例ニヤ」 よろこひ身にすき コレハ上ニ君ヲ子カフヿヲイヘルヨリ次テカケル也身ニ過分ノ幸ヲ得タル也〽嬉しさをなにゝつゝ

まむから衣袂ゆたかにたてといはましをたのしひ心にあまり〽コレハヨロコヒトイフニ對シテ猶君ヲ子カフトイフニ次テカケル也おもふとちまとゐせる夜はから錦たゝまくをしきものにそありけるふしの烟によそへて人をこひこひヲ火ニヨセテ思ノ絶サルヲ富士ノ烟ニヨソフルナリヨソフルトハソレニヨセテコレヲサトス心ニテタトフルナト同シ類ノ詞ナリ〽君といへはみまれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆる我戀人ヲコフトハ父母兄弟朋友夫婦ニカキラスイフナリコレハ上ノ心ニアマルノ詞ヨリ思ノフカキヿヲモテ次ヲナセリまつむしのねに友をしのひコレハ人ヲコフトイフヨリ同シ類ナルヲモテツヽケタリマツ虫ヲ待ニヨスルヨリソノ音ヲキヽテ友ヲシタフ也シノフトハ堪忍ノ義ニ用ウルモツ子ナレトコヽハ慕フ義ナリ〽君しのふ草にやつるゝ故郷は松むしのねそかなしかりける高さご住のえの松もあひおひのやうにおほえ〽誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに〽我みても久しく成ぬ住のえの岸のひめ松いくよへぬらん此句ハ我みてもの哥ヲモカケテカケレト句意誰をかもノ哥ノ方ニ切ニシテワカ老テ友モナクナレル歎ヨリ松ノミ中ニモワカ同年ナルモノヽヤウニオモフトイフ心ナレハ上ノ友ヲシノフトイフニ次タリ高砂山ノ惣名トモスレトコレハ播广ノ高砂ノ尾上トイフ処ニ古キ松アリシヲイヘルナリ住吉ノ松モ古木ナレハワカ老タルニ友ナキヨリカノ古木ドモト我身ト同年ニ生シタラシヤウニオホユルト也上ノ句ハ友ノ來ヌナケキ也コレハ老テ友ヲウシナヒユク歎ヲ云也二木ヲ出シ相生トイフヨリ二木ノ相生トヤウニ心ウヘカラス謠トイフ物ニハステニコレヲ誤レルカトリナセルカコヽノ義ニタカヒテツクレリオホエトハ我心ノ何トナクシカ思ハルヽヲ云ナリをとこ山のむかしをおもひいて上ニ老タルヿヲイヘルヨリ昔ヲ思ヒイツルヿヲモテ次タリ普通ノ本ニハ思ひいてヽトアレト下ニツヾクヘキ語意ナラス原本おもひ出トアリケンヲイツトモイテトモヨマルヘシトテイフカヒナク出ノ傍ナトニテノ字ヲ添オキタルカ本文トナリタルニヤ〽今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこし物を男山ハ男ノヿニヨセテイフナリ衰タルモノヽ盛ナル男ヲミテノ歎ナリをみなへしの一時をくねるにも女郎花ハ女ノヿニヨセテイフナリコノ句上ノ男ニ對シテツヽケタルナリ〽秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時クネルトイフ心ハ哥ニハナケレト一時トイフ詞ヨリカクカケルナリクネルトハクネ〱シナトイフ詞ニ同シクソノ一事ニ思ヒシメハヿヲハタス力ナク独シ思フ心ナリコノ二句男女ノ性ヲイヘルナリ男ハ公ノヿニカヽツラヒテ人ニヲトランヿヲ耻ル性アル物ナレハナリ女ハ内ヲヲサメテ思シメルヿヲ忘レカタク思ヒクルシム性アルモノナレハナリ一時ヲトハソノクネル間ノ長キヲイヘルナリ哥をいひてそなくさめけるナクサムルトハ心ノ憤ヲ條理ヲツケテ散シヤル心ナリいふハウタヒ出スノ義ニテ人ニキカシムルナリコレニツキテ心ウヘキヿアリコノ章ト次ノ章トタヽ同シヤウナルヿヲイヘリトミユルヲシカラハ一章ニツヽケカクヘキニ又トカキテ端ヲ分テルヿ不審スヘキヿナラスヤ一說ニアマリニコト多クワツラハシケナル故ニ二ツトシテカケリトイヘルケニサル心ツカヒモアルヘキヿナレトイカニソヤヤムコトナキシヒゴトノコヽチス今思フニ下ノ章ノ終ニハコヽニカハリテ心ヲナクサメケルトカキコヽハ哥ヲイヒテソトカクルヲミレハコノ章ハ人ト人ノ交ル中ニテノ歎アル寸ニテ哥ナラテナクサメン方ナキ時ヲイヒ下ノ章ハ一人ノワ

カ身ノ上ニテナケキアル時ヲイヘルナリトハ心ヲナクサムルトカキ哥ヲイフトイヘルニテシリヌイフトハ必人ニキカシメンノ心アリ歌ニノミ心ヲナクサムトハワカ身ヒトツノコトキコユレハナリカノ一說サモアルヘケレト終ヲハ二章トモ同シヤウニナクサメケルトカケルオホツカナキコトナリ今又コノ二章中ノ句々ノ文意ヲ弁スヘシ此章ニ君ヲ子カフトイフハ君トノ間ニテノ歎息ナリヨロコヒ身ニスキハ恩賞ナトニアヒメツラシキ人ナトニアヘル心ナレハ各ムカヘル人アリたのしひ心にあまりトハ友トチノマト居友ノ來トフラヘル心ナトナレハ友トノ間ノ歎ナリ論語云朋有自遠方來亦不樂乎ナトイヘルヲヤ人ヲコヒ友ヲシノフハイフモサラ也あひおひのやうにおほえトハワカキ人ハカリナルヲミテノ歎ナレハ古ノ交リ今ノ交リノカハレルヲ云ナリサレハ今ノ若キ人ドモトノ間ノ歎ナリ男山トハ衰タル我身トサカリナル人トノ間ノ歎ナリ女郎花トハ人ト交ル中ニテノコトニオキテ一時ヲク子ルナリ女ハ男ニムカヘテイフニテ男ニソヘル身ナル物ナレハ我男トノ間ニテイキドホロシキコトアル心ナルヘケレハ男トノ間ノ歎ナリカクノ如クナレハ此章ハ人ト交ル間ノ歎キノカヽル所ヲイヒテ類シ次ノ章ハワカ身ヒトツノ上ニテノ歎ノカヽル所ヲ類シタルニテトモニ必哥ヨムヘキ時ヲサトスナリ猶次ノ章ノ終ヲアハセテミルヘシ畢竟二章ニテ自他トモニ哥ハ必用ナルヘキ時アルコトヲイフナリト知ヘシ

此章は下の章とゝもに第十三章の共はしめを思へはトいへるをたすけてかける也花とりの使とのみ專するはいふかひなしよむへき時はかく多き物をとて此二章はかける心也まことをつたふるには哥にまさる物なけれはこそ上にも男女の中をもやはらけとはいはすやたゝそれを專一とすなと也おほよそ歎は不足におこる物なれはて（ママ）にし哥は歎をもとゝすれはしのひによみかはすのみなとか哥の時ならんや

十五　又春のあしたに花のちるをみ秋の夕くれに木の葉のおつるをきゝ落花ヲ見落葉ノ声ヲキクニツケテワカ身ニ時ウツルアハレヲモヨホサレテ哥オノツカラヨマルヘキ寸ヲ云コレラノ哥集中ニイト多シ　あるは年ことに鏡のかけにみゆる雪と浪とをなけきコレハ上ノ時ウツル歎ヲ催サルヽ心ヨリ老ユクナケキヲモテコレニツゲリ雪トハ白髪ナリ浪トハ皺ナリカヽミニムカヒテミツカラナケクナリ〽ぬは玉のわか黒髪やかはるらんかゝみのかけにふれるしら雪〽長哥なにはの浦にたつ浪の波のしはにやおほゝれん草の露水のあわをみてわか

身をおとろき コレハ老ヲナケクヨリ死ノイツトシラレスハカナキヿヲナケクヿヲモテツゲリ若キ寸ハ血氣サカリナレハ死ノ不期モ心ニカヽラヌ物ナレハカク次タル也オトロクトハイツマテモアラン身ノヤウニ思ヒタルニフト斷物ヲミテヨリサハ我身モ猶コノ類ナリトオトロクヲ云ナリ〳〵露をなとあたなる物とおもひけんわか身も草におかぬはかりを〳〵うきなからけぬる沫とも成なゝんなかれてとたにたのまれぬ身は 文選古詩云年命如朝露人生忽如寄 同魏武帝短歌行云人生幾何譬如朝露 維摩詰經云是身如泡不得久立

あるは。（きのふは）さかえをごりて時をうしなひ世にわひ（何）したしかりしもうとくなり コレハオトロクトイフヨリ盛衰ノヿヲモテツゲリ 時ヲ失フトハ天ノ我ヲシテ榮花ヲ賜フノ時ヲミツカラ失フナリ 世ニソフルトハ物ヿノ心ナラヌニゴウジハテヽセンカタツキタヽ世ニタヽスマンヨシナクサスラフル心ナリ 世にわひしたしかりしもトつゝけテ普通ニハヨメトコレハさかえをこるトイヘル首尾ニテ時をうしなひト世ニわふるトハ對句ナリト知ヘシしたしかりしもうとくなりトハ（ママ）コヽハ貧賤トナレハ富メル寸ハ親シメル者皆ソムキウトムハ世ノ輕薄ナル人情ナルヿノ歎ヲイフニテ上ニツヽケル語意ナリ 史記孟嘗君カ傳ニ馮驩云富貴多士貧賤寡友ノ心ナリ 時をうしなひの上ニケフハトイフ詞アル心ニミルヘシキノフハノ詞ニ對伏意アルニユツリテカヽサル一法ナリ又したしかりしもノ上ニキノフサカエタリシ寸トイフ詞アル心ニ見うとくなりノ上ニケフハ貧シクナリタレハトイフ詞アル心ニミレハ心明ラカナリ〳〵光なき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思ひもなし した。（しか）りしもノヿハ盛衰ノヿナラテハ戀ノ哥ノ中ニイト多シ

あるは奈山（の涙）をかけ野中のみつをくみ コレハキノフケフカハルヿヨリ人ノ契變シタル歎離緣セシ鰥寡（四字消）ノヿヲモテ次タリ 松山トハ〳〵君をおきてあたし心をわかもたは末の松山波もこえなん 契ノ變スルヿヲ松山ニ浪コストイフ也カクルトハ言ニカケ心ニカクルヿヲイフコヽハ詞ニカクル方ニテイヘリ 波ノ緣（ヲセ）コトバナレハオカシキ也〳〵いにしへの野中のしみつぬるけれともとの心をしる人ぞくむ コノ哥ヨリ離緣セシ妻ノヿヲ野中ノシミツトハイヒナレリコヽモ其心也

秋萩の下葉をなかめあかつきの鴫のはねかきをかぞへ コレハ契リカハリ緣ヲ斷テルヿヨリ一人アリテノ歎ヲモテツラ子タリ〳〵秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする〳〵あかつきの鴫のはねかきもゝはかき君かこぬよに我そ數かく 後ノ哥ハ人ヲ待ツ心ナレトコヽノ心上ノ哥ト同シク一人アリテ身ノホトヲナケク心ヲイフ也

一人あるはくれ竹のおきふしを人にいひよし野河をひきてよの中をうらみきつるに コレハ一人アル寡鰥ノヿヨリ人ト我トノ心ノタカフヿノ歎ヲモテツラ子タルナリウキトハ物事ノワカ心ニカナハヌナ思ヒワフル心ナリ人ニイヒトハアマリノウサニ堪カ子テ人ニカヽルウキヿアリトイヒ出テナクサメハルケントスル寸ノヿ也人ニイフトイヘルニテソノ對伏意乃ワカ身ヒトツニウキヿアルヿヲトイヘル心ナルヿシルキ也〳〵よにふれはうき事しけきくれ竹のうきふしことに鶯そ鳴ヒクトハ河ノ水ノヨセ詞ニテ 例ニ引キ用ウルヿニカケテイフナリ 世ノ中ヲウラムトハ世ノ道理ナ

ラヒナルヿナウラメシク思フ心ナリ〳〵なかれては妹背の山のなかにおつるよしのゝ川のよしやよの中コレハ男女ノ。闇モ後ニハ障アリテハナルヽヿモアルヿヲナケヽルナリつるにトイヘル詞尤心アリ此章ニイヘル以上ノ事ドモ皆人間五十歳ノホトマテノ身ニカヽレル歎ナイフ也コノ下ノ語キハメテ老ハテタル人ノ歎ナイフナリサテコノきつるにノ詞ヲミルヘシキハメテ老ハツルマテノ間カクノ如キヿ𪜈ヲナケキ來テ今マテニナリタルニ至テ髙年ニ及ヘハ我ナカラワカ年ノ髙キニオトロクヤウニナルトノ心ヲモテ云也

今はふしの山もけふりたゝすなりなからの橋もつくるなりときく人は

キツルニ今ハトカケル語勢ヲミルニ此章ノ以上ノ語ヲ皆引スベテキハメテ髙年ノ人ノ歎ナイヒテムスヘルモノナリ今マテノ歎ハ皆キハメテ老ヌホトノヿナルヿオノツカラシルキ也富士ノ烟ノタヽス成ニシヿハ此集中ニミエ子トフジノ烟タツヿハ集中多ケレハナガラノ橋ナイハン對句ノ爲ニ當時ノ富士ノヿヲヨキナカラノ對トテカヽレタルナルヘシ〳〵つの國のなからの橋もつくる也今はわか身を何にたとへん富士ノ烟ハ不斷ノタメシニイヒ來リ長柄ノ橋ハフルキ物ニイヒ來レルニソノ烟タヽヌヤウニナリソノ橋ツクリアラタムルヤウニナレルトハイトヽタク年ヘタルヨシヲアラハサントテナリサル世マテイキナカラヘタル人サラヌ世ヨリアリツルナレハイカニカキリナク老タルナランサマテハワレハ老スト思フニ人ノフト富士ノ煙タチヤミヌナガラノ橋造アラタメラレヌトカタルヲキヽテアマリナルマテ世ニナカラヘタルヲ身ニナカヘリミナケク心ナリ冷泉家ニテハたえすなりトイフ說ヲ用ラルヽトソコレハタヽサリシ世ヨリアリテ不斷タツ世トナレルニオトロク心ナリ所詮兩義ナルヘシトソ思フ

哥にのみそこゝろをなくさめける

のみトイヘルハカヤウナル歎アル時イツニテモ外ノナクサメヤウナケレハ唯哥ヲイツトテモヨミテ心ノ憤ヲハ自ラナクサメケルトイフ心ナリ此章ヲ身ヒトツノ上ノ歎ナリトイフハ落花落葉ハ我身ニ光陰ノウツランヿヲ催サルヽ歎ナリ雪ト波トハワカ身ノ老ハジムルヲナケクナリ草露水泡ハヤカテ本文ニモわか身をおとろきトイテヽ死ノ期シカタキ歎ナリさかえをこりてトハミヅカラ心モテヲゴリテ時ヲ失ヒ親ヲ失ヒタル歎ナリ松山野中ノ水ハ人トハナルヽ歎ナレハ卽ワカ身。ノ歎ナリ秋萩鴫のはねかきハ一人アリテ人ノヨリ來ヌ歎ナレハコレ亦卽ワカ身ヒトツヲナケクナリ。ウキフシヨシノ川ハ人ノ心トワレトタカヿナケキナレハ猶身ヒトツノ歎ナリフシノ山ナカラノ橋ハワカ身ノタトシヘナク老ハテタルナレハ尤身ノ上ノ歎也コノ中松山ヨリ以下ヨシノ川マテハ皆人トノ中ノヿナル故ニマトフヘケレトヨク考フヘシスヘテ人ト身ワカレ心ハナルヽ上ニテイヘハワカ身ヒトツノ歎ニカヘル理ナルヿヲ知ヘシ

此章は上の章の理を補ひつくしたる也上の章と同しく哥必よみいてらるへき歎ある時をいふにて理をつくすとは哥はたゝ人にうたひきかせて心をやるはかりにしもはあらすみつからいひてみつからの心をもなくさむるものそと此二章をもてさとす也さてかゝる哥必用の時生涯

に多きことをしれははかなき私ごとのやうに心うへき事はあらし物をとの心をもはらとして第十二章の心をなけく義をさとせる也[し]てむすへる也

○十二章より以下四章を第二段とす第一段の心は哥の大本後世に傳流せる趣をいふにて大綱なり第二段は古今邪正を弁して哥の用とする時の差別をいへりされは第二段は第一段のうち第八九の章の間にいるへきをのこしてあとにいへる也すへてかゝる文法の事は別にいへるふみあれはこゝにいはす以上二段第五段の終の哥のさまことの心をいふ也

○これより以下の文錯簡おほし今八雲の御哥[千字文]（五字消）のもしをもて。[普通の]次第をしらすくはしく序説にいへれと猶所々にも錯簡の理をいふをみるへし

十六㊝

いにしへよりかくつたはるうちにも　コノ古トイヘルハ第六章ノ世につたはることはトイヘル頃ヨリチサセルナルヘシソレヨリ十二章に今の世中トイヘルマテチツカチテカクツタハルトイヘリ其代々ノ中ニテト也

ならの御時よりそひろまりにける　ヒロマルトハ此道ノサカリニナレリシチ云ナラノ御時トハ文武天皇チ申奉ルヨシ古來イヘリコレハ人丸ソノワタリノ朝ノ人ナルニヒカレテサハイヘルナリサレト文武帝ノ次ノ帝元明天皇和銅三年ニ[文武元ヨリ十四年メ也]藤原ノ都ヨリ奈良ニウツラセ玉フヿナレハ文武帝ノ御宇チナラノ御時トイフヘカラス又一説大同天子平城帝チ此集中ニモならのみかとトアレハ平城トサタムコレハかのおほん時より年はもゝとせあまり世ゝコノ章ノ心大同ヨリ延喜マテノ年數歷代ニアヘハシカソト定メカツコヽニナラノ御時トハ文武チ申シ集中ニハナラノ帝ハ大同天子チ申奉ルヤウニ別異アルヘキヤウナシトテシカ定メタルニ人丸ノ時代アハサルチモテサマ〳〵ニ難セラレタルヿモミエタリ今オモフニサナラス文ノ錯簡アルチシラス且下ノかのおほん時よりトイフハ元明天皇和銅ヨリ弘仁（嵯峨）ノ頃マテチイヘルヿチシラスシテノヿニテヨシナキ疑チノコサレタリ今文意ノ然ルヘカラヌチミテ錯簡チ正セルニヨリテコレラノ疑ノコラストケニタリ猶所ヽニイフヘシサテコノ奈良ノ御時トハ元明帝和銅。（三年）以後ノ頃チサシテイヘリト定ムヘシイカニトナレハかのおほん時よりトイヘル章和銅ヨリ弘仁マテトタテヽ年數モ歷代ノ數モアヘハ人丸ハ元明帝ノ次ヽ。ノ帝聖武帝神龜二年ニ死セラレタレハ和銅三年ヨリ

神亀二年マテ元正帝ノ靈亀養老ヲコメテ十六年メノ死去ナリシカレハ奈良ヘ都ウツリテヨリモ十六年ノ間ハ在世セラレタレハ時代モアフ故ニカク定メタリイカニ拙シトテモコレホトノ序モカヽル、ホトノ人ノ大同ノ御世ノ人ト人丸ヲ思フヘキニアラス且大同帝ヲ申ナラハならのみかとよりそトカヽルヘキニ時トアルカラニハ奈良の朝の時トイヘルニ疑ナシ文ノ錯簡ハ序者ノ誤ナラス後世書寫セシ人ノ誤ナリ序者ノ誤ヲイフ時ハ此序スヘテ用ウヘカラヌ物トナレハ所詮疑ハシキナカラニテ此序ヲハフラサンヨリハトテ錯簡ヲ正シテ此序ヲ貴フナリ又一説聖武帝ト申モ人丸ノ時代ニヨリテナレト二年ニ死セレハイフカヒナシ

此章より哥人の得失の論をなす也そのはしをおこさむとてまつ哥の代〻の中にさかりなりし寧樂の都の事をいへる也

十七㊞地 （コヽノ間ニソノヒロマリタルユヱハトイフヿアル心ナリ）かのおほん世（時イ）や哥のこゝろをしろしめしたりけむ カノ御世トハ元明元正ナトノ頃ヲサシ奉レルナルヘシ一本時トイヘルモ猶同シ哥ノ心トハ哥道ノ心トイフナリ上仁ヲナセハ下仁ニシタカヒ上義ヲタツトヘハ下義ヲオモンスルハツ子ノ理ナレハ人丸コノ世ニ生レ出タルヿヲイハントテコノ一句貫法ニカケルナリ上ニ哥道ノ心ヲシルロシメシタル故ニテヤアランノ心也 かのおほん時に 猶元明元正ノ時ヲサセルナルヘシコノ時人丸生レタルトニハアラスカヽル哥仙ノコノ御時ニシモアタリテアリケルヲイフナリコノ間ニおほきみつのくらゐトイフヿ普通ノ本ニアリコレ思フニ後世ノ人ノ暗推ヲ以テソヘタルナルヘシ其故ハ万葉集中ニモ第二巻ニ柿本朝臣人麿ト出サレタルヲミルニ官位ナトハイフニ足ラサル故ニカヽレサルナルヘクソノ外日本紀續日本紀等ニ人丸ノヿミエスマシテ祖先官位姓氏等ノヨシモ見エスタヽ天武紀ニ柿本臣猨（サル）トイヒシ人ノミアリコノ人ノ親族ナトニテヤアリケンカクノ如ク證トスヘキ物ニ官位ノヿ所見ナキニコヽニ正三位トイヘルオホツカナシ古人ヨリモステニ不審セラレテ顯昭抄ニ或人コレヲタスケテムトミト通スレハオホキムツノ位ナリトイヘルヲ已ニヤフラレタリケニイトイフカヒナシ正六位ナラハコト〳〵シクカクヘキニアラスコトニソレサヘ猶所見ナキカ上ニイカニ音通スレハトテむつの位ヲみつのくらゐトカクヘキヤウナシ上ニモイヘル如クコレホト哥ノ心ヲモヨクシレル人ニテ文章トテモナミ〳〵ナラスカヽル人ノ（ママ）カヽルヿシラサランヿモアルマシク且人麿ハマコトニ古今獨歩ノ哥仙ナルヲモテ後世公ニモソノ徳ヲホメ玉ヒテ神トナシ位ヲモ世〻ニマシ玉ヘルハマタクコノ道ヲオホシメス故ナルニ誰ニカアランカホトノ哥仙ニ官位ナカルヘキニアラストテ添タルニコソトオホシキナリサレトソレモイカニイフカヒナキ人ナリトテ何ニモヨリ所ナクシテカヽルヿカクヘキニアラスカヘス〳〵イフカヒナシ此集中ニアリスヱカナラノ葉ノナニオフ宮ノト勅答シケルモ清和天皇ノ頃ハヤ万葉ノ頃ノヿオホツカナクナレル故ノ勅問トハイフ𪜈コノアリスヱカ勅答ハ猶大同ノ御世トイヘルニアラサルヘシカノ元明ノ比ヨリ寧樂宮トヒロク申タレハソコヲモテイヘルナルヘシ此序貫之ニモアレソレヨリ後ノ人ニモアレ已カシラサルヿヲ證モナクシテカケルヿアルヘカラス所詮序者ヲモ詰ラシコノ序ヲモハフラサシトスレハ省クニシカ子ハ今コレヲハブケリ

柿本のひとまろなん万葉第二巻ニ日並知ノ皇子カクレ玉ヘル寸ノ人丸ノ哥アリ持(ママ)帝朱鳥三年四月ノヿ也コレヨリ以往ニ石見ヨリ妻ニ別レテ都ヘノホル寸ノ長哥二首藤原宮ト標シタル下ニアリ天武ノ朝ニ石見守ノ屬官ナトニテ下ラレケルニヤ大宝聖武ノ頃ハ都ニアリテ其後石見ヘ下リテ死セラレタリ聖武帝ノ神亀二年ナリト年鑑ナトニモシルセレハ元明帝和銅三年寧樂ノ宮ヘウツラセ給ヒテ後モ存在セラルトミユ哥のひじりなりけるヒジリトハ日知ノ義ニテ日ノ明ナルカ如ク智光大ナルヿヲタヽヘテノ名ナリコレ上ノしろしめしたりけんノ首尾ナリ上ニシロシメス故ニカヽル聖モ世ニ出タルナラントノ心也これは君も人とも(心イ)身をあはせたりと上ニ荷ヲクヽリテイフ也いふなるへし千歳奇偶ノ心ナリ人トハ人君ニムカヘテ臣(民)ノ義ナリ君モ哥ノ心ヲシロシメシタル御時ニシモ聖トイハルヽ人麿ノ出アヒテ此道コノ時ヨリヒロマリタルヲ云ナリ

此章は上のひろまれる種をいふなり哥道をしろしめす世にしも人丸のいてあひてあひにあひて哥道を修められけれは此時より此道ひろまりたりと也上に人をしろしめさねは有徳の人もあらはれされは哥の心をしろしめしたりけんとは(上に)いへる也

十八　秋のゆふへたつた川になかるゝもみちをは(人ノ名ナラハがトイハルヘキナリ)みかとのおほんめには錦とみたまひ此帝トハ元明元正ノ間ナサシ奉ルナルヘシ此下ノ小注ニタツタ川モミチ乱テナカルメリトイヘル哥ヲヒキタルハ此集中にならのみかとトアレハナリシカレモ人丸カ哥ヲ雲カトマカヘル哥ナキニテ思ヘハモトヨリ人麿大同ノ世ノ人ニアラ子ハ カノ紅葉ナカレテノ御製ノヿニハアラサルヘシコノ章ハタヽ君臣身ヲアハセタルヨシヲ補ヒイヘルナレハ帝ノ御哥モ人丸カ哥モヿニ哥アルニヨリテイヘルニハアラスタヽ各君臣風流一カトヅヽアリシサマヲノベタリトミルヘシ春のあしたよし野の山のさくらは人まろか心には雲かとのみなんおほえける一本人マロカ目ニ雲トソオホエケルトアリ心ハ同シ心ナリコレ又上ニイヘルカ如ク人麿カ哥アルニヨリテイヘルニハアラスト知ヘシみかとの御目といひ人まろか心とイヘルのトがノヿ後世里言ニ泥ミテのハ貴キニイヒがハ賤ニイフト思ヘリ今昔物語〔宇治拾遺〕(四字衍)ニモ巳ニきたか衣をぬきかくる哉ト女房ノヨミタルヲさたトイヒケル侍ノハラタチテさたのとこそいふへきになそわ女かさたかといふへき事かトイヒケンコレソノ濫觴トモイフヘシコヽモ貴賤ヲワカテル心アレト必貴賤ニナツメハのトがトノ義ヲ失フヘシのトイハヽ上ニ承タルモノヽ働ヲハツシテのノ下ノ詞ニ心専ニカヽルナリタヽ上ニ承タル詞ハ下ノ詞ノ場所ニエラヒスヱタル心ナリがトイヘハ上ニ承タル詞働アルヲ云ニテ下ノ詞モソレニヒカレテソノ働ヲナス種ノ如キ心トナルナリコヽノ文意ヲミルニみかとの御目人丸の心トイヒテ穩ナラヌハみかとハ御目ニテ見ナシ玉フ也人丸ハ心ニテマカフナレハ目ノ上ニテハタヽトリナスマテナル心ニテハ思慮ノ

ハタラキヲモテレハがトイヘルニヤ猶第廿ノ章ノ下ニイフヘシのみハ(撰者歌人)「ヒトツハアリヒトツハナカランヲイカニ對セントテ帝ニモカケテ云ナリ讓法ナリツ子ニカヽル風流タエサリシトイフ心也カヽシヨシナシタヽフタツトモ歌ヲカケリトスヘシ」

此章は十七章のための添法にかける也君も人も身をあはせたるといへるよしは帝の御目にては龍田河になかるゝ紅葉の色を錦とみなしたまへるやうなる風流あり人丸か心にはよし野の櫻の白きを雲かゝるかとつねにかゝる風流君にも人にもたかひに一かとつゝありしを思ふ故也といふ心也この錦とみ雲とみる所皆哥のよまるゝ時なり畢竟時物の感をつねにおもへることをのへたるなり心に風流なく輕薄なる人は物に感する事なき物也

十九 又山の(消)へのあか人といふ人ありけり 山部山邊二姓あり赤人ハ万葉集中皆山部トカケレハ山ノベトハヨムヘカラス顯宗紀ニ播磨國司來目部小楯トイフ人ヲ山官ニメシテ山部連ノ氏ヲ賜ヘレハモト山官ナリ天武帝十三年十二月ニ山部宿称ノ姓ヲ賜ヘルヿミユレトコレ又官位ナトモイフニタラ子ハニヤ續日本紀箏万葉ナトニモミエス土左日記ニやまの康のりトイフ人アリコレモト山部ナルヘシ續日本紀云延暦四年五月詔曰先帝御名及朕之諱自今以後宜並改避於是改姓白髮部爲眞髮部山部爲山先帝トハ光仁天皇ナリ此詔ハ桓武天皇也光仁帝初白壁王ト申シ桓武帝ヲ山部王ト申セシ故ナリサレハカノ康のりモコレヲ憚リテナルヘシコノ詔ニヨレハ山ノ赤人トイフヘキニ昔ヨリカクカキ來レルヿイカヽナリ今淳和帝大伴ノ御諱ニハヽカリテ大伴ヲモ伴トヨムヲヤ万葉集中皆山部宿称赤人トノミカヽレタルヲコノ眞名序ニイタリテ山邊トカヽレタルヿ不審ナリモシカノ桓武帝ノ御諱ヲハヽカリテ山邊トカキカヘタルニヤ日本後紀第一延暦十二年ニ山邊眞人春日トイフ人ミエタリ赤人父祖未詳万葉第六ニ神龜元年ヨリ天平八年マテノ哥ミエタレハ聖武帝ノ朝ノ人ナリコヽニカク人丸ト偶シテカヽレタル故ニ同時ノ人ノ心トミテカヘリテ同時ナラヌヲ詰レリ然ルヘカラス人丸ノ老年赤人ノ若年世ヲ同シクシタルモハカラレヌ上ニコヽノ文意必同時ノ人トイヘル所モ見エスコレハタヽ赤人モ聖トイフヘキキハナエラレタレハ上下ノ論ナイハン爲ニコヽニ出サレタルマテナリヨク思フヘシ 哥にあやしくたへなりけり アヤシクトハ思ヘトイカナルニカソノ哥ヲヨクヨム(五字消)理ノシラレヌ故ニ云ナリタヘナルトハ妙ノ字ヲタヘトヨミ來レリ妙ト云字義モ人心ヲ以テハカルヘカラヌヿヲイフ義ナレトモト訓シタル心ハソノヿニ堪能ナルヨリイフ也

此章は第十七の章に對して赤人か和歌仙なることをいふ

廿　人まろはあか人かかみにたゝむことかたく。（スルトイハンコヽロ也）赤人は人まろかしもにたゝむことかたくなんありける

此がノ字ヨク心ウヘシモシコレヲのトイハン寸ハ赤人人麿ガ哥ノ道ニ堪能ナル働ナクシテソノ互ニ堪能ナルヨリ序者ノ心ニテトモニ聖ナレハ勝劣ノ批判ナリカタシトミヅカラ思ヘル心トナルヘシコヽノ文意サナラス人麿ヲ赤人カ上座ニスヱオカントスレト赤人カチカラ堪能ニシテ人丸ヲ上ニタヽセズ赤人ヲハ人丸カ次座ニツケテミントスルニ人丸ガ堪能ノ力ニテ赤人カ次第ニイタリ居ルヘキ勢ナシトイフナリがノ字アルニテ上ニウケタル人ノハタラキアルヿヲシラセタレハコヽノ一章大カタニハ序者ノ批判ト心ウレト批判ニハアラス兩人ノ互ニ堪能相敵スルヲイヘリサレハ上下ニタテヽミントスルハ序者ノ心ナリ互ニ上下ニタヽセサルハソノ人ノ働ニナシテイヘルナリト知ヘシ

此章は第十七第十八と第十九の章とをむすひて又添法にかけるなりさはいへと赤人は人まろにはすこしけちめあることゝちすれはこそ後の世になりても人麿をしも神といふことゝはなれる也されとも又赤人をおきて人麿とあはせて論すへき人もおほえねはそこをみてはかみにもたゝす下にもたゝぬといへるけにことわりなり世説云陳元方難レ爲レ兄季方難レ爲レ弟云々

人丸ハヒシリトイヒ赤人ハタヘナリケルトイヘルニテ少シノ勝劣ハミエタリ

廿一　かの御時よりこのかたとしはもゝとせあまり世はとつぎになん成にける　カノ御時トハナラノ御時也元明帝和銅三年遷都後ヲサセリ和銅ヨリ

光弘仁マテノヿヲイフナルヘシ元明帝和銅三年ヨリカソフレハ嵯峨帝弘仁元年マテ百一年ナリコレヲ年ハ百とせあまりトイフ也元明ヨリカソヘテ元明元正聖武孝謙廢帝稱徳光仁桓武平城嵯峨ト天子十代ナリコレヲ世は十繼（トツキ）トイフ也ならの御時ヲ大同ト定ムル説モ大同ヨリ延喜マテ百餘年十代ナレハコレニカナハストニハアラ子ト人丸大同ノ人ナラ子ハ今思フニ弘仁以往ノヿトミエタリ下ノ文ニその外ちかき世にその名聞えたる人はトイヘル詞ニ應セスコレ弘仁以來延喜ノ頃マテ百餘年ノ間ヲアラマシニサシテ近キ世トイヘルナルヘケレハ弘仁ヨリ別チタツシカノミナラス下ニ出セル人〻皆弘仁以後ノ作者ノミナリイカニシテ弘仁ヨリシモ別チタツルソトイフニ貫之新撰和哥自序云抑夫上代之篇義漸幽而文猶質下流之作文偏巧而義漸疎故抽ニ始自弘仁至于延長詞人之作花實相兼ト而已ヿコレニヨリテナリコレスナハチ弘仁マテヲ上代トイヒ弘仁ヨリ下ヲ下流トイヘリ下流ノ作ハ義漸疎クナレル故ニソノ中ニテ花實相兼タルヲエラヘリト也抽トアレハ猶ソノ下流ノ中ナレト、ノ心アル也コレヲ大同ヨリ延喜マテノ百餘年トスル故ニ前後文意アタラスコレシカナラハ又下ニコトサラニソノ外近キ世ニト云ヘカラス

此章普通の本にはえたる所えぬ所たかひになんあるといふ次にあれとこれよりさきの哥をあつめて。万葉集と云〻　此章これよりといへるは弘仁以前なるへきによりてこゝにおきかへたる也この章の心は上古より哥の姿一偏せることをいはむとて綱にいへりさて上の第十六章をうけたり

さてこの弘仁にあたりて詩賦はしまりて哥おとろへたるをいはむとてこの章はかける也此こと眞名序にあり

廿二　延喜ヨリトイフハアマリ大ドカナリ　これよりさきの哥をあつめてなん万えふしふと。なつけられたりける（はイ）　コレトイヘルハ弘仁ヲサセルナリ弘仁ヨリ以前トイヘハ上代ヲヒロクサシテ

イヘリソノ間ノ哥ヲアツメテ万葉集ト名ツケラレタリトイヘルナリ名つけられトイヘルヨリ万葉ハ勅撰ノ如ク思フ人アレトサナラス万葉集中ヲミルニ家持卿ミツカラノ哥ヲ拙懐トカヽレタル所三所アリミツカラカヽレタルニアラスハ誰カ家持卿ノ爲ニ謙下スヘキ又家持卿ノ妻ノ母ニオクレル哥ヲ誂ラヘラレテ代リヨミ給ヘル哥第十九ニアリワカ妻ノ母ヲ尊母トカヽレタリ勅撰ニアラヌシルシ且他人ノ万葉ヲアツメタルナラハ誰カ此卿此妻ノ爲ニ崇敬セン又彼集ノ例他姓ノ人ニモ大納言以上ニハ名ヲカヽスシカルニ同卿ノ父ノ旅人卿中納言ノ寸ダニタヽ中納言大伴卿トハカリカヽレタリコレ又私ノ家ニテ父ヲ尊ヘルナリコノ故ニ橘諸兄公カ作ニモアラス勅撰ニモアラス家持卿カ撰ストニハアラテタヽ聞見タマヘルナシルシオカレシ物トミユルハスヘテ部立次第ナトモ乱レタリサレハ勅撰トハイフヘカラス一説コヽヲ平城天皇ノ御時ニエラヘル心ナルヘシトコノ序ニツキテイハルレトコノ一又サナラスなつけられトハ誰ニモアレシカ名付ラレタリトイフマテニテ勅撰トイヘルニシモアラスタヽ万葉集ノ時代ヲイヘルナリコレ又カノ新撰和哥序ニ弘仁ヨリトアレハソノ以前ヲイフ也此集ノ雜下ニ貞觀の御時万葉はいつはかりつくれるそとはせたまひけれはよみて奉りける文屋ありすゑ　神な月しくれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることそこれトアリソノカミ哥道モ盛衰アリケレハ清和帝ノ頃ステニ万葉集ノ時代編者等詳ナラサリケル故ノ勅問ニヤ又コノ帝マダ御サトリナカリシホトニトハセ給ヘルニヤならの葉の名におふトイフハ大同ニテアリヌヘケレト猶和銅三年ヨリ以後寧樂宮御宇天皇代ト万葉ニモ標シタレハ聖武帝ノ朝ノ末ナトニ出來タルモノト心エテ大カタニならト名ニオフ宮トハ勅答セラレケルナルヘシ強テアリスヱナモ誤トセンヿ無徳ナリサレト一説ニハ序ト集中ト万葉ノ時代カハルヘキヤウナケレハ猶大同ナルヘシトイヘト此序者貫之トハオホツカナキ上ニカク錯簡ヲ正シタレハタヽならの葉の名におふ宮トイヘルモ和銅後ヲサシテイヘルナリトサタムヘキナリ

此章普通にはかた糸のより〳〵に絶すそありけるの次に出たれとこれとさせるは弘仁の御世なるへけれは上の章にとりいてゝつける也万葉集の時代等もこれにて不審なかるへし此章の心は今此古今集をえらはせたまふ事を後にいはむとて帝の信而好古の御心を證せる心也

廿三　こゝにいにしへのことをも歌のこゝろをもしれる人わつかにひとりふたりなりき　コ、ニトハ寛平ノ帝弘仁ノ頃ヲサシテ云ナリ

眞名序云自大津皇子之初作詩賦云〻民業一改和歌漸衰トアルハコ、ノヿニアラス大津皇子ハ天武天皇ノ御子ナリコノ漸衰トイフハ眞名序ノコトク天武ノ朝ニテノヿナリシカルニ人麿出テヨリ又此道ヲ復セルヿヲ云ナリ コノ序ニ錯簡ヲ正セル義ト同シコノ章ノ意ハ眞名序ニ昔平城天子詔侍臣令撰万葉集自爾以來時歷十代數過百年其後和歌棄不被採用云〻コ、ノヿ也平城天子トイヘルオソラクハコレモ寧樂ノ宮ノ心ニテ平城トカケルニヤサナクテハ數過百年トハ早延喜ニアタレハ雖風流如野宰相云〻トイヘルヿイトセマレルコ、ヲスレハ猶今ワカ錯簡ヲ正セル心ニカナフナリ嵯峨ノ帝詩賦ヲ好ミ玉ヒショリ弘仁ノ頃コノ道スタレテ堪能ノ人ワツカナリシトイフナリ歌道ノオトロヘタルヿヲモ前ニイハレスゾヤカテコ、ニイニシヘノ云〻トイヘル俄ナルヤウナレト第廿一ノ章ノ年代ノ數ヲイヘル心ニ弘仁マテノヿヲイフナレハ上ノナラノ御時ヨリソヒロマリニケルトイヘルニ對シテオノツカラ弘仁ニオトロヘタル心ハコモルヘケレハナルヘシ コノ一人二人トイヘルハ誰ニカシラ子ト弘仁ノ頃ノ哥ニ堪能ノ人ヲイフ也サレトソノ名ヲサシテ人丸赤人ナト又下ノ六人ナトホトニハナカリケレハコソオホヨソニ一人二人ナリキトハイヘルナリ一人二人トハカキレルニアラス只スクナキヲ云心ナリイニシヘノヿトハ古事ニテ學才ノヿナルヘシ哥ノ心トハ上ニイフト同シク哥道ノ意味ナリ

一人二人トイヘル人ヲサセル也 此人〻をおきて又すくれたる人もくれ竹のよゝに(名ノヿ)きこえ クレ竹ハ竹ノ一種ナリヨトイハン冠ニイヘルナリ かた糸のより〳〵に 片糸ハヨリアハサヌシケ糸ノ類也サレハヨルトイフ冠トハスルナリヨリ〳〵トハ時〻ノ心ナリコノ世〻時〻トイヘルハ弘仁ノ比ヨリ四五六十年ノ間ノヿナルヘシソノ後四五十年ハカリヲ下ニ近キ世トイヘリ コノスクレタル人トハ小野篁菅相公ナトノ類ナイノナルヘシオキテトハ除テ也コノ人〻トハ上ノ一人二人トイヘル人ヲ云 たえすそありける 絶ヌモ卽糸ノヨセニテイフナリ上ニヒトリフタリナリキトハイヘト世〻ヲカケテハ絶スアリシトイヘル心ナリ

此章は近代の人のことを論せん爲に人麿赤人かことにうけて寄法にかける心なりさて延喜近代のことくさかりにはなくて弘仁のみかとの詩賦を好ませたまひし餘輝の猶ありてすくれた

る人〻もより／＼にはありけれと集をつくることなともよゝせさせ給はさりしに延喜のみかとしも古をおほしめして此集をえらまさせたまふ事のめてたきよしを下にいへるはえをあらせていへるなり

○この章へひとりふたりなりきといふまては普通へこれよりさきの哥をあつめてといへる章の次に出たれともひとりふたりといへるを人麿赤人のことゝすれはその次に普通にはへかの御時より此かたといへること年代誤となれはこれは弘仁の頃の人としてこゝにおくなり普通の本にはこゝのへこの人〻をおきてといふよりたえすそ有けるまてはへ人まろは赤人かかみにたゝむ事かたくといへる次に置たれとへかの御時より此かたといふ章より上にありては猶かの年代延喜までのことゝ成て人麿赤人か時代も万葉の時代もあはねはこゝに出してへ此ひとりふたりといへるをうけて此人〻をおきてといふ心につらねたる也

廿四 (しかあれとこれかれ (シカト云ニアハアリケレトノ心也) コレカレハカレコレナリカク逆法ニカクニ心アリ順ニコレカレトカケハカソフル上ノ詞トナルナリコ レカレト逆ニイヘハソノヒトツ／＼ハナシテイフ心トナルカタカヘリ大小トイフヘキヲ孟子ニ小大由 之トカケルニ同シ コレヲ逆法トス えたる所えぬところたかひになんある ヒト事ニ堪レハヒトコトニオクルヽヿアルヲ云乃得失コレナ リ上ノ一人二人トイヒスクレタル人トイヘル人ゝノヿナリサ ル堪能ノ上ナレト得失ハアリ必シモ難トスルホトノ失ニテハアラ子ト全花實具足シテ簾芒ノ失モナキホトナルハカタキヿトミエ タリスクレタリ又古ノ一哥ノ心ナモシレリトハイヘモ全具足スルヿハカタシトイヘル也人丸赤人ハカゝル論モナクテマコトニ聖 境ニ入レル サミセタリ

此章前章の理をつくしてさて此下の近代の人〻の得失を論せんかための端をは中古の人〻にも具足せるはすくなきよしをいふ也

○この章は普通へこゝにいにしへのことをも中畧ひとりふたりなりきといふにつゝきておかれたれとわつかにひとりふたりなりといへる人はかり得失はありてそれより上にすくれたる人もといへる章あれとこゝにといふ詞をへたてたる故にそのすくれたるといへる人〻には得失なからんこゝちすひとりふたりなりきととりたてゝいへる人にたに得失あらはいかてそのすくれたる人〻にも得失あらさることをえむやとてこの間を引わけてへ此人〻をおきてといへる章をこゝにはさみて一人ふたりといへる人もすくれたる人といへる人もおしこめて得失ある心に今つゝけたる也

上手のうへにたにかゝりまして下手の人はことに心を用へしといふ也

○此章より下此次の章より上に普通の本にはへかのおほん時よりこのかた云〻此一章はすなはち上にいたせり又へいにしへのことをも哥をもしれる人よむ人おほからすといふ一章一本にはなきもありそれに従ふへし第廿三章にもかくのことき詞いてゝ又今更にこゝにかくいはむやうなしおもふに第廿三章の異本なとにてかたはらに書つけたりけるをいふかひなくうつしあやまれるなるへけれは今はこれをはふけり

いれすハ人數ニナリいはすハ得失ヲ也

廿五　今此ことをいふに（今トハコノ下ノヿ也此ヿトハ得失ノヿ也）つかさ位たかき人をはた（天子ニ對ソ官位ヲカロンスルニアタル也　官位ニ對ソスマヌヿナレハトイフ也）やすきやうなれはいれす（はイ）

此章寄法なり高官高位の人は官位をあなとる心あれは此人數にいれすと也

コノ得失ハ人丸ヲ哥ノヒシリトスルヨリノ論ニテワロシト難スルニハアラス

廿六　そのほか。ちかき世に（に）（ソノ外トハ上ノヒトリフタリナリキトイヒスグレタル人モトイヘルソレヨリ外ニテトイフ也近キ世トハ弘仁以後五十年ハカリヨリ延喜マテノ間ヲヒロクサシテイヘリ弘仁ヨリ延喜マテハ百餘年ナレトソノ中延喜ノ方ヘ近キ世ニト云ナリコノ下ノ六人ノ内ハ皆延喜當代ノ人ニアラス當代ヨリハ以往ノ人ナレハ近キ世ニトハイヘルナリ眞名序ニ其後和哥弃不被採雖風流如野宰相（篁ナリ）輕情如在納言而皆以他才聞不以斯道顯トイヘリコノ二人ノ内小野篁ハ弘仁元年ヨリカソヘテ四十三年メニ當ル文德帝ノ仁壽二年ニ卒去セラレタレハ上ノ第廿三章ニイヘルすくれたる人々もトイヘル内ノ人トスヘシ在納言行平卿ハ宇多帝ノ寛平五年ニ薨セラレケレハ今コノ章ニイヘル近キ世ニソノ名キコエタルトイフ內ニ入ルヘシ眞名序ハタヽ二人類ヲ以テ出セルナリト知ルヘシ）その名聞えたる人はすなはち（ソノ名キコエタルトハ此道ニ名譽ノ人ヲイフナリスナハチトハソレニ直ニ引ツヽケル心ヲサトス詞ナリ文ニそのすなはちにナトモイヘリ）

サマトハ哥ノ全体ヲ知レルナリサレハ風体モソレニコモレリ

僧正遍照は（コノ以下六人ノ傳時代等ハコノ集中ソノ出タル所々ニイヘハコヽニイハス下皆準之）うたのさまはえたれとも。（得）（ソレニアハシテハト入テミルヘシ下效之）まことすくなし（失）（サマトハ哥ノ姿ナリ姿トハ風調ノヿナリコレヲエタルトハタケ高クウルハシキナリマコトヽハ眞言ノ義ニテ眞心ヨリ言ヲイヒテカリニモタハフレタル言ナトノナキヲ云シカルニ遍照カ哥僧ニシテ〽はちすはの濁にしまぬナトヨミ〽苔の衣はたゝひとへ〽名にめてゝをれるはかりそナトキハメテ濶達ナル哥多シモト良岑ノ宗貞トテ少將ニテアリシホトハイト色コノミナリシヲ仁和ノ帝ヲ失ヒテヨリ御出家シタルホトノ人ナレハオノツカラ性アラハレテ濶達ナル言アリケレハ言戯タルヤウニミユルナリコレ滑稽ナリサレハ哥ノ姿ハタケタカクウルハシクヨマレケレト滑稽ノ如クニテ眞言スクナキコヽチスト也コレヲソシレルニハアラヌヿハ滑稽モタヤスカラ予ハヨク思フヘシ哥ノ姿ニアハセテハ言誠ナキヤウナリトイフニテ畢竟滑稽濶達ナルヨシヲイハントテノヿナリ）

詞ノ上ヲミレハマコトスクナキヤウナリトイヘル也

たとへはゐにかけるをうなをみていたつらに心をうこかすかことし（畫ニカケル女ハウルハシキ物ナレハサマヲ得タルニタトフソレヲミテ徒ニ心ヲウコカストハ畫ナレハイカニ思フトテ心ヲカヨハサンヨシナケレハソノ言ノ上ノ滑稽ニ心ヲウコカスモ滑稽ナレハ誠ニテハナカランヤウナルコヽチスルヿヲタトヘタリ）

心ヲサハカリアマス力アラハ詞モシカトヨマルヘキニト也

ありはらのなりひらは心あまりて（得）ことはたらす（失）（業平ハ文德實錄云容貌閑麗頗無才學能和歌トイヒテ餘情有心ノ体ヲエテマコトニ古今堪能ナリサレハ心アマリテトハ言外ノ意味フカキナリ言タラストハ意味アマリニフカキ故ニカヘリテ詞ノ足ラサルコヽチストナリコノ序者ヲ貫之トシテ

風体カ詞ノ巧ナルニハ少シオハヌコヽチスト云也

モトヨリタシカナラスハ哥トハイフヘカラ子ハソシレリト思ヘルイトツタナシ

コヽヲ業平ヲハソシラレタリト心エテ貫之ハ餘情妖艶ノ体ハキラヘリトイフハ大ニアヤマレリコヽノ評サナラス意味ノアマリニフカキニクラフレハ詞ノタラサルヤウナルヲハアカヌ所トハイフ也餘情ノ哥タレカヨミヤスカランコレヲ知ラテコレヲスツルヿイフカヒナシ貫之モシ餘情ヲキラハレハ〳〵手にむすふ水にやとれる〳〵むすふ手のしつくにゝこる〳〵おもひかねいもかりゆけはナトノ哥ヲイカテカヨマレテ後世ニモコレラヲ秀逸トハスランコレラノ餘情イフヘカラス妖艶トイフハ幽玄ノ境ナリコレハ貫之ノキラヘルノミナラス哥道ノ邪路ナリ後世ハ餘情妖艶ヲ混セル故ニ古ノ正路ヲウルヿヲエサル也ツヽシムヘシ　しほめる花の色なくてにほひのこれるかことし　シホメルトハ花ノ盛過タル也凋ノ義也ニホヒトハ万葉ニ艶ノ字ヲヨミテ色ノ光沢ヲ云後世香ノヿト打マカスルハアヤマレリ香ニヽホフトハイフヘシ凋メル花ハ盛ノ思ハレテイトアハレナレハ業平ノ哥ノ打見ニナニトナクアハレ深キニタトフ色ナクテハ言タラヌノタトヘ也ニホヒ殘レルハ心アマルタトヘナリ色ナケレハニホヒモアルマシケレハ言ノサマヨリハ存ノ外ニ意味多キタトヘナリカハカリノ餘情ナレハ今少シハ言ニモタシカナルヘキニイカナルニカ分外ニ詞スクナキヲ具セスト云ニテ詰ルニハ非ス　ふむやのやすひてはことはたくみにてそのさま身におはす　タクミニテトハ曲節妙巧ヲ言ニツクスヲ云ソノサマトハ哥ノ姿即風調ナリ身におはすとは身分不相應ノ義ナリサレトコヽハ康秀カ身ノヿニアラスソノ風体ヲ身トハイフナリ其サマニ言ノオハストイヘル心ナリト知ヘシサマトハヤカテ躰様ノ義ナレハ理ナキニアラヌナリコレ又ソシレリトミルヘカラス詞ニハ曲節精巧ヲツクシテ人ノ及フヘクモナク面白サ無量ナルニソノ風体ソノ詞ノ面白キニクラフレハ風体ハ精巧ヲモツクサズ（タラズト）イトハヌ見エテ麁ニ見ユルヲ身におはすトイフ也詞巧ナルヿ誰カヨク及ハンヤソノ及フヘカラヌ方ヨリミレハ体ハスコシクハシカラヌコヽチストイハルヽ也詰レリトミルヘカラス風体ニハサマテ心オカレサリケル故ナルヘキニヤ　いはゝあき人のよきゝぬきたらんかことし　アキ人トハ商人ナリヨキヽヌトハ美服ナリたらんトハテアルラントイフナリシカトキテアルト定メスシテイフナリカヽルヿモアランソレガコトシトイヘル心ナリ商人ハ四民ノ内ニテ士農工商ト次第セルドニタテル身ニシテ美服スルハイト身分ニ不相應ナレハイフナリアキ人トハソノ哥ノ風体ノ詞ニオハヌ故ニ出セルニテ少シ高上ナラヌ心ヲフクメリヨキヽヌハカノ詞ノ精巧無上ナルタトヘナリ無上ナルニクラフレハスコシ風調相應セストイヘルマテ也　うち山の僧きせんはことはかすかにしてはしめをはりたしかならす　コレ又詰レリトミテ喜撰ノ体モ貫之コノマレスナト心ウルヿヒカコトナリコトハカスカナリトハ詞ニ意味ヲフカク隱ス故ナリことはかすかなりノ詞ノ對伏意乃心ハ十分ナル言外ノ意味アルヿハシラレタリカク詞カスカニ意味ヲコムルヿ人ノ及フマシキ境ナルニアマリ幽ナルニ過タルコヽヲチスルハコトノ始終含畜セサルヤウニミユルトイフ也コレモ幽ナルハ凡人カタケレトアマリニ過タル所ヲ見出テイヘレタルニテソシレルニハアラスタレカハ詞幽ニ餘情タクマシクサヤカニヨミエテンはしめをはりたしかならすトハカノ我庵は都のたつみとよめる哥末句のをはり人は[illegible]に詞幽ナルアマリニいふなりト公ニ理ヲハフキテヨマレタル所ヲタシカナラストイフニテソノ體ナラヌ所モタレカヨミ得ヘキヨク思ヘハキナ

りいは〻秋の月をみるに曉の雲にあへるかことし コノ曉ノ雲ニアフトイフニテ上ノはしめをはりたしかならすトイヘルハ始モ終モタシカナラストイフニアラヌ丨知ルヘシ始イヒ出タル丨ノ終ニイタリテ慥ニ理ヲイハ子ハスナハチ始モタシカナラヌ心ニハナルナリタシカナラストハ早竟理ノ分明ナラヌヲ云ナリ秋ノ月トハナカムルニ何トナキアハレモ立ソヒ幽情ヲヒカル丶物ナレハ詞カスカニシテ意味深長ナル丨ヲタトフ曉トハ夕ニ對シテ月ハ夕ヲ始トシ曉ヲ終トスルナリ曉ハ終ニタトフ雲ニアフハタシカナラサルニタトフ秋ノ月ニムカヒテ幽情催サレテメカレヌニ曉ニイタリテフトソノナカメヲ雲ニカキケタレタルコ丶チストイフ也早竟ハイト丶意味ノフカクナル丨ヲ曉ノ雲ニアフトイフ心ナレトモオホカタ詞ノ始ヨリノ詞ウルハシク幽玄ニヨミユキタルニハ不偶ナル心ヲスル所ヲ評スルマテ也

よめる歌おほくきこえねはこれかれをかよはしてよくしらす カノわか庵はノ哥一首コノ集ニ見エテソノ餘後撰ヨリ一首モノスル丨ナシサレトおほくきこえすトイフ詞ヲ思フニ一首ナラハおほく聞えすトタニモイフヘキホトニアラスコトニこれかれをかよはしてナトカタ〱一首ノミニアラサル丨明ナリ孫姫式ニ基泉ヘ丶木のまよりみゆるは谷の螢かもいさりの蜑の海へゆくかもトイヘル哥玉葉集ニいさりの蜑の沖にゆくかもトシテ喜撰トシルシテ入レリ基泉ト喜撰文字カハリテ声同シ異同ヲシラス古來カ丶ル丨マ丶アリ續古今集エラハル丶寸コノ哥入ルヘキ沙汰アリケルヲ為家卿不同意ニテノコレリトソ又樹下集ニ喜撰ハ丶けかれたるたふさはふれしこくらくのにしの風ふく秋のはつ花トイフ哥アリコレラノ哥同人ノ哥ニヤコノ餘ニ諸集所見ナケレハコノ三首ハカリナル故ニおほく聞えすトイハレケルニヤシカラハ此三首ナカヨハシミテソノ得失ヲヨクシラシムトイヘルナルヘシおほく聞えすトハ數首世ニ云ツタヘタル哥モナシトナリサレト此三首必同人ガノナラハソノ中ニテわか庵はの一首ヲ抽出テ此集ニ入ラレタルナレハ人コノ一首ノミナヒロク知ルヘクタトヒノコレル二首ヲ人シレリモソノ餘ニナケレハ一二首ノ内ニテイカテソノ得失ハシラレエンヤト後人ノ詰ヲフセギテコノ一句ハカケルナリコレカレトハ卽此一二首ナリカヨハストハソノ得失ノ性ヲオシカヨハシハカル心ナリ數多カラ子トコレカレヲカヨヘシテミテコノ評ヲイヘルナレハ彼カ得失ノ丨ハヨク人ニシラシムル丨ハエタルソトイヘル心ナリシラストハ令知ノ心ナリ喜撰ハイツレノ帝ノ勅ニヨリテカ式ヲツクレル丨千載集ノ序ニミエタリソノ餘又ソノ丨ヲシラ子ハソレヲ置テタ丶一二首世ニキ丶エタル哥ノ中ニテ一首此集ニ加ハリ猶コノ六人ノ中ニ批評セラル丶丨何ノ面目カコレニスキナン

をの丶こまちはいにしへのそとほりひめの流なり 衣通姫トハ允恭帝ノ妃ナリ同帝ノ皇后應神帝ノ皇子稚渟毛二派皇子ノ女忍坂大中姫ノ妹ニテトヨノアカリノ丨ニツキテ帝ニス丶メ玉ヒテ妃トナル本名弟姫ト云允恭紀云弟姫容姿絶妙其艶色徹衣而晃之是以時人号曰衣通郎姫古事紀ニハ藤原之琴節郎女トイフモコノ衣通姫ノ一名トミユ帝皇后ノ姨ニヨリテ藤原ニ宮ヲタテ丶スマセタマヘハコノ名アルカ流ハタグヒトモ訓スレハ小町ハ哥古ノ衣通姫ニタチナラフヘキ物ナリトイヘルナリ

あはれなるやうにてつよからすハ

美人ナル上ニ哥仙ナレハ也

ホメタリトイヘハソシレル心アリソシレリトスレハホメタル心アリ

レハ上ニモイヘル如ク何怜ノ字ナリ見ルニ心フカケレハ心ニフカクツキテ打オカレヌサマシタリトナリサルヿタレカ及フヘカラヌニソノアハレヲコムルホトノ哥ニ力アレハ詞モシタヽカニアルヘキニ哥ノサマソノアハレナルニ對シテハツヨカラヌヿ、ヲストイフナリコレ又ツヨカラヌヲ詰ルニアラスアマ(アハレナルニ)リニアハレフカタヨムホトノ力ニクラヘテイフ也 いはゝよきをうなのなやめる所あるに似たり(かことしイ) ヨキ女トハカホカタチヨキ也美女ハミルニ心ニツキテハナレ居カタク思ハルレハ。タトフナヤメルトハ病ニナリ病アレハ元氣オトロフレハイトヨワ〳〵トスルニツヨカラヌヲタトヘタルナリコレモ美人ノナヤメラハイト、アハレフカヽランカ如クイト、アハレモ立マサリテミユヘケレトアハレフカキニムカヘテノ批評ナリトシルヘシ つよからぬはをうなの歌なれはなるへし コノ詞アルヲモテ六人ノウチ小町ノミ難ナキニ同シトテコレヲホメタル詞トミルハ亦誤ナリサナラスソノ故ハシカトアランニ哥ノ詞ハマスヿアルマシキヲヤサレト班固妹班(カ)昭女誡云陰陽殊性男女異行陽以剛爲位陰以柔爲用男以強爲貴女以弱爲美故諺有云生男如狼猶恐其尫(ヨハカランヿヲ)生女如鼠猶恐其彪(タケカランヿヲ)トイヘルコトクヨワキハ女ノ性ナレハセン方ナシトイヘルニテ男子ニ比スレハツヨカラストイフヘケレハコソカヽル上ノ詞ノ批判アレ女ナレハツヨカラヌトイフハワリナシト人イハンカトテ上ノ喜撰カ哥ノ下ト同シク後人ノ詰ヲフセキテイフナリ難ナシトイフニハアラス又ユルサヌニモアラヌ所アルヿヲヨク思フヘシ難ニシテユルスハ男女ノ別アレハナリユルシテ失トスルハツヨカランヲ思フ故ナリヨワシトテイツレノ男子カ及ハンナレハモトヨリ詰ルニハ非ス おほとものくろぬしはそのさまいやし コレハコノ詞ノ對伏意アルニユツリテタヽ一句ニカケルナリコノ對伏ハ哥ノ風体ハ心詞ニ對セリイヤシキハ貴キノ反對ナリサレハ心詞ハ人及フマシキニソノ貴キ方ヨリミレハ風調ハ少シイヤシキ方アリトイフ也末練ノ方ヨリイヘハ〳〵おもひいてゝこひしき時は初厂の鳴てわたると人はしらすや〳〵かゝみ山いさたちよりてみてゆかんナト小注ニヒケル哥ナトヽテイヤシトハイフヘカラ子ト貴キ方ヨリミテノ批判ナリト知ヘシサレハコレ亦ナシレル心ニテハアラスト知ヘシ いはゝたきゝおへる山人の花の陰にやすめるか如し タキヽオヘル山人トハソノサマノイヤシキニタトフ花ノ陰トハ心詞ノイウニアハレアリテオカシクアルニタトフ眞名序ニ頗有逸興トイヘルコレナリ山人ノイヤシキサマシタレト花ノ陰ニヤスメハイト、ソノイヤシキモイウニヤサシク思ヒナサルヘキ理ナレト花ノ如クアハレニヤサシキ心詞ナルニクラフレハ山人ノサマハイヤシトテカクハイヘルナリ源氏夕皃ニ物のなさけしらぬ山かつも花の陰には猶やすらはまほしきにやらん

此一章近代名譽の歌仙のうち高位なる人をはふきて得失を論する也すなはち前章のえたる所えぬ所といへるをうけてかける也章の心は何故にまつかゝる批判はせられけんとうたかひみるへし此論を設たる故はかゝる歌仙のうへにもその分際〳〵にしたかひて得失の論はかくあ

る物なれはまして未練の人のつゝしみおもふかうへにもつゝしむへきよしある事をしれとて也さて此六人の批判を未達の日心よりみおもひてこれらの詞を皆難をあけられたりとおもふ故に餘情妖艶をあやまりて業平朝臣喜撰なとはかへりてまなふへからすとする事いとも〳〵いふかひなくいま〳〵しきこと也この判詞をみるへきやうこそあれ此六人もと近きよに其名きこゆるとあれはかゝる難をもてるほとの人〻ならはもとよりさもいふましく又論するにもかひなかるへしすへて未練の分際にあてゝ此詞ともをみるか故に誤る也こゝをおもひて堪能のうへの事なりとしれはみなよき所の超倫なるよりくらへては少しおとれる所あるよしをいへるまて也上よりみると下よりくらへておもふとまことに雲泥の心となるへけれはことにこゝはくはしくみしるへき章なりこれをしれは難したるやうにて難せるにあらす難せさる所はいふに及はす凡人のうへからさる境にしてそれにくらふれはこゝこそ相應せねといふにてその難かへりてその難せさる所の人及ふへからさる境なる事をしらしむる意とはなる也其故はこの難せるやうなる詞のさかひにたにいたらむと思ふに未達のうへよりは向上の境なれはすへておろかに心えて古人をあやまち此序者の心をうしなふ事なかれしかのみならすわか哥よまむ志にもいたく害をなしてわか生涯をもあやまるへきことなれはことさらにくりことのや

うにかくはいふ也此下の章の詞にも此外の人〻は哥のさましらすといへれはこれらは皆哥のさまえたるをえり出たるなれはかへす〳〵たゝ未達の者はことにつゝしむへきをしへ也

廿七

此ほかの人〻はその名きこゆる此外ハコノ六人ノ外ノト云也ソノ名世ニキコユル人人ハトイフ心ナルヲ上ニ人〻はトイヘレハソレニ讓リテソレヲウケテ畧セル也コレヲ承法トス野へにおふるかつらのはひひろこり詩周南云葛之覃兮施於中谷維葉萋〻トイヘルニ同シク葛ハソノ蔓イツクトナク這ヒロコル物ナルニ名ノ世ニ聞ユル人ノオヒ〳〵ニ近代オコリテ塵ナツギテ多ク成リユキタルタトヘナリ野ヘハ野ノ方ト云也。廣キ所ナレハ野ヘトイヘルモイトイタクヒロコル心アルカ野ハはやしにしけきけイ木の葉のことくにおほかれと林トハ樹ノ多クアツマレル所ヲ云ソノ樹多キ所ナレハ木葉イトシケキヿ知ヘシ近代哥人ノ数カソヘカタキマテ多キヲ云葛ハ歌人ノ多クナリユクサマニタトヘ木葉ハ人数ノ上ニテイフナリおほかれとトハ多クアレト、イフナリコレ数ニカ、レル詞ナリ哥とのみおもひてそのさましらぬなるへしコ、ニサマトイヘルハ上ノ章ナトニソノサマイヤシナトイヘルニハ少シタカヘリト見ユモトサマトハ躰ノ義ナレハイツレニモカヨフカ内ニカレハ哥ノ風体ナリコレハ全体哥ノ本体トイフ心ナルヘシイカニトナレハ上ノ章ノハソノ一人ノヨメル哥ノ上ニテノ論ナレハソノ哥一首ノ体トイフナレハ風体ノヿトナル也コ、ハ哥道ノヿニカケテノ論ナレハ哥道ノ所以本体ヲシラストイヘル心ナリコノサマトハ乃第一段第二段等ニイヘル所ノ意味ヲイフナルヘシコノ詞ノ對伏ヲモテオモヘハ前章ノ六人哥道ノ本体ヲエタリトナレハ乃第一第二ノ段ニ應スル心アリ哥トノミ思フトハ歌ハタ、ヨミニヨム物ノヤウニツ子ニ思フハカリニテ哥ノ徳用ヲ思ヒ誠ヲハツ子ニ辞ニヲサムルヿナトハシラヌ人ニテアルヘシトナリヘシトハコノ六人ノ如キ哥見エヌ故ニイヘリ

此章は前章の六人を出せることわりをいへりこれ故にかの六人を出せりと也心はかの六人したひまなふへきによろしき人〻也といふ也終にいにしへをあふくといふ事をいはんとて也

○第十六章より以下此章まて十二章を第三段とす此段の心は第一段に哥の綱本をいふにむかへて第二段に道にかなひかなはぬよしをいひたれは寧樂宮御宇より近代まてその道をしれる

人をあけて第一段の首尾とせる也下の第三十三章の心を（いはむ爲に）。此一段はかける也

廿八 かゝるに カクアルニト云ナリムカシヨリ哥ノオコルヨリ世ニツタハリサテナラノ宮ノ御宇ヨリサカリニ盛衰モアリテ近代ニ至レルマテヲカケテ云也 今すへらきの 天皇ノ義ナリスヘハスメトキコユルヤウニヨムヘシスメハ祖ノ義ナリらハ野らなるナトイヘルら也サレハ民ノ爲ニ祖のごとき君といふ心也きハ君の下略也 あめのしたしろしめすこと 治世在位ナリ よつのときこゝのかへりになんなりぬる 醍醐天皇諱敦仁宇多天皇第一皇子母藤原胤子内大臣高藤女昌泰四年延喜五年アハセテ九年也コトシマテ即位ヨリヲ云

此章は第五の章より以來をうけて下の章の綱（をおこして）にかける也

廿九 あまねきおほむうつくしみの浪やしまのほかまてなかれ ウツクシミトハ恩ノ義ナリウツクシムトハ愛スル義ナリソレヲ体（過去）ニシテミトイヘレハ恩ノヿニナルナリウツクシミノ波トハ、文選丘希範詩云肅穆恩波被トモツクリテ恩ノ身ニヨリ來ルヲ波トヨセテイフニヤ八洲トハ日本ノ名也日本紀云神代上於是陰陽始遘爲夫婦及至産時先以淡路洲爲胞意所不快故名之曰淡路洲廼生大日本豊秋津洲次生伊豫二名洲次生筑紫洲次双生隱岐洲与佐渡洲世人或有双生者象此也次生越洲次生大洲次生吉備小洲由是始起大八洲國之號焉トイヘル コレナリ八洲ノ外トハ異國ヲヒロクサスナカル、トハ波ノヨセヨリ恩ノ滞ナクユク心ナリ 源氏明石ふかき御うつくしみやしまにあまねくしつめるをこそおほくらかへたまひしかと云、コレニ同シ ひろきおほんめくみのかけつくは山のふもとよりもしけくおはしまして メクミノカケトハ惠アレハソノ惠ニワカ身ノヨリカクルレハ陰トイフ也此集常陸哥〳〵つくはねのこのもかのもに陰はあれと君かみかけにます陰はなしトイヘル心也袖中抄云公任卿注云此山繁茂之由常陸國風俗歌中〳〵つくは山は山しけ山しけきをそたか子もかよふ下にかよへる我妻はしたにトアリシケクトハ惠ヲカケ玉フコトノシケキトイフコ、ロナルヘシつくは山常陸也○以上二聯延喜帝ノ仁徳スクレタマヘルヿヲイフ也 よろつのまつりことをきこしめすいとま マツリコト、ハ國政ナリ天子ハ朝ニ出テ南面シテ国中ノ政事ヲ聽玉フ也ヨロツトイヘルハ大數ナリ數千ノヿトモアレハ御イトマナキニソノ御イトマニト云也菅家文草云我君一日之沢万機之餘云々 もろ〳〵のことをすてた 以上ハ上ノ章ノ綱トシテ目ニカケリ まはぬあまりに モロ〳〵ノヿトハソノ國政ヨリ外ノ諸事ナリソレヲモステヌトハコノ道ナト諸道ヲマナヒ修シ玉フ餘暇ニト也あまりモ猶暇ナリ暇餘ノヿヲイフハ此撰集ヲオホセツケラレシヿヲイハントテナリ以上二聯ハ下ノ句ノ寄法也 いにしへのことをもわすれしふりにしことをもおこし給ふとて イニシヘノコト、ハスナハチ學文ノヿナレト神代ヨリ此道ノオコリテコノ道ノ本意高

ミソナハシ上ノサカシオロカナリトシロシメジケントイフニ應セリ當代ノ人ノ賢愚ナモ哥ニテミ玉ハントテ也

クトホシロキヿヲ知リタマヘルニソレヲ悉レジトオホシメシ且フリニシコト丶ハスタレタルヿニテスナハチカノ廿二ノ章ニイフ万葉集ノヿヲ云ナリソノ後盛衰アリテ哥ノ集ノヿナト沙汰ナクテ世〻ヲフリニシヿヲ今マタ興シタマフトテト云也イニシヘノヿトハ乃第一段ニイヘル所ノヿモナリ班固兩都賦序云以興廢繼絶潤色鴻業トイヘリ　いまもみそなはし後の世にもつたはれとて　ミソナハストハ御覧ノ義ナリ神君等ノ見玉フヿヲアカメテイフ詞也コレ乃古今集勅撰ヲオホセツケラレタル帝ノ御趣意ヲイフナリ今モミソナハシ云〻トハ今モソノ人〻ノ心〻ヲ見テ誠トモシ後世ニツタヘテハ教トモシタマハンノ御心ニテトイフナリト知ヘシトテトイフ詞重疊シテキ丶ニクキヤウナレト外ニイハン詞モケニナケレハナルヘシ但コノ一聯ハ上ノ一聯ノ補ニテ乃下ト寄法ナリ寄法ナルヿヲシレハトテノ重ナレルモ疑ナキ也　延喜五年う月十八日に（六）　貫之家集云延喜御時やまとうたしれる人をめしてむかし今の人の哥奉らせたまひしに承香殿のひむかしなるところにて哥えらせたまふ夜のふくるまてとかういふほとに仁壽殿のもとの櫻の木にほとゝきすのなくをきこしめして四月六日の夜なりけれはめつらしかりおかしからせ給ひてめしいてゝよませ給ふにたてまつる〻ことも夏はいかゝ鳴けんほとゝきすこよひはかりはあらしとそきくトアリ袋草子ニハ末句この暮はかりあやしきはなしトアリコノ家集ノ六日ハ十八日を書アヤマレルナル（ニニ）ニヤト清輔ハウタカハレタリ契沖コレヲ難シテ只此十八日ヨリサキノ六日ナルヘキハ夏ニイリテイクカモアラ子ハ時鳥ヲメツラシカラセ玉フナリトイヘリ今案スルニ清輔ノハ非ナリ契沖カ考ハコレヨリサキノトイヘルハ似テ非ナリコレハ家集ノ方ハ契沖ノイヘル如ク初夏ナレハ郭公ヲメツラシカリ玉フナレハ六日疑ナクカヘリテコノ序誤寫ナルヘシ別日ト契沖ハイヘト事同シキヿナル上ニ六日十八日アヤマリヤスカルヘケレハナホコノ序ノ誤寫ナルヿヲシレ丶ハ今十八日ヲ六日ト改メタリ普通ノ本皆十八日トアリ　大内記（ダイナイキ）きのとものり　職原抄云大内記一人相當正六位上近代五位唐名柱下起居郎　御（ゴツ）書のところのあづかりきのつらゆき　和名抄云蘭林房（在式乾門之東今分區御書所是也）拾芥抄云在侍従所南有公卿別當預（有書手云々）貫之ハ陽成帝ノ元慶八年ニ生レラレタレハ延喜五年コノ時行年二十二歳ナリ　さきのかひ（甲斐）のさう官（ゲワン）おふしかふちのみつね　サウ官ハサクハン也眞名序ニハ少目トイヘリ甲斐ハ上國ニテ大目少目アリ　右衛門（ヱモン）の府生（フサウ）みふのたゝみねらにおほせられて　右衛門府ニハ督佐權佐尉府生アリ以上ノ四人父祖等未詳らトハ四人ヲカケテイフ卑言ニナド丶モナドイフ心也オホセラル丶トハ命セラル丶ナリ物ヲ人ニ負ハスル義ニ同シ心ニテ訓シタルモノナリ　万えふしふにいらぬふるきうたみつから（在世ノ人ノヿ也）のをもたてまつらしめたまひてなん　カクハイヘレト此集中万葉ノ哥数首アルハアヤマリテニヤ又ハ草ノマヽノ世ニ證本トナレルニヤミツカラノトイフ下ニ歌トイフ字アルヘケレト上ニアレハソレニユツリテウケテハフケリ承法ナリフルキ哥トハ万葉集ニイラヌトアレハ万葉集イテキタルヨリ以前ノ人ノ歌ヲ云ミツカラノトハ此四人ハ勿論在世ノ人ノ家ノ集ヲ奉ラシメタマヘルナリサテ万葉集ノ後延喜マテノ間ノ人ノ哥多クイレルハ古今（コン）ヲイヘルニコモレ丶ハカ丶ヌナリ又今ノ世ニテモ賤シキモノナトノ哥ハミツカラノヲモトイヘルニカ子タリトミルヘシミツカラトハ自身ノ義ナレト俗ニハ只我トイ

ヘン詞ノヤウニ心ウルハ誤ナリ幾百人ヲモカケテメイ〳〵トイヘル心ナリ一人ノコニモ数人ノコニモカケテイフ詞ナリてなんトイヘル下ニ詞猶アルヘキヲナンノ脚結ニフクメユヅリテハフケル也カヽル例文ニハイト多シ古今ノ哥ヲ献ラシメ玉ヒテサテ此集ハ成就シタリトノ心ヲコメタリ上下ノ打合ニテシルケレハナリ詞ハスヘテ理タニアラハ簡古ニメナカ〳〵トクタ〳〵シカラヌヲモト、スヘケレハナリ簡ナレハツヨシ此故ニ古人ハ後世ニマサレリ

此章は第廿三章の此道おとろへたるにむかへて今のさかりなるをいひて撰集の發をおこさせ給へる御徳をほめ奉れる也そのうち今もみそなはし後のよにもつたはれとてといへる詞第十三の章のそのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのみかと云〻　といへる帝に此みかとの御心おなしきこゝろによろこひてかけり猶第十七章のかのおほん世や云〻　といへるも今の世におなしきこゝろ且第一段にのへたる所の趣意皆こゝに歸せしめてかける也と知へし

三十　それかなかにも（コレコノ詞ハ乃古今集ノ中ヲサシテイフナレハ上ノ章ノ終上ニイフ如クナントイフニヨセテハフケル也）うめをかさすよりはしめてほとゝきすをきゝもみちををり雪をみるにいたるまて（梅ヲトイフヨリ四季ナリスナハチコノ集ノ部立ノコヲ云ナリ下ミナオナシ）又つる亀につけて君をおもひ人をもいはひ（賀ノ部ノコ也ツケテトハカノ第二章ノミル物キク物ニツケテトイヘルニオナシト知ヘシコヽモ又皆コノ集中ノ哥ニアタリテカケリ四季ノ哥ハ引ニ及ハスイト多シコレハ賀部ニ〻つるかめもちとせの後はしらなくにあかぬこゝろにまかせはててん〻よろつ代をまつにそ君をいはひつる千とせのかけにすまむとおもへは）秋はき夏くさをみてつまをこひ（戀ノ部ナリ戀ニ〻吹まよふ野風をさむみ秋はきのうつりも行か人のこゝろの〻かれはてんのちをはしらて夏草のふかくも人のおもほゆる哉）あふさか山にいたりてたむけをいのり（離別ノ部ニ羈旅ナカ子タリたむけをいのるトハタムケノ神ヲハ人ニ別ル、小境ノ山上ニイタリテ旅ノツヽカナカランコヲ祈ルナリ和名抄云道祖（佐倍乃加美）道神（太無介乃加美）風俗通云共工氏之子曰修好遠遊故祀爲祖神万葉に齋禮又祈ナトノ字タムケトヨメレハイノルコナモ手向トイフ也モト幣ナトタムクル神ナレハタムケノ神トイフニヤ又山ノタウゲト里言ニイフモタム

ケナリタウゲハ多ク兩國ノ間ニアレハ兩國ノ人コナタカナタヨリ越テ旅ユク人手向スル故ナリ逢坂ハ東國ニユクニハ必コユヘキ山ナレハヤカテたむけの山トヨメリ万葉第三に坂上郎女カ逢坂山ニテヨメル哥〽ゆふたゝみたむけの山をけふこえていつれのゝへにいほりせんこら菅家ノ此たひはぬさもとりあへすたむけ山トヨミ玉ヘルモ名所ニアラス乃樂山ノタウゲヲカク宣フ也〽かつこえてわかれもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこそありけれ此集

あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〴〵の歌をなんえらはせたまひける

クサ〳〵トハ雑〻ノ義也雑ノ字クサトヨメハ也種〻ノ心ナリコレハ物名哀傷雑躰大歌所御哥等ヲカ子テイフ也此集ノ部立ノ次第トコ、トカハレルニ心ナシタ、宜シキニシタカヒテナルヘシエラハセ玉フトハエラハサセ玉フトイフナリコノ集春ニ康秀カ春の日の光にあたるトヨメル詞書ニモ上畧 日はてりなから雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ふけるトアリ

すへて千下うたはたまき廿なつけて古今和哥しふといふ

千百十一首也

カノ前ニイフ四季戀雑等ヲスベテト云也千ウタハ千首ナリ眞名(二字消)新撰和哥集序ニモ(○古今和歌一千篇トイヘリシカルニコノ集ノ哥數千首ニコエタリタ、大數ニテイヘルナルヘシ後ニクハヘタルニモアルマシイカニエラフ物ナレハトテ千首ニカキリテ過不足ナクセン理ナショキ哥ヲコソエラヘ數ヲアハサレタルヿアルヘカラスヨキ哥アルニ數アマレリトテステラレンヿ撰者ノ本意ナランヤ眞名序ニハ各獻家集幷古來旧歌曰續万葉集於是重有詔部類所奉之歌勒爲二十卷名曰古今和歌集トアリコレニヨレハコノ部類ハ後ニセラレケルナリトミエタリコ、ニハイカテサハイハ○サリケン和文ナレハコマ〴〵トカケハイトムツカシケニイトコトハ多クナランストテ古名ノヿモイハレス第一章ノヨロツノ言ノ葉トイフニユツラレケルナルヘシ

此章は第十二章にいへる所の色このみの家にうもれてそれより外の感には哥もよまぬ事を歎きたる心を存して今此集には四季戀雑の部をわかちてかの花鳥の使とする事にむかへて部をたてられたる心をのへたる也すなはち第十四十五の章の心をもとゝして部たての事をはこゝにしもいひて十二の章のいましめとせる心をいふ也

三十一　かく此たひあつめえらはれて 第廿九ヨリ以下ヲウケテかくトイフナリ乃コノ集ノヿナリ 山下みつのたえす コノ集ノ〽あし引の山下水のこかくれて流つこゝろをせきそかねつるニヨレルニヤ水ハ晝夜ヲステヌ物ナレハ斷ヌノ冠トセリタエストハ此集ノ後マテニウシナハレ斷ルヿナクツ、キテツタハランヿヲ云ナリコ、ノ四ノ詞上下フタツニテアルヘキヲ中フタツハ寄法ニテカケルナリト知ヘシサナクテハ文意カナハス寄法ハスヘ

テソノ理ノタラハヌコヽチスル時ニ上下ノ心ヲタスケテ二句ノ間ニハサム法ナリ　濱のまさこの數（イナシ）おほくつもりぬれは〽ありそ海のはまのまさこをかそへつゝ君かやちよのありかすにせん濱ノ砂ハ數シラヌ物故ニ數オホキ〽ノ冠トスル也コレハコノ集ツクラントテ新旧ノ哥ノ多クアツマリテ集成就シタレハト云心ナリ　今はあすか川のせになるうらみもきこえす今ハトイヘル詞コノ集成就ノ後ノ〽ヲアラハセリ〽よの中は何かつねなるあすか川きのふの淵そけふは瀬になるコレハコノ集ノ半途ニシテサハリアリテヤマン恨ヲイフ也變スル〽ニ明日香河ノ淵瀬ノ〽ヲイヘハ不成シテヤマンハイト恨メシキ也ソノウラミモ今ハナクナリヌト也サル恨ヲイハン〽モキカヌ〽トナレリト云也　さゝれいしのいはほとなるよろこひのみそあるへき〽我君はちよにやちよにさゝれいしのいはほとなりて苔のむすまてサヽレ石ノ岩ホトナルヨロコヒトハコノ集。（數）千歳ノ末ニモコレヲ貴ヒアフク〽トナラハ帝ヲハシメ奉リテ自ナトモヨロコハシケレハナリサヽレ石ノイハホトナルハ數千歳ヲフル〽ニイフ也ノミトハコノヨロコヒヨリ餘ノヨカラヌ〽ハアラシトノ心ヲイフ也上ニイフ如クコノ集成就シタレハコレヨリ後コノ集ツタハリ絶ル〽ナク千万歳ノ後ニモアカメタウトハンヨロコヒノミアルヘキシカ絶スナレルハ新古ノ哥ヲカクエラヒアツメテ數ツモリテ集ナレヽハ也シカ集ナレヽハ今ハ瀬ニナル如ク半途ニ不成シテヤメリナトイフ恨モ（世ニ）キコエスナレリサル恨モナクナレレハ千。（万）歳ニツタヘテヨロコヒノミアルヘシトイフ心トミルヘシ句意ハカクノ如クツヽケレト句ノ表ハ一二ト對シ三四ト對シテカケルナリモト句意ニツケテイハヽ一ノ句ハ四ノ句ノ上ニアリテ次第二三一四トツラヌヘケレトコノ内絶ストヨロコヒトイヘル心主意ナレハ上ヘアケタリ乃一ノ句ハ貫法ト心ウレハ心エヤスシタエヌトイフ〽今ヨリ千万歳ノ後マテニモカヽレハナリ

此章は第廿九章のうちのいまもみそなはし後のよにもつたはれとてといへるは帝の此集をえらはせ給へる御趣意なれは成就せる事を上にいひて後此章をそへて帝の御こゝろ末とほりてめてたからんと此集をは祝し帝のみ心をやすめ奉りてかける也

○第廿八章より以下此章まて四章を第四段とす此段の心は此集勅撰の發起より成就の後までの事をいひて第十四十五の章に歌の時をいへるすなはち此集その時をえたるをのみのせていにしへの道にかなへりと。（いへる也と）はいはすしてしるし第十四第十五の章の詞この集中の哥とも

の詞をとられて外のをしもとられさりしこれこのしるしなりされは此段またく第十四十五の章にむかひてかける也今をこひさらめかもと終にいへる心のしるしをいふ也

三十二

（白ノ謙下ナレハ早ク人モコノ丁ハシリテアル丁ヲソレナリニモタセテイフ也）それ後拾遺に今はたゝそよその事とおもひ出て忘る斗のうきこともかなトヨメルその字ノ心ト同シコレヲコソトクイフヘキニトノ心ヨリ上ヲオサヘテ云詞也 まろら 普通ノ本まくらトアレトまろらまくらイトアヤマリヤスケレハ誤寫ナルヘシ まろトハ男女ニワタリテ自ラ身ヲ称スル謙下ノ詞ナリ女ノイヘル丁ハ落凹物語ニアリまろトハ圓ノ義ニテオヲカド、イヘルニムカヘテ不才ヲ称スル心ニヤ こと。は。のイ は 四人ヲカケテイフ也 春の花のにほひすくなくし 哥ノ詞ナリ て コトハトハ詞ハトイヘル心也春ノ花ノハニホヒノ冠也ニホヒハ上ニイフ如ク色ノ光沢アルチイフナレハ詞ノウル。ハシクテ餘ノ心ノ不言ニウカヒテミユルヲ云スクナキトハ謙下ナリ むなしき名のみ秋のよのなかきをかこてれは ムナシキ名トハ虚名ナリ上手トイヘト上手ナラヌヲ云秋ノヨノトハナカキノ冠ニテ上ノ春ノ花ニ對ス也長キトハ短オニ對シテ此道ニ長シタリトツ子ニ虚名ヲ蒙リタレハト云也カコツトハカコツクルノ義ナリ ワレラモトコノ道ニ長シモセサル短オニシテ長セリトイフ虚名ヲカコツケラレテツ子ニアリト謙下也眞名序ニ名竊秋夜之長トカ、レタリ かつは人のみゝにおそり カツトハ一事アルニ又片手ニ事ヲスル心ヲ云下ノカツハトイフ詞ト二事ヲスル心ナリ人ノ耳ニオソリトハ人キ、ヲ懼ル、也長シタリトイフ虚名ヲ蒙リタレハカ、ル哥ヲヨミタルヨシキ、タリナトワカ哥ノヨカラヌヲ傳ヘ聞カンカトオソレツ、シム心ナリ かつはうたの心にはちおもへと 哥ヲ心アルモノニナシテワカヨム拙ナサヲ哥ノ心ニサテモ拙ナキ心カナト哥ノワレヲ思ハン丁ニ恥カシク思ヘ圧トナリ年の思はむことそやさしきトコノ集ニヨメル心也カツハヂカツオソル、心。ニテカツハト二ツニシテカケルナリ たなひく雲のたちゐ 立居ノ冠ニ雲ヲイヘリ なく鹿のおきふしは 鹿ハ起フシナク物ナレハ也起居坐臥ニツケテモトイフコ、ロナリ つらゆきらか 普通ノ本つらゆきかトアレトらトか似タレハつらゆきらトイヘルナルヘシ上ニコノ撰者四人ノ名ヲツラ子タルハ官位ヲ以テカケリコ、ハ序者乃ワレナレハワカ名ヲモテらトアト三人ヲスヘタル也イカニ序者ナレハトテミツカラヒトリカ名ヲイハンヤウナケレハらト定ムヘシコトニ同シクトアレハカタゝゝ疑ナシ このよにおなしくうまれて コノ世トハ延喜帝ノ徳スクレテ廢レ圧ナ興シ古ヲオホシメス世ニトイフ也同シクハ此四人ナトノ也生レテハウマレアヒテノ心ナリ 此ことの つかイ コノ集ヲエラハセタマフ丁ノ也 時にあへるをなんよろこひぬる 時ニアフトハ我身ノカ、ル撰集ヲ仰セ玉フ時ニアフ也カ、ル寸ニアハスハカ、ル面目モアラシト思フヨリヨロコフトハイフ也一本ノあつかるハワレラノコノ撰集ノ丁ニアヅカリエラフ也同シ心ナリヌルトハ今モヨロコハヌニハアラ子トソノ命ヲ蒙リタル寸ヨリコノ集エラヒハテタルハコノ序カケルヨリサキノ丁ナレハぬるト云也

リハ今マテ恐レ來レル丁ナリるトイヘハ今ノ丁トナル也

此章はみつからなとの哥の道に長せりといふ虚名をかこたれていと拙きことを謙下しさてさる身なれとみかとのかしこきおほせをうけて拙きなから此集をえらへるはもはら時にあへる故なるうれしさをいへりはちおもへとまてはみつからの謙下をもて此集えらへと勅をうけしうれしさをはへあらせていふ也かつ上より人まろ赤人をはしめて近代の六人なとその餘の人をも批評してみつからのことはいはてありけるよりそれとかきいてゝこのつたなきことをこそまついふへきにといふ心也さて上の章にみかとの御心かなひ御のそみとほりて末めてたからんことをいへは又わか身なとの拙なから此時にうまれあひたるめいほくをいひて首尾せり

三十三

コノ句ハ上ノ此世ニ同シク生レテニカケテミルヘシ

ひとまろなくなりにたれと にハぬノ通音ニテ過去ニナリタルヲサトス也なくトハ死ムナリサレハにノ字ナクシテハ此コロモウセタランヤウナレハナリ うたのこととゝまれるかな 哥ノヿトハ哥道ノ事也ト、マレルトハコノ今ノ延喜ノ御世ニアト留マレルカナトナリ哉トイフニテ人丸在世ニハ上ノ第十七章ニイヘルコトク君モ人モ身ヲアハセタル如ク帝モ哥ノ心ヲシロシメシ臣ニモ人丸聖ニテソノ御世コトニコノ道サカリナリシニ人丸死去シテ後ハ又興廢タカヒニユキカヒテソノ世ハカリサカリナルヿモナカリシホトニ哥道ノヿハソノ後世ニモ絶テト、（アト）マラスト思ヒシニ此帝ノ哥ノ心ヲシロシメシテ古ノ哥道ノ心ヲ振シオコシ玉ヘハカノ世ノアト此御世ニト、マレルヿノ思カケヌヿヨト也人丸ナクナリニタレト、イヘルニテコ、ヲマトヒテ貫之ニコノ道ト、マルト自称セル義ト思フハアヤマレリ人丸ハ哥ノ聖ニテサテナラノ御時ニアヘル人ナレハトリ出テカケルニテ畢竟人丸在世ノ時ト今ノ時トヲアハセテ世ノ上ノ論ナリ人ノ上ノ論ニアラス上ニ謙下シコ、ニ自称スヘキ理ナシ今延喜ノ帝ノコノ道ヲオコシタマフヲモハラ頌タテマツレル章ナリ

此章は廿八章より以下四章は帝の此集をおほしたちおほせられて此しふなり帝の歌のこゝろしろしめせる心をいひ三十二章にわれらか此時にあへるわたくしのよろこひをいひて首尾し

さてそのふたつをつかねて此章におほかた此御世のかしこさをのへたり第十六章より第廿七章までの一段は此ことはをいはむ為にかける也

三十四　たとひ時うつりことさりたのしひかなしひゆきかふとも陳鴻長恨歌傳云時移事去樂尽悲來トイヘルニヨラレタルヘシ時ウツルハ四時ノカハリユク也事サルトハ今ノ事ノスキユクナリたのしひユキかなしひ來ルコヽロニゆきかふトカケリユクトハ過ル義也樂ト悲トカタミニ來ル也畢竟コノヿハ年月多ク經ユカン後世ヲサシテイフ也タノシヒカナシヒナトイヘルハサル變ニモコノ集ウシナハルヽヿナカランヿヲイハントテ也

此うたのもしあるをやコノトハ此集中ノ哥ノヿヲサセルニアラスヒロク哥ヲサシテ云也上ニ此うたもかくのことくなるヘシトイヘルニ同シたとひトハ今ヨリ後トイフ心ヨリイフ也をやトハワカ思フ理ヲ人ニ思ハセテワカ思フ筋ヘ人ノ心ヲオトサントテイフ脚結ナリタトヒサマ〳〵コノ後ニウツリカハルヿアリモ歌ノ文字ナキヤウニナランヤアルハサテノ心也哥ノモジ世ニアランカラニハ此集万〻歳ノ末ウシナハルヘカラスト云也（十九字消）

此章は三十一章につゝけてかける心也されは上の三十二三十三の二章は第三段の首尾にかきてこの章のためは寄法の心也されと人まろなくなると世のうつれることをいふをうけてたとひ時うつりことさりとかける也しかれと三十一章と此章とつゝきたる心にみる時はこの章は次の章のたえすちりうせすなかくつたはりなといふ事をは虚言ならすと人にしらせんの心にてこの章にその證をあけたるなれは次の章と三十一章とのための寄法の章也

三十五　あをやきのいとたえすタエヌノ冠ニ糸ヲ出セリ此集ノ後世マテ崇尊ハレンヨシヲイフナリ松の葉のちりうせす失ハレヌ冠ナリ此集ノ後世失ハレサルヨシヲ云まさきのかつらなかくつたはり長クノ冠ナリ此集ノ後世ニツタハリユカンヨシヲ云也とりのあとひさしくとゝまれらは鳥ノアトハ足アト也トヽマルノ冠也此集ノ世ニトヽマルヨシヲ云也鳥ノアトハ淮南子注曰許愼曰蒼頡始視鳥跡之文造書契トヽマレラハトハトヽマラハノ心ナレト今貫之ノ世ヨリ後世ヲサシテトヽマラスル心ナレハれらはトハカケルナリ第三十一章ニコヽト同シヤウナルヿアレト同シカラス其故ハ上ノハコノ集ノ成就ニ

ツケテノ祝言ナリコレハコノ集ノ後世ノ規模トナランコチイフ也又イヘル心モ同シカラス上ノハ帝ノ御心ユカンコナイフ心ナリ
コレハ後世ノ人ノコノ集チアカメトフトヒテカ、ミトアフキトフトハンノ心ヨリイヘルナリサテたえすちりらせすなかくつたは
り久しくとゝまるといへるに心アリ（ママ）上ノタトヒ時うつりことさりたのしひかなしひ行かふともトイヘルチウケテ心ウヘシイカヤ
ウナル寸アリ𪜈此集後世ニタエスツタハラントイフ也サレハ此集絶ハツヘキヤウナル寸ニモ絶スト云也散らせすトハ此集ノウシ
ナハルヘキ寸ニモウシナハレスト云也コノ二ツハ天災ナトニアヘル寸ノコナリなかくつたはるトハツタハルマシキ寸ニモツタハ
リトイフ也久しくとゝまるハト、マルマシキ寸アリテモト、マルト云也コノ二ツハコノ道オトロヘテ此集ノスタレン寸ニテモト
イフ也サヤウノ災アルニモカノ歌ノ文字世ニアルカラニハイツカタゾニノコラヌト云コアルマシト思フゾモシソノ如ク留ラハト
イフナリサテ下ニ哥のさまをもしりことの心をえたらん人はトサヤウナラン人ノ後世ニアラハトイフニテソノト、マリテ後ノコ
チハツ、ケテカケル也 哥のさま（本体也）を（もイ）（死ニ従ヘシ）。しり 哥ノ体也コレハ正路正路（ママ）正風邪風ノ別チヨクワカチシル也正風ナルチシレハ正風ハカクヨムモノソトヨミカタチシランコハ自ラフタメ（ママ）ハタ、カクイヘルナリトシルヘシ ことの
こゝろをえたらん人は はノ字コレラノコチ弁へサル人ハ此集中ノ味チ知ルヘカラストノ心ニシル人シラヌ人チ分別シテはトイヘル也コト、ハスナハチ言也言ノ義チ精シクシタラン人ハト云也易云精義入神コレニ同シ言ハ
哥ナツクル材ナレハ先コレニクラクシテ哥ノサマナエラルヘカラス此故ニ以父成章揷頭裝脚結チワカチテナシヘ猶古來髄腦ニ説アルモヒトヘニコノコチオモヘル故ナリト知ヘシタラントハテアランモ也アリアラスノシラレ子ハえたらんトハ云也 大そ
らの月をみるかことくに 大そらハ天也天ハ遠ク仰キ見ル物ナレハ也月ハアフキテ愛スル物ナレハ下ノ古チ仰キ今チ戀フニヨセタリ猶二ツナカラタフトキ心アル也寄法ノ句也 いにしへをあふ
きて ナラノ御時人丸在世ヨリ万葉集ノ比ナサセリアフクトハ遠クイツキカシツキカシコムコ、ロニイヘリタ、アチムク義也 今をこひさらめかも（スアラウカヤサテモ） 今トハ延喜ノ御世古今集撰セラレシコトモチカケテ云コフトハシタフ也
サル世ニアハ、トシタハシクアトチ學ヒ敎ニシタカフ心チ云也さらめかもトハスアランカヤトイフ也もハ詠ノも也もハ乃此集金玉ナルチ歎スル心ナリさらめかハ哥ノ道心エタランモノ、ナト古今（ココン）チ仰キ戀スシテアランサテモ此集ノメテタキコヤト也

第五段終也此章は此集を後世につたはりて後世に道しれらん人の此集を玉ともめてかしこみまなひたふとはむよしをいふ也此集をたうと（ママ）ふより古のかしこき比をもあふくことゝはなる也これもはら延喜のみかとのかしこくていにしへのあとをおこし給ふ故也といはむ心なる事は此集をあふかんとはいはていにしへ今といへるにしるへし哥のさまことの心といへるは第

一段第二段の意味をうけて也いにしへといへるは第三段の意味也今といへるは第四段の意味なりさて此第五段を（・後世の流通をいひ）(消)此章におとしてすへて五段三十五章をむすへる也哥のさまをもしりことの心をえたらん人は此いにしへ今をたうとはんといへる心は此集すなはち正風正義をかねそなへたる哥のみを抽いてられたるなれはこれしらさらん人はいにしへのあふかしさも今のこひしさもしらしとの心すなはち此集の味もしらしとなりかく後の世をはつかしめられたるにいかて此道に心をとむる人のすくなかるらん哥よまむ人はいかてならの御時をあふき延喜の御世をこひしと思ふはかりの身にならんとつねにつとめおこたるましきことにこそ

擬職人盡歌合

# 戀歌合四番

葦の舍の

あろし

哥あはせたるは其さまかよひてこれは手人等か名さへいと今めかしもしふるきやめてたきいま
めかしきやおかしきとゝふ人あらはいかゝはこたへむたゝ今のはいにしへをしのふつまふるき
は今をおもふ種とやいひのかれましなに事もとりかたく捨かたきふたしへにとりこめたるそ世
中のくるしさならむかし

文化甲戌四月　　　　　　　　　　　　　　　　御　杖　識

左　香具屋　　　　滿

吾こふる人のためにはをしからす玉の刺くしきさのきの櫛

右　鏡磨

妹に戀落るなみたにとけと〳〵いやかきくもる鏡かなしも

右かゝみのとけと〳〵くもるらむいと心くるしけれとすこし心おとりせらるゝ所もあれはなほ
たまのさし櫛そめてたかるへき

御杖判

左　古手屋

解衣の心とけたるいたにねすはなたの帯の中絶しより

右　遊女

憂しとのみ思ふ契はよひ〳〵に弥まさりつゝあはれこの比

左なれたるきぬたえたる帶なからいとなつかし
右おやもあらはなけくらむほとその身のくるしさにもまさりていとをしけなれとうすきなさけいとくちをし

左　問屋
ほしといふ人もあらぬかも大船に繋き我戀積てやらまし

右　扇折
吾脊子か手になるゝともやよ扇必穐にあはんと思ふな

つみおくるらむ戀くさはわれこそほしといはめ
あふきもまたいかてかあきにはあはむ

ひたり　やき豆腐師
世を渡るたつきにつるゝ物なれや人こふるにも身のこかるらむ

みき　しちや

置としもとるとしもあらぬ戀草のまさるにつけて音こそなかるれ

左日にけにこかるらむもむねいたけなれと右とりもおきもせられぬなけきはひときはあはれにこそ

右文化十一戊年四月詠　藤原　滿

# 北邊三十番歌合

# 北邊三十番歌合

文化十四年丁丑仲冬

御杖宗匠判詞

落葉　十番

題　冬月　十番

述懐　十番

落　葉

左　勝　　　　・眞楫（ナシ）

ふみわけしみねのもみち葉・ふ・く（吹）風にふたゝひつもる谷の下道（眞楫）

右　　　　・御杖（ナシ）

柴車もみちなからにこりつみてくたすと見しはそらめ也けり（御杖）

左りは嶺・に（二）てふみ分たりし・も・み・ち（紅葉）のふたゝひ谷にちりつみけんおかし

右は車かうへにちりかゝりけむもみちをやかて枝なからこりけ・む（ん）かとおほめきたるいとさか

しら・に（二）おほゆれは以左爲勝

左　　　　津・ぐ（具）女

あらしふく軒の・も・み・ち（紅葉）葉ちりしきて苔むす庭もにしきとそみる

右　勝　　　　重威

山・か・せ（風）にのこる梢の木の葉・猿（さる）・け・さ（今朝）はかくれんかけたにもなし

・左（モ）こけむす庭のものむつかしきもにしきとみゆるさまもみち・葉（は）の・ち（は）れるほと・も（ナシ）思ひやられた

り

右このは(葉)猿(さる)のひとり梢にのこりけむすかたをもていはゝ左(毛)はたけたか(高)く右はすこしいやし
けなれと左おほ(は大)かたを(お)さなけに(二)て右にまさるへくもあらぬ詞つくりなれは以右爲勝

左　持　　　　菊　輔

ちりつもるもみち(紅葉)をみれはしかすかに秋のわかれもなくさ(慰)まれつゝ

右　　　　　　婦　累　女

みかさ山しくるゝ空にたゝよひてめさましくちる峯のもみち葉(紅葉ゝ)

左なくさめかたきをなくさめられけむ心はへいとあはれなり
右しくるゝ空にたゝよふなと哥よみしれるいひさまおかしされと左りにくらふれはいさゝか
めさましきかたもあれは左を勝ともさたむへけれと詞つくりのなほ〳〵しさは心ゆかぬ所も
あれはこれかれをゆつらひて持とす

左　勝　　　　人　吉

いける世にいまた我きぬ唐にしき今そきすめる佐保の山かせ(風)

右　　　　　　美　弦

散しけるこの葉をわきてこれしつえそれほつえのといふへしや猶

左うちもわなゝかるゝはかりよみなされてめてたしなともよのつねなり
右世の(ナシ)中を(の)ことにもあらすいひそしられしかしこしなともおろかなりいつれをほつえしつえともいふへからねと猶さほの山風はひときは身にしみておほゆ

左(左)　勝　菊輔

まゆみはりつきちるみれはこと木に(二)は葉守の神もなき世也けり

右　友助

くれなゐのやしほのふちといひつへくもみちかおち葉(は)風にうつまく

左(左)まゆみ槻に葉守の神をおもひよせられしゆくりなくおかし
右風にうつまく紅葉をやしほの淵ととりなされけむいといひ(ママ)しりてきこゆれと中の五こと今すこしくちをしけれは以左(左)爲勝

左　持　眞坂

高ねより吹おろす風をもみち葉はもはら待えてちるにや有らん

右　淨昌

しくれの雨ふるたにあるを夕風にこのはみたれてものそかなしき

左(左)ちるもみち葉のをしさより山おろしをまちえたるに(二)やと思ひいれられしいとあはれなり
右うちみ(見)るに(二)たにもの心くるしけに(二)てみところありされと終の七こと(言)かたふきあへぬさまし
たり左(左)りも三四の句ひとしきくちをしさなれは持とす

左(左)　持　　幸丸

天雲のたな引山のやま(山)おろしにふもとのちりとちる紅葉かな(哉)

右　　幹貞

さそひつる風よいつこにやとるらむこの葉(は)ふりつむ庭しつか(静)なり

左高(高)き山もとあるをとりなされて落はをやかて麓の塵とよそへられしいとよみしりたるさま
なり
右ちりにし後風の静かなるあやにくさ(き)けにもとおほゆ(覚)とり／＼におかしけれは持とす

左　勝　　蛙子

ひとしへにちりゆくものをはしはゝそかへてとわきて何おも(思)ひけむ

右　　せ伊女

つもりては山となるへきことわ(は)りにかよへる物はおち葉(は)也けり

右けにさりやとはおほゆれと落葉ならてもなほときこゆれは尤左ﾘ可爲勝
左ちらさりしほとのをさなさをくやみられけむ心はへいといまめかし

左　勝　伴　高

一葉見し柳をもの丶はしめにてあとたえにけり森のした道

右　宣　也

露霜にかれにし庭の淺茅生をけさは落葉の埋みつる哉

左ひとはみし跡絶にけりなとすへてちるともいはてよみたてられしいといひしれるこ丶ちす
右すかたもなたらかにめてたけなれとそのこ丶ろいりのほとをくらふれは左ﾘには劣るへし

左　弘　化

いたつらに烋いにし庭のもみち葉はちりての後も人そまたる丶

右　勝　秀　邦

春風は花に心もしらぬ名を今さへおひてちるもみちかな

左みせてしかなとおもはれけむ紅葉なれはちりての後もさそあるへきといとあはれなり
右春風なからもみちをさそふらむやうなる詞つくりいとしたゝかにおかしけれは右を勝とす

へし

冬の月

左 勝　　幸丸

久かたの月の桂に霜おけはわか袖さへにしみこほりつゝ

右　　御杖

秋のよのふくるもしらす起ゐつゝわかあかさりし月かあらぬか

左(左)月かけのさむき(寒)をかつらの霜にいひなしたるいとよみしれるさまなり

右冬の夜の月のさま秋に(二)はいたくたかひたるをおほめきてもはら秋のかたはかりに詞をつけたるなか／＼也仍而(て)以左爲勝

左(左)　　徒具

木のま(間)より見しは程へて我宿のおち葉をてらす冬のよの月

右 勝　　浄昌

あられふる外山の峰(峯)の雲ま(間)より袖の氷に月やとるなり

左時のとくうつるあはれは氣（ナシ）木（草カ）（校者云げにノ誤寫ナルベシ）なに丶つけてもいふはかりなし

右あられふる雲まの月袖のこほりにやとれるさま毛もいよたちておほゆれは以右爲勝

左　持　重威

置わたす落はかうへの霜よりも猶かけさゆる冬のよの月

右　眞坂

ふけゆけは月の桂におく霜をひとときは白き光にそしる

左（モ）霜のうへなる月かけをとりわきて霜のかたをおとされけむおかし

右おなし光のうちをはらひてひとときはしろきなとけにさこそとおほゆとり〱におかしけれ

は爲持

左　菊輔

なには江や氷るあしま（間）を漕（こく）舟にやとれる月のかけ（影）くたけつ丶

右　勝　幹貞

いかにかも人の見るらむ霜さやく淺茅か原の冬のよの月

左（モ）月の光（ひかり）のくたけちるさまも秋にはかはりてそ丶ろに寒かるへし

右あさちかうへの月の寒さをいかに人の見るらん(む)とわかうへをおきて思ひやられたるあはれ
かきりなけれは芦間の舟よりも心にのりておほゆ

左　持　人古

綿(多)さはにいれたる衣きかさねてみれとも月の寒し此ころ

右　菊輔

ふたりしてあふきし月をあた(冠)守るわかせやいかに見さ(故)けんあはれ

左(左)右ともに詞つゝ(く)りいとしたゝかにこもりたる心はへもとり〳〵なれは持とすへし

左　持　友助

久堅(かた)のかつらの木の葉(は)散ほひて霜ふかゝらし月のすみかの

右　美弦

いもか門われいてかてにみさけれは月よみをとこひかり寒しも

左(左)月のすみかのおしはかりたゝおしなへたるめのまへなるさまをもてよそへられし詞つくり
はさらなり(也)こゝをすてゝかなたをのみいはれけむいとおかし
右月よみ男光さむからんは妹か家よりかへるあかつきいかに〳〵身に(も)。しむらんとあはれな

りされといつれもすこしあかぬ所（處）ありけなれは爲持

左　持　　眞楫

風ましり空かきくれてしくれせしゆふへにも似ぬ月のかけ（影）哉

右　　婦累

おく霜に尾花くす花枯ふして月かけしろき岡こえの道

左（无）しくれの後の月かけ（影）さむさおもひはからる

右月しろき岡こえ見るかことしとり〳〵にさむけなれは爲持

左　勝　　作高

霜のうへにもはらくまなき月みれはしるし桂も落葉しつとは

右　　せい

冬されは夜わたる月も天の河雲の浪ま（間）に（ニ）かけ氷る（ナシ）なり

左（无）右ともに（ニ）子細なけれと（杼）詞つくりのさまは（ナシ）左のかたいひしりておほゆれは爲勝

左　　蛙子

つゝみなく月こそわたれ白樗の霜にかしこき鵲の橋（はし）

右　勝　　弘　化

秋をのみもはらめつらむ人みよと雪ににほへる月のかけはも
（こ）（影）

左霜こふりたる橋のうへはけにこゝろもとなきを月はつゝみなくわたるらむおかし
（ママ）（心）

右秋をのみ人のめつるをいさめたまふらん月よみの神の御心いとかしこけれは以右爲勝

左　勝　　秀　邦

うしのくひ今やさすらむねさめするわかさむしろに月氷る也
（ニ）

右　　宣　也

夜を寒みふりしく雪のけぬかうへに月さへ白き淺ちふの庭
（き）（ニ）

左ねさめの床のさむさ身をつみておもひしらる
（右）

右さへなとの詞つきめてたけれとさせるふしも見えす丑のくひかおかしとにはあらねと右にはまさりぬへくや
（杼）

述懐

左持　　ふ　罘
（右）

老ぬれと(は)頭にきえぬしら雪と人のみ(見)るらん(む)ことをしそ思ふ

右　御杖

かみつけのとねの川原にふむ石もくらへくるしや世のなかの道

左本句はいひしりてみゆるをいまたあかぬこゝちす
右神樂採物のうたをおもひてよのなかの道に(ニ)くらへたるさもあるへけれと今すこし心ゆかぬ
かたもあれ(有)はゆつらひて持とす

左　持　人古

眞男鹿のをしかの肩をうつぬきてうらへかたやき年もへに(ニ)けり

右　友助

たゝすきにすくるはかりそぬは玉の一夜はへてはきのふ〱と

左年ふるまてうらへわたりけむいかはかりのなけきそとあはれなり
右いたつらにふりゆく月日けにしかり左(左)りはいひふりたるすち右はいといまめかしけれはこれ勝ぬへくやとおほゆれとおほかた詞のめてたさはまた左(左)りまさりためれはうちゆつらひて持とす

左(右)　持　　宣也

山のま(間)にたてるくぬ木の人しれす心のまゝにしけりつるかな(哉)

右　　蛙子

けに神のまもります世としりてまし花と紅葉をとはに見(み)ませは

左そのしけりたるくぬ木のさまいかならん(む)とおほゆ

右さはかり花もみちにしうねかりけんもあはれ也左(左)りはいとしたゝかにものふかけなれと(杼)右

もまた神の守ります世としらむなといといひしりてみゆれは持とさたむへくこそ

左　持　　美弦

かにもりかしりへにてたに玉箒とりならしつゝ朝きよめせむ

右　　菊輔

水の江の浦しまの子か玉手はこ(箱)あけしに似(ゝ)たるわか髪やなそ

左掃部かしりへ(ニ)にてたにとあるもあはれにこゝろくるしきまて見(み)ゆ

右玉手箱あけしに(ニ)似たる髪とつゝ(ママ)けわたりめてたし可為持

左(右)　　秀邦

こゝろ(心)からおくれしことを今さら(更)に(二)何いそくらん老もわかきも

右　勝　　　　伴　高

年をへてほたしとなれる花の香の昔を月にかこつ比かな

左けにさきたゝぬくいの八千たひ身をつみておほゆ
右ほたしとなれる花のか(香)を月にしもかこたれけむいと心にくきけはひなりいつれも〳〵あは
れなれと左は詞つくりすこしなほ〳〵しきかた有て口をしけれは右をや勝とも定(さた)むへき

左　持　　　　幸　丸

人こゝろ淺沢水のうはにこり世を住よしとなに(何)おも(思)ひけむ(ん)

右　　　　弘　化

くるとあくとおもき車を引うしのうしとも誰にかたりあふへき

左(左)あさゝは水のうはにこりなとすみよしにかけていといひしれるさまにてめてたくきこゆ
右うしとも誰になといとあはれにきこゆ大かた哥のよしあしをいはゝ左(左)はまさりて見ゆれと
も住吉と云名すみのえといふにあてられたるもしなるをいつよりかすみ(よ)。しとよみなれるこ
と日吉(ヒエ)をひよしといふに同し古今集にすみよしとあまは告く(ナシ)ともとよめれは今はそれに随ひ

てありぬへき事なから其もとを尋れはあやまり事まぬかれかたしされはこれかれをはかりて
持とさたむ(す)

左　　眞楫

いつをまつわかこゝろ(心)そも移りゆく年と月とをおくりむかへて

右　勝　　菊輔

くれな井のこそめのにほひあせにけり我下ころも雨はふらねと

左われとわか心のいふかしきさもこそといとあはれなり(也)
右その下ころもいかなるきぬそと心ときめきさせらる
ひたりもめてたくはおほゆれと詞のつけさま淺深のけちめあれは以右爲勝

左　持　　重威

あすしらぬ世は海わたる大ふねの浪のまくらにぬる心地して

右　　眞坂

萬代とくる春こと(毎)にいはへともしるしありけもなきこの身かな

左(左)なみのまくら我さへいとこゝろほそく

右しるしありけもなき身はたむねいたし
詞つくりのさまもひとしけなれは爲持

左　持　　幹貞

ひとふしもいまたならはぬ窓(まと)なれは雪さへあやないたつらにふる

右　　淨昌

心から風のまへなる塵(ちり)の世にわか身ひとつをすゑそかねつる

左(左)　　津具

まとの雪風(の)。前のちり左右ひとしきかろさなる(成)へし

あはれ世にたれかはしらむ斯しつゝいかになる(成)へき身の行へとも

右　勝　　勢い

しらさりしむかしもしりつふくる夜のねさめの床に物をおもへ(思)は

左誰かはしらんと(む)あれはおのれもしらさる事しるきなむいとあはれなり
右むかしをしれるよしなにの故ともしられぬいと心にくし
おほかたひたりもあはれなれと右は詞つくりいひしれるさましたれはまされりとやいふへか
らむ

昭和十三年三月二十日印刷
昭和十三年三月廿五日發行

東京市品川區上大崎長者丸二八四
國民精神文化研究所
電話大崎(49)三一一七
三一一八
三一一九

(合資會社光文社印刷)

18